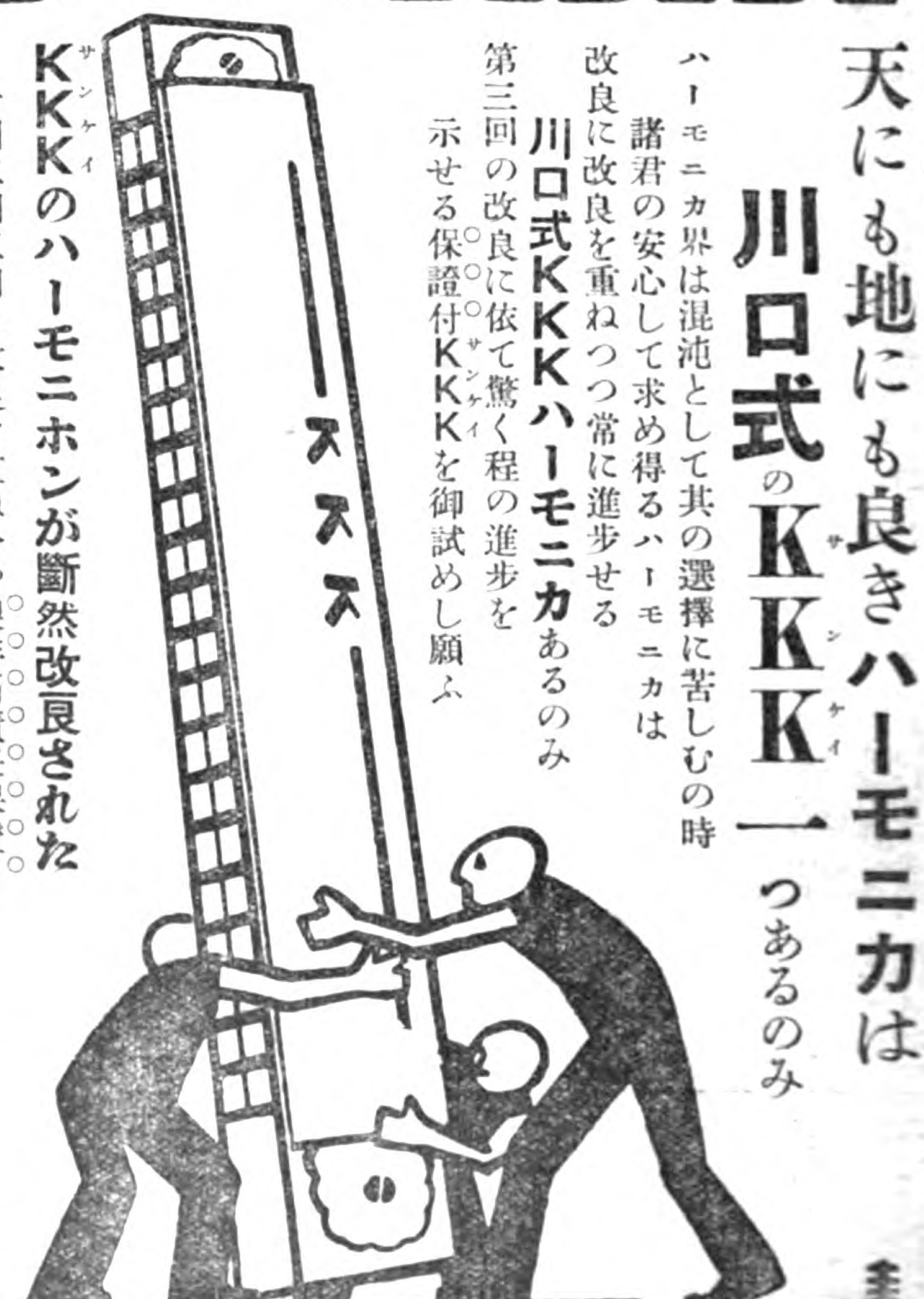

KING
キング
四月號

川口式音階 ◇ 專賣特許

KKK（サンケイ）ハーモニカ

天にも地にも良きハーモニカは
川口式のKKK（サンケイ）一つあるのみ

ハーモニカ界は混沌として其の選擇に苦しむの時諸君の安心して求め得るハーモニカは改良に改良を重ねつつ常に進步せる**川口式KKKハーモニカ**あるのみ
第三回の改良に依て驚く程の進步を示せる保證付KKK（サンケイ）を御試めし願ふ



KKK（サンケイ）のハーモニホンが斷然改良された

一回二回三回と改良を重ね今や製作所責任保證付の銘を打つて發賣するに至りし『**保證付**』**ハーモニホン**を諸君に捧げ得るの時が來た今こそ聲を**大**にして御**すゝめ**申上げる我新樂器**ハーモニホン**



◇定價以下の販賣品は不良かと思ふ故に必ず本表定價で賣る店で御買上を乞ふ◇

定價
一四號練習用 一圓五十錢
一五號獨奏用 二圓五十錢
一六號〃 二圓也
送料十六錢

大日本樂器會社代理部でも販賣す（振替東京四〇二三〇）

KKKハーモニカ
二十一穴 [illegible]
二十二穴 [illegible]
二十三穴 [illegible]
二十四穴 [illegible]
送料各十二錢

本社への注文は前金添附を乞ふ
東京市日本橋區馬喰町三
西村合名商社
振替東京一四五七五番

◇三越、白木屋、松屋、松坂屋、其他全國到る處の樂器店にて御買上願上候

袖貸り與兵衛。ちよいのせ双六。膽生の夢。彌次喜多。とんくの三吉。乳もらひ。堤畑の十作。かりのたより〱。權助育のおきん。おもと新助。三世相。

二二、三世櫻田治助集

名譽仁政錄。吉原雀。隅田川對高賀紋。名高手毬諷實錄。福壽開駒曾傳記。月梅薫長濟。明烏花濡衣。新板越白浪。

二三、幕末期世話狂言集

與話情浮名横櫛。東山櫻莊子。妹脊鷄。近頃河原の達引。敵三升曾我初夢。散書懸文章。袖浦故鄉錦。世情相宿噺。

二四、お家狂言集

花菖蒲佐野八橋。梅柳若葉加賀染。濃紅葉小倉色紙。花嵯峨猫魔碑史。けいせい廓源氏。

二五、小說脚色狂言集

花魁吉人總。復讐高音鼓。櫓門來也談。信州於六櫛。花御堂大和文庫。花楓秋葉話。

二六、勝諺藏集

新版開化富的矢。春駒小栗莖勇傳。松前鶴庭月影模樣。玉櫛菊崎文庫。東海道小夜中山。近世櫻田雪紀聞。名高田村後談錄。花茨胡蝶猶彩色。御誂染梅加賀紋。朝顏處女寄紅筆。

二七、舞踊劇集

舌出し三番。うつぼ猿。六歌仙。松江七變化。奴道成寺、操三番百眼。鳴神鐘入櫻。角力おし鳥。身替りお俊。關の扉。吉田屋。戻り駕。雪のお鶴。船饅頭。葛の葉。蜘蛛の絲。女夫松。色の寨。茶筌賣。お染久松。山鳥。小倉山。榮華の夢。落人。若松。左甚五郎。女濟玄。望月。日本振袖始。梓建曾我。女鉢木。今様高野物語。

二八、義太夫狂言時代物集

菅原傳授手習鑑。義經千本櫻。妹脊山婦女庭訓。本朝二十四孝。一谷嫩軍記。近江源氏先陣館。木下蔭狹間合戰、

二九、義太夫狂言世話物集

夏祭浪花鑑。双蝶々曲輪日記。關取二代勝負附。伊賀越道中双六。往古曾根崎村噂。心中紙屋治兵衛。極彩色娘扇。傾城反魂香。

三〇、默阿彌集（上）

三一、同　（下）

三二、三世新七及其水集

第二部現代篇（第拾八冊）

三三、坪內逍遙。

三四、依田學海。福地櫻痴。宮崎三郎。榎本虎彦。右田寅彦。岡村柿紅。松居松翁。

三五、岡本綺堂。

三六、岡鬼太郎。高安月郊。山崎紫紅。伊原青々園。長谷川時雨。岡田八千代。野上彌生。大村嘉代子。木村富子。

三七、池田大伍。小寺融吉。濟見陸郎。林和。額田六福。

三八、佐藤紅綠。川村花菱。瀨戸英一。大森痴雪。木村錦花。

三九、新派劇脚本集。

四〇、森鷗外。永井荷風。小山内薰。

四一、長田秀雄。木下杢太郎。吉井勇。郡虎彦。灰野庄平。

四二、谷崎潤一郎。久保田万太郎里見弴。泉鏡花。

四三、中村吉藏。島村抱月。秋田雨雀。坪內士行。島村民藏、藤井眞澄。

四四、有島武郎。長與善郎。倉田百三。吉田紘二郎。室生犀星。

四五、武者小路實篤。正宗白鳥。

四六、菊池寛。山本有三。

四七、久米正雄。横光利一。犬養健。邦枝完二。北尾龜男。鈴木泉三郎。

四八、岸田國士。佐藤春夫。岡榮一郎。田島淳。水木京太。關口次郎。

四九、藤森成吉。長谷川如是閑。金子洋文。村山知義。前田河廣一郎。

五〇、北村小松、高田保、池谷信三郎。鈴木彦次郎、田中總一郎。北村壽夫。北村喜八、其他。

◉不滅の大衆文藝　三百年に亘つて億兆の見物を向うに廻して喜怒哀樂灼熱的喝采を博したるもの、明日の日古くなる本と違ひます。

ハガキにて申込次第

内容見本進呈

▶規　略◀

◉種類　全五十卷 ｛第一部　歌舞伎篇　三十二卷／第二部　現代篇　十八卷｝

◉装幀體裁　木村莊八畫伯裝幀　總布四六大版函入　木版刷表裝上製本

◉締切　三月廿五日

◉申込は各部一種にても受付ます

◉會費　分拂　一時拂　第一部貳拾八圓八拾錢　第二部拾六圓貳拾錢　通し四拾五圓

◉申込金　各部　金一圓　通し　金二圓　これは最後の會費に充當します

◇無學は男の恥

◆◆自宅實習僅か一ケ年で卒業が出來る

農業實習講義
商業實習講義

新智識を吸收して時代に遅れるな
▲講師は專門の博士學士▲講義最も平易で親切▲學費一番低廉

此際の入學者に限 中學講義錄 無代進呈

内容見本つき規則書 無代進呈

東京小石川表町六十六 國民實科大學院

◇無學は女の恥



お嫁に行つて赤い顔をせぬやう

裁縫料理禮儀作法を始め洗濯生花に至る迄何れも斯道の大家が噛んでふくめるやう親切叮嚀に述べた本講義錄を見れば、どんな無學な人でも忽ち上手になれます。ハガキでお申込次第見本無代進呈します。

東京小石川表町六十六 大日本通信家政女學校

人をひきつける

座談の秘訣

▲男も女も心得べき話上手となる
▲一切の秘訣をことごとく詳述す



男女の交際さては社交に心得て置かねばならぬ事は座談の仕方で座談上手は人を感心させ人を惹きつけ人に好かれ成功と立身出世の近道にもなるが座談の下手な人は思ふ事を充分にいへないばかりでなく思はぬ恥をかいて失敗をする

本書は青年男女の應待談話人を訪問した時訪問せられた場合談判交渉借金の取立借金の斷り方人を説き落す法宴會集合の話の仕方藝者女中との挨拶及對話法婚禮出産招待其他一般の喜び事から死んだ時の悔み病氣見舞の口上及應待の仕方等日々の座談社交一切の秘訣を一々實例を示して詳述したものでどんな話下手な人や口重な人でも不思議に話上手となれる事請合の珍本である。

▲クロース製美本二百餘頁定價一圓五十錢の所大特價 金一圓 (送料廿錢)に割引の上更に附錄として

各種席上挨拶の心得と名士の模範演説集

を進呈ハガキ申込次第代金引換送る(前金送料不要)

東京小石川表町六七 振替東京六六八〇〇 進文館

脱毛剤ラベル

一分間で玉の肌



効力第一

男女顔手足胴毛其他身體中のムダ毛を脱毛しその發生を止む

◆藥も之程キケば申分なし
◆定價大二圓 特大三圓
◆說明書申込次第進呈します

東京小石川表町六十七 鶴岡藥品部

男女やせるくすり



▲太りすぎはみにくいもの、はやくやせる藥をのんでどんな肥り過ぎた人でもほどよくやせよ。舊式藥で效なき方も十日間試みよ 奏效請合無害保證



▲說明書はハガキで申込次第密送す

東京市小石川表町六十七 鶴岡藥品部

眼が若がへる 視力素



老衰眼近視弱視力減退の人のめばズン／＼眼が若返るフシギの良藥

◆說明書申込次第進呈

東京小石川表町六七 鶴岡藥品部

あざ いれずみ そばかす



ほくろ ヒフに害なくフシギにキク良藥ためせ

大二圓 特大四圓

說明書無代進呈

東京小石川表町六七 鶴岡藥品部

神經衰弱



テレクター

腦神經衰弱にて多年苦悶せる所奇蹟を得て全快し爾來世の同病者を救ひつゝあり今迄醫藥效なく御困りの方は速に申越あれ詳細報告す

▲東京小石川表町六七 鶴岡藥品部

判の讀物紹介

十一版

劔難女難

吉川英治先生著　四六判函入り　定價貳圓五拾錢（送料拾貳錢）

向ふ所敵なき豪勇と膽力、六尺の痩身に思ふ存分の快腕を揮ふ！實に痛快無比！豪快豪麗前代未聞の俠客眞說！

美男新九郎、美女千浪を中心に戀と劍の大渦卷、苦心慘膽・仇敵自齋を打据ゑ兄の恥すを雪ぐまで息もつかせぬ面白さ。

六版

稀有の犯罪

小酒井不木博士著　四六判函入り　定價貳圓（送料拾錢）

咄！何たる怪奇ぞ！果してかゝる犯罪が此の世に存在するかと驚くばかりの怪事件續出！問題の傑作探偵小說集。

八版

親鳥子鳥

佐々木邦先生著　四六判羽二重裝函入り　定價貳圓（送料拾錢）

品のある輕い筆致で途方もない笑ひの裡に美しい家庭情味、涙ぐましい母性愛などを巧みに描き出す、諧謔小說。

忽九版

悲願千人斬

下村悅夫先生著　四六判函入り　定價貳圓四拾錢（送料拾四錢）

眞庭念流秘卷一卷の爭奪に震天動地の大渦卷、美女あり俠客あり、變轉極りなき陰謀術、意地と愛欲に彩る一大劍俠史。

主家の仇を報じ、逆臣を殲滅せんと千人斬の大悲願！鮮血淋漓！凄絕悲絕！一讀手に汗、息を彈ましむ豪快無双物語。

十五版

主權妻權

佐々木邦先生著　四六判羽二重裝函入り　定價貳圓廿錢（送料拾錢）

とても可笑しくてく堪らない戀愛と結婚を主題として、これほど愉快な小說は外國にも一寸其の例を見ない！

六版

世間相人間相

佐々木邦先生著　四六判羽二重製函入り　定價貳圓卅錢（送料拾貳錢）

ユーモア文學の權威者たる著者は、果して世間をどんな風に眺めて居るだらう、痛快！滑稽！短篇傑作集。

右何れも　東京本郷　大日本雄辯會講談社發行（振替東京三九三〇）

天下の青少年はナゼ争ふて「大日本國民中學會へ入會するか？」

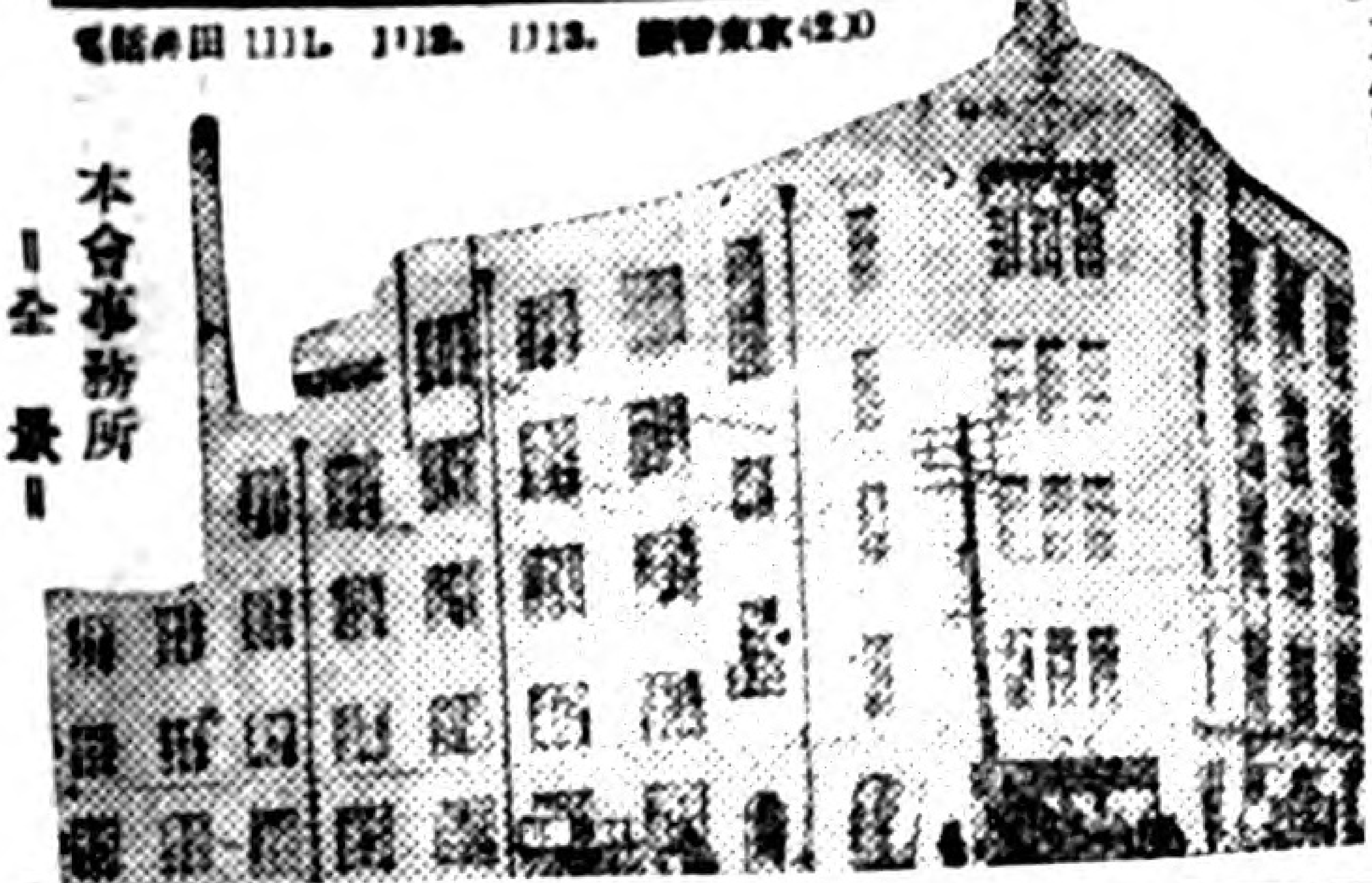
講義見本 申込次第**進呈**

●小學校卒業後いろ／＼な事情で中等教育を受けられない諸君は必ず大日本國民中學會へ入會して「日本一の中學講義錄」に就て獨力短時日に中學卒業の學力と資格を得よ。

東京・駿河臺

大日本國民中學會

[illegible]



本會事務所
─全景─

■**創立**が古いから
（創立以來二十六年と云ふ長い歴史と豐富な經驗を有するのは本會あるのみ。）

■**基礎**が固いから
（折角入會しても中途で講義錄が發行出來なくなつたりツブれたりする心配が絕對に無いから安心して勉强が出來る）

■**內容**が新しいから
（本會の講義錄は毎年二回づゝ改正するが今回は根本的に大改革を斷行した。）

■**教授**が巧いから
（通信教授法として最も理想的な本會獨特の新式教授法を採用してあるから尋常科卒業生でもスラ／＼と覺えられる）

■**講師**が偉いから
（講師は學界各方面の名士や東京府立一中高師附屬中學等の名教諭を網羅す。）

■**學制**が正しいから
（中學卒業の學力と資格を得易いやうに學科目は特に文部省令に準據してゐる）

■**指導**が良いから
（多年の經驗により獨學者の指導に獨特の長所があるから他の講義錄獨修者に比して本會員の實力は非常に增進する）

■**會費**が廉いから
（講義錄は雜誌共月三回發行。毎月四百五十頁餘で學費は僅かに月一圓二十錢十八圓餘で中學全科が卒業出來るわけ）

■**卒業**が早いから
（卒業は一ケ年半となつてゐるが希望者には講義錄何ケ月分にても取まとめ送る故勉强次第もつと早く卒業も出來る）

■**成功**が確いから
（獨學で成功した諸先輩の八割は本會講義錄の獨習者である。見本申込者には本會出身現代名士苦學奮鬪錄添附進呈）

僅かな會費で僅かな年月に獨力で立派に**中學卒業**が出來る！

今スグ入會せよ

一日早く入會すれば一日早く成功する！

創立廿六週年新學期開講紀念**特典**提供
入會の絕好期來る！！



意見書を釘付するマルチン・ルーテル　世界英傑畫譜（其の四）

意見書を釘付するマルチン・ルーテル

文學博士　瀬川秀雄

マルチン・ルーテルは獨逸サクソニヤ州ウイテンベルヒ大學の神學教授で、獨逸の宗教改革を斷行した偉人である。彼は聖書の研究と教會の積弊を刷新せんとする熱情とによつて、夙に宗教改革の意見を懐抱してゐた。彼は法王の使僧テッツエルがウイテンベルヒに來て、ローマのセント・ピーター寺院建立の資金を募集する一手段として、頻に民衆の間に罪障消滅符の功德を說いて、之を賣却してゐたのを見て、大に憤慨し、遂に一五一七年十月三十一日九十五箇條の意見書を認めて、罪障消滅符の無効なることを說明した。之が實に獨逸に於ける宗教改革運動の發端であつた。

此の圖は、ルーテルが九十五箇條の意見書をウイテンベルヒ城附近寺院の門扉に釘付にした瞬間の光景を寫したもので、彼の非常に緊張した容貌によつて、萬難を排除してその目的を達成せんとする牢乎たる決心を窺ふことが出來る同時に各階級の民衆が驚異の眼を以て之を眺め、感激憤興の情が充ちてゐることをも亦看取することが出來る。

予は此の圖を一見するに及び、往年親しく此の地に遊び、ルーテルの書齋・寢室・記念碑及彼が法王の令狀を燒棄した場所等を巡歷し、最後に此の寺院に參詣し、此の門扉を眺め、更に寺内にある彼の墳墓に謁しルーテル崇拜家の一人となつたことを回想し、感慨無量である。

(附記) 此の木製の門扉は、その後火災に罹り燒失したので、プロシヤ國王フレデリッツ・ウイリヤム三世は一八五七年之を鐵製のものに改造し、その表面にラテン文の九十五箇條文を印刷した。フレデリッツ・ウイリヤム三世を出したホーエンツオルレン家は忽焉として滅亡したが、ルーテルの偉業は千古不滅である。

第七巻 放蕩息子（ケイン） [illegible]

第八巻 金剛石（フレッチャー） カートライト事件（同） 森下雨村

第九巻 オリバー・ツイスト（ヂッケンス） 馬場孤蝶

第十巻 トウエーン名作集（トウエーン） 佐々木邦

第十一巻 婚約（マンゾーニ） 木村毅

第十二巻 巴里の秘密（シュー） 武林無想庵

第十三巻 アンクル・トムス・ケビン（ストー） 牧逸馬

第十四巻 黑星（マッカレー） 和氣律次郎

第十五巻 トンネル（ケラアマン） 秦豊吉

第十六巻 カチューシャ（トルストイ） 近松秋江

第十七巻 九十三年（ユーゴー） 早坂二郎

第十八巻 寶島（スチブンソン） チーキール博士とハイド氏（同） 野尻清彦

第十九巻 スペードのキング。コブラの影。クラブの罠。（ゾーゼ） 小酒井不木

第廿巻 ステラ・ダラス（プロチー） ラ・ボエム（ムルージエ） 森岩雄

第廿一巻 シャロック・ホームズ（ドイル） 延原謙

第廿二巻 ゼンダ城の虜（ホープ） 寺田鼎

第廿三巻 紅蘩蔞（べにはこべ）（オルツイ） 松本泰

第廿四巻 平妖傳（羅貫中） 佐藤春夫

第廿五巻 空中戰爭（ウエルズ） 海底旅行（ジウル・ベルヌ） 木村信児

第廿六巻 ルコック探偵（ガボリオー） 河畔の悲劇（同） 田中早苗

第廿七巻 スカラムッシュ（サバチニ） シー・ホーク（同） 小田律

第廿八巻 ソロモン王の金山（ハガード） 彼女（同） 平林初之輔

第廿九巻 海の義賊（ベルネード） ロビン・フード（イートマン） 高橋邦太郎

第卅巻 ポオ・ホフマン その他 江戸川亂步

第卅一巻 三等水兵マルチン（タフレイル） 福永恭助

第卅二巻 幻島ロマンス（ゲイル） 野口米次郎

第卅三巻 ロモラ（エリオット） 賀川豊彦

第卅四巻 世界滑稽名作集（欧米諸家） 東健而

第卅五巻 世界怪談名作集（欧米諸家） 岡本綺堂

第卅六巻 世界怪奇探偵實話物語（欧米諸家）

豫約規定

体裁　菊半截別判、八ポイント組、總ふりがな附、一冊平均約五百頁。クロース金文字入特製函入上製。

會費　毎月納、一冊五十銭、一時拂十七円五十銭。

頒布方法　全三十六冊、豫約者のみに頒つ。

刊行期日　昭和三年三月より毎月一冊づつ刊行、昭和六年二月完結。

申込方法　御申込の際申込金として金五十銭を御拂込み下さい。これは最後の月の會費に充當しますから、最初の月の會費は別に御拂込み下さい。尚申込金は中途御解約の方へは御拂戻し致しません。（一時拂は申込金不要）

送本料　會費の外に郵送料として一冊八銭づつ申受けます。書留送附御希望の方は別に書留料金十銭をお増し下さい。

拂込方法　郵便振替又は為替で、その月の一日までに着金するやう御拂込み下さい。

豫約締切 三月十日

（●本誌愛讀者に限り三月末日迄御申込有效）



良書より誠實なる朋友なし

著書名	書名	内容	定價	送料
◇日下部四郎太博士著	一人行脚	（科學者の面白い旅行記！）	參圓五拾錢	送料拾四錢
◇日下部四郎太博士著	異國行脚	（珍妙奇拔！世界の風習紹介）	貳圓八拾錢	送料拾四錢
◇田山花袋著	花袋行脚	（文化の跡を歴訪せる旅行記）	貳圓參拾錢	送料拾錢
◇生方敏郎著	哄笑微笑苦笑	（赤裸々な人世諷刺痛快無比）	貳圓參拾錢	送料拾貳錢
◇成田篤著	縱橫漫談 陸海軍腕くらべ	（興味津々隠れたる軍事秘話）	壹圓八拾錢	送料拾錢
◇鹽谷溫博士著	支那文學概論講話	（世界に誇るべき支那の研究）	五圓	送料拾八錢
◇中村孝也博士著	源九郎義經	（博士の名文になる大英雄傳）	貳圓八拾錢	送料拾六錢
◇中村孝也博士著	しら菊	（秘めたる寶玉の如き美文集）	壹圓貳拾錢	送料六錢
◇丘淺次郎博士著	煩悶と自由	（博士の獨創的研究の人世観）	貳圓八拾錢	送料拾貳錢
◇安藝愛山著	教育道話	（面白く有益な新修養書）	貳圓五拾錢	送料拾四錢
◇鶴見祐輔著	現代日本論	（米國に於ける氏の大講演！）	壹圓六拾錢	送料八錢
◇高島米峰著	隨筆 思ふまゝ	（痛快なる筆鋒警世の大文字）	貳圓參拾錢	送料拾貳錢
◇谷脇素文著	川柳漫畫（うき世さまざま）	（名川柳に漫畫を附す痛快著）	貳圓參拾錢	送料拾錢
◇近藤蕉雨著	社會萬般 番附大集	（世態の萬般を知る大快著！）	參圓	送料拾四錢
◇安田與四郎著	株式市場の表裏	（株式投機必勝の虎の巻！）	壹圓八拾錢	送料拾錢
◇北原白秋著	日本民謠作家集	（大家の傑作民謠の大集成！）	貳圓五拾錢	送料拾四錢
◇北原白秋著	現代民謠選集	（民謠愛好家必讀の名著！）	貳圓	送料拾錢
◇鳴弦樓主人著	名人達人 決死の大試合	（日本魂の華！名人達人活躍）	壹圓五拾錢	送料拾錢

御申込次第圖書目録進呈

評判の名小説

■悲みの極み

沖野岩三郎先生著—青年教師を取巻く信仰に生くる女性と戀愛を至上とする美人との戀愛葛藤を描いた大傑作—四六判美装函入、定價貳圓五拾錢、送料拾貳錢

■聖火

岡田三郎先生著—兇暴な男性に處女の誇を汚され、愛人との破婚となつた摩耶子が、遂に男性への復讐魔となる悲痛な物語—四六判函入美裝、定價貳圓貳拾錢、送料拾貳錢

■波のうへ

長田幹彥先生著—藝者と飛行大尉の戀を中心に、藝者のもとの夫、色魔、仁俠の大親分等の活躍あり！ 涙の事實小説—四六判函入美裝、定價貳圓參拾錢、送料拾貳錢

■第一歩

佐藤紅綠先生著—父を誘惑する淫蕩の女を殺した少年を主人公に青年教師、可憐の處女、大親分、女優あり、波瀾又波瀾—四六判函入美裝、定價貳圓貳拾錢、送料拾錢

■女王

中村武羅夫先生著—妖艷な富豪令孃、意氣に燃ゆる快青年、輕薄な貴公子、可憐な美少女等熱火の戀愛合戰—四六判羽二重裝函入、定價貳圓五拾錢、送料拾四錢

■春の流

佐藤紅綠先生著—青年畫家と富豪令孃の清き戀！ 其の戀を妨ぐる者、嫉む者、意外の人の奸計と仁俠、相錯綜し爭鬪す—四六判函入美裝、定價貳圓五拾錢、送料拾貳錢

■眞空鈴

小杉天外先生著—淫蕩の美人の謎の戀が捲起す大悲劇！ 賣國奴に墮す士官、生ける屍と化す男爵、亂淫の罪の子あり、涙の小說—四六判函入美裝、定價貳圓貳拾錢、送料拾貳錢

■沈む夕陽

長田幹彥先生著—憧憬の都！ タイピスト！ 惡魔の肉迫！ 虚榮に燃ゆる二人の女性の末路や如何に？ 感銘深き小說—四六判布裝函入、定價貳圓五拾錢、送料拾貳錢

大日本雄辯會講談社 振替東京三九三〇番

理學博士
農學博士　松村松年先生著

驚異と神秘の生物界

四六判布装函入美本
定價貳圓卅錢（送料拾貳錢）

最新刊



松村博士

著者曰く……生物界の神秘にして、然かも驚異すべき現象は混々として其の盡くるを知らない。若しそれ、讀者が生物界の赤裸々な珍現象を見、その傑作なる人間性の幾分かを知り得たらんには蓋し著者の目的は達せられたのである。

見よ！興味津々たる凡百の珍問題！

學界驚異！稀有の大研究！

宇宙の大眞理に立ち、學界權威の著者が凡ゆる自然界の珍問題を俎上に解剖！縱横痛快の名文、眞に快著！

東京本郷駒込（振替東京三九三〇）
大日本雄辯會講談社

御申込次第圖書目録進呈



新しい木馬

（泰西名畫）

フランツ・ウオン・デフレツガー（獨）

白蟻の塔



小さい砂の一粒も、積れば遂に富士となると云ふが、これはアビシニア國（亞弗利加の東北部）にゐる白蟻の巣です。白蟻は黒蟻や蜜蜂にも劣らぬ丹精家で、巣は粘土と唾液で塔を形づくりますが、乾いて來ると岩のやうに固くなり、高は十尺を越すこともあつて、この塔が並んでゐる態は、丁度亞弗利加土人の村落を見るやうだといふ話です。

東西婦人觀

新刊出來

眞に小説よりも面白い！

佐藤紅綠先生の新著出づ!!



面白い讀物は隨分あります。また爲になる讀物も幾多あります。しかし、面白くて然も爲になる點に於てこの「東西婦人觀」ほど立派な書物は餘り類がありません。

面白い實例が澤山あり、恰も先生の小説を讀むと同じ様な興味で讀んでゆく内に戀愛に、結婚に、家庭に、育兒に、貞操に、流行に、あらゆる婦人問題家庭問題について色々の知識を得ることも出來れば、又識見を養ふことも出來ます。

殊に紅綠先生が、洋行中見聞された歐米諸國の婦人の長所短所や習慣や人情を面白く描き日本の女性と比較して僞らぬ感想を述べられた所などとても面白く、修養にもなり、　また諸外國の事情がよく知れます。

男子が讀んでよし、婦人が讀んで更によし、輕快な麗筆に描かれたこの新しい婦人觀は、現代の女大學であり、婦人讀本であり、男子にとつては又と得難き婦人研究の珍籍とも云はれませう。誰方も是非御一讀下さい。

四六判布裝・函入美本

定價貳圓（送料十二錢）

發行所 東京市本郷區駒込坂下町 大日本雄辯會講談社 振替東京三九三〇番

佐藤紅綠先生著

「東西婦人觀」

―内容の一部―

▲佛國婦人と英國婦人
▲貞操帶
▲男の恐慌時代
▲ジプシーの戀
▲巴里婦人の生活
▲倫敦の私娼
▲服裝論
▲明るい巴里女
▲舞踏
▲東京の女と大阪の女
▲美人論
▲男とは？
▲子供をどうするか
▲母！
▲奇妙な時代
▲男まさり
▲道徳逆轉
▲男女の要求點
▲戀の蟲
▲都會の女地方の女
▲外人の日本評
▲色魔論
▲妖婦論
▲スポーツ婦人
▲藝者と記者
▲顏
▲變性男子
▲愛の泉
▲英雄と人

―その他數十項―

御申込次第圖書目録進呈

少年倶樂部四月特大號

輝く新天地號

見よ！元氣一パイの四月號!!

少年諸君見逃す勿れ!!

口繪

鎌倉武士…山口將吉郎先生

珠は碎けず…田中良先生

◈ 動物天然生活の奇觀

素敵！目のさめるやうな美しい六度刷のオフセット十六頁！



安い！雑誌の外に美本つき！

これを讀まぬは少年の恥！

別冊大附錄



▲滑稽小說 **苦心の學友**……佐々木邦先生

▲冒險小說 **ヒマラヤの牙**……野村愛正先生

▲正傳 **大楠公**……笹川臨風先生

▲漫畫漫文 **マンチとカバ**……山中峯太郎先生

◉**最新運動競技寶典**

◉**選手血涙物語集**

（四六判、寫眞畫報十六頁、本文八十頁）

諸君！これ一冊あれば運動の事は何でも分る!!

◇五大讀物◇

◆立志小說 **あゝ玉杯に花うけて**……

◆幕末物語 **角兵衛獅子**……

◆立志小說 **珠は砕けず**……

◆海賊秘史 **神風八幡船**……

◆劍俠小說 **神州天馬俠**……

◆世界珍奇畫報

◆奇談聞書き帖

◆誌上敎育活動寫眞館

◆グラビヤ寫眞畫報

◆畫集神々の春

◆百本力ピョン太郎

▼この外愉快な大讀物數十篇！

◉定價 附錄共 **五十錢** 送料七錢

（東京本郷）**大日本雄辯會講談社**（振替東京三九三〇）

讀め!!

俸給生活者諸君
青年學生諸君
商工業家諸君
思想家諸君
教育家諸君
政治家諸君

巨人フォードの言行は、その儘修養の要諦である。事業經營の大教訓である。而して又社會改善の實行案である。郎刻一本を備へよ!

自動車王フォード大自敍傳

今日及び明日

大好評九版 ＝加藤三郎氏譯



目次の一部

◎早大總長 高田早苗博士曰く……

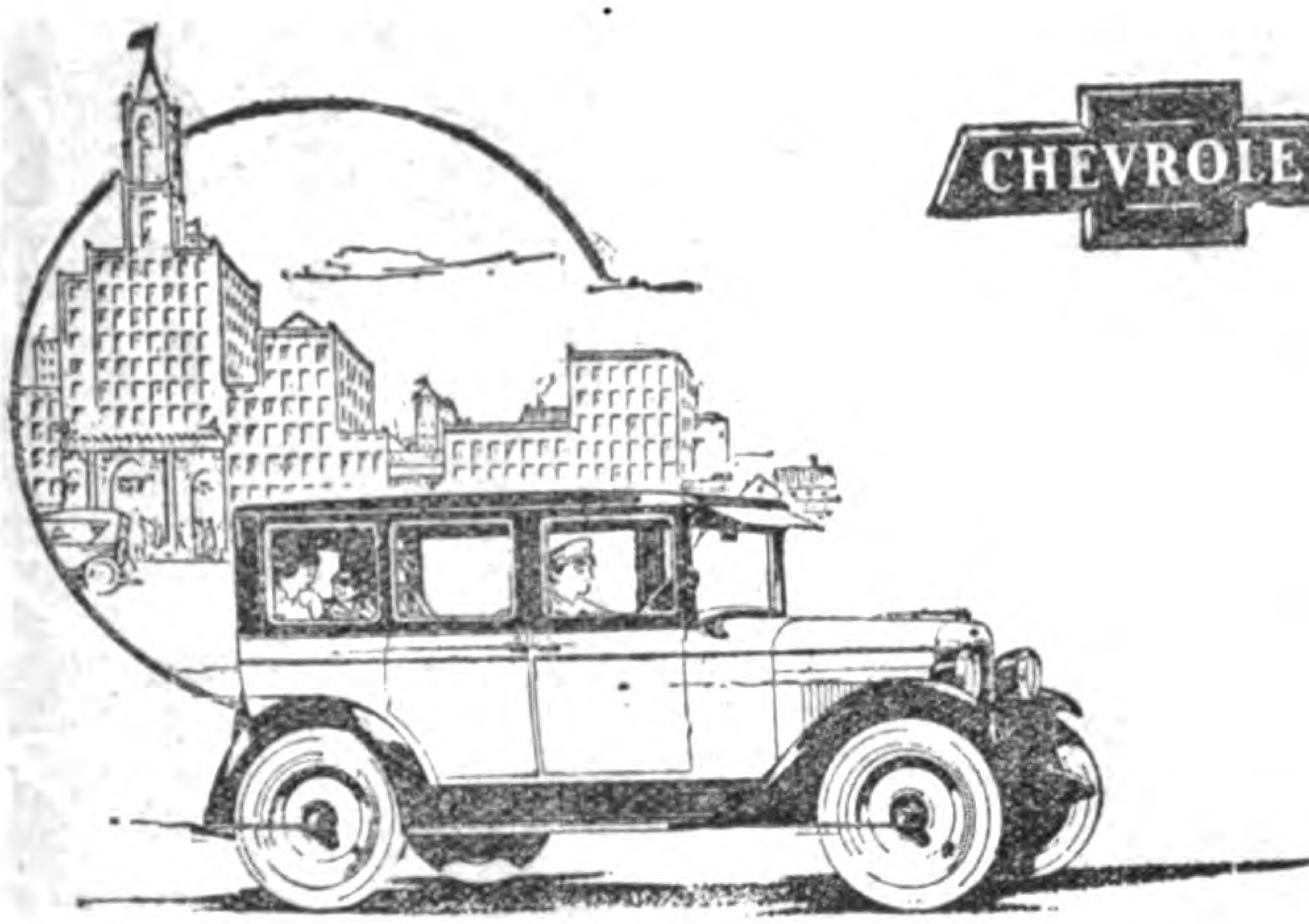
私は本書を讀んだ際、人類が長い間望んでゐたユートピアが遂にフォード氏に依り實現されたと思つたのである。若しあらゆる事業がフォード氏に學ぶならば、人類社會の幸福蓋し計り知るべからざるものがあらう。眞に敬服すべきも多數の共鳴者あるべきを期待する。……この外各方面名士悉く推奬!

四六判函入・定價金貳圓廿錢・送料拾貳錢

東京本郷駒込坂下町
大日本雄辯會講談社發行
(振替東京三九三〇番)

御申込次第圖書目錄進呈

CHEVROLET



今日の自動車は
シボレー號！

世界數百萬所有者の滿足

今日シボレー號は其實行において世界中の他の凡ての自動車を凌駕して居ります。

それには明白な理由があります……卽ちゼネラル・モータースはシボレー號を最も現代的（アップ・ツー・デート）な自動車として常に他の競爭車に一步を先んずるやう非常な努力を拂つてゐるからであります。

更に云へば、過去十數年來ゼネラル・モータースの技術部と研究實驗所と試驗運轉場の責任者は、現代における最新最善の製造法を此シボレー號に適用し來つたからであります。

シボレー號は自動車製造において一切の舊套を脫却してゐます。常に最も嶄新で最もアップ・ツー・デートであります。世界中の數百萬の所有者は一人として之を疑ふものはありません。

シボレー號は最早や試驗の時代を過ぎてゐます。御試乘の必要もない位であります。直に御買求めの上、其實質上の價値と滿足とを御實驗下さい。

幌型　定價　金千九百五拾圓（大阪渡）
セダン型　定價　金貳千七百圓（大阪渡）

日本ゼネラル・モータース株式會社

大阪市港區鶴町一丁目



ヘテ不思議！夜中の十二時だといふのに、太陽がカン／＼照つてゐる。いつまで待つても太陽は地平線に蔵れるどころか、反對に中天へ引返し始める。何と奇怪な現象だらう！これこそ北氷洋名物『眞夜の太陽』である。北氷洋では毎年二月から十月迄は、日沒のない晝の世界が續く。これは有名な北極探險家マクラミン氏が、北部グリーンランドで、午後十一時十分から二十分隔きに、八枚寫して繼ぎ合せた、貴重な珍寫眞である。

北氷洋の眞夜中

長命好一對



(上)このお爺さんは、ポッタ・ウォットマ人(北米土人系)のナニナムナスクックと云ふ、本年百十九歳になる老人で、世界一の長壽者と誇つてゐます。子孫の數も可なり多く、長壽の祕訣は、戸外に寢るのが何よりの良法だと云つてゐます。



(下)米國スカーボロー市のメリー・ウオーターハウス夫人は、本年百四歳。猶矍鑠として腰も曲らす、若い人と同じやうに薪を割るとはえらい元氣です。スカーボロー市民は、夫人を市の誇りとして尊敬してゐます。

官費學校 學生募集

(1) **鐵道局教習所**（東京・仙臺・札幌・門司・神戸・名古屋）の修業年限六ケ月。卒業後初任給四十五圓。尋常小學校卒業者は滿廿歲迄入學資格あり。男子のみ募集。

▲入學案內書無代進呈（ハガキ一本で）

(2) **遞信局講習所**（東京・大阪・仙臺・札幌・廣島・名古屋・熊本）の修業年限一ケ年。卒業後初任給三十八圓。尋小學校卒業者は滿二十歲或は十八歲迄入學資格あり。男女とも募集。

▲入學案內書無代進呈（ハガキ一本で）

東京・十條驛前
日本鐵道、遞信教育會

十姉妹巢引法

寫眞圖入
四六版
百三十餘頁
送料共
金壹圓

椽先や庭の一隅で女子や老人にでも面白く愉快に金儲けが出來、趣味と副業とを兼れたる、十姉妹巢引法の秘傳を書いた書籍が出來ました、雛の育て方から抱卵の秘訣、病氣の手當、餌の秘傳、白十姉妹の作り方等の秘傳が公開してあります、玄人の方には勿論素人の方にも極く解り易く急所が會得行くように書いてあります、スグハガキをお出し下さい、地方は代金引替で送ります。

發行所　名古屋萬松寺筋
青山書店
電話本局五四一二番
振替名古屋一九五番

大日本雄辯會編
模範的式辭挨拶五分間演說集
忽卅三版

三六判クロース [illegible]
定價一圓八十錢送料八錢

○眞に現代人必讀の寶典！

祝賀、送別、歡迎、結婚、開店開場、推薦選擧、就任辭退、新年宴會、忘年會、發會式、落成式、卒業式、表彰式、青年會、處女會、同窓會、感謝及謝恩、葬儀及び哀悼等あらゆる場合の演說を網羅す。附錄「社交禮法一般」は人中へ出て恥かゝぬ交際の虎の卷。

○永井柳太郎先生曰く

本書輯むる所の各篇は皆これ現代各方面の諸先輩が、實際この會合に當面してなせる實例にして、生氣潑溂、洵に社交上の活敎訓、演說としても侃々の辯、愕々の辭にも勝る』云々。其他各方面より推奨重寶なる本書を座右に備られよ！



東京市本鄉區駒込坂下町四八
大日本雄辯會講談社
（振替東京三九三〇）


平易に實業知識が得られる!!
最新の學科と!! 實際的の指導法!!
速成
實業講義
▼實業志望の諸君へ
天來の福音!!
銀行、會社等各方面の實務に從事せんとする諸君! 小學校を出て商業、農業等に從事せんとする諸君が就職立身の基を築く立派なる實力を短日月で容易に會得し得られるやう實際的教育を主とし講師は遠藤會長外巢鴨商業學校教諭全部と他に實業家數氏の最も熱心なる講義に依る最新の實業講義!! 詳細は今スグ「キング」で見たとハガキで申込次第內容見本無代送呈す。
會長 巢鴨商業學校長 文學博士 遠藤隆吉先生
東京市神田區三崎町
帝國實業學會
(振替東京三九六三四番)

貴き御飛行姿





竹の園生の尊き御身を以て、御危險をも御顧みなく、我が航空發達のために、親しく飛行機に御搭乘まで遊ばさるゝ各宮殿下の御心を偲び奉る時、國民として誰か感激恐懼せざるものがあらう！上圖は高松宮宣仁親王殿下の御勇姿、下圖は風にも堪へぬ女性の御身を以て雄々しく御飛行遊ばされし華頂華子夫人（元の閑院宮華子女王殿下）の御英姿であります。

空界を双肩

（一等飛行機



空中征服の時代が來た。飛行機は軍事、交通、通信其他に利用せられ、到る處の天空を征服してゐる。後れ走せ乍ら、我が航空術は太平洋横斷飛行を決行するの域に達した。太平洋は列强注目の的、是非共この壯擧は日本で敢行しなければならない。今茲に我が飛行界鳥人の精鋭を選つてその勇姿を掲げ、諸氏の健闘を祝福すると共に、更に空の日本の指導者として、力を竭されんことを切望する次第である。（順序は遞信省登錄順）

1後藤勇吉2阿部勉3龜井五郎4乾將顯5岸本貞夫6坂本近雄7海江田信武8諏訪宇一9加賀要助10森田勝人11米澤峯藏12藤本照男13南部信鑑14平松牛郎15小田荒太郎16河内一彦17新野百三郎18木下耶麻次19能野季福20酒井憲次郎21中島忠英22羽太文夫23和田喜三郎24松下辨二25國枝實26大

に擔ふ人々

（操縦士一覧）



邊實郎27中尾純利28伊藤治郎29加藤寛一郎30石上全尙31坂元宗降32横山金吉33小川寛衛34熊川良太郎35櫛部喜男36久保田龜之助37張德昌38長尾一郎39宮本正義40馬場英一郎41藤原照夫42永田重治43桑島稔44大場辰男45藤田三郎46豐島晃47淸水孝作48鈴木菊雄49大藏淸三50鈴木友茂51鳥居淸次52町田三郎53松尾一男54五十嵐金一郎55奥山順治56松崎武夫57早坂文之助58野口昂56萩野了60大森正男61下川正幸62横山友象63板倉功郎64岩佐正男65石野俊夫66松井勝吾67安武長右衞門68長谷川淸登69乘地判治70大場藤治郎71小林善晴72黑米孝三73藤原延74熊倉米吉75エーリッヒ・ユースト76グスタフ・ヴィクター・ラッハマン77片岡文三郎78宮本茂79堀江辰吉80弘中正利81遠藤辰五郎82安岡駒好83安藤孝三84釜田善治郎35早川正

女流飛行家一覽



近來女性の活動は各方面に亘つて、頗る目覺しい。就中痛快なのは女流飛行家の活躍ぶりである。かよわい身を以て、堂々男子の間に伍し、天空高くけたゝましい爆音の中に、華々しい妙技を演じ、人々を驚嘆せしめてゐるが、その意氣は洵に雄々しくも亦勇ましい次第である。

我が國現在の女流飛行機操縱士は八名で(1)木部シゲノ(二十六歲)(2)今井小まつ(三十一歲)(3)朴顚栯(二十八歲)(4)兵頭精(三十歲)(5)古川キク(二十三歲)(6)米山イヨ(二十二歲)(7)藪内光子(二十歲)(8)李貞喜(十九歲)(順序は遞信省登錄順)

眞に色白く美しくなる

明るい陽春の歡喜は―色白くなる『ウテナ』から



水谷八重子孃

色の黒い方。
色の赤黒い方。
色の蒼黒い方。

垢ぬけのしない方。――かういふ惱みを持つ方は、一刻も早く『ウテナ』を愛用してみて下さい。一度つけただけでも、『ウテナ』の效力はすぐわかります。

世は春です。明るい美しい春です。春は美しいものゝすべてに幸ひします。色白き美しさ！それは人生の春の最大至高の歡喜です。誇りです。そして、その歡び、その誇りをもたらすものは『ウテナ』でなくて何でせう。

ニキビ吹出物のでき易い方。あぶら顔や荒性にお困りの方。首筋や手足などの黑いのを惱む方。顔の小皺を氣にする方。――かういふ方々は今すぐから『ウテナ』を愛用に着手して下さい。

地肌を根本からきれいにし、黑々した皮膚にする『ウテナ』は、一度は一度と目に見えて、その效力がわかります。

五日つけたら鏡を御覧――といふのは昔のこと、昭和の今日では、つけてゐるうちに鏡を御覧です。昨日まで暗い顔をしてゐた人も『ウテナ』を手にして鏡に向ふと、ひとりでにニコリニコリと微笑んできます。

『ウテナ』とは果して何か！　皮膚學の大家として有名な醫學博士赤津誠内先生並に女醫尾崎豐子先生が、その有効を證明する美顔料が『ウテナ』です。色を白くする獨特の發見によつて日本政府の專賣特許權を二つも持つてゐる美顔料が『ウテナ』です。

水谷八重子孃の愛用と、上流家庭の愛用で非常な評判になつてゐる美顔料が『ウテナ』です。婦人のみでなく、男子用の美顔料として唯一つの信用を得てゐるのが、專賣特許の誇りを持つ『ウテナ』です。幾多の實驗報告に、感謝と歡喜を集めてゐる色を白く美しくする美顔料が『ウテナ』です。

男子方や、女學生、處女のためには素顔を美しくする唯一の美顔料であり、令孃、若夫人のためには美しきお化粧の下準備として何よりも重寶、中年男女のためには若返りの美顔料となるのが『ウテナ』です。

『ウテナ』は一號三圓、二號二圓、三號一圓で送料何れも十八錢海外四十五錢です。特に色の黑い方、垢ぬけせぬ方、ニキビ吹出物のでき易い方、あぶら顔荒性の方或は御家庭向には一號がお徳用です。普通の愛用には二號が好適、御試用には三號でよろしうございます。何れにしてもその效力はすぐからわかつて、男女どなたにも適します。東京市本郷區本郷二の十三ウテナ本舗(振替東京二九一〇三番)へ……

或は東京本郷駒込坂下町大日本雄辯會代理部(振替東京四〇二三〇番)へ御注文下さい

老隱士 田中光顯伯著

維新風雲回顧錄



田中光顯伯

著者光顯伯は、先に宮內大臣の重職にあり、後辭して悠々自適、今や齡八十を越して愈々矍鑠、叩けば鏗然として響きを發し、舌端風雲を捲き起さんず旺盛さ。伯往年の氣魄、骨力全卷にみち溢れ、脈々として潑溂躍動するを覺ゆ。

血湧

維新回天の劇的場面！

偉人傑士雲の如く湧き出でたる維新當時、身を風雲の間に投じて、石火刀仗の巷に往來せる著者の回顧談。

▲偉丈夫那須新吾
▲帶屋町の流血
長州の偉傑久坂玄瑞…
佐幕派の吉田元吉暗殺…
▲暴發組の同志
刺客田中新兵衛…
姦物本間精一郎…
家茂將軍の要撃…
▲朔平門外の犧牲
▲柏章旗下の三烈士

御申込次第圖書目錄進呈

き肉躍る幕末物語!!

一讀血も滴る壯烈の物語。

知られたる志士、知られざる烈士、

生々しき血に彩られたる尊き犧牲者の最後、

暗殺あり暗闘あり、佐幕倒幕の赤裸々な眞相

全卷これ一篇の活歴史!

國を憂ふるものは見よ、赤誠至忠の士は來れ!

風雲血醒き維新志士烈士の活躍!

小說よりも面白き生きた事實小說!



青年時代の田中伯

最新刊

▲四六判函入美本

▲定價貳圓(送料拾貳錢)

平井收二郎の切腹……

高杉晋作の機智……

▲武市半平太の最後

大監察後藤象二郎……

三文字割腹の大最後……

▲天忠組の義擧

中山忠光卿の奮起……

▲はやり神殘念大將

▲新選組の亂入

▲天才高杉晋作

一刀三藩の奇緣……

大和再擧の相談……

▲縱橫突擊の丙寅丸

三條實美卿の決心……

砲手の山田市之丞(顯義)……

山縣有朋の激怒……

▲高野山の旗上げ

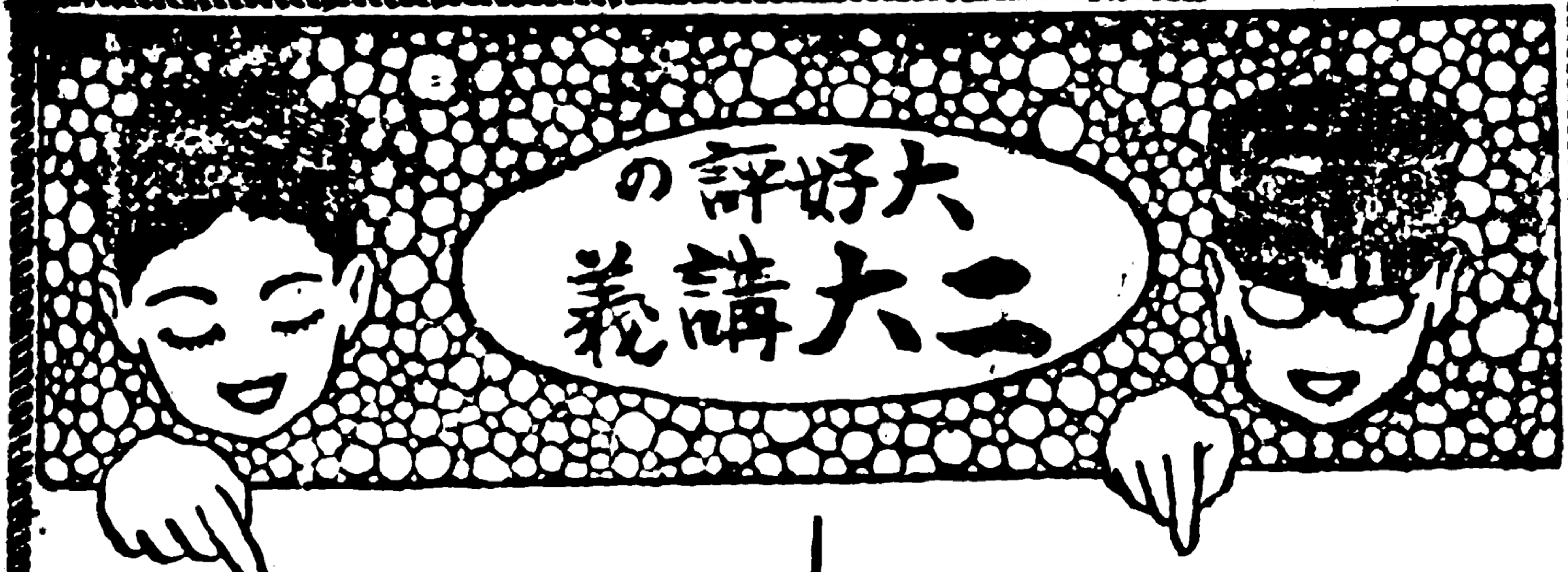
發行所

▲東京本鄉駒込坂下町

振替東京三九三〇

大日本雄辯會講談社

御申込次第圖書目錄進呈


大好評の
二大講義

摘み草



里の子や髪に結なす春の草

太[illegible]

東京・熊坂瓦堂作

フラググンネ

東都女學



一昔前に較べて女學生の姿もずつと變つて來ました。女學生の服裝に就いては教育家も父兄も常に注意を拂つて居られますが、玆には東都各女學校で制服として定めた女學生姿を御紹介致します。快活で優雅な姿は若き人々の輝かしい前途を象徴して居るやうに感じられます。誌面の都合で全部を掲載する事が出來なかつ



たのを殘念に存じます。(1)文化學院(2)佛英和高等女學校(3)府立第一高等女學校(4)東洋高等女學校(5)大妻高等女學校(6)三輪田高等女學校(7)聖心女學院(8)神田高等女學校(9)自由學園(10)淑德高等女學校(11)成女高等女學校(12)山脇高等女學校(13)お茶の水高等女學校(14)實踐高等女學校(15)千代田高等女學校(16)佐藤高等女學校。

男　ま

未曾有の大戰爭が始まつた！　男子といふ男子は悉く起つて戰線へと馳せ參ずる。今、假にこんな場合を想像して見ると、今まで男がやつてゐた仕事は、どんな荒仕事でも女が代つて之に當らなければならない。だから女はいつでも男の仕事を爲し遂げる丈の覺悟が必要だ。近來世界を擧げて、女子の職業は各方面に亙り、著しく



ガソリン販賣



靴工



牛乳配達



氷屋

男子の領分に入込んで、事務員、タイピストは勿論、ハンマー握つて鐵を鍛へるもの、スパンナー片手に機械を取扱ふもの、さては把手とつて天空を翔せる飛行家まで現はれた。玆に掲げた寫眞は、米國に於ける女性の活動を示したものだが、衣裳の流行やダンスに浮身を窶す米國の婦人にも、かうした一面のあることに注目されたい。


左官職


鍛冶職


自動車修繕


機關手

長閑



木蓮

お丶木蓮！
ふくよかに清く
めざましく鮮かに
空に映發する
花の白さ！
美しさ！
あゝ春の息吹を
鍾めて吹きぬ



花祭

お稚兒の
金の瓔珞
ピラ〳〵
蓮華の花片
ヒーラヒラ
鐘の音に誘はれて
櫻ハラ〳〵



花を摘む

『花を集めて
何作りませう』
『王女のやうな冠を
あなたの頭髪に
飾りませう
そして春の歡びを
聲高らかに
謳ひませう』

な春



釈迦の御像へ散りかゝる





春晝

御堂たゞ花に埋もれ僧一人黙々と行く春の晝かな

わが町の櫻

城跡の櫻が咲いた　高く空に抽ん出て　港からも
見える枝
この櫻こそ私の町の　春の象徴なのだ　あゝ今爛漫と
咲いた咲いた



飛行機の新活動





航空機の利用されるのは決して飛行の目的のみに止らず最も斬新なそして最も有効な新活動を開始するに至りました。寫眞は上下圖共フランスのアグノー附近の大森林で飛行機が害蟲驅除の瓦斯を撒布して居る光景です。丁度頭髪に香水でも振りかけるやうな工合にやる譯ですから最も有效にその目的が達せられ極めて良好な成績を收めるだらうと豫期されて居ります。この飛行機の新活動などはあらゆる方面に人間の智慧が進展して行く事をよく示してゐるものでございます。



青春の花は色白の美顔

キング愛讀者に是非進めたい色白く美しい顔にお成りなさい

最近、歐米先進國は勿論日本でも最も進んだ學者專門家の實法は體内からの根治美化です。從來外部計りの手當を苦心したニキビや色黑ソバカス吹出などは體内に發生する特種の毒素病素の侵襲であると謂ふ事が發見された。

△從つて其治療と美化は

有効なる科學的方法で第一に體内に發生潜伏する原因病素や毒素を撲滅分解し、進んで血液や肉體に作用して外面皮膚を色白く美しく改造しなければならぬと言ふ事が發見されました。

◇今日では歐米先進國は勿論權威有る學者專門家は此新らしき發見即ち醜く穢い皮膚や顏の難症を治して美しくするには體内から根本原因的に治す内部療法を賞用するのです。顏や身體を内部から美しく色白く改造してニキビ色黑ソバカス等を治すと云ふと一見大變困難な治療の樣でありますが、既に歐米先進國初め至極簡單有効な醫藥の良法が色々研究せられ一般に賞美されて居升から日本でも適當な有効物の出現は青春男女の非常なる熱望であります。

△然し外國藥の效力は

體質食物風土などの非常に異ふ我々東洋人に往々有害で









あつたり案外の惡作用を受けたりするので、有名な藥學博士島田耕一先生數津先生越澤先生等の五大博士大家は協力苦心研究の結果、絕對に無害にして非常に効力著しい内用劑ハルナーと呼ぶ物を創出したのであります。ハルナーの効力如何は既に全國初め東洋南洋に行渡つた愛用者の賞讚感謝で益々信用を博し、到る處の信用ある藥局藥店は熱心に取次販賣して居ますから、ニキビや色黑ソバカスを治したい人々、顏や身體の穢いのを苦にする人は何より先にハルナーを必ず試して御覧なさい。

◎試驗量御希望者は此際金五十錢だけ左記東京濟生堂宛にて振替口座東京一七二〇一番へ拂込むか切手又は爲替同封で御送金注文次第に次の書物無代添付着金順に急送し升。

五大博士大家の說明書 體内からの白色美顏法無代で送呈!!

年若い男女は勿論、中年の人も子女の美貌を大切にする親御にも是非必要なる、現代科學的の確實有効な學理を五大博士大家が詳しく說明した書物です。必ず一讀して實際の妙作用を試して御覧なさい。ドナタでも希望の方へは此際無代で送附進呈しますから左記東京濟生堂宛にハガキで「キング愛讀者」「美本入用」と御申込み次第送ります。

東京市京橋區築地橋際 本舖 合資會社 濟生堂製藥所
振替口座東京一七二〇一番 電話京橋(53)一〇三七・[illegible]番

すてゝおかれぬ

ふとり過ぎ

からだに害なく程よくやせて◆スラリとしたる美容姿となる◆



男でも女でも随分世の中には肥太つた人がある殊に年若き婦人は肥太つて居ると老けて見らるゝし、やれ『三平二滿』だとか『デブ』だとか悪口をいはれる甚だしきは癩病患者ではないかと疑はれ知らぬ所へでも行くと立派な令孃も下女と間違へられる、それが爲めに學問もありお金もあり餘る程の財産家の令孃もお嫁に行く事も出来ず可惜花の年代の二十歳前後を徒らに過ごして容色は益々悪くなるばかり遂にはつまらぬ人の妻となつた例も澤山ある。たとへ男子でも肥過ぎて豚の様では決して見よいものではないそれに第一太り過ぎた人は身體が強壯でない。

井上醫學博士曰く

肥滿ノ人ハ心臓ガ障害セラレテ脈搏ノ不正並ニ結節ヲ發シ熱病ニ對スル抵抗弱クナリ肺臓モ運動ヲ障害セラレ氣管支加答兒ニ罹リ易ク肝臓ハ腫大ス又動脈硬變萎縮腎及糖尿病等ヲ併發スル事アリ豫後不良

筒井醫學博士曰く

オベシタス即チ肥へ過ギタル人ハ歩行困難、心臓微弱、脈搏不齊、心臓肥大呼吸困難其他種々ノ障碍アリ、心臓衰弱腦出血肺出血ヲ發シ頓死スル事アリ

自分では何でもない様に思つてゐるが此二博士の説を聞かば決して安心して居られぬ事が分るであらう。本店では豫ねて専門家をして之が療法を研究中遂に理想的一大新剤**中容丸**を創製するに至り世の幾多肥滿者に一大光明を齎したのである。本剤は甲狀腺製剤を主剤としたもので從來ありふれた他の無責任なやせ・やせ・藥と全く異り、決して體を害せずに細らせるといふのが大特長で、又太つた人の體内にある有毒性老廢物其他(悪脂肪悪血酒毒水氣等)を細胞組織より分離せしめ之を體外に排泄する作用があるから、細胞組織は緻密となり、肉次第にシマリテ堅々くしたる美しき中肉の堅體となる、又身體虚弱なる人は反つて前よりも強壯となる。

●廿歳前後の婦人にして肥滿せる人
●其他血ぶとり酒ぶとり毒肥りの人
●ニキビ出で脂肪じみて肥滿せる人
●月經不順で肥滿し歩行困難せる人
●悪血又は水氣の爲身體肥滿せる人

右の如き人**中容丸**を服用すれば通利の機能をよくし胃の作用を増し絶對に體を害さず顔及び身體をスラリとして優しい容姿となる。又肥滿の爲顔色赤黒き人は色白くなると云ふ實例澤山。**中容丸**を服用せば『身體痩て骨と皮ばかりになりはせぬか』とか『一度やせて再び太りはせぬか』などと一々本店に問ひ合す人あれど決して然る心配なければ安心して服用せられよ。

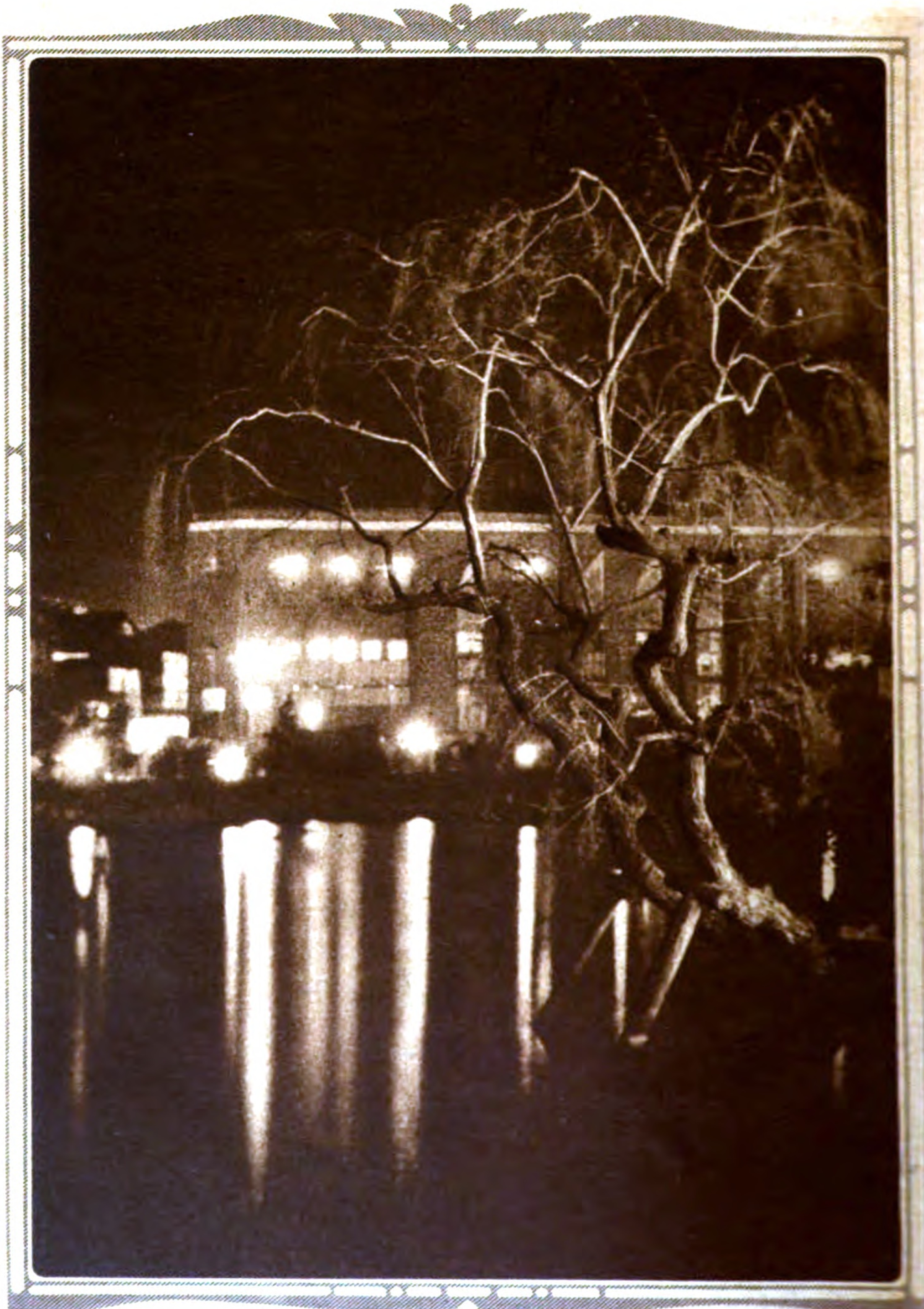
中容丸の定價は、十日分**金三圓**、廿日分**金五圓五十錢**、卅日分**金七圓五十錢**、四十日分**金九圓**の四種がある大抵の人は十日乃至二十日分にてよけれど肥滿甚だしき人は三十日乃至四十日分を求められよ、御注文の方法は振替又は切手郵便、爲替にて藥價御送金次第すぐ密送す、又**ハガキ**にて御注文次第直に代金引替にても送藥す、尚平素の養生法及び服藥中の注意等を記した説明書が藥品に添付して有ますから御覧下さい。太つた人は治療せずにおくと井上博士や筒井博士の説の如く遂には實に恐ろしい病氣を發する事あり時としては生命をも奪はれます。思ひ立ちしが吉日一日も早く本藥を用ひて、スラリとしたる中肉、美しきやさ容姿、無病壯健の御身體とならるゝ様くれぐれもおすすめいたします。

尚、**中容丸**は發賣以來非常な好評を博し、常に製藥が間に合はぬほどの賣行きでありまして、今の場合直接の御注文者に對してのみ漸く頒藥が出來るといつた狀態でありますから、當分の間どうか是非直接に御注文下さるやう御願申上ます。

發賣元　東京市小石川區表町六十八番
鶴岡藥品部
振替東京一六六八〇番
電話小石川四七九〇番

本藥に對する詳細の説明書があります御申込次第無代進呈いたします。

春の宵



東京・小宮山武雄作

神童



↑紐育の最も繁華なウオル街の眞中で、可憐な少女が基督の教を熱心に說いて居る光景です。中央に白衣を纏うた少女がそのウルディン・ユトリー孃です。ユトリー孃程聽衆に深い感銘を與へる少女傳道者は少く、この美少女の行く所、常に聽衆が群を成して集ります。ユトリー孃の說教は全く神の使のやうに神々しい感じを與へると云はれて居ります。



↓ロンドンで玩具展覽會が開かれた時、たつた三才のメリー孃がお父さんのお店の玩具に就いてお客樣に說明をして居る所です。手を擧げ首を振る可愛い姿に牽かれて多勢のお客がどし〳〵買つて行き大繁昌をしました。





→最近米國ワシントン市の全米小學生の作文競技會が開かれた時、十三州から集つた代表者に打勝ち第一等の榮冠を得たディーン・ルカス君であります。年齡は十三歲。賞金として千弗を與へられました。

紐育警視廳の巡査は射的試驗を受ける前にジョンニーといふ十歳の天才射撃家に指導を受けます。この巡査の先生は全米にも珍らしい名人で、拳銃の上に銀貨を載せてそれを落さずに立派に的に當てることが出來ます。寫眞はジョンニー君が妙技を示して居る所です。





米國カンザス州獨特の繩使ひや馬術に最も優れた腕前を示す十才のハンク君と八才のトム君です。二人共今や得意とする繩使ひの鮮かな技を見せて居ります。この二人はカンザス州の人氣の中心になつてゐる少年です。

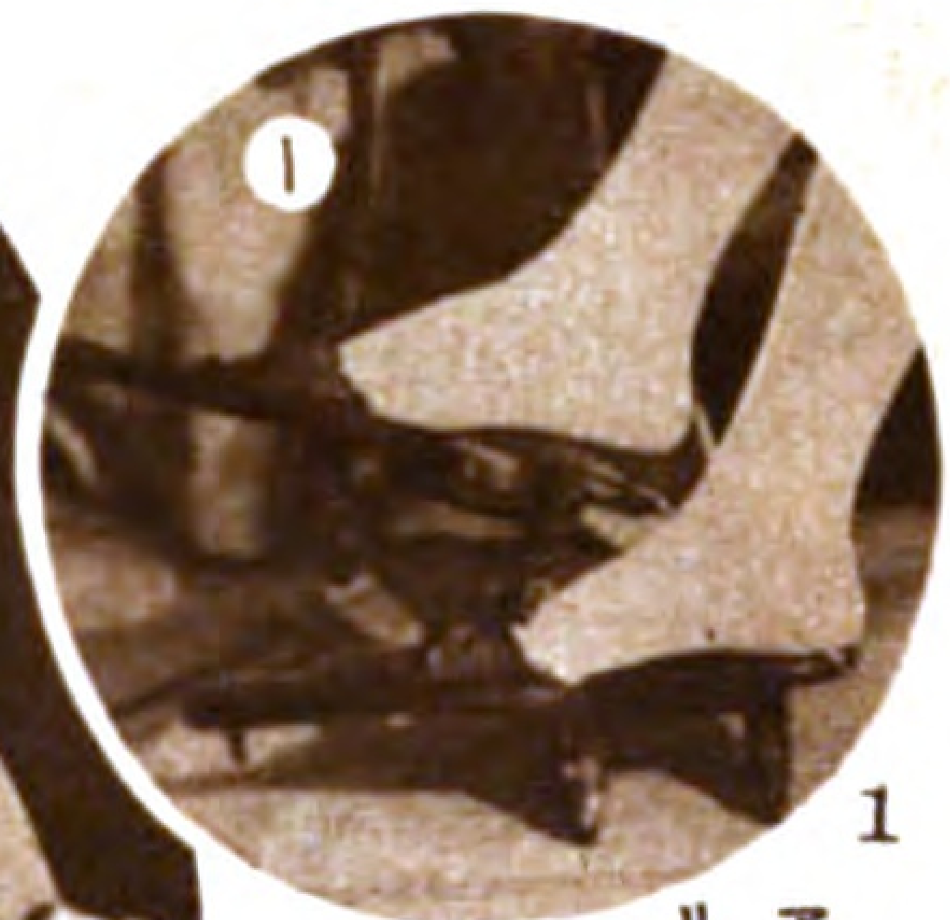


紐育のガロ歌劇協會に八才の天才音樂家オッタヴィオ・アーツロ・ガロ君が居ります。今指揮棒を揮つてオーケストラの鮮かな指揮振りを見せて居るのがガロ少年です。

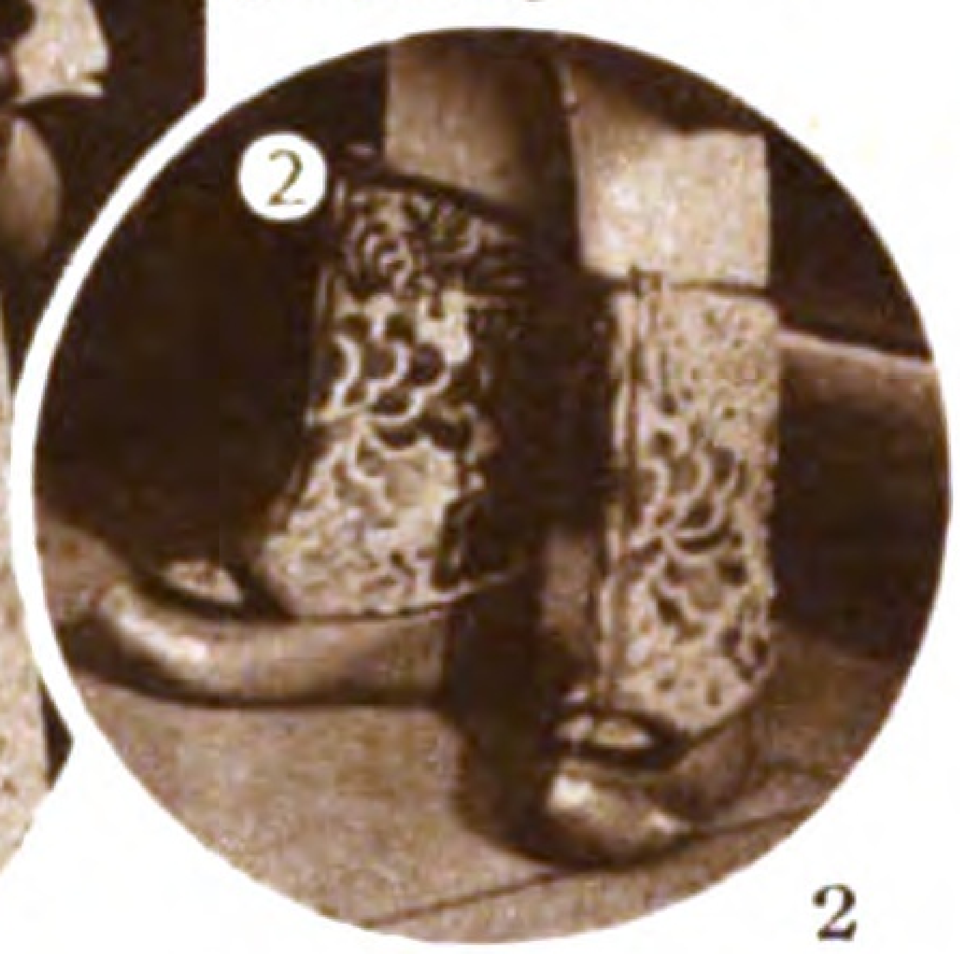


變つた靴の

東西古今のいろ〳〵な靴を御紹介します。人間の原始性を現したもの、好奇心を現したもの、さては審美感の現はれるものなど、靴を通じて歴史的人智の變遷、或は國に依る好尚の相違など、を觀察するのも興味があります。アフリカの足駄靴は偶然日本の履物と暗合し、滿洲の馬賊靴は斑模樣に凄味があります。籐靴は如何にも天産物を利用した感じが現れて居り、蘭形靴は穿き脱ぎに面倒がなささうですし、支那婦人のいろ〳〵な刺繍や飾を施した靴は纒足の美を誇つた國民性を現し



1 アフリカの足駄靴



2 滿洲の馬賊靴



3 印度の籐靴



4 アフリカの蘭形靴



5 支那婦人飾房靴



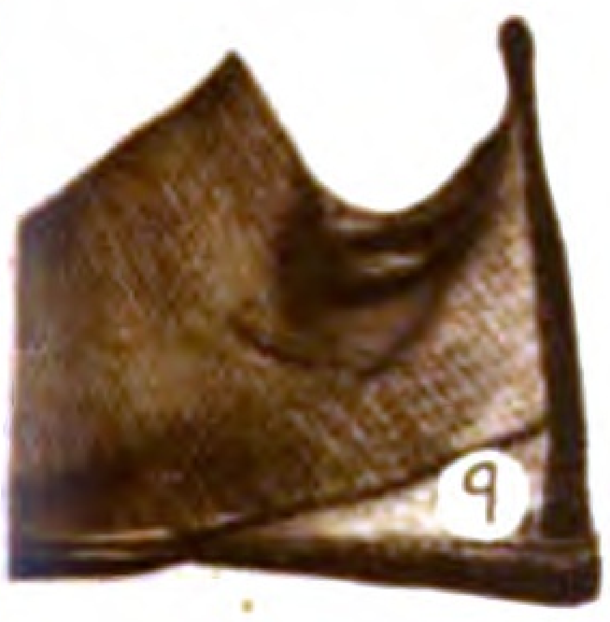
6 アラビアの沙漠用靴



7 和蘭及佛國の木靴



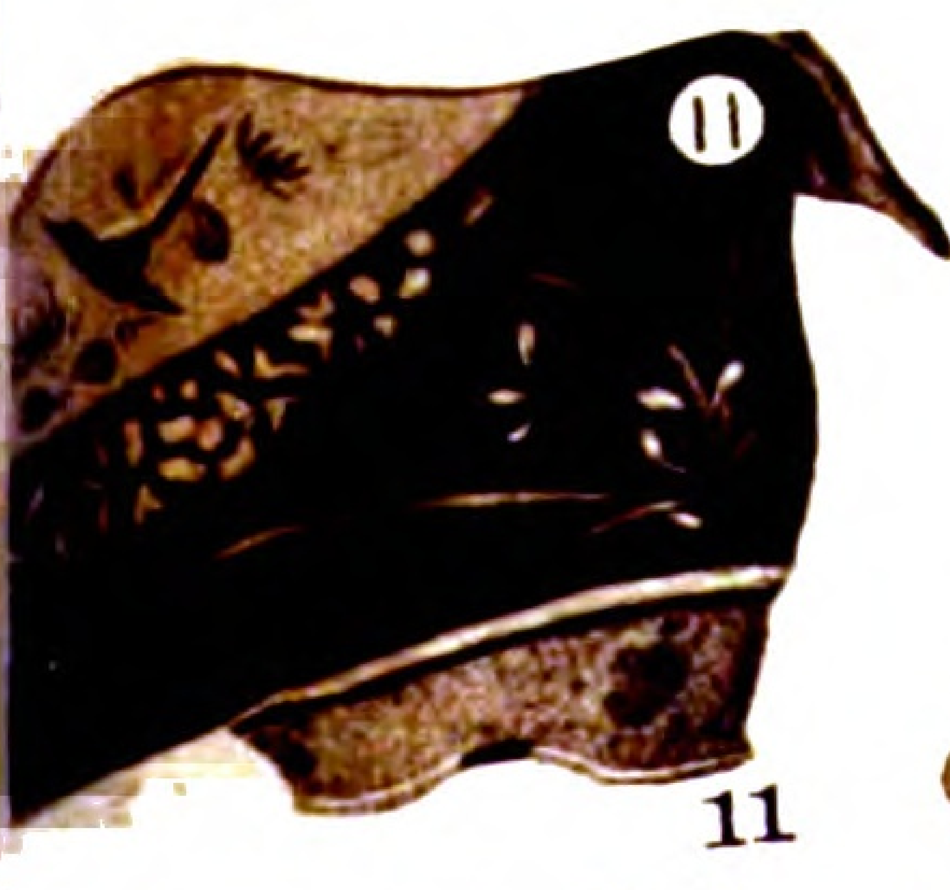
8 諾威の靴



9 波斯のズック靴



10 支那婦人の刺繍靴



11 同上支那婦人靴


12 土耳古のワラヂ靴


13 中世紀英國貴婦人の靴


14 丁抹の舟形靴


15 印度の天鵞絨靴


16 印度貴人の魚形靴


17 濠洲土人の小舍形靴


18 支那上流男子の刺繍靴


19 アラビアの橇形靴


20 アルメニア婦人の烏賊形靴


21 エスキモー人の氷上歩行用皮靴


22 南米土人の草履形靴


23 日本の面に型つた紐育の夜會靴

てゐます。アラビアの沙漠靴は必要が發明を生んだ好例。和蘭や佛國では質素で雅致のある木靴が行はれ、諾威のは寒國らしく、波斯のは暖國らしい。土耳古人の草鞋靴は日本の草鞋に似通ひ、中世紀英國の貴婦人はこんなでこ〳〵の靴を喜んだのです。丁抹の舟形靴、印度貴人の魚形靴、濠洲土人の小舍形靴、アルメニアの烏賊形靴などは全く珍らしいではありませんか。南米土人のは靴よりは草履に近く、最後の夜會靴は米國婦人が新奇を競つて拵へたものであります。

變つた靴の

こゝには現代各國の最新流行靴を御紹介します。最初に黒白鮮かな現代模樣の子供靴。和蘭模樣の長靴は豐かな郷土色が覗はれます。白革黒エナメル鹿革など婦人靴は革でもつて新奇を競はうとして居ります。倫敦の展覽會で優等賞を得た男子靴は豹、鰐、白鹿などの革を用ひた斬新なもの。婦人散歩靴、仕事靴、外出靴等に就き、踵の高低を御比較下さい。造化を飾り寶石を鏤めるのは贅澤な婦人靴に殊に用ひられます。輕快さを主とした靴は、甲をぐつと刳抜くのが特徴。登山靴、蹴球靴、スキー、ス



1 モダン模樣の子供靴

2 和蘭模樣長靴

3 白革油繪模樣夜會靴

4 黒エナメル夜會靴

5 鹿革油繪模樣夜會靴

6 倫敦展覽會受賞男子靴



7 米國婦人散歩靴



8 職業婦人用仕事靴



9 外出用踵高靴



10 新流行造花飾靴



11 新流行輕快靴



12 モダン模樣婦人靴



13 瑞西國登山靴

14 鋲付蹴球靴

15 婦人用スケート靴

16 芬蘭スキー靴

17 加奈陀スケート靴

18 茶エナメル婦人靴

19 黒繻子夜會靴（寶石入）

20 金襴寶石入夜會靴

21 蛇革婦人散歩靴

22 モダンガール散歩靴

23 寶石止金造花付婦人靴

24 自由廻轉輪付舞踏靴

ケート靴など運動靴は頑丈で而も輕快な外見を備へたものが喜ばれ、茶エナメル、黒繻子、金襴、蛇革など夜會靴には益々目新らしい材料が用ひられるやうになりました。モダンガール靴といふのは甲が紐革だけ、赤裸々に足の美しさを見せようといふのです。寶石止金造花付の靴とは何といふ贅澤さでせう！ 最後の舞踏靴は踵に自由廻轉の輪を取付け自然に踊廻る事の出來るといふ最新の考案。穿いてゐるのは考案者のトッド嬢です。（13から22までは東京三越呉服店製靴部の製品です。）

樂しい遠足





麗かな春の陽を浴びて、如何にも樂しさうな少年少女の集ひ――。これは幼年俱樂部四月號に載つてゐる美しい原色版の寫眞です。幼年俱樂部は、理想的の課外讀本として大評判であります。愛するお子樣方や御弟妹樣達の爲、是非一冊お求め下さい。

讀め、何人も‼讀書界驚異の賣行‼

鶴見祐輔氏の大快著

中道を歩む心



新渡戸博士

法學博士
農學博士　新渡戸稻造先生曰く

鶴見君は、時代を通觀否達觀する明あり。加ふるに彼の高き見地より後進の徒を啓發するの途とスタイルを有し、愉快に道を踏ませる稀なる才を有する。此の書の如きは必ず、ギブス氏の一書が英國の青年男女を風靡せると同然の結果を來すであらう。

法學士　澤田　謙先生曰く

鶴見氏の「中道を歩む心」を讀んで、今更ながら感ずる

目次（一部）

御申込次第圖書目錄進呈

ことは、彼が一代の感慨見であることである。……論策あり随筆あり、文明批評あり山水紀行あり、その間に姿を現はす著者は、依然として感慨に耽つてゐる。いな、感慨に耽れる著者に讀者は最も多く動かされる。

貴族院議員
國民新聞社長

徳富蘇峰先生曰く

鶴見君は、當代得難き秀才の一人也。近著「中道を歩む心」は、予が快讀する所也。但だ君に註文するは、天鵞絨の手袋を脱ぎ捨て丶赤手奮闘せんこと是れのみ。



徳富先生

伯爵

二荒芳徳先生曰く

鶴見君の卓見と博識とは毎度ながら敬服欽羨に不堪、實に國民必讀の書と存じ候。

外務省
情報部長

小村欣一先生曰く

「中道を歩む心」は近來の快著である。極端なる右傾主義と左傾主義とを排して、其の中間にあつて公正にして穩健なる進歩主義を持して行かうと云ふのが鶴見君の主張である。余は、この新自由主義こそ、我が國民が目標として進むべき一大燈臺であると思ふ。

▲支那の動亂と米國
▲天下を動かす大雄辯
▲處女演說の思ひ出
▲讀者と聽衆、演說雜感
▲**輕井澤の初夏**
▲外國旅行の用心二つ
▲近頃の旅日記より
▲**三民主義の將來**
▲タフト號上の客
▲明日の英國の支配者
▲支那問題圓卓會議
▲**白人濠洲論**
▲街頭より書齋に歸りて
▲政治に於ける痛快味
▲都會と田園の思ひ出
▲**今日を樂しむ心**
▲新自由主義への途
▲道程を愛する心

▲四六判函入
▲挿畫十數葉

定價貳圓五拾錢（送料拾四錢）

（發行所）
東京本郷駒込坂下町―振替東京三九三〇―
大日本雄辯會講談社

御申込次第圖書目錄進呈

肺病 肋膜炎 結核の消極的療法と積極的療法

實際問題として病者の徹底的治療法は何か？

呼吸器病で不安な人の病狀は如何にして明かにするか

肺病の治療に色々な療法がありますが、これを詳細に研究すると、消極的療法と積極的療法の二つに分れます。

例へば自然療法は消極的の方に屬し藥の力により病を治す方法は積極的の方に屬します。病氣を戰爭に例へると消極的療法は後いて城を守る戰法で、積極的療法は進んで敵を敗る戰法であります。肺病、肋膜炎、結核を治療するには單に消極的に守る許りでは駄目で、又養生法を怠つて藥によりてのみ治療せんとするも駄目であります。消極的と積極的の二つの療法を完全に實行せねばなりません。

積極的療養の第一

病が重くならない内に治療する事は積極的な療法の最も大切な要點であります。先天的に體質が結核に犯され易い人、肋膜炎、氣管支加答兒、肺尖炎で少しでも變だと考へた人は結核の徴候に注意し萬全を期して治療しなくてはなりません。

肺病　結核、肋膜炎の徴候

病者が自覺的に感ずる徴候を記すと

發熱　原因不明の熱、午後よく發熱す

盗汗　睡眠中に寢汗をかく

咳嗽　力の無い咳が出る

咯痰咯血　變な痰が出、血が交る事あり

胸痛　胸に引く樣な刺す樣な痛を覺ゆ

肩の凝り　何んでも無いに肩が凝る

貧血　顔色蒼白く、血の氣が無い

消化不良　何んとなく食事が進まぬ

氣力倦怠　何をしても懶く、根が無い

右の内一つ二つ覺ゆる事もあれば澤山の症狀が同時に覺ゆる事があります。

肺病に罹つた時の實際問題

肺病、肋膜炎、結核と定つても決して悲觀する事はありません、全快した數限り無い澤山の實例は何を教へて居るのでありませうか。少數な不幸の人の例を以て自己を心配するは本病者の通例でありますが、病に罹つたら治す方法を定める事が一番必要する實際問題であります。醫師も博士も事が此處に至ると先づ療法を教へ必ず藥を服用せしめます。實際病氣に罹つたら一日も藥を服用せずには居れません此の片時も離せぬ藥の選擇は病者の最も大切な點であります。

治療藥を選ぶならば

藥は効力が第一番で製造所と販賣店の確實にして信用あるもので無ければなりません。信用を生命とし販賣品の選擇研究に定評ある百貨店中の權威白木屋呉服店藥品部は結核、肺病、肋膜炎の治療藥として總ての點に卓絶せるウニコールの服用を確信を以てお薦めしますと紹介して居ります。

治療の完全と徹底を期する爲にウニコールを服用して其の卓効により療養上の安心を求むる事をお薦め致します。

ウニコール藥價

	輕症用	重症用
一月分	五圓	九圓
二月分	七圓	十三圓

（送料函代共内地廿錢　海外領土五十錢）

遠近の別なく誤り無き販賣店を紹介致します

白木屋呉服店藥品部

東京　日本橋（振替東京九八番）

大阪　堺筋（振替大阪四三一番）

療養上、其他ウニコールに就いて詳しき説明書御希望の方は次記に直接御申込み下さい

ウニコール發賣元　東京下目黒　順天堂藥院内キンク係　振替東京三三六〇〇番

人生の旅

佐々木邦

お互の日常生活を省みても、人生には泣くことよりも笑ふことの方が多い。行路は爪先上りで油斷がならないけれど、道連れの多い旅だから、何にしても心丈夫だ。

自他の蹉跌、これを餘り眞劍に考へると、こだはりを生じる。お互に弱い人間だと思へば、笑つてことが濟む。轉んだら直ぐ起きるまでの話だ。

斯くて五十年六十年、行先地は着いて見るまで分らない。お互は皆途中にゐる。議論をしても駄目だ。恐らく、道中見聞するところが先方に着いて役に立つのだらうから、唯々目を見張つて、ゆるり／＼と參らう。



社説

善意に解せよ

◇……人と人との交渉が、日となく夜となく斯う紛劇となり深刻となつて來た現代に於ては、何をおいても先づ我々の考へねばならぬことは、その、人に對する心持、態度如何といふことである。端的にいへば、人の言動を善意に解すべしといふことである。

◇……個人間の交渉も取引も、對社會的關係も、乃至は國務の遂行も、たゞこの一義の有無によつて、成功もすれば破綻も來す。「人を善意に解する」これは單なる口先や書上の道徳ではない。我々が生きてゆく上の、實生活の突きつめた問題だ。

× × ×

◇……いかなるが苦しきものと問ふならば人を隔つる心と答へよ（良寛）——人を善意に解し得ないのは、この「人を隔つる心」があるからだ。相手を理解する前に、先づ自己を主張しようとするからだ。我々は先づその成心を去らねばならぬ。己を虚しうせねばならぬ。そこに始めて相手を正しく受け入れることが出來る

◇……捉はれない、正しい道の上に立つて相手の心を解釋すれば、今まで險しかつた心も自然に融けて、大抵のことは圓滿に解決がついて行く。否、心が融けるばかりではない。却つてそこには同情の心、憐れみの心さへ湧いて來る。相手の立場になつて考へて見るといふところまでも進んで來る。精神の交流だ。

◇……然るに人は多く相手の心持を考へず、自分の立場からばかり相手を眺めようとする。相手が我でない限り不平や不滿が起らざるを得ないわけだ。誤解や爭鬪の生ぜざるを得ないわけだ。

◇……斯の心持になれば、子供は構はずには居れない。女中の心持になつてやれば、女中はいつ迄も奉公する。資本家と勞働者も、地主と小作人も、この心に立ち返らないでは、いかなる制度も規約も、終にその協調を持續することは出來ぬであらう。

×　　×　　×

◇……同情を以て相手の立場を善意に解釋して行くと、今まで知れなかつた長所、美點までが、砂の中の金のやうに光つてゐるのが目につく。『よい人だ』『えらい人だ』といふ感動が、ひしひしと我が胸を衝いて來る。覺えず尊敬の頭が下つて來る。

◇……一匹の子狗が、エルサレムの街の中に斃れてゐた。群衆は口々に罵つた。『汚いぢやないか』『穢らはしい痩狗だ』『捨ててしまへ』と。其の時、群衆の後の方から、『……けれども、子狗の齒が眞珠のやうに美しいのを見よ』とおごそかに叫んだものがあつた。それはキリストであつた。

◇……この心は、ひとりキリストばかりではない、我々も持たねばならぬものである。而してそれは相手を善意に解することによつてのみ持ち得るものである。

◇……あの人は善人だ、あゝいふ立派な方が……と信ずる心は、相手の邪な心までも淨化する力がある。ミエール僧正は斯くして兇惡なジャンバルジャンを善人としたのである。小公子フォントルロイは斯くして拗け者の公爵を本當によいお祖父樣にしたのである。

×　　×　　×

◇…現代人は、あまりに自我の念のみ強く、あまりに自己を主張するに急にして、他に同情し他の美點を見ることを忘れてゐる。然、自己を主張することも結構だが、其の前に先づ自己の要求が果して道に適つてゐるかどうかを反省する必要がないか。

◇…『自分の缺點ばかり見てゐると人のことを云ふ暇がない』と云つたのは佐藤一齋だ。子貢が好んで人の批評をするのを見て『お前はよく閑暇があるね』と笑つたのは孔子だつた。これが現代人に對する頂門の一針でないであらうか。——人を善意に解することには、まづ我れ自らを省みることから出發せねばならぬ。



熱血兒ケマル・パシヤ

土耳古大使館書記官　芦田均

トルコ再生の恩人

世界で一番高い山はといふ問が興味をそゝると同じやうに當世界第一の政治家は誰といふ問題も一寸吾々の頭腦に浮び易い疑問である。數々の世界の政客の中で戰後の動搖時代が生んだ人としてはレーニンとムツソリーニとケマル・パシヤは頗る珍らしい型の英雄兒である。いづれもが全くかけ離れた境遇に生れ、全然相異つた性格をもち乍ら三人の念頭には同じやうな幻影が閃いてゐたことも不思議な緣と云はねばならぬ。然し私が玆にこの三つの名を列べて多少とも因緣ありげに說出したことが假にこの人達の耳に入つたとしたら頗る逆鱗にふれるであらうことも想像に難くない。少くとも私の話の主人公たるケマル・パシヤはレーニンを嫌ひムツソリーニを快しと思つてゐない事丈けは確である。

トルコ人は軒每にケマル・パシヤの寫眞を揭げ、アンゴラやコンスタンチノープルでは要所々々にケマル・パシヤの銅像を建て、トルコ再生の恩人としての聲望はロシアにおけるレーニンにも劣らない。その理由は改めて說く迄もない話乍ら、土耳其が歐洲戰爭の際に獨逸墺太利に味方した爲戰後には國土を三分の一に縮められ、小亞細亞の一角に追込められて殆ど國の獨立さへ危からむとする形勢であつた。憂國の士が憤起したのはこの時である。斯樣な屈辱的講和に承服する位なら、トルコ人の最後の一人まで討死する覺悟で鬪はうとの意氣が凝り固つて國民軍の組織となり二十萬の希臘軍を引受けて三ケ年の苦鬪惡戰の後、遂にローザンヌの講和會議で有利な平和條約を結ぶことが出來た。この奇蹟的な大勝は主としてケマル・パシヤの指導によつたものであるから彼がかくも全土耳其人の尊崇の的となつたのも怪しむに足りない。

ケマル・パシヤは大正八年に國民運動の旗擧をして約五ケ年の間に外戰と革命の二大事業をほゞ完成して了つた。見方によつてはナポレオンやレーニンよりも寧ろ短時日に大きな成績を擧げてゐるのであるが、レーニンが未來派の理論を基礎とするユートピアを標榜して起ち、ムツソリーニが現實的な能率政治を眼目として蹶起したのに對してケマル・パシヤは寧ろ時勢的

な民族主義をふりかざして回天の事業を成就したのであるから今時の新しがり屋に感興を與へないことは止むを得ない。けれども、彼の爲し遂げた仕事、そして今現に遂行しつゝある國政一新の事業――そして其の結果が千四百萬の土耳其人に齎した結果から見れば、今迄の多くの革命の歴史の内でも誠に興味の多いものである。が私の話は一足飛びにアンゴラに移るのである。

ケマルの都アンゴラ

コンスタンチノープルから急行の汽車は十三時間でアンゴラに着く。其の昔は東歐羅巴の米倉と云はれた小亞細亞の高原が見渡す限り丸坊主の野原で、樹の少い岩角の突出した地勢は先づ東蒙古か北滿洲にほり出された心持である。ケマル・パシヤはこの高原の小都市アンゴラを土耳其共和國の首府と見立ててここに新しい歐羅巴式の市街を建てる決心をした。素より成吉斯汗の墓がゴビの沙漠の眞中にあるからとてケマル・パシヤがアンゴラの原野に都を立てる理由にはならない。まして都を造ることの困難は都を遷すことよりも遙に大である。彼が遷都を決行したのは一つには國防上の理由から今一つは多年積弊の中心なる君府を去つて新しい酒を古き革袋に盛るまいとの潔癖から來たものである。もと〳〵トルコの田舎町は泥土をこね上げて壁を造り、板か草か乃至は瓦で屋根を葺いたお粗末な家が軒を並べて、町幅と云つても二米突か三米突を出ない。農村は半農半牧と云ひたいが人口が少く、雨量が足りない關係から、羊や山羊を飼ふ者が大半である。そんな處に首府を移してどうするだらうと驚いた者は歐羅巴人許りではない。トルコ人でも可なり强くこれには反對した者もあつたが、ケマル・パシヤはアンゴラの郊外、釣鐘岩の高臺に質素な家を構へて、これを根城に新らしい首都の成長を見護つてゐる。ペトログラードが彼得大帝の都市であつた如く、アンゴラはまさしくケマルの作つた都である。數年このかたこゝに議事堂を造り諸官廳を建て圖書館、病院、博物館、ホテル、百貨店、製粉工場等、等凡ての建築を一時に造り上げて三十米突に餘る新道路が



ケマル・パシヤの近影

古い街を崩して縱横に敷かれ出した。此等の工事の爲に關東震災の後始末にも比べる程の大混雜が狹いアンゴラをいやが上にもせゝこましくしてゐる。風が吹かなくとも自動車、馬車の行き通ひには文字通り萬丈の砂煙が濛々と立ち上る。大陸的の夏の日は禿山も野原も谷も平等無差別に照りつけて可なり烈しい暑氣に惱まされる。冬は冬で黑海を渡つてくるロシアの寒風が容赦なく眞北から吹つける。其處へ都府を立てるのであるから下水、水道、電燈、住宅、官廳の建築、衞生の設備マラリア征伐等々、仕事は四十八時間不眠不休で急いでも爲し切れない程にウンとある。それも財政が豐であり、技術者の多い國であれば譯もない事かも知れないが、政府、民間共に財布は輕し、人はなし、技師から材料まで外國に仰いで造り上げようといふのであるから一通りの苦心でない事が解る。處が戰後のトルコには外國との難問もあり、國内には神風連の樣な頑固派もあるから國政の改革には異常の決心と勇氣とを必要とするのである。此の間にあつて共和制の確立、回教と國家との絶縁、教育、産業の創設、國防の充實等の大問題が兎にも角にも過去三四ケ年の間に礎石が出來上がつて、年々歳々アンゴラの町が外觀を新にする如く、トルコ共和國が次第に文明國の班にせり上つて來る情勢は日の出に滿潮を迎へる如く見るからに勇ましい姿である。斯くして朽ちかかつたオットマン帝國から、トルコ共和國の新しい芽が吹いた。其の仕事をこれ迄にやり遂げたケマルは何としてもエライ……さういふ聲が先づ今日の輿論と云つて差支なからう。

亞魂歐才

ケマル・パシヤは武人である。バルカン戰爭や歐洲大戰の際にも勳功があつた。然し希臘軍の侵入によつてトルコの崩壞が目前に迫つた時に國民軍を組織して之に對抗し、舊來のサルタン政府に代つて亞細亞に國民黨政府を建てゝからは、武將たるが故に攻城野戰の仕事以外には手を出さないと空うそ吹いてゐることはできなかつた。ケマルは同時に國民から推されて政府の首班ともなり又軍の大元帥ともなつた。例へて見れば執政政府時代のナポレオンといふ地位である。

和魂洋才といふ文字が明治の政治家に好んで用ゐられたやうに、現代、土耳其は教育にも政治にも歐洲の文物と土耳其魂といふ標語で民衆を指導してゐる。云ひ換へれば亞魂歐才の典型はケマル・パシヤ幷に其の周圍の政治家が覘つてゐる處である。

ケマルは本年四十七才の男盛り、數年前に佳人を選んで結婚したのであつたが賢夫人必ずしも良妻に非ずと見えて、破鏡の歎を見た後、ずつと今迄男やもめを通してゐる。恐らく『吾妻は吾共和國である』とのケマルの信念が、トルコの新しい婦人に了解せられなかつた爲であらうか、乃至は又婦人の燒餅の聊か程度を過したことが琴瑟の相和せさる原因を爲したのかいづれにしても今のところトルコのナポレオンの寢室にはまだテ



議會にて施政方針を述べつゝあるケマル・パシャ

ヨセフィンの美しい姿を見ることが出來ない。

併し必ずしも他人を壓する程でもないが眼光爛々として人を射るの面影はケマル・パシャの風貌を特長づけるものである。大きな手で堅い握手を與へ乍ら青味の勝つた葡萄色の眼でじつと相手を見つめた瞬間には亞細亞の魂が相手の心底にしみこむかと思はれる風勢である。時としてはカーキ色の陸軍元帥の正裝をまとふ事もあるが、屢々背廣、モーニングの清楚な姿を見せることもある。彼元來精力絶倫なれば斗酒あへて辭せず、興が湧いて談論風發する時には夜を徹しても飲む。かと思ふと堅くるしく書齋に籠つて終日事務を執れないと云つた容貌風采は何と云つても亞細亞人の血が流れてゐることを思はせる。亞魂歐才のケマル・パシャは寸分の隙もない倫敦仕込の紳士と見える程のハイカラで毫も蠻骨を帶びた風采をもつてゐない。強ひて蠻殼らしい點を搜したら、トルコ婦人との應對の時にのみ見受ける面白い場面である。歐羅巴の婦人はたとへ高貴の人に面接しても、男の手を接吻するやうな習慣はない——尤もカトリックの法王や僧正に對する禮は暫く別としての話である。土耳其では古いサルタン時代の遺風でもあらうが大統領の手を接吻する婦人は今でも尠くない。ケマル・パシャは平然としてその接吻を受けてゐるが慣れない眼には異様に映る圖とも云へよう、これも婦人解放熱の高い土耳其に殘存するアナクロニズムの一である。

大衆と倶に踊る

ケマル・パシャの灰殼論は愛國精神の發露であると云つたら、オヤ〱と眼を丸くする人もあらうが其處に論理の推移を求めるとかう云ふことである。兎や角と負け惜みを云ふものゝ廿世紀の文明は即ち西歐文明である、文明の潮流に押流さるゝものは永久の敗者となる外はない、かるが故に——アンゴラの政治家はおもへらく——トルコ人一千四百萬の民衆の手を引き足をとつて、ラヂオと飛行機の文明の中へ押出すことが唯一の經濟であると。よつて件の如くケマル・パシャ及其の一黨は西歐羅

巴里の灰殻の眞似をして見せる。けれども回教の教義はアラーの唯一靈驗の神にして異教徒の倣るべきを教へてた餘訓は小亞細亞高原の石の根、谷底までしみ込んでゐるのであるから、つい貳年前トルコ帽をかなぐり捨てゝ、伊太利製のソフト帽を強制したやうにしかく容易に魂を据ゑかへるべくもない。於是かトルコの政治家は先づ身を以て範を民衆に垂れたけれぱならない。とあつて大臣といふ大臣は舉げてアンゴラの近郊に洋風の家を建て、歐洲人と同じ作風とスモーキングを着用し、三鞭酒の杯を舉げては、アメリカ印度人の發明した騒がしいヂヤズバンドに危かしい足どり乍ら舞踏も試みるといつた發心の程はわきに見る眼もいたはしい心掛けである。アンゴラはいま井上外務卿の鹿鳴館式歐化政策を其のまゝ採用した形にあると云へよう。いづれにしてもアンゴラの新式旗亭や、何々熱苦閑の舞踏會には大統領も翁をまげて三鞭酒でも、葡萄酒でも、更に猛烈なラキーといふ土耳其燒酎でも時に應じ趣味に從つて杯を重ねる。其の上に總理も侍從も議員連もかういふ席ではいづれも亭主の好きた赤烏帽子の例にもれず、タンゴ、ワンステツプさてはチヤレストンを踊るべく餘儀なくされる境遇である。中にも上流の婦人連は概して急激に歐風を採用して土耳其婦人の同化力に富めること驚嘆せしめた程の變り方で近頃は巴里仕込の帽子や衣裳に歐洲婦人と區別し難い程の婀窕たる姿を見せる向も尠くない。が斯樣な激しい洋化は一律に模倣とか、虚榮とかの古い形容詞やモダン・ガール等といふ新しい形容詞で片附け了るべきものではなくて、一に開國進取の範を垂れる爲の犠牲であるといふ説明を聞いては益々以て侮り難い心掛に感服せざるを得ない氣になる。

身を以て範を民衆に示すとの意氣込は、ケマル大統領直營の農場にも現れてゐる。アンゴラから一里許りの郊外に數百町歩の耕地を擁する所謂ガヂー農場と稱するものがあつて小亞細亞高原の乾燥耕作法の模範農場とする計畫である。大統領は年俸三十萬圓の大半をさいてこの農場の完成に投じてゐるが、もとより收支は償ふまでになつて居ない。從つて此の農場の牧草の生産費は一基瓦について五十錢に當る計算だといふ說もあつて口の悪い外國人は土族の農業の手本に數へてゐる。然しケマル・パシヤにとつては此の農園の成功すると否とが小亞細亞農業の前途を決する問題であるから今年のやうに雨がなくて數十町歩の麥が一面に立枯れて了つても彼は平然として既定の方針を變へようとしない。矢張り大名の農業丈けの事はある。

愛國の至城

廿世紀のエラ者は同じ專制政治家でも口舌の雄である。レーニンでもムツソリーニでも揃ひも揃つて熱烈な辯者であることは隠れない事實であるが、わがケマル・パシヤも最近に破天荒の長廣舌を揮つて世界的の超記錄を作つた。

凡そ一國の元首が前後六十時間に餘る演說を試みたといふことは何と云つても世界のレコードであらう。しかも選擧前の總選

大統領は何十日かの間に幾百回の演說をするが、それは幾つもの同じ演說を繰返すのである。雄辯を以て聞えた獨逸のカイザーは十七年間に五百七十七回――平均十一日に一回づつの演說をしたといふ統計もあるが、それも回數に於てのレコードといふに止る。一介の武弁ケマル・パシャが、デモクラシーとかデマゴギーとかに緣の遠い土耳其で六十時間に餘る大演說をしたと聞いては事の聊か案外なのに驚かされる。が事實は正に其の通りアンゴラで去る十月十五日から開かれた土耳其國民黨の大會で黨の總裁ケマル・パシャが數百頁に亙る原稿を綱に睨み乍ら六日間に亙つて大演說をやつてのけた。此の場合、流石國事に熱心な黨員諸氏も尠からずあてられたであらう筈と假想にも同情することは土耳其人を知らぬ譏を免れない。六日目の大演說に祖國の將來多事なるべきを說いて、壇上の將軍聲涙共に下り、滿場の聽衆亦聲を呑んで滂沱たるものがあつた事は場に在つた人々の一齊に傳へる處であるから先づ眞實疑を容れない處である。ケマルは此の大演說を左の如き一句で結んだ。

「土耳其青年の最大の義務は永遠に土耳其共和國を維持し、之を防禦することである。他日或は敵國が吾國を侵略することもあらう、其の際に國内の爲政者は大なる謬錯を爲す者もあり、時には敵に通ずる如き叛逆者も出て來よう。かゝる時は土耳其全國民が失望と不運のどん底に沈む時である。然し、かやうな場合に於ても、青年の任務は土耳其共和國の獨立を救ふことにある。諸子が必要とする力は諸子の血管に流るゝ貴き血の内に存することを忘れてはならない。」

ケマル・パシャが前後六日間に亙つて試みた演說は一九一九年以降の國民運動、獨立戰爭に關する直接の事情を述べたものであつて、其の内には單に外敵に對する數年間の苦戰の歴史を含むのみならず、國内に於ける政敵との間斷なき鬪爭の經緯をも敍述してゐる。彼の演說には古きオットマン帝國と新しき土耳其との思想の爭が脈々として現れて居る。といふことは言葉を換へていへば新舊二つの土耳其の爭が數代ての力如何に激しく續いたかを物語るものであつて、この點は今まで廣く知られてゐない事實に屬する。

進歩と改革とを目標とする新しき土耳其は回教の傳統を超越した努力と其の神秘主義とを打破して獨立の民族國家を造ることに專念してゐる。從つて舊來の汎回教主義や亞細亞專制の觀念は之を一蹴して顧みない。之に反して保守主義の土耳其は回教の教理に基く政治に固執し西歐思想を排斥し、民族的結合の維持を主張するのであるから、土耳其の運命は亞細亞的、回教的政策によつてのみ開拓し得るものと信じてゐる。前者は理論に重きを置き後者は信仰の力に依らむとするものである。國民運動の當初には保守主義の勢力依々に強く殆ど國内に後援者をもつてゐたのみならず英國、希臘等も公然とサルタンを援けて、國民運動を打破する計畫をたてたのである。かやうな反對勢力を下に引受けて經綸の大業を成就し得たのはケマル・パシャの鐵腕の如き意志と、その政治家としての手腕によるものである。

彼は云ふ『國内に一つの岩だけでも殘つて居れば余は其の上に踏み止つて最后まで祖國の爲に闘ふ』と、この熱烈な愛國心は彼の全生命であつた。

ケマル即ち土耳其

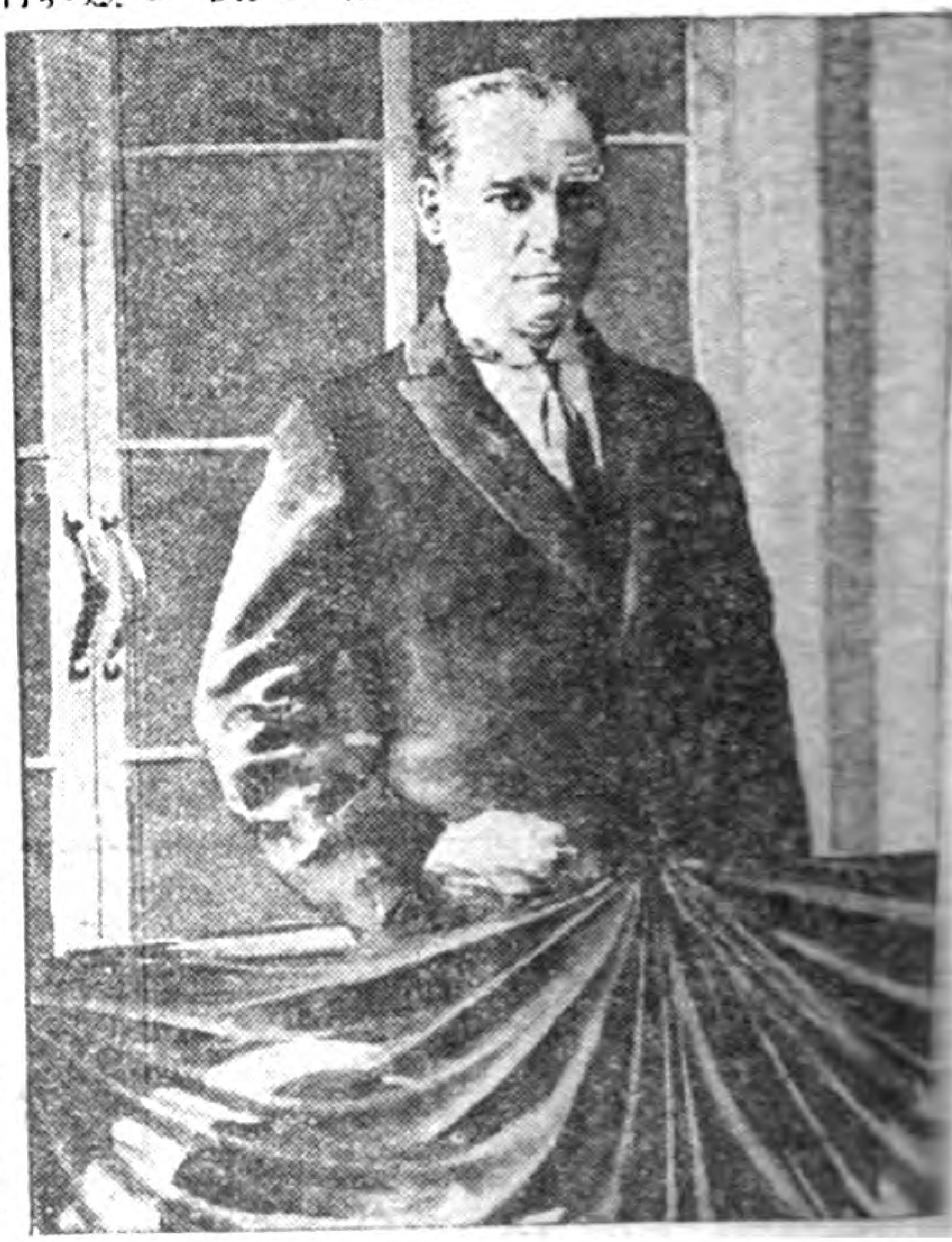
ケマルは救世主なりとの觀念は現在土耳其人の大多數に行渡つてゐるから其の威勢は素晴らしいもので、去る九月の總選擧でも、ケマル・パシャの率ゐる國民黨の公認した議院候補者は一人殘らず當選して、議會には一人の反對黨も選出されなかつた。内閣各省でもケマル大統領の意嚮とあればたちどころに議は纒る。そこで新法典の編纂でも、民法刑法商法等の所謂六法全書に收めてある尨大な法規が僅かに一二ケ年で出來上つて了つたし、鐵道でも汽船でも、工場でも必要とあれば、パシャの聲一つで遮二無二に造り上げる。一言にして云へば今の土耳其はケマル・パシャの土耳其であり、ケマルを除いては土耳其共和國は藻抜けの殼であるとも云へる。その點にかけてはレーニンもムツソリーニもとても脚下により付けない。彼は大統領であり、大元帥であり、政黨首領であり内閣その者であり、青年尊崇の的でもある。何と云つても廿世紀の一大奇蹟であると云ふ外はない。



歐洲人も彼の政治に專制政治の名を冠し、彼を以てヂクテーターの典型としてゐるが――尤も私自身もこれを否定する必要はないと考へて居る――然しケマルの外交方針が終始一貫して平和政策であることに充分の信用を措いて居ることは疑のない點である。亞歷大王のやうに世界統一の野心もなく那翁の如くウオターローを戰ふ色氣もない。土耳其は民力休養を第一義とするといふのが彼の主張である。そこはレーニンの世界革命やムツソリーニの大伊太利政策とも餘程隔りあることを認めなければならない。

ケマル・パシャはいつまで政界で働くだらうか――恐らく命のつゞく限り大統領に居据るといふだらう、それは自己の名譽心から來るのではなくて『土耳其を列強並みの地位に引上げるには廿四時間働きつゞけても

だ時間が足りない」といふ後の述懐から考へて、さう思はれる。ケマル一派の政治がいつまでつゞくだらうか、そしてケマル亡き後の土耳其はどうなるのだらうか。それは土耳其人も外國の識者も度々考へて見る問題であるが、要はこゝ十年二十年の間に國民の政治教育がどの程度まで成績を舉げるかといふことによつて答案は變つてくる。もし現在の調子で革新の事業が續行せられ教育が進んで行けば既に蒔いてある種子は必ず良い實を結ぶに相違ない。一粒の麥が地に落ちて朽ちても新しき命はその芽からふき出るにきまつてゐるからである。萬一ケマルの生存中に前途の見据がついたなら其の時は彼も政界を退いてアンゴラ近くの農園に其の老後を養ふことに同意するかも知れない。然しそれまで十年或は數十年の間恐らくは彼の閑雲野鶴の願望は成就することはできまい。それにしても、唯物論と科學と民衆政治とが支配する近世の歴史には再び英雄時代が廻つてくるものとも思へない。廿世紀の歴史は多分彼を以て英雄兒の最后の明星とするであらう。だが、進歩と平和に專念する英雄兒の晩年に幸あれかしと祈るのは、やがて世界の平和を祈る心に外ならぬではないか。(完)



◇長壽者は如何に攝生したか

英國健康増進協會が高齢の名士にあてて、その長壽健康法の秘訣を質問したところ、色々の返事があつた。その中の五六を紹介すると、

グードール卿(九十五才)喫煙せず、絶えず戸外運動を行ひ、節制を旨とする。

グリムソルプ卿(八十八才)喫煙しない。萬事節制を守るに心掛ける。

ネルソン伯(八十二才)喫煙せず、朝は疾く起き、節制を本旨とし、服藥せず、

ハツギンス卿(八十一才)喫煙せず。小量の肉と牛乳とを常食として、出來る丈け少食する。

ドリンクウオーター卿(九十二才)喫煙せず。戸外運動に努め、睡眠時間は毎日七時間に一定してゐた。

メーヨー博士(八十一才)喫煙せず。菜食主義で、毎朝四時に起床してゐる。

キース博士(八十六才)時々喫煙する。常に小量の葡萄酒を用ひ、小量の肉の他は多くは牛乳を用ふ。

フリッツ氏(八十六才)食事は毎日二食主義、煙草は一日に葉卷三本。ウイスキー二匙。適宜の運動を缺かさず。

○　坪谷水哉

天長節を祝し來る

大空に富士晴れて野は長閑かな
太平の色や花見る人の顔
昇る日や凪て果なき春の海

○　伊豆凡夫

ゆるぎなき國の礎さだめてし
君の御稜威の高くもあるかな

大和魂

敷島の大和心を我はいふ
夕日にもゆるもみぢばのいろ

努力

事しげき世をさはりなく行く道の
たのみは己がちからなりけり

○　柳原白蓮

野山にも花さきみてり君が代の
春をけふぞと祝ひまつらむ

○　鶯亭金升

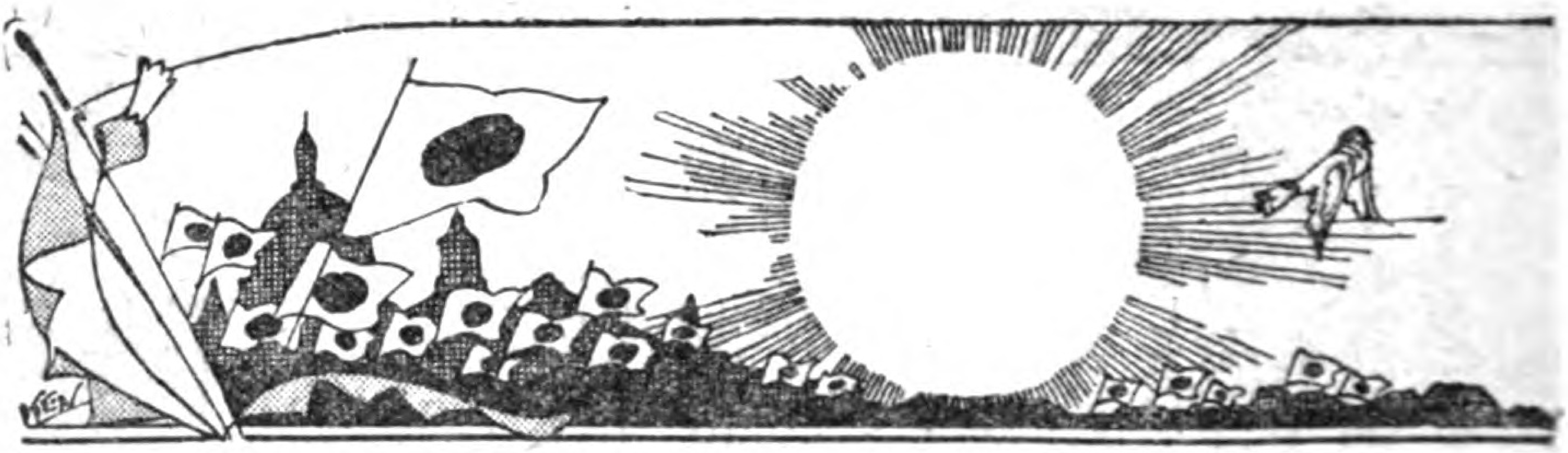
春も盛りの天長節に
人の笑顔の桃櫻
蝶々來て舞へ鳥來て歌へ
天長佳節の花の宿

○　赤司鷹一郎

天長節といへば、過古六十年の間、秋を偲び菊を想つて來たが、昭和戊辰の今年からは、春の光に和み牡丹を愛することゝなるであらう。かく人々の更新せられた氣分で、時の流れ世の潮にさをさしたなら、そこに希望に輝く大御代が祝がれるであらう。

○　矢野錦浪

櫻から夜がはなれるうらゝかさ
外國へ威張れ／＼と櫻咲き



○ 三宅花圃

わか竹のすく〳〵とのぶる
ごとくにも一ふしたかく
よの中の人のかゞみとあふ
がるゝ花の大君はなともゆ
はなさく春にさあれましけむ

○ 長谷川零餘子

明天子あれし日櫻八重に咲く
百千鳥百花告げなく佳き日かな

○ 服部純雄

大宇宙の光榮は
全人類の誕生に發す、
全人類の幸福は
大日本國の誕生に發す
大日本國の精華は
聖天子の御誕生に發す
則ち想ふ、
聖天子の御誕生こそ
大宇宙の光榮ならずや
オ、美なる哉 天長之佳辰、
オ、讃へむ哉 萬々歳、

○ 棚橋絢子

御代しらす我大君のあれまし
めでたきけふにあふぞかしこき

山色新

雲晴てのぼる初日に山の端の
色新らしくみゆる朝かな

○ 老鼠堂機一

聲々に君が代うたへ百千鳥
櫻さく國に定まる佳節かな

○ 篠原春雨

嬉しさは天長節の國に生き
吉辰とは四月の二十九日なり

○ 嘉悦孝子

千代ませよ八千代ませよとうなゐまこ
うたとつれつゝいはふけふかな
天地と榮えますらむすめらぎの
あれませし日をいはへやいはへ

陪審法施行に際して

◇……國民の覺悟を望む……◇

大審院長
法學博士　牧野菊之助

陪審法とは何か

陪審法は本年十月より施行せられる豫定になつてゐるが、この法律が行はれることになると、これまでの刑事裁判上に一大革新を來たすことになるのである。

從來の裁判では、被告に犯罪事實が有るか無いか、證據が果して十分であるか否か、又は被告の行爲が刑罰法令に觸れるものであるか否かと云ふやうな事は、すべて本職の裁判官のみが判斷したのであるが、陪審法によると、國民がこの裁判の手續に加はることになつて、犯罪事實が有るか無いかと云ふやうな事は、一々陪審員即ち素人の下した判斷を基礎として、裁判官が犯罪の有無を定め、無罪とか有罪とかの裁判をすることになるのである。從つて從來とは全く面目を一新した裁判が現はれることになる。

然らば何故に素人を刑事裁判手續の上に加へることになつたかといふと、つまり國家組織の上には謂ゆる三權分立、即ち立法權、行政權及び司法權の三權が各分立してゐるのであるが、從來立法や行政には、既に國民が參加してゐて、立法府には代議士を送るとか或は自治制にも國民が加はつてゐると云ふやうな譯で、何れもその事に携つてゐるのに、獨り司法裁判にのみ國民が加はらないと云ふ事は、歐米先進國には見られない事柄であるし、我國も立憲政治が行はれて相當の年月を經た今日、立法、行政と同じく司法にも國民を參加せしめる事が至當であると云ふ理由に他ならないのである。

かやうに國民が裁判手續に加はつて、犯罪事實の有無を判斷することになれば、事實の認定の上にも新しみが加はると共に、國民の意思が加へられて裁判が下されるのであり、又被告人としても自分と同じ素人が自分の行爲についての罪

を判斷するのであるから、その裁判に對して安心して服することも出來るのである。從つて裁判の威信といふものも加はることになつて、誠に結構な制度であると云うて差支ないと思ふのである。

裁判知識の缺乏

この結構な制度が施行せられるとして、こゝに注意すべきは國民の覺悟である。一體、我國民は從來裁判といふものに對して餘りに無關心であつた。その結果、裁判といふものが如何にして行はれるものであるか、裁判所とは如何なる組織になつてゐるものであるか、又裁判には一審二審三審といふやう審級の制度が存在して居ると云ふ事さへも十分に辨へてゐないものが少くない。言はば裁判上の知識といふものが、國民の間に殆ど缺けてゐると見て差支ないのである。


大審院長親任式當日の牧野博士

　これは今日までの小學校の國定教科書の中にも、あまり裁判の事は書いてないのみでなく、司法權の獨立とか、裁判官の地位とか、或は檢事の職分とか云ふやうなことについては、教育上格別資料が與へられてゐないのであるから、已むを得ないとは云ひ乍ら、國民が裁判に冷淡であり、裁判官に信頼を與へず又裁判官に對し尊敬の念を有たないと云ふ事は、我々司直の府にある者にとつては常に遺憾とする所である。

　イギリスの如きは、國民が傳統的に裁判所を信頼し、裁判官に對して尊敬の念を拂ひ、裁判の威信を保つことに

留意してゐるから、從つて陪審制度もイギリスに於ては古くから行はれて、十分にその効果を舉げ來つてゐると云ふ事である。

我國とイギリスとは、國民性が相違してゐるとは云ふものの、陪審法が施行せらるゝ以上、國民としては十分なる覺悟を以て、これに當るやうに希望して已まない次第である。

一例を舉げて言ふならば――從來裁判所に於て事實を判斷するには、刑事にせよ民事にせよ、何れも皆證據によるもので、その證據には書いたものもあり、又他の物件もあるが、それと共に證人といふものを取調べて、これを事實判斷の資料に供するのが普通である。證人は言ふまでもなく、自分の實驗したことを其有りのまゝに答をすればよいのである。然るに今日までの實例によつてみると、單に證人に喚出されると云ふことさへも人が嫌ふ。喚出されて裁判所の法廷に立つた場合には、まづ虛僞は言はないといふ誓をしながら、知つてゐる事をも知らぬといひ、見た事をも見ないと云ひ、事實の眞相を申立てないものが少くない。

裁判官がいかに證人から事實の眞相を知らうとしても、肝腎の證人が眞實を言うてくれないためにどうしても眞相を發見することが出來ないやうな事があるのである。かくの如きは、畢竟裁判所を理解せず、又證言なるものが裁判の重要なる資料たることを自覺しない結果である。

我國民には、單に證人として裁判所に出るといふだけの事でさへ自分の名譽にでも關はる事の樣に思ひなし、たゞ何でも係り合ひさへなければよいと云つた風がある。これは全く間違つた考へで、證人として眞實を語る事は、裁判上極めて重要な事であるから、假令、私情の上では忍びない事であり、又親類縁者の利害に關する事であつても、決して虛僞を言はないといふことは他の一面に於て公に盡す所以である事を考へて、私をすて公に順ふやうにありたいものである。

陪審員の心得

まして陪審法が施行せられて、國民が陪審員として法廷に立つやうになると、陪審員は證人の如くたゞ自分の見聞した所を眞實に陳述すればそれでよいと云ふやうな譯には行かない。陪審員は法廷に現れた各般の證據に基いて、自己の意見を立つべきものであつてその責任は證人として證言を爲すに比べて一層重大であると謂はなければならない。

陪審員として裁判に加はると云ふことは、國民の義務であると同時に、又一つの權利である。この權利を適當に行ふことが、即ち國民の國家に盡す所以であるから、この點を十分に辨へて、陪審員たるの義務を適當に盡すべきである。

一體、陪審制度と云ふのに、陪審員として十二名の人が法廷に於ける事實の調べや證據の調べに立合ひ、其取調べの終つた後に檢事及び辯護人から事實上の辯論といふものがあり、然る後裁判長が其の事件についての一伍一什を陪審員に説き聽かせる事になつて居る。この裁判長の說明に基いて、陪審員が事實の判斷を下す事になるのであるが、それには被告人や證人、またはその他の證據の調べの結果に基いて、これを常識に照し、犯罪の有無を公平に且つ冷靜に判斷すべきである。

この場合、陪審員は法廷に現れた證據に基いてのみ判斷すべきであつて、法廷外に於て見たり聞いたりした事柄、或は又自己の感情などに囚はれて、不注意にもその判斷を過るやうなことがあつてはならないのである。即ち陪審員は、公平無私、以て適正なる判斷を下すことに心掛くべきである。

陪審員の判斷が相當であれば裁判官はこれに基いて裁判をすることになるのであつて、常にこの陪審員の判斷といふものが、土臺となつて、裁判が下されるのである。而してその裁判の場合には、裁判官は陪審員の意見を聽いて裁判をしたといふ事を言渡すことになつて居るのである。

國民の不面目

我國の陪審法の定める所によれば、もし陪審員の判斷が正當でないと裁判官が認めた時には、更に他の陪審員の評議に附することが出來ることになつて居る。即ち別の陪審員をよび出して、もう一度陪審裁判をやり直すことが出來ることになつてゐるのである。

かやうな事は、さう度々あるべき筈のものではあるまいと思ふが、もしかやうな事になるとなれば、これは畢竟その陪審員の判斷が誤つたといふことになるので、これは取りも直さず、その陪審員は、陪審員として不適當であるといふことになる。これ延いては國民そのものが陪審裁判に不適當であると云ふことを認めしむることにもなるので、その事件に關はつた陪審員その人の不名譽なるは言ふまでもなく、かゝる事を繰返されるに於ては、結局陪審制度を採用した趣旨に背くわけで、即ち我國民は陪審制度に落第であると云ふことを立派に證據立てることになるのである。

これまで、立法、行政の方面には國民が參加して、十分其功績をあげて來たに拘らず、司法に參加するといふ新しい試みに於て、國民が失敗をするといふ事は、日本國民の面目を害ふ事になるのであるから、國民は自らその面に泥を塗るが如き不覺を敢てせざる樣、今日よりして十分の覺悟をたすべきである。而してこの新しい制度に對して、國民が立派に及第する樣切に望んで已まぬ次第である。

演說奇聞集

○星亨の早速演說

一代の怪傑、星亨は、その選擧演說に於て、早くも普選に於ける言論戰のやうな勢を示した。栃木縣で、横堀三子の地盤に飛び込んで、猛烈な競爭を開始したが、横堀の方では、ナンノとばかり、見くびつてゐた。然るに星は自身、盛んに有權者を訪問して、一々話をしてあるき、偶大きな邸宅にでもブツつかると、矢庭に、座敷に飛び上り、聽衆を土間に集めて、早速、演說を始める。幾箇所でも、續けてやるので、瞬く間に、星の人氣は隆々として加はつて來て、見事に月桂冠を得るに至つたが、その奮闘ぶりの目覺ましさは、野を行く虎の如くであつたといふ。



○今樣デモスセニス

民政黨の領袖、前法相の江木翼氏は、錦帶橋で名高い岩國町から少し上流の、御庄村の舊家の次男に生れたのであるが、高等學校に在學中、休暇に歸省すると、タッタ一人で、明媚、畫くが如くなる岩國川の川原に行つて、胸を反らし、手を擧げたりして、政談演說の稽古をしてゐたので、川向を通る人が、珍らしがつて、立ち留まつたものである。

希臘の雄聖デモスセニスは、海岸に行つて、ひとりで演說を稽古したのであつた。



○花柳演說會

明治十八年頃、神田明神の境内開花樓に於て、花柳演說會を開き、出席辯士は、轉々道人、鶯亭主人、柳陰女史等の名で、餘興としては、三遊亭圓遊が雄辯を揮ひ、或人の寄附にて、吉原遊廓の登樓切符を抽籤にて進呈するといふ途方もない計畫が、都下の新聞に廣告されたが、花柳演說會は、風俗を紊す恐ありとして、禁止されてしまつた。



○吾輩は悲觀せず

田中首相の爲に、在京同縣人が、新任の祝賀會を開いたとき、非常の盛會を極めたが、席上、首相の演說に今や、財界は不景氣を極め財政は困難なれども、吾輩は悲觀せず、政治上には……吾輩は悲觀せず。外交上には……吾輩は悲觀せずといふ調子に、各方面の大勢を述べ立て、一々、吾輩は悲觀せずの一語を以て結び、樂觀首相の眞面目を發揮し、大喝采を博した。



○卓を下から打つ

法學士安藤勝明氏は、政界の志士にして、精悍の人物であるが、非常に、丈が低い。

『諸君ッ』

と言つて、見得を切るとき、卓を下から打つといはれてゐる。



最も強き人

社會評論家 高島米峰

◇強き人とは？

如何なる人が最も強い人と云ひ得らるゝか？ 肉體的にこれを云ふならば、相撲取の横綱、大關、或は柔道家の七段、八段と云はれるやうな人が、それに當るかも知れぬが、而しそれは其の人の生きてゐる間のことであつて、死後にまで其の人の力が及ぶものではないから、此の意味の強い人に對して吾々は大した期待を持つわけには行かない。

若し此處に精神的に偉大な力を持つ人があるとするならば、その人の力は其の人の死んだ後までも何等かの形となり、或は何等かの仕事となつて永久に相續せられるのであるから、肉體的に強い人と比べたならば、これこそ眞に強い人と云ふ事が出來るわけである。

◇求めることなき人

精神的に強いと云ふのにも種々あつて、一概に談じ去るわけにはいかぬが、要するに、求めることのない人が一番強い人と考へることが出來る。求めることのない人と云ふのにも二様の意味がある。一は求めなくてもよいから求めないといふ人、他は求めつくして仕舞つて求めるものがないから求めないと云ふ人だ。

例へば、富貴も淫すること能はず、威武も屈すること能はず、毅然として淸貧に甘んじ、權勢の外に超然たること孔子の弟子顏回の如く、所謂一簞の食、一瓢の飮、陋巷にあつて其の樂を改めない人がありとしたならば、其の人こそ何物をも求める必要がなくて求めないと云ふ人であつて、斯かる人に對しては富も名譽も權力も何の力も加へることが出來ない。の中に富も權力も名譽も何の作用をなし得ないと云ふ人程強い人が又とあり得ようか！

富を欲するものは富の前に、名を求むるものは名譽の前に、或は腰を屈し或は頭を下げねばならない。權勢を求めんとせば、自分の志操をも曲げねばならぬ。求める所のある人は、求むるもの〻前には最も弱き存在である。

◇求めつくした人

佛教で通俗的に云ふ羅漢様（梵語の阿羅漢）のやうな人が、求めつくして求める必要のなくなつた人のよい例である。阿羅漢を漢語に譯すると無學といふのであるが、此處で云ふ無學と云ふのは、物の道理の分らぬ、學問がないと云ふ謂ではなくて、學することなし、即ち、あらゆる修業をしつくして此の上の修業、不必要の境の人を云ふのである。云ひ換へれば阿羅漢は、求めつくして求めることのなくなつた境遇になつた人で、これ亦力強い人と云はなければならぬ。

いづれにせよ、何ものをも求めない人こそ眞に力強き人であるとの結論は眞理である。

今の實社會に處して正論讜議、侃々諤々、誰憚かる者もないと云ふやうな極めて自由な思想的生活を營んでゐる人、何人の前をも憚らず自己の所信を遠慮會釋なく發表し得る人、さうした人は、何物かを求めようとする人の中に決して見出す事が出來ない。



高島米峰氏

情實纏綿といふやうな語は、求めることのある人々の間に於てのみ行はれることであつて、求めることのない自由の人の間には、全く不必要のことである。

公明正大と云ふことも求めることのない人の世界にだけ行はれることであつて、苟も何者かを求めようとする人の間には、成り立ち難いことである。

爰まで述べて來て振り返つて今日の實社會の樣子を見ると、吾々は到底顔回のやうなことを眞似ると云ふことは出來ない。

されば云つて、いきなり羅漢のやうに無學の境遇——求めつくした境遇に達することも六づかしい。一體吾々はどうして力強いものになれるだらうか、誰しも思ひまどふ所のことである。

◇一度は求めよ

現在の社會に於ては吾々は一度はどうしても求める境遇にならねばならない。求めて而して與へられ。それによつて自己をより強く鍛へ上げて行くのでなければならない。即ち求めて遂に求める必要のない境地に到達し仍て以て眞に強い人になつて

行かねばならぬのである。
けれども更に考へ直して見ると、此の生活難の現代に處して、凡ての人が自分の求める所のものを果して悉く求め得らるゝかどうか。現に物質生活の方面だけを考へて見ても、人口の増加と共に年々に失業者の數を増す。求めて得られない人の數は殖えこそすれ、減るといふことは恐らくあるまい。かゝる時代に生れ合はせた吾々の惱みは如何にして解決して行つたものであらうか。

◇精神生活の充實

それには精神生活の内容を充實して行くより外にない。即ち精神の力によつて物質生活の窮乏を悲しまぬといふだけの修養を必要とするといふことになる。顔回の如きは其の窮乏を樂んだ。そこまで行くことが出來れば洵に理想的であるが、而しこれは仲々六づかしい。そこで吾々は、少くとも物質的の窮乏を悲まぬといふ消極的の立場になり得るだけの所までは是非行つて見たい。だが、さうした精神生活の内容を充實させるためには一體どう云ふ修養が必要かと云ふに、それにはどうしても宗教の力に生きなければならぬと私は信じてゐる。



斯る人に對してはどんな力も加へることは出來ない。

◇樂しむ者に如かず

世の中に處して行くには學問も必要だ。道徳も必要だ。けれども、單に學問や道徳の力だけでは到底窮乏に滿足し、不安定の狀態に安住することは不可能である。
孔子の言に『之を知るものは之を好むものに如かず。之を好むものは之を樂しむものに如かず』と云ふことがあるが、之を知ると云ふのは即ち學問をして物の道理を知ると云ふのである。之を好むと云ふのは學問によつて知り得たことを道徳の實行に移すといふことである。
けれどもこれでは未だ樂しむといふ所までは行かない。之を樂しむとは、即ち、宗教の境地であつて、學問でもない、道徳でもない。否、學問もよい、道徳も勿論必要である。而しながら私は其等の基礎となるものはどうしても宗教でなければならぬといふのである。

◇宗教の境地

宗教の境地に於ては、貧に處しては貧を樂しみ、富に處しては富を樂しむことが出來る。人に知られなければ知られぬこと

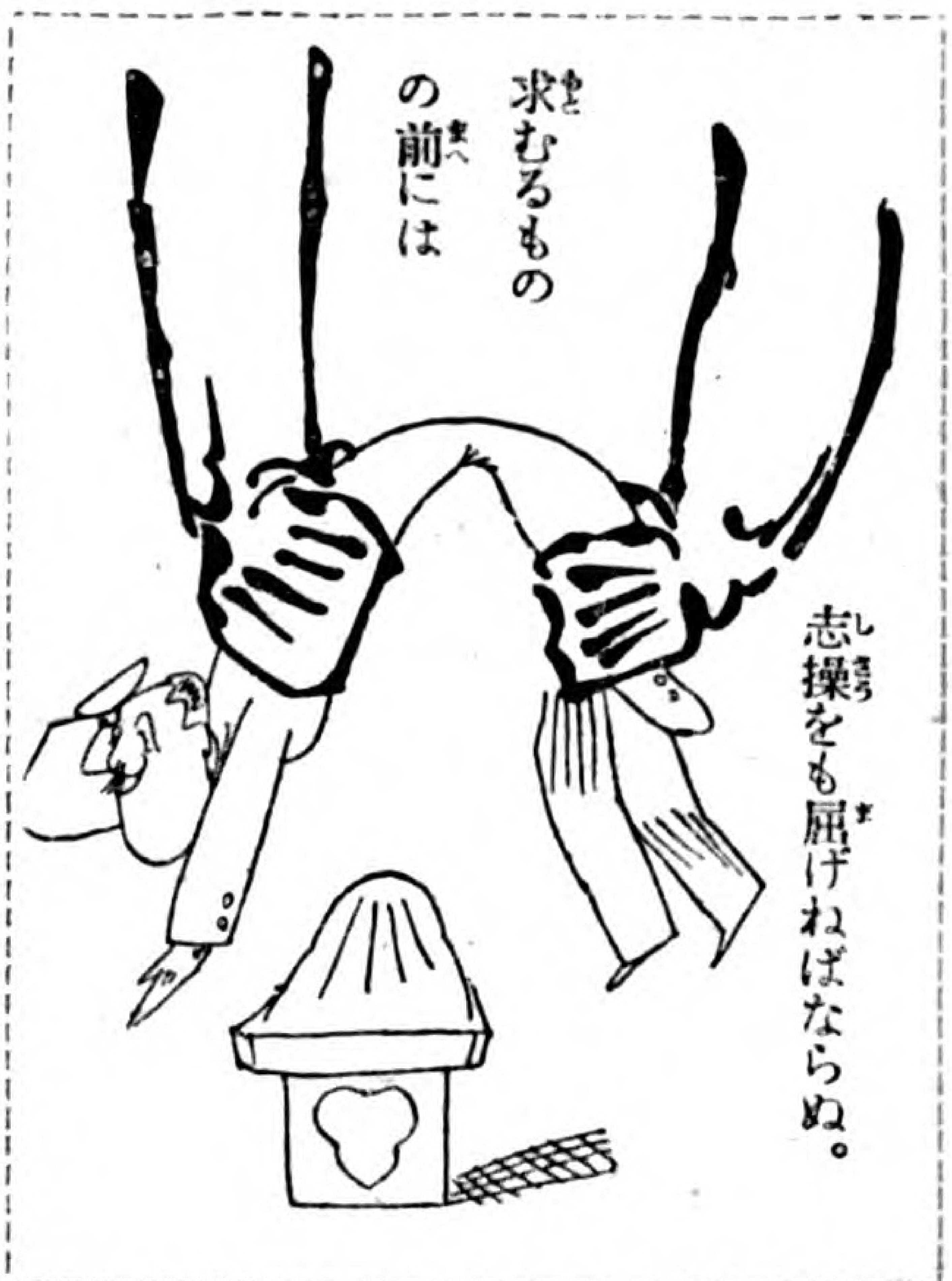
を樂しみ、知られゝば、知られたことを樂しむ。生きなければならぬ時は、石にかじりついても生きる。死なゝければならぬ時は從容自若として死に就く。實にかゝる偉大の力を與へてくれるものは宗教の力でなくて何であらう？そこ迄來れば外に何物も要らない。かゝる境遇になると外に求める必要は全くなくなつてしまつて、其の人たるや最も强き人と云ふことが出來るのである。卽ちかゝる人は精神生活の充實によつて、物質生活の窮乏に對する不平も不滿も悉く征服して行くことが出來た人と云ふことが出來る。

◇流罪も亦朝恩なり

念佛を弘めたといふことが他の宗旨の僧たちの感情を害して遂に法然上人は朝廷の命によつて土佐の國へ流罪と決まつた。

法然上人の弟子達は或は四條河原で斬られたものもあつた。或は親鸞上人のやうに越後に流されたものもあつた。當時、交通不便な、今から七百年も前の日本、八十に近い老僧が土佐の國のやうな邊鄙な所へ流人となつて行くと云ふことは道中の程も覺束ない程で、多くの弟子達は行先を案じて何とかして都に留まつて貰ひたいといろ〳〵考へた末、罪となつたのは、念佛を弘めたことであるから、表面だけ將來念佛を弘めないといふことで御赦免を願はう。今、師の坊に御別れしたら、何時御目にかゝれるか分らぬと多くの弟子達が、袖に縋つて法然上人に其の由を賴んだところ、法然上人は毅然としてこれを却けて曰はれるのには、

『念佛を弘めることは、都では永くやつたことだから可なり徹底してゐる。が、私の今度行く土佐のやうな邊鄙の所はまだ〳〵不徹底であらう。それを考へれば今自分が流罪となつて遠い所へ行くと云ふことは、彼處にゐる人々を濟度するに絕好の機會を與へられたものと思ふ。之實に朝恩と云ふべし』と云つて、喜んで土佐の國に赴いた。



◇流刑亦師敎の恩致なり

又越後に流された親鸞上人は、『大師上人若し流刑に處せられ給はずんば、我れ又配所に赴かんや、我若し配所に赴かずんば何を以てか邊鄙の群類を化せん。これ尙師敎の恩致なり。』と云つて之亦喜んで越後に赴かれた。今も昔も變りなく越路の旅は雪が深い。或る時は行き暮れて宿はなく、とある民家を訪ねて一夜の宿を求めたけれども、

慳貪な社人は其の乞を容れて呉れない。

降り積む雪は足を没して一歩も進むことは出來なくなつた。弟子と共に相抱いて雪中に一夜を明かしたと云ふやうなことも傳へられてゐる。而も親鸞上人は天を怨まず、人を呪はず、これも亦佛の試練なりと考へて布教傳道の務を怠らなかつたのである。法然と云ひ親鸞と云ひ心境は決して學問のみによつて得られるものでなく、道徳によつてのみ得らるゝものではない。偏に宗教信仰の力によつてのみ得らるゝ尊さであると考へられる。

此等の人々はかゝる難行苦行によつて自分自らの爲には、何物をも求めて居ない。唯求むるものありとせばそは人を救ふと云ふ事のみであつて、衆生を濟度する事を樂しみとして樂しむより外に何物をも求めては居ない。斯の如き人に對しては刑罰と云ふものも殆ど何等の意味をなさぬ程力弱いものとなつて仕舞ふ。

◇人生の理想

顧つて現代人の生活を見る。利己的個人主義は其の極にまで徹して、淺薄なる自分自らの物慾の爲に、求めて求めて飽くことを知らない。爲に此處彼處に奪合ひが初まり、鬪爭は絶えず、果ては『鬪ひ、取る、』と云ふことが合理的であるとさへ考へらるゝやうになつて來て、終には、『暴力これ正義』と云ふ恐ろしい結論をさへ生み兼まじき狀態になつて居る。

吾々は物でも在り得るが、靈的存在でもある。物のかたまりとしての生存のみとしたたらば、吾々の存在は、犬、猫の存在とどれだけの差異があらうか？

靈的存在として、精神生活の内容の充實を爲し得る所に人間としての存在の意義があるのだ。そこは即ち平和の世界であり互助の世界であり、協調の世界であり、樂しみの世界でなければならぬ。

『吾々の眼は高く天を望み得るが、吾々の足は地を離れることは出來ない。』

と云ふ觀方は、とかく人間を物に執着せしむる傾があるが、

『吾々の足は地を離れ得ないけれども、吾々の眼は高く天を眺めることが出來る』

と云ふ考へ方は、現實の悲哀から理想の樂地に導いてくれるものであるまいか。

求めて飽くことのない我利々々亡者の生活から、求めずして足るを知ると云ふ境界に伸展して行くと云ふことが、人間の目的であり人生の理想でなくてはならぬ。

即ち求める必要のない生き方と、求めつくして仕舞つた生き方と、共にそれは最も力強い生き方であつて、力強く生きて行くと云ふことが又人生の目的であり、理想でなければならない。吾々はどの方面から考へても、どの道から歩み出すとしても、畢竟、宗教の懐に抱かれて行くことが最も力強いと云ふことを自覺して現實の生活を、樂しく生活して行くことを心掛けて行きたいものである。



人生漫談

岡本一平

外交術讀本（一）

前書き

人間處世の上に外交術といふものがある。いやなものだ。いやなものだが生存競爭の世の中、無關心でも居られぬ。然し若したとへそれをやるにしても結局努力と誠意の後援が無ければ、單なる猿芝居幇間の空世辭になつて却つて信用を傷ける丈だ。この處に特に意をつけて貰つて扨どんな外交術が世の中に行はれて居るか調べてみよう。

一　座布團の遠慮



相手の家へ行き座布團を出されても敷かないで居る。主人が出て來て「それでは困ります、どうかお宛てなすつて——」と再三いはれて始めて『それでは御免蒙ります』と敷く事にはするが決して座布團の上へすつかりは載らない。ちよつと端だけに膝をかける。

二　弱點を煽てる



相手のもつとも弱點とするところ例へば自惚れの強い人間には『どうも大變ですであなたの近頃のご名聲は』などと煽て上げる。氣取る癖のある人間なら『あなたが引込んでお出でになるのでどの相談も一向纏まりません』などと持ちかける。

三　見送りの遠慮



客對談終つて歸らうとする時主人玄關まで送らうとする。その時客は『いやもう玄關までお廊下の筋は判つて居ります。それでは恐れ入ります。どうぞその儘に。平に平に——』と車の後押しをするやうな手付をする。



四　道樂の講釋を聽く

相手の道樂をこつちが面白くなくつても面白さうにその話を引出し聽くのなり。『へー全く素人の目にもよく出來てる事が判りますな これは御洋行中にお求めになつたのですか。ナール程、さうでございませう。さうでなけりや、中々日本の洋畫ぢやかうは參りません。どうです。肉體がまるで本ものゝやうだ』

4


五 國の土産を届ける

國へ歸つた度びに何かしら國産をもたらして目宛ての家へ届けるなり。『一寸國へ戻つて來ましたんですが丁度來る時裏の川でこの鯉が漁れたものですから東京へつくなりお届けに參りました。まだ生て居ります筈です』といふ調子で再々根氣よく何かしら贈るなり。臺所向より先づ愛顧を得べし。



六 獻策

相手の人の考へが滯つて居る時なぞにチヨイチヨイ氣の利いた智惠を授けるなり。『こいつうい奴』とは思はれるなり。但いかによい智惠を獻策しても決して手柄顏すべからず。また押付けがましく獻策すべからず。『御參考までに』の程度にとゞめて置くなり。

6


七 手紙をまめに出す

季節の間候、病氣見舞、不沙汰の詫は勿論なるがその他しじゆう心にかけ一寸旅に出ても繪葉書に一筆書いて出すやうにするなり。『只今芳野は花の眞盛りです。お目にかけたい程見事です』などで、淡白なお世辭の文句を添へるがよろし。

八 眞狀をさらけ出す

7


『先生、僕の財産はこの通りですと財布を逆にして振つて見せ十錢銀貨一つ轉がし出す。そして磊落に笑つて見せる。總て先輩に對してこの眞狀をさらけ出す外交術はその先輩が親分肌の豪傑なら大に受けるけれど相手によつては氣狂ひ染みた不良氣質と見らるゝ場合多ければ、よく〳〵相手を見究めてからやる事なり。

8


（つゞく）



時事偶感

法學博士 農學博士 新渡戸稲造

數十年間我が國民間に宿題となつて居つた普通選擧も、今回いよ〳〵實施さるるに至つた。日本國に取つては歴史上特筆大書すべき事柄であつて、永久に我が歴史に遺る大事件である。

併し、この權利を初めて實行した人々は、どれほどの自覺を以てこれを用ゐたか。上ッ調子で政治に與かつた感がなかつたらうか。甚だしきは自分の良心まで黄白のために枉げて一票を投じた者はなかつたらうか。

◇

彼是れ半世紀前の話であるが、佛蘭西の或る青年が初めて投票場に臨んだ時、ふと一の疑問が彼の頭に浮んだ。それは即ち、我は何が故に投票するのか、この疑問が浮ぶや否や、連續的に種々樣々の疑問が起つて來た。即ち我が投票する目的は何であるか、一體斯の如き政治のやり方は如何なる經路を經て來たか、何時頃から斯の如き事が始まつたか、選擧によつて果して國民の希望が分るものであらうか、選擧される人が果して國民の思想を代表するものであるか、——連發的に疑問が起つたので、これ等の疑問が解決するまでは一票も投じないとまで考へて、佛蘭西の政治的沿革史を調べるに至つた。この青年は今倘哲學者文豪として有名なテン氏であつた。

偶話二題

醒客生

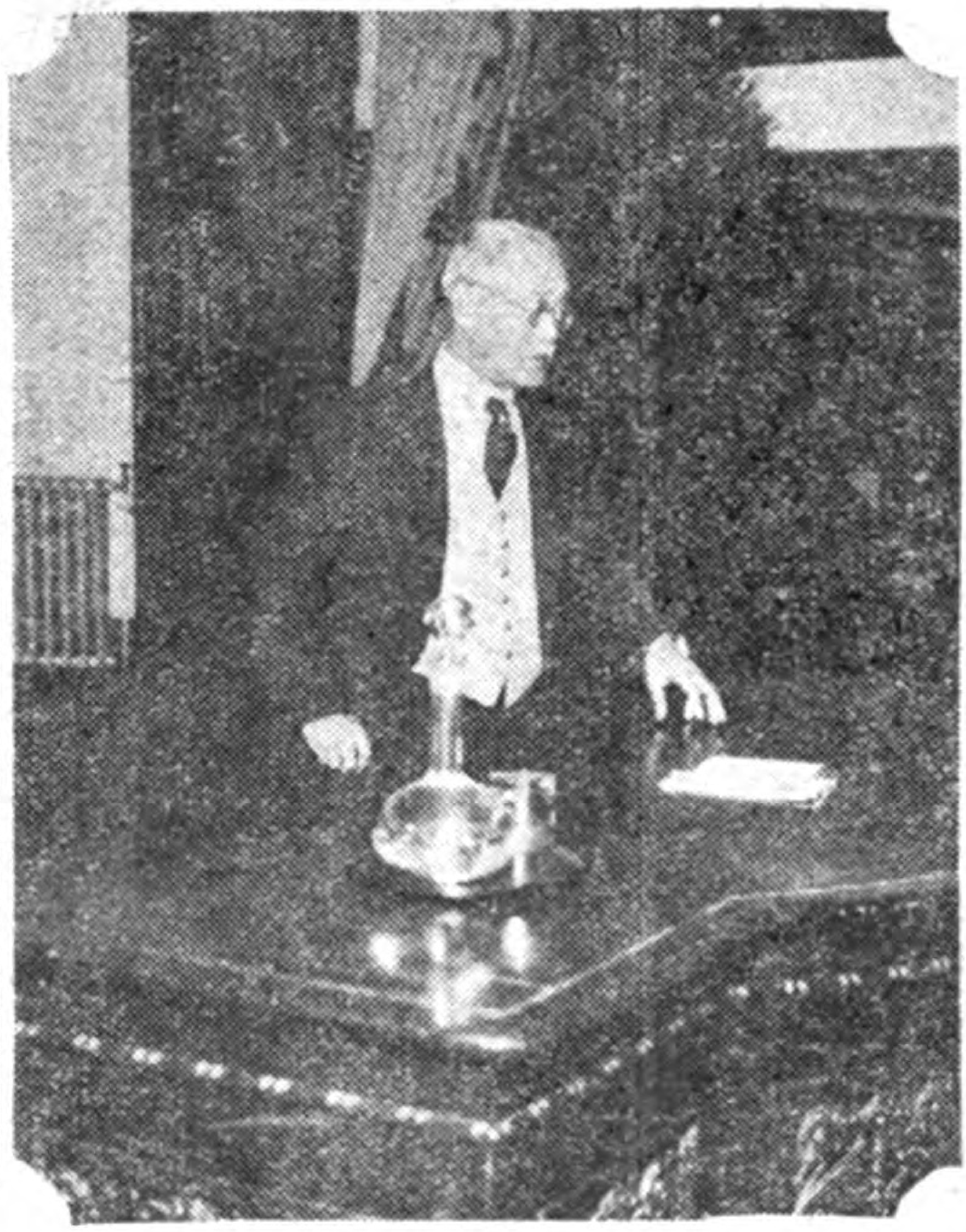
炒豆と小羊

炒豆の好きな主人があつた。或る時、下女が其の炒豆を炒つて棚へあげとくと、何時の間にか半分に減つてゐる。『チェッ、小羊奴の所業だな』だが、食べた物は詮方がない。其の儘にして持つて行つて、事狀を話すと、主人は大怒りで『いや、お前が食べたに相違ない』と言つて、散散に呶鳴られた。下女は身に覺えない事で叱られたのだから、口惜しくて詮方ない。プン〳〵しながら小羊の小屋へやつて行くと、奴さん、口の周りに一杯、炒豆の屑をつけて、好い心持さうに眠つてゐ



◇

テンの如き眞面目な投票者は、恐らく西洋何處の國へ行つても、その數が多くはない。その證據には、何れの國人でも、選擧の話になると、おれの國の政治は腐敗して居る、と言はない者はない。又さもありさうな事であつて、そも〳〵頭數によつて公事を決するといふ政治のやり方即ち立憲政治にも其の國民の自覺如何に依つては大なる危險を含むもので、嘗てカーライルがいうた言に、エスカリオテのユダとエス・キリストと、同等に且つ同様に見做すごとき政治の仕組は、その根本に於て誤りがある、と極言したが、個人の優劣、人格的差違をも顧みないで、皆同じもの丶如く見るのは、決してその當を得たものでないことは、今更喋々を要せないことである。



昨年五月東京青山會館の後藤子爵『政治の倫理化運動』一週年記念講演會演壇に於ける新渡戸博士

◇

我輩も選擧の實況を見て、所謂デモクラシーなるものは慊らず思つて居る。十指の指すところ、十目の見ると

た。下女はカツとして、持つてゐた火吹竹を抛りつけた。と、うまくそれが中つたものだから、小羊は喫驚仰天、悲鳴を擧げながら逃げ出した。

その晩の事。下女が竈の下の火を取つて、數歩出だした處へ、不意に躍り出て太腿へ噛りついた者がある。小羊だ。先刻の復讐である。下女は膽を潰して、手にしてた火桶も何も押放出したまゝ、逃げ出して行つたが、それよりも愕いたのは小羊だ。下女の落した火を脊中で受け止めたものだから、その毛へジリジリと燃えついたのである。

間もなく「火事だア！」と云ふ騒ぎ。苦し紛れに飛んで歩いた小羊の背中の火が、いつしか家へ燃えついたのだ。さア大變、折柄の烈風に煽られて、火は見る〳〵隣りから隣りへ轉つて行つて、瞬く間に其の村全體の家も、人も、家畜も皆焼き盡し、その火は更に山に飛火して、深い、千年不鉞と言はれた大森林の奥までも悉く灰にした上、そこに棲んでゐた鳥も獸も、一舐にされて了つた。

佛陀はこの悲慘な有様を見て、

「下女と小羊の爭ひ、主人の一寸した怒りから、とんでもない大事を惹き起して了つた。それにしても怖るべきは、瞋恚の害である」

ころといふが、これは利害關係なく、公平な立場に居る十人をいふことで、御馳走になつた十人をいふのではない、黨派に加入した十人をいふのではない。昔の聖人が人類ことごとく平等の如く教へたのは、抽象的に人間を考へたからの事であつて、實際に、具體的に、市井の人に接觸して言うたこととは思はれない、現今世界到るところに唱導されるデモクラシーは、その實際に於て失敗たることは、近頃、識者の認むることとなつた。彼のウェルス氏が、先頃佛蘭西のソルボン大學に臨んで試みた演説の中にも『昨世紀はデモクラシーの全盛時代であつて、今世紀は稍々その失敗の跡を示し、今後はこれを修正するの時となるであらう』と言うたが、彼の言は、時勢をよく穿つたものと思ふ。

◇

我國のやうに、何事によらず西洋の所謂先進國を倣つて居る國は、先進國が將に捨てんとする事までこれを拾つて我物顔にする滑稽を演じて居る。陪審制度のごとき、その本家本元の英吉利でさへも、その不完全なることを認めて居る際、充分なる國民的訓練もほどこさずして、直ちにこの制度を我が日本にとり入れるが如きは早計と言はざるを得ない。

議會制度に就いても稍々同樣である。彼の英國では議會制度なるものに根本的な改革を加へねばならぬといふのが、識者間に專ら行はれる議論である。併しこの問題は、我輩のいま論ずる目的でもないから姑く措き、兎に角一たび設けた制度であれば、今更輕々しく廢することも出來ず、又廢したとて今日より遙に優れた制度が案出

と言はれて、大層お嘆きになられたと云ふことである。

陷穽

酒に目のない獵々連、例の酒場近くやつて來ると、皆、鼻をクン／＼鳴らしながら、『好い匂ひがする。又飲みたくなつたな』だが、それは酒場の人達が獵々を生捕にするために備へとく酒瓶で、下には彼等が醉つて躍ると、すぐ落ちこむ様な深い陷穽が、幾個も口を開いて待つてる仕掛だつたのである。それには彼等も度々、苦い經驗があつたので、お互ひに『もう飲むまいぞ』と、堅い誓約まで取交してあつたのである。

が、意志薄弱連、『視るだけなら大丈夫』と云ふので、段々傍へ寄つて行く。處が、芳烈な黃金水を眼の邊りにしては、喉佛の方で承知しない。『折角こゝ迄來たのだから、ほんの一口だけ』と、誰かゞ提議すると『宜からう』と許り、我先に一口づつ飲む。飲んで見ては耐へられない。『序だから最う一杯』で、又一口。『芽出度く三獻にしようではないか』で、到頭、三杯重ねて了つた。

さア愈よ去り難くなり、又、誰か何とか言つて出るだらう…と思つて、舌舐ずりをし

されるの見込もない以上は、先づこれはこれとして置き、この制度の運轉に與かる人人の心懸を改めたい、陪審制度なり議會制度なりが弊害が多いといふのは、制度そのもの丶不完全と云はんよりは、これに當る人々が未熟であるからのことである。人さへ良ければ、制度は第二次第三次的のものである。若し人にして完全なるものならば、殆ど制度は絶對無用となるであらう、老子の所謂『無爲にして化する』といふ時代は、人類の完成した時をいふものと思はれる。

◇

我輩は取敢ずこ丶に述べたいことは、選擧を初めその他デモクラシーの制度は、兎角權利を高唱して義務を第二次に置くのがそも〳〵の病源と思ふ。我輩の見る所によれば、日本人は歐羅巴の南部、卽ちラテン民族に似て居つて、隨つて北方民族にのみ稍ゝその顏を致した代議制度は、南方に於ては却つてその害多くしてその利が少かつた。さればこそ今日、伊太利を初め西班牙、その他の國に於て、政權が獨裁執政者の手に歸するのは當然な事である。伊太利に民主論を專ら吹聽して共和政治の建設まで唱へたマジニーが、彼の同胞の弱點をよく心得て居つたから、口を開けば、第一に義務を說き、權利を論ずることを第二としたのは、流石マジニーの卓見を現はすものである。彼、曰く、第一義務、義務を盡せばこそ權利が自ら起る——我輩はわが同胞の靑年に向つて次の一言を呈したい。

『汝の權利を大ならしめんとせば、先づ以て汝の目前にある家庭及び社會的の義務を竭せ』と。

てゐると、果して又一疋、妙案を提げて立つた。

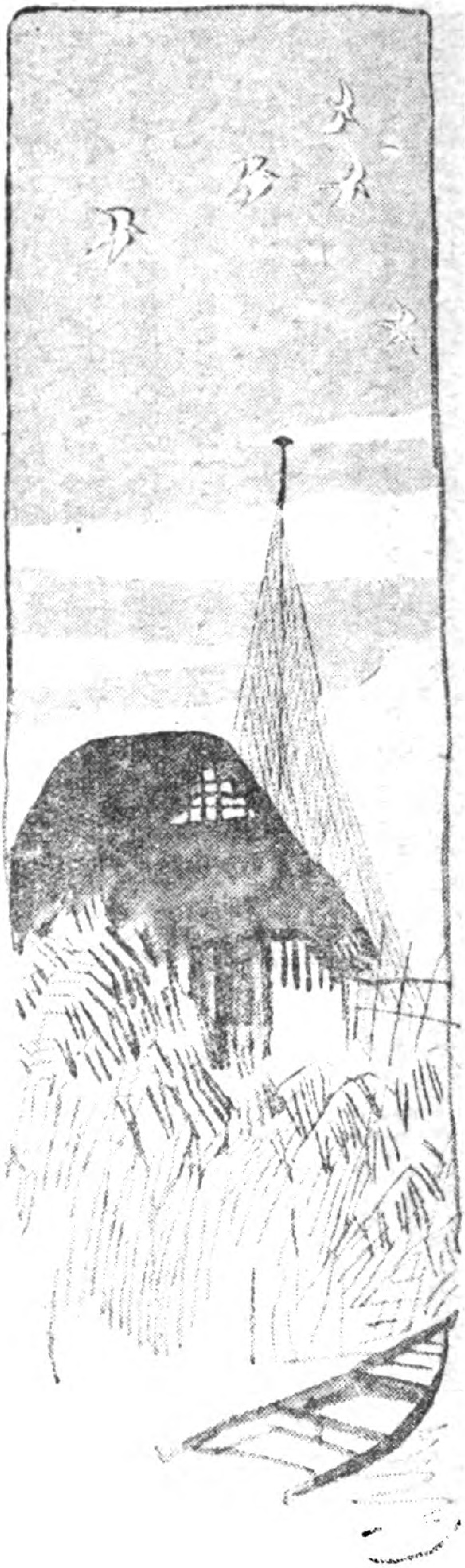
『おい諸君、いくら飮んで醉つても我々は離りさへしなければ心配ない。寧そ飮むからには、鱈腹飮まうではないか！』

と、その說至極贊成！とばかり、いや吞むわ吞むわ。見る間に幾つか並んでゐた酒瓶を、皆からにして了つた。さア酩酊蹣跚、腹、上々の大機嫌である。もう背約の事も身の危險もあつたものかは、誰かが一疋、先を切つて踊り出すと、それにつれて皆、すッとこすッとこ踊り出してしまつた。



そして、ヒヨロ〳〵足踏外して、コロ〳〵ドスン〳〵と墜ちこんだ處を、岩陰の彼方ではお悧口な人間樣が、待つてましたと許り、走り寄つて來て、一網打盡…。

——人も最初の踏み出しが何より肝腎。



蜂須賀小六

[illegible]作

小山榮達 畫

太平の世には太平の氣風があり戰國には戰國の武者氣質といふものがあり、これを今日の言葉でいへば、いはゆる時代の世相で、人も時に作られ時も人に作られる、

新屋村の小町塚に因みて、小町娘と噂に高い川狩久兵衛の娘お花を城持の勢ひに押伏せ地頭の權威で慰み物にする事を、年貢米に等しく思うて來た清洲の武士三人、おもはぬ不意に長江半之丞のため荒膽を挫かれ、一旦その場を遁げ出したが、おめおめ手を空うして城へ歸れず彼奴あのまゝ生けて置けぬといふのが戰國の武者氣質で、さのみ自己の生命を勘定に入れないから、どうしても弱いものは強いものに殺されるまで行く、

加之も尾張一國の守り本尊といはれる蜂須賀村の小六殿で脇立の七人衆と鳴り響いた其一人の長江半之丞景次と名乘れば、いかな我武者も顔色を失うて手は出さないが、編笠に面も見ず名も聞かぬ三人、その歸途を夕暮の雜木林に待受けて、油斷の隙間を斫り込まうとする、

長江は久兵衛に優しい情の言葉を殘して、東口より法性寺への近道を急ぎもせず、ぶら〳〵と林の中を歩いて來たが、夕暮の空に木下闇の夏の茂みと違ひ、秋の木葉は落ちて梢も淋しく幹と幹との間は朧月夜のやうで、ちらと目に入りしは三人の奴が横に縫うて走りし姿、

小六殿の中でも滿身これ膽で太刀打の随一といはれた長江半之丞、まだ三疋の鼠め、ちよろ〳〵舞ひ居るわいといふぐらゐの呵し味で、わざと知らぬ顔に細道を歩みながら、秋風に殘りで葉も振はれぬ椎の木の下で思はず切株に躓き、足拍子を失うて倒れたと見るや否、その椎の大木に隠れて居た三人、天の與へと驀地の一時に斬込だのは、わざ〳〵自己の生命を與へに來たので、倒れた長江は寢ながらの早業、平生これを半之丞の誘ひ討と稱して一味の間にも名高い藝といはれて居る、

電光石火の勢ひで小手先の鋭い不意討の太刀風にも、ひらりと燕の如く身を翻して空を辷らす事に自然の妙を得た男が面白半分に寢た業、まして一旦その荒膽を拉がれた奴の白刄が五體に觸る筈なく、おまけに林の中の幹と幹との間で、立て働く方の足場が猶更に惡い、

さッと閃いて斬り下した三本の刄影よりも早く、一人は立ちながらの足に足首を掛けられて仰向きに倒れ、それと共に一人は下からの拔き合せに刀を跳ね返され、あッといふ間に身を外されて一人は眞ッ向の面顔、腦天より西瓜を割ッたやうに眞つ中央まで遣られたのは、以上いづれも瞬をする一刹那の僅さで、目にも止まらぬとは此事、もし小六殿の一味これを見物すれば、かはいさうに名乘ッてやれば掛るまいと、いはれるほどに長江半之丞は太刀打の名人と唄はれて居る、

足首を足に掬はれて倒れた奴は其まゝ逃げ出したが、これを追はない、刀を跳ね返された奴は狼狽て嘘偽りのない全くの切株に躓き、よろ〳〵としたところを西瓜割の太刀ついでに持ッて來た肩口を幸ひの袈裟斬、

西瓜は其まゝの寂滅、袈裟掛けに遣られた奴は息がある、僅かに立寄りて、

『所詮、助からぬぞ、苦しくば止めを刺してくれる、冥土の語り草に名を聞て行け、小六殿の長江半之丞ぢや』

おもはず死際の目を細て、ぴく〳〵と動き出したのは、耳に聞えて驚いたらしく、咽喉の前に最後の一刺を與へ、懷紙に幾度も血糊を拭ひ、鯉口の音高く鞘に納めて、後も振返らず、また元の同じ足取で、ぶら〳〵と立去る大膽さ不敵さ、その悠悠たる後姿を見るものゝないのは、いかにも惜しい、

法性寺の奥深く藥師如來の本堂と廻廊續きの一室で、今年七十の眉まで白い住職の老僧と、今年二十六の武者骨に凛々しい長江半之丞と、互ひに心易う打解けて燈火の下に對座せるところを畫に描けば、塵の世を隔てた老若二人の面白い圖になるが、そこにまた久兵衞の娘お花、その名よりも美はしく生れながら我身を恥ぢて片隅に縮まりし風情、これは名畫も及ばぬ生きた乙女の色香で、あはれな襤褸着物に包まれて居るだけ猶更ますます筆に寫せない、

長江の顏には今こゝへ來る雜木林の中で痩蛙一匹を足の爪頭に追ひ拂うたほどの氣振もない、ゆッたりとした靜かな言葉で、



『今いふ通りの事、この爺の目からみても、では聊か氣に掛る、ちと半之丞の業が盗り過ぎましてな、はゝゝわけて淸洲は織田の一族中にも見放された彦五郎信友、相傳の斯波武衞家を奪うて立つほどの奴、理も非もない日に川狩風情の老爺ただ一人、まして娘は淫慾の覗はれ物』

そろりと横目に見られた小町娘、見る影もない我姿に堪へぬらしく、おもはず居縮みながら差俯いて居る、

『この亂れたる世の中、あはれな親子は外にもあらうが、現在その場に出合した半之丞として、ひがめる奴の懲りずまに爲返して來るは定と知りながら、此まゝにも捨て置かれぬ、それには幸ひの常寺、いかな横道者も佛の靈場は犯し得まい、慈悲の法衣に包めば猶更の事、この儀は改めて願ひまするぞ』

老僧は雪の眉毛を動かして、法衣の袖を搔き合せ、

『いやく、近頃の武家武門衆には神社佛閣の差別もない、いづこの社も神垣も荒れに荒れ果、精舍伽藍も甍に草の育つ世の有様、この法性寺とて武者影を防がうよしも御座らぬ、同じ事でも法衣の袖に包まうよりは音に聞えた蜂須賀の小六殿、その一黨に名高い貴方』

長江は急に手を振りて、

『それ禁物、我等の一黨、いかな事あらうとも女沙汰に動かぬ定めの約束、加之も相手は合戰の人數を持つ淸洲、退くに退かれぬ大事とならうも知れぬ、小六黨が女の意地に立騷いだといはれては末代までの名折れ』

老僧その手を押へるやうに、

『御一黨の動きでなう、こそりと長江殿お一人の頼まれ事とすれば、これも免れぬ浮世ぢや、誰が笑ひませうぞ、人を助ける業も出家では無法者に力が及びませぬ』

半之丞は腕を組で暫く考へて居たが、唾を吞込だやうに首肯き、

『なるほど、女は寺にも禁物、さりとて親子の別れくにならうも不憫、川狩渡世は新屋川に限るまい、郡内には佐屋川、津島川、蟹江川も戸田川も日光川も大江川もある事、や、いづれの川添でか分別いたさう』

幼少より自然に馴れた老僧の手は思はず合掌されて、

『善根、善根』

いつの時にも餘裕のある長江は戯れて、

『この善根、幾人ほど殺した罪が亡びませうか、はゝゝゝ』

どこまでも老僧は老僧、



「佛にも利劍が御座る、摺伏宗旨の火生三昧に出現する大聖不動明王は右に悪魔降服の劍を持たせられる、曩莫、曩莫」

枯れた小枝に道行く袖を引かるゝも緣、始めての人を助け始めての人に助けらるゝは猶更の深い緣で、折しも法性寺へ來合した長江半之丞、老僧と話し半に久兵衛の娘が泣込み、それがため溢れ者の勘助と蒲州武士三人を追ひ拂うて再び寺への途中で二人の奴を斬り伏せ、今また同じ寺で談合の上その娘を連れて出る忙がしさ、

はや日は暮れ果てゝ秋の夜風、吹く音もないが肌に薄寒く、法性寺の表門を出て田圃路を右に取らうとした時、お花は後より小さい聲で、

『裏道は左、二町あまりも近う御座ります』

長江は振返りて、

『裏道の夜歩きは、いやなものが脚下にあらうも知れぬ、はゝゝゝ』



二個の死骸があるとは云はず、其まゝ右に歩み出せば、一町二町は愚かな事、この人の背後に隨て行けば二里でも三里でも、少しでも長途の間に山々お禮をいひたいが、何とやら顏が熱うなり胸が轟いて口へは出ない、

空の星影に遠近の森は墨繪のやうで、ちら〳〵その間から村の灯が歩むに連れて見えたり隱れたりの淋しさ、幽かに聞えるのは新屋川を下る舟唄の聲、しんみりと一入また秋の夜の哀れを誘うて來る、

『年端も行かぬに、苦勞するのう』

優しくいはれた嬉しさ、はや涙ぐみて頭を下げたが、言葉には現はせない、

『ことし、幾歳ぢや』

『十九になりまする』

年を聞かれて、すぐに答へたのが我ながら不思議なほどで、ほツ

と[illegible]したが、争ひの夜逃で、恥かしさを破れた袖にも包ます、牛町あまりも來た時、また歩みながら、

『よい婿とりて、早う親に安心させよ、川狩の老の身で、男の子でもない只一人は淋しからうぞ、母親は、いつ失うた、幾歳で別れた』

もう涙が流れ出して、三年前とも得いはず、唇を固く咬占めて見たが自然に泣聲が漏れて來る、

『や、入らざる事をいうた、年には負けぬ達者な親、あれでは長生ぢや、はゝゝゝ女は運次第で、思ひも寄らぬ世に出るもの、はッはッはッ』

わざと大聲の笑ひに打消し、やうやう家へ送り屆けて見ると、内に灯はあるが表も裏も戸を閉めて、久兵衛の姿がない、

『戸は開くか』

お花は戸を開けて見せる、

『その分では外へ行くまい、待兼ねて裏道から寺へ迎ひに出たぞ、きいた通り和尚と話し合うた事で明日の朝



また來るといふ言づけ、今夜はこのまゝ歸る』

暫くと引止める手も出せない、殘り惜氣の門口に無言のまゝ佇みて、聊か伏目勝に内よりの燈火をうけた小町娘、襤褸に包まれた天生の名玉は、くッきりと浮出したやうに際立ちて、いかな勇士の目にも入らぬ筈はない、

闇に消え行く長江の後姿を、今は誰にも見られぬ我身を我心のまゝに爪立ちて伸上り、また屈みて透し見ながら内へ這入る事も忘れたところへ、息切れに馳せ歸りし久兵衛、これは行く時の裏路で一個の死骸に驚いた顏色、まだ青ざめてゐるが、あらまし寺で聞た情に有難く力づいて、

『どこに御座る、お花、どこに御座る』
『今、そこへ今、お歸りなされました』
『たはけめ、この親爺の戻らぬにお歸し申して濟むか』
『つい今の事、半町か一町』
『親子の半端ぢや、外にも少々お言葉を聞きたい事がある』
律義一徹に頑丈な阿爺、今日の事を明日の禮では氣に濟まない、其まゝ走り出し後より、お花も共に走りたいが、賤しい川並の娘と思はれるのが悲しい、
老の脚でも馴れた一町ほどの道を飛ぶが如く、新屋川の土堤下に追ひ付て、土に手を突くばかり腰を屈めた久兵衛、
『いづれか存じませぬが、せめて御門前まで、お見送りに』
長江は闇の中でも引立てるやうに片手を出して、
『芳志だけを受ける、それに及ばぬ、これで過分、明日あらためて談合する』
『お住居は』
『住家は少々こゝより遠いが、中の川に親しい知人がある、そこで今夜は一泊』
『是非とも中の川まで』
『無用、明日の事、明日の事』
久兵衛は微かに聲を潜めて、
『實路の櫨木林に』
『はゝゝゝ見たか』
『あれを、あのまゝでは、今夜中に』

『いや、手を觸れるな、そのまゝにして置け、ホッと氣力付けても生きて逃げた奴が一人ある、同じ事ぢや、もし明日の我より早く備洲の者が來て詮議の呼出しに出された時は、隱さず名乘れ、仕手は蜂須賀村の小六殿で長江半之丞と、なまじい隱すな、一切の始末この胸にある』
どうしても送らせない、無理に追ひ返された久兵衛、少しは自分の心に濟だやうな氣がして、我家の門口、身を入れる前に片戸の外より見ると、娘は燈火に背を向けて薄闇い方へ差俯きながら、いつにない事、親の立戻りし足音も知らずに、うッとりと何やら考へて居るらしい、
『お花』
夢うつゝを呼び起されたやうな顔、
『早い事』
どこに住で居られても、何故お宿まで送らぬかといふ不足らしい言葉、わたしは送られて歸りましたと口に出さないが、もう既に人知れず我知らず心の底へ何物にか忍び込まれて居る、見たばかりで迚も手の屆かぬ高峰とは諦めて居ても、これは戀の神の業で、悪戯に人間を惱ます種かも知れない、
戀は魔と同じやうで、一旦その心に宿れば、追へども追へども去らない、
『父さん、あの方は長江、長江、半之丞樣と仰せられまするた』
『さうぢや、久しう別府に鳴り響いて、兼々お名は聞て居たが

今日、始めて掘お祓いに鮎いた、おもはぬ案外の忝い人に救けられたで、これ見い、汝の繕うたものが哀れちやと て、二百文の鳥目まで下された、あの斯跡めに取られた網も受け戻せる』

繕うた投網を哀れに鳥目を下されたと聞て、飛立つほどに嬉しいやら、消え入りたいほどに恥かしいやら、今更また我身を恨めしげに破れた膝の上を見詰めながら、

『明日、お目にかゝる時、どういひませう』

『うかく〳〵馴れぬ口で物いふな、この親が絶えず朝夕、心で拝む』

『わたしも心で、拝みます』

氏素性もない川狩渡世の娘、叶はぬ事に悩まされて泣くよりも、たゞ拝むだけで留てやりたい、

清洲の城主、織田彦五郎信友は織田家一族の本流に当り斯波武衛家の老職で、次第に傾いて来た主の家を奪ひ城を奪うて立ち、後には自己の分家たる那古屋(名古屋)の織田信長に攻め込まれ、屋上に遁れたところを大野佐左衛門の槍に突落され森三左衛門に取て押へて首を掻かれたといふ見苦しい最後を遂げたが、今まだ不義非道の報いに亡びない全盛の真ツ最中で、合戦のない時は日夜の酒色に耽り、領内の容貌よき女は人妻でも無慈悲に引ずり込み、その悲嘆を面白がりて淫慾を恣にする悪逆無道の紀伝、

その彦五郎信友の耳へ、川狩重作の娘に絶世の美人あれに並の子でない新居村の小町娘より前世の性を受けて生れた小町娘といふ噂、加之も年は十九で佗住に囲はれて居ると聞ては堪らない、

むら〳〵と起る好奇心に猶更ます〳〵興を湧かして、その小町娘を召せと命ぜられた奴が土地の溢れもの賊助を使ひ、まづ絹一張と銭一貫文より責め掛けた三日目、いよ〳〵今日は否応なしに傍に押込で来る筈を、おもはぬ不意に飛入した野武士のため二人を殺され一人は生命から〴〵遁げて帰りしと聞くや否、自己の非道を棚に上げて置いて烈火の如く怒り出した、

その野武士は草を分けても詮議せい、縛り首にする、その小町は逆さに吊しても城内へ連れて来いといふ勢ひ、

かういふ事に選ばれる奴、いづれ主を諫める家来でない、寵愛の傾きよりは重い褒美を掴む気で、翌日の朝、清洲の城の搦め手から七人の荒武者が出た時は、長江半之丞も中の川に住む小六党の強かもの二人を引連れて出た時で、いひ合した如く双方とも同じ時刻に新居村の村外れで彼方より此方より段々と近づいて来る、

長江は鋒を傾けて向ふの野路より来る七人の武士を見ながら二人に向て、

『怪しい奴が奈がり来る、きのふの今日、清洲よりの意返しに相違あるまい、ぬかるな、併し長江の鋒を甘けるまではな

を出すな、出せば一人も除すな』

この二人は三十前後の毛脛を現はした物凄い大男で、年上ながら長江のためには平生の萬事その指圖を受けて居るらしい、

『淸洲の奴原、かういふ時に幸ひ、血首を並べてくれる』

『いや、首を並べるよりは横薙ぎの胴斫にして、あの七人を倍增の十四人にせまいか、はゝゝゝ』

長江も笠越に笑ひながら、

『方領村の柔かい名物大根でなし、さうも行くまい、選ばれて來た奴とすれば、少しの刄音は立つぞ、おもはぬ事で心ならずも、また殺生させられるか』

いかにも心地よげに勇み立ちて血首を並べ胴斬を並べたい二人と、また心ならずも殺生させられるかといふ一人と、それだけ其處に人間の差別がある、加之も面白く斬りたいといふ二人よりは、いやな顔して殺生させられる長江の方に微塵の危な氣もない、

向ふの七人もまた歩みながら、じろ〱此方を見て、

『異な奴が來るぞ、油斷するな』

『風體、いづれも主持でないらしい、頻りに何か私語いて我等を見るぞ』

『きのふの奴、あの中にあるかも知れぬ、今日の案内者に連れて來る筈を、うかとした』

『きのふの奴でも、けふの奴でも、我等この七人に向へば暗劒殺』

『はゝゝゝ、三人に七人、一人に二人づつ向うても、まだ一人の助太刀がある』

『餘る一人は斬合に構はず川狩老爺と小町娘に取掛る事、老耄は蹴殺しても小町は大切な御意もの、怪我さしてはならぬぞ』



『その役目この手に引受ける』

『いや、某が承はる』

『籤引にするか、はゝゝゝ』

かういふ奴が七人うち揃うたが、やはり戰國時代の血腥い氣風に馴れた足取で、さのみ慌たゞしく急ぎもせずに行く、

彼方の野路と、此方の野路と、次第に近づき次第に狹まりて、久兵衛の家の半町あまり前より一筋道となる、

ばツたり落合うた双方、わざと長江は靜かに足を停めて、まづ七人の奴を遣り過し、その後より二三間づつ隔てゝ歩み出せば、流石に薄氣味わるく思うたか、をり／＼振返りながら、互ひに無言のまゝ久兵衛の家に着き、七人は門口、きのふの勝手を覺えた長江は裏口、

ぞろりと門口に押寄せた七人の姿を見るや否、六十年の日に燒け焦した久兵衛の黒い顏は忽ち青くなり、若い時には腕を叩いた事のある五體も釘付けのやうに動けない、娘は猶更その影に身を縮めて、あまりの恐ろしさに抱付いた時、裏口の咳拂ひ、おもはず見れば長江の姿、外に二人の大男を連れて、ぬツと大地に根を持つが如き仁王立、

『父さん』



聲と共に親の腰へ抱付て居た娘の力、我を忘れて絞り出した一念の力に振り向けられ、ちらと裏口を見た久兵衞、ほッと始めて生きた心地、

裏口へ廻りし三人の姿に、いよ〳〵と見極めた七人、はや既に覺悟の體で、どや〳〵と狹い前土間に押入り、その內の頭立ちし奴、

『有難く思へ、この見苦しいところへ我々七人、淸洲樣お館の仰せを蒙りて、わざ〳〵迎ひに來たぞ、や、なるほど小町ぢや、もし邪魔立する奴あらば、邪魔立の因緣を具さに聞た上、次第によりて其奴も召捕に向うた』

長江半之丞、まだ笠を脫がぬ仁王立のまゝ裏口より聊か笑ひ聲で、

『五月の節句人形を見るやうに並び居ッたぞ、わざ〳〵七人この親を迎ひに來たか娘を迎ひに來たか、親子もろとも我見る前では手も附けさせぬ、因緣また其方等にいふべき口は持たぬ、聞きたくば淸洲の彥左衞門これへ罷り出い、召捕るとは誰を召捕る、はゝゝゝ雜兵づれの分際で』

彥左衞門と呼捨にされ、雜兵づれの分際と笑はれて、ばた〳〵と我勝の力足を踏み出しても、其まゝ少しも動かぬ仁王立の大膽さに押へられて、容易に掛れないが、口だけは掛れる、

『ほざいたぞ其奴、どこの野ぶせりが人眞似に出たか、死際に名を名乘れ』

腰の太刀作りを捻り上げて、

『いや名乘るまい、急いで名乘るまい、名乘れば此一刀、鞘を走るぞ』

『鞘よりも足の走らぬ用心せい』

『はゝゝ用心は萬夫不當の大敵に向うた時ぢや』

をり〳〵長江には呵しげの笑ひ聲も出るが、七人は石の如く總身を固めて膏汗が出る、

嵐の前の靜けさに暫く睨み合うた勢ひ、表より裏より互ひに一足でも榮蟠の上に踏掛れば、十人の白刃が凄まじい音を立て斬結ぶ時で、娘を背後に庇うた久兵衞、もはや堪らず老後の短かい生命を捨鉢の的に遣ひ出して、漣のやうに打振ふ兩手を左右に展げながら、

『この老爺、この老爺の一命、お取り下さりませ、娘は助けて下さりませ、何のお役に立ちませいでも老爺の生命、さし出します、さしあげます』

もう淚も出ない娘は一生懸命の力で、親の腰に抱付たまゝ少しでも裏口の方へ、一寸でも二寸でも裏口の方へ力まかせに押して來る哀れさを見た長江半之丞、さッと一飛に飛込んだかと思へば、それこそ飛鳥の如くに得たる早業で、親子を背後に家の中央へ坐り込み、始めて脫だ面魂ひ、（つゞく）



正直納豆屋さん

救世軍少將　山室軍平

一

下谷の邊に毎朝納豆を賣つて歩く老人があつた。

或家の奥さんが呼びとめて、『納豆を十二本おくれ』といふと、『どうもそんなに澤山は賣られませんねえ』といふ。

『でもそこに持つてゐる納豆は、皆うる品ではないの』と尋ねると、

『はい、これは皆うる品ですけれども、しかし奥樣、納豆を一度に十二本も買つて、今朝みな喰べてしまふことは出來ないでせう、此の中には昨日仕入れた納豆があるのです。だから今朝喰べる分には差支へないけれども、長くとつて置くと惡くなるので、今朝食ふ分だけしか賣つてあげられません』といふ。

奥さんは、『なんて正直な人でせう。お前さんは正直納豆屋だ。よろしい、わるくなつても關はぬから、矢張十二本買つて上げませう』

こんなことから其の納豆屋の正直者だといふ事が、その附近の評判となり、はては、あそこでも、こゝでも、「正直納豆屋さん」「正直納豆屋さん」で大層大事がられ、商賣も自然繁昌するやうになつた。



二

「正直納豆屋さん」の前身は、福島縣安達郡某村の者で、村長など勤めたこともある人だが、倅を上京させて、神田の某中學に入れておいたのが、救世軍の信仰に入り、大層眞面目な青年になつたのを見て感じ入り、倅にそんなによいものなら、親父にも善いに相違あるまいと、自分も上京して教をきき、進んで之を信仰して、從來の大酒をやめ、品行を改めて、以前とは違ふ眞實なる生活に入つたのであるが、それにしても自分は追々年を取る、今更一生涯をやり直すことも出來ないが、せめて與へられた程の子供は、男子も、女子も、皆相當の者に教育し上げたいといふ大望を起し、村長を辭して上京し、納豆屋となつて勞働して若干の資金を貯へ、小石川の表町に、天國屋といふ禁酒主義の飯屋を創め、重に砲兵工廠あたりの職工諸君を相手に、朝早くから夜晩くまで、ひどい勤勞をしながら、子供等は何れも中學又は專門學校に入學せしめ勉強させた甲斐あり、長男は惜しいことに早く死んだが、あとの四人は今では皆相當の人物となり、内二人は救世軍士官として、現に善き奉仕をして居るのである。

前の納豆屋をした父は、今年七十四歳の高齡を以て、今は市外某の所に野菜作り等して幸福に餘生を過して居るのである。



死よりも強し

鶴見祐輔作
冨田千秋畫

一

しかし、小笠原訓は身輕であつた。彼は、西洋の諺に從へば、まだ紐が付いて居なかつたのだ。日本流に言へば、絲の切れた凧のやうなものだ。どこへ、どのやうに飛んでゆかうとかまはない身の上だ。精神の上にも、肉體の上にも、彼は自由であり、奔放であつた。彼は戀といふ厄介な重荷をしよつてゐないのだから。

彼は釜山に上陸すると、新しく出來た京釜鐵道の三等車に乘り込んで、大勢の朝鮮人の中にまじつて、京城に向つてゐた。漫々と流れる河流や、天漢に迫るやうな峻嶺を眺めながら、彼は頗る得意だつた。しかし、鳥小舍のやうな朝鮮家屋を見て、感傷的な彼は、朝鮮人のために悲しんだ。しかしふと、先年、朝鮮を訪れた濠洲總督の令孃が、これを人家だとは思はず、羊の小舍だと思つて

『朝鮮は牧畜の盛んなところですね』

と、ついて來た朝鮮の役人に言つた、といふ話を思ひ出して、氣作な彼は、思はず獨り大笑した。

畑の中に高く聳えてゐるポプラの樹が、彼の眼を喜ばした。禿山つゞきの半島の中に、獨りポプラの細い高い幹が、秋天に纖條を揺つてゐる姿が、ロマンティックな剛の胸の中に、ある懐しいやうな情操を喚び起した。

白い衣をきて、泥田の中に牛を追つてゐた農夫が、手を休めて珍らし相に汽車を見送つてゐる。と、大きい河岸に大勢の女が並んで白い衣を洗濯してゐる。

『考へたもんだね、女に洗濯さへさしておけば、婦人運動なんか起りつこないからね』

さう思つて剛は、賑かな洗濯の群を見作ら、半ば哀愁と、半ばユーモアとを感じた。

さうかうするうちに、汽車はその名も床しき秋風嶺を過ぎ、大邱も過ぎて、夏の陽が漸く傾くころ、京城の南大門の停車場についた。

どや〳〵と、喧嘩のやうな勢で、大勢の乗客が、席を立つて走り出た。布切れに包んだ荷物を、肩の上に乗せて、朝鮮の老いたる若き、男と女とが、我れ勝に停車場のプラットフォームに雪崩れ出た。剛はその人波に押されながら、小さい荷物を肩にして、よろ〳〵として、南大門停車場の土を踏んだ。

朝鮮人の曳く人力車に乗つて、彼は景福宮の先の日本宿屋に急いだ。生れて初めて彼は、自分の知らない言葉の國に來たのだ。大きい都會に夕方入るのは美しいものだ。晝は瓦礫雑沓の穢れた街々も、夜の帷が下りてからは、たゞ一抹の薄墨色に塗りつぶされて、高く低く連たる人家の窓々から洩れる燈火の微かい光だけが、そこここの舗道車道を照らし出してゐる。商舗の街々が、燈光の下で生きかへつたやうに、華やかに闇のうちに浮み上つてゐる。

遠くの方に、夕闇の空を背景として、大きい楼門が聳えてゐる。尖つた細い線から成り立つその楼門の姿が、朝鮮といふ感じを、凡ての遊子の脳裏に刻むのだ。と、白い長い服をきた朝鮮人が、黒いすかし網の高帽をきて、長い煙草をくゆらしながら、幾人となく、幾人となく過ぎてゆく。

剛は、氣樂な顔をして、ゆら〳〵と人力車に揺られながらゆく。

と、横町から、急に戞々とした馬蹄の音が聞えたと思ふと、逞しき二頭の黒馬に引かせた、箱馬車がこちに向つて、けたたましき勢で走つてきた。

はつと思ふうちに、剛の乗つた人力車の梶の先を、疾風のやうに駈けぬけると、勢餘つた人力車が、止めそこなつて、あつと言ふうちに、梶棒を馬車の後に、ガチヤンとぶつけた。

『ガフガフガフ！』

と、何やら大きな聲がしたと思ふと、馬車の後に立つてゐた、長身肥大の制服の漢子が、ぴしやり！ と何かで剛の車夫を叩いたやうだ。

『あッ！』

と、叫んで、車夫が思はず前にのめる弾みに、車の梶棒が低く

たると、剛は不意を打たれて、どう、と大地に叩き落された。
それはほんの一瞬間の出來事であつた。
『待て！ その馬車、待て！』
と、剛は大地から跳ね起きながら叫んだ。
その時には、馬車はもう、馬蹄の響きを殘して、十數間さきの闇の中に吸ひ込まれてゐた。
『待て！ 待てつたら待たんか。卑怯だぞ逃げるとは！』さういふ、剛の大きい聲は、馬車を止めないで、大勢の往來の人の足をとめた。
そのうちに黒山のやうな人が、剛と車夫とを取り圍んでゐた。
巡査らしいものが、やがて人ごみを押し分けて出てきて、少し訛りのある日本語で、
『何事か？』
と訊いた。
車夫は起き上つて、打たれて赤く腫れた額をさすりながら、早口に何か頻りに說明してゐる。剛は言葉が通じないので、キヨトンと立つて聞いてゐると、一人の中年の日本人が進み出てきて、
『あなたは、朝鮮はお初めてと見えますね』
と聞いた。
『ええ、今着いたばかりです』
と、剛は暗闇の火を得たやうに答へた。
『あ、それではお解りにならないでせう。今、貴下方の車にぶつけて、しかも車夫を鞭で撲つて逃げていつたのは、あれは露西亞人の馬車ですよ。よくは判らないけれど、多分公使が乘つてゐたのだらうと思ひます。何しろ、此の頃露西亞人の朝鮮での威張り方と來たら、とても素晴らしいものですからね。それで、朝鮮人は勿論のこと、日本人も辟易して、反抗しないので、尚ほ我儘がつのるんです。丁度、日清戰爭前の支那人の威張り方と、似てゐますな』
と、件の日本人が深く嘆息する。
『あ、露西亞人か、怪しからん。僕はあした、露西亞公使館へ怒鳴り込んでやる』
と、世馴れない剛が昂然とすると、
『贊成々々！ やれ〱！』
『しつかり頼むぞ、書生さん！』
などと見物の中から聲が掛る。
さきの日本人は、尚ほ語をつゞけて、
『今、あなたが證據もないのに、露西亞公使館に怒鳴り込まれたつて、何にもなりません。それよりは、朝鮮の巡査に一部始終を話しておいて、明日の朝、日本公使館へ往かれて、話して何等かの處置を取つて、お貰ひになるんですね』
と說明すると、群衆のうちから、
『駄目だ〱！ あの腰拔けの日本公使が、何をしてくれるものか。君、自分で露西亞公使を撲りにゆけよ、書生さん！』



と　けしかける男である。

その時分は、陣も段々平靜に歸つて、事件の日本人の通譯で、朝鮮の巡査に事情を話して、一ト先づ自分の宿屋へ落ち付いた。

その夜の出來事が、年若き剛の心眼を開いた。

これは容易ならぬことだ、と初めて彼は感得した。日本の鼻の朝鮮半島が、いま露西亞南下の勢力範圍に歸しようとしてゐるのだ。日本といふ島國の中で、武陵桃源のやうな平和な生活を樂しんでゐたうちに、海の外の形勢は、こんなに迫つてゐるのか。彼は駭然として、開眼した。

丁度、吉川勇が、布哇に渡つて、砂糖農園で苦役してゐる日本人と支那人との爲に、米國資本家に楯突いて、牢にまで入らうとしてゐたときに、剛は日本の鼻の先の朝鮮で、露西亞人の人もなげなる「白色人種優越觀」に正面衝突をしたのだ。

「日本を一足出て見給へ。日本の相手に

於ける地位は、まだまだ駄目なんだよ。その世界に於ける日本人の地位を高めることが、先づ何より我々の急務なんだよ。凡てはそれからの事だ』

と中井眞人先生が屢々語られたその言葉を、剛はまざまざと思ひ起した。

彼はその夜、遅くまでかゝつて、中井先生と、布哇の吉川とに手紙を記して、彼の朝鮮の初印象を書いて送つた。

二

剛が京城について、紹介狀を持つて、二三の知人を訪問して、朝鮮の研究を初めようとしてゐるときに、御隣りの支那では、大騒ぎの最中であつた。それは、この年の六月、山西省の一角から起つた義和團といふ一群の土匪が、突如として北京に亂入して、獨逸公使を殺戮し、各國公使館を襲撃して、日本公使館の書記生が殺された。それを相圖に、北支那一帶に激烈な排外運動が勃起して、外國宣教師の命を奪すもの算なく、遂に北京は暴徒の占領するところとなり、公使館區域は暴徒に包圍せられて、幾の用ろ嫁もたいそうな危殆に陥つてしまつた。

全世界が湧れかへるやうな騒ぎになつた。

山縣内閣は遂に出兵と決定して、廣島の第五師團が山口中將の指揮の下に、出發することゝなつた。露西亞は北から、英、佛、米、伊は南から、皆兵を送つて、北京に籠城してゐる外交團と居留民とを救援しようとした。天津から海軍陸戰隊の聯合軍を率ゐて北京に向つたシーモアー提督の兵が破れて、再び天津に引き返へしたときは、北京在住の外國人は、鏖殺されるかといふ心配が、全世界を被うた。獨逸のカイゼルは、元帥ソルデルゼーを派して二萬の大兵を動かすことに決した。

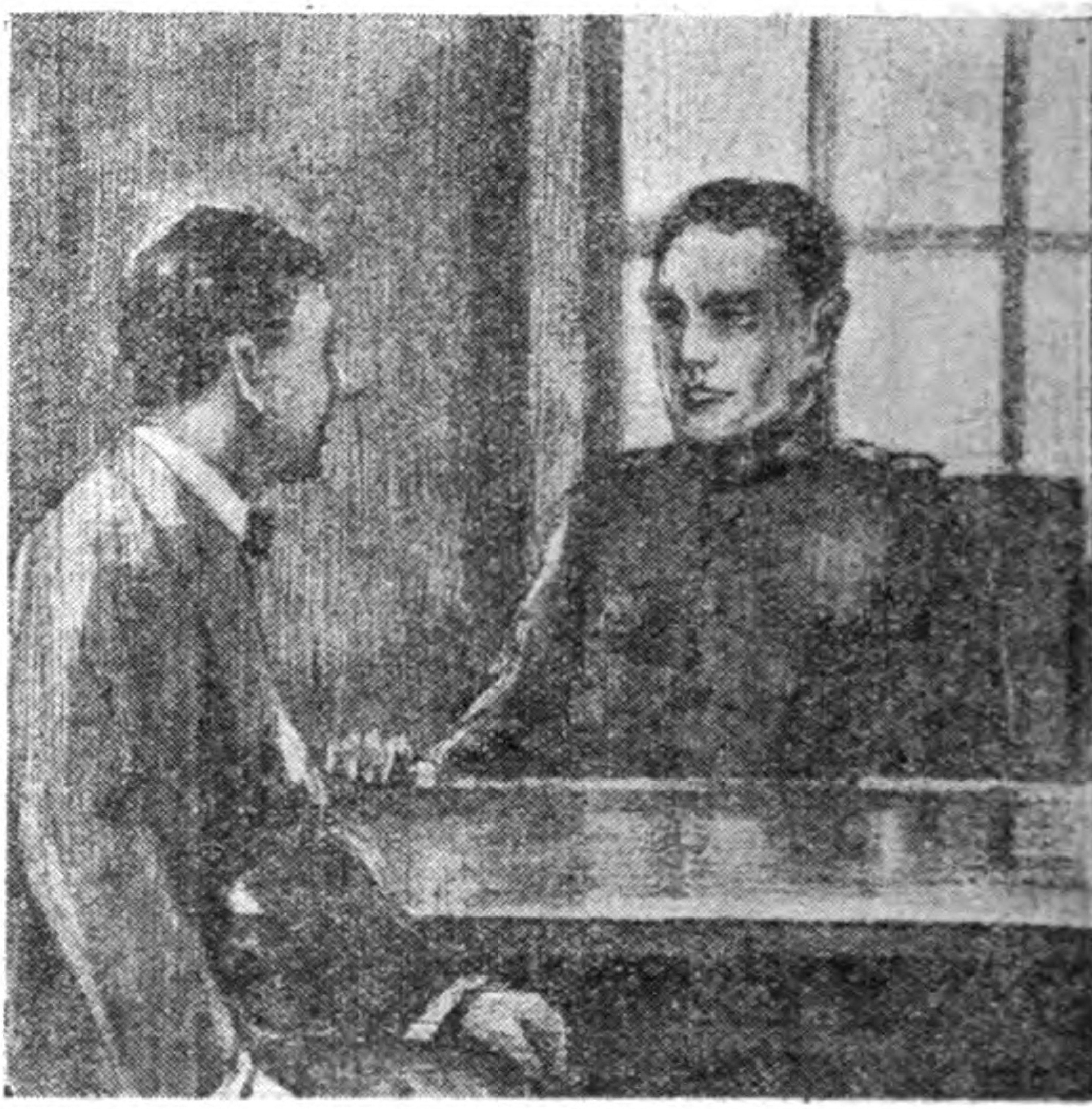
その血の沸くごとき騒亂が、日一日と日本の朝野を昂奮させた。伊香保に逗留してゐた小早川都男が、外務省からの急電に接して、あわてゝ引上げていつたのも此時である。

剛はぢつとして朝鮮に居られなくなつてきた。

『朝鮮は、あと廻しにしてやれ』

さう思つて彼は、僅かの手荷物を纒めると、すぐ仁川から船に乘つて、眞すぐに支那に向つた。天津には往けないので、彼は先づ芝罘に上陸して、北京に向ふ機會を窺つた。

幸ひにも日本の運送船が、宇治から芝罘に寄航した。彼は首尾よくこれに乘り込んで、白河を溯つて天津に着いた。埠頭も市街も物々しい警戒である。日本兵あり、伊太利兵あり、露兵あり、佛蘭西兵あり、獨逸兵あり、然り而して、[illegible]を頭に捲き、頭巾を眼深かに被つた六尺豐かの印度兵あり。五彩の色紙を、灰色の壁に貼りつめた支那町に、淺黄色の着物を着た支那人のうちに立ち混つて、世界各國の兵の雜踏してゐる樣が、初めて外國の土を踏む剛に取つては、現實の國から、一足飛びに夢の國に引つ越して來たやうに不思議であつた。ことに彼の周圍に聞く言葉が、支那語あり、日本語あり、英語あり獨語あり、佛語あり、伊語あり、露語あり、喧々囂々として、ぺーぺ



ルの高塔の昔語りもかくやとばかり思はれるのが、陽氣な剛には、堪らなくうれしかつた。彼は小さいズックの包に、身の廻りの諸道具を入れて肩にしながら、この世界動亂の縮圖たる北清事變中の天津市街に到着したのである。

　彼は、中學の時の二級上の親友が、陸軍少尉として、五師團に居ることを思ひ出した。早速師團司令部について、山田武雄の名を聞き合すと、幸ひにも、山田は其聯隊と共に出陣して、早くから天津に來てゐることを知つた。中學時代から出來のよかつた山田は、旅團副官附として、本營に居た。

『どうして君は、今頃こんなところへ來たんだ。君は川崎の造船所に居たと聞いて居たのに？』

と、日にやけた顏に、五分刈りの、如何にも青年士官らしい快活な風采の山田が、應接間に出てくるなり、昔の通りの張りのある大聲で、剛に聞いた。

『いやそれは長い話だがね。兎に角僕は、中江先生のお許しを頂いて、世界旅行に出掛けて、朝鮮に居たんだが、この動亂が段々擴大したので、ぢつとして居られなくなつて、こつちへ飛んで來たんだよ。おい君、どうかして僕に何か仕事を見付けて、北京遠征軍についてゆけるやうにしてくれないか？』

『うーん、待て〱、何しろだしぬけだからな……』

と、山田は一寸天井を睨んで考へてゐたが、急にまた大きな聲を出して、

『おい、貴樣は中學のときに、英語が馬鹿によく出來たが、今でも出來るんだらうな』

と訊いた。

『うん。英語は一ト通り話しも出來るし、一寸したことなら手紙位書けるよ。それから、獨逸語も少し出來るよ』

『うん、さうか。それなら占めたものだ。實はね。今度は各國

の混成軍隊だらう？ だからお互に言葉が通じなくつて、弱りぬいて居るんだ。何しろ、英獨佛の外に、伊、露、支と六ケ國語が要るんだから、どんなに出來る人間だつて、みんな出來やしない。おまけに我々陸軍の者は、獨逸語か佛蘭西語で、英語はからきし駄目なんだから、その混雜と來ては、とてもお話しにならないんだ。そこへ、參謀長の福島少將閣下が何しろ陸軍切つての外國語通ときてゐて、五ケ國語も六ケ國語もいけるんだらう？ だから我々士官は、まるで馬鹿見



たいで、毎日弱りぬいて居るんだ。だから通譯ときたら、百人あつても、二百人あつても足りないんだ。こんなことなら俺も學生時代に、外國語をもつとやつておくんだつた。矢つ張りこれからの世の中は、外國語の出來る奴でなくては駄目だなあ。いざといふ國際事件のときに間に合はんからなあ。……おう、さう〳〵、貴樣の役のことだが、これから、俺がすぐ參謀の留岡大佐殿に話して、どこかの隊附の通譯に任命されるやうに、お願ひして見てやらう。一寸待つてゐてくれ』

さう言つて彼は、武骨な兵隊靴を、がちや〳〵鳴らして、奥に入つていつてしまつた。

三十分ばかりすると、山田は、今一人の中年の將校と一緒に這入つてきた。

『アイ・アン ダースタンド・ユー・スピーク・イングリツシ（君は、英語がお出來のさうで）』

と、いきなり件の中年の將校が、英語で剛に話しかけた。

『イエース・サア・アイ・シンク・アイ・ノウ・サム・イングリツシ（はあ、少しは出來ます積りで）』

と、剛が突嗟に、しかも淀みなく答へた。

『やあ、それだけ出來ればよろしい』

と、件の中年の將校は、笑ひながら、

『それでは山田少尉、この……何とか言つたね……あゝ、さう、小笠原君――小笠原君を、旅團本部附きの英語通譯にし



よう。辭令か？　辭令は、あとでもいゝさ。すぐそれでは職務に付いてくれ給へ。何しろ人手が足りなくて困つてゐるんだから。それでは、君が小笠原君を、眞鍋少將閣下のところへ伴れていつて、お引き合せするんだよ。いゝかい。僕は參謀長の方へ話しておくから。それでは、小笠原君、僕はこれで失禮します。私の名は、山本大佐』

さう言つて、件の中年の將校は、外國に永く居た人らしく、莞爾と輕く微笑しながら、忙しげに部屋の外に出ていつてしまつた。

『あの人が、今度の出征軍の外國人係なんだよ。何しろ、英獨佛と出來てね。おまけに天保錢だらう？　何でも未來の陸軍大臣と今から言はれてゐるんだぜ。僕にはよく解らなかつたけれど、なんだが、君の試驗なんか馬鹿に早くて、手際のいものだつたね、あれで、解るのかね？　偉いもんだ』

と、根が簡單な山田武雄は、すつかり感服してしまふ。

『しかし、大佐殿にペラ〳〵とやられて、すぐ貴樣が、アイなんとかペラ〳〵とやつたところも、仲々うまかつたたあ』

と、感服しついでに小笠原の英語にも感服する。

『さう〳〵、これから參謀のところへ往かなくつちやならないんだつたな。それぢや、こつちへ來給へ』

と、山田が先に立つて案内する。

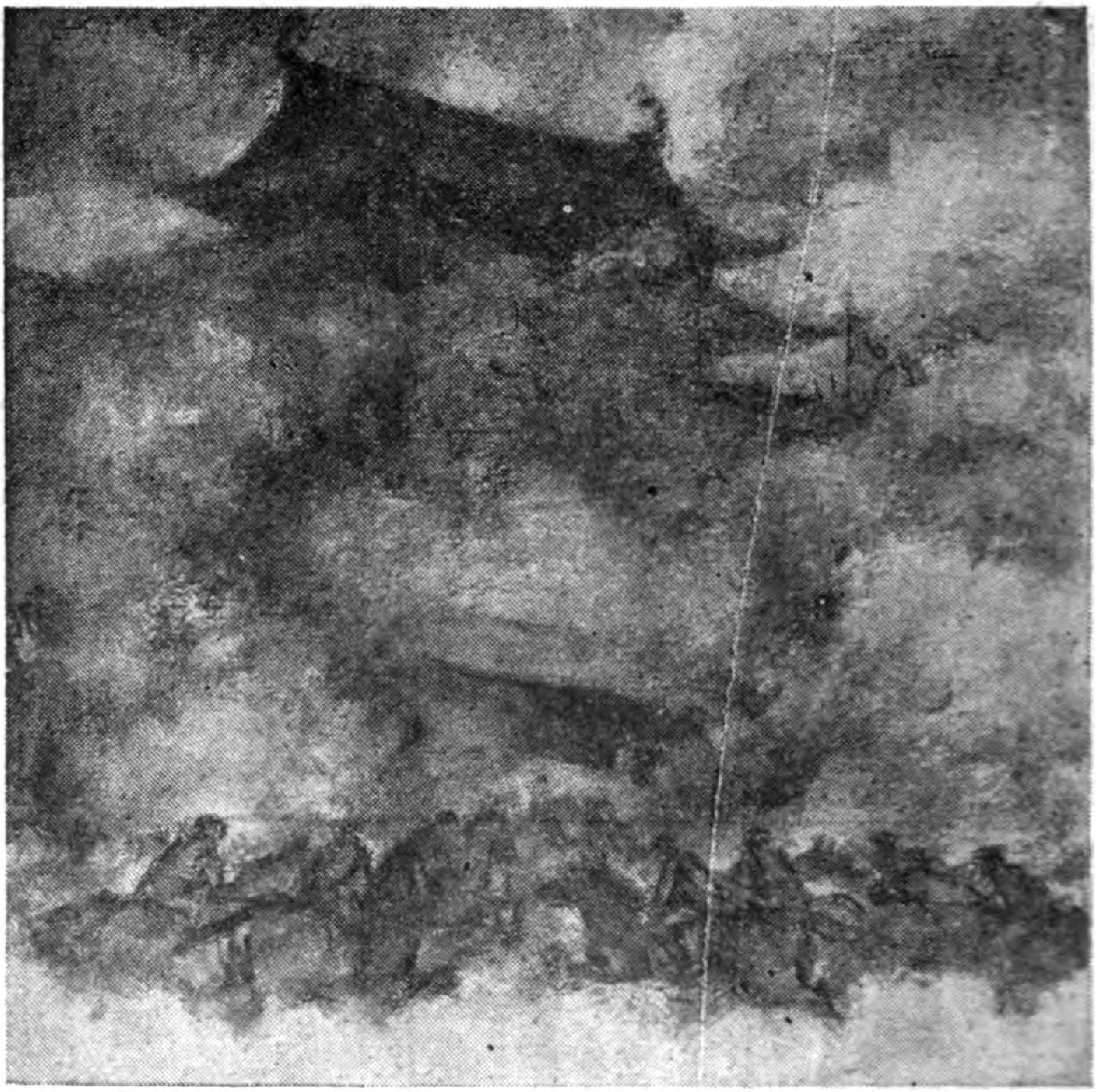
參謀にも、旅團長にも紹介がすんで、剛は首尾よく、旅團本部附の通譯となり、手當其の他で百五十圓といふ大枚な月給取りになつた。剛は自分自身の幸運に驚くとゝもに、中江先生のいつものお言葉を思ひ出した。

『今日の最善を盡して、明日のことは、天に任せろ。自ら努力するものは、天がよいやうに始末して下さる。何事も自ら求めてはいけない。我々人間に與へられてゐるものは、現在だ。今日だ。今日に最善を盡すことが人間の唯一つの仕事だ。明日のことは、一切天意だ。天意を人間の凡慮で測定しようとして焦つたり、もだえたりしてはいけない。明日のこ

とは、天が與へるまゝを、我々が甘受するといふ修養が大切だ。しかし、今日に怠るものは、決して、輝ける明日を、天は與へては下さらないのだ。
たゞ今日に勤めよ。たゞ現在に最善を盡せ。さうすると、思ひもかけぬ果報を、天が明日に準備しておいて下さるのだ」
これを聞いた陳は、今更のやうに思ひ出した。さうして、今迄自分が、一生懸命に英語と獨逸語とを勉強してゐたことが、愈々報いられる時が來たと知つた。
『人間の運といふものは、不思議なものだなあ。勉強さへしてゐれば、案外な途の開けるものだ、と先生のよく仰有るのはこれだなあ。自分で自分の位置を作らうと焦るものは、必らず失敗する。一切を天に委ねて、現在の仕事に努力するものには、不思議な運命が廻つてくるものだ、と先生の仰せられたのはこれだなあ』
さう思つて陳は、陣中通譯の辭令を膝の上に置いて、だまつて眼を瞑つて、東の空の中江先生に默禱した。

三

ドーン、ドーン、ドドドド、ドーン
といふ、大きい音が、焼けつくやうな空氣の下で鳴りとよんでゐた。
すると、むかふの方で、微かに喇叭の音がする。
やがて、パチパチパチパチパチ、バラバラバラバラ
といふ小銃の音が聞えてくる。
ワーッ、ワーッ、ワーッ
といふ殺氣立つた幾千人の聲が、大砲と小銃の音の間々に響いてくる。
ボカ〳〵、ボカ〳〵、ボカ〳〵、と音がするかと思ふと、汗だらけになつた傳令兵が、泥色によごれた白服を着て、これも汗一杯の赤馬に跨つて本營に駈け込んでくる。
『楊村正面の敵軍が、只今總退却を初めました、右翼の聯隊は只今、突撃に移ります、傳令終りつ!』
と言つたと思ふと、もう馬上にひらりと、飛び乗つて、もと來た途を一散に、鞭を揚げて疾驅していつた。
『さあ、愈々北京入城の準備だぞ! みんな支度しろつ!』
と、誰言ふとなく、元氣な聲が、司令部の中に聞えた。陳は、體中の血の逆流するやうな昂奮を感じた。
北京の公使館が、暴徒に包圍せられてから、もう二ケ月になる。北京城内の日本人は、今頃どうしてゐるか。先日命からがら出てきた密使の報告によれば、城内の日本公使館では、流彈に當つた馬の肉を喰ひ、犬も殺して喰べる程、食物に窮してゐるさうだ。ことにこの暑い北支那の八月を、衛生設備の乏しい城内で、疫病が發生しなければいゝが、と、それを隊附の軍醫がひどく心配してゐた。
『この北京に、今日は愈々入城出來るかな!』



さう思つて、小笠原剛は、八月十五日の赫灼たる太陽を見上げた。

『小笠原！　早く馬に乘れ！　とうとう、城壁の一角が占領されたぞ。日本軍が先乘りだ。早くこれから、北京へ突撃だ！　早く！　早く！』

さういふ山田少尉の聲を、半ば夢のやうに聞き乍ら、剛は兼々與へられてゐた支那馬に飛び乘るより早く、旅團司令部の將校たちの後につゞいて、濛々たる砂塵のうちを、一散に走り走つて、北京城壁に向つた。

とある民家の群を廻ると、突如！　として、大きい樓門が、剛の双眸に墜ちて來た。

『あつ！　北京だ！』

さう叫んで彼は、感激のあまり、涙のハラ〳〵と双頬を走り下るのを忘れてゐた。

正しく、彼の年若き眸に映じたのが、千年の風雨に打たれた北京の樓門と城壁とであつた。

涙にぬれつゝ剛は、ひた走りに走つ

た。

濛々たる砲煙のうちから、北京の樓門と城壁とが、段々と彼の眼に明瞭に映じてきた。

鼠色の高い城壁が、見渡す限り平蕪の彼方に連つてゐる。その堂々たる城壁の一角に、鋭い曲線を天に向つて投げながら、大きい二層の樓門が、半天に雄姿を刻み付けてゐる。それが、愛親覺羅氏三百年の覇業を物語る北京城の表象だ。

『北京だ！』もう一度剛は、さう叫んだ。

平和の日に、鐵路北京に入る遊子も、初めて半空を仰ぐ北京城の樓門の雄姿には、胸のとゞろきを覺えるものだ。それは、倫敦でも巴里でも、紐育でもモスコウでも、見ることの出來ない北京情調だ。況んや年若き剛が、二ケ月苦戰の結果、馬に跨つて北京城に近附き、城内幾百の日本人救援の目的地を目睹したときに、無量の感慨に撲たれて、熱眼の涙の墜つるにまかしたのを、感傷的であると笑ふ人はあるまい。

『おつ！』と、剛は思はず叫んだ。

見よ、鼠色の城壁の上に、烈日の光を浴びて飄翻として、日章旗がひるがへつてゐるではないか。嚠喨たる、喇叭の音が起つた。

『萬歳！　萬歳！　萬々歳！』

といふ聲が、此北京城を搖り動かすやうに、四方に起つた。

『ワーッ！』

と、喊の聲で、狂氣のごとくわめきながら、年若き小笠原剛は、支那馬に一鞭あてゝ陽光の下、白塵をあげつゝ、北京城に向つて疾走した。

四

剛が走り込んだ北京の町は、慘澹たる修羅の巷であつた。西太后の蒙塵、暴徒の掠奪、聯合軍の砲彈、而して、各國兵の雪崩のごとき入城。照りつける盛夏の日の下で百萬の市民が、右走左走に逃げ迷つた。

まだ處々に逃げ殘つた團匪と聯合軍の兵士との市街戰。間違つて、そこ此處に起つた各國兵の衝突。バラ〳〵、バラ、ドン、ドンドンドドド。ワーッ、キヤーッといふ物凄い音響が、狹い小路、廣い大通の各所で、斷續した。

道の名も何も知らない北京の町を、剛はヘルメットに白服といふ軽裝で、支那馬に鞭つて、ひた走りに走つた。日本軍は既に、公使館區域に到着し、各國兵は城内の要所を悉く占領した後なので、彼は支那軍の抵抗も何もうけず、混亂した町のうちを、公使館めがけてまつしぐらに走つた。

辮髪を頭に捲いた、空色木綿の支那服をきた男が、跣足によろめく女たちを扶けながら、どこを目當てともなく、陸續として走つてくる。驢馬に牽かせた支那馬車が、ギーギーと音して走つて來ると、各國兵が半分は惡戲に、その深く閉した簾を銃劍のさきで揭げて、覗き込む。花恥かしき乙女が、キヤーッと叫びながら、顏を袖に埋めて突つ伏すと、ゲラ〳〵と笑ひなが

ら、紅毛碧眼の兵にさへ、齒も齦を咬ませて、果てはその白い喉に接吻したりする。随いてゐる男たちが、勝ち誇る外國兵の勢に怖れて、若い命をして戦いてゐる。

とある横町を剛が過ぎると、美しき乙女が、何者にか衣を破られて、銃劍を全身に受けて、鮮血池のごとく滴るうちに仆れてゐる。

はつと、彼は思はず、馬を止めて、其の慘状に顏をそむけた。

『この少女に何の科あつて、こんな屈辱をうけたらう。この罪の償ひをする爲に白色人達が、高い價を支那で拂ふ日が來るぞ』さう思つて彼は、同人種たる東洋人の憤りを心頭に燃やしながら、馬に鞭あてゝこゝを去つた。

崇文門街を南に走りぬけて、彼が公使館區域前の城壁につくと、今朝程より入城した各國兵が、尚ほ尖き銃劍をところへ、きつと身構へて整列してゐた。

彼がその前を走りぬけて、公使館區域に通ずる城門を走り込まうとすと、『どこへ行く！』と哨兵が、英語で呼びかけた。

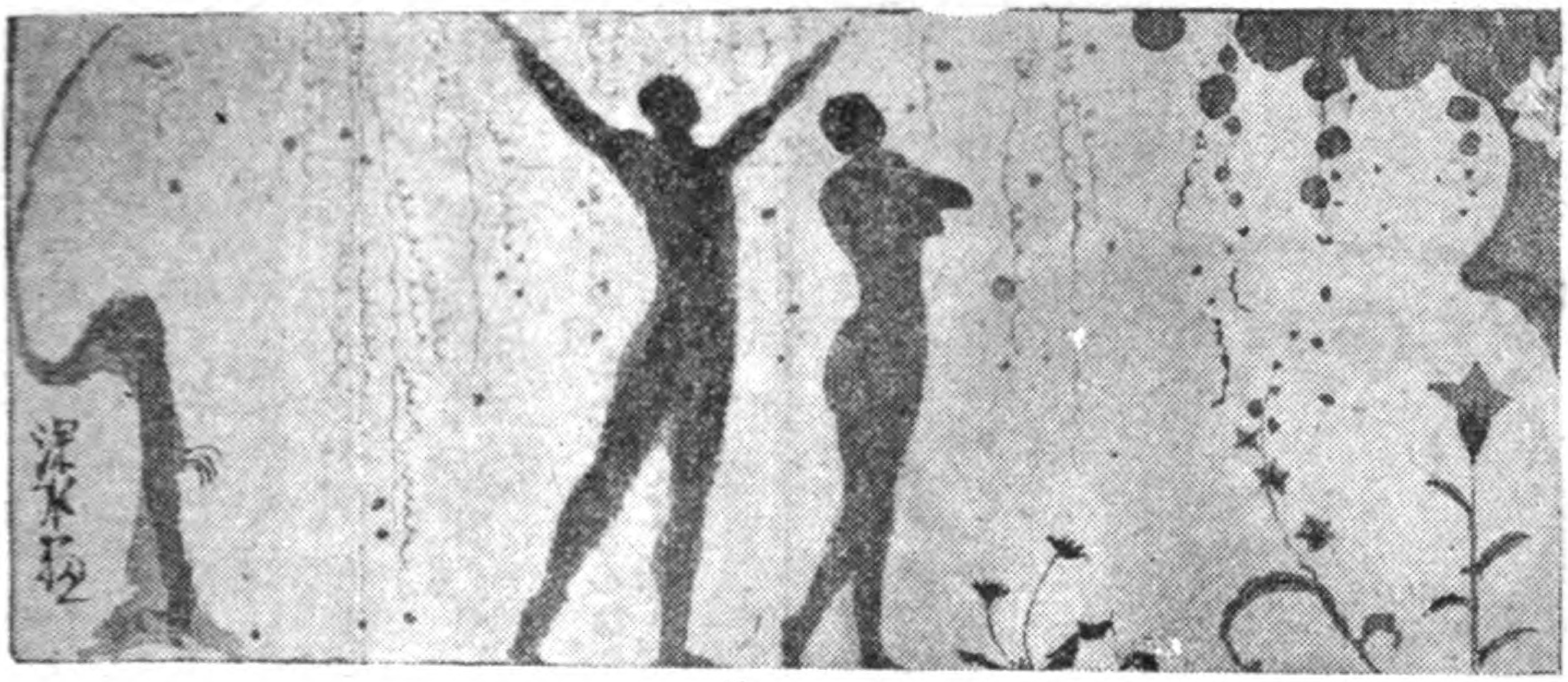
彼は左腕の日の丸の腕卷きを指さしながら、

『日本の通譯だ。これから、日本公使館へ！』と叫ぶと、

『よろしい！　通れ！』と、英兵が叫んだ。

さうして剛は、そのまゝ大混雜の公使館區域へ走り込んだ。

（つゞく）――（太平洋上にて　誌す）



赤い白鳥

菊池寛作
伊東深水畫

大勝利者

俊夫と悦子との必死を極めた顔色を見ては、俊太郎は傍觀してゐるより外はなかつた。

やがて、鈍い音をして、金庫の扉が開いた。悦子は父の秘密を暴く恐しさに、ふるへる手で、中を探つてゐたが、やがて二通の書面をとり出した。それには紛れもなく、鏑木俊夫殿、鏑木るい子殿　父より　と書かれてゐた。

俊夫は、歡喜に燃ゆる目で、ひつたくるやうに、それを受けとつた。彼は、父なつかしさに、ぢつと表書をみつめてゐた。

『るい子も呼んで下さい。一しよによませてやりたいから。』

悦子は、すぐ立つて出て行つたが、すぐるい子を連れて戻つて來た。るい子は、伯父や伯母の方へ靜かに頭を下げたが、伯父も伯母も、るい子の方を見る氣力さへ殘つてゐなかつた。

俊夫は、かゞやかしい目で、るい子を見た。

『るい子、よく歸つて來たね。僕は、何だか不思議な氣がするよ。このお父さんの遺言が、お前を茲へ呼び戻したんだよ。』

「たゞ遺言？」

るい子も、つい話題のなかに誘はれて、微笑んだ。

「さうなんだよ。私にも、お前にも、お父さんの遺言があつたんだよ。」

「まあ！」

るい子も、嬉しさに聲を擧げた。

俊夫は、ふるへる手で、封を切つた。

「ねえ。差支なかつたら俊夫さん、大きい聲で、よんで下さいね。」

悦子も、一刻も早く、この恐しい緊張から逃れたかつた。

伯父の顔は、生きた人間の顔とは見えないほど、蒼白になつてゐた。怖しい苦悶が、ハッキリと現はれてゐた。遺言の中には、きつと細かい財産目録も書いてある事だらう。廿才になつたら、その財産を俊夫に譲ると云ふことも書いてあるだらう。十五才になつたら、この遺言狀を渡してくれと、自分に頼んだことを書いてあるだらう。あゝ、凡てが破滅なのだ。自分達一家が、實は俊夫に還すべきその財産に依つて、今迄生活の資を得て來たことが、明にされたとき、俊夫がどんな輕侮の眼を以て、この俺を見返すだらう。もう、凡てが破滅なのだ。たゞ、目前の破滅を救ふために、直ぐ俊夫に飛びかゝつて、今封を切られたばかりの遺言狀を、引きさいて捨てる外はないのだ。しかしながら、彼の良心は、神聖なる遺言に對しては、さすがに、手が出ないのだ。

伯父の顔に、こんな苦悶を與へようとは、誰が想像すべき。俊夫はしづかなおちついた聲で讀み始めた。

それは、十五の俊夫が想像してゐなかつた優しい文句だつた。

俊夫殿

これは、お前が適當の年齢に達したとき、お前に下さいやう、伯父さまにお願ひして置いたものだ。お前は、これを讀むとき、よほど大きくなつてゐるだらう。だが、今こんな小さいお前を殘して死んで行くことは、どんなにお父さんの心を痛めてゐるか。せめてお母さんが、生きてゐらしつたら、お父さんの氣持は、もう少し樂だつたかも知れない。でも、凡ては人間の力では、どうともする事の出來ないことなのだよ。お父さんは、お前達が、きつと立派な人になつてくれて、家の名前を傷けないことを堅く信じてゐるよ。だから、安心して死んで行かれるんだよ。お父さんもお母さんも、お前達を子としたことを誇と思ひ、きつとよい人になるだらうと、幾度話し合つたか分らないんだよ。お前は、お父さんやお母さんのこの信頼に、背いてくれないやう立派な人になつておくれ。お前が、何にならうとそんなことは、かまはない。何でも、自分の信ずる所、自分の才のある所、そこをよく考へて、何でもその道の一流の人になつておくれ。それが、何よりの親孝行なんだよ。るい子は、お前のたつた一人の同胞なのだから、

てやつておくれ。お父さんやお母さんの代りに、あれを愛してやつておくれ。るい子が、素直なやさしい女になるやう兄妹仲よく成長しておくれ！

私の死んだ後の事は、家も財産も、みんな伯父さんにお願ひして置いた。伯父さんは、お父さんのほんとのお兄さんで、正しい方であることを、お父さんはあくまで信じてゐる。お前も、伯父さんを、あくまで信じて、伯父さん御夫婦を父母同樣に信頼しておくれ。



では、身體を大事にして、いゝ人間になつておくれ。ただお前達兄妹を、幼にして孤兒にしたことについては、お父さんもお母さんも、深くお詫びを云つておくよ。

だが、お前達は死んで行つたお父さんやお母さんの愛を深く信じ、晴やかにたのしく成長しておくれ！

父

きいてゐる中に、るい子が一番に泣き出した。それについで悦子が、聲を立てた。俊夫も、讀みながら、いく度となく咽んだ。

だが、それよりも一番大きい激動を受けたのは、伯父だつた。

彼は、最初死刑の宣告でも、聞くやうな怖しい氣持で聽いてゐた。だが、どこまで行つても、彼を非難する言葉は出て來なかつた。非難するどころか、それは



彼に對する絶大な信頼狀で了つてゐるではないか。

讀み了つた俊夫は、はふり落ちる涙を、右の手の中で、撫でてゐたが、何を思つたのか、ヒヨコツと頭を伯父の方へ下げると、

『伯父さん。すみませんでした。』

と云つた。

俊夫に、さう云はれたとき、今までこらへてゐた伯父の激動が、大粒の涙になつて、ハラ〳〵と赤黑い頰つぺたを流れ落ちた。伯父の心にも、かすかながら良心は、ひそんでゐた。ひそんでゐたればこそ、彼は遺言狀だけは破り得なかつたのだ。だがそのわづかな良心を抑へて置いて、彼はどんな惡徳を犯したゞらう。それは、公平に云つて財産橫領に近いではないか。いな十數年來彼は、俊夫を虐げたから、しかも俊夫の財産で傲然と生活してゐたのだ。そして、二十になつたら、たとひすぐ浪費することが分つてゐても、俊夫に財産を渡してくれと云ふ弟の依囑に對して、俊夫に充分な小遣ひさへ渡さなかつた。

その惡徳の破滅の日が來たと思つたのに、思ひきや、その彈劾狀は彼に對する絶大な信頼狀に變つてゐるのだ。

彼は、弟の誠意に打たれた。伯父と甥との間に、醜い爭闘の起るのを怖れ、あくまで自分に信頼して、自分の子に對して

は、一言も財産の事については、一言も残さない男らしい態度、自分を正しい方であると信じてゐる弟、それだのに自分は！　自分は！　伯父の心には、悔恨の心が激しく波打つた。

あの骨つぱりの強い俊夫までが、父の遺志を知ると、「すみませんでした」と、ハッキリあやまつたではないか。

『何うだや。俺の云つたことに一寸でもウソがあるかな』と云へばいゝのだつた。

彼は、今こそ大勝利者の筈だつた。だが彼は、ほんとうは弟の誠意と信頼とのために、完全に打ち負かされてしまつたのだ。

「弟は、俺をこんなに信じてゐてくれたのか。あゝうれしい！　うれしい！」

さう云つて、伯父は大きい声で顔を掩うたまゝ、泣きつゞけた。

るい子も俊子も、伯母もみんな涙を流してゐた。

未知の名曲

その事あつて以来、俊子を入院させた費用なども、伯母の手から十分に融通してくれた。ただ、退院後も疲労が激しいので、當分の静養を必要とした。それには、池袋のばあやのよしやの家がいゝので、そこへ俊子を引きとつた。

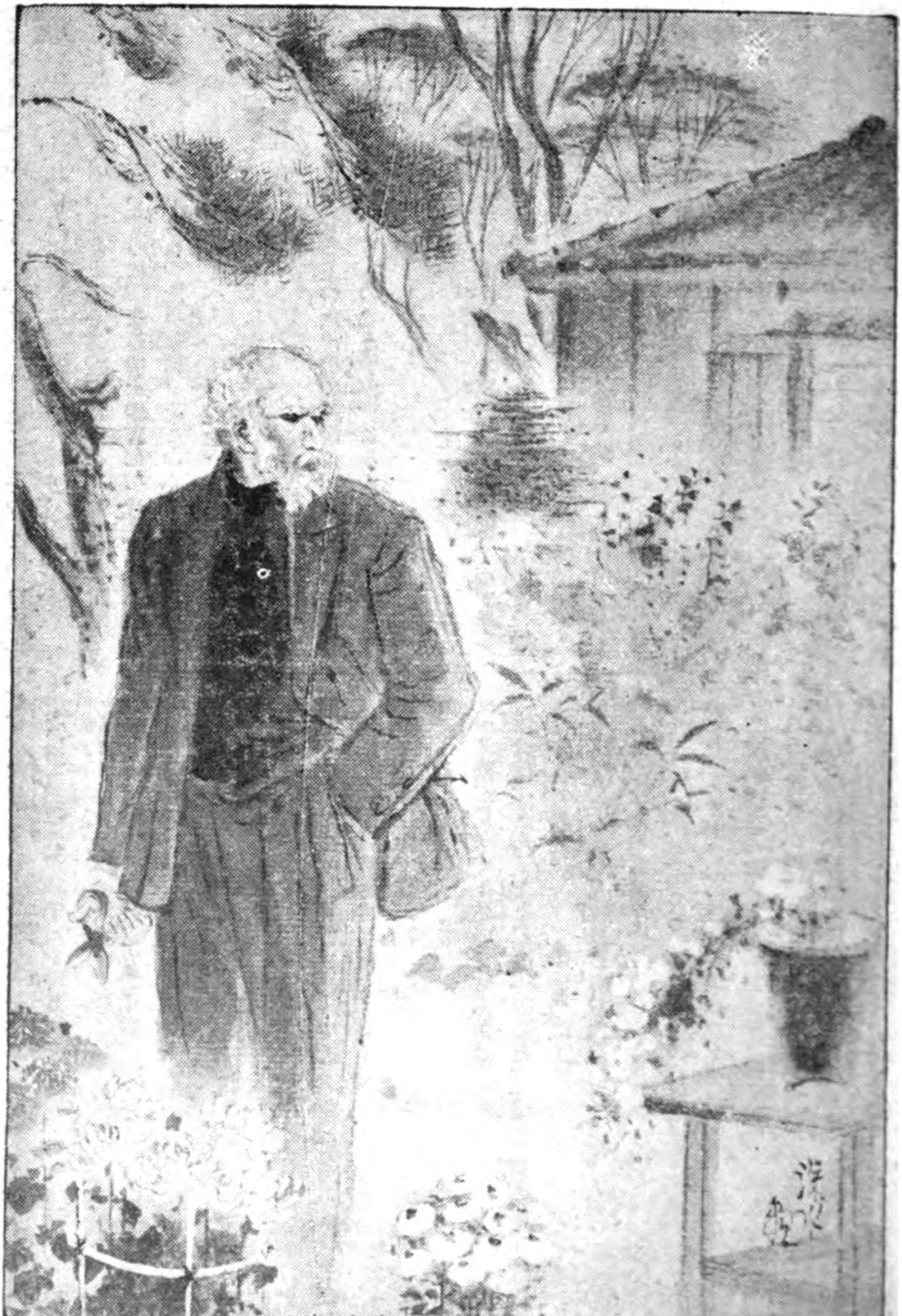
俊夫は、休みの日曜日に見舞ひに行つた。學校の歸りにヴァイオリンを持つて行き、彼女の枕許で、弾いてやるのだつた。俊子はよく、彼女と俊夫とが初めて會つた日に聞かされた俊夫の作曲を所望した。

今日も俊夫はそれを弾いてやつてゐた。このばあやの家は、郊外によく見かける住宅地に入る町角に、五六軒並んだ商家の一軒だつた。息子が、そこで酒屋を開いてゐるのだつた。裏が、直ぐ小さい空地を隔てゝ文化式の住宅と隣り合はせになつてゐた。その家に、ランデマン氏が住んでゐた。彼は、永年日本に滞在して日本の音樂界を指導してゐる獨逸人の音樂家だつた。

ラ氏は、今丁度庭に立つて、手に鍬を持ちながら、道樂の菊をいぢつてゐた。彼はこゞみながら、枯れた下葉を摘んでゐると、ふと、鋭い彼の耳は、何とも云へない美しい音を捉へてゐた。その音が、段々ハッキリ微妙な旋律になつて行つた。

彼は、鍬をそこの植木鉢に置くと、しづかに身を起して、周圍を見廻した。もう冬の初めとはいへ、霜を受けたこの庭には、太陽が明るくあふれてゐた。菊の香りが、床しく彼の鼻を打つた。美しい樂の音は、庭の生垣を越して、向ひの二階から聞えて来るのだつた。音樂に對して、鋭い耳を持つたラ氏は、それが實に優れた曲であることを、忽ち感じた。

だが、不思議にそれは、今迄一度も聞いたことのないものだつた。それ所か、今迄のどの作曲家のものにもない新しい形式であつた。ベートヴェンのものでもなければ、バッハのものでもなかつた。近代のフランス音樂と、一味通ずる所があつたが、更に獨創的で、それに多分に東洋的な日本的な要素があつ



た。フラヂオレツトとピチカツトの奇妙な交錯の間に、G線が力強い伴奏を入れてゐた。複線の麗しい和音。

ラ氏は、暫くうつとりと聴き入つてゐた。やがて、彼はもう我慢が、し切れないやうに、まるでその音に引き込まれるやうに、生垣の方へ歩いて行つた。彼は、そこのくゞり戸を開けると、づか／＼と酒屋の裏手へ入つて行つた。

丁度勝手元で、ばあやのよしが、煮物の加減を見てゐた。ラ氏の顔はよく知つてゐたが、裏から入つて来ることは、初めてなので、びつくりして立ち上つた。その途端に、お鍋がひつくりかへりさうになつて、中味のさと芋が、ころ／＼と二つばかり轉り出した。

『誰ですか。』

ラ氏は、少しくせのある日本語で訊いた。手真似でヴアヰオリンを弾く風をして、眼で二階の方を示した。

『はあ。……』

ばあやは、何の事か分らず驚いて返事が、のどにひつかゝつた。

『誰ですか。たいへん上手です。』

ばあやは、それで安心して答へた。

『知り合の家の坊ちやんです。』

『坊ちやん。一寸、会はしてくれませんか。』

ばあやは、あわてたやうに二階へ上つて行つた。ラ氏は、一人でにこ／＼しながら待つてゐた。やがて、ヴアヰオリンの音が、ぴたりと止つた。

そして、俊夫が梯子段を降りて来た。

『何か御用でせうか。』

『今弾いてゐた方は、貴方ですか。』

『え、さうです。』

『あの曲は誰の曲でせう。』

『あれは、僕が作つたんですが。』

『ボク？ ボクつて、誰のことですか。』

『僕です。Iです。僕です。』

俊夫は自分の鼻をさした。

『あゝ。あなたですか。』

『えゝ。』

『一寸楽譜、見せて下さいませんか。』

俊夫は、とん／＼と二階へ上ると、すぐ一冊の帳面を持つて駈け降りて来た。

それは、大判の五線紙を綴ぢたものだつた。

『これあなたの名前？』

『えゝ。』

『トシヲ・カブラギ、さうですねコンチエルト、コンチエルトありますね。』

さう云ひながら、ラ氏はそこの椽に腰を下して、熱心に頁をめくつた。彼が、いかに興奮してゐるかは、先刻轉り出た里芋の上に平然と腰をおろしてゐることで分る。

譜を追つて行くラ氏の眼は、キラ／＼と輝いてゐた。楽しい野原を遊ぶやうに、時々彼は感極つてその小節を唄つてみたり、ときどき独逸語の感嘆詞を入れたりした。

最後の頁がめくられたとき、彼は全く興奮しきつて、譜本をそこへ置く、立ち上つていきなり俊夫に手をさし出した。

『ブラボー　これ傑作です。あなた若い天才です。私ランデマンです、わたしあなたを世間に出すため、どんなことでもします。』

ランデマンと云ふ言葉をきくと、俊夫も悦びのために躍り上つた。

『ランデマン先生です？　道理で、見たことのある人だと思つてゐました。ありがたう！　ありがたう！　ありがたう！』

『ありがたう！　ありがたう！』

ランデマン氏も、意味もなくありがたうと叫びながら、俊夫の手を幾度も、握りしめた。

約束の花束

銀座通に、はなやかなクリスマス・デコレーションが飾られた。森永キャンデイ・ストアの前には、例年のやうに、サンタ・クロースのお爺さんが、旗をくばつてゐた。

クリスマスの前夜の、もう七時に近い頃、神宮外苑の舗装道路をしきりなしに、自動車の光が流れて行つた。さしも廣い日本青年館も、定刻以前に、ぎつしりと詰つてしまつた。

日本に現れた天才的作曲家として、ランデマン氏が、ほめきはめて推奨した若い音楽家の作品発表と云ふので、今夜の音楽会は異常な人気を呼んだのであつた。

開演の電鈴が、けたゝましく鳴りひゞいた。俊夫は、新調の燕尾服の襟を気にしながら、そはそはしてゐた。やがて、舞台の方から、オーケストラの調律の音がきこえて来た。ヴァイオリン、セロ、バス、オーボー、クラリオネット、トロンボン……あらゆる楽器の調子を合はせる音が、ます／＼彼の頭を亂さうとした。彼は、胸がわく／＼して立つてゐるのが、苦痛であつた。すると、そこへラ氏が燕尾服を、着こんで右手に指揮棒を持つて現はれた。頭髪が、すつかり銀色になつたラ氏は、威厳らしい浄らかさがあつた。

『さあ、出ませう。』

ラ氏は、眼で舞台の方をさした。俊夫は、まるで夢遊病者のやうに、ラ氏の後に従いて行つた。戸が開いた。彼は、舞台に立つたのだ。若い音楽家を祝福して、嵐のやうな拍手が起つた。彼は、めまひがしさうな気がした。

ラ氏は、指揮台に立つて調子を合はせてゐた。雑音がピッタリと止まつた。全聴衆の目が、指揮棒の先に凝集した。ラ氏は、俊夫の方を促すやうに見た。

俊夫は、ぼんやりと一番前列の人達を眺めた。彼が、ずつと眼をうつして行くと、白い點にぶつかつた。すると、不思議と、彼の眼がそこに釘付けにされた。その白い點が、段々ハツ



キリ女の顔になつて行つた。一人の女性が、じいつと彼の顔を見上げてゐる。宮子だ！ 瞬間俊夫の頭は、水のやうに靜まつて行つた。彼は、いきなりヴアヰオリンを、あごにあてた。そして、はるかに音を追ふやうに上を見上げた。

彼の弓が、サツと動いた。同時にラ氏の右手が、あざやかに空を切つた。しづかな夢幻的なオーケストラが、先づ指揮音の第一ヴアヰオリンから始まつて第二、ヴイオラ・セロと移つて行つた。その中を、俊夫の彈く旋律が、嫋々とひゞいて行つた。

第一樂章、第二樂章とカデンツも、申分なく終つて、フイナーレに這入つた聽衆は全く魅せられたやうに、しんとして咳一つするものもゐなかつた。

やがて、彼は彈き了つた。すると、堤が決れたやうな拍手が、滿堂を搖ぎうごかした。その間に、ラ氏は指揮臺を降りて、俊夫と握手して、そして握り合つた俊夫の手を高く差しかざした。すると、前よりももつと烈しい拍手が、嵐のやうに捲き起つた

俊夫は、その拍手の波の中に再び宮子の顏を見出さうとした。すると、宮子を見出すと同時に、宮子のすぐ後の列に、赤ら顏の老人が、飛び上るやうに、拍手してゐるのを見た。彼が氣を付けてよく見直すと、それはまぎれもない伯父ではないか。伯父の俊太郎ではないか。あの音樂を、めちやくちやにけなした伯父で



はないか。

俊夫は、胸が一ぱいになつて、うつむいてしまつた。奇麗な友禪を着た少女が、大きい花輪を差し出してゐるのに氣がつかない位茫然としてゐた。

俊夫に、富子やるい子や悦子と一しよの自動車に乘つて、麹町の家へ歸つて來た。辭して池袋へ歸らうとする富子を、悦子がむりに麹町の家へ誘つたのであつた。

俊夫の部屋には、樂しい團欒が在つた。

『ほんとうに、おめでたう。妾達約束の通、あなたの音樂會に花束を差しあげたのよ。』と、悦子が云つた。

さう云はれて見ると、彼の机の上のカットグラスには、純白の薔薇の花が、さゝつてゐた。

『ありがたう。今日、どうでした。』

『大成功よ。私の隣に、聲樂家の松月きよのさんが坐つてゐて、とても感心していらつしやつたわ。』と、悦子が云つた。

『今日、伯父さんが行つてゐたの、御存じ?』と、るい子が云つた。

『あゝ、僕は、目についた!』

『氣はづかしいと見え、私達に内緒で行つたのよ。宮樣が、二三方もお見えになつてゐたでせう。だから、一家の名譽だ〱と云つて、今も奥で欣んでゐるんですつて。』

と、悦子が云つた。

俊夫は、眼がしらがあつくなりさうだつたので、だまつてうつむいた。

『ねえ、お祝ひに紅茶を飲みませう。わたしが、淹れて來るわ。わたし、紅茶だけは、自信があるのよ。』

俊夫は、悦子が淋しい過去に、いく度紅茶を淹れてくれたかを思ふと、また危く感謝の涙に、むせびさうになつた。

悦子は、部屋を出て行つたが、やがて紅茶は持つて來ないで、一通の大きな封筒を持つて來た。そして、それを俊夫の手に渡した。

『これ父からのお祝ひものですつて。』

『何でせう。』

『まあ、開けて御覽なさい！』

中には二通の銀行預金證書と二つの印鑑が入つてゐた。一つは、俊夫の名義で、一つはるい子の名義だつた。

俊夫名義の證書の金額は、彼が藝術家として、藝術のためにどんな研究精進でも出來るほど、多額な金額が、記入されてゐた。

『あゝ、うれしい。お父さんの信頼は間違つてゐなかつた。伯父さんは、確かに正しい人だ。僕は、これで富子さんと一しよに音樂研究のために獨逸へ行かう。うれしい。だが、僕は、一番感謝していゝのは、悦子さん、あなたのやうな氣がするのだ。僕は、この金の一部を、あなたを幸福にするために、使ふことを誓ひます。』

『いゝわ。妾は、あなた方二人が、幸福になつて下されば、なにも云ふことはないのよ。』

悦子は、さう云つてさびしく笑つた。（をはり）

吉報!!

文壇の巨匠菊池寛先生の近來の快作「赤い白鳥」が昨新年號より、一度本誌に掲載されますや、讀者皆樣に異常なる感動をもつて迎へられ、全國到る處話題の中心になりましたが、號を追ひ、卷を重ねるに從つて、人氣は益々白熱化し、主人公俊夫の境遇に同情するもの、その伯父俊太郎の暴戻を憤るもの、可憐な白百合の如きるい子の心情をいぢらしとするもの、等々の御聲は、日々机上數十通を算し、その反響の甚大なるに、編輯者自身も今更ら乍らに一驚を喫した次第でありますが、愈々本號を以て、數百萬愛讀者の嵐の如き大拍手裡に完結を告ぐることになりました。こゝに、編輯者は皆樣と共に、謹んで、作者菊池先生に深く感謝致したいと存じます。

尚、更に皆樣への吉報があります。それは菊池先生が、目下非常に御多忙にも不拘、私共の切なる請ひを入れられて、再び本誌上に御執筆下さることです。

「今度書くものは『赤い白鳥』以上に自信がある。」と、作者のこの御一言は、近く發表されるものが、どんなに素晴しいか、興味深いか想像するに難くありません。

此の際、喋々することは止して、皆樣と共に、先生の大力作に醉はされるの日を、ひたすらに待ちたいと思ひます。御期待を乞ふ次第です。



巖窟の寺院

寫眞は埃及ラメス二世の造つた有名な巖窟の寺院。入口の人間と巨像と比べて下さい。

世界の奇觀と神秘境

昔から世界の七不思議として數へられて居るものがあります。然しヒマラヤの彼方、南海の果等、廣い世界には、未だ未だ數限りない大神秘があり、大奇觀があります。之を盡く探り極める事は、難中の難事である丈けに、兎もすると埋もれて了ひます。

本誌は何とかして世界の驚異の殿堂を開き、廣く讀者諸君に御紹介したいと云ふ熱望から、總ゆる方面に、總ゆる努力と犠牲を惜まず、その寫眞を蒐集致しました。即ち神秘中の神秘、奇觀中の奇觀は盡く收め、而も世上に餘り流布されて居ない珍しい尊い資料であります。此の寫眞を御覽になつたならば、居ながらにして世界の奇勝に遊ぶが如く、必ずや感興深きものがあらうと信じます。

目次

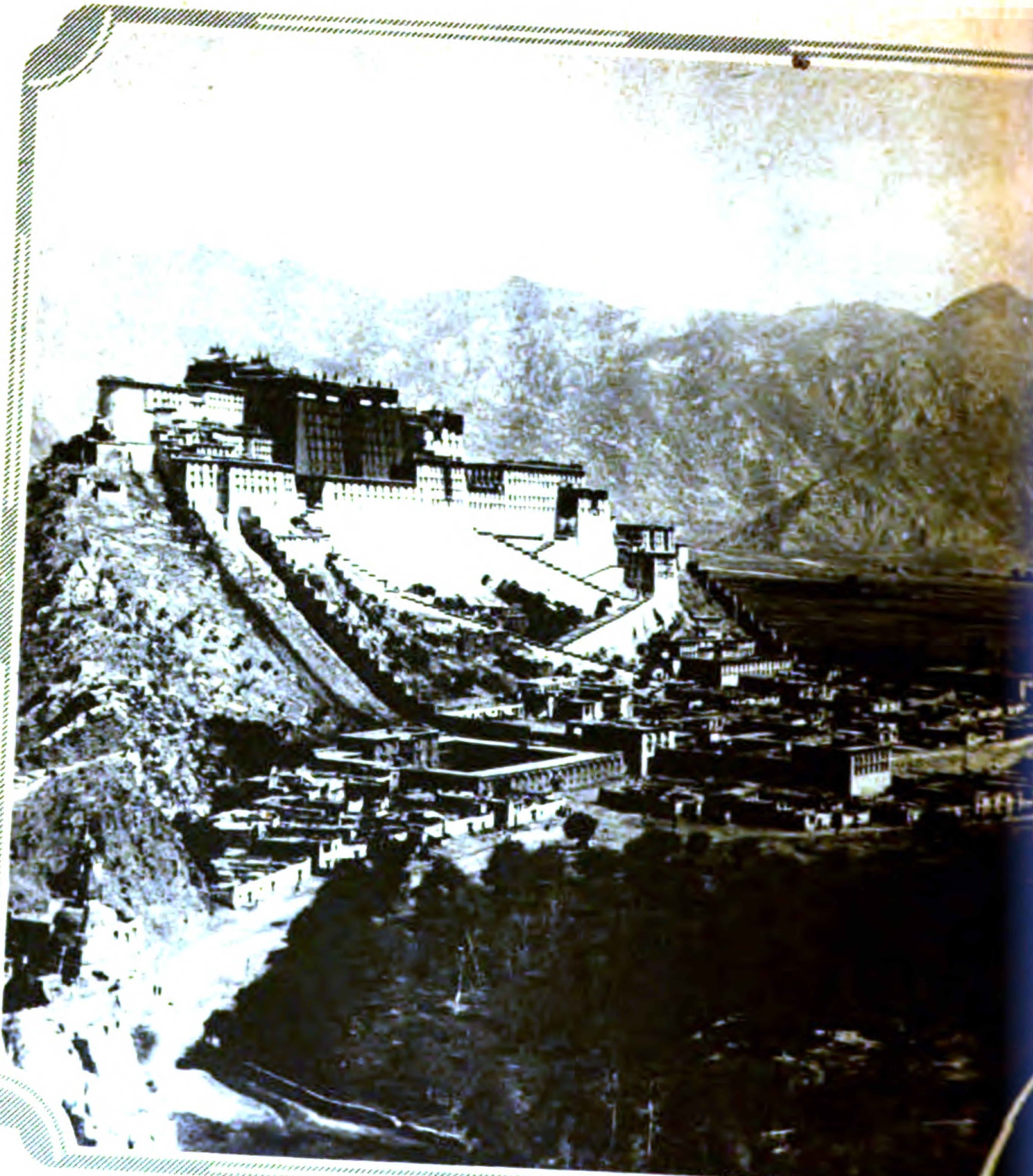
ビルマの奇塔

ビルマには幾萬の巡禮が、毎年長い旅を續けてお詣りに來る有名な靈場がある。それはケラサ山に在る頗る危かしい岩上の塔である。巧く重心がとれて居るので、動いても落ちる樣な事はない。ビルマは熱帶の國で、晝は暑さが激しいため、此等の巡禮は夜になつて山に登るのが常である。淡い星影を浴びて、奇岩の祠に跪座禮拜する有樣はいとも詩的であるまいか。











ポタラ王宮

神秘の國西藏には神秘の宮殿がある。首府拉薩の西に自然の斷崖を利用して造り、天空に聳える事五百尺。金色の屋根は紺碧の空に映じ、燦然として輝いて居る。その雄大な偉觀は、ローマのヴチカン宮殿も遠く及ばないと云ふ事である。これこそはダライラマ法王の棲むポタラ王宮で、今から二百餘年前に建てられたものである。この中には政廳を始め歷代の王朝、伽藍等がある。兎に角西藏の高原にこんな壯麗のポタラ王宮のある事は何だか物語に聞く様な氣持がする。

右圖は西藏貴婦人が外出の時の盛裝である。化粧には、香油や白粉を使はないが、トーイチと云ふ赤褐色の藥液をつける。又耳飾、頸飾、胸飾等の裝身具も頗る贅澤なものが多い。（寫眞は亞細亞大觀社撮影）





諾威の大氷河

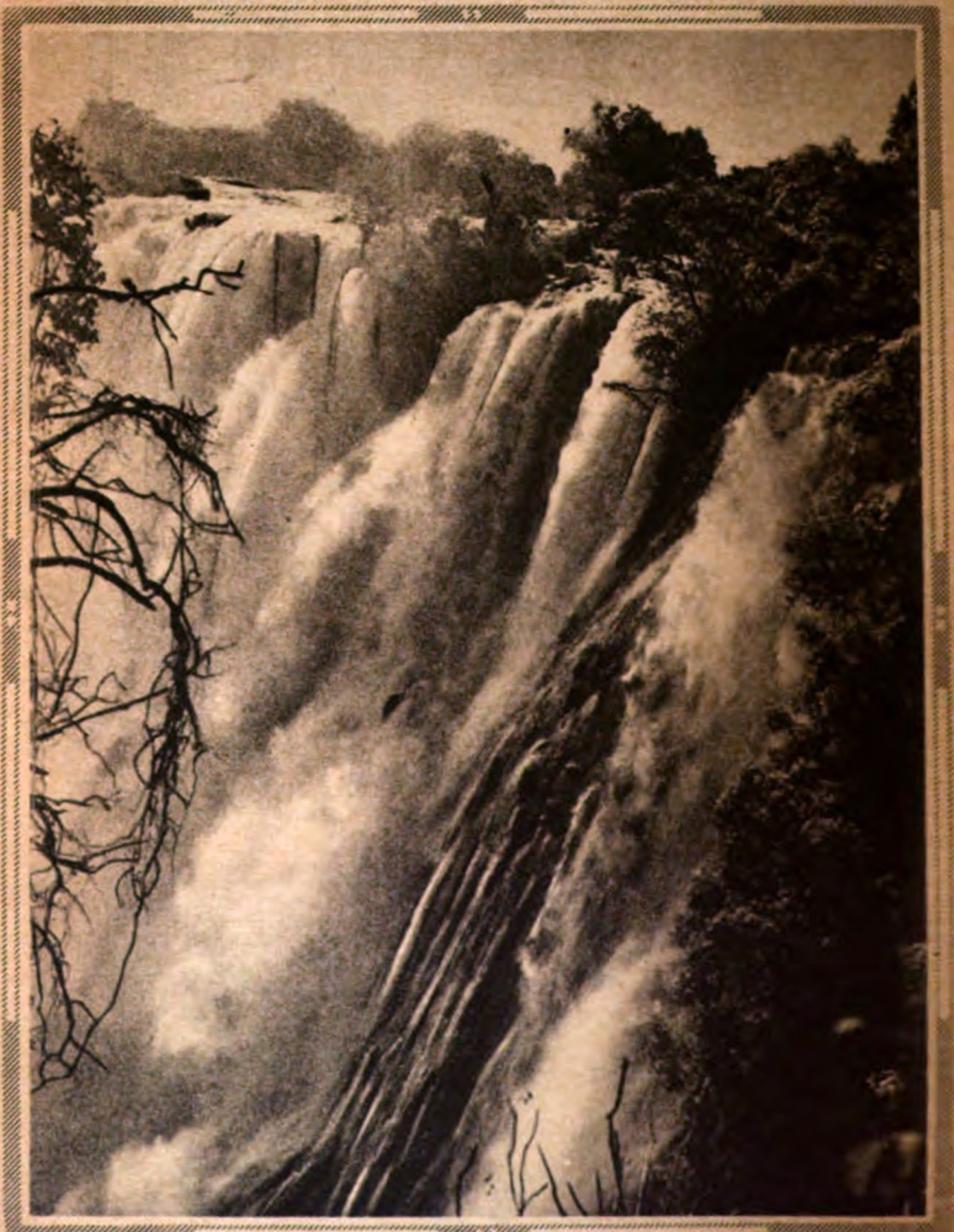
諾威には北國の壯觀として知らるゝ氷河が多い。威諾の背骨とも云ふべき國境の嶺から數十尺、數百尺の積雪が、大河の如く麓の方へと移動するのである。その速力は極めて緩い。然しその力は極めて强い。地上の何物をも押退けて進んで行く。鋭い刃物で削つた樣に見えるのは氷河の通つた跡だ。右の黑い邊は深さ何百尺か解らない凄慘な谷である。

モスコー河の自動車

ロシアは流石寒國である。モスコー河も冬になると氷つて了ふ。そして人も、車も、橇も、扨ては自動車迄が我物顏に氷の上を往來して居る。スキーを履いた人が、自動車の綱に掴まつて曳かれて行くのも他所には見られない一寸珍らしい光景である。

ビクトリア瀑布

高さ三百尺、世界第一と呼ばれるビクトリア瀑布は、今から七十餘年前有名なアフリカ探險家英人リビングストーン氏に依つて發見された。そして當時英國の皇帝ビクトリア陛下の御名に因んでつけたものである。寫眞は對岸の高所、名にし負ふ『危險地』と稱する容易に人の往かれない處から撮影したもので、雄壯無比の眺めである。此の『危險地』に至るには危險を冒して『雨の森』と呼ぶ瀑布の大飛沫を通らねばならない。アフリカ縱貫鐵道のザンベジ鐵橋は此の附近に懸つて居る。





荒涼無限のサハラ

アフリカ大陸の北部に、東西の長さ三千二百哩、南北の幅八百哩に亘るサハラは、我が國の十四倍にも當る廣大な面積を有ちながら、こゝに住居するものは、其の數僅かに百萬、東京市民の半數にも過ぎない。しかもそれが曉の星の如く僅に散點するオアシスに居るので、サハラの大部分は全く無人の境である。荒涼無限の砂原である。然しこの附近のオアシスに生を享けた、土人と駱駝にとつては、住めば都、無二の天地であるかも知れない。

トナカイの大移動 ↓

クリスマスにはサンタークロースの小父さんの橇を曳いて來ると云はれるトナカイは、北國の人々に取つて何よりも大切なものである。春になると綠草を慕つて幾千頭となく大群が移動して行くのは一つの壯觀である。







チロルの奇峰

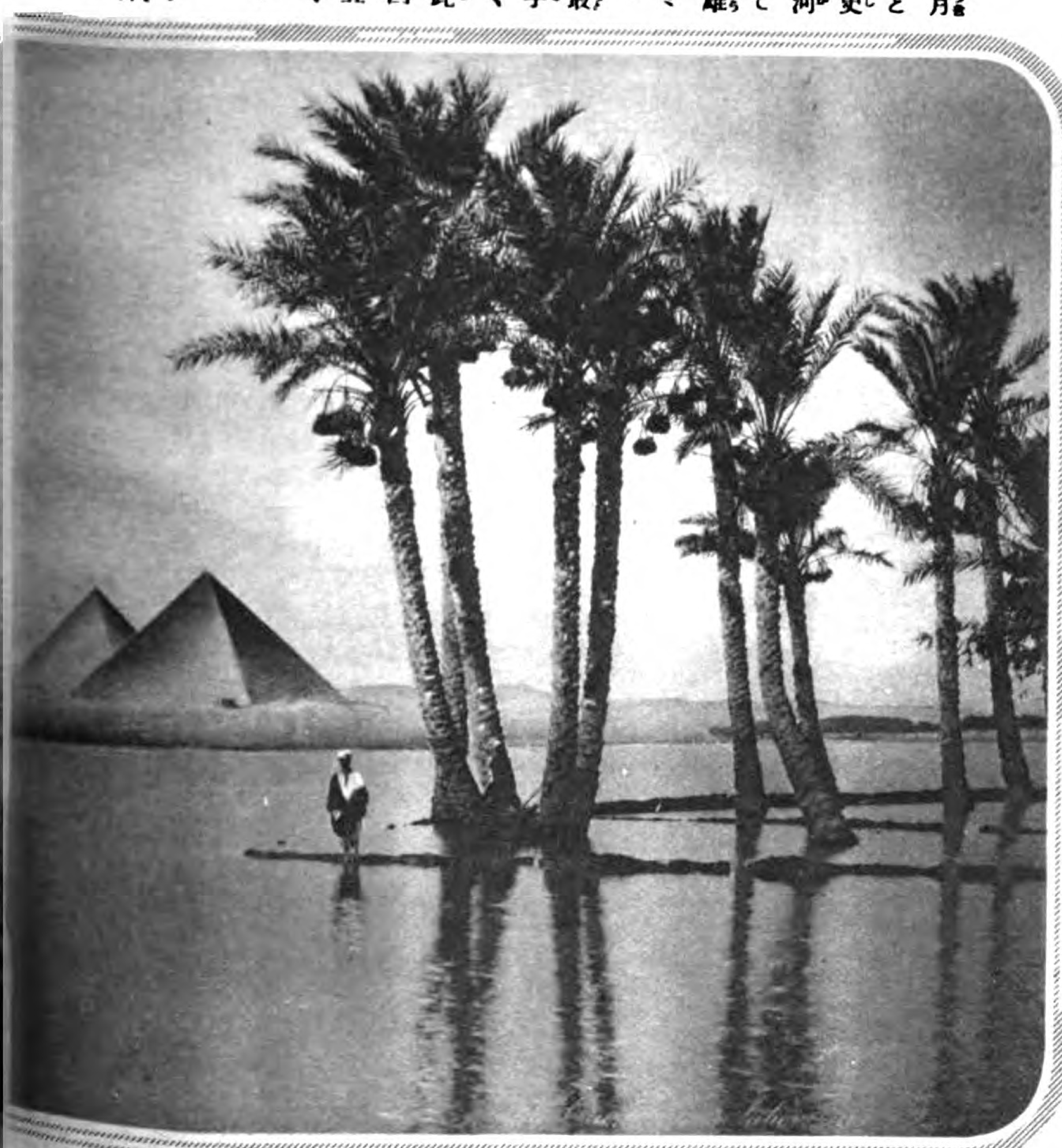
見るからに不思議な奇峰が、伊太利のチロル地方に澤山ある。これは雨水のために、比較的軟い水成岩が浸蝕されて出來た一種の土柱である。高さ百尺乃至二百尺、柱の様に天を摩して並んで居るのも一つの奇觀である。日本でも四國の吉野川沿岸に小さなものがある。



傳說の河ナイル

その昔クレオパトラが輕舟に乘じて月に唄ひ、愛人を想ふては紅涙を注いだと云はれるナイル河は、興亡三千年の歷史を秘めて今も悠々と流れて居る。その河畔の低地には古代埃及王家の墳墓として築かれたピラミッドが巍然としてその雄姿を現して居る。現在七十有餘のピラミットの中大部分はカイロ附近に在つて、ギゼーはピラミット群の所在地として最も名高い。寫眞も亦ギゼー附近で一番手前なのがチエオップス、次はチエフレン、遠いのはミケリヌスと云ふのである。此の中チエオップスは最も大きく、高さ四百八十一尺餘、四角の底の一邊は七百五十六尺である。內部には上下二室あつて、上にはクーフ王、下には同妃の死骸がミイラとなつて殘つて居た。

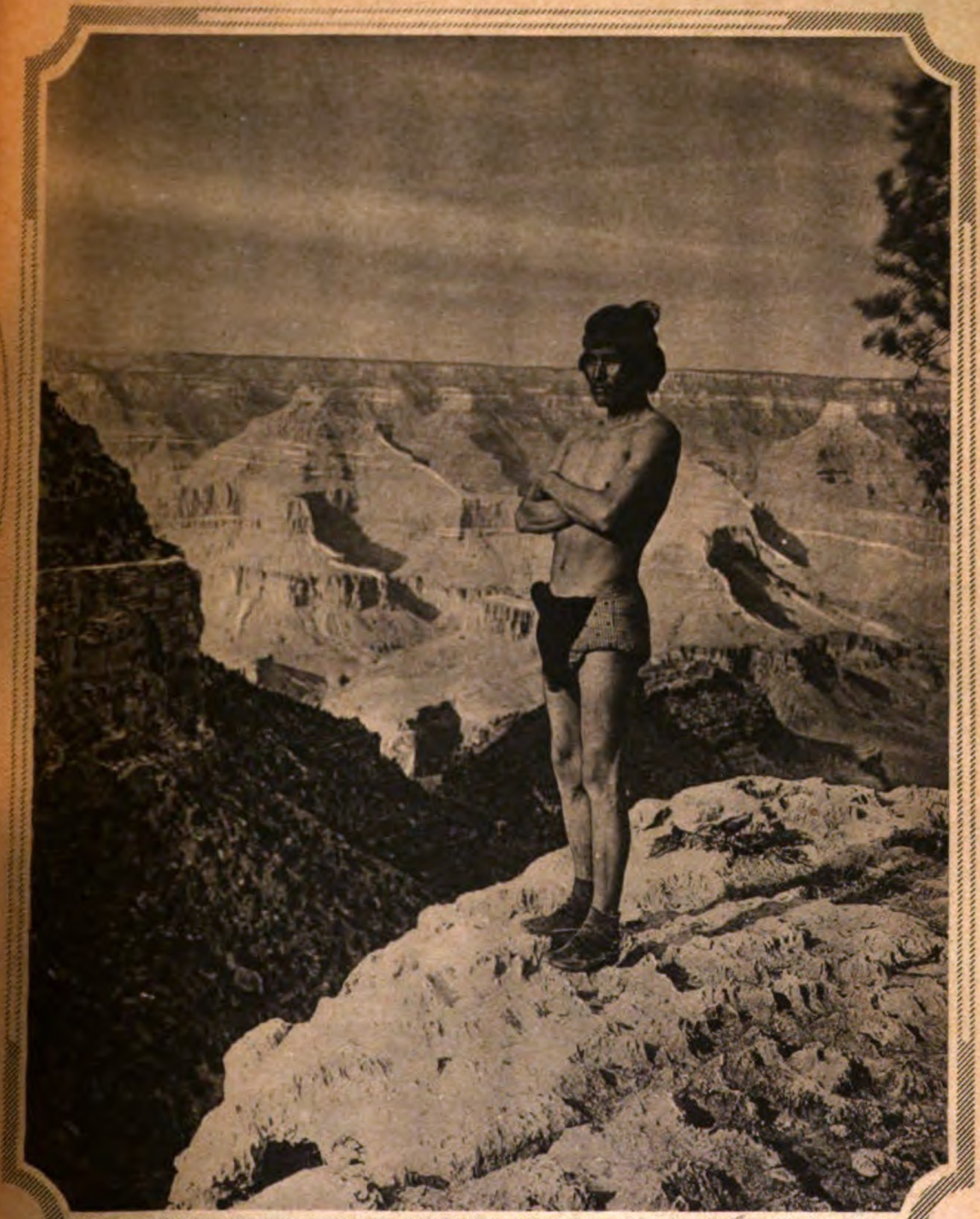
ナイル河は每年巾數哩に亘つて氾濫するのが常である。土人はデート椰子を目標に、道路を跣足で步いて居るのも一つの異國情緒が匂いて來る。





海金剛の奇勝

朝鮮江原道、金剛山の奇勝は近年大いに宣傳されてゐるが、廣さ十數里に亘つて、一萬二千の峯が重疊してゐる。內金剛に對して、外金剛又は海金剛と稱せられる海岸の奇巖、怪石の群がる所は、亦、特殊の風光である。其の岩、多くは玄武岩と花崗岩とで、特に玄武岩は節理の具合によつて、或は整然たる柱狀となり、或は不同の塊狀となり、相倚り相待つて亦千態萬狀を現出して居る。剩へ日本海の水、或は湛へて靜淵となり、或は激して飛湍となり、刻々に變化躍動して、形態も色彩も共に、時によつて新なる生命を發現するかと觀られる。



グランドカニオン

世界第一のものを多く有する米國に於て、グランドカニオンと稱する大峡谷も亦その一つである。これはロッキー山系中コロラド河の上流にあり、長さ二百哩、幅數哩、深さは數百尺から最大に至つては實に六千尺と云ふ驚くべきものである。見渡す限り一面の臺地の中に、コロラド河は恰も日の目から吾と我が身を隱さうとする樣に、深く深く磐岩の底を縫ふては流れ、流れては彫んで居る。兩岸の水成岩の層は幾百となく重なり、滑かに洗ひ去られた跡は、光線の作用により樣々の色彩の變化と相俟つて大自然の彫刻の美妙を物語つて居る。岩上のアメリカインデアンは果して何を瞑想して居るのであらう?

蕃社と蕃歌

臺灣の日月潭の近くを過ぎる遊子の胸を打つものは、妙齢の蕃婦が自然の石を臼として米を搗き、粟を搗き乍ら唄ふ哀々たる蕃歌である。



これは蕃家杵聲と云つて臺灣八勝の一である。下圖は模範的の蕃社と呼ばれる簡素にして清潔なる眉渓の蕃社である。



バタツクの倶樂部

これは南洋スマトラ島のバタツク族の倶樂部で、樣々の集會が此の内で催される。

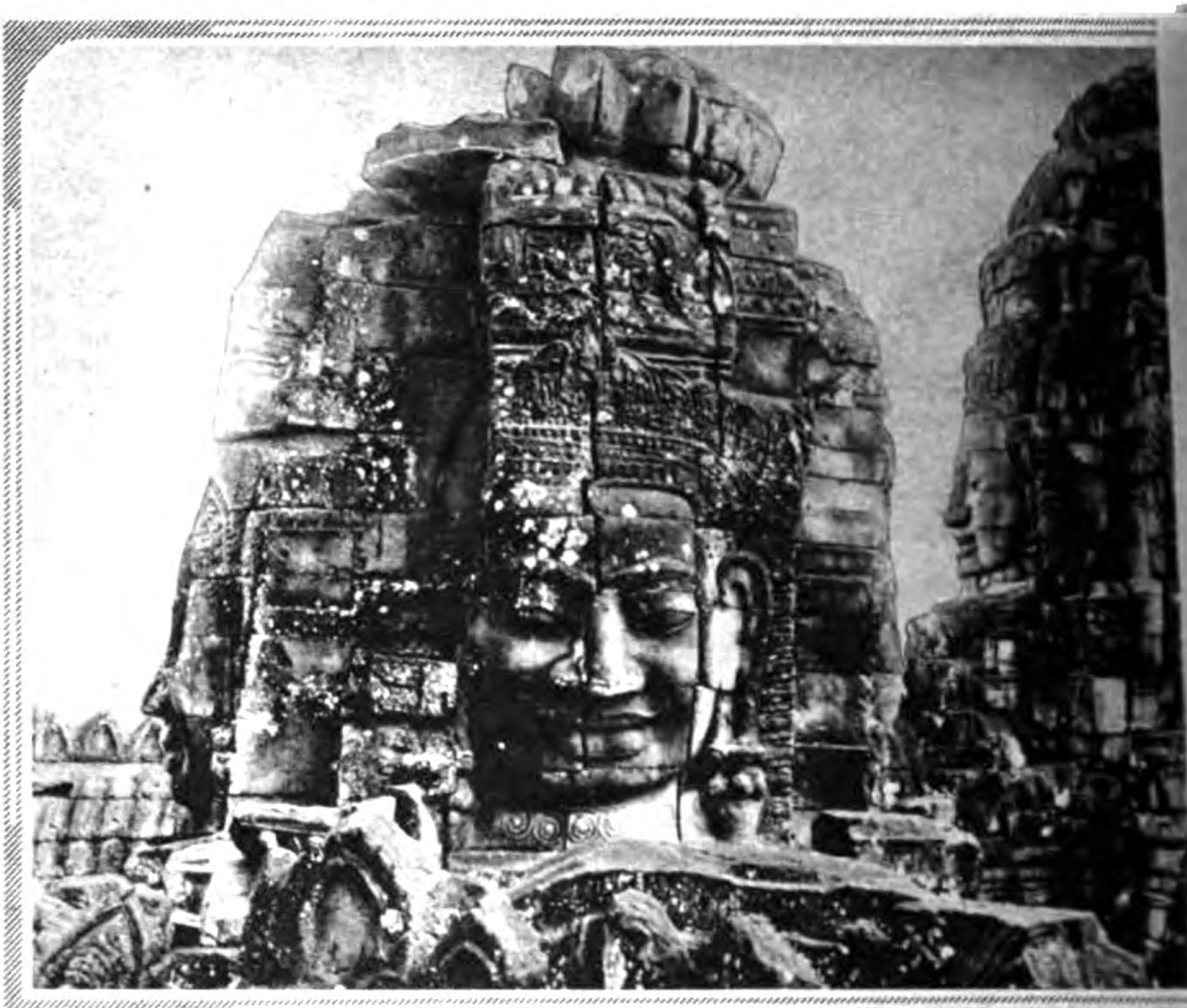






← デルフイの競技場

デルフイの町は、ギリシヤ、ユーベヤ島の中程、パルナサス山の南麓にあつて、西暦紀元前、四世紀の頃、侵入軍に破壞されるまでは、アポロの神の靈地として、宏壯な殿堂があり、又この競技場（スターヂウム）もあつて、繁榮を極めてゐた。此の廢墟は、三十幾年前より十幾年の歳月を費して漸く發掘された。この競技場は、町の最高所にあつて、紀元前五百八十五年から、町が破壞されるまで、大凡百數十年の間、四年目毎に、此處で競技が催されたのであるから、オリムピヤの競技場よりも、由緒の古いものである。





アンコール・ワット

昔日本の人に祇園精舍として誤り傳へられて居た有名なアンコール・ワット（一種の寺院）といふのは、佛領印度支那サイゴンの町を去る西北百四十里の處にある。昔印度からクメールと云ふ種族が移つて來てアンコール・トムを首府とした王朝を建て、その藝術の最も發達した時代（約千年前）にアンコール・ワットが築造されたものである。當時クメール王朝は、多くの常備兵と七萬に餘る象を使役して居たそうである。寫眞は廢墟の寺院に殘るサンドストーンで出來た四面像である。過去の文化の誇りとして壯の驚異的となつて居る。此の寺院の或る柱には毛筆で寛永九年正月始めて此處に來る。生國は日本肥後の浪人藤原朝臣藤本右近太夫一房、御堂を志して千里の海上を渡り、一念の思を胸に念じ世と娑婆の思ひを清むる爲茲に佛を拜して書くものなり』云々と今も殘つて居るとは興味深い話である。

世界第一の鐘乳洞

チエツコ、スロバキヤ國には世界一の鐘乳洞がある。洞窟の中には圓塔あり圓柱あり圓天井あり、恰で宮殿のやうな壯觀である。

石灰岩の洞窟に天井から水が滴り落ち、水中に溶解された石灰分が次第に固つて天井から乳房の如く垂れ下り、床からは天井に向けて筍のやうに生え上り、或は兩方合して柱となる。是が鐘乳洞の奇觀を形作る原因である。







グアノの鳥の大群

南米のペルーやチリーにはグアノ鳥と云ふ海鳥が常に大群をなして棲んで居る。その糞は集積して高價な肥料となるのである。



ナイアガラの偉觀

ナイヤガラの寫眞は多いがその全景を纏めたものは極めて少い。これは飛行機で撮影したものである。向つて右は馬蹄形瀧（高さ百五十八尺、幅二千六百四十尺）、左はアメリカ瀧（高さ百六十二尺、幅一千尺）、中央はゴート島である。左端の橋は國際橋と呼ばれ、アメリカとカナダとの境に懸けてある。（橋の右がアメリカ左がカナダ）その少し下流の黒い建物は世界第一の發電所（四五〇萬馬力）である。下方の道路はビクトリア公園の一部で、普通遊覽客が此處から眺望するのである。





ニーム闘牛場

『カルメン』や『血と砂』など云ふ小説でお馴染の闘牛は西班牙に起り、メキシコや南米等にも行はれて居る。一流の闘牛士となつて、最高の闘牛競技に、美事猛牛を殪せば富も、名誉も、戀も、擅に獲られ、一朝誤れば牛の角にはねとばされて空しい最後を遂げねばならない。げに闘牛は文明の今日に殘された、悲壯の風習の一つであると云ふ事が出來よう。スペインを衰微せしめた一原因は闘牛の弊だとさへ云はれて居る。

寫眞はフランスのマルセーユ港の西北、程遠からぬニーム市に在る世界第一の闘牛場である。規模廣大、開場毎に非常の盛況を極め數萬の觀衆が熱狂するのである。



ベスビアスの大噴煙

ポンペイ市を一朝にして灰燼と化した伊太利ナポリのベスビアス活火山は今も活動を續けて居る。寫眞はその最も猛烈な鳴動爆發の際の撮影に係るもの。噴煙と水蒸氣と濛々天に冲し、噴火口の火焔に映發して紅蓮の炎天を焦がすかと怪しまれる。噴煙の高さ數千尺に達し、噴き出す火山灰は十數哩の遠方に雪の如く降り積るのである。鳴動するベスビアスの樣な熱血兒ムツソリニが、伊太利に生れたのも奇しき取合せであるまいか。

兎に角古き希臘羅馬の人々は、この山に對して如何に偉大な神秘と驚異を感じたであらうか！今後も猶、ベスビアスはその怒りを解く事なく、劫初よりの叫喚を何時迄も續ける事であらう。







↑ **ラインの激流**

ドイツ人より『父なるライン』と呼ばれて親しまれて居るライン河は、ヨーロッパの屋根とも云ふべきスヰスに源を發し、獨逸を經てオランダの海に注ぐ蜿々八百數十哩の流れである。或ひは舟路となり、或はその沿岸を灌漑し、轉じては水力電氣を起す等非常の貢獻をなして居る。ラインは獨り物質生活の方面ばかりでなく、人々の間に醇朴な麗しい人情を育てゝ居る。又此の沿岸には中世の古城址が多い。寫眞はライン河中最も風景の優れた上流の急湍である。

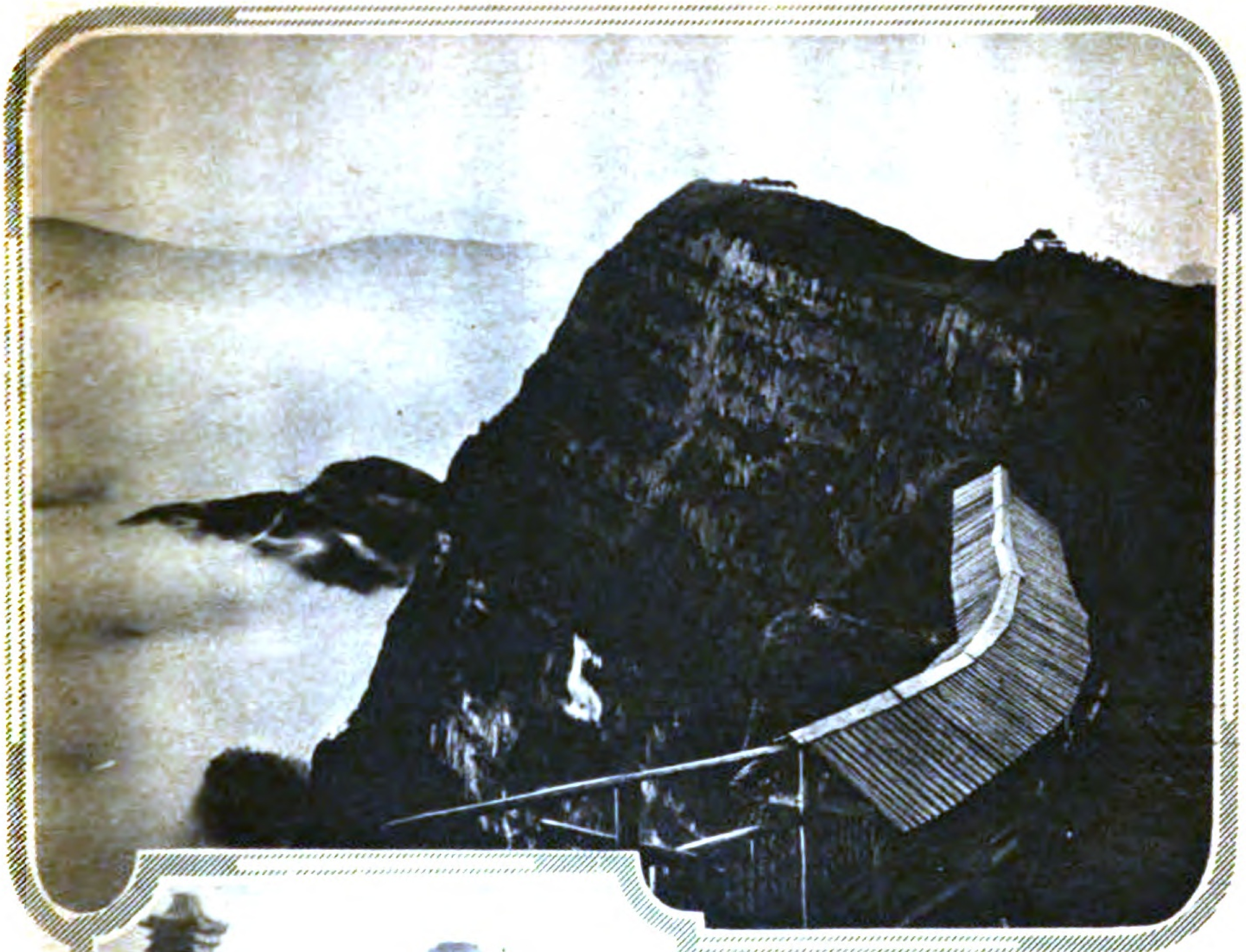
← **南阿土人の奇習**

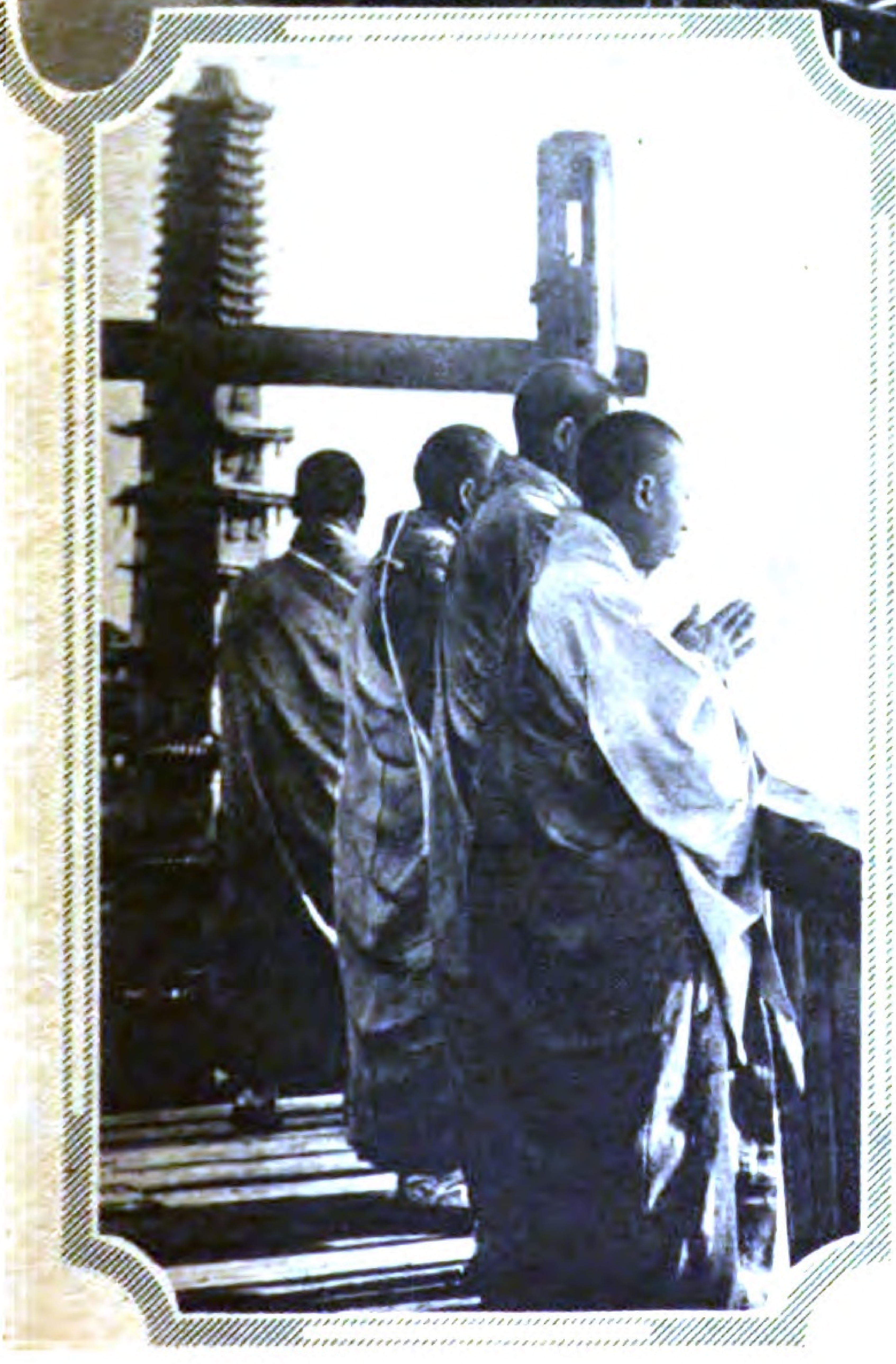
此の珍奇な土人は南アフリカ、ニアムニアム族の男子で、精神錯亂のため不幸にもかくの通り木を以つて身體を戒められて居る。



ヨセミテの大峽谷

米國、カリフォルニヤ州の南部、シエラネバダ山中のヨセミテ川には、長さ約七哩に亘つて奇勝を誇る谿谷がある。深さ四千尺乃至五千尺、幅半哩乃至一哩、大地割かと思はれる懸崖斷立の大谿谷で、其の規模はグランド、カニオンに及ばないとはいへ、曾て氷河のひどい浸蝕を受けただけに、地形の變化に富む點において、格別の風光が展開されてゐるのである。寫眞は、見るからに、奇拔な景色ではあるまいか、物好きな人が岩上に腰かけて居るのも一層奇拔味を加へてゐる。





蛾眉山の靈場

支那四川省成都の西南六百里の邊に突兀として天を摩する樣な一大靈山がある。高さ一萬二百尺、白雲は常に嶺をかすめ、萬古の秘密を藏して居る樣に思はれる。これこそは支那第一の高山であり、そして無二の道場と呼ばれる蛾眉山である。山頂には佛堂があつて、善男善女の登山する者が多い。蛾眉山の曉は殊に有名であつて雲海の果から赫々として太陽の上るのを禮拜する時、身極樂に在るの思ひがするそうである。遙か雲霧の間には謎の國西藏が夢の樣に起伏して居る。

一行博士

□動物中最もよく笑ふのは犬と猿、全く笑はないのは牛だけだと、心理學者ボルトン博士發表。

□人間の平均腦重量、成人男子二百七十二瓦、女は之より十瓦少く、偉人には三百瓦以上のがある。

□世界で最も醫者の多い國は日本、人口一萬に對し八人の割。尚年々千四百人以上増加して行くとは物凄い。

□通話度數でなく、その語數を標示する電話器用のメーターが今度米國で發明、能率増進の一方法。

□自動式に火の點く卷煙草が英國で發賣、先端に紙を包んだ小圓盤と發火材料があり、一寸叩けば發火。

□糞で最も貴重なのは龍涎香と云ふ鯨の糞で香水の原料。匆驚小さい一塊で二千圓、大きな塊なら三十萬圓。

□米人ハーバート氏の愛犬フエローは小學一年生徒位の智慧がある。言葉三百語を解し、大學教授を驚かした。

□シカゴ大學で毛髪につき研究の結果、日本人と支那人は最も硬く、西洋人に比べて八對六の割合。

□手を動すだけで空中から美妙な音樂を引出す『エーテル波の音樂』といふのを、ロシヤのランミン教授發明。

□柔い床に六時間寢るのと、硬いのに八時間寢るのとは同量の精力を恢復すると、レールド博士の實驗。

□從來燒き捨てゝゐた甘蔗の搾り殼から、今度良質の紙を製造するに成功。臺灣で早速製造計畫中。

□快晴の日には飛行家は、六千呎の高空にゐると、一眼で八十哩四方、三千呎で五十八哩遠方が見える。

□世界一長壽國は最近調査の結果、ニユージーランドで、女の平均壽命六十五才、男六十二才四分の一

□米國人一年間の活動寫眞觀覽料は二十二億六千萬圓、日本の全歳入より五億圓多いとは眞に映畫國。

趣味講座

興味ある黒子の話

千種博堂

一　黒子は誰にもある

前の晩には右の頬にあつたダンサーの黒子が、次の晩には左の頬に移動してゐた。ハテ不思議だと思つて、よく〳〵氣をつけて見ると、それは附け黒子であつた――と云ふ滑稽談があるが、實際の黒子もそれ程の不可思議は現はさない迄も、『いつの間にこんな所に』と新星でも發見したやうに我れ乍ら鏡を見て驚く場合が尠くない。それと云ふのが、黒子は多く後天的のもので、生れたばかりの赤ん坊には殆んどなく、年をとるにつれて、いつとはなしに、痛くも痒くもない間に出來てくるからである。

試みに五千人に就て、その顔だけの黒子の統計をとつて見ると、百人の中、十歳以下の子供には七八人。二十歳以下は十二人乃至十六人。三十歳以上になると四十人。四十歳以上は五十人。五十歳以上になると八十人と云ふ風に鼠算に黒子が増えて行つてゐる。しかも、これは顔だけの統計であるから、體全體の上から云へば、モツと多い筈で、中年以上になれば、殆んど黒子を持たぬ人はないと云つていゝ位である。

二　法則的な黒子の位置

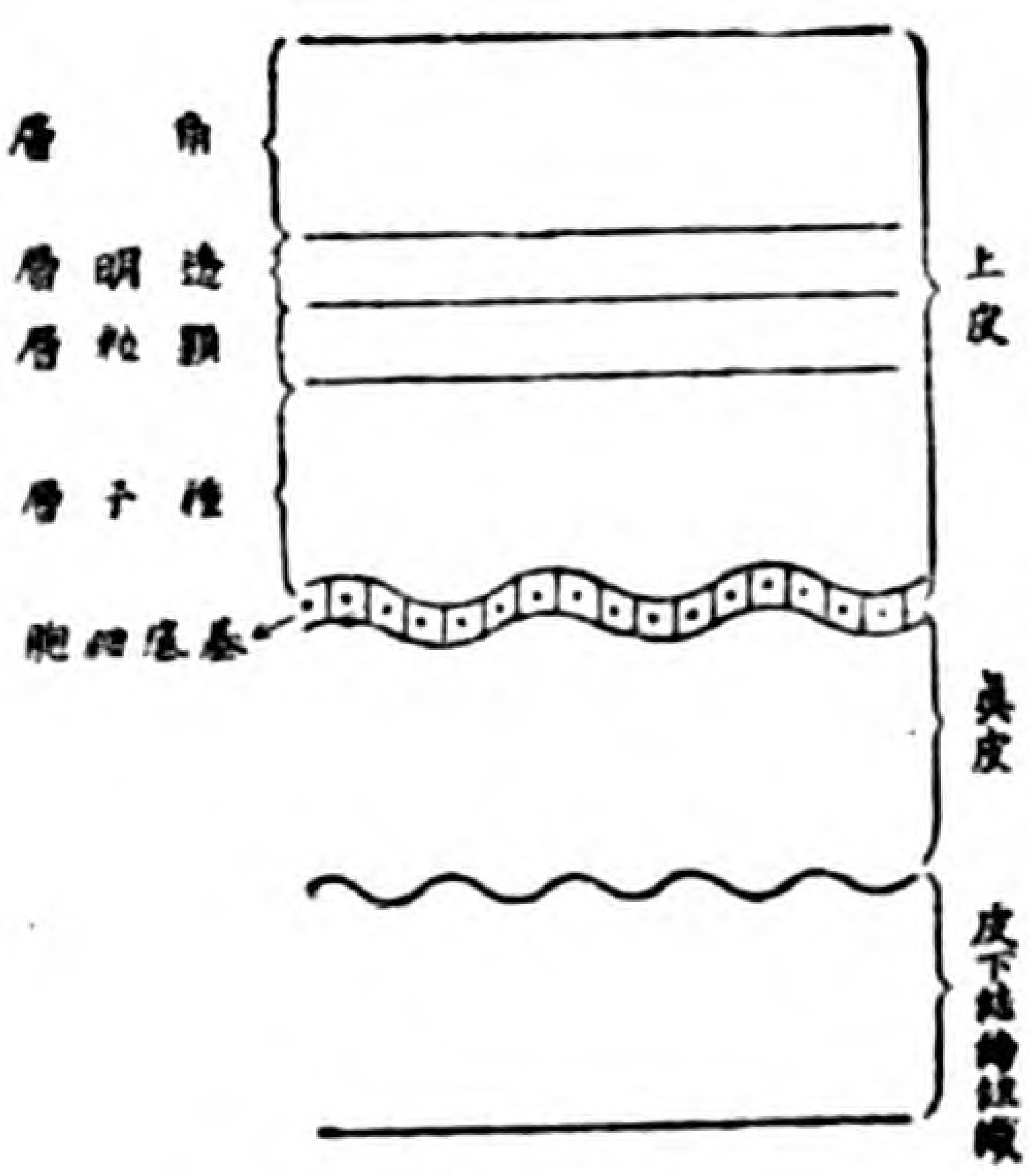
面白いことには、顔にある黒子の位置によつて、その人の體にある黒子の位置が略ゝ判斷されることである。卽ち顔の中の眉から上に黒子を所有してゐる人は、多く胸部以上に黒子を持つてをり、鼻孔から上の頬部にある人は、腹部又は貝殼骨以下の背部にあり、又、口唇の周圍に黒子のある人は、局部を中心として、その附近にもあると云ふことになつてゐる。これは百發百中とまでは行かないが、八十パーセント以上、的中する法則である。

昔、菅原道眞が、さる、やんごとなき御方の命によつて御肖像を謹寫したが、寸分違はぬ生寫しであるばかりでなく、臉の下の黒子までもキチンと描き出してゐた。所が、之れがために『道眞は高貴の方の肌を見奉つたに違ひない』と云ふ不審が

おこり、遂に奸人の讒訴の種となつたと云ふ物語が殘つてゐる。しかし、之れは今から考へれば、博學多才の菅公が、前上の法則を識つてゐたためであらうと思はれる。

三　黒子は什うして發生するか

皮膚の一部を切つて、この横斷面を調べて見ると、上皮、眞皮、及び皮下結締組織の三つの部から成立つてゐる。更らに上皮は、角層、透明層、顆粒層、種子層、基底細胞の五つの階層をなしてゐるが、黒子の發生に關係を持つものは、之の中の基底細胞である。



即ちこの部分に一種の酸化作用によつて色素が醸し出され、その色素の分量の多少によつて我々の皮膚の色に種々の差違が生じ、又、人種の差違が生じ、又、人種的色の區別もつくことになるのである。所が、この基底細胞が増殖して表面に擴がつて行く際に、ある特別な關係から、丁度、水彩畫を描くとき、間違つて繪の具が一點に凝ることがあるやうに、その中の色素が、ある一局部に濃く増殖することがある。勿論これは變則な生理作用であるが、これがある場合には黒子となり、又は、シミ、そばかすと云ふものになるのである。



中村吉右衛門の河内山宗俊

四　黒子の種類

黒子は性質上三つに區別することが出來る。

第一種は血管を持ち、隆起した大きな黒子で、多くは淡黒色を呈し、眞つ黒い毛が發生してゐる。彼の芝居で馴染の河内山宗俊が、うまく上野の御使僧に化け、松平侯を脅迫しての歸り路、大玄關で家人から觀破された高頰の黒子も、又、一ノ谷嫩軍記で、鎧櫃をせおつた彌陀六の正體を義經に見拔かれたのも、眉間にあるこの種の黒子である。觀相上でも、この種の黒子は凶くない黒子としてある。

第二種は毛細血管を持たない、隆起した黒子で、色は黒く鮮明で、形は比較的小さい。

觀相上問題となるのは、多くこの種の黒子であるが、その詳細は後に述べることにしよう。

第三種は隆起しない黒斑で、往々にしてシミ又はソバカスと混同され易いが、シミはその形が多く、色は褐色を帶びてゐるが普通である。又、ソバカスは顔面に圓形をなして群生する性質をもつてゐるのに反し、黒子は單獨に身體の何處にでも出來ることによつて容易に區別することが出來る

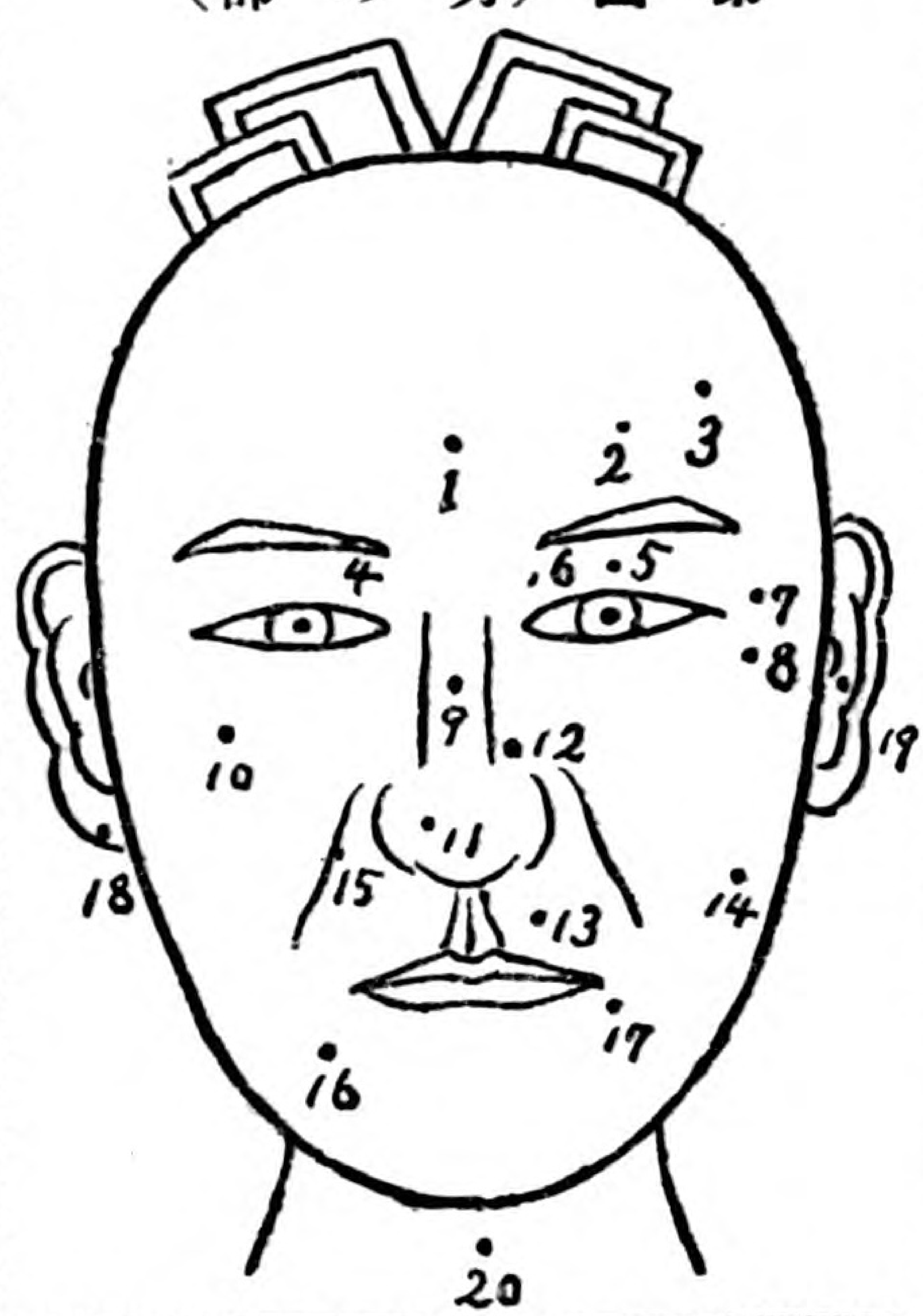
この種の黒子は觀相上、あまり問題にしてゐないやうである。


伊藤博文公

五　黒子の表情と運命觀

黒子は人體上の小さな斑點ではあるが、印象的なことはこの上もない。ソクラテスの黒子は、あの聰明な賢者の顔を滑稽化し、クレオパトラの黒子は香氣を發して、人を魅惑したと云ふ。まさか匂ひのする黒子もない筈で、これは匂はしいほど美觀を呈したと云ふ意味にとるべきであらうか、兎に角、黒子は美にも醜にも對者の感情の動きに多大の效果があるものである。從つて西洋では黒子のことをグランド・ボーテ（美の豆粒）などと云ふ艶麗な名稱をつけて大切にし、表情（エキスプレッション）の上に活かして働らかさうと工夫してゐる。所が東洋殊に日本では、黒子を一種の運命觀に結びつけて『あの人には泣き黒子があるから一生、不運だ』などと妙に氣にするものがある。

第一圖（男の部）



今、試みに、顔の黒子の位置による感情の現はれ（表情）と、東洋の運命觀（觀相上の吉凶）とを對照して見よう。これは興味のあることと思ふが、然し、あまり氣にしてはいけない。

イ　額の黒子

額の中央の黒子は、額があまり廣過ぎる人には、昔の黛と同一の效果があり、面積を狹める作用がある。普通の額の所有者にあつても、男は强い立派な感じを齎らすものである。が、女

は少し鋭過ぎるやうである。中央から稍ゝ左右何れかに片寄ると、小さいのは聰明に見えるが、大きいのは不快の感じを與へるものである。

所が、運命觀にも略ゝ同じやうなことを云つてゐる。即ち、額の中央の黒子は男は聰明、高貴、強さ、壓迫を現はし、社會の表面に起つて長となる相としてあるが、從順を美德とする時代の女性にはよろしくない。(第二圖1)の如きは妨夫の相と云つてゐる。(第一圖2)の所に黒黒のある人は、男は少年期、青年期には波瀾があるが、中年以後は聰明榮達し、多衆の信望を得るとしてあるが、女は再縁、或は妨父母の相と云ふことになつてゐる。(第二圖3)も同斷である。

又、生え際の黒子は、表情美の上から見ても、感心しないが、觀相上も凶い。(第一圖3)は不慮の死があり、(第二圖4)は女は難産するとされてゐる。

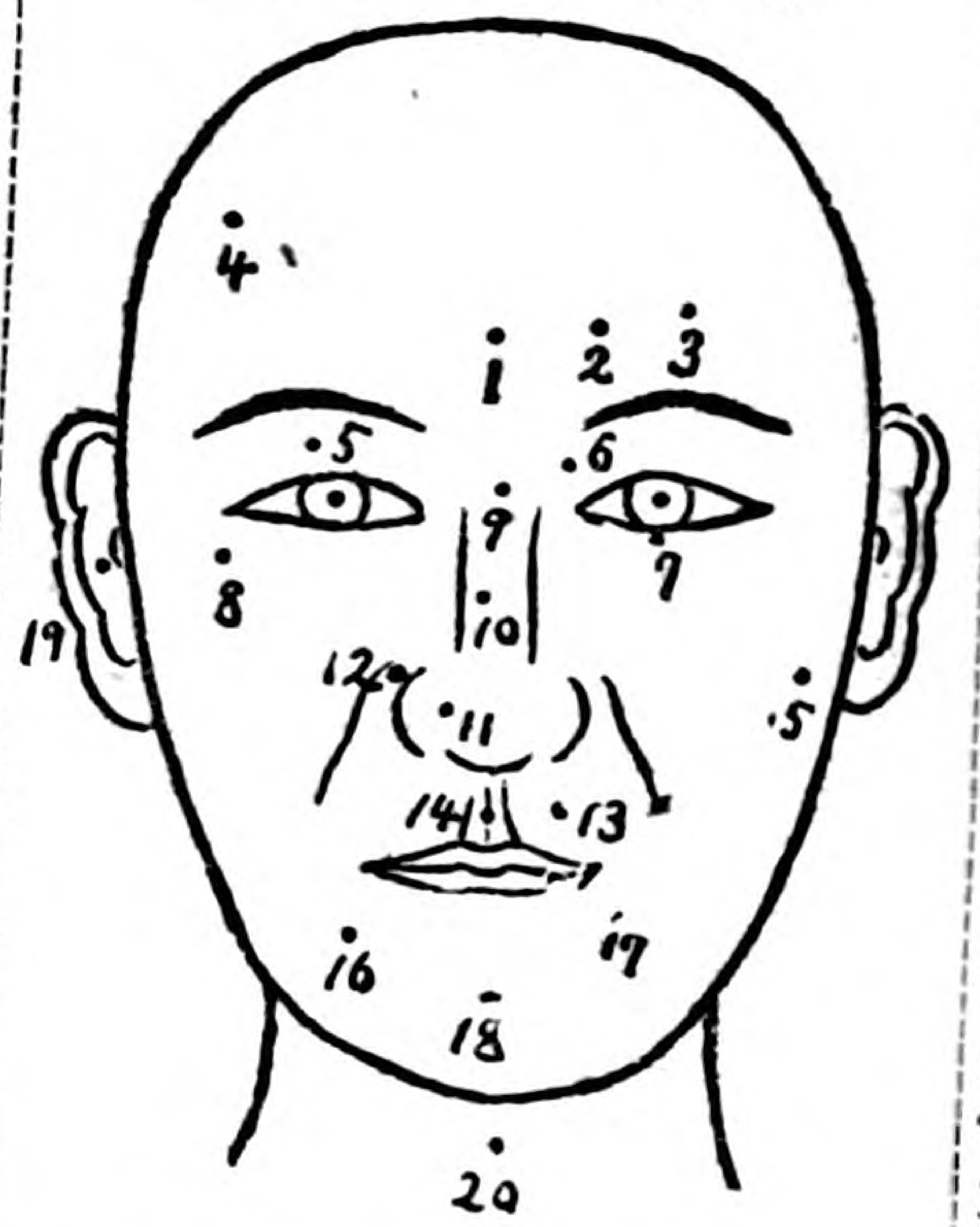


箕浦勝人氏

ロ　眉及び眼の周圍の黒子

眉に近い部分、殊に眉と眉との間にある黒子は、顏全體を強く鋭く見せるものであるから、優し味を尊重する女にはあまり感心しない。然し、大きな黒子になると、強い感情とは反對に、憂欝らしい感を齎らすものである。

第二圖（女の部）



眼の周圍にあるのは、男女共に、顏の嚴肅が害がれ、就中、眼尻の下方などにあるのは何となくその人に綻びのあるやうな、ゆる味を想はしむる。女性の下眼瞼にある所謂『小町黒子』(第二圖7)は不純な感じがつき纏ふやうである。觀相上も、この小町黒子は、男は財を散じ、女は夫婦縁定らず、好色にして男を剋すと云ひ傳へられてゐる。(第二圖8)も好色にして夫縁が悪いと云はれてゐる。

男の眉氣の中にある黒子(第一圖4)は長壽であつて、慈悲の相で、前田慧雲師のやうな高德の僧によく見かける所である。

涙道の黒子、世間の所謂『泣き黒子』(第一、二圖12)は表情の上からも陰氣に見えるが、觀相上もよろしくない。晩年、さびしい生活をおくり、家庭生活上にも恵まれぬ相であると云は

れてゐる。伊藤公もこの黒子の所有者であるが、この説が公に當篏るか什うかは疑問として、松島事件の箕浦勝人氏などはこの適例であるかも知れない。

ハ　頬及び口唇の黒子

表情美上、一番躍動するのは頬の黒子であらう。顔の筋肉のあまり動かない人でも頬に黒子があると生々しく見え、靨のない人でもそのあたりに小さな黒子があると靨と同じほどの愛嬌が生れるものである。これを部分的に云へば、頬の外側の下方にある黒子は優し味を表はし、愛情をまし、中央部のは如何にも快活に見え、口唇に近い下頬のそれは最も魅力的である。然し、それは何れも女性を標準としたことで、男には甘つたるく見え、權威が稍ゝ薄らぐやうに感ぜられる。

では、觀相上では什うかと云ふに、頬の外側（第一圖14）にあるのは財産上の運がある標式ださうであるが、中央の愉快黒子や、口唇に近い魅力黒子は可もなし不可もないことである。但し、あんまり口唇に接近した（第一圖15）のやうなのは、中老になつて災厄に見舞はれる相ださうで、口より下の頬にあるのは（第一、二圖16）聰明を物語るが、女性のそれは病患の標示となり、男は酒に惱まされるさうである。又、（第一、二圖17）のやうに口角のすぐ下にあると、僕婢に縁がうすい、庭掃除も臺所の用も自分でせねばならぬと云つたやうな譯。更に高頬の黒子（第一圖10）は男は奸凶の相で、河内山宗俊が最も當篏まつた好適例である。



三ヶ所に附け黒子した泰西美人畫

ニ　その他の黒子

上唇にあるときは、男女共に賑かな樂天的な感じを與へ、下唇のそれは一種の愼ましさを想はしむる。首、髮際、耳などにある大きな黒子は、一般に不快を感ぜしむる。

觀相上は、男の唇のほくろ（第二圖13）は左ほど吉相とは云へないが、女性のは男まさりな事業を成就し、生活に困るやうなことはないと云ふから吉相の部であらう。

女性の頤の黒子（第二圖18）は衣裳に不自由をせぬ。男の耳の垂珠のは（第一圖18）は財産上の運があり、又、親に孝行をする人の相である。男女ともに耳の中にある（第一、二圖19）のは聰明、榮達の吉相、首の中央にあるのは（第一二圖20）男は立身出世をするが、女は夫を殺すと云ふ恐ろしい相ださうで、昔、支那の則天武后にもこの黒子があつたと云ひ傳へられ

てゐる。

六 黒子の取り方

黒子は幾つあつても、醫學上は人體に少しも害をしないものである。然し、表情美や、運命觀から、又はその他の事情で取除きたければ次の方法を用ひるがいゝ。

雪狀炭酸、又は『マクラニン』（マクラニンは緒方氏の處方で、十%の苛性加里液の中に米粒を數時間浸しおき、透明となつた時に米粒を取出して、よくすりつぶしたもの）を木箸の先で黒子の上になすりつける。そしてすぐ、拭きとることにする。もし、一回の試みで綺麗にとれなければ二回でも三回でも同じ方法を反覆して差支ないが、この方法は素人療治は稍危險であるから、醫師に從ふが安全であらう。

その他、簡單に硫酸、硝酸、鹽酸のやうなものを少量塗つても取れる。化學美容院あたりでは苛性加里を用ひてゐるやうであるが、何れも有効である。只、藥品を塗るときには何れの方法を用ひるにしても、よく注意して黒子の頭だけに塗るやうにすることを忘れてはいけない。

黒子の種類の說明中に述べた第一種の、所謂、血管を持つたものは往々にして眞皮にまで食込んでゐるから、手術後、跡が殘るばかりでなく、餘程巧妙にやらないと失敗する。然し、第二種、第三種のものは、跡ものこらず、比較的手術も容易である。



米國女優ノーマ・シェラー
下唇の右に附け黒子した

七 附け黒子の起原

最後に附け黒子の話をしよう。

これは歐羅巴で、まだ種痘法の發見されなかつた以前、天然痘で痘痕がのこつた女性が、その醜さを隱さんがために考案したものであるが、黒と白との對照が、頗る調和的なので、後には痘痕も何にもない立派な顏の女までが、これを眞似、現今、西洋では、可なり流行してゐる。

十八世紀頃の附け黒子は、少くとも三點以上、左眼の上二つと、右眼の上一つとであつた。その他、頰につける分は、各自の好みによつて勝手につけたもので、今、殘つてゐる當時の美人畫などに見ると、五つも六つもつけてゐるのがある。然し

し、美の標準が違つた現今では、二つ以上は見うけられない。一つは眼の下の少し横、今一つは下唇の右又は左につけるのが普通であるが、顔の面積、髪の具合等の釣合ひから考へて、頰や顋にも附けてゐるのもある。ダンサーなどは背中の肩下のどちらかに稍大きいのを附けてゐるのを往往見うける。

一體に肥滿した人よりも、瘦せた人の間に流行してゐる。

日本でも近年キネマ女優などがこれを試みて、スクリーンの上に多大の效果をあげてゐるやうであるが、然し一般の女性には、今の所あまり見かけない。將來、社交界に活躍する婦人や、上流の人達が、かうした技巧を取入れる時代が來るかどうか、それは疑問である。

附け黒子の方法

佛蘭西では、人造的の黒子のことをムーシュ（蠅の意）と云つて、薄地の帛を染めて、天然の黒子の形に拵へ、化粧品店あたりで賣つてゐる。



大きな黒子で有名な映畫俳優天野保男



表情美から附け黒子した女優松井千枝子

色は深黒、青黒、淺黒等があり、皮膚の色、眼の色、髪の色等を考へて、調和をした色を選んでつける。大さも色々あつて、大きいのは直徑一分、通常は五厘位、形も●のと◆とがある。自然に見せたいときには●を用ひ、附け黒子であることを態と知らせたいときには◆を用ひるのが一般である。裏には絆創膏に似たねばりけのある藥品が塗つてあるから、一度貼れば容易に剝落しない。

が、この頃では、この方法の外に、普通、黛や睫毛を描くときに用ゆる液狀のデリカ・ブロー（Delica Brow）又はメーブルイン、（Maybl-in）を刷毛につけて塗り、棒の先で周圍を丸く黒子の形に修整する美容技術が發達して來た。

これはムーシュ以上、立派な本ものの黒子に見え、一寸手でなすつたり、泣いた位では剝げるやうな惧れはない。但し石鹼をつけて湯で拭くと、すぐ、綺麗に落ちるさうである。

（完）

これだけ知つても 一家の經濟

足袋を保ちよく穿く法

あまり足袋を毎日々々はきつゞけてゐますと三日位で直ぐ擦ずれがしてやぶれてしまひもう穿けなくなつてしまひます。その時にいつも破れる部分、つまりはなをのあたる所や爪のあたる部分へ白蠟をぬりつけ（はなをの下は表から、爪先は裏から）て穿いて御覽なさい、保ちがよくなります。

（兵庫 村木男三郎）

燃料問題

薪木はよく枯れたものを並べ焚とします。重ね焚より非常に德用です。一升の御飯を炊くに、次のやうな差があります。

重ね焚（火が長く燃える）
目方 百七十五匁
時間 二十九分

並べ焚（火が短く燃える）
目方 百四十三匁
時間 二十五分

一日一家で一升づつ三度御飯を炊くとすると、九十六匁、一年三十五貫あまり、一貫目十二錢として、四圓二十錢、全國一千萬軒の家々では大きいものです。

毛織物のしまひ方

（茨城 [illegible]くら子）

セルやネルのやうな毛織物をしまふには、新聞紙に包んでおくと、決して蟲のつくことはありません。

學校用品は親の手から

（岩手 府金勇子）

學校通ひは一家五人居りますから半紙畫用紙、クレオン、エンピツと卸値で買うて置いて、清書用の半紙でもクレオンでもみなそれぞれ使ひ古した品を持つて來るとそれに引き替へて新しい鉛筆なり畫用紙なりを代りにやることにして無駄をはぶいてゐます。

小兒のヒキツケに雪の下

（秋田 [illegible]）

小兒がヒキツケたりすると、親達は隨分あわてたりしますが、之には「雪の下」と言ふ草を揉んでたの汁を小兒の口に入れてやれば即効があります。狼狽して水を含ませても直ぐには治りませんが、「雪の下」の汁ばかりは奇效を呈します。耳鳴にも持續的に行へば、效能が顯れます。お試み下さい。

茶殼の利用法

（愛知 大和[illegible]）

一、乾かして燻らせば蠅が來ぬ
一、澤山たまつたら枕に入れる
一、炭の手を洗ふと綺麗に落ちる
一、よく煎じ出して永く使ふと頭髮が黑くなる
一、座敷にまいて掃くとごみが取れる
一、よく煎じ砂糖少々入れたもので、黑の洋傘を拭くと光澤がよくなる

陶器の修繕には

（宮城 [illegible]）

硝子器や陶器が破損すると大抵用をなさなくなりますが、之を手軽に修繕出來れば大變經濟的です。玆に其のつぎ方を紹介します。先づ普通の明礬を古い鐵匙の中に入れ、火に掛けて溶し、其の溶解物を破片に付けてつげば乾いた後に湯に入れても離れなくなります。

（群馬 三井三郎）

ニス塗の斑點を除くには

色づけがしてあつてニスが塗つてある卓子などに熱いお茶碗など置きますと、キッと後に白い斑點が出來て見苦しくなりますが、斯ういふ時には脫脂綿にアルコールを浸して其の斑點を輕く拭いて置きますと、綺麗に元の通りになります。

（兵庫 清瀬[illegible]）

家庭科學

日光消毒

光線消毒法にはX線ラヂウム放射線等に依る場合もありますが、手輕で一般的なのは日光消毒です。各種類の光線を含み紫外線なども澤山あつて殺菌力が强くありますが只物品器具を日光の直射する所に出しておけばよいといふのではありませぬ。其の品物の各部面を屢々日光の直射に曝し替へるのです。夜具の例で云へば裏、表、上、下を度々返して日光の直射面にさらさねば充分の效果はありませぬ。



鹽からの榮養價

鹽からは酒のお肴と定つてゐる樣ですが、食べた後、複雜な化學的變化を起し榮養價が多いものです。主なる點はカルシウム分を體内に供給する事で、カルシウムの注射やオスゲンの內服に優るとも劣らぬもの、其の上に食慾をそゝるので消化吸收の作用がよくなります。

深呼吸

普通一度の呼吸では肺の中の空氣は八割半位しか吐出されず一旦血液を淸めた不潔な空氣が殘ります。尙肺の隅々迄も新鮮な空氣が行かぬから其



の邊に病原菌が立籠り易くなります。時時深呼吸を行ふと一回の吐出量もずつと多くなり新鮮な空氣が隅々迄行渡ります。埃のある所空氣の冷たい所で行つてはなりません。霽れた朝など非常に心地がよろしいが一度の深呼吸には十回位を限度にするがよろしい。

家庭藥湯

入浴は身體を清潔に精神を爽快にし、健康によく、疲を癒します。風呂に酒石酸一〇重曹九米の粉六を混ぜた物を投じ泡立たせて入ると效果が非常に增します。其の量は普通家庭の浴槽で混合物を大匙に十四五杯でよろしい。毎日つかふには此の分量をアルコホルで捏ねた塊を澤山こしらへておくと便利です。ラベンダー油などの香料をまぜておくと香氣を放ち一層愉快になります。

新しい根と肥料

四月はもうダリアの植付時である。一つの球根で二芽以上あり形の整つた餘り大きくない勢の良い物の芽を切離し地下五寸位の所に元肥を施し一寸位厚く土をかぶせた上へ上向に植ゑ一尺位土をかぶせる。發芽につれ段々土を一寸位宛かぶせ二尺の高さにする。肥料は地中で醱酵して熱を出し、よく折角出た新しい根を腐らすから植物の植付には何時でも肥料の上へ土をかけてから行はねばならぬ。



木製家具の虫よけ

鏡臺や机簞笥などに虫がついた時にはその穴へ過クロール水銀の水溶液を注入して御覽。其の他の木製器具につく虫を防ぐにもこの液を刷毛で塗つて御覽。此の藥品は非常に殺蟲殺菌の力が強く而も白色ですから白い家具に塗つても着色したり汚染が出來たりする事は全然ありませぬ。然し此藥品の貯藏にはゼヒ硝子瓶か陶製の容器にしなければなりませぬ。



成功美談

藤山雷太翁

——裸一貫から實業界の巨頭になるまで——

綿貫六助

俊寛の豫言、雷太の名

わが國財界の巨頭藤山雷太翁は文久三年八月一日、佐賀縣西松浦郡有田郷に生れた。

丁度、その日は鄕內十數ケ村の祭禮で、八幡神社の境內は參詣の老若男女で充滿し、神樂堂には浮龍と稱する古式典雅な餘興が日ねもす繰返され、夜に入つて益ゝ佳境に入つてゐた。

今しも舞臺では、俊寛僧都が、姫君の生み落し給うた和子君を熟視し、

「源氏の家を再興するのはこの子である」と云ふやうな劇的最高潮な白をつゞけてゐる眞最中——一天俄かにかき曇り、耳を劈くやうな雷鳴と共に、篠突くばかりの豪雨が、群がる人人を叩きふせた。

その時分、神社に近き鄕主藤山覺右衛門氏の家では、夕方から產氣づいた妻女が產みの苦に惱まされてゐたが、突然、鐵板を碎くやうな雷鳴と共に勇ましい產ぶ聲があがり、玉のやうな男の兒が生れた。

『慶い、慶い。——だが、豪い音だつたと思うたら、あれを見い。庭の栴檀に落雷したと見えて大樹の幹が眞つ二つに裂けてをるわ。祭禮の夜に庭の栴檀に落雷し、男の兒がさづかつたと云ふのも何かの因緣であらう。雷、太し、雷太し——さうだ。この兒は雷太と名づけよう』と覺右衛門氏は欣んだ。

そこに、夜祭りを見に出かけてゐた家人が、濡れしよぼ垂れて馳け戻り、八幡社內の容子を物語つた。聞いてゐた覺右衛門氏はます〳〵悅に入り、

『あの時、神樂堂では俊寛が、源家の家運を豫言してをつたと云ふのか。それは、いよ〳〵緣起がいゝぞ。——この兒も源氏にあやかつて、傾きかけた我家の家運を挽回してくれるかも知れない』と云つた。

間もなく夕立は一過して、空には星が燦として輝き出した。

村祭の夜の歡びに加へて、藤山一家には、更に一層の賑やかな歡びがみなぎり溢れたのである。

虹の松原のくねり松

藤山家は藩主鍋島侯よりも舊く、八百年以前の祖先の墳墓さへある豪族で、十數ケ村のあらゆる世話やき、裁判のことから罪人まで取扱ひ、一時は頗る羽振りをきかせてゐたが幕末頃からだんだんと衰微し、明治維新となつて殆んど沒落に瀕した。

剩へ、藩侯に從つて江戸にゐた覺右衛門氏は眼病で歸鄕するの已むなきに至り、雷太少年が物心つく頃には不幸、失明の憂苦を味はねばならなかつた。中老過ぎての俄か盲目、その不自由さ、いらだたしさは勿論であるが、然し、人の子の親としての氏の心眼は決して盲ひてはゐなかつた。氏は五歳になる雷太を膝元に招いて、豫て諳誦してゐる四書五經の章句を講じて聞かせてゐた。

凩の吹きすさぶある冬の夜のことである。



藤山雷太氏

『今夜は一つおもしろい話をして聞かせよう』と覺右衛門氏は云つた。そして、話の本文にかゝる前提として、

『孟子がかう云つてゐる。自ら反みて縮くんば千萬人と雖、吾れ往かん――これは什う云ふ意味であるか、お前は知つてゐるか』と訊いた。

『それは――自分でよく考へて、いゝ事と思つたら、如何なる反對者があり、障害があつても、信ずる通りにやつて行く――と云ふことです』

『うむ。さうぢや、さうぢや。だが、お前にはそれがやれるか什うぢや』と盲目の父は倅の氣色を伺ふやうに小首を傾けた。

『きッと、さうします』と雷太は、ハッキリと、力強く答へた。

父は淋しさうな口元に、會心の笑みを浮べながら、

『では一つ、おもしろい話をして聞かせよう』

恁う云つて談り出したのは虹の松原のくねり松の由來であつた。

虹の松原は唐津の海岸にあるが、松は皆、頭を下げ平伏してゐるやうな姿をしてゐる。それは昔太閤秀吉が朝鮮征伐の砌、唐津に近い名護屋の地に本據を置いてゐたとき、ある日戰況を遠望するために濱邊に出たが、生憎松がジヤマをして向ふが見

えぬので「松よ、頭が高い。下にをれ、下にをれ」と大きな聲で叱りつけると、太閤の威光と意思の力におそれて、松が平伏したと云ふ傳説めいた話であつた。

幼さな雷太には、その無邪氣な話が面白かつた。それと共に、そんな話をして聞かせる父親の心持もよく解るやうな氣がし「自分も豐太閤のやうな偉大な人物になつて見せる」と云ふ決心が、油然として小さな胸を領するのだつた。

生命は新芽に移る

雷太の兩親は愛子の師匠を選ぶにも心を碎いた。最初の手習の師匠は居本唯念と云ふ寺僧で、漢籍や佛書にくはしく、且、人格高く、氣骨稜々、六歳の雷太の魂に大なる感化を與へた。

次の年には伊萬里に私塾を開いてゐる草場船山の門に學ぶことになつた。船山の家は代々の儒者で、殊に彼は學問を以て後に正四位を贈られた程の人物であるが、間もなく東本願寺の學問所に招聘せられて京都に向ふことになつた。門生たちは氏の學德を敬慕し、恩師に分袂れるに忍びざるものがあり、泣いて同行を願つた。船山も愛惜の情に堪へなかつたが、何を云ふにも三百人からの門生――何うすることも出來なかつた。已を得ず、その中の秀才三十人だけを選んで同行を諾した。

その筆頭第一に選ばれたのが、當時九歳の雷太少年であつた。雷太は欣んだ。しかしいよ〳〵となると心がにぶつた。盲目の父を故郷に殘して旅立つのが案ぜられたのである。――それとさとつた格右衛門氏は、

『何をためらつてゐるのだ。行け！』と叱りつけるやうに云つてから、

『先年、落雷した庭の梅檀は今、どうなつてゐるか』ときいた。

『大木は枯れ朽ちましたが、根元には小枝が密生し、新芽が春のうららかな風にゆれてゐます』と雷太は答へた。



『さうであらう。それが生物自然の理ぢや。生命の慈味は最早老木をはなれ、脈々と新芽に注がれてゐるのぢや。老人を顧みるために機會を失うてはならぬ』

『…………』

父親の情けある比喩は、希望に燃ゆる雷太少年を感奮興起せしめた。彼は有難涙と共に出立の用意をした。

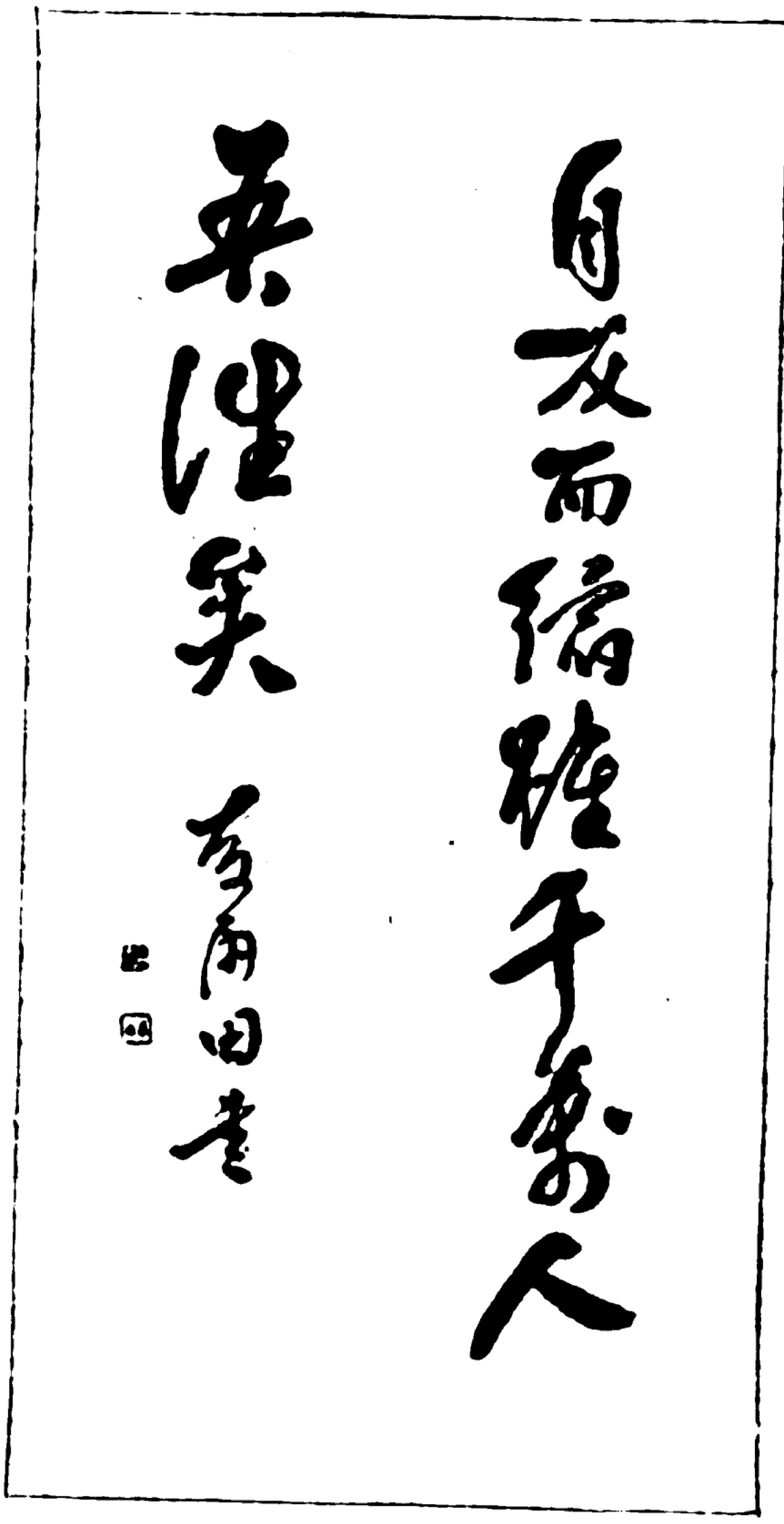
その日が來た。

母親は雷太に袴をはかせ、手縫ひのブツ裂き羽織をきせた。父は手さぐりに彼の腰に小脇差をさしてやつてから、

『おゝ、立派だ、立派だ』とほめた。

『立派と云うて、あなた、お見えになりますか』と母親は泣きたいやうな顔に、かすかな笑みを含めた。

『見える。よく見える。儂には心眼と云ふものがあるワ――然し、雷太、元氣よく勵かりやつて來ねばならぬぞ――治國平天下――自らかへりみてなほくんば千萬人と雖、吾れ往かんぢや。――信じて行へば鬼神もさく。自尊自重、――奮鬪してコイ』



藤山氏の座右銘　自ら反みて縮くんば千萬人と雖も吾往かん　藤山雷太書

熱にうかされた人のやうに、父親は一節一節強く句切つて、斯う云ふのだつた。

モチ、クラワンカ

雷太は甲斐々々しく草鞋脚絆に身を堅め、家人や多くの村人に見送られて、有田郷を後にした。時に明治四年三月である。

伊萬里湾はうら〱と霞んでゐた。名護屋にかゝると、幼かりし日、父から聞いた豊太閤の話を思ひ出さずにはをられなかつた。遠目には淺海の底に松の叢立ちが恰も虹を曳いたやうに見えるが、だん〱と接近して行くと、父の話のやうに松は皆、平れ伏してゐた。最早九歳、傳説をそのまゝ享け入れる年ではないが、然し緊張しきつたその時の雷太には、精魂込めた人間力の働きだけは、さうしたこともあり得ないとは思はれないのだつた。

驛路々々に泊りを重ねて陸路を三十里。門司の大里では、彼等を乘せるための船が、横腹をヒタヒタと長閑な春の漣にうたせて待つてゐた。

船は帆をあげて、波靜かな瀬戸内海をすべり出した。右には霞める四國の山々を眺め、左は山陽道の、得も云はれぬ景色がパノラマのやうに、それからそれと展開して少年の旅の心を慰めてくれ

るのだつた。夜に入ると、漁火隠見、時々進路をかへるのであらう、ギイと梶の音が響いてゐた。

雷太は、荒莚の船室の中で、いつの間にか眠くなり、自分の荷物に凭りかゝりながら、うつら／＼としてゐた。夢に入るものは、盲目の父の俤——傳説の唐津の松！

やゝたつてから、彼はけたたましい人の呼び聲で眼を覺ました。見ると、喧嘩でも吹きかけるやうな聲で、

『モチ、クラワンカ！　ダンゴ、クラワンカ！』とわめき立ててゐる。

『おい、川原！　川原！』と雷太は側に眠つてゐる學友をゆすぶり起して、

『あれ何だらう？』と訊いた。

『クラワンカ、クラワンカ！——モチを賣るのだらうよ。腹が空いた。買はうぢやないか』

『ウン』

二人は文久錢を出して餅を買ひ、頰張りながら、

『クラワンカ餅はうまいのオ』と笑ひ合つた。その時の餅のうまかつたことは今でも忘れないさうであるが、川原とは誰あらう、後、政友本黨の幹部となつた川原茂輔氏のことである。



大阪の淀川は曳舟で遡つた。京都についたのは故郷を出でて一週間の後——雷太が人生に歩き出した最初の旅は斯くの如き間ぬるいものであつた、——が。

松よ、嗤つてくれ

三十人の門下生は、京都の六條に新たに開かれた船山の塾に收容された。東本願寺では師を思ふ彼等の純情に感じて一人につき毎月一圓宛の學費を支給することになつた。雷太は郷里の父から月々五十錢の送金をうけてゐたので合計一圓五十錢が彼の學費の全部であつた。幾ら物價の安い頃であつても、あまりに少額であるが、然し、節約に節約して、彼はそれ丈けでやりおほしてゐたのである。

船山の教育は人格の修養を第一義とし、極めて嚴格であつた。「君は泉流を汲め、我は薪を拾はん」式のやり方で、拭き掃除から炊事は勿論、凡てが自分のことは自分でやるの主義で押とほした。ために雷太少年の柔らかな小さい掌足はザクロのやうにあかぎれが切れ、血がにじみ脹れ上つた。けれども、船山は見向きもしなかつた。學友たちも、『膏藥をつけよ』とも云はず、相變らず、交代に雜務にこき使ふの

だつた。

試膽會なども盛んに行はれた。十歳に充たぬ彼は、雨のそぼ降る夜陰に、郊外の刑場墓地あたりに一人でやられることもあつた。が、彼は指定の場所に目標を立て、從容として歸つて來た。

勉强の方法も亦、今日のやうな溫室的ななまぬるいものではなく、まるで蒲團綿でもつめ込むやうに無茶苦茶に學問を頭腦に押込んで行くだけなので、鈍い者にはさつぱり了解が出來ない。了解が出來なくても、ドン〳〵先に進んで行く――それは恰も野の寒菊にも例ふべく、枯れるものは枯れよ、凋むものは凋め、――雄々しく强い者のみが殘ればいゝと云ふやり方であつた。然し、雷太少年は、一番年少にも係らず、まけず劣らず努力をつゞけ、間もなく儕輩を拔き、蛟龍は終に池中のものたらざることを明かに證明した。

然し、ア、然し。天は什うかすると禍を以て人間を試さうとする。健氣なる秀才雷太の上にもこの試錬の鞭が振りおろ



されるの日がやつて來た。それは、曾て彼は肝臟を害ねてゐたが、『何、これしきのこと』と氣にも止めず、勉强を續けてゐたために、强度の神經衰弱を併發し、幽靈の如く瘦せ衰へてしまつたのだつた。

『死ぬまでやるのだ。書物を枕に打死するは學生名譽の戰死であらう』

彼は恁う思つて、衰弱しきつた心身を鞭撻してゐたが、師の船山は最早や默過することが出來なかつた。彼の考への無謀を說ききかせ、無理に宥めすかして、一應故郷に歸ることをすすめた。

恩師の命であつて見れば、已を得なかつた。彼は悲憤の淚と共に、學友たちと袂をわかち、一人、悄然として故郷の土を踏まねばならなかつた。

虹の松原の松は、失意の彼の前にも、相變らず、兩手をついて頭を垂れてゐた。

『松よ！　俺の腑甲斐なさを嗤つてくれ、嗤つてくれ』恁う云つて、彼はホロ〳〵と淚をこぼした。

嚴格な父親は、昔の藤樹先生の母のやうに、學業半ばに、すご〳〵と戻つて來た自分を叱りつけるであらうと思つて、ビクビク門を這入つたが、父はやさしく、『病氣ならば已を得ない。草鞋をぬいで早う上がれ』と迎へてくれた。案外の優しい言葉に雷太の胸は煮られるやう、尙、一層、辛かつたのである。

六年後の再起

雷太は鬱勃たる霸氣の志を抱きながら、空しく病を故郷に養はねばならなかつた。然し、これがため兩親の傍で、思ふさま孝養が出來ることはセメてもの慰めであつた。

何くれとなき兩親の注意の下に、養生を怠らなかつた結果、一年一年と快方に赴いたので、家事の餘暇を見ては讀書に耽ることになつた。その頃、彼は時勢の變遷を洞察し、漢學ばかりではいけないことを知り、獨案内を手引として英語を勉強してゐた。

明治十一年、彼が十六歲の春、長崎に師範學校が創設されたので、彼はその第一期官費生として入學することを許された。十歲の暮れから十六歲の春まで、殆んど五ケ年、行學を休めてゐた彼は、恰も牢獄に向ふ大鵬のやうな勢を以て猛烈なる躍進を初めた。唯念の寺小舍や舘山の塾でミッチリ仕込んだのだから漢文などは問題でない。その他の學課も餘裕綽々で、グングン學級を飛び越え、僅々二ケ年で最優等の成績で卒業したばかりでなく、直ちに母校の教師に選抜された。實に淡いほど氣味のいゝ頭腦の所有者と云はねばならない。

最初の月給は十五圓であつたが、四ケ年後には三十五圓となつた。明治十五年頃の三十五圓は決して小額とは云へない。平凡人ならば此所らで小成に安ずる所であらうが、彼は現狀に滿足することが出來なかつた。四年間節約して貯蓄しておいた月給の殘りを懷にして東京に向ひ、慶應義塾に入學した。時に彼、二十一歲。師範校の先生として落付きかけてゐた彼は、再び、破帽敝衣の書生に逆戻りしたのである。

その頃、郷里では婿養子の話が出て、彼は間もなく伊吹姓を名乘ることになり、養家から學費の補助をうけることになつた。

義塾の福澤先生は、當時の學界の新人であると共に、大人格者であつた。雷太は先生の人格を渴仰しつゝ大に新知識を吹込んで貰つた。六月の雨にうるほふ田稻の如く、彼の頭腦は、非常なる勢を以て世界的知識を吸ひ上げることに努めた。彼の雅號の雨田と云ふのは雷太の雷を二つに割つたのであると共に、さうした意味も含んでゐる。

その頃慶應義塾で大雄辯家と謂へば、誰知らぬものもなき雷太のことであつた。彼の名聲は、その昔、生家梅樹の樹を裂いた雷の如く塾内に轟いたのである。

二十六歲の縣會議長

義塾在學三年、首尾よく卒業して錦を故山に飾つたとき、兩親初め親類縁者のものが欣んだことは云ふまでもない。

彼はその年、長崎の縣會議員に當選、破竹の威勢を以て、翌年には議長に推された。明治二十一年、實に彼が二十六歲の春であるが、二十六歲の縣會議長の得意、思ふべしである。

長い間の懸案であり、難物視せられてゐた居留地事件に快刀

亂麻の解決を下したのは當時の彼であつた。日本全國に率先して、長崎市に水道を布設したのも彼であつた。世人は徒らに彼の異常なる果斷に驚嘆するばかりであつたが、然し、その間、彼の死力を盡しての綿密なる調査、夜を日についでの苦慮奔走はあまり口にする人はなかつた。

彼は、その功によつて同市から謝禮として五萬圓を享けたが、それを以て九州改新俱樂部を起し、西海日報を創刊して大に輿論の指導に熱中したが、何しろ、まだ血氣の青年である。案外な所に蹉跌があつて、翌年には全部この金を消盡してしまつた。加ふるに『あまりやり過ぎる』とでも云ふのか、伊吹家から離緣の問題が持ち上つた。

丁度、第一回帝國議會開會の機が迫つてゐたが、代議士に打つて出るには年齢が不足で、それも思ひ止まるの外はなかつた。

養家からの離緣、無一物、議員年齢不足、七十の坂を越えた盲目の父、心なき世間の人の冷笑、等、等、等、續々として彼の頭上に惱ましい問題が落ちて來た。



彼は大なる惱みを惱んだまゝ、サツパリと政界を斷念し、渾身、實業界に打つて出るべく決心をした。政治も素より大切ではあるが、世界の大勢から見て、新興日本の緊急事は殖産興業の確立である。民力の財的充實であると、彼は思つたのである。で、このことを父親に圖ると、

『最早や、親の指圖をうけねばならぬ年ではない。自ら反りみて縮くんば千萬人と雖、吾れ往かんぢや。所信に向つて突進むがいゝ』

と覺右衛門氏は力をつけてくれた。

事業の命脈を握るドクトル

三たび、雷太は老父母を殘して故山を後にした。そして東京に出るや否や、早速手づるを求めて三井銀行員となつたが、間もなく三井家の大立物中上川氏の認むる所となり、抵當課長の椅子を與へられた。偶〻、同行改革の議がおこつたので、彼はその整理の大役を仰せつけられ、約一ケ年にして、見事、その實績をあげた。

整理の結果、三井の所有に歸した芝浦鐵工所の長となり、芝浦製作所と改稱し、千二百馬力の蒸氣機械を据付け、技師を歐

米に派遣し、抄紙機、蒸解罐、煙突等の大革新にかゝつた——と、恁う書いて行くと、平々坦々のやうであるが、實はさうでない。この芝浦製作所が三井の手に落ちた時には組織設備も至つて幼稚で、内部は少からず混亂してゐた。彼が大計畫を立てるに及んでも、有力な反對意見が續出し、又、職工のストライキなども頻發した。然し、千萬人と雖、吾れ往かんである。所長雷太氏は飽くまで所信を斷行し、ストライキの首謀者を馘り、又、顧問の田中久重氏の首までも切つてしまつた。久重氏はこの製作所のもとの所有者で、且、雷太氏の女房役たる副所長守谷吾平氏夫人の媒酌人といふ關係にあつたに係らず、情實に囚はれず斷々乎としてやつてしまつたのである。ために、氏に對する反感、脅迫は頗る猛烈を極め、幾たびか刺客の刄に殺されさうになつたので、社では氏の身邊を氣づかひ、壯士をつけんとしたが、氏は破顏一笑、

『死ぬことを考へては半日も生きてをられない』とばかり、泰然自若、ますます難局に膺つて勇猛心をふるひ起したのであつた。蓋し、これ、往年、船山塾の試膽會の賜であり、嚴父の教訓の感銘であらねばならない。

芝浦製作所を泰山の安きに置いた氏は、更に澁澤榮一氏の勸誘に應じて王子製紙の專務取締役の椅子についた。

今日の王子製紙株式會社は大盤石の如く地ゆるぎもせぬが、その頃は矢張り左前であつた。

氏は先づ會社内部に向つて整理の大斧鉞を下してから、製紙原料の選擇に鋭意し、四方の産地に技師を派して調査せしめた。

そして何れも氏の意を充たすものが見出せなかつた中に、又しても氏は頑強な脊髄病のために病床の人となり、寢起きさへも自由を缺くの憂き目に遭遇した。然し、氏は病床にありながら事務の曠を空うせぬために社員を引見し指揮を續けてゐた。

適ゝ、豫て信州に派遣してある技師の報告書に接したので、一讀、再讀、頗る有望なるを察知したが、素より單なる報告書のみにて決斷することは氏の氣性として出來ない。旅行したき旨を述べ、醫師の意見を求めたが、醫師は呆れて、

『以ての外』とばかり、絶對安靜を嚴守すべきことを申渡した。

然し、一身のために會社の事務を澁滯せしむることは忍ぶ所でない。職を辭するか、身命を賭するか、二つの一つであるが、事業熱の旺盛なる氏は到底前者を選ぶことは出來ない。

氏は蹶然、病床を起ち、驚き呆れる家人を尻目にかけ、數人の看護人に護られて信州に旅立つた。そして、馬も車も通ぜぬ深山を人夫の脊に負はれて調査にかゝつた。野營二ケ月餘、綿密なる實査をとげて東京に戻る時には、不拔の意力が病魔を征服したとでも云ふのか奇蹟のやうに重病は去つてゐたのだつた。

實査の結果は甚だ良好であつた。早速、氏は原料木材を彼地より仰ぎ、生産に着手したのが、實にこれ、今日、王子製紙の基本事業とも云ふべき新聞紙用卷取紙の原料パルプとはなつたのである。

行くとして可ならざるはなし、正に氏は事業の舵をにぎる大

ドクトルの感があつた。

榮光輝く晩年

最後に、氏をして「日本の事業界に藤山雷太あり」の金箔をつけしめたのは、彼の日糖整理事件である。

當時、大日本製糖株式會社は、負債千五百萬圓に達し、酒匂社長は責を負うて自殺し、磯村專務、秋山常務は入獄の悲境に陷り、收拾すべからざる危機に瀕してゐた。加ふるに同會社の興廢は一般事業界の消長に影響し、且つ、株主には外人多く、日本の榮辱にも關するので世人の憂慮は一通りではなかつた。この時に當つて明敏、敢爲、仁俠、義膽、燃ゆるが如き氏に整理改革の使命が下つたのは、正に天祐と云つても過言ではあるまい。

然し、一たんは引受けたものゝ、流石の氏も社内の亂脈を知ると共に首をひねらねばならなかつた。容易なことではないと思つた。――だが、困難であれば困難であるだけ、事業的興味が湧き、勇氣は百倍するのが氏の生命力である。氏は十年計畫を以て、これに臨むことにした。

熟慮又熟慮。努力又努力。水も漏らさぬ周到なる注意を傾け、整理に着手したが、僅か二ケ年の後には株主配當を發表し、世人を啞然たらしめた。

『何だ。空景氣のタコ配當だらう』などと云ふものもあつた

が、決してさうでなく、五ケ年を越えずして元利二千萬圓に近い債務の支拂を全部了し、堂々たる今日の大日本製糖株式會社たらしめ、現に氏はその社長である。

その他、氏は八十萬圓の私財を抛つて帝國商業銀行の危機を救ひ、約百五十萬圓の藤山圖書館を建てて工業界の進展を圖り、又、百萬金を投じて支那に泰東同文局を創立し隣邦友國の指導に任じ、更に時局經濟調査會、東京風水害救濟會、東京救濟會等を組織して社會公共のために力を惜まず進んでは日米國交の親善のため盡瘁する等、天下國家に貢獻する所、一々枚擧の遑がないほどである。されば偉功によつて大正八年には藍綬褒章を賜はり、現に勅選せられて貴族院議員である。

氏は今六十六歳。刈込んだ半白の髭、慈味溢るゝ眼眸、秀麗なる風貌、その間に儼として冒すべからざる威容を藏し、眞に渾然圓滿の老紳士である。

昨年の初秋、翁は久しぶりに郷里有田郷に歸郷された。その昔、クラワンカ餅に舌鼓を打つた大里の海の帆船は汽船に變つて、耳を貫く汽笛は、同地大日本製糖の大工場に反響した。唐津の虹の松原は、悲喜を抱いて彷徨した幼時の如く、相變らず平伏して偉勳者を迎へた。庭園の梅樹の新芽は、六十年の歳月を經て天を摩するの大樹となつてゐたが、根元には尚、枯朽した老木が大樹を抱きかゝへてゐた。それに引變へて人の命はあまりに短かく、氏の嚴父は、慈母は、モウこの世の人ではなかつた。翁は兩親の奥津城の前にぬかづいて感慨無量、暫し少年の往時に歸り、思ふ存分、涙されたのであつた。

（完）

理想の美人

◇古代ギリシヤの理想美人

古代ギリシヤで理想的美人と認められた型を、現代の科學で精細に解剖して研究してみた所に依ると、完全なる美人には左記の體格を備へてゐた。

身長凡そ五呎五吋。腰圍二呎四吋。胸圍三呎四吋。腕の太さ一呎三吋。股の太さ二呎四吋半。體重十六貫七百匁。

現在迄殘つてゐるギリシヤ彫刻の逸品は、殆んどこの型形に違はぬさうである。

◇日本に於ける美人型

一瓜實に二丸顔、三平顔に四面長、五痘痕、六目つり、七頬燒け、八眇、九禿十缺唇。

或は又一瓜實に二丸顔、三平顔に四長顔、五まで下つた馬の顔。

又或地方では一瓜實に二丸顔、三に角顔、四に面長、五盤臺に六がんち、七みつちや、八でぼちん、九顔なしに十しかみ。

男に對しては、一押、二金、三姿、四程、五藝とも云ひ、また一押、二金、三男とも、或は一閑、二金、三男とも云ふ。


武藤山治氏

大國民たるの修養

武藤山治

如何程澤山な理想家や大政治家が出ても、國民の總平均が健實なる精神を持たなければ其國民は大國民たるの幸福を享受することは出來ない、幾多の大理想家や傑出した政治家が輩出した歐洲の諸國民が、かう言ふ際立つた大人物の少ない彼の英國に牛耳を採られて居る主因は國民の總平均に於て劣つて居るからである。

獨逸のルドルフ・キルシャルと言ふ人が最近英國の國民性に就て書いた書物の中に英國民の偉大な點を能く言ひ表はして居る、『英國民は天才的人物の國ではないが、國民が總平均して健全である、英國は健全なる精神力を素直に啓發して行く國である。彼等は詐かしい事に心を勞せぬ國民である從つて其の精神はいつも明快で時には驚くほど明徹であり、單純にして而かも極めて周到である、考へるにも話すにも又書くにも整然と計畫を立てゝ水晶のやうに透明である、思想や科學の無限の領分と其の日〳〵の差迫つた實際問題とを巧妙に調和して行く即ち實行可能を尊ぶ精神と人間の高尚な修養とを能く結付けて行く唯一の國民である』と書いて居る。

露國共產主義者の使嗾によつて生じたと言はれる昨年の總罷業の勃發時に、英國に於ける驚天動地の騷動を通信せんとして、歐洲の新聞記者連が飛行機に乘つて英國へやつて來た、すると驚いたことには英國の各地では平氣に公衆と勞働者とはフートボールをやつてノンキに遊んで居るのを見て意外に感じたといふことである、英國人は昔から斯う言ふ風にイキマイて來る外國人を煙に卷いてしまふ偉大な力を持つて居る。

つまりそれは國民が價値なく實行の見込のない空想に心を迷はすことなく常に獨立自助の精神と沈着不動の如何なる誘惑にも打勝つ強い自信力を國民の總平均が持つて居るからである。

英國の自治制度や憲法政治が他國に比し能く行はれるのは英國民の頭にかゝる貴い精神が宿つて居るからである。

吾が國民が學ばねばならぬのは英國民の總てを支配する此の自治精神である。



昔ばなし

大倉鶴彦

○明治五年私が、歐米視察から歸つて大倉組商會を設立する時、津輕藩から、資本金のうち、五萬圓を出してくれたことがあつた。

と云ふのは、明治元年、津輕藩が、鐵砲がなくて困つてゐる時に、私が、その急に赴いて、藩の爲につくしたと云ふ關係があつたからであるが、その大倉組設立の時に、津輕藩の西館と云ふ人から、一人の青年を紹介された。

會つて見ると、なかなかしつかりしてゐて、如何にも前途有望の青年、是非外國へ行つて勉强して見たいと云ふ希望なので、私も大いに贊成し、本所の江戸屋と云ふ古着屋から、古洋服を買つて來てやつたりなどして、外國行の世話をしてロンドンにある私の店へもこの青年の爲に便宜をはかるやう云つてやりました。

この青年は誰あらう。今の珍田伯その人だつたのです。

○

たしか明治八九年の事だつたと思ふ。三井の大番頭の一人が、商賣用で、大阪に行き、西區にある小さい公事宿に泊つた。公事宿は、今で云へば、裁判や監獄などに用のある人が、泊る宿屋である。

ところで、この大番頭さん、この宿に泊つてゐるうちにその宿屋の若主人と懇意になり、氣が合つたものか、若主人はその宿屋を他に讓つて、例の大番頭の紹介で、三井に入つた。

この若主人は、今の大日本麥酒社長の馬越恭平翁、それから之を紹介した大番

寸珍警句集

北島利男

○劍で撲りつけるよりも、笑顏で脅せ。(シエークスピア)

○魚と客とは三日を過ぎると鼻につきだす。(オランダの俚諺)

○凶日とは惡く費した日のことである。それより他に凶日はない。(トックヴイル)

○賢者は聞き愚者は語る。(ソロモン)

○雲の通り過ぎるまで待て。(ポルトガルの諺)

○人に忍耐する以上に、己れに對して忍耐せよ。(フランシス)

○眞理は喝采では造れない。是非は投票では定められない。(カーライル)

○人を疑うて信ぜぬよりは、人を信じて欺

頃は、今の益田孝男であつた。

○

御一新前、私が麻布飯倉の鰹節屋に奉公してゐた頃、日本橋小舟町の兩替屋の若者と知り合ひになつた。

その若者は、會ふたびに、熱心に、商賣の話をする。でその頃よく、本町一丁目の茶飯屋へ、この若者と一緒に辨當を食べに行つて、茶飯にあんかけ豆腐、味噌汁、澤庵で天保錢一枚を出し合つたものだが、この若者が、しみじみと、

『私は、人形町の大通りへ油屋と兩替屋の大きい店を出したい、それが一生の願ひだ』と、口癖のやうに云つた。

そのうち、件の若者は、日本橋小舟町のとある四ツ辻へ露店を出し、戸板の上に小錢をならべて兩替屋を開業したが、その辛棒强いこと、働くこと、見る〱うちに人形町通りに小兩替を開くまでに漕ぎつけた。

これが先代安田善次郎翁であつた。

○

明治二十年の櫻の頃だつたが、あの時代は條約改正をする手段として、何でもかでも外國のマネをしたものだつたので、時の首相伊藤博文公の官邸に大夜會を開き、そこへ朝野の紳士淑女三四百人が、集つて大假裝會を開き、外國の公使を招待すると云ふ趣向の催しがあつた。



馬越恭平翁



安田善次郎翁

ところで、伊藤公は、伊太利ヴェニスの貴族、公の令孃がイタリーの田舍娘、曾我兄弟は末松謙澄氏と鍋島桂四郎氏、井上馨外相は、三河萬歲と云ふ扮裝だつた。

すると、そのあとへつゞいて、よく肥つた、堂々たる山伏姿の一人が出て來た。勸進帳に出て來る山伏姿よろしくである。

かれる方がましだ。(ペスタロッチ)

○自分自身に勝つより大きい勝利はない。(ユーゴー)

○神が人から物を奪ふのは、より以上のものを與へんためである。(ウイルコックス)

○艱難なくしては、神も英雄を作ることは出來ない。(ブース大將夫人)

○生きるとは呼吸をすることではない。何か爲すことである。(ルッソー)

○悲痛は頭腦を老いしめるが、心を聖くするものだ。(バレー)

○天國を作る心が、また地獄も作る。(ミルトン)

○人の元氣を一番消耗せしむるは一家内の細事である。(海舟)

○一人のよき母は千人の教師に勝る。(獨逸の諺)

これが、今の澁澤さんであつた。――イヤその頃のことを思ひ出すと、實に面白い。

○

それからこれもその頃のこと、鹿鳴館のダンス、ある夜私が例の如く見物してゐると、下のダンス場に、ひときは目立つ一組のダンサーがゐる。

二人とも男だが、一人は力士のやうな大男、それにひきかへ一方は、人一倍ヤセ細つたヒョロ男、それが二人手をとり合つて一生懸命に踊つてゐるのだ。

その組合せが妙なので、見てゐるものは大騒ぎ、誰だらうと云ふのでよく／＼見ると、この大男は陸軍大將の大山巖さん、片方のヤセ男は、時の東京府知事松田道之さんであつた

○

今の丸の内は、以前は三菱ケ原と云ひ、その以前は、大名小路と云つて立派な上屋敷があつた所である。

で、御一新後は陸軍省の所有地であつたが、明治十九年、陸軍省は、兵營を諸方に建てる爲に、急に百二十二萬圓の金が要ることになつた。

その爲、所有地の大名小路の土地を賣つてその費用にあてると云ふので、先づ私に、その交渉があつた。

が私には、土地のことはよく分らないし、それに非常に廣い地面なので、一應これを澁澤さんに相談すると、『自分も土地のことは分らないから、この道に明るい渡邊治右衛門君（今の渡邊銀行の設立者）に相談して見よう』と云ふので、早速渡邊さんに話して値をつけて貰ふと、坪八圓五十錢以上には買へないと云ふ意見である。



澁澤榮一子



大山巖公

奇談奇語 皮肉諧謔物語

すぐこの通り！

ルイ十四世が或る時、自作の詩を二つ三つ詩人のボアローにお見せになり、『出來榮を批評してくれ』と仰せられた。

その時ボアローは、

『陛下は何一つお出來にならぬ事はございませぬ。まづい詩をお作りにならうと思召せば直ぐこの通りに出來上ります』

應酬

アメリカの政治家エー・エッチ・スチーブンズは體量がたつた九十四斤（九貫目足らず）の小軀であつたが、それでも人々から貫目のある人として政界に重きをなしてゐた。

或年の議會で彼は一政敵と烈しく議論した。その相手は並外れた巨人で、スチーブンズを脚下にハッタと睨み据ゑ、

『君みたいな小つぽけな奴は一嚥みにのんで了ふぞ』と怒鳴つた。

するとスチーブンズは、『若し君が僕を嚥み込むと、君は君がこれまで頭に容れてゐた

ところが、陸軍の言ひ値は坪十一圓四十錢、これだけに賣らなければ、百二十二萬圓にならないと云ふので、私はその中をとつて坪十圓につけて見た。

しかし渡邊氏は迚もさう奮發してくれませんし陸軍もその値では賣らない。

そこで私は、陸軍省の會計をやつてゐた川崎（仮名）さんに、

『これは岩崎彌之助氏に買はせなさい。何故なら、先代彌太郎さんは、西南戰爭の時に、非常に陸軍の御世話になつてゐる。だがこれは直接岩崎家へ申込んではいけません。先づ財政家の松方正義さんにお頼みして、松方さんから岩崎彌之助氏に話させるといゝ。屹度出來るでせう』と云つた。

そこで川崎さんが松方さんに話し、松方さんが岩崎彌之助氏に話したが、その勸說が今から考へると實に面白い。

松方さん曰く、

『あの土地は、いまに坪二十五圓の値は出よう。買つておいて損はない。君、坪二十五圓だよ』

恐らく松方さんも、坪二十五圓になるかどうか分らなかつたのだらうが、是非買はせる爲に、二十五圓と云ふやうな、當時としては途方もない値が出るなどと云つたのであらう。

しかし、土地に大金を固定させることは、その頃でも、餘り贊成しなかつたから岩崎家でも、餘り氣がすゝまなかつた。



岩崎彌之助　　松方正義公

しかし、前の縁故もあるので仕方なく受けた。

これが、今日の丸の內、昔の三菱ケ原で、今日では坪千圓だつて賣りますまい。

—完—

よりも遙かに多量の腦味噌を頭に持つことになりませう』

眞面目な時に

マケドニアの王フイリツプが或る婦人を裁判した。もと／＼婦人には何の咎もなかつたが、王は一時の怒りにまかせて有罪の宣告をした。婦人はもとより不服であつた。

『陛下、妾は控訴をいたします。』

王は『この上誰に控訴するのだ』と云つた。

『國王フイリツプ陛下に致します。併し陛下が眞面目でゐらせられて、人の言葉をよくおきゝ取り下さいます時に致します』

すると王は忽ち物柔かな顏をして、『わかつたわかつた、お前は無罪だ』と前の宣告を取消した。

結構眠れる

詩人マレールブは或る日ルーアンの大僧正に招ばれて晝の御馳走になつたが、食卓を離れるとその儘こくり／＼と居眠りを始めた。大僧正はこれから說教する所なので、マレールブをゆり起して聽聞しろといふと、

『眞つ平御免を蒙ります。私はそれを聽かずとも結構眠られます』



萬花地獄

吉川英治作
伊藤彦造畫

飛躍する莊八

さて、一方では。

とかげ鞘の段之進と腹心の典六を連れて、あれから路を急いだ司馬大學が、御代崎へ歸り着くとまもなく、駒木家改易の幕府の內意が、非公式に、甲府番城の手をへて陣屋の山へ內達された。

なぜ　これが非公式に沙汰されたかといへば。

改易とはいへ、御代崎一萬石は、一時、天領預かりといふ名目に代るので、大內記の病が平癒するか、適當な世繼が立つて、領政をとるにさし閊へない道がつけば、公邊の意向次第、家名再興の餘地だけはまだ殘されてある故であつた。

『さあ、この化物屋敷にゐるのも、あと四五日の間だな』

陣屋の奧の丸に這入つて、大學は、傍若無人にかう言つた。

そこには、山名典六、とかげ鞘の段之進、ほか七八名の侍が車座でやけ酒をあほツてゐる。

『御陣代にも、さすがお心殘りでございませう』

典六が有合せの相槌を打つと、苦い顔をして、

『ばかを言へ！　仕事はこれからだ』

と、大學も大杯をとつて、酒を注がせ、一息にグーッと飮み

下した。

　きのふ甲府番城の天領役人に、すべての引渡しを濟ましたので、けふからは大學初め、惡人の一味は、一朝にしてみな無祿の浪人。

　逸早く他國へ去る者、あとの役付きに殘る者、離散瓦解の騷ぎも濟んで、さすが羽振をきかした陣代の身邊も、秋風落寞の觀がある。

　だが、大學は覺悟の前だ。

　江戸表を立つ時すでに、水野出羽守から、甲府の内意を洩れ聞いてゐたので、今さら騷きも慌てもしては居ない。

『おれの運の開きはこれからなのだ。見てゐるがいゝ』

　かれは強情我慢に言ひ拂つて、こゝを立退く支度をして來た。けれど――この陣屋の山を立ち去るとも、萬花多寶塔に持つかれの執着が少しも薄らぐことには成らない。

　むしろ公役の假面を剝ぎ陣代の絆をすてゝ、自由な浪人となつた方が、これから先、萬花多寶塔の秘庫をひらく目的には、都合がいゝとさへ考へてゐる。

『おゝ所で、御陣代――』

　と、典六がまた、何か思ひ出したやうに杯を置くと、大學は、

『ウム？……』と向き直つたが、叱りつけるやうに、

『陣代と呼ぶなと言つてあるのに、いつまでその口癖が取れないのだ。おれはもう素浪人の司馬大學だよ』

『は。……で大學樣』

『なんだ』

『あのお吟と大内記の身の處置を何うしたものでございませうか』

『お吟か？……』と考へたが、『お吟の身はどうにでもならう。たゞ併し、始末の惡いのは大内記だ』

『いつそ、多寶塔の中へ押し込めておくことも成りますまいが』

『無論、何うにか處分をして置かないと、今に、甲府城の天領役人が乘り込んで來た時に、此ツ方のボロが露現するで……おれも考へてゐるのだが、何せいあゝいふ代物だ、誰かいゝ智慧があつたら貸してくれ』

　默つて聞いてゐた投之進は、片目の顏にうすい笑ひをゆがめて、

『そんな厄介な代物なら、いツそ、殺してしまふが可いぢやねえか。何なら、おれが引請けてやつてもいゝ』

『だが……さうも成らない』

『なぜ？』

『あれは、多寶塔の寶庫を開く鍵のあり所を知つてゐる――光江を呼びよせる囮だからだ』

『だが、その光江の體も、花父江田之助が攫つて行つて、おれから何處へ隱してしまつたものか、今ぢや皆目その見當もついて居ねえが』

『それだから尙のこと、大内記を生かしておきたい……。あれを囮にさへしておけば、いつか光江は、三日之助の所を逃げても、きつと親鳥戀しさに歸つて來るにきまつて居る』

『なる程、そいつも一理があるなあ。』

と言うて自分達が、この陣屋の山を去る日限り、大内記の身も、あの塔内に殘して置くことは許されない場合なので、その處分と立退き方に、酒の醉も發せず、頭を痛めて相談に耽けつてゐた。

……………

天佑であつた。



それがかれには僥倖な時刻であつた。

ちやうど、陣屋の山で大學たちが、奥の丸の一室を閉め切つてゐた頃、——小鳥のやうに駒飼の丘を澤へ向つて馳け下りて來た吹矢の莊八！

神仙川の溪流の石を、ピョイ、ピョイ、と河鹿のやうに飛び越えて渡ると、向ふの澤へ取ツついて、忽ち深い檜林の中へ驅け込んで見えなくなつた。

と思ふと——あの小ツぽけな莊八の姿が、なほ小ひさく遠ざかつて、檜山の中腹に禿げてゐる材木の伐出し道にあらはれる。

そこで莊八、手をかざして、孔雀の脊なかのやうになだれてゐる笹子の尾根を見下ろしながら、

『——あ、見えら！』

と快聲を發したが、幸安に戒められてきたことばを思ひ出したものであらう、口を抑へて急にあたりを見廻した。

萬花多寶塔の姿がすぐ目の下に見える！形のいゝ塔の建築線、古色を帶びた青銅の屋根、薄雲の膜を破つてさす秋の陽にキラキラ光る四垂の瓔珞、——それが孔雀色の檜の群綠と、はぜ、うるし、などの雜木紅葉にとり卷かれて、すぐ莊八の足元に見



下ろされた。

『ウム、もうすぐそこだ！　うまく大内記樣といふ殿樣が、あの中から顏を見せて居てくれるといゝがなあ』

と、莊八は胸を躍らせて、今度はまた山の尾根へ向つてその傾斜を馳け出した。

手斧窓の白い顏

濫木帶から暫く降りてゆくと、道はまた深い森へ這入つたが、だいぶ勾配がゆるくなつた。

山鳥がホロ〳〵と啼いてゐる。

眞つ黄色な柏葉樹や赤い蔓草の實が、紗のやうに濃い色をして、晝もかわかぬ露に濡れてゐた。

『靜かだなあ――氣味が惡いほど靜かだ』

莊八は蔓草の中の道を拾つて、やつと、陣屋の山の北裏にあたる柵ぎはへ近づいた。

自然木を組んだ高い柵には、蔦や雜草がいちめんに絡んでゐた。それへ取ッついたかと思ふと莊八の體は、栗鼠のやうに柵を跳ね越えて、多寶塔の影を目あてに熊笹を

分けて行つた。

だが、柵は越えたもの丶、陣屋の山の中は笹子の裏山とあまり變りがない荒れ方である。莊八はいよ〳〵多寶塔のすぐ近くまで忍び込んで行つたが、そこと塔のある向ふの丘との間には、かなり深い窪地があつて、その底を押してゆく激しい溪流が眞つ白な飛沫をあげてゐる。

『困つた！』

どう考へてもこゝは渡れない。

『どこかに足場のいゝ所がないかしら』

莊八は水に添つて、下へ下へと渡る瀬をたづねて行つた。そして、かれはいつのまにか奥の丸の中庭へ迷子になつて居たのである。

そこへ迷ひこむと。

すべて四邊は人工的な庭作りと變つて、巨石築山の間には、利休風な敷松葉があり、流れを引いた池の中には八ツ折れの橋や同じやうな燈籠が、いたる所に立つてゐる。

さあ、莊八は、出られなくなつた。

八幡の藪知らずに迷ひ込んだやうに、同じ所を幾度も迂回してゐる氣がするが、先刻すぐ側に見えた奥の丸の御殿が、だいぶ遠去かつてゐるから、違つてゐる方へ歩いて來たのは事實らしい。

だが……



『こんな事をしてゐるうち、陣屋の侍に見つかつたら大變だぞ』

と、莊八は氣が氣でなくなつた。

すると不意にかれのうしろで、

『もし……そこにゐるのは誰だえ？』

と呼び咎めた者がある。

女の優しい聲であつたが、莊八はこゝを惡人の巣と言ひ聞かされて來たので、思はずギョッとしながら馳け出さうとすると、

『これ、逃げなくつても可いんだよ。わたしは陣屋の山の者ぢやあないのだから……』

さう言はれても莊八は、萬一を氣構へながら、怖々と落葉松の幹に半身を隱して、聲の主の居る方をふり顧つて見ると、そこに棟を離れた一軒の數寄屋があつて、京壁の茶室窓が小さく切つてある。

見ると、その窓の手斧格子に、白い指をすがらせて、ジッと莊八の方をさし覗いてゐるのは、錦繪で見る上臈のやうな息女で、抜け出るほど美しい顔に銀簪の影がチラ〳〵うごき、姿はすツかり見えないが、黒水晶のやうな瞳の底には、人なつかしげな涙がひそんで居るやうに思はれた。

『莊八さん……』女はいきなりさう言つて、

『ね……お前は江戸に居た、莊八さんに違ひないだらう。わたしをお忘れかい？　わたしの顔をお忘れかい？……』



『えつ。』

荘八は少し距離をちゞめて來て、

『どうして、おいらの名を知つてるんだい』

『お前だつて、わたしを知つてるはずぢやあないか』

わからない？――といふ風に荘八は少し首を傾げた。

そして又不審に思はれたのは、大名の御息女とも見えるその姿と、世馴れた言葉づかひの調子とが、荘八のやうな小童にもあまり不自然に耳へひゞいたことである。

『ぢやあ、何處でおいらの名を知つたの？』

又、訊きかへすと、女は淋しい顔に少し微笑を見せて、

『あの、江戸の柳橋で』

『えつ、柳橋で？……とすると、もしかしてお吟さんぢやないのかい』

『ア、私はいつか桔梗屋の二階にゐて、お前が砂利場の陰から吹矢を飛ばした時、いろく話をしたお吟ですよ』

『あつ、ぢやあやツぱり、お吟さんだツたの』

飛びつくやうに窓の下へ寄つて來た荘八、なつかしさのあまり手斧格子へすがり付いてお吟の手を固くにぎると、お吟も思はずその手へ涙をはふり落して、

『どうしてお前は、こんな所へ

たゞ一人で來たのだへツ……ああ嬉しい、いろ〳〵聞いて貰ひたい話が澤山あるんだから、その横の隠し口を押して此つ方へ這入つて來ておくれ』

地獄繪の赤い屏風

四方を見廻したがヒツソリした奥庭、折よく陣屋の山の侍らしい人影も見えないので莊八は數寄屋の横緣を廻つて、隠し口の下からソツと這ひ込んだ。

『夜みたいだね、暗いなあこゝの家は』

『壁が多いし、雨の日も晴れた日も、この通り戸が閉めきりになつてゐるんだからね』

お吟に手をとられて、窓のある小部屋へ這入つた莊八、そこの閾を踏むとすぐに、

『あつ……』と足を竦めてたじろいだ。

なぜかと言へば、そこには、以前からこの陣屋の山の寶物としてある、例の、萬花地獄繪の六曲屏風が立て廻してあつたので、小窓の手斧格子から仄かに射す光線に、その地獄變相の眞ッ赤な紅蓮！ 血みどろの劍の山、燃ゆる血の池などの彩具の鬼氣が、思はず、かれを驚かしたのである。

だが――繪と分つて莊八は、氣味の悪いのを我慢をしたがら、その地獄繪の屏風を存なかにしながら畏まつた。

お吟は骨肉の弟にでも訪ねられたやうな嬉しさを感じて、ともすると、うるみがちになる瞼を外らしては又莊八の姿をシゲシゲと眺めて、

『いつか柳橋で、お前と話し合つた日の――あれから恰度幾日もたゝないうちに、私は、司馬大學の紅門嶽へ連れてゆかれ、それからまもなく、又この甲州へ移されて來たのだよ』

低い聲を聞いてゐるうちに、莊八は哀れッぽくなつて、いつか、自分もぽろ〳〵涙をこぼしてゐた。

『――そして私は、勿體ない、この通り光江様の身飾りを着せられて、今日まで、御番城のお役人や天領目付がお陣屋へ來ると、その度毎に大學におどかされて、身代りの姿だけを、その人達の前へ見せて來たのです。どうかして逃げたい、お父さんに逢ひたい、角太郎様にこの事を知らしたいと、毎日この窓で、身ばかりもがいてゐるけれど、女の力で、逃げられる道ではないし……私が死ねば、江戸表にゐるお父つさんが、さだめし歎くにちがひないと……それを思ふものだから死ぬこともできないでゐる苦しさといつたら……莊八さん、察して下さい』

『おやあ、お吟さん……』莊八は貰ひ泣きの涙をこすりこすり、

『お前、まだ大變なことがあつたのを知らないんだね』

『大變なことつて？』

『お吟さんのお父つさんサ……あの研定つていふ人は、紅門嶽で司馬大學に殺されてしまつたといふことを、おいらが江戸を立つてから後、角太郎様から先生のところへ手紙で知らして來

こんだ—

『エツ！』

『あつ……』

荘八は仰天した。

語のことばも終らぬうちに、あまり不意な悲しみに愕然したお吟は、血の氣もない眞つ青た顔色に變つて、

『ウヽム……』と、うしろへ仆れかゝつた。

『お吟さん！　お吟さん！』

あたりも忘れた荘八は、仰向けにグッタリとなる體を懸命に抱きさゝへて、

『お吟さんてばッ。お吟さん……あつ……お吟さん何うしちやッたの』

自分も泣き／＼揺すぶつてみたけれど、その人の眦は吊り上つて、きッと噛んだ唇の色ッたらなく、皮膚にはみるみるうち、白蠟へ青い灯の消えかゝるやうな影をさしてきた。

死んだのか、悶絶したのか、驚愕のあまり持病を起したのか？　荘八にはそのけぢめさへつかない。

『どうしよう！　どうしよう！』

たゞウロ／＼して呼んだり背中を撫でてみたり、部屋の中を立つたり坐つたりしてゐたが、その時、切窓の外でピタ／＼と人の跫音がする氣配なので、あわてゝ地獄繪の屛風のうしろへツイと姿を隠してしまつた。

ザワ、ザワ……と葉摺れの音がひそやかに木の影をゆする。

そして、[illegible]ながめた荘八は、[illegible]ゐた。

梢の轆轤廻り

併し。いゝあんばいに、外を窺つてゐた人の氣配は、この臥寝屋へは足を踏み入れて來なかつた。

で——屛風のかげに隠れてゐる間に、荘八は賢しくかう考へついた。

『さうだ！　先生に知らせて、こゝへ來て貰ふのが一番だ。』

そこを飛び出してから何處を何う歩いたかは、おそらく荘八自身も夢中だつたにちがひない。なぜといへばその證據には、かれが道を迷はず無意識に走ツて行つたのにかゝはらず、その時は、お吟のことが胸いッぱいで頭にはいつか忘れてゐた萬花多寶塔の建物が、かれの眞正面に巍然として見えたのである。

『オヽ！』

その多寶塔の下の岩角に蹴つまづいて、荘八は初めて、振り仰ぐ上に紙の如く空をあふいだ、古色蒼然たる輪奐の美に目を瞠つて、

『オヽ、これはさつき向ふから見えた多寶塔だ。何時あの溪流の此ッ方側に來て居たのかしら。さうだ、こゝへ來たからには先生に吩咐けられた吹矢の手紙を』

と、腰の筒を拔いて、あたりを見廻しながら、素早く、それへ押しこんだのは一本の赤い吹矢。

『――大内記樣、大内記樣。その塔の上においでになる大内記樣。肉植の幸次といふものから吩咐けられて參つた使でございますが、ちよつとお顔を見せて、この吹矢の手紙をお受取り下さいまし』

兆八はこゝに幽閉されてゐる大内記が、目も見えず耳も聞えぬ廢人といふことを忘れて、岩石の下から口に矢筒を當てながらから呼んだ。

すると、多寶塔二層目の廻廊に、ちらとうごいた人影が見えたので、兆八はてツきり大内記にちがひないと、よくも見定めもせず、

『ぷつツ！』

と、息を放してしまつた。

かない矢はヒユツと飛んで、狙ひたがはず、欄に立つたその人の袂を縫つて刺さつたが、それは常の大内記と思ひきや、最前から奧の丸で、その大内記の處置について密議をしてゐた司馬大學！

『その小僧を取り押さへろツ』

袖に刺さツた色紙の吹矢を拔き取つて、片手につかんだ大學は、二層目の欄から鳴りひゞくやうに呶鳴つた。

と！

その下の彫刻扉を蹴開いて、

『おツ、曲者は兆八ツ』

躍り出したのはとかげ組の段之進と山千典六のふたり。何かの相談が向ふでまとまつて、折から三名が大内記の處分をするべく、この中に來てゐたのだからたまらない、

『おのれ――ツ』といふと石段を飛び降りて、轉げるやうに逃げ出した兆八のあとを追ツかける。

逃げるわ〳〵吹矢の兆八！

驚いたことも驚いたらうが、その早いことゝ言つたら栗鼠かむさゝびか、とても人間の子の業ぢやあない。

熊笹の中へ横ツ飛びに走つたかと思ふと、足場を見定めてゐないのでゴロ〳〵と一段下の灌木の茂みに轉げ落ち、腰を立てようとすると段之進と典六が、これも血眼で、白刃を引ツさげて挾み撃ちに追ひ迫つてくる。

『――さあ大變』

兆八は狼狽した。青くなつた。

前には例の谿流の淙々と白く散る飛沫がのぞまれる。うしろは灌木、岩石だたみ、左右の小道からはもうすぐそこへ、引ツさげ刀のふたりの形相。

あつ――と思ふまもなかつたのである。

『小僧待てツ』

と、段之進が、兆八の襟すぢへ氷刃を唸らせてきたので、かれは思はず、

『ひツ！……』と、首をちゞめて一方へ走り、出合がしらの

典六を突きのばして、[illegible]眼の下に見えた喬木の梢へと、ヒラリッ――空中で飛びついたかと見ふと――枝に足をかけてクルリと一ツ蜻蛉返りに翻ね返つた。

『野郎ッ』

と段之進、つゞいて飛び斬りにその梢を切つて拂つたが、ばさりと下へ落ちてきたのは、見事に切れた生木の枝と、亂離に降つて散る木の葉の旋風。

荘八はと見ると。

もうその上の枝に手をかけて、ザワ〳〵と枝から枝へよぢ登り、見上げるやうな喬木の頂きまで行くと、豹の爪をのがれた野猿のやうに、もうこゝまでは登つて來られまいといふ顔つきで、下を見ながら、ほッと一息ついてゐる樣子だ。

だが、その安心も束の間であつた。

喬木の容を見上げ、下で歯がみをしてゐた段之進は、やがて典六を走らせて、三人の若侍をこゝへ呼んで來た。見るといづれも草鞋に輕裝、手には短い直槍をつかんでゐる。

多寶塔の中から大内記を引き出して、陣屋の山以外な地へ、かれの體を移すといふ樣な相談にきまつたものか、庭からこゝへ來る途中には、一挺の塗駕と、警固についてゆく身輕ないでたちをした侍が八九人、駕を置いて休んでゐた。

こゝへ呼ばれて來た三人も、その内の人數であつた。典六に尾いて馳けて來ると、段之進はすぐ梢を指差して何か喚いた。

心得た！といふ風にその侍たち、手槍をかゝへて喬木の[illegible]、少し[illegible]ならべた。

互に少しづつ[illegible]の間隔を置いて[illegible]へると、槍を中[illegible]に持ち穂先をキッと宙に向けて、喬木の天ッ邊に取ッついてゐる荘八の影をジーッと狙つた。

荘八の眼が、葉の陰に恐怖にみちて白く光る。

いかに數丈の大木でも、一所の小高い所に足場を定めてそこを狙ふと、斜めの距離はどれ程もない。

まして、使ひ馴れた短槍に氣合をこめ、風を裂いて放つ神妙な投げ槍の呼吸をもつてすれば、樹上よりほか隠すによしない荘八の身は、串刺しにされて虚空から轉落するにきまつてゐる。

しかもその白い投げ槍の穂が三本。

樹上の荘八は眼をつぶつて、

『……もう駄目だ』

と、小童ながら靜かに觀念した。

と――もがく隙もなく下では段之進が呼吸を計つて……

『投げろッ！』

と、手を振つて槍手の若侍に叫んだ。

同時に、キラめく短槍の穂を空に向けて力をためてゐた三人は、ヤッ――と鋭い氣合をそろへて、閃めくと見るや、銘手の槍、指を離れてブーン！と宙を飛ンで行つた。

まさに白虹を躍る三ツの飛龍。



やツたな――と典六も、段之進も、その光りの行方を振り仰いだが、あら！何の理由か、投げられた二本の槍は、狙ひを外して宙にからみ、一本はあらぬ方角へ低く走つてしまつたので、はツと驚くうちに、

『うゝムツ……』と不意な唸きと一緒に、朱になつた二ツの死骸が、崖の上からゴロゴロと段之進の足元へころがつて來た。

『やつ、ど、どうしたのだ？』

典六は狼狽した聲をあげた。見れば、槍を放つた侍のうちの二人である。

もうひとりも間髪の隙なく、そこを驅け上つて行つた段之進の目



前に、ワツと、袈裟がけになつて打ッ仆れる。

『おゝ！』

『おのれッ』

そこで發しられた双方の聲。

たゞ事でないと山名典六も、高からぬ崖の中段へ一足飛びに跳び上つて見ると――あゝこれはそも何たる不意な敵の現れであらう。

突然、槍手のうしろを襲つて、一氣に三名の侍を据物斬りに斬ッて捨てたものは、そこに血ぬられた二刀切尖をそろへて、もの靜かに待つてゐたのだ。

誰か？

それは誰であつたか？段之進の膽も顛倒し、典六の足もギョッと竦んだであらう。

小枝角太郎とお妻なのであつた。

虹光りの襷

説く所の話の經緯をすこし前に溯ぼつて、こゝにお妻と角太郎とが、すこぶる不意に似た出現をするまでの順序をいへば―。

肉植の幸安よりも遙かにおそく江戸を立つて、甲州御代崎の樣子いかにと、峠々をいそいできた角太郎とお妻が、立ち際にうけ取つた幸安の旅便りを手がかりに、御代崎についた日の翌朝、すぐかれの宿と定めた所をたづねて行つてみると、たしかに、宿帳によればそれよりも十數日前に、こゝに江戸の外科醫者とお供の莊八とが、姓をならべて滯在してゐる。

で、在否を訊くと。

その幸安はこの間うちから、毎日、藥草採りに出かけるのだと言つて、駒飼の峽谷から笹子の裏山の方へ出かけて、今朝も莊八さんといふのを連れて朝早くから出かけて行つたといふ―

―宿の者の話。

それに今度は少し奧へ入つてゆくから、都合で、或は四五日

戻らないかも知れない、と言ひ殘して、食べ物や足拵へも常とは違つて出かけたとのことであつた。

前後の事情を綜合して、さては、いよく\多寶塔の大内記樣に近づく覺悟で出かけたものに相違ないとうなづいたので、角太郎はお妻を案内に、その足で、陣屋の山へしのんで來た。

お妻は今よりずツと前、初めて、女太夫に身をやつしてこの御代崎へ樣子を見に來た時から、幾度も、この邊りをそれとなく探つてゐたので、迷ひもせず、曾ての無駄が今日の役に立つて、角太郎を易々と陣屋の山へ導き入れた。

そして、やゝ小半日、あなたに潜み、物かげに隱れ、内部の樣子を見てあるくに、昔と變つて雀羅の殿堂は陰森寂寞、そこに殘つてゐるらしい大學一味の惡人さへも、もう僅かしか居ない樣子。

可し！

惡人勦滅の時節こそ到來。

かれらが甲府御番城から駒木家分解の命をうけて氣のくじけてゐる今、何偶然か、天誅の名劍水田雅國重は計らず自分の手に回つてゐるのだ。

角太郎は冷靜な思慮のもとに、荒廢した奥庭、中庭の木陰をひそかに歩き廻つた。

まづ第一策に、お吟をこゝから救ひ出さねばなるまいと考へる。

かの女の父研定が、人知れず自分に送つた義心と、あの哀れな最期とを思ふと、その手向にも、まつ先にお吟をこの牢獄から救ひ出して慰めてやりたい。

そして、――なるべくは夜に入るのを待つて、大内記樣のゐる萬花多寶塔を訪れよう。

幸女も宿へ四五日は歸らぬかも知れないと言ひ殘して出たほどだから、或は、ひよツとしてその多寶塔にかくれて、殿の容體を診、師の苦念をしてゐるのかも知れない。

さう考へて、お妻にも、何かの手筈を言ひふくめ、お吟は一時どこへ逃がして、又、大内記樣はどこへお連れ申して――とすべての相談も覺悟もついた後、かれは、ひとりあとに殘つて、この陣屋の山――永かりし魑魅魍魎の棲み家に火を放ち、司馬大學をはじめ、こゝにのこる惡人の誰彼をえらます、斬ツて斬ツて斬りまはり、最後には大公儀に宛てゝ書いた嘆願書二通をふところにして、甲府御番城へ名乘つて出で、罪をまつまでの心をきめてゐたのである。

――所が。

さうして雜木の茂みの中を、ひそかに樣子を窺ひながら歩いて來ると、奥庭の端れにある數寄屋の裏口から、この陣屋の山の者とも思はれない子供が、征矢のやうに道も選まず素ツ飛んで行つた。

まさか――それが莊八であらうとは夢にも思はなかつた角太郎であつたが、念の爲に、お妻と共に追ひかけてみると、やがて萬花多寶塔の二層目へ向つて、一線赤く飛んで行つた吹矢！

初めて、それを吹いたのが莊八と知つて、吃驚したが、一方は又すぐと、捜之進等に追ひ廻されて一心に逃げ廻る。

そしてとうく\喬木の天ツ邊へまでよぢ登つてしまつたので、角太郎もお妻も、どうにかして助けたいがと機を狙ひなが

ら、襟口をつかんで、相手の付の指使を思ひすきしてゐたのだつた。

……………………

さて、さうして忽然と、こゝに降つて湧いたやうなお妻と角太郎。

驚きのあまりとかげ稍の段之進は、思はず、ギョッとなる足をうしろへ退いて——

『ちえッ、てめえはお妻に角太郎だな！ 死にきれねえ亡者のやうに、また生血の供養をのぞみに來やがつたか』

と、しやがれ聲で呶鳴つた。

典六も内心おぢ氣立つ怯みを強ひてこらへながら、一方の尾について虚勢を張つた。

『ウヽム、おのれ執念ぶかい痩せ浪人め、こゝを何處と思つてまぎれ込んできたかは知らないが、御代崎お陣屋の奥と知つて來たとすればよく〳〵命知らず、この世の思ひ出にあばれるだけ暴れて見ろ、もう貴樣たちふたり民に墜ちたも同然だぞ』

角太郎は答へなかつた。

たゞ、燦とする劍の尖が、目にも見えず一二寸——ジリ、ジリ、と言葉のかはりに双者の間へ迫つて來る。

水金のやうな白き双、——偶然カルタのお欲の手から元の持主へ歸つた水田郷國重の刀は、鍔、切羽、白茶の柄糸のこしらへに依つて生れ代つたやうな利双の脇差となつて角太郎の手に持たれて有る。

お妻は長い下緒を斜身にして、手に持つ。

かの女は典六に。

角太郎は段之進に向つて——。

自然と双方の切ッ尖がふた組に分れてくると、角太郎とお妻とは、背中合せのかたちになつた。

『段之進ッ！』

はッと、氣のすくむやうな聲だつた。

それは角太郎の唇から發したのであるが、かれの白皙端麗な顔は、名工の打つた假面のごとく、毛ほどの表情もうごいて居ないのにかゝはらず、殺氣、怒氣、燃えるやうな力がみなぎつてゐる。

『段之進ッ、稗田堤ではよくも大學に加擔して、卑劣なまねをしをつたな！ 今は白晝、逃げ隠れをする隙もあるまい。さ、斬りこんでこい！ 斬ッて來い！ 陣屋の山を紅葉にする惡人勦滅の血祭りとして、眞ッ先に、そちの忌々しい悪血を、雑草の肥にブリ撒いてくれる』

『たゝくな、その廣言』

段之進はカッとなつて、思はず相手に雜擧をふる〳〵とさせたが、相手の誘ひと氣がついて、作だつ大刀をジッとこらへた。

『では——』と、つゞいて角太郎。

一步、しづかに寄りつめてくる。

と、同時に、段之進はうしろへ退いた——と……、、、

とすり出した角太郎の平青眼が、どうにもならない粘力と魅氣をふくんで、段之進の胸を押してきたかと思ふと、颯然、かれの五體は虹光りの禪をかけられたやうに覺えて、

『あつッ』と、空挿りの大刀と共に廻つた。

だが、さすがは矢來の段之進――目の眩むやうな玄水流の劍影と氣當をかはして、横ツ飛びに構へを直した。

『また逃げるのか！　段之進』

『な、なにを』

角太郎の躍る白刃、段之進の死もの狂ひ。

チラリ、チラリ、とそれにふるゝ木の枝が綺麗に斬れて舞ひ落ちる。

お妻と與六とは、巴になつて爭ふうち、どつちも息が彈んでゐた。ことにお妻は懷劍なので、ともすると守勢になつて、さしても劍道にすぐれてゐない與六の脇劍に斬り立てられ、岩の角、崖の土を踏み外して、よろめきさうになることが幾度となくあつた。

たゞ、そのあぶない度毎に、お妻にとつて大きな助けは、高い木の上からしきりと飛んでくる吹矢！　赤い矢！　青い矢！　紫の矢！

暮ゆく運命

多寶塔二層目の欄に立つて、濃い眉毛をいぶかしさうにひそめ、薄紙の文字を登り陽にすかして幾度となく讀み返してゐるのは司馬大學である。

莊八を捕まへたか何うかといふやうなことは、かれには問題でなくなつた。怪しげな吹矢の中の封じ文には、意外なことが書かれてあつた。

見るまに、かれの顏に險しいものがうごいた。ジツと、白眼をあげて何ものかを睨むやうに考へて――、

『ウーム……うぬ』

と、低くうめいて、唇を嚙んだ。

『敵同者の幸安めを差し廻して、大內記の業病をなほさうといふ手段か……。ばツ、ばか者め。だれが貴樣たちが脈を診るまで大內記をこゝにそつとして置くものか。』

だれに罵るともなく罵ツて、裂いた薄紙を塔上からヒラりと捨てた。

『だが、この樣子では、此方も安閑としては居られまい。一刻も早く、厄介者の大內記をこゝから他へ移してしまふのが何よりの策ではあるまいか』

かう考へた。

かれは步を轉じて廻廊のうら側へ廻り、向ふを見ると、かねて支度をさせて日沒の時刻になるのを待たせてある駕と人數が、一所に、蟻のやうにかたまつてゐる。

それへ、塔の欄干から手合圖を送つて、大學は、スツと中へ姿を隱し込んだ。

『む……、うゝ……』



と、黴くさい淀んだ闇の中で、何者か、蟲のやうな聲を洩らすがある。

大學は見向きもしないで、厨子櫃の下に身をかゞめ、火鉢を探つて手燭の蠟燭へポッと黄色い灯をうつした。

それを持つて、魑魅のごとき影をうしろに引きながら、ゆら、ゆら、と堂内のまはりを歩いてゐると、暗所にうごめいてゐる人の氣配が、何か、もの言ひたげに床を叩いた。

『うるさい!』

と大學は舌うちをして、下郎を叱りつけるやうに一喝する。

闇にゐる人影は、吃驚して、悄然と頭を垂れてしまつた。見ると――そこには二枚の古疊と、一枚のしとねと、一箇の手筥、一箇の脇息。

春秋開かれざる多寶塔内の陰濕なほこりと蜘蛛の巣の中に、さうして、もの言はず陽光を見ず、あだかも地底に冬眠する爬虫類のやうに、ジッと生きてゐる人――それは駒木大内記である。

二枚の疊は、今のかれが領する御代崎一

萬石の領地のかはりに與へられてゐる天地である。一『やかましいッ！』と、おのれを下郎のごとく、虫のごとく叱りつけた聲は、現在、自分の臣下である司馬大學の聲だ。幸か不幸か、目もみえず口もきけない大内記に、まだかすかな聽覺だけが働いてゐた。

口惜しいのであらう、無念にたへないのであらう。大内記は落涙してゐる……泣いてゐる。

筆と紙が手に慾しい。

口に言ふことの出來ない口惜しさを、せめて、紙になと書き散らして、塔の上から撒き散らしたい！ そしたら、それが風に散らされて、涙のある人の手にわたることもあらう、光江の手にふれることもありはしないか、角太郎の所へ風が送つてくれないものでもない。

そんな空だのみを思つてみて、ひとりハラ〳〵と落涙したが、一萬石の領主たるかれの身邊に、その一枚の紙、一管の筆さへも無いのだ。

角太郎からあらましの話を聞いて來た幸安でも、まさか、大内記の境遇がかうまで虐げられたものだとは思はなかつた。多寶塔に幽閉されてゐるにしても、ひとり二人の侍女や、忠實な下僕ぐらゐは付いてゐるものと察した。で――非常に吹矢の封じ文を吩咐けて、あらかじめ訪れの豫報をしておいたのだが、事實かくの通りでは、たとへそれが完全に大内記の手に屆いたとしても、かれが見えぬ目を以てしては、幸安の親切も、いたづらに大内記の疑惑と悶えを募らせたことに過ないで終つたであらう。

ガタンと、やがて、塔の下で扉の開く音がしたかと思ふと、ぞろ〳〵と八九人の侍が土足のまゝ段を探つて這入つて來た。

『――駕を持つて參りました』

大學は重くうなづいたが、ふと、扉の隙から外の陽脚をのぞいて、

『こゝを出る頃には、そろ〳〵陽が暮て來るだらう。貴樣たちも、今のうちに露除け提灯の支度をして、すつかり覆面しておくが可い』

『はつ……そして』

『ウム、まづその厄介者を先に、駕の中へ抛り込むんだな。中であばれないやうに、充分手足をしばりつけておくことも肝腎だぞ』

『ぢやあすぐに。』

『手分をして、支度のでき次第こゝを出立しろ。行く先は最前申し聞かせた所――心得てゐるだらうな』

『承知してをります。では、大學樣はお後からおいでなさいますか』

『典六が尾いてゆく筈だつたが、今しがた、怪しい奴を追ひかけて行つたまゝ姿が見えぬ。時刻を移しては面倒になるかもしれない』

『何にごとも御念きませう』

『さうしてくれ』

『はつ』

ドタ〱と塔の上下を駆けずり廻つてゐる間に、八九人の一傅、各ゝ黒い覆面をまとひ、大内記にも袋のやうな黒布をかぶせて、うむを言はせず駕の中へ押し込んだ。

假借もなくその中へ縛りつけ、上には、露除けの桐油紙をかぶせ、駕の印は宿場ごまかしの朱引、天領御用の提灯と見せかけた。

釣瓶落し――ことに山国の暮るゝに早い秋の陽脚は、もう裾野の夕靄の遠くへ沈み入る甲斐の名川、笛吹の流れを境として、万畳と起伏する白根、大唐松、鞍掛の諸山のかげに紫ばむ雲と闇とを作りかけた。

二層目の欄干に、ふたゝび姿を現はした司馬大學、下をのぞいて、

『支度がよかつたら出立いたせ。但し、裏門を開けて道はなるべく山傳ひに取り、町端れといへども城下を通つては相成らんぞ』と、身を延ばして下へ言つた。

『おゝ、それでは』と、塔の前に揃つた八人の覆面軽装、みな一緒に二層目の欄をふり仰いで、

『お先に！』

ばら〱と一列になつた。

『行け』

これでいゝ――とホッと安心したらしく、しばし低いこゝろになつて、牛の背のやうな夕闇の山脈と、一歩々々に変化してゆく彩雲の美に、ちよつと恍惚とさせられたが、又ふと、塔下の方へ急ぎ出した組の行方を目で探し出す。

もうその一隊は、多宝塔のある高地をタツタと離れて、落葉松の崖ぶちから稲妻形に下がつてゆく細道を、例の渓流のふちへと急ぎ足に降りかけてゐた。

すると。どうしたのか司馬大學、突然そこで、『呀ツ……』と言つたかと思ふと、咽からのめり落ちさうになつた躰をヒラリと離して、又、塔の内部へあたふたと姿を隠した。

無明の渦

夕べに近い谷の風に、ほろ〱と哀れッぽい山鳥の聲を聞き出すと、江戸の町中で押ッ放してさへ、常に兆八の帰りを案じる幸安先生、

『ハテ、どうしたのだらう』

使の吉左右よりも、かれの身が、むやみに心配になつて来てたまらない。

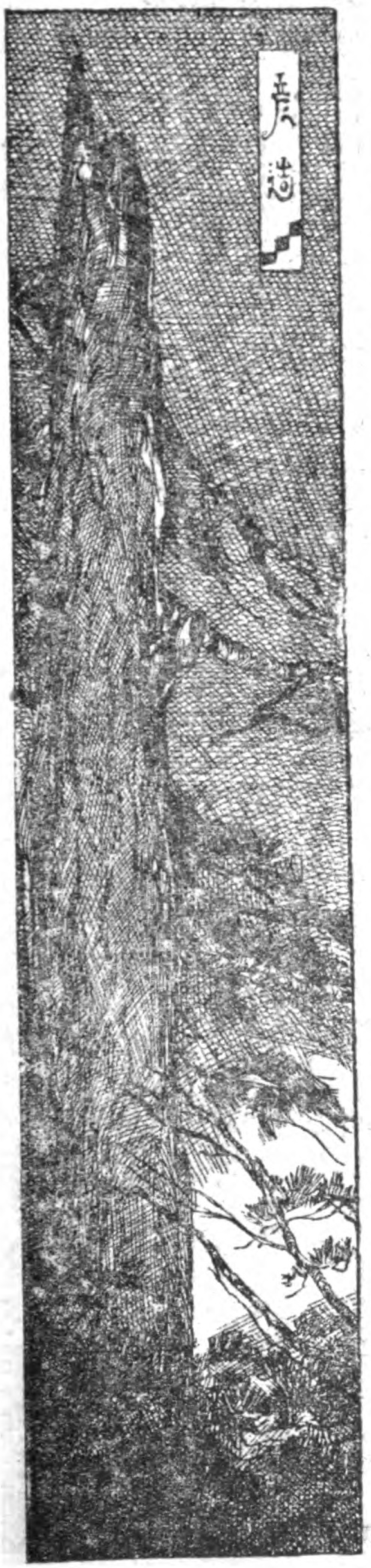
思へば、そんなに可愛い兆八を、あんな危険な所へ使にやつた、自分が無慈悲のきはみである。その帰りが遅くつて、かういふ心配苦労を一刻一刻としてゐるのも、自ら求めたことゝいふほか、苦情の持つてゆき所はない。

『もしや？……』と思つて、立ちかけたり、
『いや、あいつは麒麟の子だ、ヘタな獵師に捕まるものか』
と、多寡をくゝつて待つて見る氣になつたりしたが、陽はグングンと遠慮なく、かれの目の前の天地を薄暮にしてくる。

で――肉植の幸安は、えゝ、こんなことをしてゐるよりはと、老人の冷や水と、莊八が居たら笑はれさうな格形をして、木の根岩の根、辿り辿つて陣屋の山へ忍びこみ、これは莊八と取る路をちがへたが、案外早く、多寶塔の影へ近づいた。

昔――といつても近頃でも時折に出かけるが、幸安は若い時から木曾北越あたりの高地へ、盛に藥草探りに行つたことのある體驗で、いざといへば、この位なこと、さまでえらい難儀をしたとは思はない。尤も、當時の醫者といへば、幸安ならずとも山野に馴れてゐないものは無かつたと言つてもいゝ。

『莊八――』
老人は低い聲で呼びだした。



『莊や……莊八や……』
そして、ちと登り憎い岩に手をかけて、萬花多寶塔の前へ近づいて行かうとすると、突然、疾風のやうにその扉を開いて、飛魔のごとくをどり出した一人の武士。

出會がしらに、肩と肩、どんと打つかツたからたまらない、幸安は手にかけた岩の段から、わつと、もんどり打つて仰向けにころげ落ちた。

刎ね起ると又ぶつかりさうになつたので、よろ〳〵と身を避けたが、その時、思はず、
『オ、司馬大學！』
思はず口を辷らせて叫んだ。
『なにッ』
いつたん行きちがツて馳け過た大學は、さういつて振り顧つたが、何かよほど氣が急いてゐるらしく、一言、
『幸安か、耳療治の禮を拂ふぞ』



抜き打ちをくらはして、あつと相手の仆れたのを見ると、そのまゝ白刃を片手にして駆け出した。
幸安は腰がもち上がらない。
鼻の先を掠つた大學の抜き打ちは、交したのではなく此ツ方がころんで身に觸れなかつたが、何としても腰が立てない。但し、抜けたにはあらず、打ちどこが痛くて、意地にも我慢にも立てないのだ。
すると何處からか、息をきつて駆けてきた吹矢の莊八が、そこに幸安の醜態を見つけて、
『オヽ、お師匠様ぢやありませんか』
『そ、莊八か』
『どうしたんです』
『立たせてくれ、抱いてくれ』
『からですか――』
『うむ……おゝ痛い。お前は、今そこで、司馬大學に見つからなかつたか』
『血眼で飛んでゆきましたが、わたしは、ぴよいと隠れて、やり過ごしたんです』
『貴様は實に器用なやつぢや。――そして、どうした大内記様の御様子は』
『その大内記様は、たツた今、また悪い奴らが駕にのせて、この塔からどこかほかへ持つて行つてしまひました。そればかりぢやない、お師匠さん、た、たいへんな事が向ふで起つてゐるんです』
『なんだ、なんだ?』
『小枝様とお妻さんが、あの日ツかちの浪人や大勢の侍を相手にして、半刻も前から、……』
『なに、角太郎様が』
『えゝ、そして、お妻さんもですよ』
『有難い!』
幸安はピシャリと額を叩いて、
『あの方が御代崎へ着いてゐるなら、もう陣屋の山のやつらも怖るゝには足らんぞ。だが、大丈夫か、大丈夫か?……』
『どうなるか、わかりません。だけれど、おいらなんかど手を出したツてしやうがない』
『ウム、まつたくだ』
『で、私は、お師匠様を呼んできて、お吟さんだけでも助かるものなら助け出し度いと思つてこゝへ飛んで來たんです』
『おゝ、そのお吟とやらは何處にをるんぢや』
『半分死んでしまつたんです、えゝ、あんまり吃驚したんで……。早く行つて、何とか息を吹ツ甦させてやつて下さい』
『斬られたのか』
『うゝん』
『氣を失つてをるのか』
『どうだか好く私には分らないんですから、何しろ、早く行つて』

…に氣の好いご老人だので、どうも莊八の様子なぞにはよく分らない。併し、何しろかうしては居られまい。

『莊八、お前案内しなさい』

『わたしの足に續いて來られますか』

『生意氣を申すな、老たりといへども肉桂の幸安』

足ごしらへは川來てゐる。

莊八に尾いて一散に、奥庭の東にある數寄屋の方へどん〳〵と下つてゆく。そして、間もなくこゝといふ家の中に入つて見ると、お吟は最前の地獄繪の屏風の前に、黑髪を俯ツ伏せて仆れてゐる。

全然氣を失つたものではない。驚愕のあまり變心した樣らしい。と見て幸安が大急ぎで抱き起し、印籠の丹藥を嚙んで口に移してやると、莊八は機轉よく、器に水を汲んでくる。

『逃げよう』

何しろ、逃げる工夫が幸安には目標の急であつた。

『たゞ逃げてもつまりませんね』

と、莊八は、案外落ちついたもの。尤も、さつき喬木の上まで逃げたことを思へば、今は無風帶に船を入れてゐるやうな氣持なのであらう。

『だから、無論、お吟さんを助け出してゆくのぢや』

『そりや、きまつてをりますよ。だけれど、それぱかしぢや、つまりませんでせう』

『では、どうするといふのか』

『もうこの二階の出口には、内儀さんも、お客さんも、お吟さんもをりません。ですから、えゝ好うございます……お隣の旦那様、ちよつとこゝに待つてゐて下さい、わたしは、悪人たちを吃驚させて、角太郎樣が充分に働けるやうにして來ます』

『ばか！ 飛んでもない』

叱りつけたが、莊八はもう何處かへ向つて馳け出してゐた。困つたやつだ、またあいつにはぐれては心配の種だが——と思つてゐると、すぐそこへ歸つて來て、

『さ、逃げませう！』

お吟は何もかも夢心地。

併し、いくらか氣が張つて、莊八に勵まされながら、甲斐甲斐しい身支度をしにかゝつた。髮につけてゐる銀釵、笄、厚い帶、それらをみんな脫ぎすてると、江戶の柳橋で見た人に近い、お吟らしいお吟になつた。

× × × ×

夕闇は裕子の隙から濃く流れてきた。

前の途を辿つて、お吟を助けながら多寶塔のそばまで逃げて來た幸安と莊八、もうこゝまで來れば、東山の桐一重、まづ大丈夫と一息ついた。

だが——自身の安全を見出すと共に、濟まないやうな氣がして案じられるのは、あとに殘つて多勢の惡人を相手に、八面六臂といへども、遂には耐へない苦闘をつゞけてゐる角太郎とお

妻の身の上。

『ちよつと、お待ち』

幸安は、やつと登つて、多寶塔の廻廊から一目に見ゆる陣屋の山を眺め廻した。

『わたしも』

と、莊八も、お吟の手を引ツぱつて、そこに立つた。

一面の夕闇である。紺色の空の下――たゞ薄墨の如き樹木と水と奧の丸の建物を見るのみで、人影らしいものは見えない。が――たゞジツと耳をそこで澄ませば、時折、風のやうな叫喚と、跫音と、鋼！ それらしい刃金の響き。

『ウーム……さつぱり見當がつかない。だが、あゝいふ騒ぎが聞えるやうでは、まだ、角太郎樣もお妻さんも健在なのだ』

『お師匠樣、今に、どこかに見えて來ますよ』

『なにが？』

『人影が』

莊八がまた變なことをいふかと思つてゐると、なる程、まづ奧庭の泉水がカーツと赤く浮き出して、あたりの庭木、燈籠の落葉松、山芝の築山、うねり曲がつてゐる小路、一時其のやうに赤く照らされて、その一ケ所にうごめく人影さへあり〳〵と見られて來た。

『燃えてきた！』

『オヽ、火事だ』

奧の丸の大廂から、凄はしい炎の柱が、捲れたばかりの藍色の空へメラ〳〵とのぼり出したかと思ふと、ひときは高い叫喚が、山の靜寂をゆすり返した。

時に、幸安も莊八もまたお吟も、その光りの中に角太郎とお妻の姿を見出さうとして、どれほど眸をこらしたか知れないけれど、あなたに見える人影は、みな一樣に黑く、どれがそれ、どれが誰とも分らないが。

分らないがあの中に、お妻はゐる！ 角太郎はゐる！ オオ、そしてまた意外なものを見た、それは、多寶塔を出た例の大內記の駕が、その亂戰に食ひ止められてゐるのである。

さてこそ。それで大學は、色をかへてこゝから驅け出して行つたものとみえる。角太郎もまたその怪しい駕まはりを見付けて、有象無象を捨てゝ食ひ止めたものであらう。

正義の劍、邪惡の劍、こゝに亂陣を作して相爭ふ眞ツたゞ中に、駒木大內記その人の體は、そのいづれに奪はるゝ運命であるか自身も知らずに、投げ捨てられてゐるのである。

陣屋の山の奧殿も無明――多寶塔の蜘蛛の巢の中も無明――今居る駕の中も無明の人。

角太郎はその主を救はうとして一命をこゝに賭し、大學以下の惡人たちは、それを渡すまいとして命を賭けてゐる。

無明の渦！ 無明の渦！

地にはいつも無明の渦が卷いて絶えない。

それを呪ふやうに、虛空に亂舞するものは、やがて端から奧の丸の樹木を徐々と舐めてゆく炎の柱である。（つゞく）



諧謔小說

脫線息子

佐々木邦作
田中比左良畫

士族平民

『斯ういふ具合で主人公には毛頭異存がありません。寧ろ町家を希望してゐます。話が分つてゐますさあ。何うして〳〵、こゝが來てゐるどころぢやありません。』

と仲人屋の宮地さんは禿げ上つた額を叩いて首を竦めた。西川家へ報告に罷り出たのである。事後即夜だから、運びの思はしかつたほどが察しられる。

『結構でした。何と言つてもお父さんですからな。』

と西川さんも滿足のやうだつた。

『奥さんが睨むでゐる間は反對さうなことを申しますが、何ぼ奥さんだつて目が草臥れますさあ。すると主人公、「商家が好い。旗本が何だ」と直ぐに本音を吹きます。そこへ若夫婦が手を合せないばかりに悃願しますから、もと〳〵御主人の考へに委せると言ひ切つた手前、奥さんも今更仕方ありません。兎に角、娘さんの意向を訊いて見るといふことになりました。』

『眞正にお蔭さまでございます。』

と新太郎君の母親は句切り〳〵でお辭儀をしてゐる。

『ところで先刻のお話です。無論思はせ振りですが、お孃さん、ナカ〳〵氣が勝つていらつしやいますなア？』

『然うらしいんでございますよ。』

『新太郎さんはうつかりしてゐると悉皆敷かれてしまひますぜ。』

と宮地さんが笑つた時、緣側でコトリと音がした。それは新太郎君だつた。

『早手廻しに今からそれを案じて居りますのよ。オホヽヽ。』

と母親は聞えよがしに言つた。

『これ丈け話の進むまでに一言も自分の耳へ入れなかつたといふのが苦情らしいのです。確かに手ぬかりでしたよ。若夫婦はむづかしいお母さんの方にばかり屈託して、本人をそつちのけ

にしてゐたんですからな。』
『新太郎はあんなブツキラ棒ですから、氣に入らないと申すのではございませんでせうかね？』
『まさか。それぢや綺麗さつぱりで、側から力の入れやうもありません。』
『いゝえ、新太郎はナカ／＼偏狂ものでございますからね。』
『何あに、お孃さんは唯考へさせて貰ひたいと仰有るんです。左から左では勿體がつきません。』
『二三日と仰有いましたね？』
『奥さん、大丈夫ですよ。餌は確かに氣に入つてゐますが、思はせ振りです。魚は皆斯うしたものです。』
『しかし魚ぢやありませんぜ。』
と西川さんも多少不安があつた。
『いや、私は年來手がけてゐます。娘さんが考へさせてくれと言ふやうなら、もう占めたものです。』
『然うでせうかな？』
『私が保證致します。奥さん、あなたにしても覺えがございませう？』



『まあ。オホヽヽヽ。』
と母親は昔を思ひ出した。これは相手が名にし負ふ西川の鬼瓦だつたから、餘程考へたに相違ない。
『私達は仲人の家で見合をしましたよ。これでも昔は若かつたんですな。』
と西川さんにも感慨があつた。
『早いものですよ、お互に。嫁を貰ふ。孫が出來る。これから又早いです。』
『その嫁ですが、何うでせうかな？』
『安心してお待ち下さい。』
『然う致しませう。この上とも宜しくお願ひ申上げます。』
『細工は流々の積りです。恐らくこゝ數日中に澁谷が手を引いて私が直接先方へ乘り込むことになりませう。』
と宮地さんは向段取を話した。萬般澁谷の伯父さんや友三郎さんと打ち合はせてある。
同じその晩、松浦家では大奥さんが頗る不機嫌だつた。お天下さまが初めて反逆に會つたのだから無理もない。先づ手を叩いて女中を呼んだ。
『はい。』

『早くよ。』
『はい〳〵。此方でございましたか？』
『何處にゐるものかね。病室でなければ此方に定つてゐますよ。』
『はあ。』
と女中は眞四角に坐つた。うつかりすると雷さまの落ちることを知つてゐる。
『操を呼んで下さい。直ぐ來るやうに言つて下さい。友三郎さんもよ。』
と奥さんは頭痛膏を張つた顳顬をピク〳〵動かした。
『お母さま、御用でございますか？』
と操さんが現れた。
『友三郎さんは？』
『はあ。』
と友三郎さんが續いて入つた。
『お前達は何うしたものですね？　秀子は行きたいとも何とも思つてゐないんですよ。』
『…………』
『それだのに寄つて群つて澁谷の伯父さんまで引つ張つて來てお膳立てをしてさ。』



と奥さんは果してそのことだつた。
『お母さん、あれは秀子が我儘であんなことを申しますのよ。心持はもうチャンと定つてゐるんですわ。』
『それが私、何うも腑に落ちませんの。』
『何故でございますか？』
『お前達が側についてゐながら、そんなに心持の定つてしまふほど交際をさせるといふことがありますか？』
『でも、お母さん、東京と違つて海水浴場でございますよ。』
『海水浴場にしてもさ。お前と友三郎さんは何の爲の監督ですか？』
『でも、同じ宿にゐるんですもの、惡い方でない限りは……』
と操さんが行き詰まつた時、
『お母さん、決してそんな次第ぢやございません。眞の通り一片の交際で何ういふ方か未だ存じませんから考へさせてと秀子さんは仰有つてゐます。』
と友三郎さんが助太刀に出た。
『秀子の心持よりも私の心持よりも病人の心持と澁谷の伯父さんの心持がお前達は大切と見えますのね。』

『そんな風に仰有られると、私達、何とも申譯ありません。』
『でも然うとしか思へませんよ。』
『お母さん、この問題は兎に角秀子が仕合せになれば宜いのぢやございませんか？』と操さんは手つ取り早いところから說きつけようと思つて、家門より個人といふ意味を仄めかした。
『生意氣な口をお利きでないよ。』
　と母親はそんな思想を認めてくれない。
『……』
『私は何うしても氣が濟みません。秀子を素町人へ片付けては先祖代々へ申譯が立ちません。』
『お母さん、そんなら然うとハッキリ仰有つて下されば宜かつたぢやございませんか？　お母さんの思召次第で何うにでもなりましたものを。』
『操や、お前は何處までも伯父さんや友三郎さんとグルになつて私を抑へる積り？』
『お母さん、飛んでもないことを仰有います。』
と友三郎さんが狼狽した。



『お母さん、誤解をなすつちや困ります。』
と操さんは取り縋るやうに膝を進めた。
『あゝ、情けない〳〵。愚圖な主人に連れ添つてゐると、現在の娘や餘所から來た婿にまで馬鹿にされます。』
『お母さん、それほどお氣に召さない御縁談なら、私、これから澁谷へ行つて斷つて參ります。御心配をかけて申譯ございません。』
　と友三郎さんはあやまつてしまつた。
『そんな面當てをして下さるには及びませんよ。』
『……』
『この上私を困らせる積りですか？』
と、お天下さまはお旋毛を曲げると手がつけられない。主人公も友三郎君も年に兩三度必ずこんな目に會ふ。遊んで食つて行く稅金だらう。
『お母さん、實は先頃伯父さんからお話のあつた時、充分申上げて置くと宜かつたんですが、お父さんの御病氣でつい差控へてゐました。それで私達ばかり承知してゐるやうで、變に思召すのも御無理はございません。抑もの始まりは七月、いや、八月、いや、矢張り七月末でした。西川君のお父さんが轉地療養ながら逗子

へお嫁にたつて……』

と友三郎さんは一生懸命になつて説き起した。操さんも傍から加勢する。既に新聞廣告でさがしてあつたから、一々詳しく聞に入つたらしく、

『お前達が望むでゐるほどあつて申分ないやうね。平民つてことの外は。』

と母親は大體合點が行つて、最初の權幕にも似ず、相手が士族でないのを遺憾とするやうだつた。商家が必ずしも氣に入らないのではない。平民だからいけないのである。

『お母さん。』

とこの時操さんがニコニコした。

『何ですか？』

『武家といふものは今日もうございませんから、お母さんの理想から申しますと、秀子や芳子は軍人へお嫁にやるより外ありませんわね。』

『いゝえ、然うは參りませんよ。軍人にも平民がありますから。』

『まあ、然うでございましたわね。』



『平民に何でもいけない……』と母親はこの話に反對していた。

『けれどもお母さん、紙屑屋をしてゐる士族と呉服屋をしてゐる平民があると致しましたら、何方へ秀子をお上げになりますか？』

『さあ。何方へも上げられませんわ。』

『けれども世間にこの二人しかないと假定した場合です。』

『さあ。その時は……』

『さあ。何方でございますの？』

と操さんが堪へず勝ち誇つたものだから、母親はそれと氣がついて、

『お前はお母さんを何と思つてゐるの？口頭試問にかけて遣り込める積り？』

と又少し不機嫌になつた。それでも行き詰まつたのである。

間もなく友三郎さんは操さんの目くばせに應じて、

『操さん、私へ一寸見ると、私も平民でございますよ。』

と急に思ひついたやうに云ふ。

『あらまあ、厭やな人！』と操さんがかけた。二人は母親の前でお芝居をすることが度々ある。

『いゝえ、少くとも平民にたつてゐる身の上ですよ。』

『何故？』

『一番上の兄は本家ですから士族ですが、次の兄は平民です。私も若し何でしたら分家になるところでした。』

『何でしたらつて何？』

『何でも宜いですよ。』

『宜かないことよ、何？』

『宜いんですよ。』

『宜かないことよ。』

『あらまあ、喧嘩を始めて。馬鹿な人達ね。』と母親は釣り込まれた。

『でも、平民になりたかつたと仰有らないばかりですもの。』

『然うぢやありませんよ。』

『然うでございますよ。』

『もう宜いわ、友三郎さんも分家をなされば今頃は否應なしに平民よ。失禮ながら掃溜へ落ちていらつしやるのよ。』

『お母さん、如何に三男でも掃溜は酷し過ぎますよ。』

と友三郎さんは大袈裟な表情をした。

『いゝえ、掃溜よ、士族でも華族でも分家をすれば平民に下るんですから、平民はつまり廢れもの〻落ちどころでございませう？』

『おや〳〵、益々旗色が惡いですな。』

『好い氣味よ。』

と操さんが笑ふ。

『未だあつてよ。』



と母親は操さんを相手にする。

『何がでございます？』

『掃溜の證據よ。華族が不始末を仕出來すと何うなつて？』

『私？』

『えゝ、口頭試問にして上げるわ。』

『さあ。』

『先づ爵位を召し上げられます。』

と友三郎さんが代つて答へた。

『然うでせう？　さうして平民に下ります。實際人間の掃溜扱ひでございますよ、平民つて階級は。』

『困りましたな。』

『撰りに擇つて掃溜へお嫁にやることもありますまい。』

と母親は一足先に問題へ戻つた。若夫婦は顔を見合せた。別に目的があつて平民論を持ち出したのだが、打ち合せが足りない爲、相手の主張を手傳つたやうな形になつてしまつた。折から女中が現れて、

『奧樣、旦那さまがお呼びでございます。』
と注進したので、母親は直ぐに立つて行つた。
『駄目ね。』
と操さんが囁いた。
『お母さんのは信仰ですよ。迚も理窟ぢや動きません。』
と友三郎さんも落膽した。
操さんとしては母親の片意地は覺悟の前で、種々と對策を考へてゐたが、秀子さんの我儘は全く思ひの外だつた。



『秀子さん、決心がついて?』と促した時、
『姉さん、私、西川さんと半年か一年交際させて戴きたうございますわ。』といふ返辭だつた。
『そんなことはお母さんがお取り上げになりませんよ。』
『でも餘り急なんですもの。』
『それは私達、西川さんならお互にもう氣心が知れてゐると思つて、安心してゐたからよ。』
『それがひどいわ。』
『あらまあ、それぢやあなた行きたくなくて?』
『姉さん、私、それが氣に入りませんのよ。西川さんなら行きたからうと初めから定めていらしやるの が氣に入りませんのよ、私。』
『秀子さん、あなたそれぢや少し我儘が過ぎやしませんか?』
『でも、私、自分の考へがありますわ。』
『兄さんにしても私にしても、これでもあなたの爲と思つて、隨分人知れず心配してゐますのよ。』
『それは分つてゐますわ。けれども私だつて赤ん坊ぢやありませんからね。』
『それだから考へて戴きますの。私達、決して勸めるんぢやありませんわ。』
と操さんも忌々しいが、憤つてしまへば折角の苦心が水の泡になる。何處までも下から出て宥め賺す外仕方がない。お天下さまにお代官さまだ、何方を向いても相手が惡い。
新太郎君の心持は疾うに通じてゐた。この邊、この頃の青年男女は思ひ違ひがない。しかし秀子さんは氣がついて見るとそれを兄姉や姉婿に覺られてゐたので甚だ面白くない。胸の中では行くことに定めてゐても、勝氣な性分として二つ返辭が出兼ねる。尚新太郎君に出し拔かれたやうな氣がしてならない。

『姉さん、私、このお話の始まる日取を四日前から知つてゐましたのよ。』

『まあ！ 何うして？』

『西川さんが電話で仰有いましたの。この次の日曜に大變なことがありますつて。』

『まさか。』

『いゝえ、眞正よ。』

と秀子さんはその折の經緯を打ち明けた。

『それぢやお斷りの言譯に據ろなく仰有つたんですわ。』

『いゝえ、序に私を馬鹿にしたのよ。申込まれるのも知らないでつて。』

『それはあなたの考へ過ぎよ。』

『私、あやまらしてやるわ。あやまるまで返辭をして上げなければ宜いわ。』

『定つてしまへば兎に角、縁談中からあやまらせるお嫁さんはありませんよ。』

と操さんは家つき娘らしいことを言つて窘めた。

母親がお高く止まつてゐる上に當の娘さんが斯う見括つてかかつてゐるから、話がナカ〳〵捗らない。新太郎君は洩れ聞いた數日といふ期限を、最初は二三日、次に四五日に解して待ち暮らした。



『出雲守、些つとも來ない。』

と帳簿を披ひながら外ばかり見てゐる。

『戰今や酣さ。イヨ〳〵チヨツカイから正々堂々の陣に入つた。』

と寛一君は他事だから冷靜を失はない。成功すれば纏まり失敗すれば破れると信じて、無論前者を望むでゐる。

それは然うと、宮地さんの出入する家庭は縁談進行中と認められる。隨つて昨今は遠慮して夜分見えなくなる。白晝公然顔を出すやうなら先づ確定と相場が定つてゐる。さて、五日目にその宮地さんが晝頃店へ現れて直ぐに奥へ通つたのである。間もなく女中が新太郎を迎ひに來た。

『何うやらお芽出たいらしですな。』

『結構ですよ。』

と店員達が囁き合つた。人間は何よりも結婚に興味を持つてゐる。お嫁さんだといへば手の物を置いて見物に駈け出す。それを纏めて歩くのだから、宮地さんは人氣がある。

新太郎君は兩親の滿足さうな顔付で吉報と解した。

『御苦勞樣でした。草鞋千足です。何ともお禮の申上げやうがありません。』と父親が改まつてゐた。

『ふむ、新太郎さん、[illegible]しましたか』[illegible]宮際ビイ〳〵[illegible]ございましたさうよ。[illegible]百人町で傘を張つてゐたさうでございます。

した。新太郎君は一礼して母親の側に坐つた。

『斯うなると代々の士百姓は詑がありませんな。』と父親が何か遠慮した。

『御作さんのお手柄です。』

『お母さん、何ですか？』と新太郎君は合點が行かなかつた。

『矢つ張り士族平民が喧しいんださうですが、考へて見ると此方は私のお母さんのお父さんが御家人だつたから、萬吏の紫町人でもないといふことになつたのさ。』と母親が説明した。

『妙なものが——と申しては失禮ですが、思ひもかけないものが役に立ちますな。』

『私さへ考へた事もないのに能く覺えてゐて下さいましたのね。』

『ヒヨツと思ひ出しましたのよ。尤も友三郎さんに責められたのです。何とかしてお母さんの顔を立てゝ貰ひたいと一生懸命ですよ。先方でも。』

『お陰様でございます。』

『後繼が今もおありですか？ お母さんのお里の。』

『はあ、本所でお風呂屋をしてゐますが、引き合ひに出すのも却つて變なものちやございますまいか？』

『いや、唯確めてさへ置けば私も安心して口が利けます。祿高は何石でしたか？』

『さあ、存じませんね。御家人ですから。』

『それも申しますまい。尤も御家人[illegible]傘が内職でしたさ。』

と宮地さんは納得したやうだつた。

『然うのやうでございますね。若い時なんぞでもシヨボ〳〵した御家人が傘を張つてゐるところを見ますと、能く會つたことはありませんが、母方の祖父を思ひ出します。』

と母親も心細いことを言ふ。

『詰まらない先祖が役に立つんですな。』と新太郎君は笑つた。

『綽も三作さ。』

『それぢや我々からイヨ〳〵正式に乗り込みますかな。』

と宮地さんは立ち支度をした。

『何うです？前祝ひに一杯。』と父親が引き止めようとした。

『いや、後から願ひませう。』

『それぢや晩にお待ち申上げます。』

『細工は流々。』

『何だい？ 未だ流々か？』と新太郎君は父待ちどかしくなつた。實はもう成功して來たと思つてゐたのだつた。（つゞく）

童話　影を賣つた話

園城寺健　作
岡本歸一　畫

（一）

フランスのある村に、ジムといふ少年が居ました。小さい時から大變に旅行が好きで、四つばかりのとき、辻馬車について隣村へ行つて、お父さんやお母さんたちを心配させたこともありました。ですから、十の年にはもう近所の村や町は、みんな歩きつくしたのでした。

そして十三になつたこの頃では、どうかして世界中が旅行して見たいと、しきりに考へてゐました。が、世界中を旅行するには澤山のお金がいります。ジムのお父さんは、よく働く鍛冶屋でしたが、そして、ジムもよく手傳をするのですが、とてもそんなお金が、出來る筈はありません。けれども、ジムは毎日旅行のことを考へてゐました。そして、しまひに氣狂のやうになつて、お金をつくることばかり考へてゐました。



（二）

或日のことでした。

ジムは何時ものやうに、家の奥の森に來て、寢轉んでゐました。旅行にのぼせきつたジムは、此頃では、少しもお父さんの手傳をしようとはしないで、毎日、朝から此の森に出かけるのでした。そして、まだ見たことのない汽車だの、海だの、賑かな町だのを空想しては夕方になつてぼんやりと家に歸るのでした。

その日も、ジムは朝から考へたのでしたが、やつぱり金がなくては、どうすることも出來ません。とうとう、いつものやうに『つまらないなあ』と呟いてしまつたのです。と、この時後から、

『ジム、お前はそんなに旅行がしたいのかい？』と、聲をかけた者があります。ジムが驚いて振り返つて見ますと、地にとどくやうな、眞白い髯の老人が立つてゐます。老人は、黒い帽子に黒い服を着て、腰にはこれも眞黒い三角の袋を下げてゐました。ジムはすぐ答へました。

『あゝ、お爺さん、僕、旅行がしたくてたまらないんです。』

『よし、そんならわしがお金をやるから、思ふだけ旅行をして來るがいゝ』

ジムは夢ではないかと思ひました。

『えゝツ、ほんたうですかお爺さん？』

『ほんたうだとも……さあこれをやるよ……』

老人はニコ〱しながら、腰の袋の中から、小さい三角の黒い袋を取出して、ジムに渡しました。ジムにはまるで噓のやうです。

『……だが、これは無價でやるわけには行かないのだから、わしはお前の影ん法師を貰つて行かう……それならお前にはなくても濟むだらう……』

『影ん法師？』ジムは、老人の言ふことが餘りとつぴなのにまた驚きました。



『さうだよ……それともお前は厭なのかい？』

『いゝえ、どうして〳〵』

そこで老人は、指先で、草の上にうつつたジムの影法師の輪郭をとりました。そして、掛物でも卷くやうに、それを頭の方から卷き取つて、腰の袋に入れて、しつかり口を締めました。

『さあ、これでいゝ。が、その袋の使ひ方を敎へてやらう。第一に、その袋の金は、一ぱいを一度に使ふこと、第二に、決して倒まにしないこと、第三に、決して他人に觸らせないこと、これだけぢや、どの一つを違へても金はすぐになくなるぞ……』

ジムは、ソッと袋を開けて中を見ますと、一掴みほどの金貨が、キラ〳〵と光つてゐます。ジムは躍り上つて禮を言ひました。

『お爺さん、どうもありがたう〳〵』

『それではお前の思ふ所へ行くがえゝ、が、くれ〴〵も使ひ方を間違へるなよ……』

老人は、さう言つたかと思ふと、スタ〳〵と山奥の方へ消えて行きました。

『ありがたい〳〵、お金だぞ〳〵』ジムは、もう一度躍り上りました。影法師がなくなつたために、何だか體が輕くなつたやうに感じました。



ジムは、自分の家に寄らうともしないで、兎のやうにピョン〳〵と山を下つて、一さんに町の方へかけ出しました。

（三）

町へ着いたジムは、第一番に服屋へ行つて、一番上等の服を買ひました。そして、靴、帽子、ステッキ、トランクなどをスッカリ用意しました。そして、老人の言つたとほりに、どの店でも、袋一ぱいのお金を拂つたのですが、すぐ袋はまた一ぱいになつて來ます。ジムはもう一度、そこで躍り上りました。

そして、今まで着てゐた汚い服は、町はづれの森に捨てゝ、新しいものでスッカリ準備しました。そして鏡を見ると、まるで貴公子のやうに變つてゐます。

ジムは得意でした。そして、二頭立の馬車を傭つて、その町を出發しました。

（四）

野越え山越えして、馬車は笛を鳴らして走りつゞけました。高いお城のある村を通つたり、何處までもつゞいた平野を走つたりする馬車の中で、鞴の前で鍬を作つたり、馬の蹄鐵を作つ

たりするお父さんも、一臺所でパンを燒いてゐるお母さんをも、ジムは全く忘れてしまひました。

馬車は二日目にある町に着きました。ところがその町は、どうしたのでせう。高い建物が崩れたり、電信柱は倒れかゝつたりしてゐます。あつちこつちには、馬や豚が死んでゐます。人々は汚れた服を着て、悲しさうに裸足で歩いてゐます。ジムは不思議に思つて、通りかゝつた一人に聞きました。するとその人は、

『この前、大きな地震があつて、それにつゞいて火事が起つたのです……私たちは、寢る所もありません』と、今にも泣き出しさうに答へました。

ジムは、すぐ町の役所を尋ねました。そして袋から、何杯も何杯ものお金を出して、

『これで早く町をよくして下さい』と、驚いて居る役人に云ひました。

役人たちはジムを神さまだと思ひました。そして、このことは、すぐ町の人々に傳はりました。



やがて町の人々は、神様のジムに會ふために、町はづれの廣場に集つて來ました。そして、この小さな救ひ主を拜むのでした。と、その時、群集の中から突然に、

『化物だぞー ッ』と怒鳴つた者があります。すると、つづいて、

『影ん法師がないぞ——ッ』

『魔法使だぞ——ッ』

と、いふ聲とともに、ひつくりかへるやうな騷ぎになりました。そして、最前、ジムの與へた金貨が、バラ〳〵つと投げ返されます。

『化物のくれた金は、石ころだぞーッ』

『なあに、魔法使だから、馬鹿かも知れないのだ——ッ』

ジムは恐しくなりました。そして、今にも押し寄せて來さうな一團の人々を後にして、一さんに町を逃げ出しました。

（五）

夜通し走りつゞけたジムは、翌朝、ヘトヘトになつて、或る村に逃れました。そして、すつかりお腹が空いたものですから、とある店で、パンを買ひました。そして、お金を拂はうとすると、店の主人が急に怒鳴りつけました。

『小僧、貴樣は昨日の化物だな……』

そして、そこにあつたパンの棒を振りあげました。昨日の町の騷動が、もうこんなに傳つてゐたものと見えます。ジムは慄へ上りました。そして、パンを投げ捨てたなり、またもや、はふはふの體で逃げ出したのです。

（六）

かうなつて來ると流石のジムも大閉口です。やつと、遠くの村へ逃げて來たのでしたが、これから先、どんな目に會ふかも分りません。ジムは考へました。そして、その次の町に着いたとき、ある畫家を尋ねました。そして、袋一杯のお金を出して、影法師を描いて貰ひたいと賴みました。

畫家はすぐ承知しました。丁度、暗夜のときでした。畫家はジムを庭に立たせて置いて、黑い繪具を、せつせと庭の土の上にぬりつけました。

『そして、夜があけるまでこゝに立つてゐなさい』と、言ひました。

翌朝、太陽がポッカリと東の空へのぞきました。ジムは、見ると、地上に自分の影がハッキリうつつてゐます。なんといふうれしいことでせう。ジムは、幾度も幾度も、畫家に禮を言つてそこを出かけました。

ところが、また大變なことになりました。と、いふのは、その次の町で、何か買物をするために、ジムは財布を開けました。と、どうでせう。財布の中に一つの金貨もありません。ジムは困つてしまひました。

ジムは、影法師を踏んでみたり、ステツキでなぐりつけたりしました。けれども、影は消えさうにもありません。

ジムは悲



しくなりました。そして、今まで忘れてゐた、お父さんやお母さんが、急に戀しくなりました。けれども、財布が空つぽでは、自分の家に歸ることも出來ません。ジムは町はづれの道ばたで、泣き出しさうになつてゐました。

そこへ一人の男が通りかかりました。そして、ジムの悲しさうな顔を見て、

『お前さん、どうしたんだい？』

と、親切に尋ねました。ジムは、困つてゐるわけを、隠さずにみんな話しました。するとその男は、

『それぢや河へ入つて洗つたらいゝだらう』

と、言ひました。

ジムは、裸になつて、河に入りました。その男は、草に砂をつけて、ゴシ〳〵と洗つてくれました。河から上つて着物を着て見ますと、全く影法師はなくなつてゐます。ジムは勿論、その男も大變喜びました。そして、

『そんなら、わしと一所に旅行せう、わしがついてゐたら、化物だと言はれたつて大丈夫だから……』

と、言ひました。そして、その男は、次から次へと、賑かな町や、珍らしい山へだのと、ジムを案内してくれるのでした。

（七）

ところが、この男は、盗賊だつたのです。だから、どうかして、ジムの袋を捲きあげてしまはうと考へたのです。けれども、ジムがチッとも放さないものですから、どうすることも出來ませんでした。

或る町の宿屋へ宿つたときでした。男はとう〳〵ジムに、

『どうだい君、その袋を俺に借してくれないかい』

『そりや小父さん駄目だよ』

『何故だい？』

『他人に觸らせたら、お金が出なくなるんだよ』

『嘘言へ』

『嘘ぢやないよ。お爺さんがさう言つたんだもの……』

ジムにさう言はれると、男は仕方なしに默つてしまひました。

その中に、ジムたちの噂が、フランスの國中にひろがりました。

『影法師のない子供が、大變に金を持つてゐるさうだよ』



『魔法使かも知れないぜ』

『いや、盗賊かも分らないんだ』

そして、彼等は化物かも知れないから、見つけ次第、縛りあげてしまへといふやうな命令を、王樣が國々の役人にお出しになつたといふやうな、評判も二人の耳に入つて來たのです。

かうなると、盗賊であるその男は、氣が氣ではありません。



つけて、そこを飛び出しました。

そして、今の中にジムの袋を盗んで、逃げてしまはうと考へました。

八

或る村の宿屋に泊つた晩です。その男は、ジムの寢入つてゐる間に、とう／＼袋を盗んでしまひました。袋には相變らず一杯の金貨が入つてゐます。盗賊は大喜びで、袋を倒さまにして、お金を掴み出しました。そして、それをポケットに入れてから、もう一杯と思つて、袋に手を入れました。と、たつた一つの金貨があるだけで、お金は出て來ません。盗賊は驚いて、袋をかき廻したり、振つたりしましたが、やつぱり駄目です。

と、その時、ジムはふと眼を覺しました。そして、それを見ると、いきなり、

『盗賊!』と、怒鳴りました。

すると、盗賊は、お金が出なくなつて、あてのはづれてゐる上に、ジムに見つかつたものですから、やけになつて大變に怒りました。そして、

『俺が盗賊なら、貴樣は影法師のない化物だから、役人に訴へてやるからそれでいゝや』

と、言ふなり、その袋と一つの金貨とを、ジムに投げつけて、そこを飛び出しました。

お[illegible]なり[illegible]ませんか。[illegible]まつたら大變です。その袋と、一つの金貨とを握つたまゝ、一生懸命に逃げ出しました。

（九）

それから幾日かゝつたことでせう。ジムは、その一つの金貨を旅費にして、やつと自分の村に歸ることが出來ました。自分の家の前に來て見ますと、お父さんは、相變らず鞴の前で、トンテンカン、トンテンカンと働いてゐました。ジムは、いきなり、

『お父さん！』と、叫びました。

その聲にお父さんは、顏をあげて見ると、そこに影法師のない男が立つてゐます。お父さんは驚いて、

『ウワーッ化物だッ』

と、叫んで逃げ出さうとしました。ジムは、あわてゝ、

『お父さん、僕ですよ、ジムが歸つたんですよ』

と、言ひましたが、お父さんは、

『ジムは、ずつと前に、町はづれで化物に喰ひ殺されたんだ。そしてお前はその化物なんだらう、また何か惡いことをしようと思つて、ジムに化けて來たんだらうが、もう許されないぞ』

と、いつて、いきなり、戸をしめてしまひました。

『お父さん、僕なんですよ、化物ぢやないんですよ……』

ジムは一生懸命に戸を叩きました。

『いゝや、いくら嘘を言つても駄目だ、ぐづ／＼してゐると、行つて[illegible]』

さう言つて、お父さんは、内から錠をかけてしまひました。

仕方がないので、ジムはそこに立つたまゝ泣いてゐました。

と、後から、

『ジム、どうしたんだい』

と、誰かが聲をかけました。振り返つて見ると、ジムにお金の袋をくれた、例の黒い帽子の老人が、ニコ／＼して立つてゐます。ジムはいきなり、老人に抱きつきました。そして、

『お爺さん、僕の影法師を返して下さい』

と、泣きながら頼みました。すると老人は、

『よし／＼』と、ジムの頭をなでながら、

『どうだ、分つたかい？　今からは一生懸命に働くんだぞ、そして、ウンとお金を儲けてから何處へでも旅行するがいゝんだ』

そして、老人は、ジムの持つてゐる三角の袋で、ジムの背中を、二三べんこすりました。すると、以前のやうな影が、立派に出來上りました。

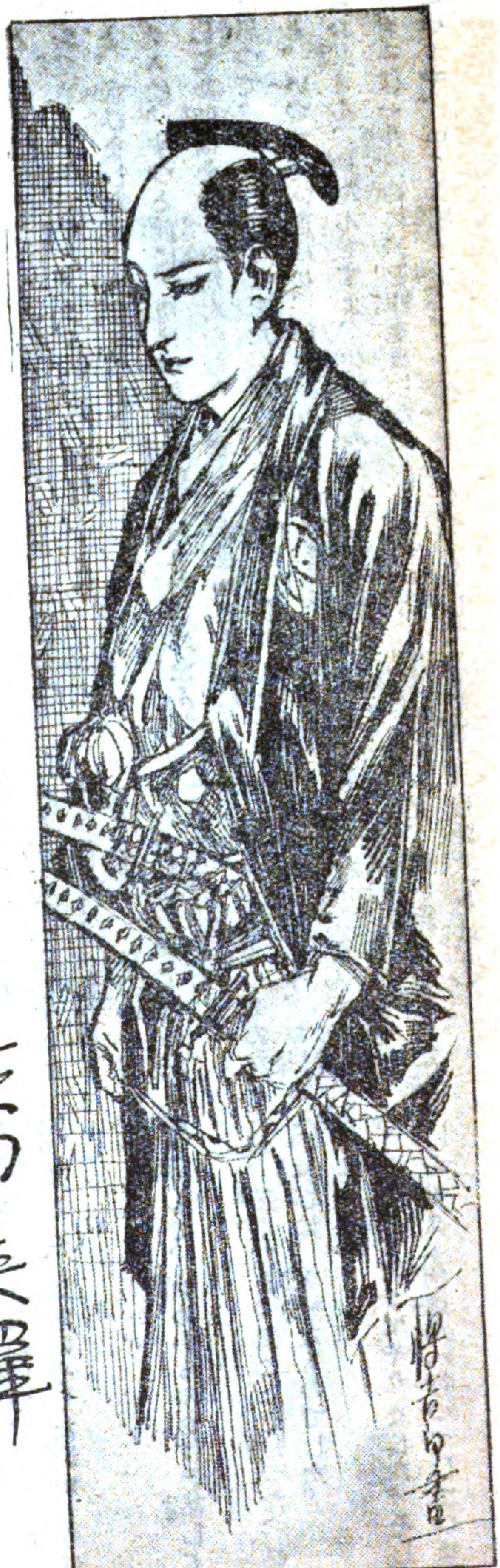
『さあ、これでいゝだらう』

そして、ジムのお父さんを呼んで、始めからのわけを話してくれました。

死んだと思つてゐたジムが、無事であつたことを知つた、ジムのお父さんや、お母さんの喜びは、大變なものでした。

『これで、みんな幸福に暮すんだよ』

老人は、さう言つて、ジムの頭をなでてやりました。そして、白い鬚をしごきながら、そのまゝ何處かへ行つてしまひました。（をはり）



智勇連翹襷

本田美禪 作
山口将吉郎 畫

尾行する無數の黑影

門を出ると大彌太は覺えず屹と身構へをした。其れは無數の黑影が、漆のやうな向ふの闇に並んで立つてゐたからである。

『暫く……』

と、渠は忍び聲で後へいつた。

小名木川の別邸へ案内すべく主人から吩咐けられた當家（松平伊豆守）の者は、渠の後から八九名提灯を下げて附いて來てゐる。其れはまだ門内にゐて、眞先に立つた用人格西村治右衛門だけが衆に續いて耳門の外に出ようとしてゐた。

『何がゐますな』

と、治右衛門は小聲で訊ねた。

『提灯の火をお消し下さい』

『貴殿を狙ふ者ならば我等がお引受け申しても好い。何がゐますな』

『御芳志は忝けないが、些と面倒な者なので、灯を付うかお消

し下さい」
「然やうか」いはれた上は、治右衛門は提灯の火を吹ッ消した。
「今貴殿御主人からお聞きになつた池川家の者、又は田沼家の者が拙者の後を尾けてゐるやうに思はれる。耳をちよつとお貸し下さい」
「はッ」と治右衛門は耳を寄せる。
「……」
「ふん、成程……」
「で、御一同は別に後から……。尤も先方には拙者の門弟、並びに寂莽といふ大坊主が御守護申し上げてゐますから、少しも御心配なさるに及ばぬ。たゞ貴殿等は小名木川へと……」
「承知いたした」
「では拙者だけ一足お先へ……」と囁き終ると、各務は独り闇に中を見附の方へ向つて進む。
天には星が瞬叩いてゐる。
「難有い、あの尾けて来る、犬共は何人ゐようとも姫君の忍びになるお屋敷の定まつた今、俺に取つては犬山伏の群も同様だ。下手に近づくと腰の挺摺、一揮の下に砕いてくれるが、然し犬等は、池川、田沼両家の中、いづれの家の者だらう」大膳太は悠々と歩を運びながら考へ続ける。
闇中を即かず離れず、後から尾いて来る黒影は三十個近くあるやうである。

「今の話の様子によると、池川家の者達はまだ知らないでゐるらしい。而して見ると田沼家の……？ 必と然うだて、彼奴等に負けた次郎太殿、早くも此れと見做つて、此の問所入をしさうな所へ見張りを配置したのに違はぬ。この模様では小梅の外の道場へも抜目なく……？ ふん」と各務は鼻でせゝら笑つた。「どのやうな奸智を廻らし、じたばたあがいても彼等の力で身どもには掴み取れまい。だが池川家の者だとすると仕事はちよつと面倒になる、然うだ、一つ試してくれよう」決心すると各務は立止まつた。而うして何と思つてか四方をじつと見廻した。
もうこの時は見附を出きつて、呉服橋を真直に、通り（日本橋）の方へ向つて来てゐた。
両側にある商家の多くは、大戸を引き卸して寝んでゐるが、その中にたつた一軒、居酒屋がまだ起きてゐた。縄暖簾の左右の障子に、御酒肴めし、はま鍋——などと記した文字が灯で黒く現はれてゐる。
「むゝ然うだ、丁度好い。許せよ」各務はずいと暖簾を潜つた。
「入らつしやいまし」
「何を差し上げます」
店にゐた亭主と女中は、好い客と見て叮嚀に腰を折りながら客を迎へた。
「はま鍋が出来れば貰はう」

『へい出來ます』
『酒を付けてな』
『畏まりました』と組場の方へ飛び込むと、亭主は大急ぎでばた〲初める。
もう火は落してしまつた。其所へ蛤鍋の註文と來た。普通の客ならば斷る筈だが、見たところ衣服大小、立派な上に格幅も酒ならちよつと一升ぐらゐは呷つてのけさうな樣子をしてゐる。年こそ取つてゐるけれど堂々とした威風骨柄、誰が眼にも尋常の老ぼれ侍とは見受けられない。亭主は其所に隨喜したのだ。
『遲うなつて氣の毒だつたな』といひながら大彌太は表の方へ注意してゐる。
『什ういたしまして旦那樣、夜一夜でも商賣冥利、精を出さなければなりませぬ。其れに今大彌太が……』といひかけて顋を掬つて、腰を卸した隣りの床几に掛けてゐる浪人風の男を敎へて、『まだ御悠りと召上つてゐるお客樣も御座います。什うか御一服なすつて下さい、今剝きたてのを差上げますから』
『然やうか』
『何しろ貴下背の內から丸二時も然うやつて、僅なお銚子一本を召上つとるんで御座いますけど、御飯の方は大盛を十一ぱいもお上りになり、鰯の煮つけ、鯵の鹽燒、



揚身のぬだなどは六ばいもお替へなすつたんで御座います』

『ほう、恐ろしく食る方だな』驚きながら大彌太は浪士の方へ瞳を送つた。

成ほど前のちやぶ臺に並んだ皿や丼や小鉢の數は澤山にある。いかに胃袋の大きな者でも、よく〳〵飢ゑてゐない限りは、是れだけの物を一時に詰め込むことは難かしい。然う思ひながら大彌太は、浪士の身裝や風采に眼を改めて据ゑて見た。



美しき窮浪士

文字通りに尾羽打ち枯らした二十そこ〳〵の若者なのだが、吊行燈の灯を浴びたその横顏は色白である。つんむりと筋の通つた手頃の鼻の格好も好い。眼も眉も口元も點の打ちやうがなく出來てゐる。月代は延び、髮は亂れて、その見すぼらしい身裝と同樣、渠がいかに窮迫してゐるかを明かに語つてゐるが、其れにも拘はらず人の眼に世間稀覯の美男子といふ感じを強く起させる。芝居は勿論、双紙物語などいふ物を見たことのない大彌太ですら、『女子供の噂する平井權八とか申すのは、或は斯んな男か知れんな』と感心しつゝ竊み見てゐる。

と、俎場で蛤を剝いてゐる亭主は少し中ツ腹になつて來たやうな調子で續けた。『で、もう大概はその方も、お腹が出來てゐるんでせうのにまだ然うやつて愚圖々々と、いえ、一本のお銚子を、お樂みになつてゐらつしやるんで、夜は深けて來ても店の戸を卸してしまふわけにはゆかず、いかに商賣でも手前も少々弱つて居つたんで御座います』

『はゝ然やうか』

『が然しよくしたもんでね、辛抱してゐれば旦那を見たいな好いお客樣がいらして下さる。お陰樣で蛤も是れで殘らずになりました』

『はゝ然やうか』と大彌太は口先ばかりで、調子を巧く合はしてゐたが、若い美しい隣りの浪士が、口惜しさうに唇を嚙み、じつとうな垂れてゐる樣子に氣づくと氣の毒になつて話頭を轉じた。『だがその方の蛤を剝く手つきは實に巧いもんだな』

『へえ、慣れッ子になつてますんでね』
『武藝などゝ鍛練しないと、矢はり名人にはなれないものだが、汝のも矢はり熱心な多年の鍛練から得たものらしいな』
『生れは深川で御ざいますんでね』
『成程！』と感心しながら、各務は尚も隣席の若い美しい浪士の樣子を、同情しつゝ竊み見てゐる。
侍であるために、亭主はじつと虫を殺して、追ひ立てることを控へてゐるが、肚ではちやんと浪人の一文なしの空ッけつ、飲食をした代金の拂へぬことを見拔いてゐるのだ。其れは浪人の樣子の上にもちやんと明らかに現はれてゐる。渠は飲んだ酒の醉も廻らず、がつくくとして詰め込んだ胃袋の物も今となつては苦痛の種になつたやう、うな垂れてゐる顏さへ上げない。其れがまた俠氣に富んだ各務の眼には哀れでもあり、氣の毒でもあり、笑止でもあり、捨てゝは置けぬやうに見えるのである。
暫くすると蛤鍋が各務の前へ小汚いしちりんへ載せて運ばれた。銚子杯も運ばれた。青年時代諸國を廻つて、武者修行をした頃には兎も角、日本一の劍豪と唄はれてゐる今の渠には、餘りに物好きな食好みだが、然し渠は蛤鍋に生來深い嗜好をもつて、九段中坂の道場においても始終やつてゐた。殊に今夜は、今表まで尾けて來てゐる黑裝束の曲者が、もし池田家の者だとすると、些とでも餘計に暇取り、渠等を自己の身邊に引きつけて置いて その間に、恭姫君を安全に今潜んでゐる宿屋から、小名木川の隱れ家へ移動をさせる必要がある。然う思ふと蛤鍋は、出來得る限り悠々と突ッついてゐる方が好く、酒もまた不斷のやうにぐいくと引ッかけて飲むことは愼む方が好いのであつた。
『亭主、時候には遲れて居つても、酒は矢はり鍋に限るな』などといひながら大彌太は煮え上るのを待つてゐる。その片手ではいふまでもなく猪口でぐびくとやつてゐる。
『へい、蛤は是れからが身が太るんで御ざいますから、味も從つて好う御ざいます』
『然ういふものかな』
『失禮ながら旦那樣は何藩の御家中でゐらつしやいます』
『身か』
『へい……』
『今は半分は浪人なのだが、天下直參のやうには見えぬか』
『御直參でゐらつしやるので？』
『いや、はゝゝゝゝ』と大彌太は自分自身を嘲けるやうに大きく笑つて、『眞の直參ではないのだが、妙なことで身命を公儀に捧げねばならないやうな境遇に今置かれてゐるのだ』
『然やうで……』
『その代りには太平の世に、人はどれだけでも斬り法題』と大彌太は外にゐる尾行の者に聞えよがしに、調子を高く張りながら、『殺し法題の特權がある。其れがまア役徳で、樂しみにして働いとるのだ』

『……たこちのこばしきすので』

『草迄を叶すな』

『でも……』

『はゝゝゝ』と大彌太は體を反らして、前にある蛤鍋の五もくの湯ぐらゐは飛びさうな大聲をして笑つたが、元から床に何事かいはうとしては躊躇つてゐた隣りの若い浪人の方へ大きな鬚だらけの顔を向けると、『時にお一個でお淋しさうだな、失禮ながら一杯參らう』

『難有う存じます』渡りに船といつた樣子で、浪士は欣んで杯を受け『今何つて居りますと、人はどれだけでも斬り法題、殺し法題の特權がある、其れが役徳だと仰せられたが、其れは本當で御ざいますか』

『然やう、明も武士の端くれだ。人前において嘘は申さぬ』

『ではお腰の物のごときも、隨分常に吟味してお持ちなさるので御ざいませうなア』

『無論』と大彌太は大きく頷き、『今差してゐる一刀は、流祖傳來の一文字、一たび揮へば百人ぐらゐはまづ一時に斬つて取ります』

『ほう!』と天晴の浪士は、呆れて暫く大彌太の顔をじつと眺めてゐたが、『一文字は天下の名刀、其れを御佩用になられて居つては、他の鈍刀は御入用ないかのやうに心得ますが、如何なものでございませうか、拙者腰にある關の孫六――』

『いや』と大彌太は早くも被せて、『その後はいはれぬが好い。然くならの御指南で、拙も見は致して居つたこ』

『…は次第も御ざいませぬ』

『然し』と大彌太は眞顔になりつゝ、『お身は何方の御浪人かな』

『用各侍に御ざいます……』

『而て御用府の目的は』

『相成るべくは何所ぞへ仕官を……との希望なので御ざいます』

『堪能の技の御流儀は?』

『は……』と頭を垂れると、慚愧の色がうす赤く、若い美しい顔に上る。

同情から誘惑へ

『腰抜けかい』と大彌太は想像したが、然しこの下人に優れた美しい姿を見ると、流石は先刻から心の底で考へてゐた或事を斫り出して見たくなつて來た。

『いや、太平の今の世に』と流石は續けた。『武藝などといふ事はまア本來は什うでも好いので、明のごときも好きなればこそ鍛錬をして修行をしたが、却つて其れが禍となり、無用な殺生をいたさねばならない羽目に陷つてゐる。斯う申しては甚だ何だが、お身などはそのお生れつきから、武藝をもつて立身を計らうといふ柄でない。拙者の眼には武藝以外の、まア、いつて見ると謠曲とか、俳諧とか茶とかいふやうな遊藝をもつて仕官する

お考へのやうに見受けらるゝが、誤つたらば御免蒙る』
『然う仰しやつて頂くと、たゞ赤面の外はなく、生來の身の柔弱が怨めしいので御さいますが、拙者主人は、當將軍家のお子樣で、御養子として六年以前に阿波へお乘込みあそばした中將樣なので御ざいます』
『ほう、蜂須賀の御家中だつたか』
『は、苗字は小室欣哉と申し、齊裕君のお小姓を勤めて居つたので御ざいますが、御承知どほり齊裕君には、まだ西の丸にゐらした頃から能には御堪能でゐらせられ、お乘込み後は一層激しく、拙者初め御近習はみなお相手を仰せつけられ……といふやうな有樣で、武藝などを行る者はなかつたもので御さいますから』
『いや分つた』大彌太は大きく頷き、『何にまれ君公のお嗜みになる物を勵むのが臣下の忠節、國君琴を好めば一國琴を好むとさへいうてある。はゝゝゝ』と笑つてしまつて、『で、御浪人になられた動機は』
『そ、其の……』と暫くしてから、『つまり若氣の誤りで……』
『成程、お身の器量では止むを得まいな』



『痛み入ります』と額を抑へて、欣哉はじわじわと湧いて來た慚愧の汗を拭きながら、『で、お手討にもなるべきところを、お慈悲によつて一命は助かつたので御ざいましたが、世間の手前親里へそのまゝ歸るわけにもまゐらず、據なく當江戸へ出てまゐつたので御座います』
『成程』と大彌太は同情しながら、『では遊藝で御仕官を――といふ御希望であることはいふまでもない話說だが、知行に望みでもおありかな』
『却々』と欣哉は美しい面を振りつゝ、『多寡が役者風情の眞似して、身の落ちつきを得ようといふのに、然る僭上な望みなどあ



りさうな筈は御座いませぬ』

『では拙者、御推擧申すが、什うであらう拙者と共に拙者の許へお來でになつては』

『失禮ながら貴所は今、半は浪人……といふやうに仰せられたが』

『然やう、その半分だけ奉行して居る主人にお世話申したいのだ』

『その御主人と仰せになるのは』

『其れは公方家のお子様なのだが……』

『何?』と欣哉は驚く。

『ま、兎も角も一緒に來られい』

『而て貴所の御苗字は』

『各務大彌太』

『えッ!』

と、欣哉は叫んだ。

今江戶に住む者で、田沼家の名物男、一刀流の劒豪として九段中坂に道場を開き、多くの門弟を養つてゐる各務大彌太の名聲を知らない者は一人もない。彼もまた二三度は、主人について江戶へ出て、當地にゐたことがあるのであるから、顏は見知らぬが雷名は轟くやうに聞き知つて、深い憧憬と敬意とは國に居つてさへ懷いてゐたのだ。

『はゝゝゝゝ詳しいことは屋敷へまゐつて、悠々と御相談申すといたして、兎も角も一緒に來られい。決して惡いやうにはいたさぬ』

『然やうで……』

『これ〳〵亭主』と大彌太は手招きをして、『勘定だ、その御仁のも是れで一緒に』

『難有う存じます』

『剩金は入らんぞ』二朱金一枚を奮んだ各務は、若い美しい浪士を連れて、ぬいと繩暖簾を潜つて出て來る。

渠は悠々と蛤鍋を突ツつきながら欣哉を捉へて、心にかゝる何事もないかのやうな顏をして平然として話してゐたが、肚ではちやんと外にゐる尾行の曲者の何であるかを推測をしてしまつてゐたのだ。其れは直覺でも悟つたのだが、店の障子の隙間からちよい〳〵見えた覆面の男の顏は篠原一味の何某だつたからである。『ふン、田沼家の者ならばたゞ尾けるだけで手出しはようせぬ。其れよりはこの綺麗な若者、巧く生捕つて行かねばならぬ。幸丸殿を世の中にお出し申すには何を措いても姫君と縁を斷らせにやならぬ。其れには和子に替ゆべき代物――荒深度なき姫君が、たゞ一目御覽になつたばかりで顫へつくやうな男を手に入れて置かねばならぬが、其れには持つて來いのこの男……』然う考へて小宗欣哉を渠は手懐けてゐたのであるから、外にゐて自分の樣子を窺つてゐる者などは問題としてはゐなかつた。で、今居酒屋を出て來ても、渠は闇中に潜伏してゐる黑裝束の者などは毫も眼中に置いてゐぬ。悠々として欣哉を從へ、歩を吳服橋の方へと運ぶ。今小名木川へ直行すると、恭姉君の隱れ家を敵に氣取られる惧れがあるので、道を轉じて、九段中坂の道場へ一まづ歸る風をして途中で敵を蒔かうといふのだ。

謠ひ出す田村の一節

が、然し獅堀へ出て、一石橋を北へ向つて、鎌倉河岸へ來かかつた時、各務はばつたりと地上へ仆れた。今鳴つたのは短銃の音、漆のやうな闇夜の空氣はちよつと其れがために動搖をした。

『先生、お行られなすつたんじや御ざいませんか』驚きながら欣哉は訊ねた。

『や、行られた……。殘念だが急所を行られた……』

『其れは什うも』と側へ跼んで、欣哉は介抱をしようと爲たが、氣がつくと黑影が無數に身邊へ寄つて來て取卷かうとしてゐるかの樣子だ。『氣を確にお持ち下さい。唯今も申したとほりに、殘念ながら拙者には武藝の嗜みがないのです』

『少しぐらゐあつても駄目だ。飛道具には迚も敵はぬ。拙者には構はずにお身は早く逃げられい』

『でも……』欣哉は去りかねて愚圖々々してゐる。が、可異いのは逃げろといつた各務がしつかりと自分の袂を攫まへて離さぬ事だ。『偉さうな事はいつても矢ツぱり心細いと見える』然う思ふと渠もまたさすがに武士の端くれである、敵はぬまでも身をもつて守護してやらうかといふやうな勇氣の湧いて來るのを覺えた。で、先刻大彌太に貰らうと差へた腰の業物、關の孫六の柄に手をかけ、じつと闇中を透してゐると、

周圍の黑影は肉薄して來る。

『何者か存ぜぬが、手向ひするとお身もまたこの短銃で息の根止めるぞ』と眞先に立つた一個が叫んだ。

『は……』

欣哉はぞつとして立竦む。

『各務氏！』と渠を見下した男は續けた。『拙者は篠原昌左衞

聞いた』

『甲・甲仗千艘……』と各務は低声で呼吸をしてゐる。その様子から推測すると、餘程の重傷であるらしい。

『池田家の若侍。百何餘名向ふへ廻して血の雨降らしたお身の武勇も、拙者の偽術には敵ふまい』

『……』

『柳ケ瀬で誅戮に會つた一味の者の復讐だ。其れに訊ねたい事もある』

『えいッ！』

と、各務は叫んだ。

紫電一閃！

不意討ちに會つた篠原は二つになつてばつたり仆れた。さつと舞つた血煙は、いふまでもなく四方の地上を赤く彩つてゐるのだが、それは闇いので分らない。

『はゝゝゝ』と笑つた各務は、篠原の手の短銃を早くも奪ひ取つてゐた。彼は行られてはゐなかつたのだ。行られた風をして敵を引き寄せ、後日の證となるべき兇器をわが手に收むべく仆れてゐたので、今短銃をわが手に入れると、同時に莞爾と跳起きて、初めて擬闘の血汐を振つた。

『では先生は何所にもお怪我は……？』歡びながら欣哉は訊ねた。

『はゝ勿論、臆病者の彼等の拳の的とされるやうな拙者ではない。見られい』と血刀をもつて大弥太は周囲の闇を指しながら、『拙者の無事であるのを知ると、もう叶ひさうにないと知つてゐる銃口を向ける勇氣もなくなり、先を爭つて逃げて行きをる』

『もう大丈夫で御座いませうか。』

『御懸念には及ばない。手向ひしたら今しがたあの濠端で仕止めたとほりに、斬捨の殺生をまた行つて見る積りであつたが、踏み止まつて闘ふやうな勝らしい奴は彼等の中には一個もないのだ。はゝ、是れは思はぬ獲物だ』といひながら大弥太は、引ッ提げてゐる白刃を仕舞ふと、今拾ひあげた短銃を闇に透しては調べて見てゐる。

當時の掟、府内において鐵砲を放つた者は庶人は磔刑、大名旗本は家名斷絶、個人としての侍も其れに準じたる極刑を受け、死は免かれぬものだつた。

『さア參らう』と大弥太は欣哉にいつた。

『然しこの死骸の處分は？』

『今逃げて行つた彼等の中、分別のある者が取つて返して、何とかするに相違ない。放つて置いて參るといたさう』と各務は先に立ちながら『お身は謠曲が堪能だつたな』

『は……』

『何か謠かしては貰はれまいか』

『拙く……』

『でも腰だけは拔かさなかつたな』

『……』

『では拙いが拙者が一つ、田村を唸りながら參るといたさう』

と渠は朗々と謡ひ初めた。老人にしては美い聲で、なか〱隅に置けぬのだつた。

御隠れ家は揚屋同様

小名木川の隠れ家へ恭姫君が潜伏してから、もう十日ほど經つてゐる。生ける屍として一生涯此所に遷されてあることは、姫自身には知らぬので、動ともすると駄々を捏ねては、外出をしたがつて各務以下周圍の者を困らせる。が、然し何といつても、かの女の我儘は徹頭徹尾通さぬことに極めてあるので、周圍の者は相手にならない。いよ〱駄々の嵩じた時には、『まづ其れよりはお酒でも――お面白いお遊び事でも』といつて反らしてしまつて、飴のやうに酒で殺してその場を胡魔化して納めてしまふ。で、この頃のかの女の酒量はまた一段と強くなり、時とすると一升ぐらゐは傾けてしまふことがある。いふまでもなく左右には、かの女の性慾の犠牲となつたかの幸之助が付きゝりでその御機嫌を取つてゐる。醜聲四方に聞えるといふ大不しだらを實際に毎日やつてゐるのであるから、周圍の者は耐らない。お極などは大彌太に什う叱られても構はない、隙を見て刺し殺し、自分の一家の怨みを酬ゆるその一面では天下のために……といふまでに激昂をして、懐劍の鞘を拂つたことも一度や二度でなかつたのだが、何にしろ公方家御秘藏、三十二萬石の鳥取家さへ手出しの出來ぬ貴人である。其れに大彌太が陰へ呼んでは身に沁みるやうに諭してくれる慈愛に富んだ意見の中には、多情な姫の浮かれ心を他に移す法はいくらでもある、まアもう少しの辛抱だ、何もみな若様のため……といふやうな言葉もあるのだ。其れや此れやで、かの女は胸を擦つては辛抱をしてゐるのだが、犬同樣な醜態を眼の前において行られる時には、浅ましくもあり、悔しくもあり、怨めしくもあり悲しくもあり、自分の部屋へ逃げて來て、聲を揚げて泣いたことさへ幾たびあつたか分らぬくらゐだ。で、この頃のかの女は窶れて、見る影もなくなつてゐる。まだ多寡が十日ほどしか日數は經つてゐないのだが、かの女はもはや十年ばかりも、あらゆる愁い恐しい呵責に會つた人のやう、その肉までが落ちてゐる。其んな風で恭姫を主人と仰ぐ當邸内には、悲劇もあり、喜劇もあり、いふに忍びない醜い場面の連續をする活劇も始終演ぜられてゐるのだが、何にしろ肝腎の各務が故と知らざる眞似して、耳を掩ひ、口を噤んで、默々として自分自身のなさねばならぬ重大事件の計畫にのみ耽つてゐるので、周圍の者の力では什うすることも出來ぬのである。

その中にゐて獨り氣樂に、剽輕口を叩いては恭姫君の酒宴の席を賑はしてゐるのは宗俳淑音。渠は各務から意次（故田沼主殿頭）の遺言狀を預かつてゐた。その關係から白河へ急行をして民也と共に神前にあつて活躍した上、尙ほ將來も各務のために一臂の勞を盡すべく江戸表までついて來て、當邸内に在るのだが、出家の身には餘りに激しい姫の醜行を眼の前に見るのは少し閉口してゐる。が、然し可憐なお極が、悲しい戀に泣く狀



や、心に染まぬ伽をして苦んでゐる幸之助の狀など見ると什うしても立ち去る氣にはなれぬのだつた。

『乗りかゝつた船だ據ない、家督一件の片づくまでは當家に居つてやらずばなるまい。牝犬のやうな淫婦も、傍にゐて其邪口叩いて、座を胡魔してやつとれば、よし少しでも其個の苦痛を除いてやることが出來るといふもの。拔け目のない各務の事だ、其れに道具立もちやんと出來とる。豫定のとほり遠からず幸丸殿を家督に据ゑて、目出度く幕を閉づるであらう』然う考へて止まつてゐるので、渠一人は恭姫の酒宴の席へ進んで出て行く。恭姫もまた恐ろしい大入道に似合はない氣輕な渠の冗談や、野性を無遠慮に發揮する傍若無人の裸踊や、一氣に斗酒を飲み盡す酒の曲飲みには感心をして、『布袋どの』といふ綽名さへつけ、お側去らずの一人に加へて渠を興がつてゐる。千金の子は市に斬られぬ。鳥取家へ嫁して御守殿と仰がれた身で不義をして大問題を惹起し、天下嘲笑の府となつて頭髮をさへ切られたかの女も、當將軍家の秘藏であるため、よし宴に一生涯、生ける屍として幽閉の憂目に會つてゐるとはいひでう、人の世の榮耀榮華は心のまゝに盡し得られる。今日もまた恭姫は朝から酒を初めてゐるので、かの女の部屋まで揚屋以上の大劇脈となつてゐる。幸ひにして屋敷の位置が、町家と少し離れてゐる上、その大部分は川に面して建築されてゐるために、四方に漏

れる醜態も實際ほどに激しくない。

下戸を大酒豪にする法

『ふん、また牝犬どの初めをつたな』と大彌太は苦い顏して、聞耳立てながら考へてゐる。渠は中坂のわが家へは、先夜豆州（松平伊豆守信明）邸を訪れた際、欣哉を連れて歸つたばかりで、その後はずツと當邸に雌伏の膝を收めてゐたのだ。池川、田沼兩家に對して執らねばならぬ最後の手段や、幸丸家督相續の儀を願ひ出づる時期等につき、熟慮を廻らしてゐたのは勿論、久津見兄弟の復讎に助太刀すべく約束をした件についても、知嚢を渠は絞つてゐたので、この十日間の雌伏蟄居は、決して傍で見るやうな徒然な樂なものではなかつた。

『什うもならんな』その苦い顏を一層苦くし、前にある机上の書類に、大きな光る眼をじいつと据ゑた。恭姫君の居間の方から、また甚だしい醜聲が手に取るやうに聞えて來たが。『二ケ月の餘もお駕を守護して、鉢搔き道中を忍んで來たのに、まだこのやうな聞くに耐へない、犬の戯けるのを聞かねばならぬ。』

『兄貴』といひながら寂然が其所へ蹌けながら入つて來た。大入道の顏も手も茹蛸のやうになつてゐる、借着の單衣の前は寬けて、布袋のやうに脹れた腹と、毛胸をむき出しに出してゐる。もう二升ぐらゐ詰めてる樣子だ。

『何だ』各務は冷やかに見迎へて、『また裸踊でも行つて來たのか』

『うん、あの根太の音を聞いたらば、改めて訊く要はあるまいに』

『其れは然うだが……』

『何事も人助け、幸丸殿の危急存亡、あはやといふやうな所まで、また姫君のお癖が出たので、側にゐてはら〱してゐる、いや、淺ましさに泣いてゐるあの子（お梅の事）の苦みを救うため、俺はまた行つたのだつたが、然し兄貴！』と寂然和尚は、各務の前へ胡坐をかいた膝を少し前へ乘り出し、『例の中坂のは何時になつたら茲へ連れて來る考へなのだ』

『今日あたりは來るかも知れんが、何にしろ眞の下戸でな、酒は臭ひを嗅いだばかりで、すぐ醉つ拂つて仆れるといふ弱蟲だから仕樣がないのだ』

『其れは聞いたが』

『いや』と各務は抑へて、『で、兎も角も酒を飲む稽古を一心に行らして居るのだ。武士らしい武士を作るため、三十年來張つて來たあの中坂の道場も、下戸に酒を飲む修業をさせる所と下落したかと思ふと、俺は殘念で耐らぬが、然し其れも據ない。恭姫君の御前へ出すには、いかに美男でも下戸では駄目だ。少くも一合ぐらゐは飲み得るやうにならない事には』

『誰が稽古をさしてゐるのだ』

『弟子共が寄つて集つて、强ひて飲まして見てゐるのだが、熱心といふは恐いもので、この今日の手紙で見ると、大分いけるやうになつたとの事。食ふか食はぬの堺だから、意氣地たし

ち死身になつてやつてゐるらしい』

『はゝゝゝゝ、俺が代りになれば好かつた』

『だが生れ變つて來ないと駄目だ』

『そんなに素走らしい美男子か』

『うん、顏だけはまづ日本一だらう』

『顏さへ好けりや相手は牝犬、別に人間でなくても好いのだ』

『然う思つて生捕つたのだが、いかに若い者が若い女の、然も公方家の姫君のお相手役になるにしろ、妥へ來て一日ゐたらば吃驚するに相違ない』『逃がさぬやうにしなけりやならんな』

『無論だ』と、話してゐると、

次の間の紙門が開いて、執次の士が入つて來た。

『久津見御兄弟がお見えです』『然やうか』各務は寂齋に拙隨しながら、『直に妥へ通すがよからう』

『は』と執次の士は起つて行く。『仇討の件についてか』

『然うだらう、遠慮してくれ』『よし』と寂齋は心得て去る。

突きとめた仇の所在は

間もなく其所へ入つて來たのは久津見兄弟、兄庄之助は立派な若者、前にもちよつと記したごとく十九にしてはすつかり大人び、人間の體も附いてゐる。弟はまだ前髮立ちだが、十五にしては柄も大きく格ぶくまたがつしりしてゐる。が、共に今何事にか強い衝動でも受けて來たやう、顏色を變へて意氣込んでゐる。『せ、先生！』喘ぎながら片手をつくと、庄之助がまづ呼びかけた。『誠に[illegible]突きとめましてございます』

『分つたか』『は……』と庄之助へ[illegible]と呑み込み、『駒込の小野の屋敷に――小野殿の邸内に深くかくまはれて居ります樣子で』

『何ッ！』大彌太は風貌の眉を覺えずぴくと動かした。駒込の小野といふからは、一刀流の宗家たる小野忠常のことに相違ない。その邸内に潛んでゐるとは！さてはまた娘の色香に――『言語道斷！』と兄は憤慨したからである。

『で、誘引き出して討ち取る積りで』と兄は續けた。『いろいろ工夫いたしましたが、兎も角も先生に一應お告げ申して置かうと……』

『然やうか』と大彌太は考へてゐる。他家ならば事情を話して、民也を貰ひ受けて兄弟の本意を遂げさせてやることも決して不可能ではないのだが、小野家にあられては然うはゆかない、勘當一文字のこと以來、小野家の者は我に對して好感情を持つてゐぬ事實を彼は知悉してゐる。厄介な所へ逃げ込みをつけたな』といふ考へが彼の胸にはまづ第一に浮かんだのである。

『御承知どほり民也めは小野の御息女に懸想して……。瀧田先生の御愛刀、勘當一文字を盜みましたも、まづ小野殿の歡心を買ひ、其れによつて御息女を――と云ふ肚だつたので御座いますから、今度小野邸へ潛みましたも、何かその邊の事情に絡つて……と考へるので御座います』

『で、先生の御意見を』と今度は弟が代つて初めた口を切つた

上で乗込んで有無をいはせずに討つて取る考へなので御ざいますが、如何なもので御ざいませう、今、先生の御都合は』

『まア然う燥るな』と大彌太は靜かに抑へて、『居所さへ分つて居れば、いつでも自由に討てるではないか』

『其りや然やうで御ざいますが』

『まア好い、身に考へる仔細もあるから、今日は一まづ家へ歸つて、心を落ちつけて置くが好い。身の愛刀を掠めた盗賊、娘に戀をしてゐる痴漢——と存じて眞逆忠孝も彼を庇まつては置かぬと思ふで、身が掛け合つたら心よく渡してくれぬものとも限らぬ』『然やうで……』

『ま、兎も角も今日は戻つて』

『は……』と不承々々に、久津見兄弟が起たうとした時、次の間の紙門が開いて、家僕寂善の入道頭が大きくぬつと現はれた。『兄貴來たぞ』

『何がのう』と大彌太は彼を眺める。

『今話しとつた小室欣哉が』『然やうか』

『成程素走しい男振だな』『何所にゐるのだ』

『兄弟の衆の話說の濟むまで玄關の間に待たして置いた。おゝ御兄弟』と寂善は兩個を眺めて、『仇の所在が知れたさうだな』

『お陰樣でやう〳〵今日』『目出度い〳〵、俺は退屈で困つてゐるのだ。兄貴が多忙くて行けんやうなら、俺が助太刀に行つてやる。今日直にでも行くが好い』

『餘計な事を申しちや可かん』と各務は叱つて、

『其れよりは例の男に爰へ來るやうにいうてくれ』

『心得た』と寂善は彼方へ立去る。

『では我々は今日は一まづ……』『然うするが好い』

『御免』と兄弟は辭儀して出て行く。

其所へ入違ひに入つて來たのは、先夜呉服町の居酒屋で各務に救はれた小室欣哉だ。かの夜の彼は尾羽打ち枯らした見る影もない姿であつたが、今日の彼は眩くばかりに立派に美しくなつてゐる。其れはみな各務の注意で、弟子達や、飯炊婆や、臨時に雇入れた女中等が、大骨折で寄つて集つて拵へさした姿なのだが、何にしても素走しい、舞臺の上で役者の扮する若殿樣を見るやうである。縮緬地の派出な單衣に、仙臺平の袴をつけて、黑羽二重の羽織を着てゐる。その紋所は[illegible]龍膽だ。腰の物の作りも立派だ。印籠などは五分玉の珊瑚が緒メについてゐる。髮は文字通りの若殿風に水際立て、結ひ上げて、白の絹足袋を穿いてゐる。

事實をいふと恭姫の生贄になる代物なのだが、その本人はそんな事とは夢にも知らぬので欣んでゐる。公方家姫君の皷のお相手、然う考へてやつて來たのだ。

『成程是れは光り輝く！光源氏か業平かとよく女中等が申して居るが、この人物は丁度其れだな』と感服しながら、今座についた欣哉の姿を、各務はじつと見守つてゐる。

恭姫君の居間の方では、聽くに忍びない醉聲が依然と高く騒めいてゐる。（つゞく）



滑稽の文學（隨筆）

佐藤紅綠

日本人は滑稽が好きな癖に滑稽の文學は大抵淺薄である。一九の膝栗毛は名作にちがひないが、あれは其のゝんきな點が主眼で字句に於て滑稽な點はないと言つて可い。三馬の浮世風呂、浮世床二篇は何と言つても通俗文に於ける滑稽の權威である。漢文體のものでは寺門靜軒の江戸繁昌記、服部誠一の東京繁昌記などが面白い。

源氏物語や徒然草にも滑稽がある、源平盛衰記の木曾義仲の描寫は滑稽文章の軌範と言つて可い。所謂滑稽を看板にしてゐる江戸時代の著作に隨分可笑しいものがあるが、大抵下卑て居る。そこになると平安朝の文學は滑稽も上品である、末摘花の君とか、おもしろの駒とか、人の容貌などに就いて書いてるが、江戸文學の樣に衒氣がない。

何と言つても滑稽に一番深みがあつて面白いのは俳句である。俳句の滑稽こそ本當の滑稽と言つて可い。

芭蕉以前の談林風の俳句は重に地口やかゝり言葉や穿ちであつた、前の滑稽は言葉の先にあるものでない。

芭蕉の句に滑稽が少なくない。但し滑稽の句を以て專賣的なのは也有と一茶である。也有には多少いやみがある。一茶は純眞諧謔である。一茶の滑稽は天下一品である。

明治になつて幾多の俳人が滑稽を唱へる樣になつた。故子規先生は此の點に於ても驚くべき名句が多い。一茶の壘を摩するもの只子規先生あるのみだ。最も眞面目に人生の災厄と戰つた人は最も大なる滑稽を有するものだ。

英詩になか〱滑稽なのが多い、佛蘭西でドウデーの作品は頗る滑稽に富む。英國のヂツキンスと伯仲し得る。沙翁にも滑稽が多いが一々字句を記憶しない。

今日滑稽が要求されるに拘らず、滑稽の作家は一人もないのは遺憾である。漱石は一面に於て明治の末期以後の唯一の滑稽作家と言ひ得る。俳文に於て故阪本四方太君がある。漢文に於ては何と言つても私は韓非子と碧巖錄が好きだ。五雜俎にも滑稽がある。所謂諧謔の文に至つては舉げて數ふべからず、支那の漫筆ものは凡て滑稽と怪談と淫猥であると言つて宜しい。それだけ滑稽の字句が洗錬されて居る、今日の支那文學は全然駄目だ。

最近に於て日本が今までにない天地を開拓したのは漫畫である。今日凡ての滑稽文學は岡本一平氏の一枚の漫畫に劣る。

世の中に對する希望

伯爵　有馬頼寧

まづ世の中に對する自分の消極的態度としては、人の惡口をいはないと云ふ事を心掛けたい。この點、我が國は外國のそれとは著しく相違してゐる。外國人は他人の行動を批評する際には、豫め『何故あの人はあゝいふ行動をとつたか』といふことを十分に考察して、然る後眞面目に批評を下すのが常である。

これに反して、我が國では他人の行動や思想に對し、これを考察し理解しようとする態度に出でないで、動もすれば舊い因襲的な考へを標準として、直ちに他の惡口をいつたり、冷罵を浴せかけたりする人が多い。

現今の新聞紙をみても、我が國民の弱點は遺憾なく露はれてゐる。事に大小の差こそあれ、殆ど悉くが人の惡口で終始し、一般讀者も亦それを歡迎してゐる有樣である。

×

一體、我が國の人達は、何故から惡口をいひたがるのであらうか。この問題は十分に研究して、お互にかうした國民的缺陷を矯正するやうにしたいものである。

私の觀る所によると、これには、たとへ、どんな無理をしても自分が偉くなりたい、卑怯な態度を以てしても自分が他人に勝ちたいといふ卑屈な考へが根柢をなしてゐるのではないかと思はれる。

偉くなりたいとの考へは、誠に結構であるが、偉いといふ事は、決して他人と比較しての事ではない。釋迦にしても基督にしても、乃至は孔子にしても、誰と比較して偉いと云ふのではない。これは絶對的のもので、比較上の問題ではない。

これを考へずして、徒らに他人の缺點を探

小學生往來十訓



いり出し、これを蹴落しても自分が勝たうといふ卑屈な考へをもつ事は、決して自分を偉くする所以ではない。かやうの考へは全然棄てゝ、自分自身のほんたうの力で押し通す男らしさ、さういふ意氣と純眞さとがありたい。

×

この意味から、かの宇治川の先陣爭をした佐々木高綱の事蹟を一の美談として、我が小國民の腦裡に勇氣と智略とを培ふ教材とするやうな態度は、私には贊成し難い。

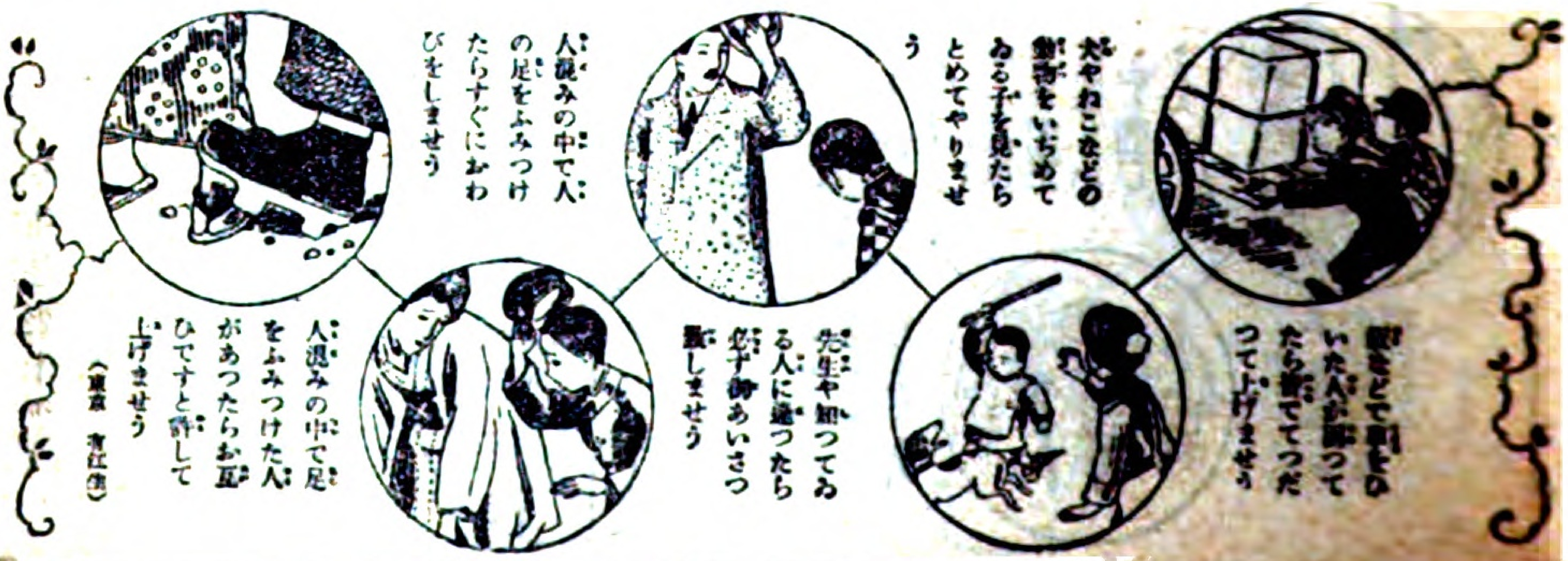
自分の力では到底及ばぬと分ると、他人の缺陷を暴露しても、これを追越さうとする態度の如き、謂ゆるスポーツマンシップより相距つる遠しで、かゝる行動を賞揚するやうなことでは、所詮我が國民の缺陷を矯正することは出來ないと思ふのである。

他人の事業や運動に對しても亦然りで、それを十分に理解することは難しいとするも、それが何等か社會的に目的を有つものであるならば、相當な結果を見るまで待つといふ雅量が欲しい。

世間には良い看板を掲げる事業でも、その實裏面に於て又その結果に於て、甚だ、面白



有馬賴寧伯



くないものもあるし、或はその反對に、表面穩かならぬ名前を掲げてゐる運動でも、その結果は案外に好いものもある。たゞ自己の小さな感情や因襲に囚はれて、始めから惡くいつてかゝるやうな態度は、どうしても大國民の態度とは謂はれない。

要するに、我が國民は他人の行動に對して、公正なる眼を以て考察すると共に、寛容の態度を以て姑らく結果を待つといふ雅量が欲しいと思ふのである。

×

更に一歩進んで、世の中に對する積極的の態度として、私の力說したいのは、我が國民がもう少し人のため世のためになる事をするやうに努力して欲しいと云ふことである。

勿論、われ〱の仕事といふものは、結局は自分一人の利益に止まらず、直接間接、世のためになるものであると思ふけれども、更に一歩を進めて、社會事業なり國家事業なりに、奮つて力を注いで欲しい。

社會事業といふと、一般に大きな金がかゝる大事業のやうに考へるのが普通であるが、私の考へる所では、往來に轉がつてゐる石を拾つて、道往く人の歩くに都合のよいやうにしてやると云ふやうな、ほんの小さな事でもそれが立派な社會事業であると思ふのである。

×

米が足りない、米が足りないと、來る年も來る年も大騒ぎをする我が國民が、その大切な米を平氣で棄てゝ顧みない事實がある。足、一度汽車の中に入れば、私の言ふ所に誤りのない事を讀者は發見されるであらう。こゝのクッションの下、かしこの隅、甚しいのになると、足の踏み場もないほどの辨當の殼で埋まり、而も貴重な米が箸をつけたばかりで棄てられてゐるのがある。これをボーイは箒で掃き集めて、打棄つてしまふ。

なる程、一人の棄てる量は少いかも知れないが、全線に亙つては、實に夥しい大量に上ることを想はれる。

これを國家的の立場から考へると、決して輕々に看過することは出來ない。この場合、少し心ある者ならば、その處置についても、今少し考慮すべきであらう。

から考へて來ると、社會事業といひ國家事



業といふも、決して堅苦しいものではなく、日常われ〱の行動の中にも、世のため人のためになる事が決して少くないことが判るであらうと思ふ。

×

單にそれに止まらず、よい運動であるとか、よい思想であるとかいふものに對しては、自ら進んで之を助長する態度がありたい。

我が國では、今日の狀態からみると、たゞ惡いものを撲滅する事にのみ沒頭し、犯した罪を責めるに汲々としてゐるやうであるが、石川五右衞門の歌にある通り、何時の世になつても、惡い者は絶ゆることはない。

かやうな消極的な態度よりも、寧ろよいものを助長することに努めて、惡いものを自然淘汰してゆくといふ態度の力が、より大切ではないかと思ふ。

併し我が國では、前にも述べた如く、よい運動といふものが、どうも理解され難く、社會事業がはか〱しく發達しない。これは社會事業を眞面目にやつてゆくといふやうな人は、とかく必要な金をこしらへることが拙いといふのも一因であらうが、かやうな事業に金を出す謂ゆる富豪の態度も甚だよろしくない。

『事業そのものは解らぬが、度々訪ねて來るし、趣旨も惡くはないから、まア少し位は出してやつてもよい』と云つたやうなのが、我が國富豪の一般の態度である。

この點、米國あたりは流石に進んでゐる。ロックフエラーにしてもカーネギーにしても、社會事業に對する調査課といふものを設け、この事業はよい事業だ、大いに後援する必要があると判ると、自分の方から進んで寄附を申出る。かうした所にも、我が國民の缺陷が露はれてゐるのである。

×

われ〱が生活してゐる社會は、どうしても多人數共同してゆかねばならない。それには各人が心掛くべき事は種々あると思ふが、私は以上最近著しく感じてゐる一二の私見を述べて、世の御參考に資したに過ぎない。お互に消極、積極の兩方面から、十分に反省して、我が國家をして世界各國に範を垂れるものたらしめるやうでありたいと切に希ふ次第である。（完）





海峽の獅子王

花岡洋

1

一千八百十一年四月下旬の或る日――

カルカツタ總督のミント伯爵に、面會を申込んだひとりの青年があつた。

紹介狀もなく、服裝もひどく粗末だつた。

勿論門衞は、この無名な青年を、一言のもとに追ひ返さうとした。が、青年は動かなかつた。

秘書のバーカンは、用件の内容を語れと詰つたが、それも直接に申上げるのだと語らなかつた。叱つても脅しても駄目だつた。

仕方がないので、秘書は恐恐と、これを總督に傳へた。

書齋の肘掛椅子に凭つてゐた伯爵は、これを聞くと、ひどく不氣嫌に云つた。

『いやなんだね、その男の用件は、君の手には負へないと云ふんだね』

『いゝえ、決して……』秘書はひどく恐縮した『いろ〳〵と云つて聞かせましたが、どうしても閣下に直接申上げるのだと云ひ張つて動きませんので……、全く銅像のやうに頑固な奴なんでございます……』

『で、君は秘書の役目を捨てゝ、いた〳〵と取次いだと云ふんだね』

伯爵はます〳〵皮肉だつた。

『何とも申しわけのないことでございます……しかし、何分にも、大英國興亡に關する一大建言だなどと、大變なことを申しまして、全く手に負へないのでございます』

『どんな男だ？』

『ハイ、まだ青年なんですが、見たところ別に危險な人間には考へられませんので、これは閣下から直接に叱つて頂く方がいいと思ひまして……勿論、警戒は充分に遊ばさなくてはなりませんが……』

『もう分つた！』

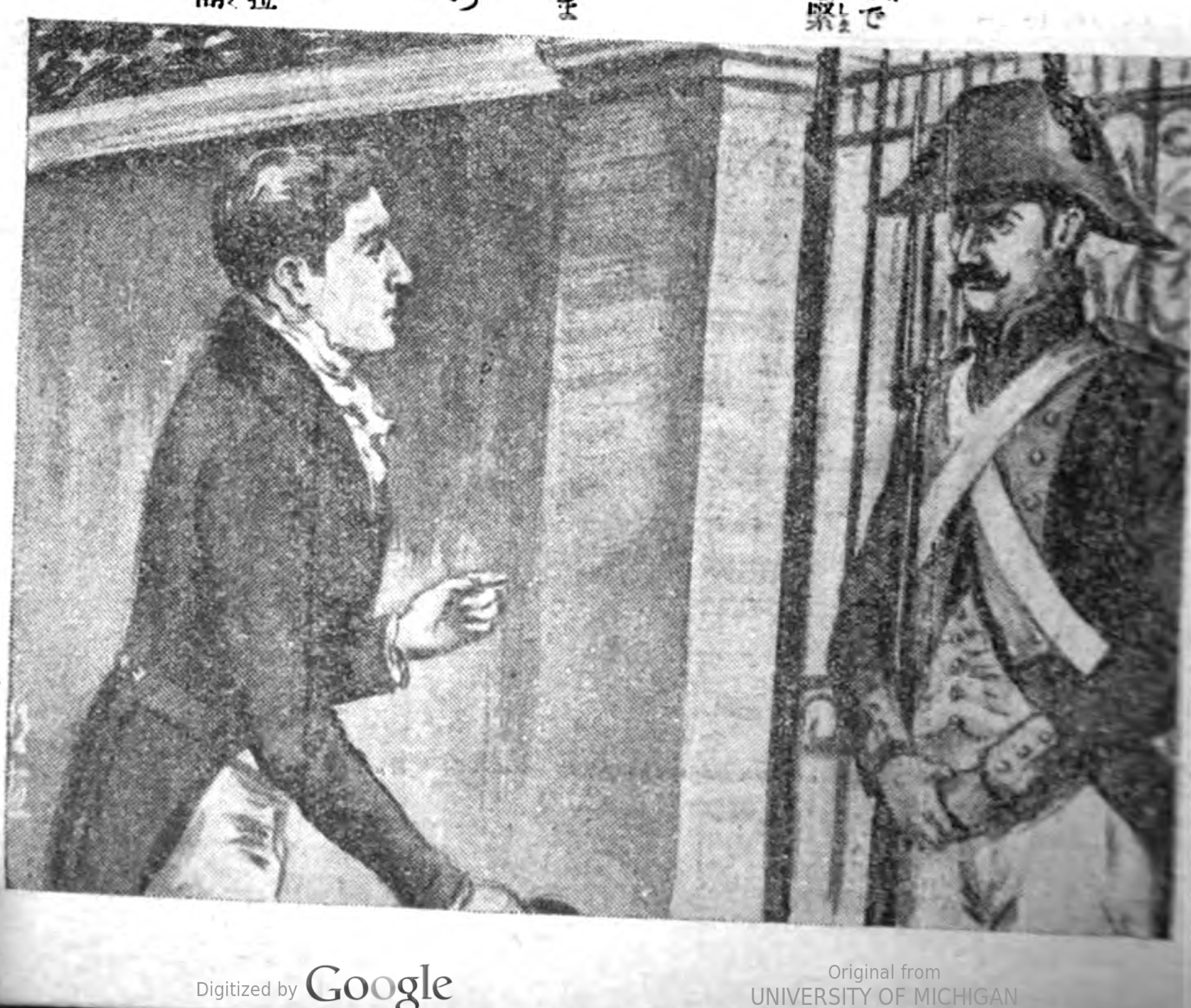
伯爵は、もどかしく叫んだ。

『連れて來たまへ』

『では、通しましても……』
『君が、さう云ふぢやないか――會つてやる』
『それでは應接間の方へ……』
『こゝでかまはない、但し二分間だぞ。早くしたまへ！』

2

やがて、ガーバンが案内して來たのは、二十八九歳の青年であつた。服裝は見る影もなかつたが、中肉の全身はキリリと緊つて、顏立も整つて見えた。
『これは總督閣下ですか、大變な失禮を願ひまして――』
青年は白い額をあげて、うや〳〵しく一禮した。
伯爵は、苦々しく一瞥したまゝ、默つて椅子をすゝめた。
『私はラッフルスと申しまして、東印度會社の書記でございますが……』
『用件だけにしてくれたまへ』伯爵は、叩きつけるやうに云つた。『わしは、君が誰であつてもかまはないのだ――それに、君に與へた時間は、あと九十秒しかないんだぜ』
青年は、椅子に腰を下して、ユックリとした口調で云つた。
『では、お伺ひいたします。最近英本國に於きましては、馬拉加放棄說が持ち上つてゐるやうですが、實は、これに對する閣下の御意見を承りたいのでございます』
『……』
伯爵は唇を噛みしめて、青年を見つめた。



——瘴癘蠻地の故を以て、馬拉加の植民政策の廢棄論が、この一月以來、英國の朝野に於て、重要論議せられてゐるのは事實であつた。そして、その最後の決定は、カルカッタ總督の意見を參酌するといふのであつた。が、これに對して、最初から絕對不賛成の伯爵は、再度ならず反對意見を本國に申し送つた。しかし、それは一つの形式に過ぎなくて、政府筋に於ける大勢は、すでに決定的の運命にあつた。それがために伯爵は、政府の盲を嗤ふと同時に、最近に到つては、鬱々たる不快さに、辭職しようとまで考へてゐるのであつた——。

——暫くして伯爵は云つた。

『わしの意見が何になるんだ——政府が廢棄するとなれば、それ以上何もないぢやないか……』

逞ましい眉をグッとよせて、吐き捨てるやうな伯爵の調子には、押へきれぬ悲憤と限りない不満が、明かに含まれてゐた。

『御尤もです』青年は明快につゞけた。『然し、一度も地中海を下つたことのない人々に、何が分るんでせう——馬拉加及び海峽地方に、無限の寶庫の藏されてゐるのを、彼等が何で知るものですか、彼等の論議は、結局机上の空論に過ぎないのです。私は閣下が、屢々本國の朝野に向つて、反對の聲明をくり返されたことは、よく承知して居ります。と、同時に、この問題に關しては、閣下の意見こそ絕對のものであります……從つて誰が何と申しましても、閣下はあくまで頑強に主張されなくてはならないと、私は信ずるのであります』

青年の、一語、一語に、伯爵の表情は、明るくほぐされてきた。

『ぢや君は、わしの意見を認めてくれるんだね』

『信じて疑ひません！』青年はキッパリと云つた。『私は、東方政策に於ける政府當局の優柔不斷——而も、和蘭政府の顏色ばかりを窺つて、閣下を孤立無援に陷れて顧みざる、彼等の意志が奈邊にあるかを知るに苦しむものであります』

そして、青年はポケットから厚い一束の書類を取り出して、

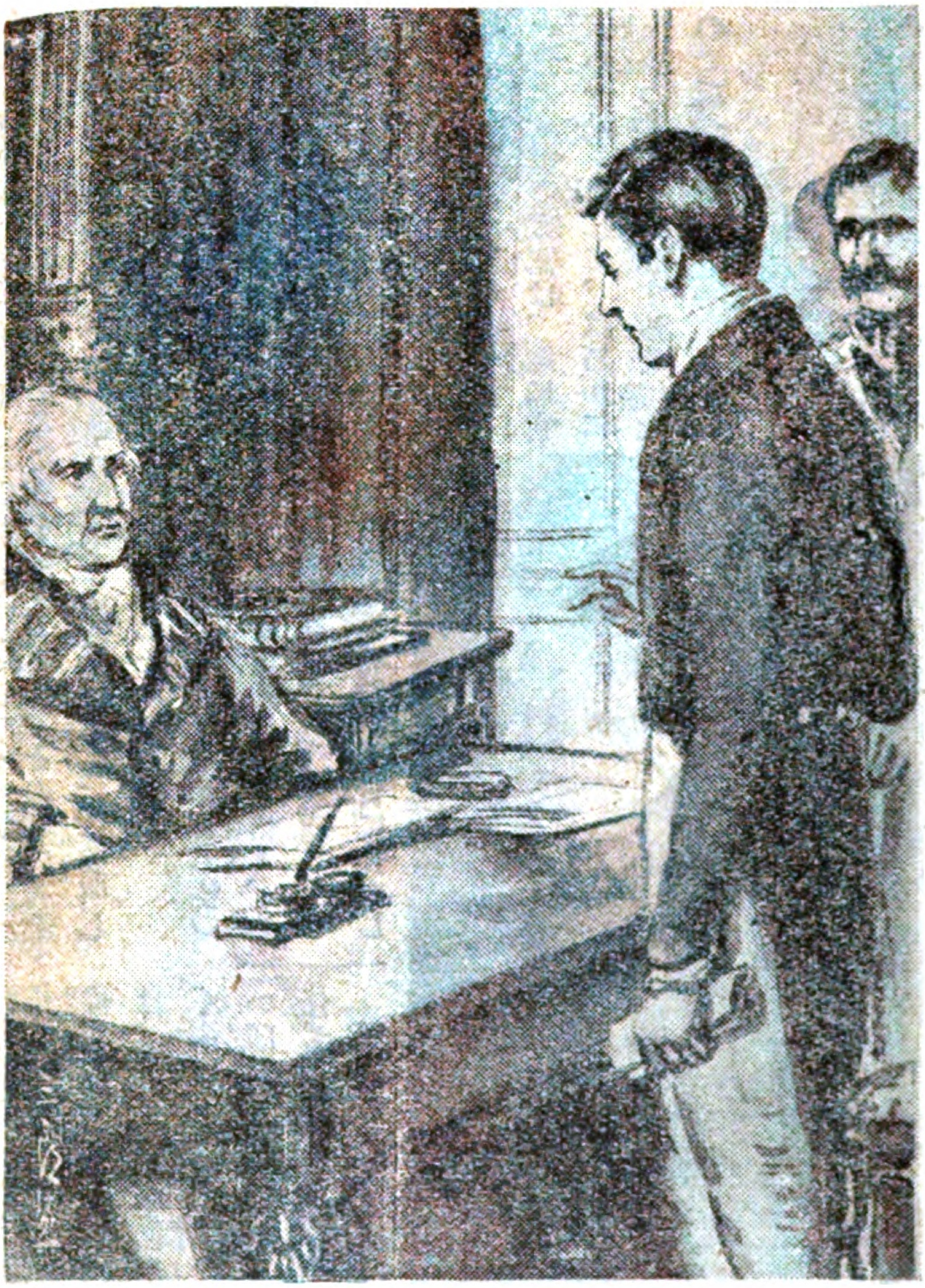
『これは、三日がかりで書きあげた、私の建白書です。一應閣下の御覽を頂いた上、次第によつては、本國政府へ叩きつけてやるつもりなんですから……』

『ありがたう！』伯爵は、その書類を握りしめて叫んだ。『君はわしのたつたひとりの味方だ。しかし、ひとりでもわしを知つてくれる者があることは、わしはどんなに心强いことか——あくまでやるよ、安心してくれ給へ。』

——伯爵の感激は當然であつた。問題の發生以來、伯爵の反對說を認めてくれるものは、本國は勿論、この印度や東方の地に於てさへ、唯ひとりなかつた。すべて嘲笑と冷罵の限りであつた。してみれば、この名もなき青年の出現は——而も、深い理解と火の如き激勵とは、總督にとつては、百萬の友にもまして嬉しかつたのだ。

やがて青年は立ち上つた。

『大變に御無禮いたしました……どうか總督閣下、あくまで主



張を貫徹して、東方政策の礎を築いて下さい……では失禮いたします』

青年が出て行かうとするのを、伯爵はあわてゝ呼びとめた。

『君――ラッフルス君』總督は、なつかしさうに、始めて青年の名を呼んだ。『君は、何時までも此處に居てはくれないかね』

『閣下さへ許して下さるなら――』青年も微笑んだ。『この重大問題に比すれば、會社の解雇などは何でもありません』

『ちや、さうしてくれたまへ！』

伯爵は、いきなりかけよつて、青年の腕を摑んだ。『何時までもわしを援けてくれ給へ』

總督の頰には、熱淚が止度もなく溢れるのであつた。

3

青年の名は、サー・スタンフオード・ラッフルスと云ふ。彼は、一千七百八十一年の七月に、西印度ジャマイカ沖を航行中の、一英船内で、呱々の聲をあげた。父は同船内の名もなき火夫であつた。

十八才の秋、彼は、カルカッタの東印度會社の見習事務員として雇はれたが、彼の胸には、この時からすでに、蠻地征服の野心が、鬱勃として燃えあがつてゐたのであつた。當時英國の東方政策は、全く矛軟極るもので、すべてが、和蘭の屬國的行動に過ぎなかつた。たまたまこの時に當つて、馬拉加放棄說が論議せられるに及んで、彼は、政府の盲目と無能とを痛歎して措く能はず、遂にミント總督の門を叩いたのであつた。が、ミント總督は、一見に

した、彼が天禀の偉材であることを知り、更に、その建白書を一讀するに及んで、その經略の深刻と抱負の雄渾とに感服して、遂に彼ラッフルスの獻策を容れることとなつた。

かくてその五月の初め、ミント總督は、二百の艦兵を七隻の兵船に艤して、瓜哇を攻略し、バタビヤを占領した。恰も、大英雄ナポレオンが、歐洲の天地に咆號する時であつた。

間もなくミント總督は、ラッフルスを瓜哇の副總督に任命してカルカッタに還つた。時に彼は、年漸く三十有一歲、一營利會社の書記は、遂に宿望の一端を果して、はるかに海峽の彼方を睥睨するを得たのであつた。

4

かくて五年、ラッフルスは鋭意墾地の開發につとめた。が、一千八百十六年、ナポレオンの亂が平らぐと同時に、英國は瓜哇を平和の名に於て、和蘭に返還してしまつた。ああ、またしても政府の無能無策、ラッフルスは悲憤痛歎



措く能はず、遂に筆を採つて「瓜哇の眞價」なる一大著書を、倫敦に於て刊行した。が、浩瀚四百頁、堂々たる抱負と經倫には、さきに瓜哇無用說を唱へた政治家も軍人も、その讒誣を深く悔い「海峽の人ラッフルス」の名は、漸く人々の胸に消え難い印象を植ゑたのであつた。彼は間もなく、スマトラの總督に任ぜられた。

が、スマトラには良港と見るべきものが一つもなかつた。彼は、四邊の海上を閱すること一年餘、遂に、スマトラ島の對岸にして、馬拉加海峽の咽喉を扼する、シンガプラアの小島を選んだ。彼は直ちに海を越えて上陸し、土地の土侯、ジョホール王からこれを購つて、こゝにさんたる英國旗を押し立てた。時に一千八百十八年二月六日。

が彼のシンガポール經營は、ひどく歐洲各國の反感と混亂とを招いた。そして、英國政府は相變らず弱腰であつた。和蘭政府はあらゆる妨害を試み、海峽に於ける蘭人は、躍起となつて彼を迫害したこれがためにラッフルスは、

[illegible]に對して、堂堂たる爭鬪をつゞけるより外はなかつた。彼は、領有後四ヶ月目に、本國に於ける頑強なる反對意見に對して、左の如き聲明書を送つた。

『シンガポールは東方に於ける最重要の地にして、海上の優越權と貿易上の利益を占有せんと欲するならば、この地は實に英國の全土よりも更に大なる價値を有す』

これがために、彼に對する非難と迫害とは、極度に高まつた。

その年の秋であつた。朝から山から山を步き廻つたラッフルスは、黃昏になつて官邸（とは名ばかりの小屋）へ馬を急がせてゐた。と、ある森林の中へ來た時、突然に一發の銃聲が起つた。つゞいて一發！　二發！　馬が倒れて彼は地上に投げ出された。と、同時に、三人の蘭人が騎銃を擬して彼を取卷いた。

『待てッ』

太腿を射たれたラッフルスは、迸る鮮血をものともせずに、立ち上つて叫んだ。

『射たれる前に、先づ君達に聞くことがある。云ふまでもなく、當シンガポールは南海の重津であつて、他日、支那や其他の發達を保護するには、この地を於て他にない、英國にあれ蘭國にあれ、こゝを開拓して要塞にすることは、歐洲百年の平和の基礎である。が、悲しいかな、この重任を遂行するものは、現在このラッフルス以外にはないであらう。若し、君達の中に、吾輩の遺志を果すものがあるとすれば、ラッフルスは喜んで君達の彈丸に斃れう――さあ、その後繼者を示して然る後に我を射て！』



彼の叫びは、天籟の如く蘭人の胸に響いた。彼等は一せいに銃を捨て、彼の前に身を投げた。

あゝ、熱の人ラッフルス！　彼の前には、墾地開拓の一事の外、何ものもなかつた。

かくて、拮据經營五閱年、彼が任を辭して本國に去つた時は、占有當時、僅々人口八十人に過ぎなかつた一寒村は、一萬五千を數ふる大都會となつてゐた。

5

本國に歸つたものゝ、彼に對する非難は相變らず烈しかつた。

勿論、尨大なる東印度を有する和蘭が、馬拉加海峽の咽喉を

扼するシンガポールの英國領有に反對するのは當然であつた。それだけ當時の和蘭人はシンガポールの眞價を知つてゐた。然し、ラツフルスは和蘭より何物をも奪つたのではなく、何處の國にも屬せざる土王の手から購つたのである。和蘭の對英運動は畢竟和蘭對ラツフルスの爭鬪であつた。こゝにあつてラツフルスの爭鬪は、千鈞を負ふの姿である。

しかし彼の味方は次第に增えた。最初は反對の頭目であつたラスチング侯も彼のために熱心な擁護者となつた。而して遂に英國は南洋に於て蘭人の優越權に對抗するの方針をとることとなつた。この英蘭の爭ひは一千八百二十四年まで繼續されて、結果は英人の勝利となつた。英國の勝利は即ちラツフルスの勝利であつた。(若しこの爭鬪に於て、英國が破れてゐたならば、今日の亞細亞地圖は、今日と異る色を以て彩られてゐるであらう)

が、多情多恨！　この時すでにラツフルスは、心身の自由を缺くまでに衰へてゐた。かくて一千八百二十六年の九月、彼は腦充血を以てこの世を去つた。享年四十有五、前途洋々たる身が、その血も肉も祖國のために捧げてしまつたのである。而も彼はシンガポールより歸國の海上で船火事のために、重要書類を盡く燒かれてしまひ、剩つさへ彼の墓標は數十年間草叢裡に隱れて、何人も之を知る者がなかつた。

あゝ、不遇の偉雄ラツフルス卿！

現在のシンガポールの殷賑を見る人は、百年前の蠻地シンガポールを、恐らく夢想だにし得ないであらう。

勿論茫々一世紀、人口百の獅子島が、六十萬になつたことは必ずしも驚くに足らぬ。看よ神戸及び横濱の發達を……その間僅か數十年にあらずやと云ふ者があるだらう。然し神戸や横濱は東亞中心の大海港であり、一大帝國の玄關口である。が、シンガポールは英本土より萬里懸隔の地で、而も草野森林中の一蠻島にすぎなかつたのである。假りに今、草爾たる過去のシンガポールを知れる百歳の老翁ありとして、現在のシンガポールを見るなれば、恐らくシンガポールの名を以ては呼ばないであらう！

『一たびこの地に吾人の手を置かんか、シヤム、カンボチヤ、交趾支那その他を通じて支那等に制抑の手を張るを得べし』

『この地は實に英國の全土よりも更に大なる價値を有す』

おゝ、すでに一世紀前に敢てこの喝破をなせる、先覺者ラツフルス卿よ！

南洋に航する人々は、白い砂と緑の椰子の打つゞく、タンジヨンルーやタンジヨカトンの海濱を眺めつゝ、シンガポールの大市街に入るとき、青龍樹しげるエスペラネード畔ビクトリヤ女皇記念館の前に、居然として立つ一大銅像を見るであらう、これ不遇の英雄、薄倖の人傑、我がラツフルス卿である。百年にして其功を認められ、光榮さんとしてこゝに輝く。

肩摩轂擊の海岸に立ち、毅然として萬檣參差の港頭を眺めて立つラツフルス卿！　あゝ、今や卿は酬いられたのである。(完)

高級帶勳著名長壽者番附

東

位	肩書	勳章	氏名	年齡
横綱	[illegible]二位伯爵功一級	◎	東郷平八郎	八三
大關	前宮內大臣正二位伯爵	○	田中光顯	八六
關脇	貴族院議員從一位侯爵	⊙	淺野長勳	八六
小結	正三位理學、藥學博士	△	長井長義	八四
前頭	陸軍大將正二位子爵功二級	⊙	大島久直	八一
前頭	陸軍中將正三位男爵功三級	⊙	沖原光孚	八一
前頭	貴族院議員正三位	△	淺田德則	八一
前頭	總理大臣禮遇正二位子爵	○	清浦奎吾	七九
前頭	宮中顧問官正三位	⊙	長崎省吾	七九
前頭	貴族院議員從二位	⊙	服部一三	七八
前頭	[illegible]	○	中村雄次郎	七七
同	樞密顧問官正三位	⊙	松室致	七七
同	樞密顧問官從二位子爵	⊙	金子堅太郎	七六
同	樞密顧問官從二位男爵理學博士	△	山川健次郎	七六
同	前特命全權公使正二位伯爵	○	戸田氏共	七五
同	陸軍大將從二位男爵功二級	⊙	木越安綱	七五
同	陸軍大將從二位功二級	⊙	大迫尚道	七五
同	樞密顧問官正三位男爵	⊙	田健治郎	七四
同	海軍大將正二位男爵功二級	⊙	出羽重遠	七四
同	陸軍中將正三位功三級	⊙	仙波太郎	七四
前頭	[illegible]樞密顧問官正二位伯爵	○	伊東巳代治	七三
同	大臣禮遇[illegible]二位子爵	○	後藤新平	七二
同	海軍大將正三位子爵功一級	⊙	瓜生外吉	七二
同	前鐵道大臣從三位	△	元田肇	七一
同	樞密顧問官從三位男爵	⊙	富井政章	七一
同	前陸軍大臣中將正三位功三級	△	楠瀬幸彦	七一
同	陸軍中將正三位功二級	△	長岡外史	七一
同	前司法大臣正三位	⊙	尾崎行雄	七〇
同	陸軍大將從二位功二級	⊙	松川敏胤	七〇
同	正三位醫學博士	△	弘田長	七〇

行司

肩書	勳章	氏名	年齡
元帥海軍大將正二位子爵功二級	○	井上良馨	八四
元帥陸軍大將正二位伯爵功一級	○	奧保鞏	八三
總理大臣禮遇從三位前子爵	○	高橋是清	七五
大臣禮遇正三位	⊙	犬養毅	七四

年寄

肩書	勳章	氏名	年齡
從四位前男爵實業家	⊙	大倉喜八郎	九二
正三位子爵實業家	⊙	澁澤榮一	八九

西

位	肩書	勳章	氏名	年齡
横綱	總理大臣禮遇正二位公爵	◉	西園寺公望	八〇
大關	前樞密顧問官正二位前子爵	○	曾我祐準	八六
關脇	樞密顧問官從二位子爵	⊙	石黑忠悳	八四
小結	樞密顧問官從二位男爵	⊙	久保田讓	八二
前頭	海軍大將從二位男爵功二級	⊙	日高壯之丞	八一
前頭	海軍々醫中將從二位子爵功二級	⊙	實吉安純	八一
前頭	陸軍大將從二位男爵功二級	⊙	鮫島重雄	八〇
前頭	陸軍中將從三位男爵功四級	⊙	山內長人	七九
前頭	前特命全權大使從二位子爵	⊙	栗野慎一郎	七八
前頭	總理大臣禮遇正二位伯爵功一級	○	山本權兵衛	七七
前頭	樞密顧問官正二位男爵	⊙	九鬼隆一	七七
同	樞密院議長從二位男爵	⊙	倉富勇三郎	七六
同	樞密顧問官從三位	⊙	江木千之	七六
同	樞密顧問官從二位男爵	⊙	平山成信	七五
同	樞密顧問官從三位男爵	△	古市公威	七五
同	海軍主計中將正三位男爵功二級	⊙	村上敬次郎	七五
同	前遞信大臣正四位	△	箕浦勝人	七五
同	前遞信大臣從三位	⊙	武富時敏	七四
同	陸軍大將明治神宮々司從二位功三級	⊙	一戸兵衛	七四
同	元帥陸軍大將正二位子爵功二級	○	上原勇作	七三
前頭	侍從長從二位伯爵	○	珍田捨巳	七三
同	大臣禮遇正三位男爵	⊙	山本達雄	七二
同	樞密顧問官正二位子爵功二級	○	齋藤實	七一
同	前陸軍大臣陸軍中將正三位功三級	○	大島健一	七一
同	樞密顧問官正三位	△	櫻井錠二	七一
同	陸軍大將從二位功二級	△	秋山好古	七一
同	正三位醫學博士	△	小金井良精	七一
同	陸軍大將正二位男爵功二級	⊙	內山小二郎	七〇
同	海軍大將從二位功三級	⊙	吉松茂太郎	七〇
同	從三位法學博士	△	土方寧	七〇

備考 ◎印大勳位菊花章頸飾◉印同菊花大綬章○印勳一等旭日桐花大綬章⊙印同旭日大綬章△印同瑞寶章（近藤蕉雨作）



福岡 熊本 對縣柔道大試合

釘本祐仲

時は昭和二年十一月十三日。夜來の雨全く霽れて、秋の陽うら〻かに、春日原頭、颯々たる金風肌に寒し。時にいづくよりか人のどよめき次第に聞え來ると覺えしに、見る見る押寄する人の波、蜿々長蛇の列を作つて會場さしてつめかける。これなん、熊本縣對福岡縣の對縣柔道試合である。

およそ近來多數の觀衆を惹きつくるもの、野球試合に如くものはないが、それにしても神宮球場に於ける昨秋の早慶戰及び慶明戰等を除いては、觀客萬を以て算することなどは極めて稀であつた。



然るにこの對縣柔道試合は、單に一地方の試合なるに拘らず、その觀衆を容るべき場所に困じ、つひに福岡市外の春日原グラウンドに、優に一萬三千の觀衆を收容し得べき假道場を建設したのだつたが、此の日の觀衆の多數なる、さしもの大道場もハチ切れんばかり、およそ東都の柔道界と雖も、かばかり多數の觀衆を惹き付けたことはないであらう。道は昔より武道の盛なる、福岡熊本の兩縣だけに、斯の如き柔道ファンを吸收し得たものであらうが、そこにはまた更に一つの重大な原因が潛んでゐることを知らなければならない。

即ち、熊本は、一昨年も、そして一昨々年も、共に福岡軍の爲に無慘な敗北をした。さればこそ、今度は、如何にしてもその慘敗の歴史を雪すべく、縣當局は、先頃來、東都の柔道界をはじめ全國に目をくばつて、精鋭を拔擢せんとし、現に、前高

師の主將小谷五段を熊本五高に聘し、更に長崎高商の三石五段を縣下鹿本中學に、前武徳專門學校主將山根四段を熊本中學に迎へて、此處數ケ月間火の出るやうな猛練習、今年こそ敵福岡の陣容木ツ葉微塵、敵の前衛中堅や如何に強くとも、我れに牛島の梟勇あり、試合よ來れ！と、應援團その他、萬端の用意をさをさ怠りなく、當日を待つたのであつた。

○

やがて、正午、一群、隊をなして會場に詰めかけるを見れば、これが熊本側應援團千五百名、意氣揚々と南側棧敷に陣取つて場内一段の氣勢を添へた。

見渡せば早や場内立錐の餘地もなく、さすがの大道場も人を以て埋まり北側役員席には、講道館長嘉納治五郎氏以下永岡、飯塚、磯貝の各八段、佐村、宮川の兩七段など斯道の大家、名家、綦羅星の如く控へてゐる。

『どうぢや、豫想は？』

『根つから、分らんぞ。今度ばかりは』

『何故？』

『何故云うて、熊本も今年は揃つとるぢやないか。見い、小谷澄之五段のう、まだ二十五ぢやと云ふが、去年までそれこそ東京で鳴らした剛の者ぢや云ふぢやないか。福岡の大將西五段はもうとうに三十を越してゐるからのう。あぶない！　片方は若い。息が續く、あぶらの乘つた眞盛りぢや』

『たしかにさうぢやが、此方（福岡）にも須藤金作が居る、梶四段もゐるぞ、そいに先鋒隊は福岡に、自信があるのぢや。先づこの先陣で、敵の中堅に喰込まうちらんだ』

『大きに、左樣、上の方は、先づ双方互角、先陣は福岡がすぐれてるが、中堅は、熊本に強味がある。何せ、牛島ちう大あばれものがズン出てるもン。彼の強いこと云うたら、相手は誰でも亂離骨灰ぢやとのう。えらい奴が出たもんぢや。兎に角えらいやツちや！　これはまアどうしたもんぢやろかい！』

『弟ぢやな。強い牛島いふのは。辰熊ぢやらう』

『さうぢや』

『兄貴（牛島健三）も、もとは強かつたが、今日は熊本軍の前衛に、弟よりズツと下に控へてゐるの。强弟賴むぞだらう』

下馬評も、いつか消えて、場内は刻々に息づまるやうな緊張に支配されて來た。



遠征の熊本軍！　出迎への福岡軍！　博多驛に相會せる兩軍の心中、潜める必勝の意氣や正に壯絶！（向つて左側熊本軍、右側福岡軍。）

正午を過ぐる三十分、先づ福岡軍選手の入場、つゞいて、熊本軍選手威風堂々と入場すれば、木谷副會長村地警察部長（福岡）、やをら立つて、開會を宣す。

次いで筥崎神宮々司の修祓の儀了るや、福岡軍總師西五段は、名譽の大優勝旗を返納した。

拍手やんで場内忽ちに静寂に返る時、磯貝八段、佐村七段の古式の型、その莊嚴なる型に場内はいやが上に靜まりかへる時、既にこの日の審判役永岡八段、起つて審判に關する注意、時に定刻一時を過ぐる半時間、兩軍の戰備、完くなり、互ひに秘謀策戰を胸に秘めて、一發の號砲を待つや久し！

試みに、兩軍の陣容を掲げおかん。

熊本軍

初段	松隈健勝
二段	牛島常三
同	菅原正雄
同	島田覺
同	岡田猷
三段	田島武大
同	田上忠臣
同	牧野秦人
同	福田忠
四段	西與七
同	山根英師
同	長曾我部腎
同	牛島辰熊
同	上野兇
同	篠田一郎
同	關彦次郎
同	松前顯義
五段	三石界八
同	宇上兎雄
同	小谷澄之

福岡軍

二段	内田仁
同	吉浦濟市
三段	原田實
同	前田實
同	古閑正彦
同	木原久夫
四段	金丸英吉郎
同	古賀速
同	秋根昌美
同	田中末吉
同	淵野三郎
同	藤野善太郎
同	田中武次郎
同	満薫
同	圓田顯松
同	梶養光
同	島井安次郎
同	須藤介作
五段	森崎一郎
同	西文雄

○

つひに戰端は開かれた。

先づ熊本の先陣松隈（初）對、福岡の内田（二段）共にこれ新進の若武者、而かもこの最前戰の勝敗は一軍の士氣に關係することと多大なるを以て、兩軍共にその先きをよくせん爲、この人選は非常の考慮を拂つたのであつたが、兩人の技や伯仲しけん、先づ第一の引分けを出だした。

つゞいて熊本の牛島（兄）對福岡の吉浦、互ひによく戰ひたれど、つひにこれも亦引分け。更に熊本軍の菅原對福岡の原田も引分けに終つた。

そも何たる事ぞ。福岡軍は、その先鋒に於て、先づ敵の陣中に駈け入り、一段二段の陣構へを破つて敵の陣中まで切込まん策戰なるに、今既に先鋒三人まで引分けに喰止められて、策戰の違算を來たした。

而かも第四戰、熊本の島田對福岡方前田の一戰も、前田頻りに攻めたるも利かず、これも亦引分け、熊本は、さてこそ策戰圖にあたつたり、いで中堅の戰となれば、福軍何ぞ恐るゝに足らず、あはよくば中堅を突き破つて、敵の麾下をも蹂躙せんず氣配、手に汗し、固唾を呑んで、戰の進捗に見入つてゐる。

○

急に起る場内のどよめき、歡聲ドッと聞えたるは、これ今日初めての勝星、福岡軍の古閑三段、敵の二段岡田を大外刈りに投げ倒したのだ。

こゝに於て福岡軍ホツと一息、そこに乗じて一氣に敵の中堅に攻め入らん、と、場内急に活氣づき、殊勲者古閑三段また、獅子奮迅の勢ひ、敵の元氣者田島と引組んだが、これもつひに引分け、ここに福軍は、前衛軍中の花形木原三段出で敵の田上に對す。遉に彼れ木原は聞えし勇者、敵が守勢これつとめ、危ふく引分けに終らんとする時に、つひに敵首を押へ込みにかき、つゞく熊軍の牧野三段をも跳腰に投げ飛ばした。

『木原！……木原！……』

と、福岡應援團は、策戰漸く實現し來たると見て聲援鳴りもやまず、それに氣を得てや木原三段、つゞく敵の福田三段にも亦攻勢を以て壓迫したが、勝敗決せずして引分け、更に熊軍の西(與七)三段對福岡方金丸四段の接戰も亦勝敗を見るに至らなかつた。

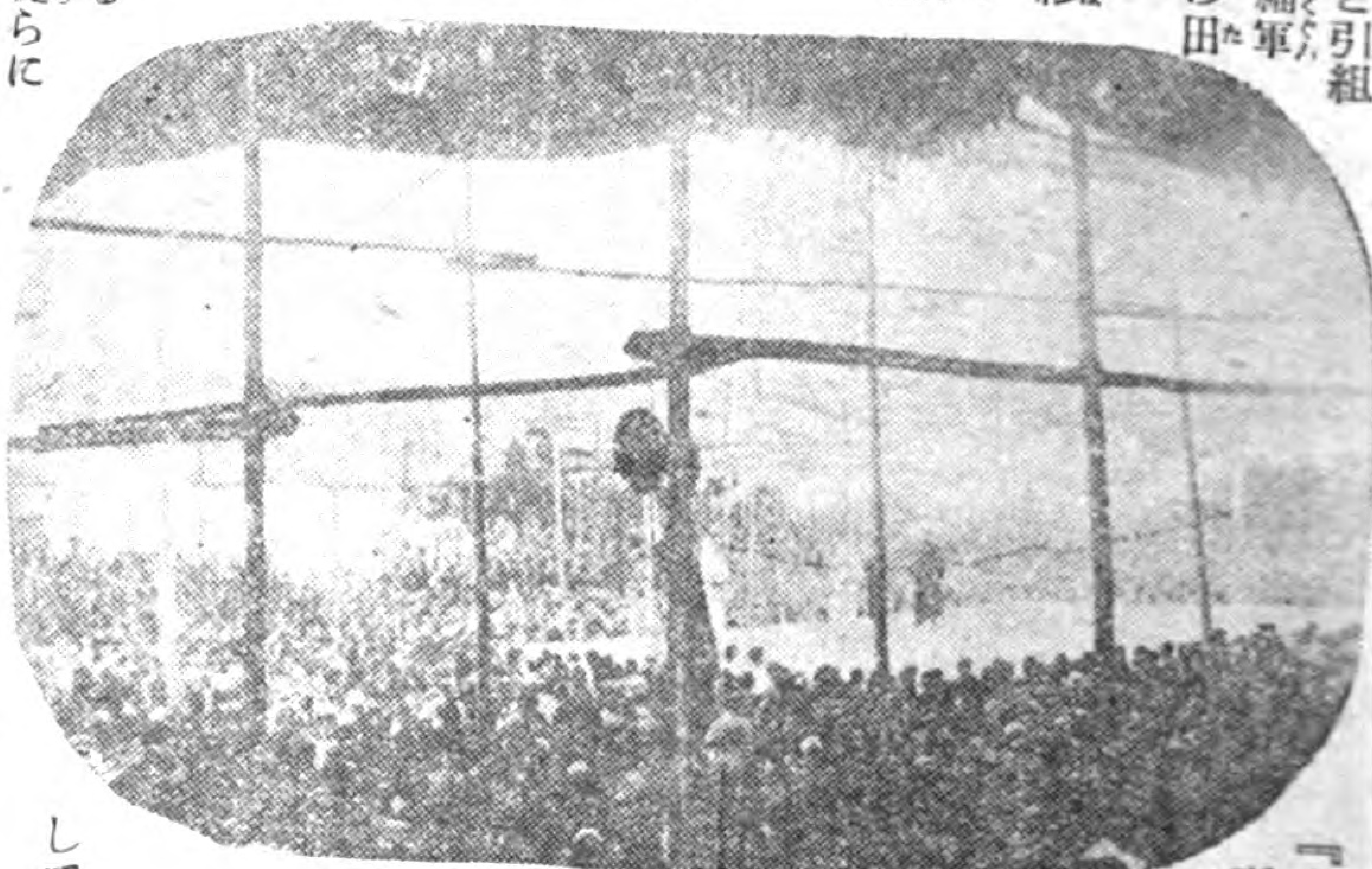
○

こゝに於てや福岡軍の意氣益々あがれるに反し、熊本更に振はず、應援團のみ、徒らに焦心すれど如何ともすることが出來なかつたが、この時、熊本の軍中より出でたるはこれ熊本軍中堅三羽烏の一人、出場四段、紫村警部の部下に、一ぜ決心の色深く、

『えゝツ、云ひ甲斐なき味方の戰友かな、敵福岡の前衛、多少の勇あるも、何程のことやあらん、タカの知れたる小童共、いで我れこそ、熊軍今までの頽勢を一氣に挽回しくれんものと、小兵ながら、敵の四段古賀を縱横無盡に引きまはし、揚句の果てに見事大兵古賀四段を押へ込んで一本、こゝに漸く、熊本軍最初の一點を得た。

然るに彼れ山根、意外にも福軍の秋根に破るゝや、これも熊本軍中堅三羽烏の一人たる長曾我部四段出でて瞬く間に復讐、つゞく田中と力戰猛鬪、勝敗つひに決せずして引分。

かくて熊本軍の負け越二點、まことにこれ容易ならぬ形勢、誰かよくこの頽勢を挽回しなければ熊本軍の運命や實に期して知るべきのみ。



觀衆一萬三千を以て埋まれた當日會場の盛況

○

今や試合は前半戰を終つて愈々佳境に入り、兩軍の應援、矢の如く鋭し！

この時、熊本軍中よりあらはれし一人は、眉厚く髭濃く、眼光爛々として人を射、頬骨高く張つて鼻下のひげ太く、物凄きまで、力みかへつた形相に、岩盤鐵の如く、皮下一片の贅肉をも存せず、まつたくこれ偉大なる骨とそれを包む筋肉とのみ、五尺五寸二十貫の偉軀、いとも鮮やかに、ジロリ敵陣を睨んで出場したは、これ別人ならず、熊本軍随一の猛將、三羽烏の随一人、牛島辰熊四段、神宮競技柔道優勝戰に於ける三度續けざまの勝放しと云ふ驚異のレコードホルダー、世の常の人ならば、一度び、神宮競技戰に優勝せんか、その名譽を傷けざらん爲に最早後の出場を見合はすのであるが、彼れ牛島の放膽なる、更にこれを意に介せず、相變らず神宮戰に出場し、三年續けて優勝を占めてゐるとは、恐らく彼れにすれば、神宮競技柔道戰の優勝など別に大した事件にもあらず、たゞ戰つて勝つたるのみ、何すれぞこれ誇るに足らんや、ぐらゐに思ひなしてゐるに違ひないのだ。

それに對して福中より出でたるは大兵淵野四段、素早く巴の體に引込みに出づれば、牛島サツと附入つて押へ込み、一度び横四方固めに押へた以上、さたがら石臼を以て押へつけるが如く、押せども、引けども、微動だにせず、忽ち一本を取つて立上れば、熊本軍の意氣漸く揚り、

『牛島！』

『辰熊！ しつかり！』

の聲降るが如し。

而かも彼れ牛島の勝氣強き、つゞいて出づる敵藤野四段と相對して、はじめ更に仕かけずジリリ！ ジリリ！機をうかゞつてゐたが、

『エツ！』

といふ氣合諸共、その右手や早く藤野の襟に飛び掛るゝと見き、藤野の體はヒラリ、見事、牛島の内股に跳上げられてズンデンドウ！ まことに鐵柵一髪の觀！

ドツと起る歡聲歡呼、流石に今は敵も亦、その美技に醉うて、膝を叩き、場内一萬三千の口は、期せずしてアツと唇を開き、其の手は一齊に、拍手した。

試合は今正に五角、而もこの剛勇無雙牛島に對して出でたるは田中武次郎四段、彼れはこの強敵を如何ともする能はず、更に角引分けに喰止めおかば大手柄と、徹頭徹尾守勢をとつて逃げまはる。

さりながら、牛島はあくまで強い。敵が逃げて逃げて逃げるところを、迫らず、急かず、機を見てグツと一氣に引捉み、引捉むより早き内股の強襲、田中の體は飄々然として毬の如くケシ飛んだ。

而かも牛島は、すでに三人を倒しても、なほ格別疲れたる樣子もなく、平然として、つゞく境四段と相對した。

この時境の戰法たる、遮二無二捨身の小内刈り、跳腰また跳腰、攻めたてたが、如何せん、相手は岩の如き牛島辰熊、正しくこれ龍車に向ふ蟷螂の斧、難なく牛島に押へ込まれて身動き

もたつア、忽ち一撃。既に四人が四人とも、未だ一彈をも後れ牛島に喰はせ得ず、未だ一太刀をも切りつけないうちに、早くも、バツサ〳〵と薙ぎ倒されて了つた。

それにしても牛島の剛勇よ、彼の實力は一體何處まであるのか、格別の力をも用ひずして敵を倒す、近頃彼の如き豪勇を見ず、恐らく彼は、眞にあらん限りの實力を發揮し得たる經驗は少なからう。宜なる哉、熊本軍の氣勢益〻強くなり行くに反し、福岡軍の陣營今や寂として聲なし。

遮莫、戰友四人、枕をならべて討死したるあとを受けて、今、牛島の前にあらはれたのは、福岡軍中堅の闘將として、特に本年福岡縣に聘せられたと云ふ岡田四段、相手によつては、彼も亦慥かに十分の働きをするに違ひないが、名にし負ふ相手は大剛牛島、思へらく、なまじひに攻勢に出でて、また首掻かるゝも無念、如かず守勢一方に出で、この大敵を喰止めんには、と。

即ち自護體に腐心これ努め、飽くまで突張つて行けば、さすがに牛島も今は焦つて攻立て、攻め立て、脊負投に、寢業に、荒れに荒れて強襲これ重ねたが、如何せん四人を倒して後の攻撃なるに加へて、相手が引分け策の一本槍に遇つては、さしもの彼も料理し兼ね、タイムに迫られてつひに引分けのやむなきに至つた。

さるにても、牛島が闘志の強烈なる、彼が巨眼カツと見開いて、兩腕低く構へ、將にとびかゝらんとする勢を示すとき、



肉彈相搏つ大奮鬪！（向つて右熊本牛島（熊本）四段。左福岡岡田四段）

恐らく彼の戰鬪意識が發散するのであらう。一種の殺氣、一抹の鬼氣を含みて、見る者をして一種凄壯の感を抱かしむるものがある。好漢、自重、以て今後の大成を期すべし。

○

さて、福岡軍は牛島の爲に脆くもその中堅を打ち破られて、目算ガラリとはづれ、戰債所を逆しまにして二人の負越し、この儘以て推移すれば、當然福岡の敗北に終るのだ。殘る梶、島井、須藤、森崎、西の徒輩一段の奮起を要す。

が、幸にも梶四段先づ上野四段を小外刈に倒し、ついで、篠田四段を屠り、更に關四段と戰つて引分けに終り、形勢はまた五角、福岡軍の重雄島井四段對熊軍の松前四段の戰ひとなるや、島井力戰して敵松前を足拂ひに破り、敵の五段三石昇八と組んで引分け、こゝに於いて福岡軍は第三將四段須藤金作、熊本軍は副將宇土虎雄五段の出現とはなつた。

兩雄共に五尺七八寸の長大漢、勝敗如何と見るうちに、如何にしけん宇土五段意外にも須藤の大内刈りに脆く破れ、つひに熊本軍の總大將小谷澄之五段の出現を見ねばならなかつた。



さるにても熊本の總師小谷澄之は、永岡八段の秘藏弟子として許されてゐるだけに、この技の優秀は、今東京の高師在學中の阿部信文と共に、高師の誇りとなせしもの、今味方の頽勢を引受けて敵の第三將須藤金作と對するのだ。蓋し彼小谷たるもの、この對縣戰の爲に、特にわざ／＼熊本五高に招聘せられたものと聞く、彼の責任やまた重大なりと云ふべく、而かも今戰はんとする相手は、もと東京の角力幕下に居りし須藤金作の大兵肥滿、體力の差は、殊にかゝる對抗試合に於て著るしく影響するものなるに加へて、須藤金作にして云へば、一昨大正十五年の神宮競技に於て、彼は小谷の爲に破られてゐる、謂はゞその復讐戰、今日こそその氣勢に燃えて遮二無二得意の大内刈り、猛襲また猛襲、さすが練達の小谷も守勢これつとめざるを得なかつたが、名にし負ふ彼小谷の體裁きの巧みさ、受身を受身として受けず、敵の技の裏をかいて術を施し、或はまた、素早く己れより攻めて、敵の攻勢を挫きつゝ、得意の脊負ひ、拂腰、足拂ひを連發す

れば、須藤は例の金剛力、懸命にこれを怺へて、漸次守勢に轉じて來た。
さすがに今は大將の出陣、兩軍の歡呼聲援は耳を聾せんばかり、
『小谷！』
『小谷！』
の聲隨所にあがると見れば、一方また、須藤にも
『遠慮は無用、やつてしまへ！』の聲援。
つひに戰ひ疲れて、イザ引分けと云ふ時も時、如何なる隙やありたりけん、小谷の打つた脊負投、見よ、五尺九寸の須藤の巨軀、モンドリ打つて投げ出された。
『天晴れ！　さすがに！』
『さすがに！〳〵』
しばしは、歡呼鳴りもやまず、熊本側應援隊も、漸くこれに力を得て聲援頻りに落ふ。
見よ福岡軍の副將二十八貫の巨大漢森崎五段は今や出馬した。



この榮冠！　優勝せる、福岡軍の精鋭（背後は當日の激戰を語る揭示板）

この體構の壯大なる。さすがの、須藤念作もこれには遠く及ばない。
思ふに福岡軍の策戰は、三將に肥大漢須藤をおき副將にまた更に肥大なる森崎五段を据ゑて、茲に試合を打切らんとしたのではなかつたか、即ち總帥西五段を煩はせず、この二巨漢を以て敵の大將小谷と引分けをとるか、乃至また彼た力攻めに攻めて了はうとしたのではなかつたらうか。イヤたしかにさうなのだ。
然し、小谷は、若冠二十五才とは云へ、さすがに一軍の總帥、須藤との接戰二十八分の戰ひにも怯まず、志氣益々旺盛。巨漢森崎を相手に力戰實に十數分、森崎が、その巨軀を武器に、引分け策に出でんとするを見て、嘲笑の策戰、
『えゝ、面倒なり』
とばかり、思ひ切つた大業、
『えゝツ！』
熱火の氣合にブンねぢれば、さしも二十八貫の森崎の巨體、俄然宙宇に舞うて眞逆樣、ダーンと云ふ地響諸共倒れ落ちた。
『わあツ！』

『見事々々！』熊本應援隊は餘りの嬉しさに總立ちとなつた。正しくその業の冴えは天下一品、さすがに彼は永岡八段が秘藏弟子たるに耻ぢない。

○

かくて福岡軍の策戰は小谷五段の奮戰によつて半ば以上覆へされた。而してつひにとつておきの大將西五段の出馬を餘儀なくした。

時に彼は冷然として出場した。

その冷靜さ、些の昂奮の色も見せず、飽迄落着き拂つた大將振りは、一方小谷が二十五才の飛將軍として、熱情火の如き大將振りに比して、まことに兩極のコントラスト、彼は前二回の戰ひにも大將として參加したが、いづれも戰はずして勝つてゐただけに、その眞技の程は、全く未知數である。

『ヤ！』

『ヤ！』

互ひにはかる戰機や如何、さすがに今は、この大將同志の決戰に、滿場の靜寂林の如く、一萬三千の觀衆は、たゞ一齊にこの兩雄が一動一靜に吸ひつけられてゐる。

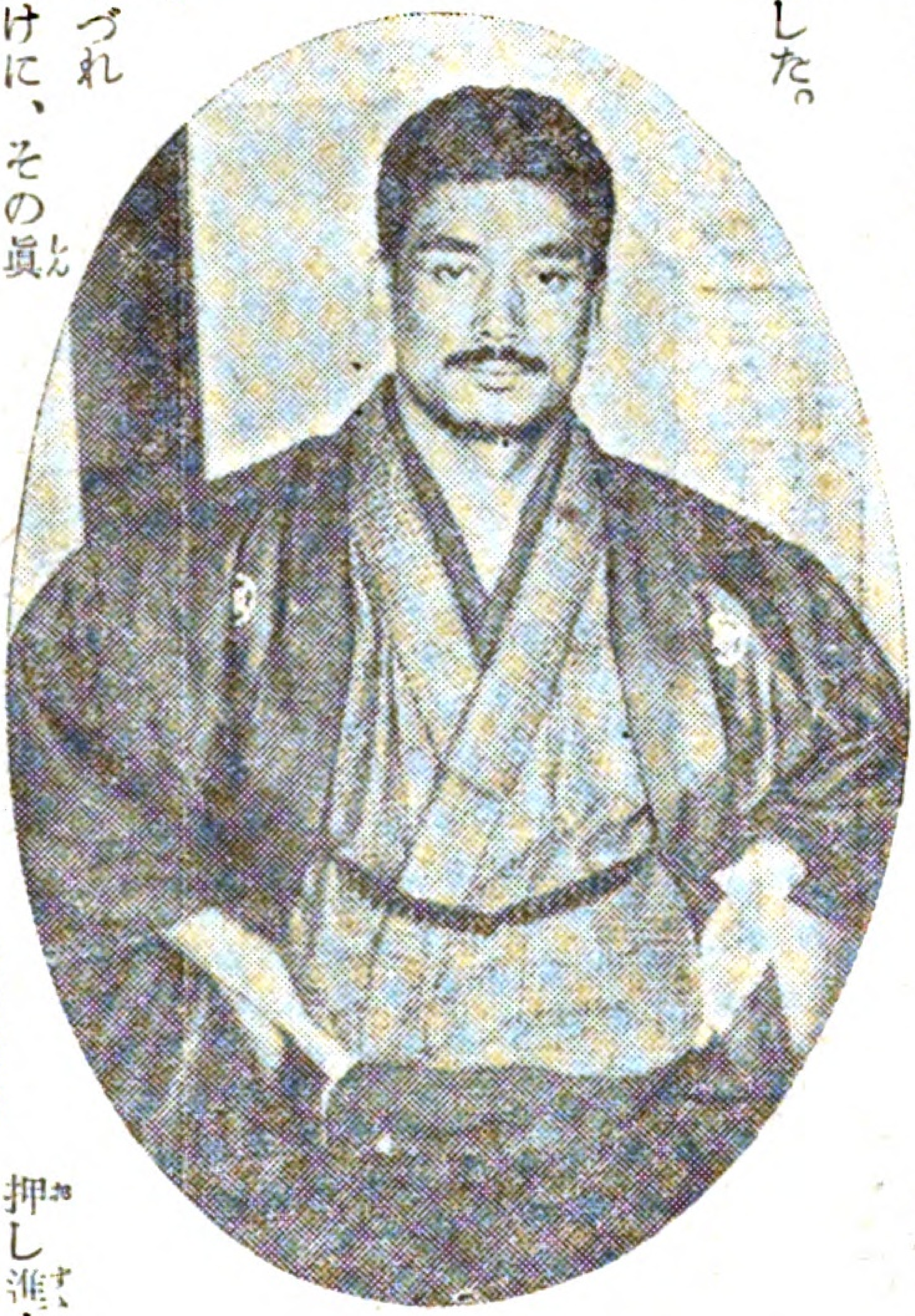
やがて兩將は、徐ろに組んだ。

小谷五段、勝誇れる戰將の如く縱横無盡に攻め立てれば、敵將西五段、靜かに守勢これつとめ、更に仕掛けずして、機の到來を待つものゝ如し。

十分……十五分――勝敗未だ決せず。

二十分、なほ決せず、二十五分……三十分、なほ未だ決せず、西大將は飽く迄冷靜に、焦らず、騷がず、たゞ防禦の一策に出づるのみ。

こゝに於いてか、若大將小谷は稍々焦り氣味追撃につぐに追撃、攻勢の上に攻勢、一氣に勝敗を決せんと、勢ひよく鋭く押し進んで行く。



熊本軍當日の殊勲者牛島辰熊四段

この時西大將は、小谷の背負投を極度に恐れ、歩一歩、あとへあとへと退いて、今は早や一歩も退り得ない地點にまで追ひつめられた。

コノ時！　正にこの時!!

一瞬、何物か觀衆の胸に響いたと思ふ時、金鐵の氣合、

『エッ！』小谷が得意の足拂ひ、間髪を容れずバタリと倒れし白衣一つ、

『アッ！』倒れしはたしかに西と思ひきや、實にさにあらず、小谷大將は横ざまに倒れてゐる。

『ア！』

『オヤ！』

小谷自身も餘りのことに呆然自失したるものゝ如く、よく起上り得ない。

併し審判の聲は既に宣せられてゐる。

『一本！』

意外にも、西大將は、徹頭徹尾小谷の爲に壓迫され、今つひに退らんによしなく身體谷まつた時に於いて、天の惠みや、小谷が焦つ足拂ひ、誘ひかけられての裏返し、これぞ俗に云ふ燕返し、捨身になつて應ずれば、見事や窮策効を奏して敵體モロに横轉、われながら、意外の感に打たれし如く彼も亦しばし呆然として小谷の體に見入つてゐた。

拍手！　拍手！　萬雷の如く鳴る。

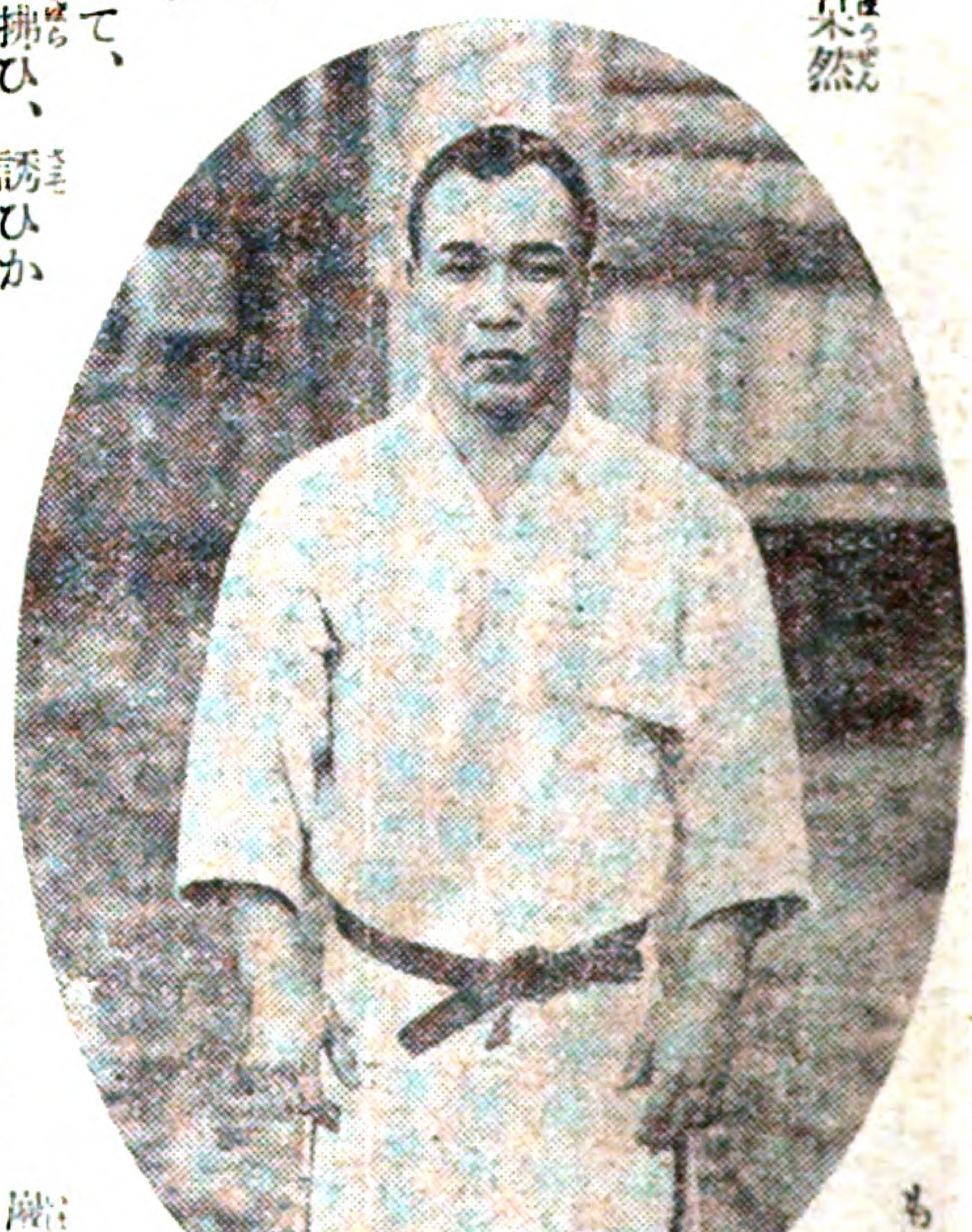
歡聲ドッと福岡軍にあがる。

『萬歳萬歳！』『西萬歳！』

熊本は三度び挑戰して三度び共に破れ、今年こそ積年の鬱容、一氣に敵をモミつぶし、前年二回の恥を雪がんと豫期せしに、雄圖つひに空しく、三度び敵福岡をして覇を唱へしめた。

あゝ、風寒き春日原頭の晩秋、夕闇に照る一千燭光の燈火のもとに、兩軍の戰士は最後の禮を交はすべく立つた。

兩軍戰士の心情や如何に、記して來秋の大接戰を待たん。（完）



優勝せる福岡軍主將西五段



運動家に必要な精神

横井春野

◇運動競技の目的は何？

我々は此の世に生れ出ると同時に運動欲をもつてゐる。この天賦の運動欲を滿足させることに依つて我々は成長してゆくのである。我々が日常行ふ運動競技の練習は、身體の鍛錬にあることは云ふ迄もない。けれ共たんに身體を鍛錬する丈けならば運動競技の練習をせずとも他にいろ／＼の方法がある。我々は身體を鍛錬すること以外に運動競技の練習に對して要求する大きなものがあるのである。夫れは人格の陶冶である。之を具體的に云へば、『我々が社會人として生存してゆくに際して必要な諸徳』を不知不識の間に養ふと云ふことである。

運動競技の練習は我々の人格陶冶に與つて力大であるが、之れが練習の方法に缺點があると、反つて弊害多くして、利益なしと云ふ結果に陷つてしまふ。私は、以下運動競技の練習をして有効ならしむるに必要なる精神について私見を述べて見たいと思ふ。

◇不撓不屈の精神

かりにも、運動競技を練習しようと云ふ人は不撓不屈の精神がなければならない。一旦志した以上は、或る程度迄貫徹しなければ止まないと云ふ精神がなければ、運動

一流選手は語る

早大ア式蹴球部 玉井操



○感激した事――第一に思ひ出されるのは、大正十三年正月五日スポーツの宮樣秩父宮殿下御台覽の下に行はれた、光榮ある全高等學校ア式蹴球大會に優勝した時の事です。惡戰苦鬪の後、私達の手に今や大銀盃の授けられんとする時、殿下には直立遊ばされ其の上、嚴寒肌を劈くの日にも拘らず外套を脫がせられ、にこやかに拍手を賜りました。午前午後の二回の大激戰に綿の如く疲れた體も殿下の其の御樣子を拜し奉つた時には、石の如く固くなり眼には感激の淚が自づと宿つて參りました。やがて殿下萬歲の聲、續いて何處ともなく起つた『都の西北』の校歌――唯々感激其のものでした。

可笑しかつた事――一昨年の夏愛知縣第一

家として出現したい。

一高野球部の黄金時代に守山君と云ふ名投手がゐた。當時の日本球界の第一人者で、コントロールのよいことはたゞ〳〵驚くばかりで、彼れの投球は、捕手のサインに對して一寸のくるひもなかつたと云はれてゐた。守山投手が超人間的のコントロールを得る迄には人知れぬ苦心があつたのである。一高流の猛練習がすむと守山君はたゞ一人で寄宿舍の裏庭へゆき、煉瓦塀めがけて球を投げた。日が西山に沒して球が見えなくなる迄投げ續けた。毎日々々繼續する中に、球は我が思ふ箇所へ當るやうになり、煉瓦塀にボール型の穴があくに至つた。始めの中は中々思ふ箇所へは球がゆかない。並大抵の人ならばこの時期に壯圖が挫折してしまふのだが、『何糞ッ!!』と頑張り通した結果、守山君のコントロールは、百發百中となつたのである。守山君のやうな精神があれば誰でも一流の選手となることが出來るのである。

この不撓不屈の精神は、適當なる指導者に監督されて練習する際には自然と養はれるのであるが、夫れをまたずにこの精神を以て練習に取りかゝることが必要である。

◇團體的精神の必要

運動家にとつて最もいむべきは、『自分さへよければ人はどうでもかまはない』と云ふ精神である。自分勝手一方の人は運動家としては成功しない。よしや或る程度の成功をなしえてもかゝる精神の持主は運動家の仲間入りが出來ない。運動の神聖を害するものとして排斥せられる。

運動家にとつて必要なのは團體的精神――共同一致の美風である。場合に依つては自己が犧牲になつても、團體の爲につくすと云ふ精神が必要である。この精神がなければ社會に於けるすべての事業は成功しないのである。數年前松本主將時代の早大野球部は立教大學と惡戰苦鬪したことがあつた。一勝一敗の後決勝戰が早大球場で行は

醫學校へコーチにいつた時の[illegible]『先生』と呼ばれた事です、[illegible]出すと擽つたいやうな氣がします。

失敗つた事――十四年正月の全關西高校大會に出場した時に蝮蛇を飲んだ、精力元氣を増す爲に飲んだのですが。規定の二倍も飲んだ爲すつかり逆上して一寸も動けず遂に敗れました、それ以來藥物を服用せぬ事にしました。

愉快だつた事――昨年十二月ア式蹴球大會の大試合だつた對關西學院戰に勝つた時です。主將として初めての大試合、然も二ヶ年間引分け本年も一、二回戰共に引分けだつた、その三回戰になつて後一分半といふ際どい所で勝つ事が出來たのです。これも皆んなの團結の賜です、然し一面關西選手を見た時同情の涙を禁じ得ませんでした。

○　報知新聞社員　鶴田義行

可笑しかつたことは、昨年七月隅田川に開かれた報知新聞社主催の日米水泳大會で、隨分いろんな人からサインを頼まれた時、一人の少女が私の名前だけで滿足せず、何かいひにくさうに催促しましたので、生年月日を書いて渡しましたが、實は私のアドレスを求めてゐたのだ

れた。戰ひは早大に利あらずして、立大にリードされたまゝでラストインニングに入つた。この時主將の松本終吉君は自分の代りに戸田君をピンチヒツターたらしめた。一軍の主將としてこの擧に出ることはドンナにか、つらかつたであらう。けれど松本君は、早大チームの爲に一身を犧牲にして自から陣頭を退いて戸田君を出場せしめたのであつた。この結果戸田君の左中間三壘打で早大は敗勢を挽回して勝冠を握つたのである。松本君の苦しい心事は、一度球を握つた程の人ならば誰でも察することが出來る。けれど、松本君の犧牲的精神が早大を九死の淵から救つたのであつた。運動家は誰人も松本君のやうな精神をもたねばならぬ。

◇規律を尙べ

運動家は規律的の生活をしなければならない。現在に於いては斯界に名を唄はるゝ程の大家の中には不規律な生活をしてゐる人は一人もないやうである。

運動家は朝起きてから夜床に入る迄、規律的の生活をしなければならない。規律を尙ぶ精神を以て自省してゆくうちに、不知不識の中に規律ある生活を行ひうるやうになるのである。

運動技が科學的になつてきた現在に於いては、運動家は飮食物に於いても周到なる研究を要するのである。酒や煙草は絕對にいけないし、間食もいけない。この方面の節制が大切であるが、規律を尙ぶ精神が缺けてゐるとそれを實行することが出來ない。

かつて、軟式庭球界の第一人者と云はれた內田亥之太郞君は、法大在學當時規律ある生活をして多數學生諸君の模範となつてゐた。內田君とて、最初から規律ある生活をなしえたのではない。苦心に苦心の結果この域に達しえたのである。運動家は、各自の屬する部の部規を守らなければならない。部規を守りえぬものは運動家として「



と、あとで氣がついて、相手が少女であつただけに、我ながら失笑したことがあります。

驚いたことは高石氏の精力です。

失敗つたことは、前の可笑しかつたことに似てゐますが、私が佐世保から東京へ出て來ると、報知の人が皆ハイカラに見えたので、私も社の床屋でアイロンをあてゝもらひ、帝大プールへ練習に行きましたところ、折角の頭髮も水のために、すつかり駄目になりました。田舍者は田舍者らしく、今後は分に過ぎた考へは起さないつもりです。

愉快でたまらなかつたことは、二百のブレストで三分を切つた時の心持です。

○　東京高師競技部　福井行雄

一、感激したこと、

去年のインタカレツヂ競技會で、ローハードルを二四秒三で走つたのが、よいタイムだといふので、校友會長三宅先生から表彰されました。

のか何なきものである。この點はくれぐれも注意しておく。

◇「一心不亂」と云ふこと

運動家として成功するには、『一心不亂』と云ふことを一瞬間も忘れてはならない。一心不亂の域には、精神の集注に依つて到達しうる。練習は量多くとも、精神のこもらぬ遊び半分の氣分で行つては効果はない。練習量――練習時間は少なくとも精神を打ち込んで練習すれば効果は大きいのである。

練習はもとより競技、試合に際しては、運動技そのものに自分の精神を全注せねばならない。精神が偉大な力をもつてゐることは『堅き石にも矢が立つ』と云ふ諺に依つて何人も知る所である。多くの選手の中には試合場へ出ると氣おくれがして平素の實力を發揮することの出來ない人がある。これに反して試合場へ出ると實力以上の働きをなしうる人がある。實力以上の働きは、精神の集注力に依つてえられるのである。イザ鎌倉と云ふ時に、瞬間的に精神を集注しうる人は決して試合場で氣おくれをするやうなことはない。精神の集注力を養ふは平素の練習にある。平素いゝ加減な練習をしてゐる人は、試合場へ出て氣おくれして充分我が腕をふるふことが出來なくなる。

◇決斷力と勇氣

決斷力に缺くる人は、運動家として成功しない。事をなすに當つて準備は用意周到でなければならない。けれども愈々事に當つては、決斷力を以て男らしく進まなければならない。野球技で一番むづかしいのはバッチングであるが、決斷力の乏しい人は常に遲疑して好球を見のがしてしまふから、打者として成功しない。決斷力と共に必要なのは勇氣である。決斷力も勇氣も『精神の集注力』を養へば、完全の域に達することが出來るのである。

―了―



其の時、先生には萬歳を三唱して下さついました。あの謹嚴な先生が嬉しさうに萬歳を三唱されたのです。私は、此の時程感極まつたことはありません。

二、驚いたこと、

話は古いが、マニラに開かれた極東大會の時、先方の役員が、あまり不正だつたことには驚かざるを得ませんでした。

三、失敗したこと、

妙なことだが、いつかの競技會でパンツの紐が切れたことである。平素の不注意から起つた失敗です。

四、愉快だつたこと、

愉快で堪らなかつたことは、僕が始めてインタカレッヂに出た時、ハイハードル豫選でハードルにつまづいて倒れた。併しやつと豫選を通過して、決勝で優勝した。倒れた時は吃驚したが、優勝した後では却つてこれが愉快な思ひ出となりました。

（沈默）そこひなき淵やはさわぐ山川の淺き瀨にこそあだ波はたて

[illegible]田[illegible]



ムッソリニと日本

ムッソリニ傳の著者として

澤田謙

いまの世界で、一番有名な

人は、恐らくムッソリニであらう。いかなる海沿ひの漁村、いかなる山間の農村でも、みな無意識にムッソリニといふ名を呼んでゐる。彼等は必ずしも、ムッソリニの波瀾重疊なる生活を知らない、況んやその率ゐるファッシストの精神は更に知らない。然しながら、その男性的な、熱と光と力と意氣と眞心に燃ゆる一種の

英雄的精神が

今の日本人の凝視に値するのだ。しかし、私は必ずしも現代の日本に、ムッソリニの如き獨裁者が現れて、ファッシズムの如き主義により、新日本を建設すべき事を希望するのではない。



日本には日本の傳統があり、日本は飽くまで日本であつて、決して伊太利ではない。

私は元來日本主義者である

かるが故に私は、日本には日本らしき英雄の現はれんことを要望する。われらはこれを『新自由主義の英雄』と名付ける。されど、その意氣、その氣魄、その情熱、その眞誠に至つては、伊太利と日本と、多く異るところあるべき筈はない。

これが私の『ムッソリニ傳』を

草し初めた動機である。筆をとり始めたるは奇しくも、ムッソリニ誕生のころ、初夏の太陽

◆英傑の俤◆

鼻に命中

『いま三十年もしたら俺も銅像になつてるだらう。』と、ムッソリニは云つた。

三十年たゝぬ中に、危く彼が銅像になりかけたことがある。いまや羅馬の議事堂から出てゆかうとした彼を目がけて、一名の老婦人が短銃をうつた。

彈丸は皮肉にも、彼の鼻に命中した。而もムッソリニは、いつもの平靜を失はなかつた。

『驚くな。何でもないぞ。決して復讐してはならぬ。俺の意志だ。』これが此のとき最初に發した彼の言葉であつた。

が澎湃として青葉の上に輝く頃であつた。綴りゆく中に、私は不思議にも自ら背けるその書のうちに、自らの精魂を吸ひこまるゝ如くに感じた。一種の電氣が、私の握つてゐる鉛筆から迸り出づるを覺えたのである。

私は告白する。私は未だ

かつて、かくの如き熱心を以て、かくの如く精魂を打ちこんで書き綴つた著書はなかつた、と。

思ふに、ムッソリニの發散する電氣が、私の體内に宿つて、さらに發現したのであらう。想へばフランスの兵學校の校庭に、プリュタークの英雄傳を讀み耽つた青年が、即ちかの大ナポレオンであつた。若き西郷南洲、若き高杉晉作の愛讀書は、かの山陽の日本外史であつた。

英雄傳が英雄をつくる

大史書が大國民をつくる。私の筆者としての一大野心は、新らしき「日本外史」を著すことである。

不幸にして淺學不敏、いまだその大業の端緒すらえない。たゞこの度、世に公にする『ムッソリニ傳』が、年若くして新日本の黎明を待ち望める、全日本の青年諸君の希望に、幾分にても貢獻するところあらば、わが望み、また半ば足れりといふべきである。

博士を辭退

ムッソリニが大宰相となつた時、ボロニア大學はこの鐵腕宰相に媚びようと思つたのか、彼に「名譽博士」の稱號を贈らう、と云つてきた。彼は即座に、これに返答した。

『いま一年まつてくれ』

その一年の間に、彼はマキアヴェリの「君主論」に關する論文を纏めあげて、見事に博士號をとつた。

これを以て見てもムッソリニを、一介の無學なる暴力漢と思ふものがあつたら、大變な間違ひである。

何にしても、宰相自ら筆をとつて、博士論文を提出するなぞ、痛快ではないか。



柳生十兵衛

桃川如燕 演
尾竹國観 畫

惚れた女を唯一打

『十兵衛様、十兵衛様』とやさしい聲で呼んで揺起す者がございますから、十兵衛先生目を覺して見ると、竹の内に投げ飛した伊集院刑部の娘の竹尾が枕元に羞かしさうに控へて居りまするから、十兵衛先生ムツクリ起上つて、

『其方は御息女ではないか』

『ハイ……』

『先程あれほど申して投げ付けられたに、性懲もなく何でお出でに相成つた』

『ハイ、假令どのやうな目に逢ひませうとも、一旦想ひを懸けた貴方様、お慕ひ申して参りました』

『ナニ、此の十兵衛を慕つて参られたとな』

『ハイ、此の鹿兒島の御城内にも澤山御家來がございますが、貴下様のやうな鬼をも挫ぐ立派なお腕前の御方はございませぬ、顔容の美くしいのに惚れるが女子の常でございますが、私は顔や容はどうあらうとも、天下の名人とも云はれる御方を良人にいたしたいと、常々思つて居りました所、貴下様の御越し、一目見て御立派な御方、此の方こそ私の良人と、思ひましては矢も楯も堪らず、御父上にお願ひ申して、性懲もなく人目を忍んで御介抱に上りましてございます、どうぞ私の心の中不愍で思召、不束ながら……』と言ひながら羞かしさうに十兵衛先生の顔を眄めに見る艶やかさ、十兵衛先生其の様子を默つてジツと見詰めて居ましたが、

『ハヽア、それでは其許は此の十兵衛に惚れたと云はれるか』
『ハイ、羞かしながらお慕ひ申して居りまする』
『左様か、其方がそれほどに想つて呉れるといふのは十兵衛喜ばしく存ずる』
『ハイ……』
『如何にも其方の言ふ通り、十兵衛の妻といたして遣はす』
『ハイお嬉しう存じまする』
『其方は中々美くしい女ぢやな』と言ひながら左の手で女の手を握つてグイと手許へ引寄せたと思ふと右の手に拵へ上げた拳固、いゝしないを付けて女の横面をポカーリ……柳生流得意の氣合で打たれたから堪りませぬ『アツ』といふと竹尾は取られた手を振り拂つて逃げようとする所を動かせず『エイヤツ』二度目に飛んで來た拳に目口鼻から血を流して女は息は絶えた様子、
バッタリそれへ死骸を投げ出して、
『アハヽヽ、思ひの外脆いものだ、併し折角能く寢て居るものを、飛んだ邪魔をいたし居つた、まだ夜明には間もあらう、モウ一寢入いたさうか』ゴロリと寢轉んで又夜具を被つて寢てお仕舞ひになりました、夜が明けて起き上つた十兵衛先生、此の女の死骸を此の儘にして置いては面白くない、夜具の中へ入れて置いて驚かせてやらうと、女の死骸をズル／＼引摺つて來て、上から夜具を被せて、斯うして置けば分るまいと獨り笑壺に入つて居りまする。

家老の娘は狸でござるな

此方は伊集院刑部、朝早く御前へ出仕いたしますと薩摩守は
『刑部、十兵衛の様子はどうぢや計略は如何いたした』
『ハヽツ、先づ失敗にございます』
『失敗か、十兵衛は女子に手を出さぬか』
『中々以て品行方正、恐れ入つてございます』
『コレ／＼其方が恐れ入つて居ては往かぬではないか、それでは十兵衛を連れてカフエーへでも參つてはどうぢや』其の時分カフエーなどはありはしませぬ。
『恐れながら第二の計略を用ゐましてございます』
『ハヽア第二の計略といふのは何ぢや』
『實は手前娘竹尾、當年十八にございます、親の口から申すも如何でございますが、十人並勝れた容貌、昨夜十兵衛先生、御前に於て御酒下され、酩酊いたして歸られましたを幸ひ、娘に申附けまして、昨夜伽を申附けましてございます』
『オヽ能い所へ心付いた、其方の娘は鹿兒島小町などと噂をいたす家中第一の美人であると申すことぢや、して如何いたした、計略圖に當つたか』
『それはまだ分りませぬ、まさか娘を呼出して様子を聞くのも如何と存じ、聞かずに出仕いたしましてござりまするが、娘は今朝まだ起出でませぬ様子……』
『ウム、巧く參つたかな、其方の娘が伽をいたしたら、……

物堅い十兵衛でも、落城いたしたであらう、十兵衛を呼出して様子を聞くであらう……コレ〳〵十兵衛を呼べ』と仰しやつて居る所へ十兵衛先生、ニコ〳〵笑ひながら出仕を致しました。

『おゝ十兵衛であるか』

『ハツ、昨日は色々御待遇に預かり、十兵衛思ふさま頂戴をいたしましてござる』

『大分酔うたやうであるな……十兵衛、昨夜何か變つたことはないか』

『變つたこと……ございました』

『ハヽアあつたか、どういふ事があつたか話をいたせ』

『されば、手前は寢て居りましたが、酔醒冷の水が欲しさに目を覺ますと、枕元に一人の美くしい女が居りました』

『ハヽア女が居つたか』

『それから色々と話をいたしましたが、どうやら手前に其の女が惚れて居る様子でございました』

『ハヽア、十兵衛、御身は中々隅に置けぬな、それから如何いたした』

『けれども手前は女に眼を眩れるやうな者ではございませぬ、無禮な奴でございますから、引捉へて廊下へ叩き付けてやりましたら、驚いて逃げて行つてしまひました』



『ハヽア聞きつけたか』殿様伊集院刑部の顏を見ると、刑部は驚いて眼をパチ〳〵やつて居る。

『折角御身に惚れて忍んで參つたものを、何で情なく叩き付けるのぢや』

『之が自分の考へで忍んで參つたのなら妻にもいたして遣はしまするが、父の申付けに依つて參つたとのこと、當鹿兒島の御

家中に、夜陰深更に娘を忍ばせるやうなことはいたしますまい、左様なことがあつては、一家の規律が立ちますまい、仍て引ツ叩いて遣はしました』

『ウーム亂暴だな是は、それから如何いたした』

『スルと又眞夜中に至つて其の娘が忍んで參りました』

『來たか』

『されば、此の鹿兒島には主君を初め一人として碌な奴は居ないが、貴下一人は天下の名人、立派な御方ゆゑ、お慕ひ申して居ります、一旦懲されましても、性懲もなく人目を忍んで參りました、當城に居る武士は一人として碌な奴は……』薩摩守も家來も驚いた。

『コレ〳〵十兵衛、モウ分つた、それから如何いたした』

『それから餘り不憫でございますから、私が妻にいたして夜を明しました』薩摩守喜こんだ、思はず膝を進めて、

『十兵衛、其方はモウ此の薩摩守の家來であるぞ』



『ハヽア、それはどういふ譯で』

『どういふ譯と申して、其の女は當家の家老職、其所に居る伊集院刑部の娘竹尾と申す鹿兒島第一の美女ぢや、當地に永く足を留めさせようと、刑部と謀つていたしたことぢや、柳生流の名人といはるゝ其方も、女には敵はぬと見えるな、當家の家老の娘を妻といたしたからは、當家に仕官いたさねばなるまい、どうぢや十兵衛』驚くかと思ふと十兵衛平氣なもので、

『ハヽア さういふ計略でございましたか、それはどうも惜しいことをいたしました』

『ナニツ、惜しいことをいたしたとは何ぢや』

『氣の毒なことをいたしました』

『何が氣の毒ぢや』

『其の娘を殺してしまひました』

『エヽツ女を殺した……只今其方は、其の女を妻といたして夜を明したと申したではないか』

「されば、妻にいたさうと存じましたが、能く〳〵見まするど其の女は狸でございますから、一度ばかり叩き毆つたら死んでしまひました』

『ナニ狸ぢや、確かに刑部の娘に相違ないぞ』

『ハヽア、それでは刑部殿は、狸を娘にいたしますか』

『誰が狸を娘にする奴があるか、本當に殺したのか』

『偽りは申しませぬ、十兵衛嘘と鹽辛は嫌ひでござる、狸に違ひないから殺しました』

『ソレ刑部、見て參れ』

『ハヽツ』刑部も氣が氣ではない、あんなことをいつて物堅い十兵衛先生、本當に娘を殺したのか、飛んでもないことになつたと、屋敷へ取つて返すと、奥方がお出迎ひ、

『お歸り遊ばせ、今日は大層お早いお下りにございます』

『コレ〳〵狸は如何いたした』

『エヽツ狸、狸は動物園か馬鹿囃子……』

『何を申して居る、狸ではない、娘はどうした』

『娘は心持が惡いと申して、部屋に臥つて居ります』

『それが怪しい、どうも此の間中から樣子がをかしいと思つた、あんな娘を生むといふことがあるか、不屆お前が好くない、狸婆ア』

『貴下何を御冗談を仰しやいます』それから刑部が娘の部屋へ來て見ると、竹尾は寢て居て起上ることが出來ない。

『コレ娘、速かに正體を現はせ』

『何でございますお父上、私はモウ十兵衛樣には懲々でございます、實に昨夜是れ〳〵云々、お恥かしうございますが、強かに投付けられて、腰の骨を折つて逃げて參りました』と眞赤になつての話し、

『さうか、イヤどうも仕樣のない話だ、併し何で又夜中になつて忍んで行つた』

『御冗談仰しやいます、一度と忍んで參つた覺えはございませぬ』扨はと思ふから、十兵衛先生のお居間へ行つて見ると、まだ夜具は其の儘になつて居て四邊一面血汐の跡、夜具を刎ね退け

て見ると、四五尺もあらうと思ふ黒の大蛇が、眼を剥き出して血だらけになつて斃れて居ります、サア大騒ぎ、早速又登城をして刑部から此の事を申上げましたから、諸侯も舌を巻いて御感心、

『十兵衛、どうして女の姿をいたして居るものが、蛇といふのが分つたか』

『されば、人の話には怪物は暗夜にても物の黒白が明かに見えるとのことにござります、昨夜刑部殿の御息女と申して参つた女、衣服の模様、暗夜の中に手に取るやうに見えました、仍て打ち殺しましてござる』

『ウム、流石は武芸者、寸時も油断のない所は感服をいたした』

と大層御賞美、併し十兵衛先生には、女では引留めることは出来ない、何か良い工風はと考へて居る、十兵衛の方では、モウ大抵要害の様子も分りましたので、機会を見て当地を立退きたいと考へて御出でに相成りまする。

恐ろしい名人の手練

スルと十兵衛先生が鹿児島をお立退きになるのに都合の好いことが出来いたしました、といふのは今回越前福井の城主松平伊豫守忠昌公、此の御方は家康公の御次男越前三位中納言秀康公の御次男でございまして名代の御剛将、三年に一度福井の御城下八幡宮の神前に於て奉納試合といふのがございます、此の試合には諸国から名だたる武芸者が集つて来て、其の勝敗を争ふ事になつて居ります。お祝ひの事でむづかしい、第一御城内の人がもつれた時にどうも納まりませぬ、況して是は天下の諸人達人といはれる有名な人ばかり集つての試合でございますから中々此の行司役はむづかしい、中々尋常の人では其の任が勤まらない、此の前は一刀流の開祖伊東一刀齋先生が行司役でございましたが、一刀齋先生が越前へ隠遁をしてからは行司の勤め手が一寸見当りませぬ、ソコで柳生十兵衛先生ならば、誰も苦情の言ひ手もあるまいといふので、大和柳生の本邸へ問合せると、目下薩州鹿児島に御滞在といふことが分つた、それではといふので、主命を被つて青木猿兵衛といふ御方が、態々十兵衛先生の御迎ひとして鹿児島へ乗込んで参りました、好き機会と十兵衛殿早速御承知になる、御自分の御家来なら苦情もいへるが、御家来ではない、苟くも一國の主伊豫守、将軍家御指南役の御子息でございますから、それはいけないとは幾ら薩州家でも言はれませぬ、渋々御承知になる、薩州家ではどうかして当地に留めたいと思つて苦心をしたゞけに、まるで鷹に油揚を攫はれたやうな形、厚く御礼を述べて十兵衛三厳先生、青木猿兵衛と同道、いよ〳〵薩州鹿児島を出立に及びました。

途中御話もなく無事越前福井へ御着、早速伊豫守忠昌公に御目通り、忠昌公非常にお喜び、城内に居るのも窮屈といふ所から、城下の[illegible]院といふ寺を旅宿と定めることに相成りました、御側には御家来が二人代る〴〵に附いて御用を足して居り

ます、處が追々福井へ集つて參ります武藝者、柳生十兵衛先生が雲光院に滯在して居るといふことを聞くと、皆訪ねて來るので其の煩さいこと、中には名もなき武藝者などが、唯十兵衛先生の顔を見たいのでやつて來る者などもある、煩さくつて堪らないから木戸錢を取つて下足を付けるといふ騷ぎ、けれども名の高い武藝者は取次いで、十兵衛先生が會ふと仰しやれば通すやうにして居ります。

『御免……』

『ドーレ……』取次の武士出て見ると年頃四十五六、坊主頭ではあるが武藝者らしい、

『何れからお出でゝございます』

『手前は諸國修行の武藝者、柳生十兵衛先生、當院に御滯在と承つて參つた』

『へエ、何をお使ひでございます』

『針でござる』

『へエー、按摩さんでございますか』

『按摩ではない、含針をいたす有馬喜兵衛と申す』

『アツ左様でございますか』此の有馬喜兵衛といふのは豐後の國の生れ、右に木太刀を持ち、口に何十本といふ針を含んで、イザ立合となると、フーフツと口中から其の針を吹出して敵に吹き當てる、實に珍らし



い武藝、含針の有馬喜兵衛といつては、全國に其の名を知られて居りますから、早速に十兵衛先生に申上げると、

『喜兵衛が參つたか、一度會ひたいと存じて居つた所、好い折柄、通せ』といふ仰せ、

『どうぞ此方へ……』案内に從つて奥へ通る。

『初めて御意得まする手前有馬喜兵衛と申しまする者、以後御見知り置かれまするやう』

『オ、私が十兵衛三嚴である、豫て噂には承つて居つたが、含み針とは珍らしきものぢや、どういふ技であるか』

『されば、手前の用ゐまする針は長さが二寸五分ございます、穴の無い針で、立合ひまする時には其の針を含んで吹出します、それを受ける人が誠に少なうございます』

『ウム、木太刀を以て立合ひ、其の最中に二寸五分の穴の無い針を吹出す……誠に珍らしい武藝、今まで如何なる者と立合をいたしたか』

『御意にございます、先づ二百本の針を手前持つて出でましたが、手前の針を二百本ながら見事に打落して、私が恐れ入りましたのが、越前敦賀の山中にお住ひになります伊東彌五郎景久入道一刀齋、此の先生は二百本ながら受けました』

『ウーム、其の外には……』

『塚原卜傳先生と立合ひ、又吉岡憲法先生とも立合ひました』

『ウム、それはどうであつた』



『是は百本打ちました』武藝の物語をして居りまする所へ

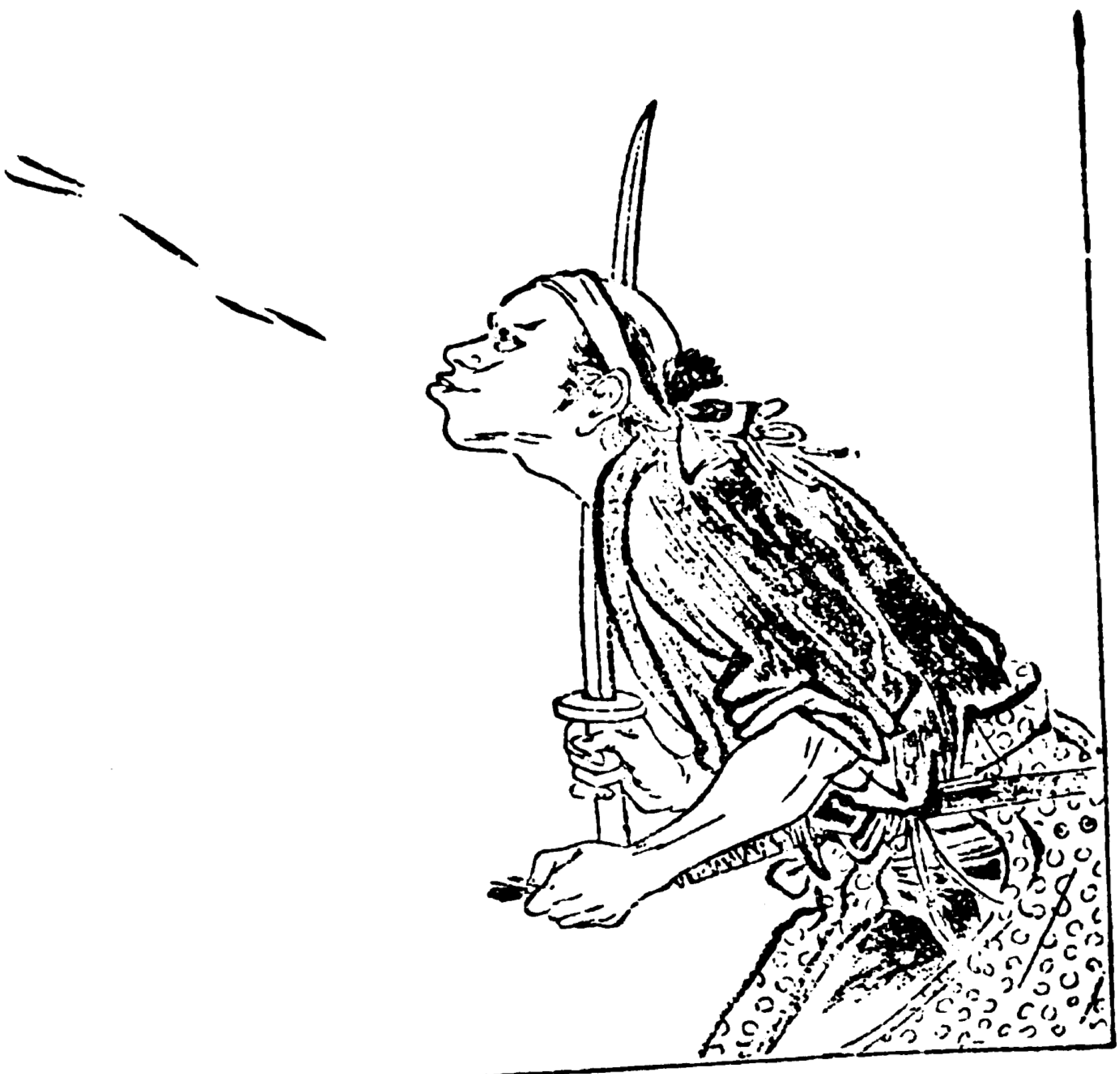
『頼──む』といふ聲、取次の武士出て見ると、

『手前は豐前小倉の住人宮本武藏政名と申する者』

『手前は武藏の門人靑木城右衛門、十兵衛先生當院に御滯在と承つて參つた、宜しく御取次を……』早速十兵衛先生のお許しを受けて奥へ通す、有名の人ばかりの來訪でございますから、十兵衛先生も殊の外のお喜こび、諸々の物語をいたしました時に靑木城右衛門、

『扨有馬先生、一本どうかお手合せを願ひたい』

『望む所』と茲で双方支度をして庭へ出る、十兵衛先生が行司の役、城右衛門は宮本の高弟でございますから右剣左剣の二刀を使ふ、有馬喜兵衛は一尺三四寸もございます小太刀を右の手に取つて、左の手に含針といふのを掴み『エイツ』『ヤツ』互ひに身構へをいたして居ります、十兵衛先生御覧になると、流石宮本武蔵の高弟だけに青木城右衛門、両刀を取つた其の構へ實に一點の隙もない、喜兵衛の様子を見れば、是亦一流の先生、此所ぞと打込む所がない、其の内に『ヤツ』と一聲叫んで喜兵衛が打込む小太刀、ボン心得たりと城右衛門、之を拂ふ、ボンボン三四合打合つたかと思ふと、忽ち左の手に持つた含針を口中に入れると後からパツ、パツ〳〵パツ〳〵と後から後からと其の針を吹き出す有様、實に手練とは云ひながら目覺しいもの、城右衛門右剣左剣を以て右に拂ひ左に落し、バツタ〳〵其の早いこと目にも止まらぬ位、其の内に十兵衛先生、『勝負あつた』兩人後へ下つてホツと一息入れました時に、



『喜兵衛、其方の腕前天晴れ、如何にも感服をいたした、城右衛門、残念ながら其方は負けだ』城右衛門怪訝な顔をして、『先生に伺ひまするが、私は有馬先生の針を一つも受けませぬ、甚だ恐れ入りますが、先生の御見違ひではございませぬか』

『イヤ予の見違ひではない、鉢卷を見ろ、其方のいたした鉢卷を見ろ』

『ハツ……』言はれて初めて氣が付いて、城右衛門して居た白布の鉢卷を取つて見ると、何時の間にか十三本の針を吹付けられて居る、城右衛門眞赤になつて、

『恐れ入りました、己れの未熟を辨へず、先生に御無禮の儀を申上げましたるは近頃恐縮の至り』

『イヤ〳〵さうでな

い、其方が弱いのではない、其方が強い』それなら同じことだと思つた。

集つたりな名人達人

此の時に十兵衛先生、

「喜兵衛、十兵衛が相手をいたす、サア參れ」

『ハヽッ、然らば先生御指南を願ひまする』何しろ相手は大和柾木坂で一萬石御柳生但馬守の御子息、身分が違ふから有馬喜兵衛謙遜つて口では叮嚀にいふやうなものゝ、腹の中では、ナーニ十兵衛とて何程の事のあるべき、乃公も有馬喜兵衛だ、一つ腕前の程を見せて驚かしてやらうと、十分に天狗があるから、

『先生、恐れながら針は五十本を以て御相手をいたします』

『ハヽア、其方予と立合に五十本を以て相手をいたすか、何本を以て定法といたすのぢや』



『まづ五十本を定法といたしまする』と云つた一言が十兵衛先生には[illegible]に障つた、

『喜兵衛、最前の話には、伊東一刀齋に二百本を用ゐ、塚原卜傳に百本を用ゐたと申した、然るに十兵衛に對し五十本を以て相手をいたすとは近頃無禮の一言、二百本を以て勝負をいたせ』お顏色が變つたので、

『恐れ入りました、失禮の段、平に御容赦下されたい』と右手に小太刀、左手に二百本の針を持つて立出でました、十兵衛先生は例の鐵扇を持つてお立出で、サア來い來れと身構へた、心の中に有馬喜兵衛、何程の事やあるべきと、『エイッ』大喝一聲打込み來つた小太刀、二つ三つ應らつて居りまするを、喜兵衛一足後へ下がつて、何時か針を口中に含んで、パツ〳〵パツ〳〵と吹出しまするのが一本

と雖ども他へ外れませぬ、悉く十兵衛先生の頭上を望んで吹き付けて來る、それをバラリ、バラリと鐵扇を以て左右に打拂ふ其の手練といふものは目にも留まらず、喜兵衛遙か後に飛び下がり、

『恐れ入りましてございます』

『イヤ喜兵衛、まだ〳〵其方の手に、七八十本針が殘つて居る、それを殘らず吹き出せ』

『御眼力の程恐れ入りましてございます、如何にも針は七八十本殘り居りまするが、何千何百本吹出しました所で、到底先生に及ぶべきではございませぬ、誠に先生の妙手、喜兵衛驚ろき入りましてございます』と持つたる針をそれへ投出して、流れる汗を押拭つて後ろへ下がつたが、流石は有馬喜兵衛、一流を爲したゞけに、同じ負けても負け方が見事でございます、宮本武藏、青木城右衛門に於ても感心をして、此の激しく吹いて來る針を拂ひながら、尚ほ手許に七八十本殘つて居るといふ所まで見極めが付くといふものは實に非凡の腕前、又それを殘らず吹出さないで兜を脱いで降參した有馬喜兵衛も遖ばれでございます、總て何の勝負でも、勝つも負けるも時の運、負けるにしても綺麗に負けるが宜し、勝つにしても、汚ない勝ち方をするのは宜くない、十兵衛先生大層喜兵衛の腕前をお賞めになつて居ります、處へ

『頼――む』といふ聲、

『ドーーレ……何誰でござるか』

『手前は紀州の住人高田又兵衛吉次でござる』



『是は〳〵』と取次ぐ、
『宜い者が參つた、通せ』
『賴——む』
『ド——レ……誰方でございまするか』
『手前は前名神子上典膳事、小野二郎右衞門忠明でござる』
『是は〳〵……先生、小野二郎右衞門先生にございます』
『通せ……』
『賴——む』
『ド——レ……忙がしくなつて來たぞ……誰方で』
『手前は京都今出川の住人吉岡憲法、十兵衞先生に御目通りいたしたい、宜しく』
『入らつしやいまし……大入々々』
『賴——む、手前は桃川如燕』
『賴——む、手前は富士松加賀太夫…』講釋や新内までやつて來た。
『各〻方はどうか愛宕山へお出でを願ひたい』ラヂオの放送と間違へるといふ有樣、十兵衞先生、悉くお喜こびになつて、酒宴の御用意、打解けて諸國の物語、武藝の話に時刻の移るのを知らぬ位でございます。



しなびた辨慶

追々武藝自慢の者は我れ先にと福井の城下へ集つて參ります、三國屋といふ旅籠屋に泊つて居る武藝者といふのが梶原源左衞門といふ梶原流の柔術の先生、鷲津七兵衞といふ穴澤流の投棒の先生、中條五郎兵衞といふ中條流の劍術の先生、此三人

が一つ宿へ泊り合せて、一緒に酒を飲みながら武藝の話をして居りました。スルと此の三國屋へ丈の小さい、六十七八になる老人がチョコ〳〵と入つて來た。

『コレ〳〵泊めて貰ひたいな』若い者が見ると色の黒い木綿のゴツ〳〵した衣服に茶の袖無しのやうなものを着て、短かい刀を一本差して居るが、見すぼらしい百姓の爺さんらしい様子でございますから、

『エ――誠に濟みませぬが、手前共ではお宿が出來ませぬ』

『何故だな』

『ヘイ今度此の福井の御城内で、武藝の大試合がございます、それで日本中の武藝の先生方が此の福井の城下へお出でになつてお泊りになりますので、其の先生方の御宿をするやうにと、御城内から有難い御達しでございます、それで當分は武藝者の先生の外はお泊め申さないことにいたして居ります。ヘエ』

『私も武藝者だよ』

『御冗談を仰しやつてはいけませぬ、貴下のやうな年を老つた武藝者が……』

『馬鹿を言ひなさい、武藝者だつて若いと極つて居るか、段々に年を老つて來れば、爺いにもなる』

『左様でございますか、ではお上り下さいまし』それから二階の座敷へ通される、其所へ主人が出て來て、

『嘸お疲れでございませう、貴下様は武藝の先生で在つしやるさうで、何といふお名前でございますか、伺ひたう存じます』

『ア、名前かい、名前もあつたのだが、何所かへ失くしてしまつたよ』

『御冗談仰しやつてはいけませぬ、名前を失すなどといふことはございませぬ、何と仰しやいますか、御本名をお名乘を願ひます、お名前を御城内へお屆けをいたしますから』

『さうか、本名を名乘れといふなら仕方がない、何を隠さう我こそは……』

『オヤ〳〵』

『源義經の家來に去る者ありと聞えたる武藏坊辨慶とは乃公のことだ』

『冗談仰しやつてはいけませぬ、そんな萎びた辨慶があるものちやアございませぬ』

『空氣が抜けたから萎びたのだ』風船だと思つて居る。

『それは嘘だが、何でも宜からう』

『イエ宜くはございませぬ』

『イヤ何でもよからうといふ名だよ』

『そんな名はございませぬ』

『ないと云つても仕方がない、此の頃では何……よからうといつて居る、それで宜からう』

『洒落てはいけませぬ、どうか本當のことを仰しやつて下さいまし』

『本當のことをいへば與一兵衛だ』

『與一兵衛……妙な名だな』

『時に亭主、武藝者ばかり泊るのだといふことだが、少しは武藝の出來さうな奴が泊つて居るかえ』
『どうか物を仰しやるなら、御叮嚀に願ひます』
『何故だ』
『何故だと仰しやつて、少しは武藝が出來さうな奴などといふことが聞えたら大變でございます、手前共へお泊りになつて居るお方はお三人樣でございますが皆日本一の先生ばかりで……』
『ハ、ア、黍團子でも賣るのか』
『そんな物は賣りはいたしませぬ、一人は鷲津七兵衛と仰しやつて棒をお使ひなさる先生で』
『ハ、ア犬殺しか』
『犬殺しではございませぬ』
『だつて棒を使ふといふから』
『棒を使つても犬殺しではございませぬ、穴澤流の投棒の先生でございます』
『さうか』
『モウ一人は梶原流の柔術の先生で梶原源左衛門樣、今一人は中條流の劍術の先生で中條五郎兵衛といふ偉い先生で……』
『アハ、、、、さうか、それでは柔術や劍術の眞似ぐらゐやると見えるな、ちよつと挨拶に來いと、其の三人に言ひなさい』
『オツホツホ、狂人だ此の爺さん』驚いて主人は、三人の居る座敷へ參りましたが茲に一つの騷ぎが起る、抑も此の老人は何者でございませうか、次號のお預かりといたします。

近ごろ感服の名小說

貴司山治

佐藤さんの『富士に題す』は近來にない名小說である。でたらめな通俗小說ならいくらでもある、又いつでも書ける、しかし『富士に題す』のやうなものはその時と、その人を得なければ容易に出るものではない。
明治といふ時代を如實に描いた小說はこれからいくらでも出て來るだらう『富士に題す』はその魁の雄篇である。聞くところによると、この小說は非常に長い創作で佐藤さんの所謂『大小說』に相違ない、まことに『富士に題す』こそは佐藤さんが昔天下をうならせた幾多の名篇傑作に優るとも劣るまじき名人の名小說である。(因に佐藤さんとは紅綠氏のことであり『富士に題す』は講談倶樂部に連載の小說である)

雜誌界空前の大册

陽春三月下旬、讀書好時期をねらつて『講談倶樂部』では春季增刊として素晴しく大きな、面白いものを發行することになつてゐます。それは、『大衆新篇、一世一代の傑作揃ひ 戀愛、探偵、武勇』と題するもので、本文だけでも七百二十頁といふ雜誌界空前の大册、これに現代に覇をとなへてゐる大家巨匠人氣作家の讀切り傑作が六十餘篇網羅されるのですから素敵です。(發賣日は三月十九日。前註文殺到の大盛況ですから、お買損ねのない樣發賣の日を御記憶下さい。)



落語

ふるいけ

春廼家朧 演
谷脇素文 畫

伯父『與太、此所へ來い』與『ウオーイ……』伯父『何といふ返事をするのだ、お前のやうな馬鹿でも困るな』與『伯父さんのやうに、口やかましくつても困るな』伯父『あれだ、仕樣のない奴だ、お前は此所の家へ何しに來たのだと思ふ』與『何だか知らないけれども、お前のやうな馬鹿は伯父さんの所へ行つて居ろといふから來たんだ、馬鹿は皆な伯父さんの所へ來るのかい』伯父『そんなことをいふから馬鹿だといはれるんだ、何も馬鹿が乃公の家へ來る譯ではないけれども、乃公が此の通り嚴ましくいつて、子供に小言をいふから、親のいふことを聞かないやうな馬鹿は、乃公の所へよこすのだ』與『ヘエー、ぢやア伯父さんは馬鹿の先生だから大馬鹿だね』伯父『あんなことを言やアがる……唯、お前を家へ置いてるんぢアやないぞ』與『私だつて唯居やアしない』伯父『どうしてゐる』與『三度三度飯を食つてらア』伯父『あれだ、始末にいけねえ奴だ、親父がお前を家へよこしたのも、つまりは乃公の商賣を覺えさせようといふのだ、伯父さんは何の商賣をしてゐるか知つてゐるか』與『知らないよ』伯父『さういふ奴だ、世話になつてゐる家の稼業を知らない奴があるか』與『何だい伯父さんの商賣は…』伯父『ド印だ』與『エ、』伯父『ド印だよ』與『ド印……ヘエー、どうも此の間中から樣子がをかしい〳〵と思つてゐたが……』伯父『何がをかしい』與『よく伯父さん、色々な物を風呂敷に包んで脊負て歸つて來るだらう、扨はあれは皆んな一件ものだね』伯父『一件ものとは何だ』與『泥棒物だらう』伯父『馬鹿野郎、泥棒などをしやアしねえ』與『だつてド印だといつたぢやアないか』伯父『ド印といつたつて泥棒ぢやアない、道具屋だ』與『兎が跳ねるだらう』伯父『何故』與『道具屋お月樣見て跳ねるツて……』伯父『それは十五夜だ、私は道具を賣買してゐるのだ』與『私も道具屋にならうかな』伯父『駄目だよ、お前のやうな馬鹿だと目が利くやうになるには中々だ』與『大丈夫だよ伯父さん、目は利いてるよ』伯父『利いてる……』與『ウム、伯父さんが其處に居るのも、伯父さんが笑つてゐるのも能く見えらア』伯父『馬鹿ツ、當然だ、其の目のことぢやアねえ、此の品は何所の出で何といふものだといふことが分るやうにならなけりやアいけねえ』與『そんなことは譯はない』伯父『分るか』與『分るとも』伯父『それは感心だ、ぢやア此の鐵瓶は、何所の出だか分るか』與『分るとも、

鍛冶屋の出だ、立つた腰には瀬戸物屋の出だらう、どうだい伯父さん』伯父『あれだ、仕様のない馬鹿野郎……婆さん、其所で笑つて居ちやアいけない、お前が笑つて居るから、此の馬鹿が何時までも直らないのだ』婆『だつてお爺さん、與太郎を相手にして、向になつて腹を立つて居る其の顔を見ると、可笑くつて〳〵……』伯父『仕様のない婆さんだ、……宜し〳〵モウ宜いから表を掃け』與『ヘエ〳〵』與太郎表を掃き始めました伯父『コレ〳〵何故さう塵埃が立つやうな掃き方をするのだ、今日のやうな好い天氣で、風があつて砂の立つ時には、水を先に撒いてから掃くんだ』與『ヘエ……よく小言をいふ爺さんだ、爺さん婆さん毛唐人と……』○『ヤイッこん畜生、水を掛けやアがれ、何だつて乃公の足へ水を掛けやアがるんだ』與『ヘエ、貴下の足ですか、オヤオヤ』○『何がオヤ〳〵だ、何だつて掛けるんだ』與『左うでございませう、水を掛けたつて腐りやアしませぬから』○『何をいやアがるんだ、水を掛けて腐るものか』伯父『アツ與太郎の奴、往來の人に水をぶッ掛けたと見える……どうも誠に相濟みませぬ、何分是は愚な奴でございまして、御詫を申上げますからどうか御勘辨を……コレ與太、氣を附けろ、誰が往來の人に水をぶッ掛けろといつた、ナアお尾こしう』與『ヘエ、どうも相濟みませぬ、何分是れは愚な奴でございまして……』伯父『馬鹿をいふな、仕様のねえ奴だ、モウ宜い〳〵、其所は後で乃公が掃くから、お前は二階を掃いちまひな』與『伯父さんの前だけれども、二階を掃いちまつたら、小僧になつちまふだらう』伯父『あれだ、馬鹿のくせに理窟を言やアがる、二階の塵を掃けといふのだ』與『そんなら譯は分つてゐる、是から氣を付けて口をお開き』伯父『何を言やアがる、早く掃いてしまへ』與『ヘエー』トン〳〵トントン與『アッハッハ二階の方が宜いや、車が通らなくつて危なくない』伯父『あんな事を言つてやアがる、二階に車を通られて堪るものか……婆さんの前だが、あんな馬鹿にも困つたものだ、兄貴から頼まれて仕方がなしに引受けたのも、彼奴をどうかして物にしてやらうと思ふからだ、それだのにあれぢやあ見込がない……アッ、冷たい、二階から水が垂れて來た、彼奴ら又何か悪戯をしてゐるな……オ



イオイ與太、何か花活でも倒しやアしねえか』與『イエ、花活なんざア倒しやアしませぬ、水を撒いたんで』伯父『ナニッ水を撒いた……』與『へエ、先刻伯父さんが、此んな好ん天氣で、風の吹いて砂の立つ日には水を撒いてから掃けといつたから、今水を撒いた所で、是れでは足りませぬか』伯父『馬鹿ッ、あれは表のことだ、二階の疊の上へ水を撒く奴があるか馬鹿野郎、頭の上へ水が垂れるぢやねえか』與『滑つて能く流れませう』伯父『何を言やアがる、下りて來い』與『だつて二階へ上がれといふから上つたので、そんなに上つたり下つたりすると、米相場だと大變な騒ぎだ』伯父『生意氣なことをいふな、何をしてゐるんだ』與『へエ、今四方を見渡してゐるんで』伯父『何だつてそんな事をするんだ』與『若し火事があつたら知らせようと思つて……』伯父『餘計なことをするな、早く下りて來て、店へ行つて番をしてゐろ』與『へエー』



伯父『コレ〳〵何だつてさうドンドン下りて來て、火鉢を跨いで行くんだ、アレッ猫を蹴飛ばして行きやアがる…コレ〳〵何だつて火箸を鼻の孔へ突ッ込んで、チリンチリンいはせてゐるんだ馬鹿野郎、』世話の焼けた奴だ』與『ヘッ、爺いのくせに色々なことを言やアがる、表を掃けといふから掃きやア、二階を掃除しろといやアがる、厄介になつてゐると思へばこそへエ〳〵いつてゐるんだ、思へば食客ほど辛いものはないなア』伯父『何をダヅ〳〵いつてゐるんだ』與『へエ、此方のことで……』

（早口の大阪辯）○『ちやと御免やす』與『ヤア來たな……何だい伯父さん』○『私はなア、中橋の加賀屋佐吉から參じましたが、先達仲買の彌市が取次ぎました道具七品、あれは翁亭の茶入、箱は黒柿ぢやと思うとりましたら桑やさうで、木が違うて居りますさかい、念の爲ちやとお斷り申します。金瀾手は赤の茶碗、あの茶碗は赤味もあり、ねこかきもあり、良い茶碗だす、丸釜尻張阿彌陀堂三作の釜、納爵は宗丹にござります、並びにのんこの茶碗、古池や蛙飛込む水の音と申しまするは、風來坊正筆の掛物、猩々翁布袋の一軸、澤庵木庵隱元禪師張り交ぜの小屏風、あの屏風は私が旦那はんの旦那寺の兵庫の和尚が好みの屏

風にございますさかい、あの屏風にいたします、ちよと口上お取次を願ひます』與『ワツ ハツ ハイ面白いな、何だか知れないけれども、ペラ〱いふんで、聞いてる内に前の方を忘れてしまつた、其のへうぐのへうごツてえ所をモウ一遍やつてお呉れ』○『ハイ、私の言ふこと分らんかいな、私大阪者やよつてに、東京の人は言葉が分らんから是で悠くりいつてますのや、モウ一遍申しますさかい、あんばい聞いてお呉んなはれ、先達仲買の彌市が取次ぎました道具七品、あれは翁亭の茶入、箱は黒柿ぢやと思ふとりましたら桑ぢやさうで、木が違うて居りますさかい、念の爲ちやとお斷り申します、宜しいか、金海すはまの茶碗、あの茶碗は赤味もあり、ねこかきもあり良い茶碗にござります、丸釜尻張阿彌陀堂三作の釜、箱書は宗丹にござります、並にのんこの茶碗、古池や蛙飛込む水の音と申しまするは、風來坊正筆の掛物、狸々翁布袋の一軸、澤庵、木庵、隱元禪師張り交ぜの小屏風、あの屏風は、旦那はんの旦那寺の兵庫の和尚の好みの屏風にござります……』與『ワツ ハツ ハイ其所だ〱面白いのは、モウ一遍言つて見な』○『私物貰ひぢやおまへん』



伯母『コレ〱與太郎、何をいふんだえお前は、お客樣に向つて大きな聲で笑ふといふ事がありますか』與『だつて伯母さん、屏風が和尚になつたんだとさ。化物屋敷だね』伯母『そんなことをいふものではありませぬ……入らつしやいまし、どういふ御用でございますか、是は愚者でございまして、何にも分りませぬ、どうか[illegible]しやつて下さいまし』○『難儀やなア、貴下お内儀はんだすか、今此の人に二遍言うて、口が酸くなつてしまひました、モウ是れツきり言はんさかい、あんぜう聞いてお呉んなはれ、私は中橋の加賀屋佐吉から參じましたが、先達仲買の彌市が取次ぎました道具七品、あれは翁亭の茶入、箱は黒柿ぢやと思ふとりましたら桑ぢやさうで、木が違うて居りますさかい、念の爲ちやとお斷り申します、金海すはまの茶碗、あの茶碗は赤味もあり、ねこかきもあり良い茶碗でござります、丸釜尻張阿彌陀堂三作の釜、箱書は宗丹にござります、並にのんこの茶碗、古池や蛙飛込む水の音と申しまするは、風來坊正筆の掛物、狸々翁布袋の一軸、澤庵木庵隱元禪師張り交ぜの小屏風、あの屏風は私の旦那はんの旦那寺の兵庫の和尚が好みの屏風にござります、あの屏風にいたしますさかい、ちよと口上お取次ぎ申します』伯母『オヤ〱ハイ〱、誠に好いお天氣でございまして、それが何でございま

すよ……』與『ヤーイ伯母さん、何言つてゐるんだい、モウ歸つちまつたよ』伯母『オヤオヤさうかい、厭だよ』伯父『オイオイ婆さん、何をしてゐるんだ、與太郎なら仕方がないが、お前が取次に出てどうしたんだ、分らないのか』伯母『イ、エ、先方様の口上はチヤンと分つて居りますよ』伯父『分つてるなら宜いが、何の使だ』伯母『中橋の加賀屋さんからお使ひで』伯父『ア、さうか』伯母『別に大して用といふのではないので仲買の彌市さんといふのがございませう』伯父『其の彌市がどうしたのだ』伯母『何でも其の彌市さんといふ方が取付き物がして、氣が違つたのださうで』伯父『ナニ彌市が氣が違つた、そんな男ぢやアないのだが、餘程騷ぐやうかい、病院へでも入れたんだらうな、早速見舞に行かなくつちやならないが、病院は何所だといつてゐた』伯母『何でも兵庫ださうで』伯父『ナニ兵庫、大層遠い所の病院へ入れたものだな』伯母『イ、エ病院ぢやないやうで、阿彌陀堂へ入つたのださうですよ』伯父『妙な所へ入つたものだな』伯母『それで旦那寺の和尚様に遲々と布袋様を呼んで來て貰ひたいといつたさうで』伯父『ウーム、大分狂つてゐるな、可哀相に』伯母『食物なんぞも



大分變つて居るので、澤庵に隱元豆が食べたいんださうで』伯父『變な物を食べたがるな』伯母『さうかと思ふと、近海物のお魚が食べたいといつたり、無花果だの酢甘も食べたい、序だから柿も取つて貰ひたいといつてゐるさうで』伯父『をかしいな』伯母『それで瓢簞を箱へ入れた所が入り切らないから茶碗を入れてやつた所が、逆つてるといふので叩き付けて壞してしまつたさうで』伯父『何だか些とも譯が分らないな』伯母『私には何だかサツパリ分りませぬ』伯父『それから何と云つたえ』伯母『それから屏風を立つて、眞赤になつて猫に引ツかゝれて、翁の面を被つて、踊を踊つて歩いて、のんこのしやアですとさ』伯父『ウフツ何をいふんだ、お前の言ふことは乃公には些とも分らない』伯母『それは貴下狂人のいふことですもの、何を言ふか分りやアしませぬよ、先方様の口上の通り言つてるんで、何でも其の道具七品とかをどうとかして、古池へ飛込んでしまつたんですつて』伯父『何だ彌市が古池へ飛込んだ、それは大變だ、あの男には道具七品といふ貸があるんだが、買つて飛び込んだかしら』伯母『イイエかはず飛込みました。』

癇癪が若し起つたら鏡にて己が觀相してみるがよし

家庭笑話

□子供と肝油

母（女客に）『肝油を服ませますには隨分骨が折れますよ。その度に十錢づつやつてやつと服ませるのですから……』

客（傍の子供に）『坊ちやん、そんなにお金を戴いてどうなさいます？』



子供『溜めるの……』

客『溜めてどうなさいます？』

子供『お母さんがまた肝油を買ふの』

□聞きたくない

壇上の辯士、時計を見ながら、『エ、、私の喋舌る時間は、僅か十分間しかないのです。何處から、始めて好いか解らないな』

その時彌次『九分目から始めろッ！』



□平素が肝心

細君『衞生の本に出てゐましたが、眠つてゐる間は、成る丈け口を塞ぐやうにするのが、身體の爲にいゝさうですね。妾もこれからさうして見ようと思ひますわ』

亭主『いよいよそれに取りかかる氣なら、先づ以て、起きてゐる間から、少しづつ行つて見たらどうだい』



□御挨拶

或る男、友達の家へ招かれた處、友達の細君はちよつとした美人だつたので、御馳走になつた後、お世辭もこめて、

『君の細君はなか〱美人だね。君が嫉かないのが不思議だテ…』すると友達、

『いや、實は大いに嫉くのだ。で、妻が心を動かす樣な（立派な）人は、斷然饗應にも招かないことにしてゐるのだ』



□凸山の買ひ方

教師『凸山さん、二十錢で一本三錢の胡瓜は何本買へますか』

凸山『七本買へます』

教師『一錢足りないことはありませんか』

凸山『一錢位は負けさせます』

□碁打ち

亭主『今度建てた借家は、成るべく碁打ちに入つて貰ひたいものだ』

女房『何故です？』

亭主『滅多に身體を動かさないからさ』



□惡い癖

父親『コレ、御飯を食べるのに、何故胡坐をかくのだ、癖になるぞ』

息子『チヤンだつて、胡坐をかくぢやないの』

父親『俺は、モウ癖になつちやつたんだから、どうでもいゝんだ』



姫路城の人柱

渡邊默禪作
井川洗厓畫

切腹と打首

姫路百萬石の大守に封ぜられた德川家康の外婿池田三左衞門尉輝政が、家康の內意を承けて慶長戊申十三年、居城改築の大工事に着手してから六年目に病歿し、嫡男武藏守利隆、その後を繼いで工事を進め、やうやく九分通の竣工を見たといふ慶長甲寅十九年、春の三月初、建築主任の普請奉行日置織部、矢部內匠の二人は、思ひもよらぬ職務上の責任から、切端詰つて切腹しなければならぬ破滅になつた。

春雨のしとしとと降る或る夜ふけ、大工頭の岡部八右衞門は織部の屋敷に呼出された。いつもと違つて庭園から飛石傳ひに用人が灯をとつての案內、沈丁花や連翹木蓮の闇に匂ふなかを拔けて、奧の茶寮に――見ると同僚內匠も同席してゐる。爐の釜には松風の音もなく、陰鬱な短檠の火にうつる二つの顏が、いつになく苦い色に曇つたのを氣づいた時に、八右衞門はどうした譯かと怪しんだ。

『エ、た、た、只今はお召を……な、何か急の御用でも……』

茶立口の方から入つた八右衞門は、恭々しく首をさげた。平生無口の、しかも吃勝の彼は、是だけの挨拶をするのも、氣づまりで面倒臭かつた。

『おゝ、夜陰惡路の所、よう參りくれた。もそつと近う。』織部のへの字に鹹めた口が先づ解けた。

『はい。』一膝いざり出す。

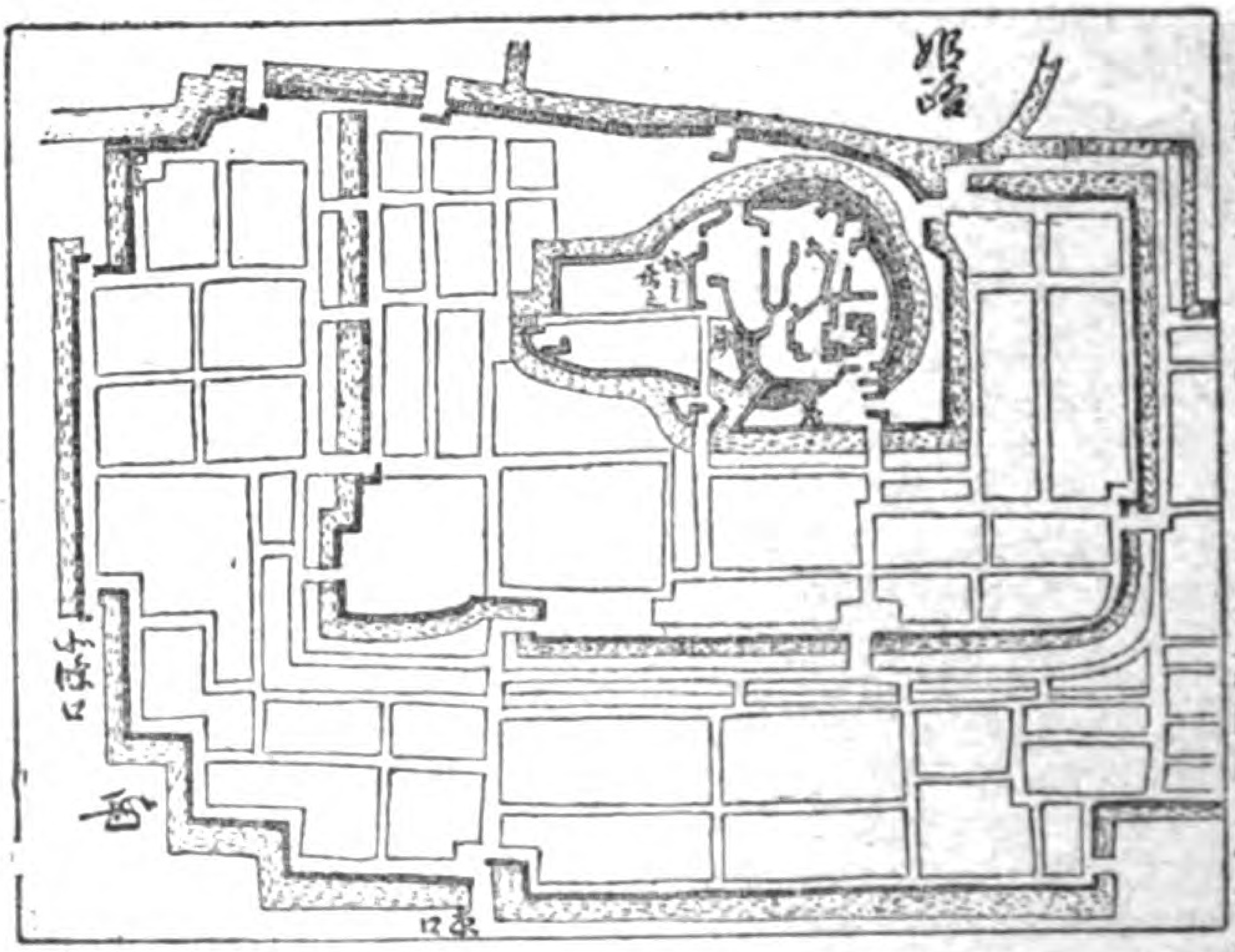
『八右衞門。昨年の春であつたのう。其方を始め二人の弟子に足留を申附けい、城門外一歩も出すことは罷り成らぬぞと御家老からの嚴命に違背もなりかね、憫然ながらこの正月にも歸宅を許さずして、作事小屋に年越をいたさせたやうな仕誼。ちようど一年餘りにも相成るが、少しも上を怨み、身の不自由を喞つ體もなく、晝夜をかけての必死の骨折、いつもにこくと悅びの笑顏を見せて働いてくれる。その精勤に對してはかく申す

織部、また御同席の内匠殿も共に心から感じ入つてのう。御前體へも屢ゝお取做いたいたゝめ、殊の外の御滿悅、この初春、御祝儀とあつて御紋服一領、金三千疋の下され物ぢや。このことは其方有難く心得居るであらうな。』

『はい。け、け、結構な物を頂戴して、あ、有難く思はないやうな者なら、そ、それは日本人ではござりませぬ。は、働かせるための御用、働くから御褒美も下さる。下さるから働く、あ、當然で。へへゝゝ。』

吃つた詞で頓狂なことをいつては笑はせる、それが飄逸な八右衛門の平生であつた。奉行だちが何か叱らうとして險しい顔を見せても、不生頂な彼の口から飄が泡でも噴くやうにぶつぶつとこぼれて出る諧謔をくらはされると、縒をかけた顔の筋は笑ひの爆發にぷツつと切れ、せつかく言はうとした叱言も瓦斯のやうに放散するのが例。けれどもこの夕ばかりは二人とも眉に寄せた小皺をそのまゝ、くすりともしなかつた。

『むゝ。日本人でない？　いしくも申した。その魂を見込んだればこそ、我等が上へも推薦いたいて頭に取立て、ちやうど七年の間、一心合體の働きも共にいたいて參つたのぢや。この三人は申さば鼎の脚、一つ缺けても鼎は立たぬ。いや、大切なる城普請は成就せぬのぢや。所がのう、八右衛門。此處に面倒千萬なる事が差起つて、その鼎の三脚ともに、碎けなければならぬ破滅に相成つた。誠に殘念至極の成行でのう。』



織部は聲を震はせた。と内匠はそれを裏書するやうにほうと長い太息の音を聞かせる。

『へえー。』八右衛門は訝かしさうに『まるで、な、な、謎のやうなことを……か、か、鼎の脚が三本碎けると仰りますと、さ、さ、三人ともに、な、何か不調法の筋あつて、や、役目、ふ、不首尾になつたと申すやうな。』

『いや〳〵、左様な輕いことではない。我等兩人は切腹、其方も追つて打首といふ程の一大事ぢや。』

織部の語氣は弱く、且つ悲しげに響いた。

『ホヽー。』八右衛門はぽうと二人の顔を瞻めて『せ、せ、切腹。そ、それは一體、何のお咎で。』

『されば。』内匠は促込んだ調子で『最初其方に御門を申附け

世の中に對する希望

伯爵　有馬頼寧

まづ世の中に對する自分の消極的態度としては、人の惡口をいはないと云ふ事を心掛けたい。この點、我が國は外國のそれとは著しく相違してゐる。外國人は他人の行動を批評する際には、豫め『何故あの人はあゝいふ行動をとつたか』といふことを十分に考察して、然る後眞面目に批評を下すのが常である。

これに反して、我が國では他人の行動や思想に對し、これを考察し理解しようとする態度に出でないで、動もすれば舊い因襲的な考へを標準として、直ちに他の惡口をいつたり、冷罵を浴せかけたりする人が多い。

現今の新聞紙をみても、我が國民の弱點は遺憾なく露はれてゐる。事に大小の差こそあれ、殆ど悉くが人の惡口で終始し、一般讀者も亦それを歡迎してゐる有樣である。

×

一體、我が國の人達は、何故かう惡口をいひたがるのであらうか。この問題は十分に研究して、お互にかうした國民的缺陷を矯正するやうにしたいものである。

私の觀る所によると、これには、たとへ、どんな無理をしても自分が偉くなりたい、卑怯な態度を以てしても自分が他人に勝ちたいといふ卑屈な考へが根柢をなしてゐるのではないかと思はれる。

偉くなりたいとの考へは、誠に結構であるが、偉いといふ事は、決して他人と比較しての事ではない。釋迦にしても基督にしても、乃至は孔子にしても、誰と比較して偉いと云ふのではない。これは絕對的のもので、比較上の問題ではない。

これを考へずして、徒らに他人の缺點を探



い出し、これを墮落しても自分が勝たうといふ卑屈な考へをもつ事は、決して自分を偉くする所以ではない。かやうの考へは全然棄てゝ、自分自身のほんたうの力で押し通す男らしさ、さういふ意氣と純眞さとがありたい。

×

この意味から、かの宇治川の先陣爭をした佐々木高綱の爭點を一の美談として、我が小國民の腦裡に勇氣と智略とを培ふ教材とするやうな態度は、私には贊成し難い。

自分の力では到底及ばぬと分ると、他人の缺陷を暴露しても、これを追越さうとする態度の如き、謂ゆるスポーツマンシップより相距つる遠しで、かゝる行動を賞揚するやうなことでは、所詮我が國民の缺陷を矯正することは出來ないと思ふのである。

他人の事業や運動に對しても亦然りで、それを十分に理解することは難しいとするも、それが何等か社會的に目的を有つものであるならば、相當な結果を見るまで待つといふ雅量が欲しい。

世間には良い看板を掲げる事業でも、その實裏面に於て又その結果に於て、甚だ、面白



有馬賴寧伯



くないものもあるし、或はその反對に、表面穩かならぬ名前を掲げてゐる運動でも、その結果は案外に好いものもある。たゞ自己の小さな感情や因襲に囚はれて、始めから惡くいつてかゝるやうな態度は、どうしても大國民の襟度とは謂はれない。

要するに、我が國民は他人の行動に對して、公正なる眼を以て考察すると共に、寛容の態度を以て姑らく結果を待つといふ雅量が欲しいと思ふのである。

×

更に一歩進んで、世の中に對する積極的の態度として、私の力說したいのは、我が國民がもう少し人のため世のためになる事をするやうに努力して欲しいと云ふことである。

勿論、われ〳〵の仕事といふものは、結局は自分一人の利益に止まらず、直接間接、世のためになるものであると思ふけれども、更に一歩を進めて、社會事業なり國家事業なりに、奮つて力を注いで欲しい。

社會事業といふと、一般に大きな金がかゝる大事業のやうに考へるのが普通であるが、私の考へる所では、往來に轉がつてゐる石を拾つて、道往く人の步くに都合のよいやうにしてやると云ふやうな、ほんの小さな事でもそれが立派な社會事業であると思ふのである。

×

米が足りない、米が足りないと、來る年も來る年も大騷ぎをする我が國民が、その大切な米を平氣で棄てゝ顧みない事實がある。足、一度汽車の中に入れば、私の言ふ所に誤りのない事を讀者は發見されるであらう。こゝのクッションの下、かしこの隅、甚しいのになると、足の踏み場もないほどの辨當の殼で埋まり、而も貴重な米が箸をつけたばかりで棄てられてゐるのがある。これをボーイは箒で掃き集めて、打棄つてしまふ。

なる程、一人の棄てる量は少いかも知れないが、全線に亙つては、實に夥しい大量に上ることを想はれる。

これを國家的の立場から考へると、決して輕々に看過すことは出來ない。この場合、少し心ある者ならば、その處置についても、今少し考慮すべきであらう。

から考へて來ると、社會事業といひ國家事



業といふも、決して堅苦しいものではなく、日常われ〳〵の行動の中にも、世のため人のためになる事が決して少くないことが判るであらうと思ふ。

×

單にそれに止まらず、よい運動であるとか、よい思想であるとかいふものに對しては、自ら進んで之を助長する態度がありたい。

我が國では、今日の狀態からみると、たゞ惡いものを撲滅する事にのみ沒頭し、犯した罪を責めるに汲々としてゐるやうであるが、石川五右衞門の歌にある通り、何時の世になつても、惡い者は絶ゆることはない。

かやうな消極的な態度よりも、寧ろよいものを助長することに努めて、惡いものを自然淘汰してゆくといふ態度の力が、より大切ではないかと思ふ。

併し我が國では、前にも述べた如く、よい運動といふものが、どうも理解され難く、社會事業がはか〴〵しく發達しない。これは社會事業を眞面目にやつてゆくといふやうな人は、とかく必要な金をこしらへることが拙いといふのも一因であらうが、かやうな事業に金を出す謂ゆる富豪の態度も甚だよろしくない。

『事業そのものは解らぬが、度々訪ねて來るし、趣旨も惡くはないから、まア少し位は出してやつてもよい』と云つたやうなのが、我が國富豪の一般の態度である。

この點、米國あたりは流石に進んでゐる。ロックフエラーにしてもカーネギーにしても、社會事業に對する調査課といふものを設け、この事業はよい事業だ、大いに後援する必要があると判ると、自分の方から進んで寄附を申出る。かうした所にも、我が國民の缺陷が露はれてゐるのである。

×

われ〳〵が生活してゐる社會は、どうしても多人數共同してゆかねばならない。それには各人が心掛くべき事は種々あると思ふが、私は以上最近著しく感じてゐる一二の私見を述べて、世の御參考に資したに過ぎない。お互に消極、積極の兩方面から、十分に反省して、我が國家をして世界各國に範を垂れるものたらしめるやうでありたいと切に希ふ次第である。(完)





海峽の獅子王

花岡洋

1

一千八百十一年四月下旬の或る日——カルカツタ總督のミント伯爵に、面會を申込んだひとりの青年があつた。

紹介狀もなく、服裝もひどく粗末だつた。

勿論門衛は、この無名な青年を、一言のもとに追ひ返さうとした。が、青年は動かなかつた。

秘書のバーカンは、用件の内容を語れと語つたが、それも直接に申上げるのだと語らなかつた。叱つても脅しても駄目だつた。

仕方がないので、秘書は恐恐と、これを總督に傳へた。

書齋の肘掛椅子に凭つてゐた伯爵は、これを聞くと、ひどく不氣嫌に云つた。

『おやなんだね、その男の用件は、君の手には負へないと云ふんだね』

『いゝえ、決して……』秘書はひどく恐縮した『いろ〳〵と云つて聞かせましたが、どうしても閣下に直接申上げるのだと云ひ張つて動きませんので……、全く銅像のやうに頑固な奴なんでございます……』

『で、君は秘書の役目を捨てゝ、いそ〳〵と取次いだと云ふんだね』

伯爵はます〳〵皮肉だつた。

『何とも申しわけのないことでございます……しかし、何分にも、大英國興亡に關する一大建言だなどと、大變なことを申しまして、全く手に負へないのでございます』

『どんな男だ？』

『ハイ、まだ青年なんですが、見たところ別に危險な人間には考へられませんので、これは閣下から直接に叱つて頂く方がいいと思ひまして……勿論、警戒は充分に遊ばさなくてはなりませんが……』

『もう分つた！』

伯爵は、もどかしく叫んだ。

『連れて來たまへ』

『では、通しましても……』
『君が、さう云ふぢやないか――會つてやる』
『それでは應接間の方へ……』
『こゝでかまはない、但し二分間だぞ。早くしたまへ！』

2

やがて、ガーバンが案内して來たのは、二十八九歳の青年であつた。服装は見る影もなかつたが、中肉の全身はキリリと緊つて、顔立も整つて見えた。
『これは總督閣下ですか、大變な失禮を願ひまして――』
青年は白い額をあげて、うや／＼しく一禮した。
伯爵は、苦々しく一瞥したまゝ、默つて椅子をすゝめた。
『私はラッフルスと申しまして、東印度會社の書記でございますが……』
『用件だけにしてくれたまへ』伯爵は、叩きつけるやうに云つた。『わしは、君が誰であつてもかまはないのだ――それに、君に與へた時間は、あと九十秒しかないんだぜ』
青年は、椅子に腰を下して、ユツクリとした口調で云つた。
『では、お伺ひいたします。最近英本國に於きましては、馬拉加放棄説が持ち上つてゐるやうですが、實は、これに對する閣下の御意見を承りたいのでございます』
『………』
伯爵は唇を嚙みしめて、青年を見つめた。



――瘴癘蠻地の故を以て、馬拉加の植民政策の廢棄論が、この一月以來、英國の朝野に於て、重要論議せられてゐるのは事實であつた。そして、その最後の決定は、カルカッタ總督の意見を參酌するといふのであつた。が、これに對して、最初から絕對不賛成の伯爵は、再度ならず反對意見を本國に申し送つた。しかし、それは一つの形式に過ぎなくて、政府筋に於ける大勢は、すでに決定的の運命にあつた。それがために伯爵は、政府の盲を嗤ふと同時に、最近に到つては、鬱々たる不快さに、辭職しようとまで考へてゐるのであつた――。

――暫くして伯爵は云つた。

『わしの意見が何になるんだ――政府が廢棄するとなれば、それ以上何もないぢやないか……』

逞ましい眉をグッとよせて、吐き捨てるやうな伯爵の調子には、押へきれぬ悲憤と限りない不滿が、明かに含まれてゐた。

『御尤もです』青年は明快につゞけた。『然し、一度も地中海を下つたことのない人々に、何が分るんでせう――馬拉加及び海峽地方に、無限の寶庫の藏されてゐるのを、彼等が何で知るものですか、彼等の論議は、結局机上の空論に過ぎないのです。私は閣下が、屢々本國の朝野に向つて、反對の聲明をくり返されたことは、よく承知して居ります。と、同時に、この問題に關しては、閣下の意見こそ絕對のものであります……從つて誰が何と申しましても、閣下はあくまで頑強に主張されなくてはならないと、私は信ずるのであります』

青年の、一語、一語に、伯爵の表情は、明るくほぐされてきた。

『ぢや君は、わしの意見を認めてくれるんだね』

『信じて疑ひません！』青年はキッパリと云つた。『私は、東方政策に於ける政府當局の優柔不斷――而も、和蘭政府の顏色ばかりを窺つて、閣下を孤立無援に陷れて顧みざる、彼等の意志が奈邊にあるかを知るに苦しむものであります』

そして、青年はポケットから厚い一束の書類を取り出して、

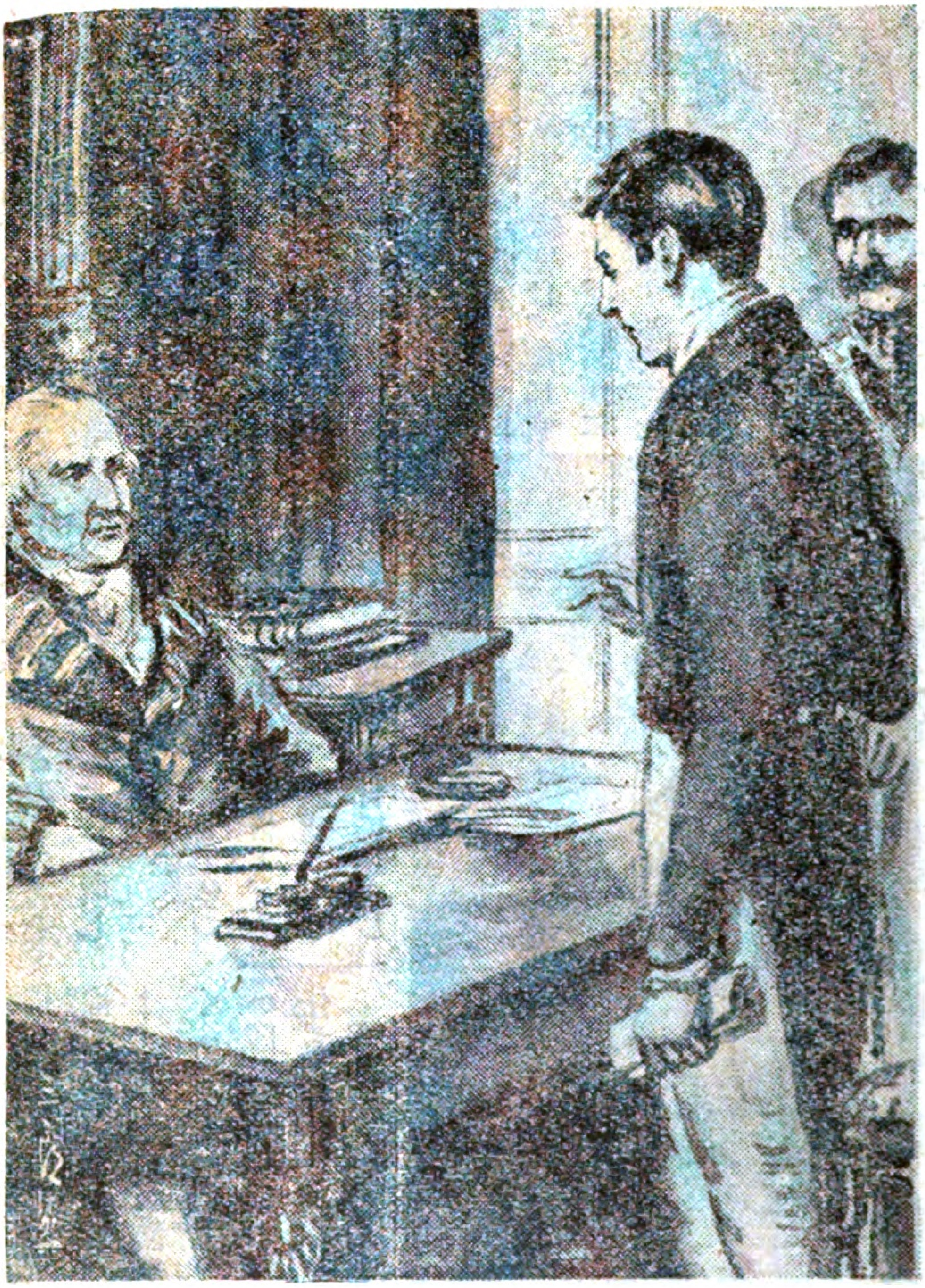
『これは、三日がかりで書きあげた、私の建白書です。一應閣下の御覽を頂いた上、次第によつては、本國政府へ叩きつけてやるつもりなんですから……』

『ありがたう！』伯爵は、その書類を握りしめて叫んだ。『君はわしのたつたひとりの味方だ。しかし、ひとりでもわしを知つてくれる者があることは、わしはどんなに心強いことか――あくまでやるよ、安心してくれ給へ。』

――伯爵の感激は當然であつた。問題の發生以來、伯爵の反對說を認めてくれるものは、本國は勿論、この印度や東方の地に於てさへ、唯ひとりもなかつた。すべて嘲笑と冷罵の限りであつた。してみれば、この名もなき青年の出現は――而も、深い理解と火の如き情熱とは、總督にとつては、百萬の友にもまして嬉しかつたのだ。

やがて青年は立ち上つた。

『大變に御無禮いたしました……どうか總督閣下、あくまで主



張を貫徹して、東方政策の礎を築いて下さい……では失禮いたします』

青年が出て行かうとするのを、伯爵はあわてゝ呼びとめた。

『君――ラッフルス君』總督は、なつかしさうに、始めて青年の名を呼んだ。『君は、何時までも此處に居てはくれないかね』

『閣下さへ許して下さるなら――』青年も微笑んだ。この重大問題に比すれば、會社の解雇などは何でもありません』

『ぢや、さうしてくれたまへ！』

伯爵は、いきなりかけよつて、青年の腕を掴んだ。『何時までもわしを援けてくれ給へ』

總督の頬には、熱涙が止度もなく溢れるのであつた。

3

青年の名は、サー・スタンフオード・ラッフルスと云ふ。彼は、一千七百八十一年の七月に、西印度ジャマイカ沖を航行中の、一英船内で、呱々の聲をあげた。父は同船内の名もなき火夫であつた。

十八才の秋、彼は、カルカッタの東印度會社の見習事務員として雇はれたが、彼の胸には、この時からすでに、蠻地征服の野心が、鬱勃として燃えあがつてゐたのであつた。當時英國の東方政策は、全く柔軟極るもので、すべてが、和蘭の屬國的行動に過ぎなかつた。たま〳〵この時に當つて、馬拉加放棄説が論議せられるに及んで、彼は、政府の盲目と無能とを痛歎して措く能はず、遂にミント總督の門を叩いたのであつた。が、ミント總督は、一見に

掠するシンガポールの英國領有に反對するのは當然であつた。それだけ當時の和蘭人はシンガポールの眞價を知つてゐた。然し、ラッフルスは和蘭より何物をも奪つたのではなく、何處の國にも屬せざる土王の手から購つたのである。和蘭の對英運動は畢竟和蘭對ラッフルスの爭鬪であつた。こゝにあつてラッフルスの奮鬪は、千鈞を負ふの姿である。

しかし彼の味方は次第に增えた。最初は反對の頭目であつたラスチング侯も彼のために熱心な擁護者となつた。而して遂に英國は南洋に於て蘭人の優越權に對抗するの方針をとることとなつた。この英蘭の爭ひは一千八百二十四年まで繼續されて、結果は英人の勝利となつた。英國の勝利は即ちラッフルスの勝利であつた。(若しこの爭鬪に於て、英國が破れてゐたならば、今日の亞細亞地圖は、今日と異る色を以て彩られてゐるであらう)

が、多情多恨！ この時すでにラッフルスは、心身の自由を缺くまでに衰へてゐた。かくて一千八百二十六年の九月、彼は腦充血を以てこの世を去つた。享年四十有五、前途洋々たる身が、その血も肉も祖國のために捧げてしまつたのである。而も彼はシンガポールより歸國の海上で船火事のために、重要書類を盡く燒かれてしまひ、剩つさへ彼の墓標は數十年間草叢裡に隠れて、何人も之を知る者がなかつた。

あゝ、不遇の偉雄ラッフルス卿！

現在のシンガポールの殷賑を見る人は、百年前の蠻地シンガポールを、恐らく夢想だにし得ないであらう。

勿論元々一世紀、人口百の獅子島が、六十萬になつたことは必ずしも驚くに足らぬ。否よ神戸及び横濱の發達を……その間僅か數十年にあらずやと云ふ者があるだらう、然し神戸や横濱は東亞中心の大海港であり、一大帝國の玄關口である。が、シンガポールは英本土より萬里懸隔の地で、而も草野森林中の一蠻島にすぎなかつたのである。假りに今、草昧たる過去のシンガポールを知れる百歳の老翁ありとして、現在のシンガポールを見るなれば、恐らくシンガポールの名を以ては呼ばないであらう！

『一たびこの地に吾人の手を置かんか、シャム、カンボチャ、交趾支那その他を通じて支那等に制抑の手を張るを得べし』

『この地は實に英國の全土よりも更に大なる價値を有す』

おゝ、すでに一世紀前に敢てこの喝破をなせる、先覺者ラッフルス卿よ！

南洋に航する人々は、白い砂と緑の椰子の打つゞく、タンジョンルーやタンジョカトンの海濱を眺めつゝ、シンガポールの大市街に入るとき、青龍樹しげるエスペラネード畔にビクトリヤ女皇記念館の前に、居然として立つ一大銅像を見るであらう、これ不遇の英雄、薄倖の偉傑、我がラッフルス卿である。百年にして其功を認められ、光榮さんとしてこゝに輝く。

研磨殺擊の海岸に立ち、毅然として萬檣參差の港頭を眺めて立つラッフルス卿！ あゝ、今や卿は[illegible]つゝあらう。(完)

高級帶勳著名長壽者番附

東

番付	肩書	勳章	氏名	年齢
横綱	[illegible]		[illegible]	
大關	[illegible]	○	田中光顯	八六
關脇	貴族院議員從一位侯爵	⊙	淺野長勳	八六
小結	正三位理學、藥學博士	△	長井長義	八四
前頭	陸軍大將正二位子爵功二級	⊙	大島久直	八一
前頭	陸軍中將正三位男爵功三級	⊙	沖原光孚	八一
前頭	貴族院議員正三位	△	淺田徳則	八一
前頭	總理大臣禮遇正二位子爵	○	清浦奎吾	七九
前頭	宮中顧問官正三位	⊙	長崎省吾	七九
前頭	貴族院議員從二位	⊙	服部一三	七八
同	[illegible]	⊙	松室致	七七
同	樞密顧問官從二位子爵	⊙	金子堅太郎	七六
同	樞密顧問官從二位男爵理學博士	△	山川健次郎	七六
同	前特命全權公使正二位伯爵	○	戸田氏共	七五
同	陸軍大將從二位男爵功二級	⊙	木越安綱	七五
同	陸軍大將從二位功二級	⊙	大迫尚道	七五
同	樞密顧問官正三位男爵	⊙	田健治郎	七四
同	海軍大將正二位男爵功二級	⊙	出羽重遠	七四
同	陸軍中將正三位功三級	⊙	仙波太郎	七四
同	[illegible]		後藤[illegible]	七二
同	海軍大將正二位男爵功一級	⊙	瓜生外吉	七二
同	前鐵道大臣從三位	△	元田肇	七一
同	樞密顧問官從三位男爵	⊙	富井政章	七一
同	前陸軍大臣陸軍中將正三位功三級	△	楠瀬幸彦	七一
同	陸軍中將正三位功二級	△	長岡外史	七一
同	前司法大臣正三位	⊙	尾崎行雄	七〇
同	陸軍大將從二位功二級	⊙	松川敏胤	七〇
同	正三位醫學博士	△	弘田長	七〇

行司

肩書	勳章	氏名	年齢
元帥海軍大將正二位子爵功二級	○	井上良馨	八四
元帥陸軍大將正二位伯爵功一級	○	奥保鞏	八三
總理大臣禮遇從三位子爵	○	高橋是清	七五
大臣禮遇正三位	⊙	犬養毅	七四

年寄

肩書	勳章	氏名	年齢
從四位男爵實業家	⊙	大倉喜八郎	九二
正三位子爵實業家	⊙	澁澤榮一	八九

西

番付	肩書	勳章	氏名	年齢
横綱	總理大臣禮遇正二位公爵	●	西園寺公望	八〇
大關	前樞密顧問官正二位子爵	○	曾我祐準	八六
關脇	樞密顧問官從二位子爵	⊙	石黒忠悳	八四
小結	樞密顧問官從二位男爵	⊙	久保田讓	八二
前頭	海軍大將從二位男爵功二級	⊙	日高壯之丞	八一
前頭	海軍々醫中將從二位子爵功二級	⊙	實吉安純	八一
前頭	陸軍大將從二位男爵功二級	⊙	鮫島重雄	八〇
前頭	陸軍中將從三位男爵功四級	⊙	山内長人	七九
前頭	前特命全權大使從二位子爵	⊙	栗野愼一郎	七八
前頭	總理大臣禮遇正二位伯爵功一級	○	山本權兵衛	七七
前頭	樞密顧問官正二位男爵	⊙	九鬼隆一	七七
同	樞密院議長從二位	⊙	倉富勇三郎	七六
同	樞密顧問官從三位	⊙	江木千之	七六
同	樞密顧問官從二位男爵	⊙	平山成信	七五
同	樞密顧問官從三位男爵	△	古市公威	七五
同	海軍主計中將正三位男爵功二級	⊙	村上敬次郎	七五
同	前遞信大臣正四位	△	箕浦勝人	七五
同	前遞信大臣從三位	⊙	武富時敏	七四
同	陸軍大將明治神宮々司從三位功三級	⊙	一戸兵衛	七四
同	元帥陸軍大將正二位子爵功二級	○	上原勇作	七三
前頭	侍從長從二位伯爵	○	珍田捨巳	七三
同	大臣禮遇正三位男爵	⊙	山本達雄	七三
同	樞密顧問官正二位子爵功二級	○	齋藤實	七一
同	前陸軍大臣陸軍中將正三位功三級	○	大島健一	七一
同	樞密顧問官正三位	△	櫻井錠二	七一
同	陸軍大將從二位功二級	△	秋山好古	七一
同	正三位醫學博士	△	小金井良精	七一
同	陸軍大將正二位男爵功二級	⊙	内山小二郎	七〇
同	海軍大將從二位功三級	⊙	吉松茂太郎	七〇
同	從三位法學博士	△	土方寧	七〇

備考 ◎印大勳位菊花章頸飾 ●印同菊花大綬章 ○印勳一等旭日桐花大綬章 ⊙印同旭日大綬章 △印同瑞寶章（近藤 [illegible] 雨 作）



福岡 熊本 對縣柔道大試合

釘本祐仲

時は昭和二年十一月十三日。夜來の雨全く霽れて、秋の陽うらゝかに、春日原頭、颯々たる金風肌に寒し。

時にいづくよりか人のどよめき次第に聞え來ると覺えしに、見る見る押寄する人の波、蜿々長蛇の列を作つて會場さしてつめかける。これなん、熊本縣對福岡縣の對縣柔道試合である。

およそ近來多數の觀衆を惹きつくるもの、野球試合に如くものはないが、それにしても神宮球場に於ける昨秋の早慶戰及び慶明戰等を除いては、觀客萬を以て算することなどは極めて稀であつた。

然るにこの對縣柔道試合は、單に一地方の試合なるに拘らず、その觀衆を容るべき場所に困じ、つひに福岡市外の春日原グラウンドに、優に一萬三千の觀衆を收容し得べき假道場を建設したのだつたが、此の日の觀衆の多數なる、さしもの大道場もハチ切れんばかり、およそ東都の柔道界と雖も、かばかり多數の觀衆を惹き付けたことはないであらう。道は昔より武道の盛なる、福岡熊本の兩縣だけに、斯の如き柔道ファンを吸收し得たものであらうが、そこにはまた更に一つの重大な原因が潛んでゐることを知らなければならない。



即ち、熊本は、一昨年も、そして一昨々年も、共に福岡軍の爲に無慘な敗北をした。さればこそ、今度は、如何にしてもその慘敗の歴史を雪ぐべく、縣當局は、先頃來、東都の柔道界をはじめ全國に目をくばつて、精鋭を拔擢せんとし、現に、前高

勝の主將小谷五段を熊本五高に贈し、更に長崎高商の三石五段を縣下鹿本中學に、前武德專門學校主將山根四段を熊本中學に迎へて、此處數ヶ月間火の出るやうな猛練習、今年こそ敵福岡の陣容木ツ葉微塵、敵の前衞中堅や如何に強くとも、我れに牛島の梟勇あり、試合よ來れ！　と、應援團その他、萬端の用意をさをさ怠りなく、當日を待つたのであつた。

○

やがて、正午、一群、隊をなして會場に詰めかけるを見れば、これが熊本側應援團千五百名、意氣揚々と南側棧敷に陣取つて場内一段の氣勢を添へた。

見渡せば早や場内立錐の餘地もなく、さすがの大道場も人を以て埋まり北側役員席には、講道館長嘉納治五郎氏以下永岡、飯塚、磯貝の各八段、佐村、宮川の兩七段など斯道の大家、名家、綦羅星の如く控へてゐる。

『どうぢや、豫想は？』

『根つから、分らんぞ。今度ばかりは』

『何故？』

『何故云うて、熊本も今年は揃つとるぢやないか。見い、小谷澄之五段のう、まだ二十五ぢやと云ふが、去年までそれこそ東京で鳴らした腕前ぢや云ふまでもないわさ。福岡の大將西五段はもうとうに三十を越してゐるからのう。あぶない！　片方は若い。息が續く、あぶらの乘つた眞盛りぢや』



遠征の熊本軍！出迎への福岡軍！　博多驛に相會せる兩軍の心中、潜める必勝の意氣や正に壯絕！（向つて左側熊本軍、右側福岡軍。）

『たしかにさうぢやが、此方（福岡）にも須藤金作が居る、梶四段もゐるぞ、そいに先鋒隊は福岡に、自信があるのぢや。先づこの先陣で、敵の中堅に喰込まうちうんだ』

『大きに、左樣、上の方は、先づ双方互角、先陣は福岡がすぐれてるが、中堅は、熊本に強味がある。何せ、牛島ちう大あばれものがズン出てるもン。彼の強いこと云うたら、相手は誰でも亂離骨灰ぢやとのう。えらい奴が出たもんぢや。兎に角えらいやツちや！　これはまアどうしたもんぢやろかい！』

『弟ぢやな。強い牛島いふのは。辰熊ぢやらう』

『さうぢや』

『兄貴（牛島健三）も、もとは強かつたが、今日は熊本軍の前衞に、弟よりズツと下に控へてゐるの。強弟賴むぞだらう』

下馬評も、いつか消えて、場内は刻々に息づまるやうな緊張に支配されて來た。

正午を過ぐる三十分、先づ福岡軍選手の入場、つゞいて、熊本軍選手威風堂々と入場すれば、本會副會長村地警察部長（福岡）やをら立つて、開會を宣す。

次いで箱崎神宮々司の修祓の儀了るや、福岡軍總帥西五段は、名譽の大優勝旗を返納した。

拍手やんで場內忽に靜寂に返る時、磯貝八段、佐村七段の古式の型、その莊嚴なる型に場內はいやが上に靜まりかへる時、この日の審判役永岡八段、起つて審判に關する注意、時、既に定刻一時を過ぐる半時間、兩軍の戰備、完くなり、互ひに秘謀策戰を胸に秘めて、一發の號砲を待つや久し！

試みに、兩軍の陣容を掲げおかん。

熊本軍

初段	松隈勝
二段	牛島健三
同	菅原常岡
同	島田正覺
同	岡田斌
三段	田島武夫
同	田上忠臣
同	牧野義人
同	福田忠
同	西與七
四段	山根英師
同	長曾我部晉
同	牛島辰熊
同	上野魁
同	篠田一郎
同	關彥次郎
同	松前驍義
五段	三石昇八
同	宇土虎雄
同	小谷澄之

福岡軍

二段	內田仁
同	吉浦清市
三段	原田貫
同	前田實
同	古閑正彥
同	木原久夫
四段	金丸英吉郎
同	古賀速
同	秋根昌美
同	田中末吉
同	淵野三郎
同	藤野善太郎
同	田中武次郎
同	境董
同	岡田彌松
同	梶義光
同	島井安次郎
同	須藤介作
五段	森崎一郎
同	西文雄

○

つひに戰端は開かれた。

先づ熊本の陣松隈（初）對、福岡の內田（二段）共にこれ新進の若武者、而かもこの最前戰の勝敗は一軍の士氣に關係すること多大なるを以て、兩軍共にその幸先きをよくせん爲、この人選は非常の考慮を拂つたのであつたが、兩人の技や伯仲しけん、先づ第一の引分けを出だした。

つゞいて熊本の牛島（兄）對福岡の吉浦、互ひによく戰ひたれど、つひにこれも亦引分け。更に熊本軍の菅原對福岡の原田も引分けに終つた。

そも何たる事ぞ。福岡軍は、その先鋒に於て、先づ敵の陣中に駈け入り、一段二段の陣構へを破つて敵の陣中まで切込まん策戰なるに、今既に先鋒三人まで引分けに喰止められて、策戰の違算を來たした。

而かも第四戰、熊本の島田對福岡方前田の一戰も、前田頻りに攻めたるも利かず、これも亦引分け、熊本は、さてこそ策戰圖にあたつたり、いで中堅の戰となれば、福軍何ぞ恐るゝに足らず、あはよくば中堅を突き破つて、敵の麾下をも蹂躙せんず氣配、手に汗し、固唾を呑んで、戰の進捗に見入つてゐる。

○

急に起る場內のどよめき、、、、歡聲ドツと聞えたるは、これ今日初めての勝星、福岡軍の古閑三段、敵の二段岡田を大外刈りに投げ倒したのだ。

こゝに於て福岡軍ホッと一息、それに反して一歩敵の中堅三羽烏の一人、山根四段、[illegible]

堅に攻め入らん、と、場内忿に活氣づき、殊勲者古閑三段ま深く、

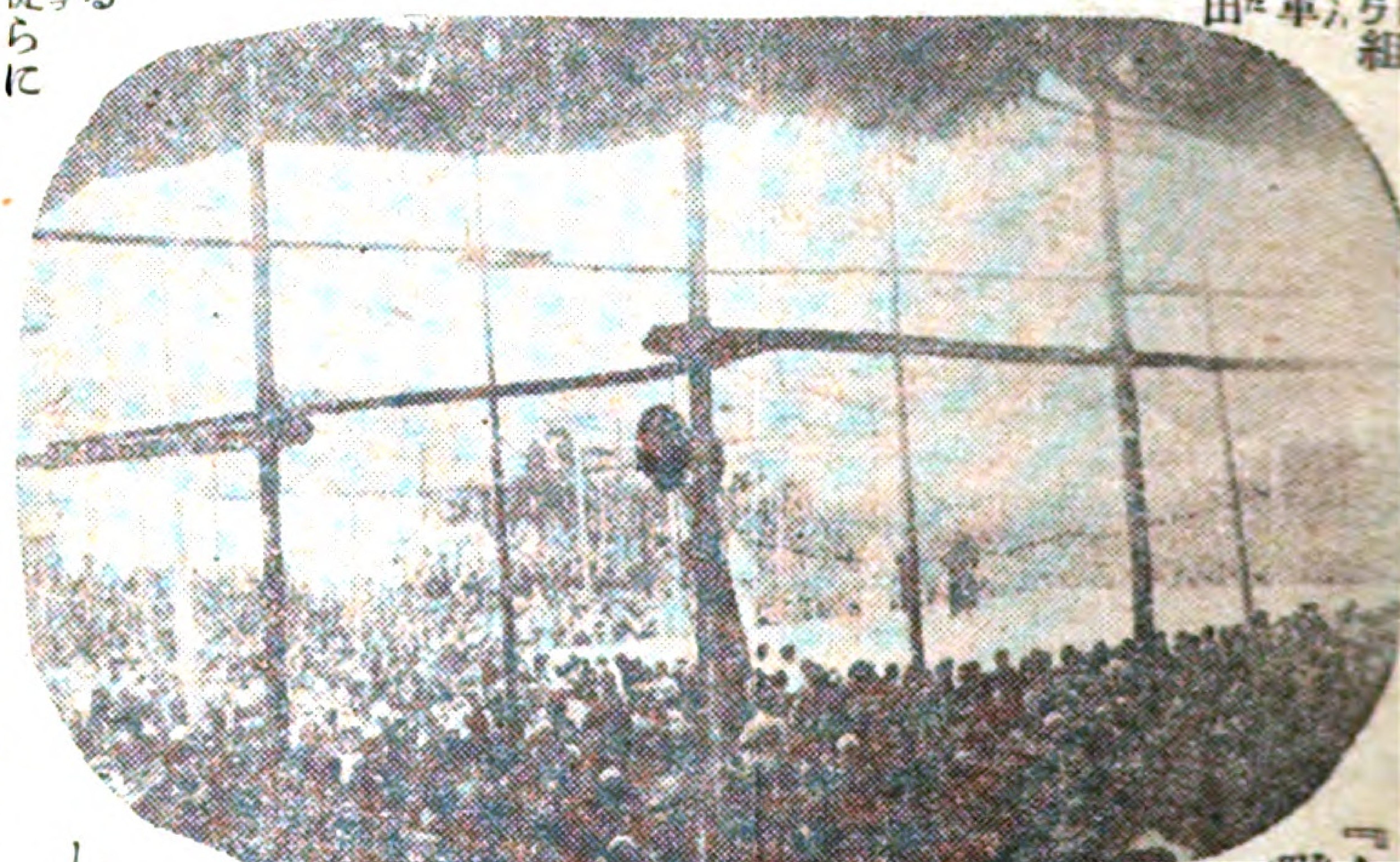
た、獅子奮迅の勢ひ、敵の元氣者田島と引組んだが、これもつひに引分け、こゝに福軍は、前衛軍中の花形木原三段出でて敵の田上に對す。追に彼れ木原は聞えし勇者、敵が守勢これつとめ、危ふく引分けに終らんとする時に、つひに敵首を押へ込みにかき、つゞく熊軍の牧野三段をも跳腰に投げ飛ばした。

『木原！……木原！……』

と、福岡應援團は、策戰漸く實現し來たると見て聲援鳴りもやまず、それに氣を得てや木原三段、つゞく敵の福田三段にも亦攻勢を以て壓迫したが、勝敗決せずして引分け、更に熊軍の西(與七)三段對福岡方金丸四段の接戰も亦勝敗を見るに至らなかつた。

○

こゝに於てや福岡軍の意氣益ゝあがれるに反し、熊本更に振はず、應援團のみ、徒らに焦心すれど如何ともすることが出來なかつたが、この時、熊本の軍中より出でたるはこれ熊本軍中



觀衆一萬三千を以て埋まれた當日會場の盛況

『えゝッ、云ひ甲斐なき味方の戰友かな、敵福岡の前衛、多少の勇あるも、何程のことやあらん、タカの知れたる小童共、いで我れこそ、熊軍今までの頽勢を一氣に挽回しくれんものと、小兵ながら、敵の四段古賀を縱横無盡に引きまはし、揚句の果てに見事大兵古賀四段を押へ込んで一本、こゝに漸く、熊本軍最初の一點を得た。

然るに彼れ山根、意外にも福軍の秋根に破るゝや、これも熊本軍中堅三羽烏の一人たる長曾我部四段出でて瞬く間に復讐、つゞく田中と力戰猛鬪、勝敗つひに決せずして引分。

かくて熊本軍の負け越二點、まことにこれ容易ならぬ形勢、誰かよくこの衰勢を挽回しなければ熊本軍の運命や實に期して知るべきのみ。

○

今や試合は前半戰を終つて愈ゝ佳境に入り、兩軍の應援、矢の如く鋭し！

この時、熊本軍中よりあらはれし一人は、眉飽く迄濃く、眼光烱々として人を射、頰骨高く張つて鼻下のひげ太く、物凄きまで、力みかへつた形相に、岩鐵の如く、皮下一片の贅肉をも存せず、まつたくこれ偉大なる骨とそれを包む筋肉とのみ、五尺五寸二十貫の體軀、いとも軽やかに、ジロリ敵陣を睨んで出場したは、これ別人ならず、熊本軍隨一の猛將、三羽烏の隨一人、牛島辰熊四段、神宮競技柔道優勝戰に於ける三度續けさまの勝放しと云ふ異常のレコードホルダー、世の常の人ならば、一度び、神宮競技戰に優勝せんか、その名譽を傷けざらんが爲に最早後の出場を見合はすのであるが、彼れ牛島の放膽なる、更にこれを意に介せず、相變らず神宮戰に出場し、三年續けて優勝を占めてゐるとは、恐らく彼れにすれば、神宮競技柔道戰の優勝など別に大した事件にもあらず、たゞ戰つて勝つたるのみ、何すれぞこれ誇るに足らんや、ぐらゐに思ひなしてゐるに違ひないのだ。

それに對して神軍より出でたるは大兵淵野四段、素早く巴の陣に引込みに出づれば、牛島サッと附入つて押へ込み、一度び横四方固めに押へた以上、さながら石臼を以て押へつけるが如く、押せども、引けども、微動だにせず、忽ち一本を取つて立上れば、熊本軍の意氣漸く揚り、

『牛島！』
『辰熊！　しつかり！』
の聲降るが如し。

而かも彼れ牛島の勝負強き、つゞいて出づる敵將藤野四段と相對して、はじめ更に仕かけずジリリ！　ジリリ！機をうかゞつてゐたが、

『エツ！』

と云ふ氣合諸共、その右手や早く藤野の襟に飛び懸るゝと見き、藤野の體はヒラリ、見事、牛島の内股に跳上げられてズンデンドウ！　まことに鐵細一瞬の觀！

ドッと起る歡聲歡呼、遉がに今は敵も亦、その美技に醉うて、棧敷を叩き、場内一萬三千の口は、期せずしてアッと唇を開き、其の手は一齊に、拍手した。

試合は今正に五分、而もこの剛勇無類牛島に對して出でたるは田中武次郎四段、彼れはこの強敵を如何ともする能はず、兎に角引分けに喰止めおかば大手柄と、徹頭徹尾守勢をとつて逃げまはる。

さりながら、牛島はあくまで強い。敵が逃げて逃げて逃げるところを、追らず、急がず、機を見てグッと一氣に引捉み、引捉むより早き内股の強襲、田中の體は飄々然として毬の如くケシ飛んだ。

●

而かも牛島は、すでに三人を倒しても、なほ格別疲れたる樣子もなく、平然として、つゞく境四段と相對した。

この時境の戰法たる、遮二無二捨身の小内刈り、蹴手繰り、時々また蹴り、攻めたてたが、如何せん、相手は岩の如き牛島辰熊、正しくこれ蟷螂の斧、難なく牛島に押へ込まれて身動き

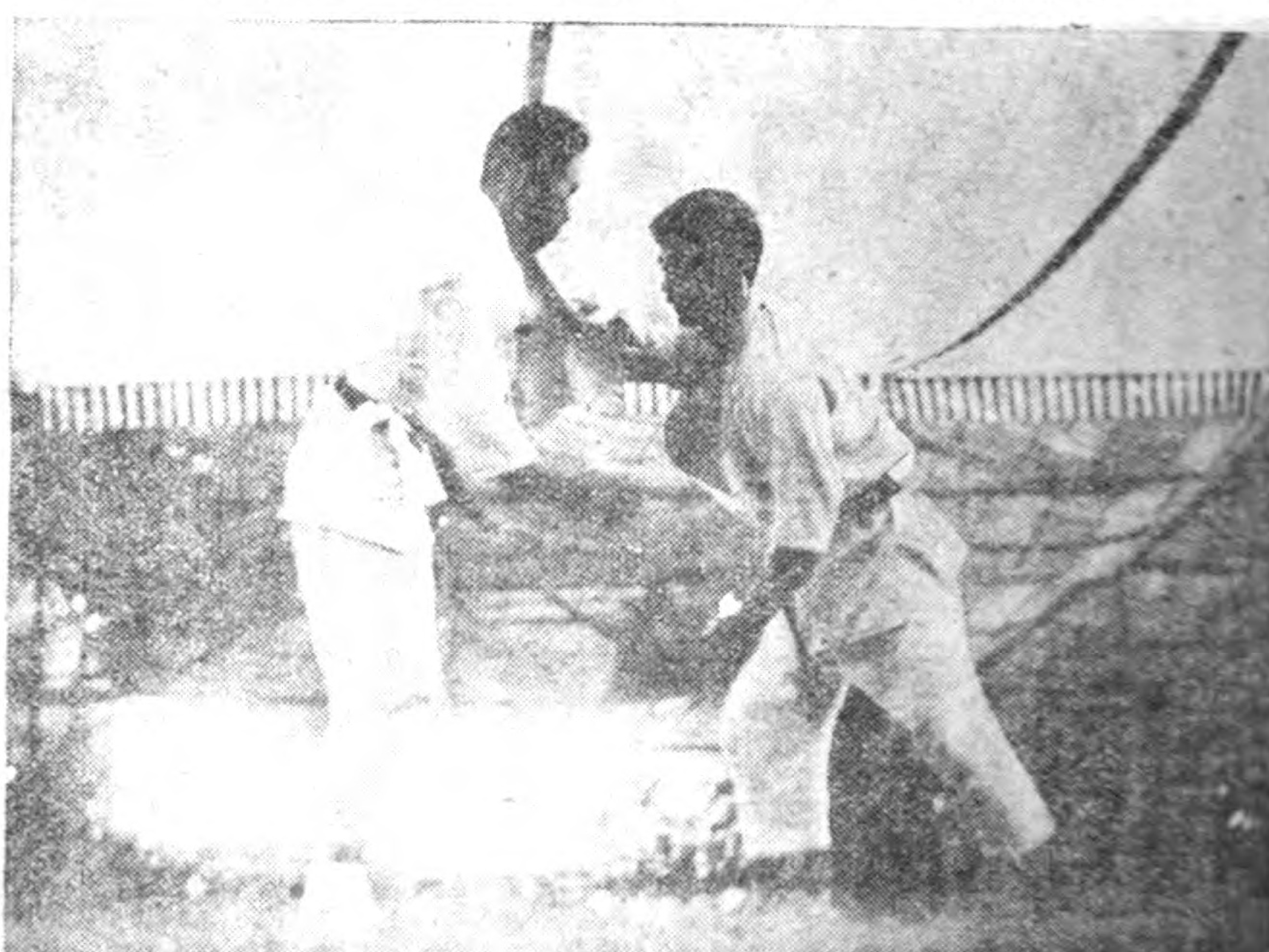
もこッや、忽ち一撃既に四人とも、未だ一撃をも容れ牛島に喰はせ得ず、未だ一太刀をも切りつけないうちに、早くも、バッサ〳〵と薙ぎ倒されて了つた。

それにしても牛島の剛勇よ、彼の實力は一體何處まであるのか、格別の力をも用ひずして敵を倒す、近頃彼の如き豪勇を見ず、恐らく彼は、眞にあらん限りの實力を發揮し得たる經驗は少なからう。宜なる哉、熊本軍の氣勢益々強くなり行くに反し、福岡軍の陣營今や寂として聲なし。

遮莫、戰友四人、枕をならべて討死したるあとを受けて、今、牛島の前にあらはれたのは、福岡軍中堅の闘將として、特に本年福岡縣に聘せられたと云ふ岡田四段、相手によつては、彼も亦慥かに十分の働きをするに違ひないが、名にし負ふ相手は大剛牛島、思へらく、なまじひに攻勢に出でて、また首掻かるゝも無念、如かず守勢一方に出で、この大敵を喰止めんには、と。

即ち自護體に腐心これ努め、飽くまで突張つて行けば、さすがに牛島も今は焦つて攻立て、攻め立て、脊負投に、寢業に、荒れに荒れて強襲これ重ねたが、如何せん四人を倒して後の攻擊なるに加へて、相手が引分け策の一本槍に遇つては、さしもの彼も料理し兼ね、タイムに迫られてつひに引分けのやむなきに至つた。

さるにても、牛島が闘志の强烈なる、彼が巨眼カッと見開いて、兩腕低く構へ、將にとびかゝらんとする勢を示すとき、



白熱相搏つ大接戰—（向つて右熊本牛島[illegible]、左[illegible]）

恐らく彼の戰鬪意識が發散するのであらう。一種の殺氣、一抹の鬼氣を含みて、見る者をして一種凄壯の感を抱かしむるものがある。好漢、自重、以て今後の大成を期すべし。

〇

さて、福岡軍は牛島の爲に脆くもその中堅を打ち破られて、目算ガラリとはづれ、戰債所を逆しまにして二人の負越し、この儘以て推移すれば、當然福岡の敗北に終るのだ。殘る梶、島井、須藤、森崎、西の徒輩一段の奮起を要す。

が、幸にも梶四段先づ上野四段を小外刈に倒し、ついで、篠田四段を屠り、更に關四段と戰つて引分けに終り、形勢はまた五角、福岡軍の重雄島井四段對熊軍の松前四段の戰ひとなるや、島井力戰して敵松前を足拂ひに破り、敵の五段三石昇八と組んで引分け、こゝに於いて福岡軍は第三將四段須藤金作、熊本軍は副將宇土虎雄五段の出現とはなつた。

兩雄共に五尺七八寸の長大漢、勝敗如何と見るうちに、如何にしけん宇土五段意外にも須藤の大内刈りに脆く破れ、つひに熊本軍の總大將小谷澄之五段の出現を見ねばならなかつた。

さるにても熊本の總師小谷澄之は、永岡八段の秘藏弟子として許されてゐるだけに、この技の優秀は、今東京の高師在學中の阿部信文と共に、高師の誇りとなせしもの、今味方の頽勢を引受けて敵の第三將須藤金作と對するのだ。蓋し彼小谷たるもの、この對縣戰の爲に、特にわざ〱熊本五高に招聘せられたものと聞く、彼の責任やまた重大なりと云ふべく、而かも今戰をはんとする相手は、もと東京の角力幕下に居りし須藤金作の大兵肥滿、體力の差は、殊にかゝる對抗試合に於て著るしく影響するものなるに加へて、須藤金作にして云へば、一昨大正十五年の神宮競技に於て、彼は小谷の爲に破られてゐる、謂はゞその復讐戰、今日こそその氣勢に燃えて遮二無二得意の大内刈り、猛襲また猛襲、さすが練達の小谷も守勢これつとめざるを得なかつたが、名にし負ふ彼小谷の體裁きの巧みさ、受身を受身として受けず、敵の技の裏をかいて術を施し、或はまた、素早く己れより攻めて、敵の攻勢を挫きつゝ、得意の脊負ひ、拂腰、足拂ひを連發す



れば、須藤は例の金剛力、懸命にこれを怺へて、漸く大守勢に轉じて來た。

　さすがに今は大將の出陣、兩軍の歡呼聲援は耳を聾せんばかり、

『小谷！』

『小谷！』

の聲隨所にあがると見れば、一方また、須藤にも

『遠慮は無用、やつてしまへ！』の聲援。

　つひに戰ひ疲れて、イザ引分けと云ふ時も時、如何なる隙やありたりけん、小谷の打つた脊負投、見よ、五尺九寸の須藤の巨軀、モンドリ打つて投げ出された。

『天晴れ！　さすがに！』

『さすがに！　〳〵』

　しばしは、歡呼鳴りもやまず、熊本側應援隊も、漸くこれに力を得て聲援頻りに沸ふ。

　見よ福岡軍の副將二十八貫の老大漢森崎五段は今や出馬した。



（この榮冠！　優勝せる福岡軍の精鋭（背後は當日の激戰を語る揭示板）

この陣容の偉大なる。さすがの、堅藤金作もこれには遠く及ばない。思ふに福岡軍の策戰は、三將に肥大漢須藤をおき副將にまた更に肥大なる森崎五段を据ゑて、茲に試合を打切らんとしたのではなかつたか、即ち總帥西五段を煩はせず、この二巨漢を以て敵の大將小谷と引分けをとるか、乃至また彼を力攻めに攻めて了はうとしたのではなかつたらうか。イヤたしかにさうなのだ。

　然し、小谷は、若冠二十五才とは云へ、さすがに一軍の總帥、須藤との接戰二十八分の戰ひにも怯まず、志氣益々旺盛。巨漢森崎を相手に力戰實に十數分、森崎が、その巨軀を武器に、引分け策に出でんとするを見て、咄嗟の策戰、

『えゝ、面倒なり』

とばかり、思ひ切つた大業、

『えゝツ！』

熱火の氣合にブンねぢれば、さしも二十八貫の森崎の巨體、俄然宙宇に舞うて眞逆樣、ダーンと云ふ地響諸共倒れ落ちた。

『わあツ！』

『見事々々！』熊本應援隊は餘りの嬉しさに總立ちとなつた。正しくその業の冴えは天下一品、さすがに彼は永岡八段が秘藏弟子たるに耻ぢない。

○

かくて福岡軍の策戰は小谷五段の奮戰によつて半ば以上覆へされた。而してつひにとつておきの大將西五段の出馬を餘儀なくした。

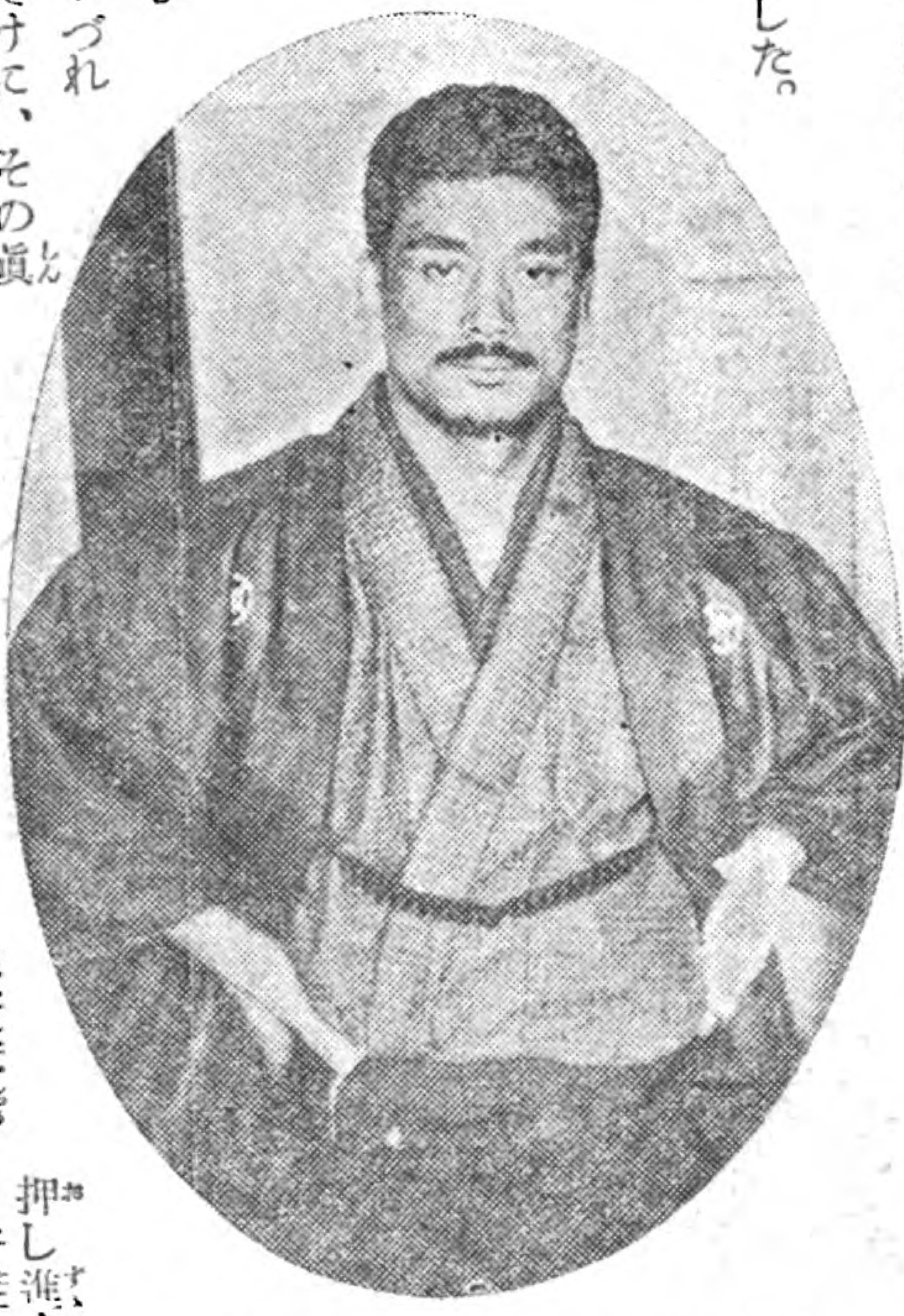
時に彼は冷然として出場した。

その冷靜さ、些の昂奮の色も見せず、飽迄落着き拂つた大將振りは、一方小谷が二十五才の飛將軍として、熱情火の如き大將振りに比して、まことに兩極のコントラスト、彼は前二回の戰ひにも大將として參加したが、いづれも戰はずして勝つてゐただけに、その眞技の程は、全く未知數である。

『ヤ！』

『ヤ！』

互ひにはかる戰機や如何、さすがに今は、この大將同志の決戰に、滿場の靜寂林の如く、一萬三千の觀衆は、たゞ一齊にこの兩雄が一動一靜に吸ひつけられてゐる。



熊本軍當日の殊勳者牛島辰熊四段

やがて兩將は、徐ろに組んだ。

小谷五段、勝誇れる戰將の如く縱横無盡に攻め立てれば、敵將西五段、靜かに守勢これつとめ、更に仕掛けずして、機の到來を待つものゝ如し。

十分……十五分――勝敗未だ決せず。

二十分、なほ決せず、二十五分……三十分、なほ未だ決せず、西大將は飽く迄冷靜に、焦らず、騷がず、たゞ防禦の一策に出づるのみ。

こゝに於いてか、若大將小谷は稍ゝ、焦り氣味追撃につぐに追撃、攻勢の上に攻勢、一氣に勝敗を決せんと、勢ひよく鋭く押し進んで行く。

この時西大將は、小谷の背負投を極度に恐れ、歩一歩、あとへあとへと退いて、今は早や一歩も退り得ない地點にまで追ひつめられた。

コノ時！　正にこの時!!

一瞬、何物か觀衆の胸に響いたと思ふ時、金鐵の氣合、

『エッ！』小谷が得意の足拂ひ、間髪を容れずバタリと倒れし白衣一つ、

『アッ！』倒れしはたしかに西と思ひきや、實にさにあらず、小谷大將は横ざまに倒れてゐる。

『ア！』

『オヤ！』

小谷自身も餘りのことに呆然自失したるもの丶如く、よく起上り得ない。

併し審判の聲は既に宣せられてゐる。

『一本！』

意外にも、西大將は、徹頭徹尾小谷の爲に壓迫され、今つひに退らんによしなく身體谷まつた時に於いて、天の恵みや、小谷が焦つ足拂ひ、誘ひかけられての裏返し、これぞ俗に云ふ燕返し、捨身になつて應ずれば、見事や窮策効を奏して敵體モロに横轉、われながら、意外の感に打たれし如く彼も亦しばし呆然として小谷の體に見入つてゐた。

拍手！　拍手！　萬雷の如く鳴る。

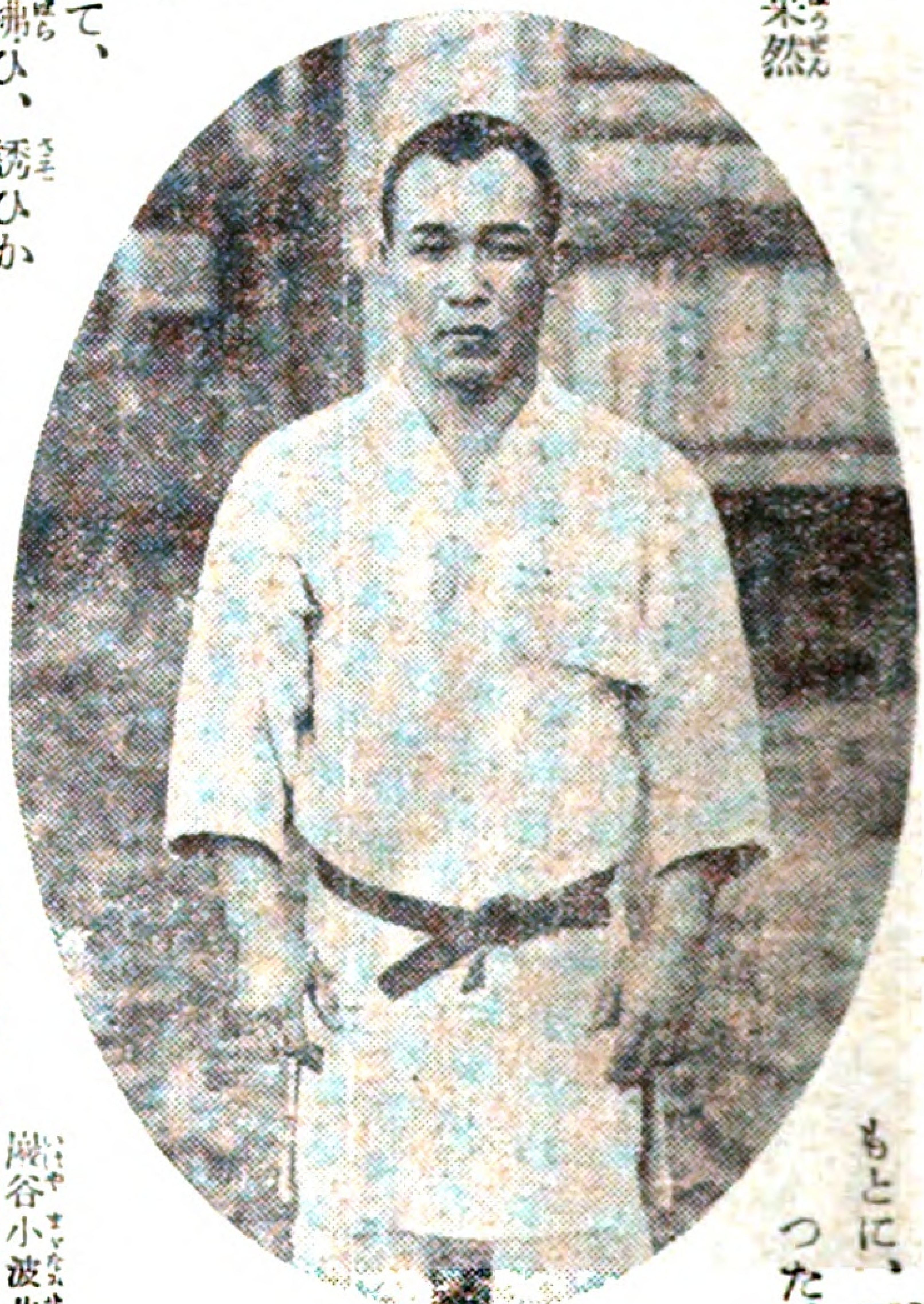
歡聲ドッと福岡軍にあがる。

『福岡萬歳！』『西萬歳！』

熊本は三度び挑戦して三度び共に破れ、今年こそ雪辱の陣容、一氣に敵をモミつぶし、前年二回の恥を雪がんと豫期せしに、雄圖つひに空しく、三度び敵福岡をして覇を唱へしめた。

あ丶、風寒き春日原頭の晩秋、夕闇に照る一千燭光の燈火のもとに、兩軍の戰士は最後の禮を交はすべく立つた。

兩軍戰士の心情や如何に、記して來秋の大接戰を待たん。（完）



優勝せる福岡軍主將西五段



運動家に必要な精神

横井春野

◇運動競技の目的は何？

我々は此の世に生れ出ると同時に運動欲をもつてゐる。この天賦の運動欲を滿足させることに依つて我々は成長してゆくのである。我々が日常行ふ運動競技の練習は、身體の鍛錬にあることは云ふ迄もない。けれ共たんに身體を鍛錬する丈けならば運動競技の練習をせずとも他にいろ／＼の方法がある。我々は身體を鍛錬すること以外に運動競技の練習に對して要求する大きなものがあるのである。夫れは人格の陶冶である。之を具體的に云へば、『我々が社會人として生存してゆくに際して必要な諸徳』を不知不識の間に養ふと云ふことである。

運動競技の練習は我々の人格陶冶に與つて力大であるが、之れが練習の方法に缺點があると、反つて弊害多くして、利益なしと云ふ結果に陷つてしまふ。私は、以下運動競技の練習をして有効ならしむるに必要なる精神について私見を述べて見たいと思ふ。

◇不撓不屈の精神

かりにも、運動競技を練習しようと云ふ人は不撓不屈の精神がなければならない。一旦志した以上は、或る程度迄貫徹しなければ止まないと云ふ精神がなければ、運動

一流選手は語る

○早大ア式蹴球部 玉井操



感激した事――第一に思ひ出されるのは、大正十三年正月五日スポーツの宮樣秩父宮殿下御台覽の下に行はれた、光榮ある全高等學校ア式蹴球大會に優勝した時の事です。惡戰苦鬪の後、私達の手に今や大銀盃の授けられんとする時、殿下には直立遊ばされ其の上、嚴寒肌を劈くの日にも拘らず外套を脱がせられ、にこやかに拍手を賜りました。午前午後の二回の大激戰に綿の如く疲れた體も殿下の其の御樣子を拜し奉つた時には、石の如く固くなり眼には感激の涙が自づと宿つて參りました。やがて殿下萬歳の聲、續いて何處ともなく起つた『都の西北』の校歌――唯々感激其のものでした。

可笑しかつた事――一昨年の夏愛知縣第一

家として淺見しない。

一高野球部の黃金時代に守山君と云ふ名投手がゐた。當時の日本球界の第一人者で、コントロールのよいことはたゞ〳〵驚くばかりで、彼れの投球は、捕手のサインに對して一寸のくるひもなかつたと云はれてゐた。守山投手が超人間的のコントロールを得る迄には人知れぬ苦心があつたのである。一高流の猛練習がすむと守山君はたゞ一人で寄宿舍の裏庭へゆき、煉瓦塀めがけて球を投げた。日が西山に沒して球が見えなくなる迄投げ續けた。毎日々々〳〵繼續する中に、球は我が思ふ箇所へ當るやうになり、煉瓦塀にボール型の穴があくに至つた。始めの中は中々思ふ箇所へは球がゆかない。並大抵の人ならばこの時期に壯圖が挫折してしまふのだが、『何糞ッ!!』と頑張り通した結果、守山君のコントロールは、百發百中となつたのである。守山君のやうな精神があれば誰でも一流の選手となることが出來るのである。

この不撓不屈の精神は、適當なる指導者に監督されて練習する際には自然と養はれるのであるが、夫れをまたずにこの精神を以て練習に取りかゝることが必要である。

◇團體的精神の必要

運動家にとつて最もいむべきは、『自分さへよければ人はどうでもかまはない』と云ふ精神である。自分勝手一方の人は運動家としては成功しない。よしや或る程度の成功をなしえてもかゝる精神の持主は運動家の仲間入りが出來ない。運動の神聖を害するものとして排斥せられる。

運動家にとつて必要なのは團體的精神——共同一致の美風である。場合に依つては自己が犧牲になつても、團體の爲につくすと云ふ精神が必要である。この精神がなければ社會に於けるすべての事業は成功しないのである。數年前松本主將時代の早大野球部は立敎大學と惡戰苦鬪したことがあつた。一勝一敗の後決勝戰が早大球場で行は

臨時學校へコーチに行つた時には誰からも「先生」と呼ばれたのです、當時の事を思ひ出すと擽つたいやうな氣がします。

失敗つた事——十四年正月の全國高校大會に出場した時に精力を增すために飲んだのですが。規定の二倍も飲んだ爲すつかり逆上して一寸も動けず遂に敗れました、それ以來藥物を服用せぬ事にしました。

愉快だつた事——昨年十二月ア式蹴球本會主催の大試合だつた對關西學院戰に勝つた時です。主將として初めての大試合、然も二ヶ年間引分け本年も一、二回戰共に引分けだつた、その三回戰になつて後一分半といふ際どい所で勝つ事が出來たのです。これも皆んなの團結の賜です、然し一面關西選手を見た時同情の淚を禁じ得ませんでした。

○ 報知新聞社員 鶴田義行

可笑しかつたことは、昨年玉川に開かれた報知新聞社主催の日米水泳大會で、隨分いろんな人からサインを賴まれた時、一人の少女が私の名前だけで滿足せず、何かいひにくさうに催促しましたので、生年月日を書いて渡しましたが、實は私のアドレスを求めてゐたのだ

れた。戰ひは早大に利あらずして、立大にリードされたまゝでラストインニングに入つた。この時主將の松本終吉君は自分の代りに戸田君をピンチヒッターたらしめた。一軍の主將としてこの擧に出ることはドンナにか、つらかつたであらう。けれど松本君は、早大チームの爲に一身を犠牲にして自から陣頭を退いて戸田君を出場せしめたのであつた。この結果戸田君の左中間三壘打で早大は敗勢を挽回して勝冠を握つたのである。松本君の苦しい心事は、一度球を握つた程の人ならば誰でも察することが出來る。けれど、松本君の犠牲的精神が早大を九死の淵から救つたのであつた。運動家は誰人も松本君のやうな精神をもたねばならぬ。

◇規律を尚べ

運動家は規律的の生活をしなければならない。現在に於いては斯界に名を唄はるゝ程の大家の中には不規律な生活をしてゐる人は一人もないやうである。

運動家は朝起きてから夜床に入る迄、規律的の生活をしなければならない。規律を尚ぶ精神を以て自省してゆくうちに、不知不識の中に規律ある生活を行ひうるやうになるのである。

運動技が科學的になつてきた現在に於いては、運動家は飲食物に於いても周到なる研究を要するのである。酒や煙草は絶對にいけないし、間食もいけない。この方面の節制が大切であるが、規律を尚ぶ精神が缺けてゐるとそれを實行することが出來ない。

かつて、軟式庭球界の第一人者と云はれた内田亥之太郎君は、法大在學當時規律ある生活をして多數學生諸君の模範となつてゐた。内田君とて、最初から規律ある生活をなしえたのではない。苦心に苦心の結果この域に達しえたのである。運動家は、各自の屬する部の部規を守らなければならない。部規を守りえぬものは運動家として



と、あとで氣がついて、相手が少女であつただけに、我ながら失笑したことがあります。

驚いたことは高石氏の精力です。

失敗つたことは、前の可笑しかつたことに似てゐますが、私が佐世保から東京へ出て來ると、報知の人が皆ハイカラに見えたので、私も社の床屋でアイロンをあてゝもらひ、帝大プールへ練習に行きましたところ、折角の頭髮も水のために、すつかり駄目になりました。田舎者は田舎者らしく、今後は分に過ぎた考へは起さないつもりです。

愉快でたまらなかつたことは、二百のブレストで三分を切つた時の心持です。

○ 東京高師競技部 福井行雄

一、感激したこと、

去年のインタカレッヂ競技會で、ローハードルを二四秒三で走つたのが、よいタイムだといふので、校友會長三宅先生から表彰されました。

の仇敵なきものである。この點にくれぐれも注意しておく。

◇「一心不亂」と云ふこと

運動家として成功するには、『一心不亂』と云ふことを一瞬間も忘れてはならない。一心不亂の域には、精神の集注に依つて到達しうる。練習は量多くとも、精神のこもらぬ遊び半分の氣分で行つては効果はない。練習量――練習時間は少なくとも精神を打ち込んで練習すれば効果は大きいのである。

練習はもとより競技、試合に際しては、運動技そのものに自分の精神を全注せねばならない。精神が偉大な力をもつてゐることは、『堅き石にも矢が立つ』と云ふ諺に依つて何人も知る所である。多くの選手の中には試合場へ出ると氣おくれがして平素の實力を發揮することの出來ない人がある。これに反して試合場へ出ると實力以上の働きをなしうる人がある。實力以上の働きは、精神の集注力に依つてえられるのである。イザ鎌倉と云ふ時に、瞬間的に精神を集注しうる人は決して試合場で氣おくれをするやうなことはない。精神の集注力を養ふは平素の練習にある。平素いゝ加減な練習をしてゐる人は、試合場へ出て氣おくれして充分我が腕をふるふことが出來なくなる。

◇決斷力と勇氣

決斷力に缺くる人は、運動家として成功しない。事をなすに當つて準備は用意周到でなければならない。けれども愈ゝ事に當つては、決斷力を以て男らしく進まなければならない。野球技で一番むづかしいのはバッチングであるが、決斷力の乏しい人は常に遲疑して好球を見のがしてしまふから、打者として成功しない。決斷力と共に必要なのは勇氣である。決斷力も勇氣も『精神の集注力』を養へば、完全の域に達することが出來るのである。

―了―



其の時、先生は萬歳を三唱して下さついました。あの謹嚴な先生が嬉しさうに萬歳を三唱されたのです。私は、此の時程感極まつたことはありません。

二、驚いたこと、
話は古いが、マニラに開かれた極東大會の時、先方の役員が、あまり不正だつたことには驚かざるを得ませんでした。

三、失敗したこと、
妙なことだが、いつかの競技會でパンツの紐が切れたことである。平素の不注意から起つた失敗です。

四、愉快だつたこと、
愉快で堪らなかつたことは、僕が始めてインタカレッヂに出た時、ハイハードル豫選でハードルにつまづいて倒れた。併しやつと豫選を通過して、決勝で優勝した。倒れた時は吃驚したが、優勝した後では却つてこれが愉快な思ひ出となりました。

（沈默）そこひなき淵やはさわぐ山川の淺き瀬にこそあだ波はたて

永田[illegible]

ムッソリニと日本

ムッソリニ傳の著者として

澤田謙

いまの世界で、一番有名な人は、恐らくムッソリニであらう。いかなる海沿ひの漁村、いかなる山間の農村でも、みな無意識にムッソリニといふ名を呼んでゐる。彼等は必ずしも、ムッソリニの波瀾重疊なる生活を知らない、況んやその率ゐるファッシストの精神は更に知らない。然しながら、その男性的な、熱と光と力と意氣と眞心に燃ゆる一種の**英雄的精神が**今の日本人の凝視に値するのだ。しかし、私は必ずしも現代の日本に、ムッソリニの如き獨裁者が現れて、ファッシズムの如き主義により、新日本を建設すべき事を希望するのではない。

日本には日本の傳統があり、日本は飽くまで日本であつて、決して伊太利ではない。**私は元來日本主義者である**かるが故に私は、日本には日本らしき英雄の現はれんことを要望する。われらはこれを『新自由主義の英雄』と名付ける。されど、その意氣、その氣魄、その情熱、その眞誠に至つては、伊太利と日本と、多く異るところあるべき筈はない。



これが私の『ムッソリニ傳』を草し初めた動機である。筆をとり始めたるは奇しくも、ムッソリニ誕生のころ、初夏の太陽

◆英傑の俤◆
鼻に命中

『いま三十年もしたら俺も銅像になつてるだらう。』と、ムッソリニは云つた。

三十年たゝぬ中に、危く彼が銅像になりかけたことがある。いまや羅馬の議事堂から出てゆかうとした彼を目がけて、一名の老婦人が短銃をうつた。

彈丸は皮肉にも、彼の鼻に命中した。而もムッソリニは、いつもの平靜を失はなかつた。

『驚くな。何でもないぞ。決して復讐してはならぬ。俺の意志だ。』これが此のとき最初に發した彼の言葉であつた。

が澎湃として青葉の上に輝く頃であつた。

綴りゆく中に、私は不思議にも自ら書けるその書のうちに、自らの精魂を吸ひこまるゝ如くに感じた。一種の電氣が、私の握つてゐる鉛筆から迸り出づるを覺えたのである。

私は告白する。私は未だかつて、かくの如き熱心を以て、かくの如く精魂を打ちこんで書き綴つた著書はなかつた、と。

思ふに、ムッソリニの發散する電氣が、私の體内に宿つて、さらに發現したのであらう。想へばフランスの兵學校の校庭に、プリユタークの英雄傳を讀み耽つた青年が、卽ちかの大ナポレオンであつた。若き西鄕南洲・若き高杉晋作の愛讀書は、かの山陽の日本外史であつた。

英雄傳が英雄をつくる

大史書が大國民をつくる。私の筆者としての一大野心は、新らしき「日本外史」を著すことである。

不幸にして淺學不敏、いまだその大業の端緒すらえない。たゞこの度、世に公にする『ムッソリニ傳』が、年若くして新日本の黎明を待ち望める、全日本の青年諸君の希望に、幾分にても貢献するところあらば、わが心のみ、また半ば足れりといふべきである。

博士を辭退

ムッソリニが大宰相となつた時、ボロニア大學はこの鐵腕宰相に媚びようと思つたのか、彼に「名譽博士」の稱號を贈らう、と云つてきた。彼は即座に、これに返答した。

『いま一年まつてくれ』

その一年の間に、彼はマキアヴェリの「君主論」に關する論文を纏めあげて、見事に博士號をとつた。

これを以て見てもムッソリニを、一介の無學なる暴力漢と思ふものがあつたら、大變な間違ひである。

何にしても、宰相自ら筆をとつて、博士論文を提出するなぞ、痛快ではないか。



桃川如燕　演
尾竹國觀　畫

惚れた女を唯一打

『十兵衛様、十兵衛様』とやさしい聲で呼んで揺起す者がございますから、十兵衛先生目を覺して見ると、宵の内に投げ飛した伊集院刑部の娘の竹尾が枕元に羞かしさうに控へて居りまするから、十兵衛先生ムツクリ起上つて、

『其方は御息女ではないか』

『ハイ……』

『先程あれほど申して投げ付けられたに、性懲もなく何でお出でに相成つた』

『ハイ、假令どのやうな目に逢ひませうとも、一旦想ひを懸けた貴方様、お慕ひ申して参りました』

『ナニ、此の十兵衛を慕つて参られたとな』

『ハイ、此の鹿兒島の御城内にも澤山御家來がございますが、貴下様のやうな鬼をも挫ぐ立派なお腕前の御方はございませぬ、顔容の美くしいのに惚れるが女子の常でございますが、私は顔や容はどうあらうとも、天下の名人とも云はれる御方を良人にいたしたいと、常々思つて居りました所、貴下様の御越し、一目見て御立派な御方、此の方こそ私の良人と、思ひましては矢も楯も堪らず、御父上にお願ひ申して、性懲もなく人目を忍んで御介抱に上りましてございます、どうぞ私の心の中不愍で思召、不束ながら……』と言ひながら羞かしさうに十兵衛先生の顔を眄めに見る艶やかさ、十兵衛先生其の樣子を默つてジツと見詰めて居ましたが、

『ハヽア、それでは其許は此の十兵衛に惚れたと言はれるか』
『ヘイ、羞かしながらお慕ひ申して居りまする』
『左様か、其方がそれほどに想つて呉れるといふのは十兵衛喜こばしく存ずる』
『ハイ……』
『如何にも其方の言ふ通り、十兵衛の妻といたして遣はす』
『ハイお嬉しう存じまする』
『其方は中々美くしい女ぢやな』と言ひながら左の手で女の手を握つてグイと手許へ引寄せたと思ふと右の手に拵へ上げた拳固、しないを付けて女の横面をポカーリ……柳生流得意の氣合で打たれたから堪りませぬ『アッ』といふと竹尾は取られた手を振り拂つて逃げようとする所を動かせず『エイヤッ』二度目に飛んで來た拳に目口鼻から血を流して女は息は絶えた様子、バッタリそれへ死骸を投げ出して、
『アハヽヽヽ、思ひの外脆いものだ、併し折角能く寝て居るものを、飛んだ邪魔をいたし居つた、まだ夜明には間もあらう、モウ一寝入いたさうか』ゴロリと寝轉んで又夜具を被つて寝てお仕舞ひになりました、夜が明けて起き上つた十兵衛先生、此の女の死骸を此の儘にして置いては面白くない、夜具の中へ入れて置いて驚かせてやらうと、女の死骸をズル〳〵引摺つて來て、上から夜具を被せて、斯うして置けば分るまい』と獨り笑壺に入つて居りまする。

家老の娘は猫でござるか

此方は伊賀陸刑部、朝早く御前へ出仕いたしますと殿様は[illegible]
『刑部、十兵衛の様子はどうぢや計略は如何いたした』
『ハヽッ、先づ失敗にございます』
『失敗か、十兵衛は女子に手を出さぬか』
『中々以て品行方正、恐れ入つてございます』
『コレ〳〵其方が恐れ入つて居ては往かぬではないか、それでは十兵衛を連れてカフエーへでも參つてはどうぢや』其の時分カフエーなどはありはしませぬ。
『恐れながら第二の計略を用ゐましてございます』
『ハヽア第二の計略といふのは何ぢや』
『實は手前娘竹尾、當年十八にございます、娘の口から申すも如何でございますが、十人並勝れた容貌、昨夜十兵衛先生、御前に於て御酒下され、酩酊いたして歸られましたを幸ひ、娘に申附けまして、昨夜伽を申附けましてございます』
『オヽ能い所へ心付いた、其方の娘は鹿兒島小町などと噂をいたす家中第一の美人であると申すことぢや、して如何いたした、計略圖に當つたか』
『それはまだ分りませぬ、まさか娘を呼出して様子を聞くのも如何と存じ、聞かずに出仕いたしましてござりまするが、娘は今朝まだ起出でませぬ様子……』
『ウム、巧く參つたかな、其方の娘が伽をいたしたら、如何に

物堅い十兵衛でも、落城いたしたであらう、十兵衛を呼出して様子を聞くであらう……コレ〳〵十兵衛を呼べ』と仰しやつて居る所へ十兵衛先生、ニコ〳〵笑ひながら出仕を致しました。

『おゝ十兵衛であるか』

『ハツ、昨日は色々御待遇に預かり、十兵衛思ふさま頂戴をいたしましてござる』

『大分酔うたやうであるな……十兵衛、昨夜何か變つたことはないか』

『變つたこと……ございました』

『ハヽアあつたか、どういふ事があつたか話をいたせ』

『されば、手前は寝て居りましたが、酔冷の水が欲しさに目を覚ますと、枕元に一人の美くしい女が居りました』

『ハヽア女が居つたか』

『それから色々と話をいたしましたが、どうやら手前に其の女が惚れて居る様子でございました』

『ハヽア、十兵衛、御身は中々隅に置けぬな、それから如何いたした』

『けれども手前は女に眼を眩れるやうな者ではございませぬ、無禮な奴でございますから、引掴へて廊下へ叩き付けてやりましたら、驚いて逃げて行つてしまひました』

『ハヽア叩きつけたか』殿様伊集院刑部の顔を見ると、刑部は驚いて眼をパチ〳〵やつて居る。

『折角御身に惚れて忍んで参つたものを、何で情なく叩き付けるのぢや』

『之が自分の考へで忍んで参つたのなら妻にもいたして遣はしまするが、父の申付けに依つて参つたとのこと、當鹿兒島の御



家中に、夜陰深更に娘を忍ばせるやうなことはいたしますまい、左樣なことがあつては、一家の規律が立ちますまい、仍て引ツ叩いて遣はしました』

『ウーム亂暴だな是は、それから如何いたした』

『スルと又眞夜中に至つて其の娘が忍んで參りました』

『來たか』

『されば、此の鹿兒島には主君を初め一人として碌な奴は居ないが、貴下一人は天下の名人、立派な御方ゆゑ、お慕ひ申して居ります、一旦懲されましても、性懲もなく人目を忍んで參りました、當城に居る武士は一人として碌な奴は…………』薩摩守も家來も驚いた。

『コレ〳〵十兵衛、モウ分つた、それから如何いたした』

『それから餘り不憫でございますから、私が妻にいたして夜を明しました』薩摩守喜こんだ、思はず膝を進めて、

『十兵衛、其方はモウ此の薩摩守の家來であるぞ』



『ハヽア、それはどういふ譯で』

『どういふ譯と申して、其の女は當家の家老職、其所に居る伊集院刑部の娘竹尾と申す鹿兒島第一の美女ぢや、當地に永く足を停めさせようと、刑部と謀つていたしたことぢや、柳生流の名人といはるゝ其方も、女には敵はぬと見えるな、當家の家老の娘を妻といたしたからは、當家に仕官いたさねばなるまい、どうぢや十兵衛』驚くかと思ふと十兵衛平氣なもので、

『ハヽアさういふ計略でございましたか、それはどうも惜しいことをいたしました』

『ナニツ、惜しいことをいたしたとは何ぢや』

『氣の毒なことをいたしました』

『何が氣の毒ぢや』

『其の娘を殺してしまひました』

『エヽツ女を殺した……只今其方は、其の女を妻といたして夜を明したと申したではないか』

『されば、妻にいたさうと存じましたが、能く〱見ますると其の女は狸でございますから、一度ばかり叩き毆つたら死んでしまひました』

『ナニ狸ぢや、確かに刑部の娘に相違ないぞ』

『ハヽア、それでは刑部殿は、狸を娘にいたしますか』

『誰が狸を娘にする奴があるか、本當に殺したのか』

『偽りは申しませぬ、十兵衛嘘と輕率は嫌ひでござる、狸に違ひないから殺しました』

『ソレ刑部、見て參れ』

『ハヽツ』刑部も氣が氣ではない、あんなことをいつて物堅い十兵衛先生、本當に娘を殺したのか、飛んでもないことになつたと、居間へ取つて返すと、奥方がお出迎ひ、

『お歸り遊ばせ、今日は大層お早いお下りにございます』

『コレ〱狸は如何いたした』

『エツ狸、狸は動物園か馬鹿囃子……』

『何を申して居る、狸ではない、娘はどうした』

『娘は心持が惡いと申して、部屋に臥つて居ります』

『それが怪しい、どうも此の間中から様子がをかしいと思つた、あんな娘を生むといふことがあるか、全體お前が好くない、狸婆ア』

『貴下何を御冗談を仰しやいます』これから刑部が娘の部屋へ來て見ると、竹尾は寢て居て起上ることが出來ない。

『コレ娘、速かに正體を現はせ』

『何でございますお父上、私はモウ十兵衛様には懲々でございます、實に昨夜見れ〱云々、お羞かしうございますが、强かに投付けられて、腰の骨を折つて逃げて參りました』と眞赤になつての話し、

『さうか、イヤどうも色氣のない話だ、併し何故又夜中になつて忍んで行つた』

『御冗談仰しやいます、一度と忍んで參つた覺えはございませぬ』扨はと思ふから、十兵衛先生の御居間へ行つて見ると、まだ夜具は其の儘になつて居て四邊一面血汐の跡、夜具を刎ね退け

見ると、四五尺もあらうと思ふ程の大狒が、眼玉を飛び出して血だらけになつて倒れて居ります、サア大騒ぎ、早速又登城をして刑部から此の事を申し上げましたから、讃岐守殿も唇を咬いて御感心、

『十兵衛、どうして女の姿をいたして居るものが、狒といふのが分つたか』

『されば、人の話には怪物は暗夜にても物の黒白が明かに見えるとのことにござります、昨夜刑部殿の御息女と申して参つた女、衣服の模様、暗夜の中に手に取るやうに見えました、仍て打ち殺しましてござる』

『ウム、流石は武芸者、寸時も油断のない所感服をいたした』と大層御賞美、併し十兵衛先生には、女では引留めることは出来ない、何か良い工夫はと考へて居る、十兵衛の方では、モウ大抵要害の様子も分りましたので、機会を見て当地を立退きたいと考へてお出でに相成りまする。

恐ろしい名人の手練

スルと十兵衛先生が鹿児島をお立退きになるのに都合の好いことが出来いたしました、といふのは今回越前福井の城主松平伊豫守忠昌公、此の御方は家康公の御次男越前三位中納言秀康公の御次男でございまして名代の御明将、三年に一度福井の御城下八幡宮の神前に於て奉納試合といふのがございます、此の試合には諸国から名だたる武芸者が集つて来て、其の勝敗を争ふ事になつて居ります、此の仕合の行司はむづかしい、ソレは大角力でもさうでございます、行司が依怙贔屓をしたといふ、相撲がもつれた時にどうも納まりませぬ、況して是は天下の名人達人といはれる有名な人ばかりが集つての試合でございますから中々此の行司役はむづかしい、中々尋常の人では皆が押へない、此の前は一刀流の開祖伊藤一刀斎先生が行司役でございましたが、一刀斎先生が越前へ隠遁をしてからは行司の勤め手が一寸見当りませぬ、ソコで柳生十兵衛先生ならば、誰も苦情の言ひ手もあるまいといふので、大和柳生の庄へ問合せると、目下薩州鹿児島に御滞在といふことが分つた、それではといふので、主命を被つて青木新兵衛といふ御方が、態々十兵衛先生御迎ひとして鹿児島へ乗込んで参りました、好き機会と十兵衛殿早速御承知になる、御自分の御家来なら容易もいへるが、御家来ではない、苟くも高名の柳生但馬守、将軍家御指南役の御子息でございますから、それはいけないとは幾ら薩州家でも言はれませぬ、渋々御承知になる、薩州家ではどうかして当地に留めたいと思つて苦心をしただけに、まるで既に油揚を攫はれたやうな形、厚く御礼を述べて十兵衛三厳先生、青木新兵衛と同道、いよいよ薩州鹿児島を御出立に及びました。

途中御話もなく無事越前福井へ到着、早速伊豫守忠昌公に御目通り、忠昌公非常にお喜び、城内に居るのも窮屈といふ所から、城下の某院といふ寺を旅宿と定めることに相成りました、御用には御家来が二人代る代るに附いて御用を足して居り

ます、處が追々福井へ集つて參ります武藝者、柳生十兵衞先生が雲光院に滯在して居るといふことを聞くと、皆訪ねて來るので其の煩さいこと、中には名もなき武藝者などが、唯十兵衞先生の顔を見たいのでやつて來る者などもある、煩さくつて堪らないから木戸錢を取つて下足を付けるといふ騷ぎ、けれども名の高い武藝者は取次いで、十兵衞先生が會ふと仰しやれば通すやうにして居ります。

『御免……』

『ドーレ……』取次の武士出て見ると年頃四十五六、坊主頭ではあるが武藝者らしい、

『何れからお出でゝございます』

『手前は諸國修行の武藝者、柳生十兵衞先生、當院に御滯在と承つて參つた』

『ヘエ、何をお使ひでございます』

『針でござる』

『ヘエー、按摩さんでございますか』

『按摩ではない、含針をいたす有馬喜兵衞と申す』

『アツ左樣でございますか』此の有馬喜兵衞といふのは豐後の國の生れ、右に木太刀を持ち、口に何十本といふ針を含んで、イザ立合となると、フーフツと口中から其の針を吹出して敵に吹き當てる、實に珍らし



い武藝、含針の有馬喜兵衛といつては、全國に其の名を知られて居りますから、早速に十兵衛先生に申上げると、

『喜兵衛が參つたか、一度會ひたいと存じて居つた所、好い折柄、通せ』といふ仰せ、

『どうぞ此方へ……』案内に從つて奥へ通る。

『初めて御意得まする手前有馬喜兵衛と申しまする者、以後御見知り置かれまするやう』

『オ、私が十兵衛三嚴である、豫て噂には承つて居つたが、含み針とは珍らしきものぢや、どういふ技であるか』

『されば、手前の用ゐまする針は長さが一寸五分ございます、穴の無い針で、立合ひまする時には其の針を含んで吹出します、それを受ける人が誠に少なうございます』

『ウム、木太刀を以て立合ひ、其の最中に二寸五分の穴の無い針を吹出す……誠に珍らしい武藝、今まで如何なる者と立合をいたしたか』

『御意にございます、先づ二百本の針を手前持つて出でましたが、手前の針を二百本ながら見事に打落して、私が恐れ入りましたのが、越前敦賀の山中にお住ひになります伊東彌五郎景久入道一刀齋、此の先生は二百本ながら受けました』

『ウーム、其の外には……』

『塚原卜傳先生と立合ひ、又吉岡憲法先生とも立合ひました』

『ウム、それはどうであつた』



『是は百本打ちました』武藝の物語をして居りまする所へ

『頼――む』といふ聲、取次の武士出て見ると、

『手前は豐前小倉の住人宮本武藏政名と申する者』

『手前は武藏の門人青木城右衛門、十兵衛先生當院に御滯在と承つて參つた、宜しく御取次を……』早速十兵衛先生のお許しを受けて奥へ通す、有名の人ばかりの來訪でございますから、十兵衛先生も殊の外のお喜こび、諸々の物語をいたしました時に青木城右衛門、

『扨有馬先生、一本どうかお手合せを願ひたい』

『望む所』と茲で双方支度をして庭へ出る、十兵衛先生が行司の役、城右衛門は宮本の高弟でございますから右劍左劍の二刀を使ふ、有馬喜兵衛は一尺三四寸もございます小太刀を右の手に取つて、左の手に含針といふのを掴み『エイッ』『ヤッ』互ひに身構へをいたして居ります、十兵衛先生御覧になると、流石宮本武藏の高弟だけに青木城右衛門、両刀を取つた其の構へ實に一點の隙もない、喜兵衛の様子を見れば、是亦一流の先生、此所ぞと打込む所がない、其の内に『ヤッ』と一聲叫んで喜兵衛が打込む小太刀、心得たりと城右衛門、之を拂ふ、ポンポン三四合打合つたかと思ふと、忽ち左の手に持つた含針を口中に入れるとパッ、パッ〳〵パッ〳〵と後から後からと其の針を吹き出す有様、實に手練とは云ひながら目覺しいもの、城右衛門右劍左劍を以て右に拂ひ左に落し、バッタ〳〵其の早いこと目にも止まらぬ位、其の内に十兵衛先生、

『勝負あつた』両人後へ下つてホッと一息入れました時に、



『喜兵衛、其方の腕前遁ばれ、如何にも感服をいたした、城右衛門、残念ながら其方は負けだ』城右衛門怪訝な顔をして、

『先生に伺ひまするが、私は有馬先生の針を一つも受けませぬ、甚だ恐れ入りますが、先生の御見違ひではございませぬか』

『イヤ予の見違ひではない、鉢巻を見ろ、其方のいたした鉢巻を見ろ』

『ハッ……』言はれて初めて氣が付いて、城右衛門〆て居た白布の鉢巻を取つて見ると、何時の間にか十三本の針を吹付けられて居る、城右衛門眞赤になつて、

『恐れ入りました、己れの未熟を辨へず、先生に御無禮の儀を申上げましたるは近頃恐縮の至り』

『イヤ〳〵さうでな

い、其方が弱いのではない、先方が強い』それなら同じことだと思つた。

集つたりな名人達人

此の時に十兵衛先生、『喜兵衛、十兵衛が相手をいたす、サア參れ』『ハ、ツ、然らば先生御指南を願ひまする』何しろ相手は大和柾木坂で一萬石柳生但馬守の御子息、身分が違ふから有馬喜兵衛謙遜つて口では叮嚀にいふやうなもの、腹の中では、ナー二十兵衛とて何程の事のあるべき、乃公も有馬喜兵衛だ、一つ腕前の程を見せて驚かしてやらうと、十分に天狗があるから、『先生、恐れながら針は五十本を以て御相手をいたします』『ハ、ア、其方予と立合に五十本を以て相手をいたすか、何本を以て定法といたすのぢや』



『先づ五十本を限りといたします』此の一言が十兵衛先生大肝氣に障つた、『喜兵衛、最前の話には、伊東一刀齋に二百本を用ゐ、塚原卜傳に百本を用ゐたと申した、然るに十兵衛に對し五十本を以て相手をいたすとは近頃無禮の一言、二百本を以て勝負をいたせ』お顏色が變つたので、『恐れ入りました、失禮の段、平に御容赦下されたい』と右手に小太刀、左手に二百本の針を持つて立出でました、十兵衛先生は例の鐵扇を持つてお立出で、サア來い來れと身構へた、心の中に有馬喜兵衛、何程の事やあるべきと、『エイッ』大喝一聲打込み來つた小太刀、二つ三つ應らつて居りますると、喜兵衛一足後へ下がつて、何時か針を口中に含んで、パツ〳〵パツ〳〵と吹出しまするのが一本

と雖ども他へ外れませぬ、悉く十兵衛先生の頭上を望んで吹き付けて來る、それをバラリ、バラリと鐵扇を以て左右に打拂ふ其の手練といふものは目にも留まらず、喜兵衛遙か後に飛び下がり、

『恐れ入りましてございます』

『イヤ喜兵衛、まだ〳〵其方の手に、七八十本針が殘つて居る、それを殘らず吹き出せ』

『御眼力の程恐れ入りましてございます、如何にも針は七八十本殘り居りまするが、何千何百本吹出しました所で、到底先生に及ぶべきではございませぬ、誠に先生の妙手、喜兵衛驚ろき入りましてございます』と持つたる針をそれへ投出して、流れる汗を押拭つて後ろへ下がつたが、流石は有馬喜兵衛、一流を爲したゞけに、同じ負けても負け方が見事でございます、宮本武藏、青木城右衛門に於ても感心をして、此の激しく吹いて來る針を拂ひながら、尙ほ手許に七八十本殘つて居るといふ所まで見極めが付くといふものは實に非凡の腕前、又それを殘らず吹出さないで兜を脫いで降參した有馬喜兵衛も遖ばれでございます、總て何の勝負でも、勝つも負けるも時の運、負けるにしても綺麗に負けるが宜し、勝つにしても、汚ない勝ち方をするのは宜くない、十兵衛先生大層喜兵衛の腕前をお賞めになつて居ります、處へ



『頼——む』といふ聲、

『ドー——レ……何誰でござるか』

『手前は紀州の住人富田又兵衛吉次でござる』

『是は〳〵』と取次ぐ、
『宜い者が參つた、通せ』
『頼――む』
『ドーレ……誰方でございまするか』
『手前は前名神子上典膳事、小野二郎右衞門忠明でござる』
『是は〳〵……先生、小野二郎右衞門先生にございます』
『通せ………』
『頼――む』
『ドーーレ………忙がしくなつて來たぞ……誰方で』
『手前は京都今出川の住人吉岡憲法、十兵衞先生に御目通りいたしたい、宜しく』
『入らつしやいまし……大入々々』
『頼――む、手前は桃川如燕』
『頼――む、手前は富士松加賀太夫…』講釋や新内までやつて來た。
『各ゝ方はどうか愛宕山へお出でを願ひたい』ラヂオの放送と間違へるといふ有樣、十兵衞先生、悉くお喜こびになつて、酒宴の御用意、打解けて諸國の物語、武藝の話に時刻の移るのを知らぬ位でございます。



しなびた辨慶

追々武藝自慢の者は我れ先にと福井の城下へ集つて參ります、三國屋といふ旅籠屋に泊つて居る武藝者といふのが梶原源左衞門といふ梶原流の柔術の先生、鷲津七兵衞といふ穴澤流の投棒の先生、中條五郎兵衞といふ中條流の劍術の先生、此三人

が一つ宿へ泊り合せて、一緒に酒を飲みたがら武藝の話をして居りました。スルと此の三國屋へ丈の小さい、六十七八になる老人がチョコ〳〵と入つて來た。

『コレ〳〵泊めて貰ひたいな』若い者が見ると色の黒い木綿のゴツ〳〵した衣服に茶の袖無しのやうたものを着て、短かい刀を一本差して居るが、見すぼらしい百姓の爺さんらしい樣子でございますから、

『エ――誠に濟みませぬが、手前共ではお宿が出來ませぬ』

『何故だな』

『今度此の福井の御城内で、武藝の大試合がございます、それで日本中の武藝の先生方が此の福井の城下へお出でになつてお泊りになりますので、其の先生方の御宿をするやうにと、御城内から有難い御達しでございます、それで當分は武藝者の先生の外はお泊め申さないことにいたして居ります。ヘエ』

『私も武藝者だよ』

『御冗談を仰しやつてはいけませぬ、貴下のやうな年を老つた武藝者が……』

『馬鹿を言ひなさい、武藝者だつて若いと極つて居るか、段々に年を老つて來れば、爺いにもなる。

『左樣でございますか、ではお上り下さいまし』それから二階の座敷へ通される、其所へ主人が出て來て、

『嘸お疲れでございませう、貴下樣は武藝の先生で在つしやるさうで、何といふお名前でございますか、伺ひたう存じます』

『ア、名前かい、名前もあつたのだが、何所かへ失してしまつたよ』

『御冗談仰しやつてはいけませぬ、名前を失すなどといふことはございませぬ、何と仰しやいますか、御本名をお名乘を願ひます、お名前を御城内へお屆けをいたしますから』

『さうか、本名を名乘れといふなら仕方がない、何を隱さう我こそは……』

『オヤ〳〵』

『源義經の家來に去る者ありと聞えたる武藏坊辨慶とは乃公のことだ』

『冗談仰しやつてはいけませぬ、そんな蒼びた辨慶があるものちやアございませぬ』

『空氣が抜けたから蒼びたのだ』風船だと思つて居る。

『それは嘘だが、何でも宜からう』

『イエ宜くはございませぬ』

『イヤ何でもよからうといふ名だよ』

『そんな名はございませぬ』

『ないと云つても仕方がない、此の頃では唯よからうといつて居る、それで宜からう』

『洒落てはいけませぬ、どうか本當のことを仰しやつて下さいまし』

『本當のことをいへば與一兵衛だ』

『與一兵衛……妙な名だな』

『時に亭主、武藝者ばかり泊るのだといふことだが、少しは武藝の出來さうな奴が泊つて居るかえ』

『どうか物を仰しやるなら、御叮嚀に願ひます』

『何故だ』

『何故だと仰しやつて、少しは武藝が出來さうな奴などといふことが聞えたら大變でございます、手前共へお泊りになつて居るお方はお三人樣でございますが皆日本一の先生ばかりで…』

『ハ、ア、黍團子でも賣るのか』

『そんな物は賣りはいたしませぬ、一人は鷲津七兵衛と仰しやつて棒をお使ひなさる先生で』

『ハ、ア犬殺しか』

『犬殺しではございませぬ』

『だつて棒を使ふといふから』

『棒を使つても犬殺しではございませぬ、穴澤流の投棒の先生でございます』

『さうか』

『モウ一人は梶原流の柔術の先生で梶原源左衛門樣、今一人は中條流の劍術の先生で中條五郎兵衛といふ偉い先生で……』

『アハ、、、、さうか、それでは柔術や劍術の眞似ぐらゐやると見えるな、ちよつと挨拶に來いと、其の三人に言ひなさい』

『オツホツホ、狂人だ此の爺さん』驚いて主人は、三人の居る座敷へ參りましたが玆に一つの騷ぎが起る、抑も此の老人は何者でございませうか、次號のお預かりといたします。



落語　ふるいけ

春迺家朧演
谷脇素文畫

伯父『與太、此所へ來い』與『ウオーイ……』伯父『何といふ返事をするのだ、お前のやうな馬鹿でも困るな』與『伯父さんのやうに、口やかましくつても困るな』伯父『あれだ、仕様のない奴だ、お前は此所の家へ何しに來たのだと思ふ』與『何だか知らないけれども、お前のやうな馬鹿は伯父さんの所へ行つて居ろといふから來たんだ、馬鹿は皆な伯父さんの所へ來るのかい』伯父『そんなことをいふから馬鹿だといはれるんだ、何も馬鹿が乃公の家へ來る譯ではないけれども、乃公が此の通り嚴ましくいつて、子供に小言をいふから、親のいふことを聞かないやうな馬鹿は、乃公の所へよこすのだ』與『ヘエー、ぢやア伯父さんは馬鹿の先生だから大馬鹿だね』伯父『あんなことを言やアがる……唯、お前を家へ置いてるんぢアやないぞ』與『私だつて唯居やアしない』伯父『どうしてゐる』與『三度三度飯を食つてらア』伯父『あれだ、始末にいけねえ奴だ、親父がお前を家へよこしたのも、つまりは乃公の商賣を覺えさせようといふのだ、伯父さんは何の商賣をしてゐるか知つてゐるか』與『知らないよ』伯父『さういふ奴だ、世話になつてゐる家の稼業を知らない奴があるか』與『何だい伯父さんの商賣は…』伯父『ド印だ』與『エ、』伯父『ド印だよ』與『ド印……ヘエー、どうも此の間中から様子がをかしい／＼と思つてゐたが……』伯父『何がをかしい』與『よく伯父さん、色々な物を風呂敷に包んで脊負つて歸つて來るだらう、扨はあれは皆んな一件ものだね』伯父『一件ものとは何だ』與『泥棒物だらう』伯父『馬鹿野郎、泥棒などをしやアしねえ』與『だつてド印だといつたぢやアないか』伯父『ド印といつたつて泥棒ぢやアない、道具屋だ』與『兎が跳ねるだらう』伯父『何故』與『道具屋おッ月様見て跳ねるッて……』伯父『それは十五夜だ、私は道具を賣買してゐるのだ』與『私も道具屋にならうかな』伯父『駄目だよ、お前のやうな馬鹿だと目が利くやうになるには中々だ』與『大丈夫だよ伯父さん、目は利いてるよ』伯父『利いてる……』與『ウム、伯父さんが其處に居るのも、伯父さんが笑つてゐるのも能く見えらア』伯父『馬鹿ッ、當然だ、其の目のことぢやアねえ、此の品は何所の出で何といふものだといふことが分るやうにならなけりやアいけねえ』與『そんなことは譯はない』伯父『分るか』與『分るとも』伯父『それは感心だ、ぢやア此の鐵瓶は、何所の出だか分るか』與『分るとも、

錺職の出だ、此の左様は瀬戸物屋の出だらう、どうだい伯父さん』伯父『あれだ、仕様のない馬鹿野郎……婆さん、其所で笑つて居ちやアいけない、お前が笑つて居るから、此の馬鹿が何時までも直らないのだ』婆『だつてお爺さん、與太郎を相手にして、向になつて腹を立つて居る其の顔を見ると、可笑くつて〳〵……』伯父『仕様のない婆さんだ、……宜し〳〵モウ宜いから表を掃け』與『へエ〳〵』與太郎表を掃き始めました伯父『コレ〳〵何故さう塵埃が立つやうな掃き方をするのだ、今日のやうな好い天氣で、風があつて砂の立つ時には、水を先に撒いてから掃くんだ』與『へエ…… よく小言をいふ爺さんだ、爺さん婆さん毛唐人と……』○『ヤイツ此ん畜生、宜を掛けやアがれ、何だつて乃公の足へ水を掛けやアがるんだ』與『へエ、貴下の足にですか、オヤオヤ』○『何がオヤ〳〵だ、何だつて掛けるんだ』與『宜うござんせう、水を掛けたつて腐りやアしませぬから』○『何をいやアがるんだ、水を掛けて腐るものか』伯父『アツ與太郎の奴、往來の人に水をぶツ掛けたと見える……どうも誠に相濟みませぬ、何分是は愚な奴でございまして、御詫を申上げますからどうか御勘辨を……コレ與太、氣を附けろ、誰が往來の人に水をぶ



ツ掛けろといつた、ナア[illegible]』與『へエ、どうも相濟みませぬ、何分是れは愚な奴でございまして……』伯父『馬鹿をいふな、仕様のねえ奴だ、モウ宜い〳〵、其所は後で乃公が掃くから、お前は二階を掃いちまひな』與『伯父さんの前だけれども、二階を掃いちまつたら、平家になつちまふだらう』伯父『あれだ、馬鹿のくせに理窟を言やアがる、二階の塵を掃けといふのだ』與『そんなら詞は分つてゐる、是から氣を付けて口をお聞き』伯父『何を言やアがる、早く掃いてしまへ』與『へエー』トン〳〵トントン與『アッハッハ二階の方が宜いや、埃が通らなくつて危なくない』伯父『あんな事を言つてやアがる、二階に埃を通られて堪るものか……婆さんの前だが、あんな馬鹿にも困つたものだ、兄貴から頼まれて仕方がなしに引受けたのも、彼奴をどうかして物にしてやらうと思ふからだ、それだのにあれぢやあ見込がない……アツ、冷たい、二階から水が垂れて來た、彼奴ら又何か惡戯をしてゐるな……オ

イオイ與太、何か花活でも倒しやアしねえか』與『イエ、花活なんざア倒しやアしませぬ、水を撒いたんで』伯父『ナニッ水を撒いた……』與『ヘエ、先刻伯父さんが、此んな好い天氣で、風の吹いて砂の立つ日には水を撒いてから掃けといつたから、今水を撒いた所で、是れでは足りませぬか』伯父『馬鹿ツ、あれは表のことだ、二階の疊の上へ水を撒く奴があるか馬鹿野郎、頭の上へ水が垂れるぢやねえか』與『滑つて能く流れませう』伯父『何を言やアがる、下りて來い』與『だつて二階へ上がれといふから上つたので、そんなに上つたり下つたりすると、米相場だと大變な騒ぎだ』伯父『生意氣なことをいふな、何をしてゐるんだ』與『ヘエ、今四方を見渡してゐるんで』伯父『何だつてそんな事をするんだ』與『若し火事があつたら知らせようと思つて……』伯父『餘計なことをするな、早く下りて來て、店へ行つて番をしてゐろ』與『ヘエー』



伯父『コレ〳〵何だつてさうドンドン下りて來て、火鉢を跨いで行くんだ、アレッ猫を蹴飛ばして行きやアがる…コレ〳〵何だつて火箸を鼻の孔へ突ツ込んで、チリンチリンいはせてゐるんだ馬鹿野郎、世話の焼けた奴だ』與『ヘッ、爺いのくせに色々なことを言やアがる、表を掃けといふから掃きやア、二階を掃除しろといやアがる、厄介になつてゐると思へばこそへエ〳〵いつてゐるんだ、思へば食客ほど辛いものはないなア』伯父『何をダッ〳〵いつてゐるんだ』與『ヘエ、此方のことで……』

(早口の大阪辯)○『ちやと御免やす』與『ヤア來たな……何だい伯父さん』○『私はなア、中橋の加賀屋佐吉から参じましたが、先達仲買の彌市が取次ぎました道具七品、あれは翁亭の茶入、箱は黒柿ぢやと思うとりましたら箱は木が違うやさうで、念の爲ちやとお断り申して居りますさかい、金海、、、すは赤の茶碗、あの茶碗は赤味もあり、ねこかきもあり、良い茶碗だす、丸釜尻張阿彌陀堂三作の釜、、、箱書は宗丹にござります、並びにのんこの茶碗、古池や蛙飛込む水の音と申しまするは、風來坊正筆の掛物、猩々翁布袋の一軸、澤庵木庵隠元禪師張り交ぜの小屏風、あの屏風は私が旦那はんの旦那寺の兵庫の和尚が好みの屏

風にございますさかい、あの屏風にいたします、ちよと口上お取次を願ひます』與『ワツ ハツ ハイ面白いな、何だか知れないけれども、ペラ〳〵いふんで、聞いてる内に前の方を忘れてしまつた、其のへうぐのへうごツてえ所をモウ一遍やつてお呉れ』○『ハイ、私の言ふこと分らんかいな、私大阪者やよつてに、東京の人は言葉が分らんから是で悠くりいつてますのや、モウ一遍申しますさかい、あんばい聞いてお呉んなはれ、先達仲買の彌市が取次ぎました道具七品、あれは翁亭の茶入、箱は黑柿ぢやと思ふとりましたら桑ぢやさうで、木が違うて居りますさかい、念の爲ちやとお斷り申します、宜しいか、金海すはまの茶碗、あの茶碗は赤味もあり、ねこかきもあり良い茶碗にござります、丸釜尻張阿彌陀堂三作の釜、箱書は宗丹にござります、並にのんこの茶碗、古池や蛙飛込む水の音と申しまするは、風來坊正筆の掛物、猩々翁布袋の一軸、澤庵、木庵、隱元禪師張り交ぜの小屏風、あの屏風は、旦那はんの旦那寺の兵庫の和尚の好みの屏風にござります……』與『ワツ ハツ ハイ其所だ〳〵面白いのは、モウ一遍言つて見な』○『私物貰ひぢやおまへん』



伯母『コレ〳〵與太郎、何をいふんだえお前は、お客樣に向つて大きな聲で笑ふといふ事がありますか』與『だつて伯母さん、屏風が和尚になつたんだとさ。化物屋敷だね』伯母『そんなことをいふものではありませぬ……入らつしやいまし、どういふ御用でございますか、是は愚者でございまして、何にも分りませぬ、どうか私に仰しやつて下さいまし』○『難儀やなア、貴下お内儀はんだすか、今此の人に二遍言うて、口が酸くなつてしまひました、モウ是れツきり言はんさかい、あんぜう聞いてお呉んなはれ、私は中橋の加賀屋佐吉から參じましたが、先達仲買の彌市が取次ぎました道具七品、あれは翁亭の茶入、箱は黑柿ぢやと思ふとりましたら桑ぢやさうで、木が違うて居りますさかい、念の爲ちやとお斷り申します、金海すはまの茶碗、あの茶碗は赤味もあり、ねこかきもあり良い茶碗でござります、丸釜尻張阿彌陀堂三作の釜、箱書は宗丹にござります、並にのんこの茶碗、古池や蛙飛込む水の音と申しまするは、風來坊正筆の掛物、猩々翁布袋の一軸、澤庵木庵隱元禪師張り交ぜの小屏風、あの屏風は私の旦那はんの旦那寺の兵庫の和尚が好みの屏風にござります、あの屏風にいたしますさかい、ちよと口上お取次ぎ申します』伯母『オヤ〳〵ハイ〳〵、誠に好いお天氣でございまして、それが何でございま

すよ……』與『ヤーイ伯母さん、何言つてゐるんだい、モウ歸つちまつたよ』伯母『オヤオヤさうかい、厭だよ』伯父『オイオイ婆さん、何をしてゐるんだ、與太郎なら仕方がないが、お前が取次に出てどうしたんだ、分らないのか』伯母『イ、エ、先方樣の口上はチヤンと分つて居りますよ』伯父『分つてるなら宜いが、何の使だ』伯母『中橋の加賀屋さんからお使ひで』伯父『ア、さうか』伯母『別に大して用といふのではないので仲買の彌市さんといふのがございませう』伯父『其の彌市がどうしたのだ』伯母『何でも其の彌市さんといふ方が取付き物がして、氣が違つたのださうで』伯父『ナニ彌市が氣が違つた、そんなりぢやアないのだが、餘程騷ぐやうかい、病院へでも入れたんだらうな、早速見舞に行かなくつちやならないが、病院は何所だといつてゐた』伯母『何でも兵庫だとさうで』伯父『ナニ兵庫、大層違い所の病院へ入れたものだな』伯母『イ、エ病院ぢやないやうで、阿彌陀堂へ入つたのださうですよ』伯父『妙な所へ入つたものだな』伯母『それで旦那寺の和尚樣に猩々と布袋樣を呼んで來て貰ひたいといつたさうで』伯父『ウーム、大分狂つてゐるな、可哀相に』伯母『食物なんぞも大分變つて居るので、澤庵に隠元豆が食べたいんださうで』伯父『變な物を食べたがるな』伯母『さうかと思ふと、近海物のお魚が食べたいといつたり、無花果だの酢甘も食べたい、序だから柿も取つて貰ひたいといつてゐるさうで』伯父『をかしいな』伯母『それで瓢箪を箱へ入れた所が入り切らないから茶碗を入れてやつた所が、違つてるといふので叩き付けて壞してしまつたさうで』伯父『何だか些とも譯が分らないな』伯母『私には何だかサッパリ分りませぬ』伯父『それから何と云つたえ』伯母『それから屏風を立つて、眞赤になつて猫に引ツかゝれて、翁の面を被つて、踊を踊つて歩いて、のんこのしやアですとさ』伯父『ウフツ 何をいふんだ、お前の言ふことは乃公には些とも分らない』伯母『それは貴下狂人のいふことですもの、何を言ふか分りやアしませぬよ、先方樣の口上の通り言つてるんで、何でも其の道具七品とかをどうとかして、古池へ飛込んでしまつたんですつて』伯父『何だ彌市が古池へ飛込んだ、それは大變だ、あの男には道具七品といふ貸があるんだが、買つて飛び込んだかしら』伯母『イイエかはず飛込みました。』



癇癪が若し起つたら鏡にて己が觀相してみるがよし

家庭笑話

□子供と肝油

母（女客に）『肝油を服ませますには随分骨が折れますよ。その度に十錢づつやつてやつと服ませるのですから……』

客（傍の子供に）『坊ちやん、そんなにお金を戴いてどうなさいます？』

子供『溜めるの…』

客『溜めてどうなさいます？』



子供『お母さんがまた肝油を買ふの』

□聞きたくない

壇上の辯士、時計を見ながら、『エヽ、私の喋舌る時間は、僅か十分間しかないのです。何處から始めて好いか解らないな』

その時彌次『九分目から始めろッ！』



□平素が肝心

細君『衛生の本に出てゐましたが、眠つてゐる間は、成る丈け口を塞ぐやうにするのが、身體の爲にいゝさうですね。妾もこれからさうして見ようと思ひますわ』

亭主『いよいよ、それに取りかかる氣なら、先づ以て、起きてゐる間から、少しづつ行つて見たらどうだい』



□御挨拶

或る男、友達の家へ招かれた處、友達の細君はちよつとした美人だつたので、御馳走になつた後、お世辭もこめて、

『君の細君はなかなか美人だね。君が嫉かないのが不思議だテ…』すると友達、

『いや、實は大いに嫉くのだ。で、妻が心を動かす様な（立派な）人は、斷然饗應にも招かないことにしてゐるのだ』



□凸山の買ひ方

敎師『凸山さん、二十錢で一本三錢の胡瓜は何本買へますか』

凸山『七本買へます』

敎師『一錢足りないことはありませんか』

凸山『一錢位は負けさせます』

□碁打ち

亭主『今度建てた借家は、成るべく碁打ちに入つて貰ひたいものだ』

女房『何故です？』

亭主『滅多に身體を動かさないからさ』



□惡い癖

父親『コレ、御飯を食べるのに、何故胡坐をかくのだ、癖になるぞ』

息子『チヤンだつて、胡坐をかくぢやないの』

父親『俺は、モウ癖になつちやつたんだから、どうでもいゝんだ』



姫路城の人柱

渡邊默禪 作
井川洗厓 畫

切腹と打首

姫路百萬石の大守に封ぜられた徳川家康の外婿池田三左衛門尉輝政が、家康の内意を承けて慶長戊申十三年、居城改築の大工事に着手してから六年目に病歿し、嫡男武藏守利隆、その後を繼いで工事を進め、やうやく九分通の竣工を見たといふ慶長甲寅十九年、春の三月初、建築主任の普請奉行日置織部、矢部内匠の二人は、思ひもよらぬ職務上の責任から、切端詰つて切腹しなければならぬ破滅になつた。

春雨のしとしとと降る或る夜ふけ、大工頭の岡部八右衛門は織部の屋敷に呼出された。いつもと違つて庭園から飛石傳ひに用人が灯をとつての案内、沈丁花や連翹木蓮の闇に匂ふなかを拔けて、奧の茶寮に――見ると同僚内匠も同席してゐる。爐の釜には松風の音もなく、陰欝な短檠の火にうつる二つの顔が、いつになく苦い色に曇つたのを氣づいた時に、八右衛門はどうした譯かと怪しんだ。

『エ、た、た、只今はお召を……な、何か急の御用でも……』

茶立口の方から入つた八右衛門は、恭々しく首をさげた。平生無口の、しかも吃勝の彼は、是だけの挨拶をするのも、氣づまりで面倒臭かつた。

『おゝ、夜陰惡路の所、よう參りくれた。もそつと近う。』織部のへの字に緘めた口が先づ解けた。

『はい。』一膝いざり出す。

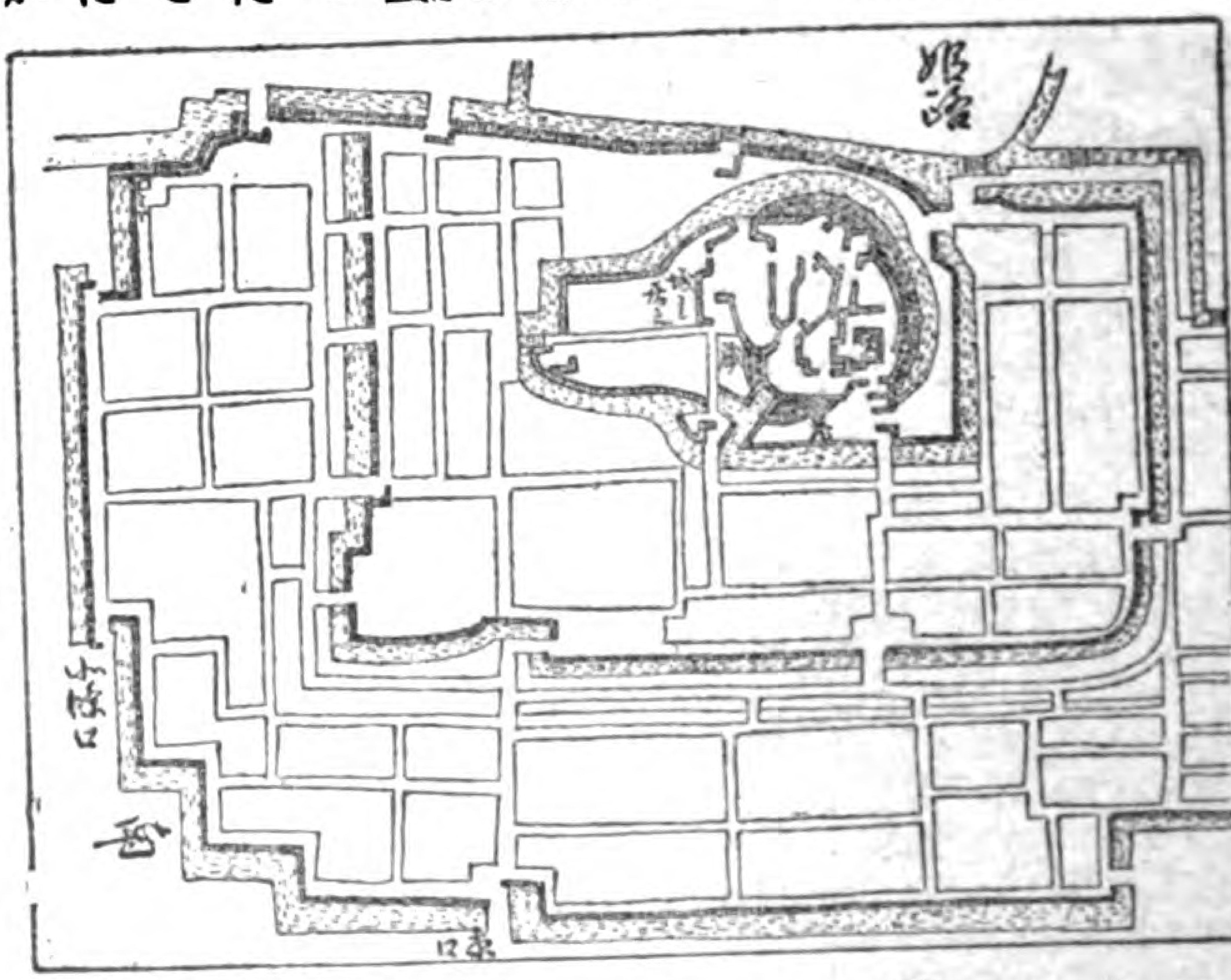
『八右衛門。昨年の春であつたのう。其方を始め二人の弟子に足留を申附けい、城門外一歩も出すことは罷り成らぬぞと御家老からの嚴命に違背もなりかね、憫然ながらこの正月にも歸宅を許さずして、作事小屋に年越をいたさせたやうな仕誼。ちようど一年餘りにも相成るが、少しも上を怨み、身の不自由を喞つ體もなく、晝夜をかけての必死の骨折、いつもにこ〳〵と悦びの笑顏を見せて働いてくれる。その精勤に對してはかく申す

織部、また御同席の内匠殿も共に心から感じ入つてのう。御前體へも屢々お取做いたいたゝめ、殊の外の御滿悦、この初春、御祝儀とあつて御紋服一領、金三千疋の下され物ぢや。このことは其方有難く心得居るであらうな。』

『はい。け、け、結構な物を頂戴して、あ、有難く思はないやうな者なら、そ、それは日本人ではござりませぬ。は、働かせるための御用、働くから御褒美も下さる。下さるから働く、あ、當然で。へへゝゝ。』

吃つた詞で頓狂なことをいつては笑はせる、それが飄逸な八右衞門の平生であつた。奉行だちが何か叱らうとして險しい顏を見せても、不生頂な彼の口から蟹が泡でも噴くやうにぶつぶつとこぼれて出る諧謔をくらはされると、縒をかけた顏の筋は笑ひの爆發にぷツつと切れ、せつかく言はうとした叱言も瓦斯のやうに放散するのが例。けれどもこの夕ばかりは二人とも眉に寄せた小皺をそのまゝ、くすりともしなかつた。

『むゝ。日本人でない？いしくも申した。その魂を見込んだればこそ、我等が上へも推薦いたいて頭に取立て、ちやうど



七年の間、一心合體の働きも共にいたいて參つたのぢや。この三人は申さば鼎の脚、一つ缺けても鼎は立たぬ。いや、大切なる城普請は成就せぬのぢや。所がのう、八右衞門。此處に面倒千萬なる事が差起つて、その鼎の三脚ともに、碎けなければならぬ破滅に相成つた。誠に殘念至極の成行でのう。』

織部は聲を震はせた。と内匠はそれを裏書するやうにほうと長い太息の音を聞かせる。

『へえー。』八右衞門は訝かしさうに『まるで、な、な、謎のやうなことを……か、か、鼎の脚が三本碎けると仰りますと、さ、さ、三人ともに、な、何か不調法の筋あつて、や、役目、ふ、不首尾になつたと申すやうな。』

『いや〳〵、左樣な輕いことではない。我等兩人は切腹、其方も追つて打首といふ程の一大事ぢや。』

織部の語氣は強く、且つ悲しげに囁いた。

『ホゝー。』八右衞門はぽうと二人の顏を瞶めて『せ、せ、切腹。そ、それは一體、何のお咎で。』

『されば。』内匠は促込んだ調子で『最初其方に御門を申附け

ろ折、其人から、古來城普請を引受けて一命を全うした大工頭はあまり御座りませぬ、私の父などは仁政を專らとした太閤殿下の御構想によつて、何事もござりませなんだが、近くは江戸城、名古屋城の御普請にも、出來の後一命を召揚げられた大工も二三人は御座つた趣き、左樣なことにはなりませぬか、と相尋ねたであらう。』

『はい、お訊き申しました。あ、あ、汗水流して懸命に働いた揚句、掛替のない、こ、こ、この首をコロリとやられては、と、これほど馬鹿々々しい御奉公はござりませぬからな。ハ、ハ、。』

『その叫、我等は只笑に聞流した。他の大名國主ならば知らぬこと、天下に仁慈の聞え高き三左衛門尉樣におはせらるゝ、大功をたてた大工頭棟梁ならば、莫大の恩賞こそあれ、鳥獸のやうにむざ〳〵命を召すなどの暴虐非道の御沙汰があつてよいものか、戯けたことを申す奴ぢや、とな、左樣に答へたゝめ、其方も安堵いたしたであらう。』と織部が云ふ。

『はい、左樣でござりました。た、た、卵を産むだけ産ませてから絞殺すのは、め、め、難獄か惡辣ばかりでござりますでな。ハ、、。』

『いや、笑ひどころの沙汰ではないぞ。』内匠が代つて言つた。『所がぢや。もう一息、九分通りの出來と申す此の頃に到り、當家重役だちのうちに、城内の要害機密を明して造營いたさせた八右衛門、外二人の內弟子共を、その儘城外に放つ譯には相參らぬ、憫然ながら天下の御爲、打首にして機密漏洩の途をふさぐが上乘、然らずば毒藥を服用させ、一生の瘖啞となして城中に養ひ得させい、との議論が湧いてまゐつた。』

『ホヽー。』八右衛門はにたりと笑つた。

惜きは命よりも名

『其の儀について我等兩人呼出され、月番家老池田大學殿より、八右衛門へその旨吃と申附け、手落なきやう計へとの御諚には、我等はたと當惑いたいた。畏まつたと答へて退出はしたものゝ、さて何として其方に左樣な無體を申聞けられよう。最初の約定なければまだしも、其方から首は大丈夫かと聞かれた時に、念に及ばずと請ひながら、今更命をくれとは、信義を顧に戴く武士の口から申されぬことぢや。分けて其方は木下肥州（豐太閤の甥、肥後守家定、舊の姫路城主）の代から當城下に住居、我等の贔屓にいたす天下一人の名匠、しかも我等が衆議をおしのけて、推薦いたいた者、それをいかに百萬石の御家の爲とはいへ、むざ〳〵打首にいたすとは此の上もない無慈悲。毒を與へて瘖啞にするのは大に冗をかけた慘忍非道、血あり涙あるものゝふの爲し得る業ではない。仍つて內々談合の末、かくなつては最早止むを得ぬこと、上への申譯に刺ちがへて自刃と決定いたいたのぢや。』

かくいふ內匠の顏の皺は、露骨に無念の思ひを描いて、落着のない眉の運動をくりかへさせた。その跡を繼いだ織部は、反

默に沈鬱な低い聲だつた。

『八右衛門。其方はのう。ちよつと窓口の方を伺つて見て『ちやうど幸ひの雨ぢや。今宵のうちに弟子共三人、ひそかに城内を忍び出て、いづれへなり他國に逐電いたいてくれ。上に對しては不忠のやうではあるが、これも人の世の情、政道の仁を示すため、我等の身にかへて助け得さすのぢや。さ、此處に五十金を調へてある。これを路銀として早々に立退け。御門口の切手も三枚遣はすによつて、衛士共に見咎められぬやう、三人とも身装を變へ、油斷なきやうにのう。よいか。』

臺子の上から取つた一封金、それに門鑑までが與へられた。

と、痴人――少くも鈍感な子供のやうに、眼を眠たさうに瞬くして、ぼかりと半分口をあけて、無關心ににこ〳〵しながら聞いてゐた八右衛門は、ぺろりと唇を一舐してから

『せ、折角でござりますが、旦那、これは戴きませぬ。お、お返し申します。』

『何故ぢや。』　織部は意外らしかつた。

『い、要りませぬ。わ、私の、か、體は、普請の出來揚らぬうちは、あの作事小屋を、は、は、離れる譯にはまゐりませぬでな。いや、わ、私は、すつかり仕揚つた私の仕事の出來榮を見て、あゝ是でやつと重荷が下りた、た、た、丹精した甲斐があつた、自分ながら美事な物だ、後の世までも八右衛門の名が残るぞッと、よ、よ、悦んで見たいので。その悦びの日の來るのを指折かぞへて、た、た、た、娯みに待つて居たのでござりさすよつには。』

『これは又異なことを。爰にはこもの。いまさま自身の務にお手入に不肖と睨み、槍と鑿とに私財を打込んだ名人が種として事にはさもあらう。左様に考へるのは無理もない。ぢやが八右衛門。此の城落成の日は即ち其方の命の消ゆる時、村上の五郎の城は取り乱さず其方が冥途へ旅立つ餞の城であるぞ。と知りつゝのめ〳〵と死を待つといふのも不覚千萬、此の上もない愚かな振舞ではないか。』

『いや、その、お、お、愚かな奴になりたいのが、私の望。か、考へても御覧なされませ。か、かりそめにも百五十人の大工を手足のやうに使つてゐるこの八右衛門が、い、い、命が惜さに、百五十人の手下を振捨て、もう一息といふ大事な仕事を半端にして、す、す、術もあらうに、よ、夜中の逐電。ば、ば、莫迦なッ、を、男たる者が、そ、そ、そんな卑怯な真似が、で、で、できますかいッ！　八右衛門は、い、命が惜くはないが、名が惜い。名はどうでも、し、仕事に瑕がつくのが、く、く、口惜うございます。こ、この命よりも仕事が大事ぢや。そ、然うぢや。仕事が命よりも大切なのぢや。死ぬ覚悟をして、みつしり仕事を仕揚げろと仰るなら、嬉しいが、ど、泥足で砂を蹴つて、ち、ち、逐電しろとは、何のこと。お、お情のやうで、な、情ではございませぬ。八右衛門は是でもな、安土の城を築いた岡部又右衛門の孫でござりますぞ。あ、あまりに、ひ、ひ、人を見さげて、く、く、下さいますない。へ

ッ。面白くもないッ。』
ぎゆつと拳に摑んだ手拭で、はつたと膝を叩きつけた。
『おう、さすがにのう。』織部と內匠は思はず感激の目を交ち合せた。羞れば耳も赧くなる。
『つ、つまるところ、私さへ死んだら旦那方お二人は、せ、せ、切腹せずとも濟む話。こ、こんな埒もないことに、何の御屈托。へ、へ、へ、可笑しい。こりや可笑しいわい。アッハッハッハ。』激したかと見る顏は、忽ち明るく輝いて、どつといふ快活な笑に變る。二人は言ひやうのない嚴肅な氣分にさせられて、肺の底から出る息をぐつと嚥んだ。
『死ぬと極つたら旦那。さ、な、な、何にも文句はござりますまい。が、死ぬとしても一つ御願がある。』
『願とは？』
『此處はお茶の席でござりますな。茶の席でありながら、濃茶一つ出てゐないのは、こ、こ、こりや、如何した譯でござります。こ、是ではまつたく氣詰りぢや。す、濟みませぬが茶を一服お點てなされて下さりませ。そ、それを頂戴しながら、八右衛門願の趣意をゆつくりお耳に入れまする。』
『む〻。是はとんと氣のつかぬことを……承知いたいた。黃昏でもなし夜込でもなし、いはゞ春を名殘の不時の會。露地手水鉢の水も取替へず、花掛物もその儘、庵中有合の姿にて苦しうなくば、すぐと濃茶の支度に。おう幸ひ昨日手に入れたといふ柿へた形の茶碗、あれを其方への馳走に披露いたすであらう。』
『そ、それはお珍らしい。ぜ、是非拜見したいもので、さ、さぞ御美事なお品でござりませうな。』
『其方は大工の技ばかりか、茶道の嗜みも深いと見える。さてさてゆかしいことのう。』
『へ。ちや、ちや、茶の湯と聞いては、親、親の死目に逢はれさうもござりませぬぢや。ヘッヘッヘッ。』

死を宣言された彼、戰慄すべきその恐ろし



い魔の影に直面しながら、平生と異なるところなく從容として談笑しつゝあつた。一簇の冷たい光が青く壁に瞬いて、落花を含む雨のさびしく露地の飛石に接吻する時、織部は水屋を出て來て霜釜を風爐にかけ、閑かに炭手前にとりかゝつた。

日本一名城の由來

森林、岩窟から圍墻、柵木、土の壘、石の砦と次第に發達していつた我邦の戰鬪攻守法は、稻の城から水の城、山の城となり、つひに源義仲の火燧山城、平家の一の谷城のやうに、完全な支撑點を形づくるほどにまで進んだ。が、多くは防禦を目的とした半永久的の軍事要塞に過ぎなかつた。それが元龜天正以後の戰國時代に到つて、只敵を喰ひ止めるばかりでなく、攻勢的に利用され、野戰運動の根據地となすべき永久築城に變つた。夫以來山の城は舊式とされ、凡て新式の野城か平山城、即ち周圍の地形に重きを置き、軍の駈引に便利な平原か、勾配のゆるい傾斜地を選んで城堡を築いた。太田道灌の江戸城、織田信長の安土の城、豐太閤の大阪城、伏見城、和歌山城、姫路城、毛利輝元の廣島城、徳川家康の名古屋城、皆それである。

壽永三年、一の谷の城が陷つてから、元和六年伏見の城を毀つまで四百三十六年、この間全國の廢城一千八百二十八といふ夥だしい數である。徳川が天下一統の權を握つてから、自個安全の保護政策として諸大名に嚴命を下し、一切城を築く事を禁止し、不要と認めたものは片つ端から取毀たせた。それでも慶應三年までは百八十一城が現存した。此の內譯が幕府の直轄六、大名の居城百六十二、大名の特別主管十三。外に百二十六の陣屋、二十の要塞があつた。その百八十一城も明治二十二年、舊領主や管轄市町村に拂下を許可すると共に、惜氣もなく



ばた〳〵と破壊され、公園や田畑、住宅地などに變つて了つた。皇居離宮、及び陸軍兵營に指定されたゝめ、辛くも原形の全部もしくは一部を保存してゐるものは僅かに二十一城に過ぎない。

これらの古城に遺つてゐる黝ずんだ木の匂や、頽れた女墻の壁の色、苔蒸す一塊の瓦と礎石にも價高き三百年前の汗と血とが滲んでゐて、昔の跡を尋ぬる人だちを心から感激もさせ、魅惑もする。內堡外廓、水濠の位置、暗路銃眼の結構、凡てが巧みに戰術を應用して精緻を極めた點に於て、近代の歐洲築城學大家の論ずるところも、時代と兵器の相違こそあれ、歸するところ同一の秘訣を唱へてゐるに過ぎない。泰西の築城學がまだ傳はらない十五世紀に、どうして信長や秀吉家康などが、これだけの秘訣を理會し得たのか、確かに一つの奇蹟である――とは專門の兵術家だちから常に聞く語である。

日女山――即ち姫山城は正平元年赤松貞範の創築にかゝり、明治維新まで五百二十年、城主城代を更ふること十二姓十二代に及ぶ。豐太閤が播州を平げた時、大規模の改築を行つて本丸に三層の矢倉を造り、外曲輪も取擴げて全く舊觀をあらため、太閤丸といふ名を殘したほどであるが、羽柴秀吉、木下家定、勝俊の三代を經て池田三左衞門輝政の持城となつた。輝政は家康の次女源夫人（督子）を娶つて德川とは姻戚關係にある。家康が關が原の戰後、一族中から硬直にして德望ある輝政を選み出し、特に播磨備前淡路三箇國百萬石の大守に封じて此の城を守らしめたのは、豐臣系の異分子や、自分に反感をもつた左傾派の大名が、西國九州方面に少くないので、それを牽制し、喰ひ止めてやらうといふ政略から、大阪以南に一つの要塞地帶を設け、輝政をその衞戍總督としたものに外ならなかつた。が、太閤の改築した城のまゝでは面白くない。攻防兩つながら不備の點がある。で、輝政に內意を含め、慶長十三年更に修築の大工事を起させた。その設計は自身でプランを立て、圖面まで引いたと傳へられてゐる。何さま少年時代には今川義元から軍事教育をうけ、後に武田信玄と兵を連ねて甲州派の戰術を見學し、それから幾百回の實戰に甲冑をきたへあげた家康である。この設計圖を造るに際しては、あらゆる築城術の體驗や知識を傾けたことであらう。さればこそ、城郭研究の學者が「日本全國の城郭樓櫓中、姫路城の右に出るものがない」と激賞するほど、それほど戰鬪時の細心の注意と建築美術の巧妙とをその遺蹟に實證されてゐる。

「御門七十六、櫓が三十九、下を廻れば日が暮れる。ヨイ〳〵ヨイヤサ。」

これは昔、城下の盆踊に若いをどり子だちがうたひつれた鄕土藝術の一つ、姫路の自慢を高調した民謠である。それほどお城の面積がひろかつた。維新の際まで城內の石倉庫に秘められた貴重書類のなかに、城主が代々引繼いだ明細書があつた。それに依ると城門、櫓の數がやはり謠の通りで、彈藥、弓矢、米、鹽、瓦、幕、澁紙、毛氈などの倉庫が十八棟、鹽は千三百

兵粮藏、井戸の數三十。疊數が四千百三十八疊。天守閣だけでも千六百五十六疊を敷くほどの濶さ。その外神社が三つ、不動院などいふ社務所が二つもあつた。成程これでは城内を一巡したのみで日が暮れる筈。

この工事に用ゐた建築材料は大船に搭載されて續々飾磨の港に陸揚された。使役した人夫の數は一日千餘人と註され、普請奉行は七年間に四人交替、ほとんど不眠不休でこれを督した。當時の建築家は日本全國から雲のやうに集つて來た。先づ東大寺の大佛殿を造營したといふ禁廷木工寮の大工頭、從五位の下伊奈部伊勢守高經。家康が引立てた奈良大工の中井正次（幕府の大工頭藤三郎の祖）などいふ歴々から、京大工の矢倉池上、江戸大工の木原内匠、由良豐前、鶴飛驒といつたやうな第一流の巨匠。それに參加したのが加賀大工、能登大工、越中越後の大工數百人。斧の響、槌の音は遠く廣峰の雲をゆるがした。建築は城内ばかりでなく、城下に甍をならぶる米字八十八町をめぐつて東、北、南の三面に土の壘と濠とを設け、更に外曲輪の北條門外から飾磨港へかけて一大運河をひらくべく、幅二十間の堀割工事を行つた。（これは輝政病死のため中止されて疏水の目的も果さなかつた。三左衛門堀がそれである）

愚なる哲人、凡なる名人

と、この設計のうちに重大の軍機が一つ含まれてゐた。それは天守閣をはじめ、渡櫓、多聞の武者窓、高麗門の左右にとりつけた女墻の矢狹間——即ち號眼の各部に秘密の裝置を施したこと」、もう一つは城内西南の隅に造つた埋め門の機密——平生は閉鎖し、非常の場合にのみ開かる」一種の内陣。敵兵闖入の時に地雷火を爆發せしむるとか、一擧に數百人を陷沒させる大きい陷穽があるとか、或は拔穴の地下坑道があるとか傳へられてゐた——とであつて、この特別工事は非常に細かしく、優れた藝術的天才と手腕と、善良な人格とを持つ者でなければ、その設計圖を内覽させることさへ危險を感ずるほどのものだつた。夥しい大工をあれか是かと見渡したが適任者がない。困りぬいてゐる普請奉行日置將監の頭腦にふいと閃いたのが、城下京橋口の町大工岡部八右衛門の名。

八右衛門の祖父又右衛門は織田信長に見出され、天正四年、宮西遊左衛門と共に近江安土の城を造つて、當時築城の新生面をひらいた棟梁。高さ二十八間、桁行二十間、梁行十七間、七層の天守閣は、信長が羅馬宣教師の說を聞いて八右衛門に築造させた一城の核心であつて、當時の武士階級には確かに一大驚異とされた。その伜の二代目又右衛門は天正六年の姫路城改築、同十一年の大坂築城にも干與し、豐太閤の寵顧もうけたが、慶長三年に此世を去つた。三代目は名を改めて八右衛門と呼び、姫路の城下京橋口に住んでゐた。もう四十に一つを剩す齢。妻お勝とのなかにお妙と呼ぶ十七の美しい娘と、六つになる總領息子の佐吉とがあつた。母のおゆみは八十歳でまだ健在。是だけの家族を養ふにはあまりに貧しい生活で、をりをり

は血の滲むやうな饑餓に見舞はれる。
『あれは人間が二分・馬が四分・鹿が四分、合せて八右衞門とはよく命名たもの。その足らない所に嬶どの〻猿智慧を繼ぎ足させ、娘が傍から美しい鶴の羽で撫るによつて、家内安全、結構人で通つてゆく。女は萬代の氏神、やれ有難いものぢや。』

町の人だちにかう月旦されるほど、彼は第三者の眼にはのんきな、ぐうだらな、おめでたい人間に見えた。お世辭や愛想氣は露ほどもなく、いつも默りこくつて七難かしい顏をしてゐるか、さもなければ何が嬉しいのか、にこり〳〵と獨りで笑つてゐる。その心の動きがどんな經路を辿るのか、風の去來とひとしく、傍の人には分らなかつた。氣の向いた時には仕事場に籠つて、飯も喰はずにせつせと働く、かと思ふとごろりと横に、ぶらりと外に、寂然として、瓢々乎として、置達磨の如く瞑想し、鳶のやうに飛廻る。何を考へるのか、何處をのたくるのか、三日打通しに寢たツ切、五日も家に歸らぬことは珍らしくなかつた。併しこの馬鹿にしては奇蹟とも不思議ともいへ



るのがその作品。類を絶した非凡の才機と奇想な構想と、微妙な鑿の力と調和させて造りあげた彼の生産物は、つねに見る人の舌を巻かせた。大なる建築では神社佛閣、小さい美術工藝では箱か櫃の類。只一枚の扉を動かすことによつて、伽藍社堂の扉が自動的に開閉したり、廊下の縁をふむごとに雲雀や鶯の啼く音が足下に續いたり、また欄間に彫刻した天女の乳房を指で彈くと、天井で羯鼓と笙の奏樂が聞えたりする。さういふ怪奇的なものもあれば、用箪笥に鍵をかけず秘密の装置をしてあつて、倘しもそれを知らぬ盗賊などがうつかり開けようものなら、忽ち抽斗に手を咬まれて悲鳴をあげる、などの實用的な家具もあつた。それが評判になつて弟子も澤山についた。が、氣に向かない仕事は斷つて、氣分のよい時でなければ稼ぎに出ない、といふ不規律さに依賴者も次第に減る。弟子はごろごろして大飯を喰ふ。身代は鉋で削るやうに日に〳〵痩せてゆく。
『なア、もし良人。蛞蝓の廻國するやうに日がな毎日のらりくらりとしてゐずと、ちと稼業に身を入れてくださら

ぬと、どうにも仕樣がございませぬ。もう七つ屋にはこぶ品もなし、米屋は今日も……。』

『催促か。ふン、鶯の聲と聞流して置け。貧乏は私に附物。厭なら何處へなと。』

『また出てうせろかえ、何ぼなんでもこの齡で。』

『古狗ぢやあ、拾ひ人がないといふのか。アハヽヽ。まア辛抱して艫綱にすがつてゐろ。そのうちには好い潮があがつて來るかも知れない。』

『オホヽ。いつのことやら。』

『大方馬に角の生える時分ぢやろ。ハッハッハ。』

生きるよりは生かさねばならぬ責任のある主婦のお勝が、惠まれぬ家庭の惱みを訴へると、八右衛門はいつも茶化して平氣に嘯く。喰へねば飢死をする、死んだら米の苦勞もいるまい、といふのが彼の信條。

普請奉行の織部が彼を知つたのは、鵤村の斑鳩寺に彼が造つたといふ三重塔を見てからのことだつた。古い支那六朝の藝術にイオニア式とコリント式とを加味された飛鳥建築の粹を集め、法隆寺型の形式手法を巧みに應用して、高い氣韻と豐かな意匠とを隱れたすみぐ\にまで表現させた美しい高塔が、立體的の畫となつて青い空にくつきりと浮揚つた圓滿相を見あげた時に、織部は手を拍つて驚嘆の聲を放つた。それからすつかり八右衛門に惚込み、姫君上巳の祝ひに獻上すべく一つのおもちや箱を拵はせた。それは金蒔繪の美しい手文庫、なかに精巧な機關があつて、螺旋を廻すとひとりでに蓋が刎ねあがり、可愛らしい唐子人形が幾つも飛出して、阿蘭陀舶來のオルゴルの奏樂に合せ、手振をかしく踊り廻る。



そのころにあつては稀有の珍品だつた。

夫以來、織部は無二の八右衛門禮讃者となつた。

親しくして見ると單に技ばかりでなく、その人柄が妙に心を惹きつける不思議の魅力——仙人のやうな、聖のやうな一種の氣高い風格をそなへてゐることが分つたからであつた。さうした非凡の藝術家がすぐ近くに存在してゐることを、此の度の大工事にちよつとでも忘れてゐたのは、自分の失錯であつたと氣づいた織部は、いろ\/\と他の非難や苦情があつたのを押のけて、無理に彼を推薦した。

そして百五十人の集團から成る「ろ」組の大工頭となし、彼と秘藏弟子の晋吉、平助の三人だけに重大な機密工事を受負はせた。

人柱の悲願

部下三百人の大工だちは皆心から八右衛門に服從した。ほかの作事小屋には何かしら悶着があつて絶えず角芽立つてゐたが、彼の掌に伏せられてゐる「ろ」組の小屋だけは、一家族のやうにのんびりとした心持で働いてゐた。彼の引受けた中の曲輪九門の二重櫓、御天守道の埋御門もあらかた竣工して、是から内部の大事な構造に着手しようといふ矢先、突然禁足の嚴命、彼と二人の弟子は奉行直接のやかましい監視をうけるやうになつた。でも別段不平らしい樣子もなく、たまさか面會に來る妻子にさへ顏を見せずに、櫓に籠つてせつせと働きつゞけた。

所へ雷が落ちたやうな「打首」の御沙汰。

『エ、結構に戴きました。御美事なお器で。』

茶碗拜見も濟み、煙草盆菓子が出てから、八右衛門は『さて、お願ひの筋は。』と形をあらためた。

『おう、何とぢや。』

織部も内匠も共に耳を欹てる。

『ど、どうせ命を召さるゝなら、ひ、ひ、人柱にお立てなされて下さりませ。』

『えツ！人柱とな。』

兩奉行は不審しさうに、八右衛門の顏を見戍つた。

『へ。そ、それが私のお、お願。や、やくざ者の岡部八右衛門だが、お、お城の内證事を口外しさうな奴と睨まれて、こ、こ、殺されたとあつては末代までの恥辱。ち、祖父や親父へ對して、あ、合せる顏がござりませぬ。また池田樣ともあらうお方が、信長公でさへ一旦お取立になつた大工頭の首を打つやうな無慈悲なことはなさらなかつたのに、て、手柄を科に罪な殺生をしたといはれたら、て、天下の笑ひ物でござりませう。』

『いかさまのう。こりや正論ぢや。』

『ぢやによつて、死ぬなら犬死でなく、立派な男らしい死樣をして、あつぱれ八右衛門の奴、死花を咲かせたいのでござります。自分から進んでの命の献上、ひ、ひ、人柱に立つのなら、お殿樣の關り合つたことではないに依つて、お名前に疵がつかず、一擧兩得、こ、こ、こんなうまい話はござりますまい。へツへツへ。』

『ホー。したが八右衛門。人柱と申せば水神の怒によつて堤・橋梁などの普請が成就せぬ時、生きながら人を埋めるもの。我朝にては仁徳天皇の御代、茨田堤に武藏の強頸を人柱として沈め、又た清盛入道が兵庫に島を築く時、人柱をたてゝ潮瀬を堰き止めたといふ物語よりほかに例を聞かない。唐土にては赫連とやらが城を築く時、壁を錐で刺してみて若し錐が透るやうであれば、その工人を斬つて罰したといふ故事があるが、吾邦には城普請に際して左樣な慘たらしい業をいたした暴君があつたとは承はらぬ。堤の人柱といへども事成就せぬ場合に限つて、止むなく人を生埋にいたしたものぢや。然るに……。』

『ちよ、ちよ、一寸待つて下され。御兩奉行ともある御二人樣が、そ、それしきの事を御存知ないとは、さて〳〵情ないもの。例を舉げろと仰るなら、近い頃では先づ雲州松江の千鳥が城、去んぬる五年（慶長）堀尾帶刀殿が普請の折、町家の娘を人柱に立てたところが、成佛ができずに幽靈になつて天守閣の前に現れ、コノシロといふ魚を喰ひたい〳〵と泣いたさうな。次に讃州は丸龜城、生駒雅樂頭殿が築く折に城下を通りかかつた豆腐賣と甘酒屋とを引捉まへて來て、無理に生埋にしたその怨が殘り、雨など降る晩には城のまはりで、豆腐イー、甘酒イといふ觸聲。アツハツハ。お斷りいたしますが、私は人柱に立ちましても、決して化けては出ませぬから、御安心くださりませ。幽靈になるやうな奴ではホンの埋草。何の役にも立ちませぬぢや。』

硬くなつて聞いてゐた兩奉行の緊張した顏に、微笑の小波。

『そ、そ、惣じて城廓には、八門遁甲陣の方位を按じて繩張をいたし、き、き、氣禀活動、萬代不易の礎を立てるのが法。丑寅の鬼門を塞ぎ、西の方白虎の驚門、辰巳の杜門、未申の死門を淨め、青龍、朱雀、玄武の三門には守護神を祀る。この守護神には人間の生魂が第一。い、い、生埋となれば身は腐れても魂魄はその土に留り、永久に城を護るによつて、た、た、大敵取圍むとも落城はせぬものぢや、と親父から聞いて居りまする。さればこそ越前の丸岡、ほ、ほ、本多飛驒守殿は八年前の築城に十人の人柱を立て、と、と、鳥居左京亮殿は六年前紫城の平に城を築く際、領内百澤の丹後と申す九十五歳に老人が、進んで人柱に立ち、千秋樂を舞ひながら生埋にされたといふ話を、た、た、確かに承はりました。た、た、武田晴信が三萬の軍勢で二十日も攻めたてたが、そ、それでも落ちなかつた參州の長篠の城もやはり人柱。て、て、天文十二年、山内憲政が八萬の大軍で圍んでも、び、び、びくともしなかつた北條綱成の武州川越城。こ、こ、これも彌平、彌藤次といふ二人の忠義者が、ひ、人柱に立つた名城でござります。そ、それから信州松代の城もやはり、それでな。いや數へ立てれば、さ、際限がござりませぬて。ハツハツハ。』

八右衛門は吃りながらも明白なる說明を與へた。自分自身に投げつけた死の宣告文を悠々として讀みあげてから、さも愉快らしく哄笑する。さうした超人間の大膽な、ゆつたりした態度を見せつけられた二人の奉行は、兩刀の手前、赤面せずにはゐられなかつた。

『左樣か。これは珍しい話を承はつた。其方の申すところ一一道理、生きながら土に埋まつて當城の守護神となり、池田百萬石の御家に盡さうといふ忠烈の精神は、只感涙の外はない。その義人の魂に比ぶれば拔殼にひとしい我々。や、もう、恥入つたことぢや。』

織部は瞬きした、内匠は悄然と俯いた。

『と、と、飛んでもない。お、恐れ入りました。』

『兎もあれ、家老衆に申談じて見よう。或は上の御仁心、助命

の御沙汰があらうも知れぬ。なう、矢部氏。』
『さ、左樣の恩命を拜すれば、三人ともに祝着の至でござる。』
『いや。こ、かうなりや、私も男の意地。た、助けると仰有つても、た、助けては貰ひませぬ。ど、ど、何處までも人柱ぢや。ヘツヘツヘ。』
　夜は三更。咽ぶやうな玉水小笹の身慄ひ。

颶の如き決死隊の殺到

　八右衛門が人柱の願ひは池田家の重臣だちに大きな感動の渦を卷き起させ、興味のある問題としていろいろに論議された。この事が城主武藏守利隆（輝政の嫡男）の耳に入ると
『民百姓を守護するための城であるのに、逆さまに良民の命を生贄とするとは思ひも寄らぬ僻事。助命してつかはせ。』
といふ聲が懸つた。と、强情者の家老池田大學は、
『御諚ではござるが、本人自ら進んで一命を捧げ、護城の鬼となりたいと申す殊勝の望み、それを無下にお取捨遊ばされなば、忠義の道を杜ぐ不仁の御沙汰とも相成らう。』
と抗議した。その實は機密保全のため何處までも殺したいのであつた。すると八右衛門からも嘆願狀が兩奉行月番家老の手を經て提出された。



『弟子音吉、平助の兩人に申聞け候處、兩人とも得心、私同樣、人柱に相立ちたき心願に御座候。』
　これを見た利隆は落涙して

『さて〳〵健氣な者共。左程に望むものならば迷惑ながら心任せにいたし遣はせ。』

と聞屆けた。かくして秘密のうちに決定された事件は、どうして洩れたか、いつか八右衞門の妻お勝の耳に入つた。

『棟梁はじめ二人の弟子は打首になつて殺されるさうな。』

風のやうな噂も家族だちにとつては、心臓を打碎くやうな大きい哀音悲報である。

『えツ、大變ぢや。こりや怺うしてはゐられぬ。さアお妙や、一所にお城におぢや。』

後三日で建築の全部が出來揚らうといふ四月七日の夜、突如として城内に一大騷動が起つた。それは「ろ」組の大工百五十人大集團をつくり、二人の女を先に立てゝ、二の丸鵤門内の普請奉行織部の役宅に押寄せたのであつた。

ちやうどその際、織部は公務のため飾磨まで出かけて行つてまだ歸邸しなかつた。肝をつぶした門番の知らせに、用人の鹿野金十郎が玄關先に出て見ると、三張の提灯をつけただけで庭先一面眞黑の夥だしい人雪崩、わツわツといふ聲をたてゝ喧噪してゐた。

『や、こりや何事。』

駭いて目を瞬る下から、お願ひでござります、ござりますと口々に連呼して、わツといふ鯨波。



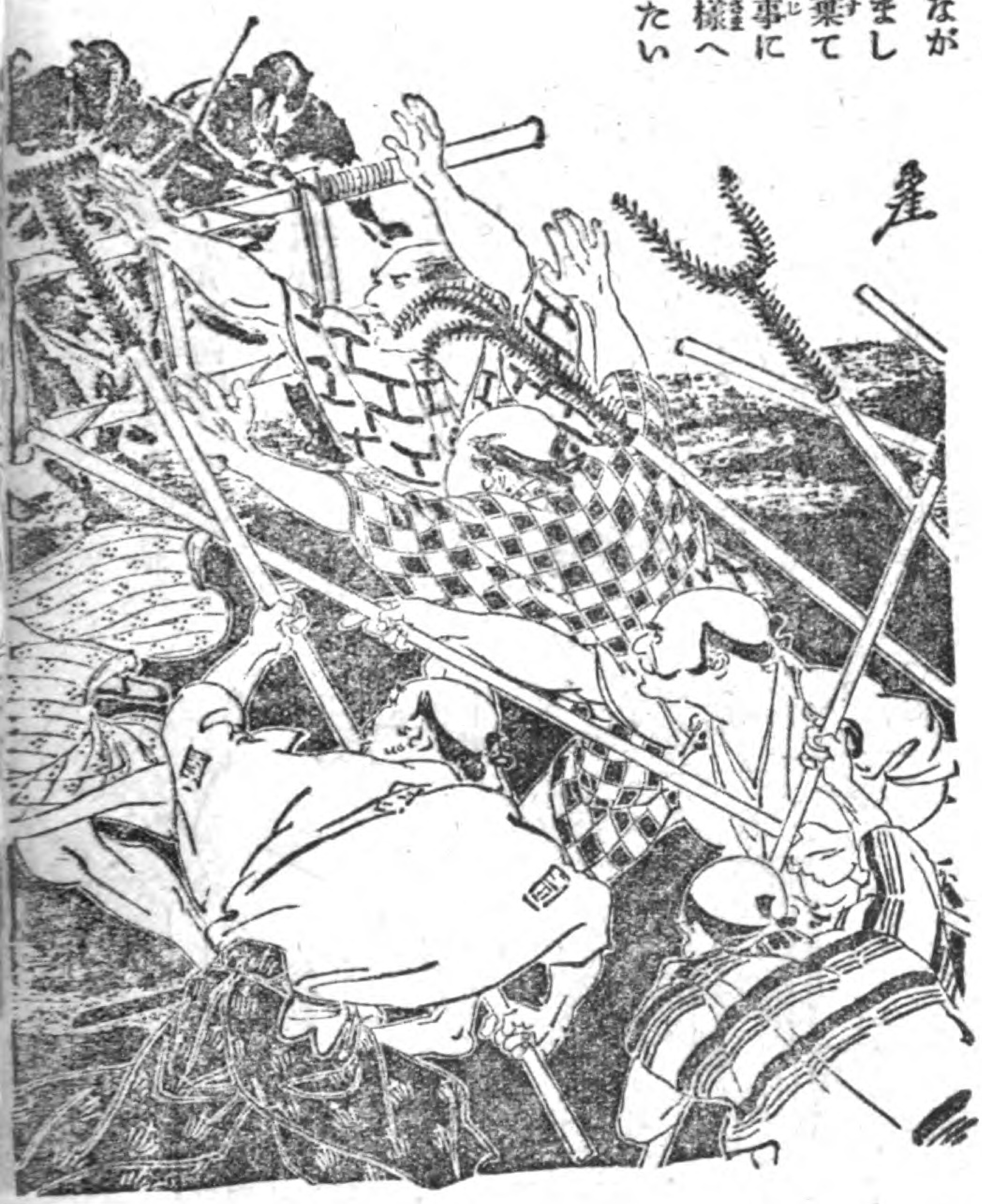
『鎮まれ鎮まれツ。何か願の筋あらば小頭及び元締の頭も居ること、何故その向へ談合の上、手順を經て穏かに申し出ぬのぢや。夜中徒黨を組んで當屋敷へ直々の訴へは、理非の如何に拘はらずお取揚はないぞ。引取れツ、引取れツ。』

金十郎威丈猛になつて怒鳴つたが、怒濤のうちに礫を投込んだほどの反響もなかつた。

『お前ぢや分らない。引込め！　引込め！　金柑天窓、お賓頭留奴！』

反抗の叫。押合ひ壓合ふ。その渦巻に吐き出されたやうに、ひよろ／＼と蹌いて玄關の式臺へ顚がり込んだ二人の女。

『もし、御用人樣。私は八右衛門の家内お勝でござります。これが娘のお妙。母子打揃うて不躾ながら夜中に罷り出ましたのも、一時も棄てゝ置けない一大事について、御奉行樣へ屹とお尋ね申したい筋がござりましてのこと。どうぞ御奉行樣にお目通りをお願ひ申しまする。』



『序に親の八右衛門、音松、平助の三人にもお會はせなされて下さりませ。』

どつちも涙聲。喚きに亂した髪は春の夜風に逆立ち、泣き腫した瞼の底に、殺氣を帶びた銀色の瞳が凄く輝いて、呼吸もせかく迫つてゐた。

『おう。八右衛門の内儀か。どのやうな事かは知らぬが、主人は本日飾磨へお出張、御歸邸は深更とも相成らう。一旦引取つて明日参られてはどうぢや。』

『おゐでがなければ、お歸りまでお待ち申しまする。夜があけても、明日の日が又暮れても、お目に懸らぬうちは、はい、此處一寸動くことではござんせぬ。のうお妙や。』

『えゝ。五年十年は愚かなこと、一生かゝつても、趣意を通さで歸るものかいな。母さま、今夜はこのお玄關さきに泊めて貰ふではありませぬか。』

『あゝ、それがよい。十夜講のお籠をしたつもりなら、板の間に寢るぐらゐは何でもない。さア、その手拭を敷きや。』

囃子ともどつかりと腰を据ゑた。

『然うだ然うだ。天の岩戸に隠れたら居催促。それが神代以來の御定法だ。こつちもそのつもりで賑かに神樂囃子でもやりながら、夜通し酒盛をして騒ぐとしようか。明日になつたら炊出米。エ、誰が仕事などやるものかい。莫迦々々しい。』

『やーい。奉行は何處へ逃げくさつた。金魚を盜つた鼬ではあるまいし、こそ／＼と逃隠れするとは卑怯な武家だ。やい、鼬奉行出ろツ！』



『出なけりや、此の見物を邪魔すぞツ。』

『やれ、やれ！ わアー。』

お勝囃子を應援する集團の熱罵怒號が、昂奮し切つた感情の表示となつて風雨のやうな噪音を背後に交錯させた。兇暴性を帯びた若者だちは暗を幸ひに、礫土塊などをとつて、玄關先に投げつけたり、庭の立木を捻仆したりした。ばらばらと飛ぶ石の銃彈は、扉に氣たゝましい音をたて、襖を貫き、小鬢を傷けた。用人金十郎はうろたへて奥へ逃込み、玄關の扉を閉めて輕がげに手鎗をしごき、一方裏口から小廝を走らせて番所と主人の出先へ急報させた。右往左往の騷動。

集團はわツと鯨波を揚げた。其處へ宙を飛んで駈けつけたのが城門枡形内の番侍、同心足輕など三十數人。忽ち集團と衝突して一場の亂鬪。

『退れツ！ こりや、退り居らぬかツ。』

『えツ、引くものかツ。命を捨てる覺悟でやつて來たのだツ。さ、斬るなら斬つて見ろい。』

同心足輕だちは刺股、突棒を構へて遮二無二押出さうとする。それがます／＼一方を激させる刺戟、拳を揮つてなぐりつけ、懐から鑿を出して暴れ廻る。打踏す、噛みつく、蹴仆す、引組む、叫ぶ、吼える。暗中に蛇の如く縺れ合ふ影が、あ

そこにも、此處にも。

双肌ぬぎの竹梯子

八右衛門は二人の弟子と共に奉行屋敷内の長家を宿に鄭重な待遇をうけてゐた。ちやうどその際は風呂から上つて夕餐の膳に向ひ、一猪口傾けてゐるさなか、表玄關の方が頻かに物騒しく凄じい吶喊が聞える。彼はひよいと耳を欹てた。

『吾吉。を、を、訝しいぞ。あの音は、あ、ありや何ぢや。』

『大分騒がしうございますな。一寸見て來ませう。』

急いで偵察に出かけた吾吉は、間もなく顔色を變へてあたふたと馳戻つて來た。

『棟梁。大變ぢや。小屋の衆が大勢押寄せて來て、同心衆と打つやら蹴るやら大喧嘩の最中、どうやら怪我人もできた樣子、どうした譯か一向に分りませぬ。』

八右衛門は苦い顔をして、しばらく默つてゐた。が、忽ち肩は釣上つて、重たい唇の周邊にびくびくと末梢神經の顫ひの痕。

『よしツ。もう一膳、く、く、くれ。』

さら〱と茶漬を掻込んで、番茶をぐゝーと一飲。

『ふ、ふ、二人とも跡から來い。』

箸を措いてぷいと立揚ると、脇差を打込んで沓脱の草履を突かけたまゝ、のそり、のそり。

吾吉と平助とが行つて見た時には、大爭鬪の巴渦のなかに割つて入つた八右衛門が、

『双方とも鎭まれいツ、鎭まれいツ！ お役人衆、こゝは私にまかせて下され。エ、のきやツ！ これ、引け、引けツ。』

と鐘のやうな大音。双肌ぬぎの手に竹梯子を押取つて眞一文字に横へ、同心衆と大工だちを二つに引分けて、必死と押戻してゐた。傷いて血みどろになつた顔、大童に振亂した髪、裂ける眼、剥出す白歯、極度に沸騰した抗爭心に哮り狂つた大工の群は、引分けられた役人を目がけて再び突貫を試むべく、わツと喚いて盛返した。が、師匠だ、頭だといふ叫びに氣勢を殺がれ、遮斷された梯子に壓されてじりじりと後退した。

『あれ、父さまだツ。』

『おう、良人。無事でござつたか。』

それと見たお勝とお妙とが、懐かしさに駈寄つて取縋らうとした。それを八右衛門はポンと足に蹴つて梯子を廻し、二人を外に押隔てゝ、

『ば、ば、馬鹿ツ。わ、わいらも其方へ出て失せい。やい、吾吉、平助。何故、て、て、手傳はぬのぢや。ぼんやりしてゐる場合かい。さ、一所に押せ、押せ。』

八右衛門の腕の力はその竹梯子をやつと動かし得るに過ぎなかつた。ところが幾萬磅の重量を持つ百人に餘る衆團を、さながら箆で雪でも掻きのけるやうに、苦もなくぐん〱壓倒して、とう〱門外まで追ひ詰めた。勿論腕の力ではない。目に見えぬ徳望、威信、の強大なる力である。

『お、お[illegible]へ、[illegible]、し[illegible]と、[illegible]へ一[illegible]ろ。だ、誰でも構はない。こ、こゝに据ゑた梯子の四所を跨ぐ奴があつたら、こ、この八右衛門の名代、か、か、突竹槍に斬つて捨てろ。そら、脇差だ、よいか。』
佩びてゐた脇差を音吉の手に持たせて三足程退つた時、いきなり梯子の桁に獅噛ついて
『もし、良人！』
と呼びかけた女は妻のお勝。
『な、な、何だ。』
肌をさして一息ついた八右衛門は、佶と目を睨らして歩み寄つた。
『むゝ、われから先に詮議せにやならない。こ、こりや一體、ど、どうしたことぢや。』
『如何したもないもの。お前さまの身を案じて御奉行様にお願ひの筋の徹るやうにと、かうして大勢附添つて來てくれたのでござんすぞえ。』
『お、お奉行様にお願ひが……それで、く、く、組下の衆がそなたの尻押をしてこの騒ぎ。ホウ。』
『といふのも頭と立てるお前さまを贔屓にして、その身に換へても庇つてやらうといふ親切、俠氣から出たこと。皆の衆苦勞をかけて濟まなんだとお禮の一つも言ふのが當然だのに、手詰にして取つて押へ、斬つて捨てるとは何事でござんす。それで[illegible]』
『ホウ。』八右衛門は首を傾げて考へたが、ひよいとその首を立直して、『た、猪武者、何をいひくさる。上に對して一揆にひとしい狼藉[illegible]を働く慮外者なら、腕づくでも取鎮めるのが頭たる者の役目。手に餘る者は斬棄てる。苗字帯刀御免の八右衛門には、そ、それだけの官祿威光がある。して御奉行に、な、何の願ひぢや。』
『知れたことでござんす。事もあらうに三年餘り、汗みづくになつて働かせた上、去年の夏から足留して家へも歸さず、聞けばお城のなかへ押籠めて、日の目も見せぬ牢屋同樣の層たらしい扱ひをしてゐるとやら。お前さまもお前さま。何の利があつて、そ、そのやうな窮命を受けなさんす。く、口惜しいとは思はつしやらぬか。お前さまは口惜しうなくとも、エ、ツ、わ、わ、私あ口惜しいッ。』
お勝は泣聲を揚げた。取りつく梯子はがた〳〵とをのゝく。
『え〻。然うぢや〳〵。』
母の後から娘のお妙が膝行出して身顫ひした。『父さまばかりか、音吉どのも平助どのも同じやうな憂目、日に三度の食物も、腹一杯戴くことができないため、窶れはてゝ餓鬼のやうになつたとやら聞いて來ました。え〻、罰當りの御奉行様。なんぼでもあんまりなお仕打でござんす。』
『それだけならまだしも、三人とも打首の成敗になさるとのこと、打首、打首。あ〻忌な、聞いてもぞつとする。足掛三年の丹精で立派に仕揚げた城の御普請、天晴でかしたと御褒美の

沙汰こそあらうに、仕置にかけるとは何事でござんす。血迷つた御役人衆、そ、そのやうな無慈悲非道の御政治で、何で此の國が治りませう。え〻世のなかは闇、闇ぢやッ。』

『さ、父さま。吾吉どのも平助どのも、こ、このやうな恐ろしい地獄にゐずと、暇を貰うて、すぐと一所に戻つて下さんせ。さ、父さまッ。』

憤怒と怨嗟に燃ゆる魂の叫びは、背後百餘人の血潮を湧き立たせた。皆なおうといふ悲痛の呻きを合せて呪咀の眼を輝かせた。

その時、家來の急報によつて駒に鞭打ち、宙を飛んで歸邸した奉行の織部は、裏門から入つたが急遽の際旅裝を解く間もなく、打裂羽織野袴のまゝ玄關前に降立つて、じつと樣子を偵つてゐた。

斧の光、涙の叫

八右衛門はぼうと直立したまゝ腕叉して、足下に泣き仰つ妻子を見おろしてゐた。

『お前さまは不孝者でござんすぞえ。知つての通り足の不自由なお老母さま、八は如何した、何故戻つ



くことは叶はぬが駕なら行かれぬことはあるまい、さ、駕に乗せてお城へやつてくれ、八に遇うて來ると言つしやるのを、傍から小兒を賺すやうにいろ〳〵いうて止めて置いたが、幾つになつても親ごころ、嘸や懐かしいことであらうと想ひやると、私や此の胸が一杯になつてなア。』

お勝は涙に咽せ返つた。斷れた詞をお妙が繼いで、

『お祖母さまには知らせたうもなかつたのを、年寄の早耳、打首になるといふ話を聞かしやんして喫驚仰天、それからどつと床についた切、飯も上らず、湯も呑ます、私も早く死にたいと一心に念佛ばかり唱へてござられます。』

『えッ。あの、お、お、おふくろが……』

石像のやうな八右衛門の體はぶるぶると戰いた。

『八十になる老人を振棄てゝ、お前

悲。これ、八右衛門どの。えゝさ、其處にござる御奉行樣。この娘の心も想ひやつて下さんせ。一番弟子の音吉とは親々のゆるした許嫁、花が咲いたら芽出たく祝言させうと堅い約束、二人とも悦んでゐたものを、その花を此世の見納めにさせ、あたら若衆ざかりの音吉まで冥土にやるとは情ない。當人の身になつたらどのやうに悲しいことか、先立たれる親だちの心にもなつて考へてくださんせ。な、もし、御奉行樣。』

お勝は目敏く織部の姿を見て、聞えよがしの大聲に訴へた。織部は目に涙を浮べ、腸を絞るやうな哀音にじつと耳を澄ました。

お妙と音吉とは梯子一つを隔てゝ相對してゐた。互ひの溫い呼吸が觸れ合ふばかりに接近しながら、語一つ交すことすらできなかつた。女を見る男の瞳は暗く曇り、男を視かへす女の眼にも一杯の雫があつた。灼熱された純情の戀は、それでも一縷の通ひ路をもとめて、梯子の桁にかさなる指と指とから、高度の電波のやうな無限の情思をひそかに交換させた。

『やい、棟梁―』と呼びかけて、群集のなかゝら憤然として躍り出た男があつた。『棟梁ッ。この梯子はこりや何ぢやい。他人なら知らないこと、可愛ゆい女房子供まで堰き止めて、傍へも寄



不人情の侍には、取はらつて貰ひませう。』

『おう、おぬしは小頭の源兵衞どのか。』

『むン、源兵衞ぢや、源兵衞はじめろ組百五十人、命を投出してやつてゐる仕事を何で横合から邪魔するのぢや。それも棟梁のため、おぬしの身を思へばこそ、皆なの命を棒にふつても、おぬしを助けたいとの心願悲願、もう生きちやあ歸れないと銘々に覺悟をして、乘出して來た上は、強訴の科で百五十人珠數つなぎ、牢屋に打込まれてお仕置にかけられうと、跡へは引かねえ大工魂、死ね、死ね、死なうと水盃までとりかはし、もう二度とは潜らねえつもりで小屋を釘附けに、勢揃ひをして出て來たの

ちや。その心も汲み分けずに、人の情を仇にして、無慈悲の役人衆の味方をするとは、何のことちやい。それでは棟梁。大工同志の義理立引、いや、斯道をおひらきになつた二柱の神、手置帆負命、彦狹知命様に對して濟むまいがの。引けッ、この梯子を引けッ！』

割れるばかりの怒號、片肌ぬぎの手に銀色の尖い斧を振りあげて、いきなり梯子に打おろした。戞矢といふ響に竹斜めに裂くること三寸、二人の弟子は肝を潰して飛退くところを、ついと駈寄つた八右衞門が隻手に倒るゝ梯子を支へ、隻手に第二の斧を揮上げた源兵衞の肘をしつかと抑へた。その機を掠めて群集は第二の聲援、どつとあげた鬨を星空に反響させた。

『卑怯ぢやいッ。放せッ。』

『いや、放さぬ。ま、待てぬなら、そ、その斧で、こ、この八右衞門の、さ、此の眉間を眞二つに、わ、わ、割つてくれッ。こ、殺されても此の梯子は、ひ、ひ、引けないぞ。』

『何を強情な。さ、言ふことがあらば聞かう。早く言へ。』斧をおろした。

『も、も、尤もぢや。道理ぢや。す、す、濟まない。八右衞門、詫をする。』

ぴよこりと首を下げた時、彼の双眼から、露のやうな涙がぽろぽろと墜ちた。

『み、皆の衆も、し、靜かにして、き、き、聞いてくれ。か、嬶。む、娘。われだちも聞けッ。』

すつくと立つて胸を張り、むンと息を嚥み、じつと百餘人の部下を見渡した時に、平助の手に翳した弓張提灯の微明りは、愚人の象徴とされた彼の面を朧ろに照した。が、その顏の筋には寸分の弛緩もなかつた。卒爾も見えなかつた。一文字に禁つた口、昂つた眉、涙を含んだ眼は聖者のやうな慈愛忍辱の雰ひを帶びて黑く耀ひ、未だ一語も發せざるに、悲愴壯烈の氣はその全身から迸つて、ひしひしと人の魂を打つた。

『このお城普請に一心を籠めて骨折つたこの八右衞門を、こ、殺すと吐した奴は、ど、ど、何處にゐる。だ、誰だッ。將軍樣か、御領主樣か、大國主の命か、五十猛命か、刑部明神か。假令將軍樣であらうが、御領主樣であらうが、神樣であらうが、所以もなく此の首を奪られて、た、た、たまるかいッ。八右衞門の胴についた首は、だ、誰の首でもない。八右衞門樣の笠の臺だ。その大事の首を、あ、汗水流して働いた手間賃に、と、取揚げられる。そ、そんな間拔鵬拔は三千世界を搜しても居はせまいぞ。し、心配するな。論より證據、そら見ろ、この通り、ちやあんと胴の上に乘つてゐる。おぬしだちは、な、な、何を寢ぼけて、こ、こんな馬鹿騷ぎを押始めくさつたのぢや。他の部屋の衆が見たらよい笑ひ物、は、は、耻かしいとは思はぬかッ。か、か、嬶も嬶ぢや。くだらぬ噂を眞に受けて、の、逆上せあがつた。狼狽者奴！　た、た、たしなめッ、ば、馬鹿ッ。ヘッヘッハ。』

怒鳴りつけて哄笑ひ。群集はアッと惘れた。

『へえ！ それぢや嘘は眞か。根も葉もないことか。』

『いや、有る、いや、有る。』首をふる。

『有るとは？』

『わ、私の方から、い、い、命を献上。熨斗をつけてこのお城に遣らうといふのぢや。』

『えゝッ。』――驚きの聲は凡ての心をさつと吹き捲つた。

護國の鬼神となりて

八右衛門はにこりとして、右の手を高くさし上げ、東の空にきら〳〵と光る明星を指した。

『皆な見ろ。天にはお星樣が光つてござる。その星を見あげて、私はいつも考へる。星の上からこの下界を眺めたら、うぢやうぢやと動いてゐる人間なぞは、眼にも入らないほどの微さな蟲、憐れな生物ぢや。その蟲が寄つて群つて泣いたり笑つたり、妬や怒、慾と迷、それ喧嘩ぢや、やれ戰爭ぢやと騷ぎ立てゝゐる間に、劫が來ればいかな者でもズンズン黄泉に引取られてゆく。生きる相場は長くて七八十、百歲まで息をつないだところが鮑の子の一甲羅、松の一枝ぢや。子々孫々百代千代、暦を繰つたら長いやうぢやが、始めも終りもない不老不死の天から見たら、只た瞬き一つ、お太陽さまが欠伸をなさる間に萬年二萬年は消えて了ふ。蜉蝣といふ蟲の夢よりも儚ない人間の世界ほど、つまらんものはないなあ。ハツハツヘ。』

不思議なことを言出した。皆な呆氣にとられて鳴を鎭めた。

『その儚ない人間が大地の上に築きあげる仕事の命も、長くて精々二三百年が頂上、五百年と遺る物はたんと有るまい。大抵は煙になつて滅びて了ふ。が、有るぞ、いつまでも〳〵遺る物がある。何ぢや、それは。外でもない、人の一念ぢや、名ぢや、德ぢや。技術ぢや。人間と生れたからには、どうぞして永久に遺るさういふ物を置土産にしたいなあ。その考へから私は今度の御城普請を引受けたのぢや。引受けるからには敵の矢彈や地震で壞れたり落ちたりするやうな脆い脊木細工はしたくない。天變地異や兵亂なぞが何度やつて來ようが、そんなものにびくともしない、いつも富士のやうに青空へ突拔けてりうとした姿を押立てゝゐる金剛不壞、萬代不易の名城を造りたい。そしてあれが八右衛門の拵へた物ぢやさうな、立派な技術ぢやなあ、と後の世の人に言はれたい、との念願を立て、私は神に誓つて斧を取上げた。皆の衆も八右衛門の一心同體、仕事こそ違ふけれど、念ずるところに異りはない筈ぢや。のう、然うぢやらう。』

熱誠の力は憑物でもしたやうに彼の顏色から舌までも變化させ、凜とした聲を打振る鈴の響かさにして、吃もなく、澁もない明徹な一語一句を耳から耳へ鋭く突ぬけさせた。皆な全精神を惹きつけられて、身動き一つする者もなかつた。

『ろ組百五十一人が氣を揃へ、一世一代の仕事と有りたけの力を打込んだ鑿と斧、汗がつきれば涙、涙がつきたら血。血、血、血、血！ この城の柵も門も、此處に居る百五十三人の血

の結晶ぢや。どうぢやい、この立派さは、自慢が無理か、僭上か。僭上ぢやといふ奴があつたら、さ、此處へ出て來いッ！』

突出した腹を丁と叩いた。便々たる肉に跳る痛快な響。

『此のお城の主は百萬石の池田武藏守樣ぢや。併し城は池田樣の物ぢやない。播磨一國の持城ぢや。いや、天下の物ぢや。日本六十餘州の大きな寶ぢや。その寶を後の世に遺すことができた私は仕合者。大工一代の事業を仕了せたからには、もう浮世に思ひ置くこともない。此上の望は此の城の守護神となつて、千年萬年の末まで國の寶を殘したい。只それだけぢや。そこで自分から上へ願つて此の身を獻上、人柱に立つことに取極めた。』

『えツ。人柱？　人柱いへば生埋ちや。あの生埋に……。』

源兵衛の叫び。皆な愕然として目を聳てた。異樣の呻きと呟きとが、今まで森と沈まつてゐた夜の空氣をかき亂した。

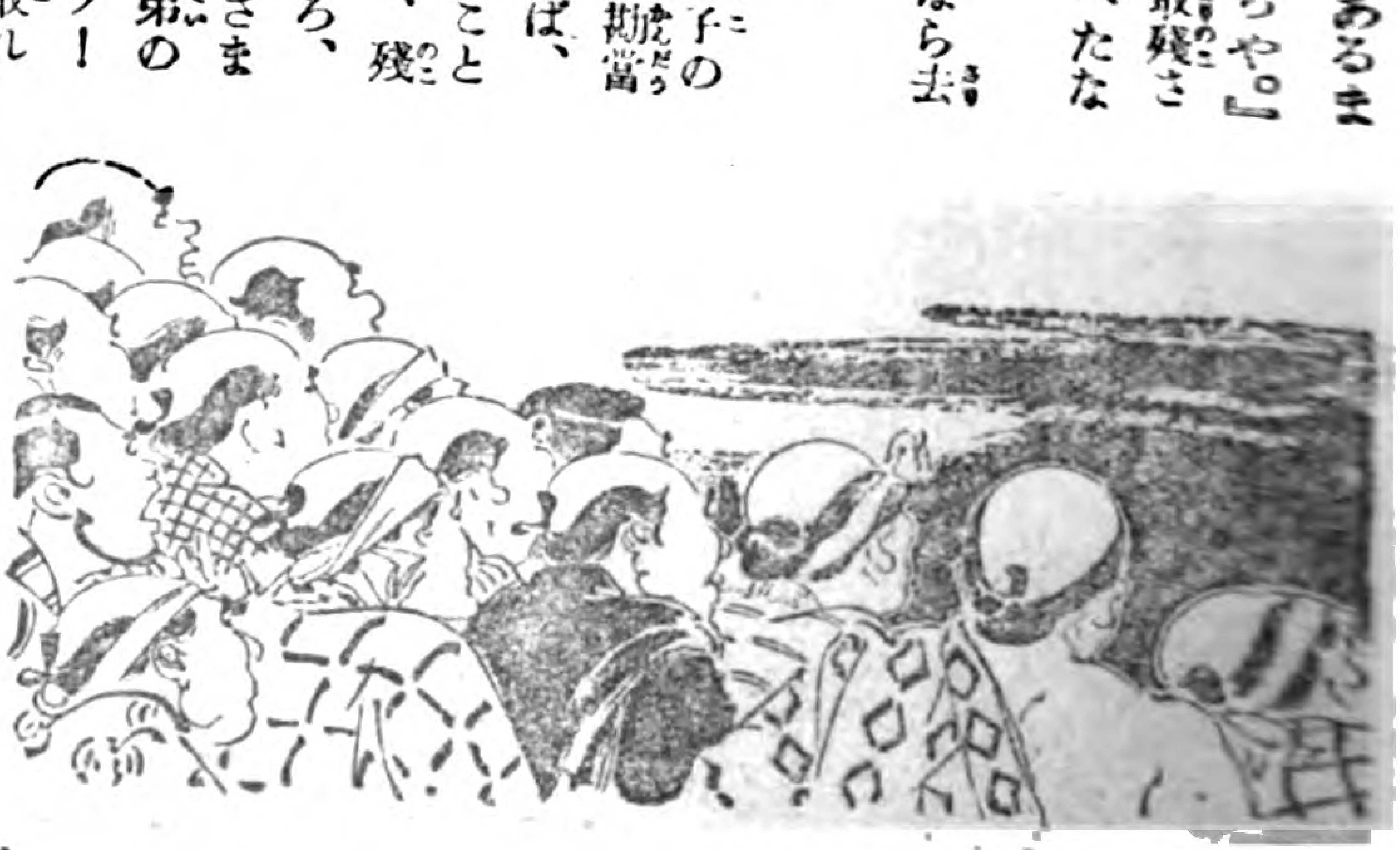
『然うぢや。一番難澁な中の御門、普請の骨組はできたがまだ礎も築きあがらない。彼



處に生身を埋めるのぢや。』八右衛門は聲に應じて答へた。『私ばかりぢやない。この音吉も平助も一蓮託生、あの世への道づれぢや。』

『ひえゝ。』妻のお勝はヒステリカルな聲を放つた。『お、お前さまばかりか、罪も報いもない婿の音吉。弟弟子の平助まで恐

ろしい生埋にするとは、そりやまア本氣の沙汰でござんすか。』
『母さま。わ、わしやゝ如何しよう〳〵。』お妙は身顫ひして泣いた。
『お内儀さま。どうぞゆるして下さりませ、仔細を話せば涙の種、未練らしく聞えますゆゑ私は何にも申しませぬ。只男らしう自分の職務に一命を捧げて、此の國のため、技藝のため、生贄になることを健氣な奴ぢやと思うて、許めて下され。お妙どのとはまだ祝言前、親と呼ばれ子と呼び、良人と呼ばれぬうちに、お別れするのがまだ勝しでござりまする。思へば〳〵薄い御縁でござりましたなア。』
『私は音吉殿より荷が輕うて結句氣樂ぢや。何處までも棟梁の跡について、爲る通りにすればそれでよいのぢやよ。ハツハツハ。』平助は笑つた。
二人とも最う動かすことのできない決心をしてゐた。お勝もお妙も只泣くだけであつた。
『吼えるなツ。』八右衛門は聲高く叱りつけた。『何が悲しうて泣くのぢやい。生身を埋めたら成程肉は腐らう、土ともならう。併しよく聞け、この魂は――三つ揃うた魂は、生贄になつて城の守護神、藝術の神と祀られ、人の世のあらん限り永久に生きるのぢやぞ。護るのは此の城ばかりではない、池田家代々は勿論のこと、日本六十餘州幾萬人の大工、播磨一國九郡六百三十六箇村、高三十萬四千二百餘石の民百姓、國土安穩、五穀成就の氏神となるのぢや。死んで神に祭られる。それほど目出たい悦びはあるまいに、不吉の涙は何ぢや。』
『でも餘りな。跡に取殘された妻子の歎きを考へたなら……。』
『默れッ。それが厭なら去狀くれうか』
『え、そんな……』
『お妙もさうぢや。親子の縁を切つて七世かけて勘當をされるのが辛ければ、こ、この親父や音吉のことは、あ、あ、諦めてな、殘つたお母に孝行をしろ、別けて年寄られた祖母さまには……えツ、舍、舍弟の事も、た、た、賴むぞツ！さ、皆な引取れツ、引取れツ、引取つて明日から精一杯働け、働けッ。』



八右衛門は手をさし擧げ、目を炎にして張裂けるやうな聲を絞つた。瞼から彈き出される涙の珠。それを見られまいと反けた顔をその儘、くるりと身を廻して奉行職部の力に向ひ、大地にぴたりと手を突いた。

『御奉行様へお願ひ、どうぞ組下の今夜の麁忽無調法は、こ、この八右衛門に免じて、ま、眞平、ご、ご、御免くだされませ。如何なるお咎めも八右衛門の一身に、お、お、お引受け申しまする。』

番侍、同心の群。高張提灯、刺股、袖搦の光に取捲かれて床几に腰をかけ、じつと八右衛門の結跏振を見戍つてゐた織部は、たゞ靜かに頷いた。白扇に掩ひかくした頬――その頬には幾行かの涙線がつらぬき走つてゐたのである。

月は青し生贄の祭壇

慶長十九年四月十日、柱立には大吉の庚戌、しかも天一天上の大安日。その夜の引汐時なる丑の刻、午前二時の大陰。姫路城内本丸大手口、櫻御門の二重櫓は、典雅なる輪奐を見せて、桔梗色に晴れ渡つた夜の空に翼を張りひろげてゐた。高麗門の牛を埋めた花は渾て櫻、恐や朧ろの白雲を揺曳させて、やがて散るべき春の命を落ちかゝる月魄に――その光の冷たさを見よ、月自身も、瞬く星も、地上の花も、城の粉壁も、銅の甍も、土塁の青草も、皆一様に冷たい寂光に融け去つて、銀色の露に化するかと想ふばかりの、それは莊厳にして寥廓なる春の淨土であつた。

櫓門を中心にした祭場のあなた、こなたには庭燎がぱち〳〵と紅い火華を吐いてゐる。その明るい光線に先づ四方に打つた青竹のいかめしい矢來が見える。周圍を厳しく警固した徒士の小具足と鎗長刀の類がぎら〳〵と反射する。盛砂白く淨められた場の中央に設けられた祭壇に、堆く供物を積んだ白木の三寶が見える。その下に稽首いて地鎮の祝詞を讀みあぐる禰宜祝部忌部だちの、鮮かな衣冠の色彩が映る。夜風に嘯かれて力なく動く五色の幡、竹の葉にさら〳〵と泣く注連縄。共にさびしい情景である。

祭壇の正面、少し離れた位置に床几を立てゝ儼然と控へた祭主――それこそは城主松平武藏守利隆、白小袖に淺緋色の袍、垂纓の冠、黒骨の檜扇、糸巻太刀、烏皮の沓といふ侍從從四位の正装――當年三十一歳の英俊。

その後には家老職、側用人など近臣數十人、或は大紋の布直衣に風折烏帽子、或は白生絹の裏打大口に侍烏帽子、身分に應じてさま〳〵の装束。

やがて祝詞は終つた。利隆は徐かに立揚つて祭壇に進み、眞榊を供へて一禮してから舊の座に戻つた。繼いで家老池田和泉、伊木豐後、池田大學の三人が禮拜した。忌部は三寶に土器をのせ、利隆の前に恭しく捧げた。彼は一獻傾けてから、

『この土器は……おう、八右衛門外二人の者はいづれにある。』

奉行日置織部と矢部内匠、大口の装束をつけたまゝ御前へ進み出た。

『あれに差控へさせてござりまする。』

『呼べッ。』

程なく素袍小袴の役人に誘はれて、靜かに祭場に入つて來た

賢の人八右衛門は、齋戒沐浴した身に無位無官の素袍長袴、一折烏帽子をつけた折目高な粧ひ、あつぱれ一國の棟梁らしい氣品が見えた。つゞいて晋吉平助の二人、梅染の十徳四布袴、黒の脚絆素跣。

利隆は我前に平伏した三人の姿をじつと打瞻つた。身動き一つ呼吸一つせず、眼を梟のやうに睜かしていつまでも眺めてゐる。餘りに長く無言なので、織部は傍から、

『恐れながら、八右衛門外二人の若者へお流れ頂戴の儀仰せつけられまするやう。』

と促した。利隆は我に復つたやうにほつと息づいて、

『おう。八右衛門、近う。』

八右衛門はハッと首を擧げて膝行寄つた。

『もそつと御前に出さつしやい。』

織部は微聲に言つて、成るべく二人を接近させた。そして三寶の土器を八右衛門の手にとらせて銚子の酒を酌がうとした時、利隆は、

『待て。予がおさへ遣はすであらう。』

自身で銚子を乗つて酌をしてやつた。八右衛門は感激して土器を押戴いた。その顔を見直した利隆の瞳には哀憐の涙が白く光つてゐた。かくして晋吉平助の二人も順々に盃を賜つた。

『八右衛門。武蔵守より厚くお禮を申すぞ。身を殺して仁を成すとは其方共のこと。昔子貢は孔子に對して、若し博く民に施して能く衆を濟ふあらば如何、仁と謂ふべきかと問うた時、孔子は答へて、何ぞ仁を事とせん、必ずや聖か、と申された。其方共の精神は仁義を超えて聖の至境に達したもの、天下百世の範となるべき行ひであらう。その志や壯、その情や哀しとも申さうか。武蔵守落涙の外はない。何卒宮城に神鎮まる上は、播磨一國の守護神となり、永く民百姓を守りくるゝやう。池田の家がつゞく限り、祭祀を絶やさず、今月今日を忌と覺え置くであらう。』

『有難きお言葉、冥加至極にござりまする。』

八右衛門は地に額を摺りつけた。聲が涙か、涙が聲か。

『八右衛門。何ぞ最後のお願はないか。』織部が訊いた。

『はい。ば、ば、婆さま。婆が私の臨終を見届けたい一心から、所勞中押して參り合せ居るやにござります。此世の名殘、一目お遇はせなされて下さりませ。』

『老母がまゐつたとか。それは〱織部早う呼び寄せい。酌はりとらせてのう。』利隆の差圖。

『はッ。有難き御意。何卒此の上の御憐愍を以て、八右衛門の妻子、晋吉平助兩人の親達にも御目通おゆし下されまするやう。』織部の請。

『苦しうない。皆呼入れて名殘を惜しませい。』

間もなく下役人に誘はれて、竹杖を先によろめき〱入場したのが今年八十一の頽齡。白無垢に水晶の珠數をかけたおゆみであつた。附添つたのが嫁のお勝、孫娘のお妙、どつちも同じ喪服に水髮。八右衛門の悴佐吉は水色の上袖に小さな袴をつけ

て、木太刀をさし、玩具の毬杖を持つて、姉に手を引かれながらちよこ〳〵と入つて來たのを見た時に、皆な愴然として目を暗くした。少し遅れて音吉の父、平助の母も入る。一同土下座。

落花城頭の砂吹雪

場内は水を打つたやうに肅然となつた。

『いづれも此度は……』利隆は是だけ言つて詞を杜切らした。暫くしてから、

『忝けなく思ふぞよ。』禁へ切れぬ感傷にばちばちと瞬きした。

『悴は何處に居ります。おう、あそこに……』老母は疎く霞んだ眼を八右衛門の方に向けて、ずいと膝を摺寄せた。『これ、八右衛門。よう出かした。それでこそ日本一の城大工岡部又右衛門の孫ぢや。よう出かしてくれやつたな。』

『婆さまツ。』八右衛門は手を突いて悲愴な聲『お先に黄泉へ參りまする。ふ、ふ、不孝の罪は、ま、眞平おゆるしなされて下さりませ。か、か、悲しいと思はつしやらずに、ど、どうぞ定劫因縁とお諦め下されて、お、お體を大切に……』

『ホヽヽ。』老母は淋しく笑つた。『何が悲しいのぢや。わしや嬉しい。君のため、國のため、技藝のため、生贄の神とな



る。このやうな芽出たいことがあらうか。嬉しう思はずに何とせう。ホ、、、。』暗涙を呑んで、『此上は未練の振舞なく、ああ美事であつたと褒めそやされるほどの立派な最期を見せてくれ。それを見屆けたさにわざ／＼やつて來た此の母に、人なかで赤面させるやうな卑怯な死樣をしてはなりませぬぞッ。』と聲を勵ます。

『御安心下さりませ。』にこりと笑つた。『八右衛門は男でござります。只婆さまに一つのお願ひ。生埋になる場所に裝置けてある土落しの命綱、あの綱をお前さまの手で切落しては下さりませぬか。成らうことなら婆さまの手にかゝつて死にたうござりまする。』

『死ぬ時までこの母に厄介をかけるのか。ホ、、世話の焼けた子ぢや。よし／＼逆縁ながら母の手で、ほ、ほ、葬つてやりませう。』ほろりと落涙。

『有難うございます。』

八右衛門が平伏した時、姉の膝を離れてちよこ／＼と駈出した佐吉が、いきなり八右衛門の脊に飛びついて、父ちやまーと呼んだ。それが八右衛門にとつて激しい衝動であつた。『おッ、懐かッ。』抱きあげて人前もなく小さな顔に頰をさしつけた。

『これよ。佐吉とやら。よい子ぢやのう。こち參れ。』檜扇を顔に翳して、冠の垂纓をふるはせつゝあつた利隆は、聲優しく可憐の少年を呼んだ。そして近習に目配せして取寄せた奉書包を、手づから佐吉の懐へ入れてやつた。無心の彼は鳩のやうな瞳をくるりと睜つて、百萬石の國主の膝に縋つた。利隆はつるりとその頭を撫廻して、



『父への土産ぢや。持つてまゐれ。』佐吉はちよこ／＼と駈戻

つた。八右衛門はその懐から奉書包を抽いて押戴き、徐かに披いて見た。その眉目に忽ち歡喜の光が閃いた。

『あッ、こりやお墨附！　婆さま、嬶、娘も悦べッ。忰佐吉は士分にお取立、三百石の祿を下し置かるゝ。また婆樣及び音吉平助の親達へは一生五人扶持、栄銀十兩宛。更に三人の冥福供養のため三百金の手當。あゝ有難いことぢや。殿樣ッ。お禮を申上げまする。』

ドヽ、ドーン！　その機をかすめて四つの太鼓——櫓の上に高く響く。

『おう。最早時刻。一同退つて用意いたせ。』

織部は叫んだ。折柄廓の一角から、蚊の啼くやうな木遣節の哀歌が悠揚と風に綯つて聞えて來た。犠牲者の柩を送る「ろ」組百五十人の合唱である。

『やれ、うきたへは春の日の、霞のうちの梅の花、一重ばかりか櫻花、匂ひふくみて、咲ける梢を折りたや、中の枝から美事によう咲いた。やれ、薫る袖を、エーヤンレ、散らば甲斐あらじ、ヤレヤレヤンレー。』

×　×　×　×

藝術のための犠牲者が、死につく時の光景は、まことに壯烈を極めた。

ろ組百五十人の大工だちは、幾つとなく松明を燃やし、三人を修羅車——土石を搬ぶ車——にのせ、木遣節をうたひながら、三度城内を曳き廻してから、中の廓の大手口（中の御門を建築さるゝ場所。難工事として取殘されてあつた）まで送り込んだ。其處には一丈の深さに掘りさげた穴があつて、上に綱にささへた車仕懸の箱が吊され、山のやうに土砂を盛つてあつた。穴に降り立つた八右衛門は中央に南面して立ち、音吉はその右に東面し、平助はその左に西面して踞まつた。八右衛門はもう今が最期といふ時、白扇を開いて得意の木遣節を歌つた。

「千秋萬歳、治まる時は松の風、緑の竹に世々こめて、幾年廣き三千歳の、神の契を身にうけて、まことの鏡曇りなく、千秋萬歳……」

肺の細胞をしごいて血を絞り出すやうな旋律が、縹緲として糸のやうに續いた。その曲の闋らぬうちに老母のお弓は、眼を逆立つて切齒をして手斧をふりあげた。南無阿彌陀佛の一聲、發矢と斷つた命綱、ぎゝぎーと軋る轆轤。さアーと瀧のやうに降りくだる砂、土塊。紛々として穴に渦卷く一團の黄塵。

お弓は斧を投出して後へひよろ〳〵。ばつたりと倒れて氣を喪つた。

『千秋萬歳のお悦び、芽出たかりける……』

轟々と鳴る黑い旋風のなかに、猶も唄ひつゞく餘韻が、かすれがすれに殘つてゐた。堤の櫻は驚き震へた。風なきに飛ぶ花瓣はひらひらひらと空中の亂舞。

かくして彼の犠牲者だちは、何の不平もなく、苦情もなく、笑つて地下に瞑目、姫路城頭たかく平和の靈火を擎ぐる藝術の神となつた。

（をはり）


奇想天外
百年後の世界
勘の鋭さ！第六感の凄さ！流石は漫畫家が頭を捻つて考へ出した豫言だ。神樣も吃驚なさる先見の明！途轍もない奇拔な着想にはアッと魂消げ、ワッと笑ひ出さずには居られぬ。發明界に偉大なる暗示を與へ、未來の社會に辛辣な警告を發するものに非ずして何ぞ！神樣曰く『や、や、や、早くも感付き居つたな！』



―宍戸左行畫―

（壹）

お花見は酒呑みの獨占にあらず　そこで喫烟觀櫻會など流行。



（貳）

酒ビールも水道と同じく各家庭へメートル計器付にて引込む『アラッ、今月はビールを五千リツトル使つてよ』

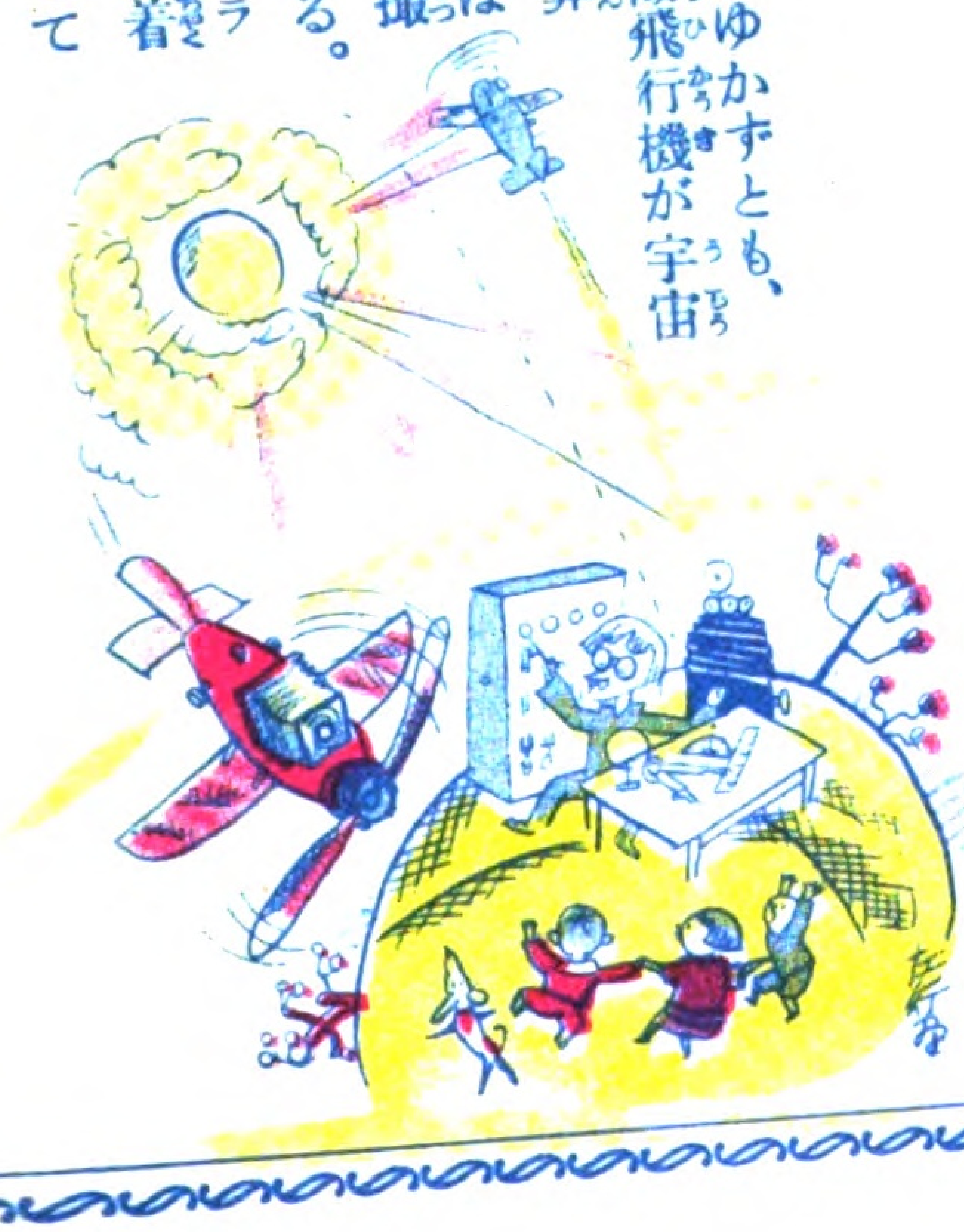
（參）

交通機關發達して天產豐富なれば山間と雖も忽ち大都會ができる。村の青年飛行士も交替休みに『オ咲坊や、お前の好きなチョコレートを巴里で買つてきたよホーラ』



（四）

火星研究に人間がゆかずとも、電氣操縱にて自働飛行機が宇宙を一廻りして計算通り三ケ月目には据付け寫眞機に撮影して戻つてくる。コドモ達は『ソラ火星の寫眞が到着したよ早く見せておくれ！』





都市ケーブル

—前川千帆畫—

都會の中心に向つて住宅地域からケーブルを架け、各通勤者は新聞を見乍ら樂々往復する。



（五）

物質が豐なので文化生活のぞみ次第、婦人は各自に服裝を意匠し、例月に歩き振りの競技會を開き『一等入賞は二足毎に手を三つ振りちゞめるのですつて、ソリヤすてきよ』とそれが其月の流行だ。

（六）

一日二時間勞働制だから色々遊び時間を考へる。グランドで將棊大會を催し、東西兩軍各々投票で駒を動かす盛觀。



（七）

世界交通網が完成し人種雜婚に混婚を重ね一家族にも色々な毛色が顯はれ、寫眞屋さんは修正で一々毛色を見せるのに大骨折。



女もヒゲをはやす



百年後のモガ

——在田稠畫——

あなたの頭は何故大きいの？——新思潮に觸れ新思想を吸收するため！——あなたのお口は何故大きい？——接吻のため——あなたのお手は何故大きい？——握手のため！　あなたのお足は何故長い？——流行を追かけるため！あなたのお尻は何故小さい？——刹那々々の氣分で腰が据らぬため！





—代田牧一畫—

前世紀の遺物として陳列さるゝもの。

巡査の髭

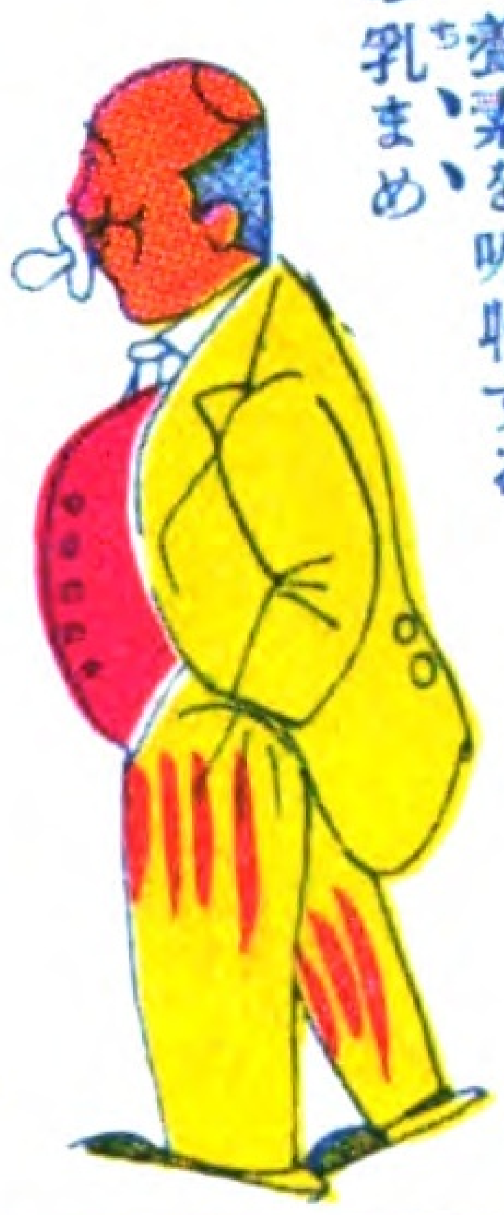
この時代の國民は平和を好むので巡査のサーベル縮小論が一層喧しくなつて遂に腰間の一刀はホンの申譯にひつ付けておく、で、巡査の睨みが利かなくなるので巡査髭に全力を注ぎ出した

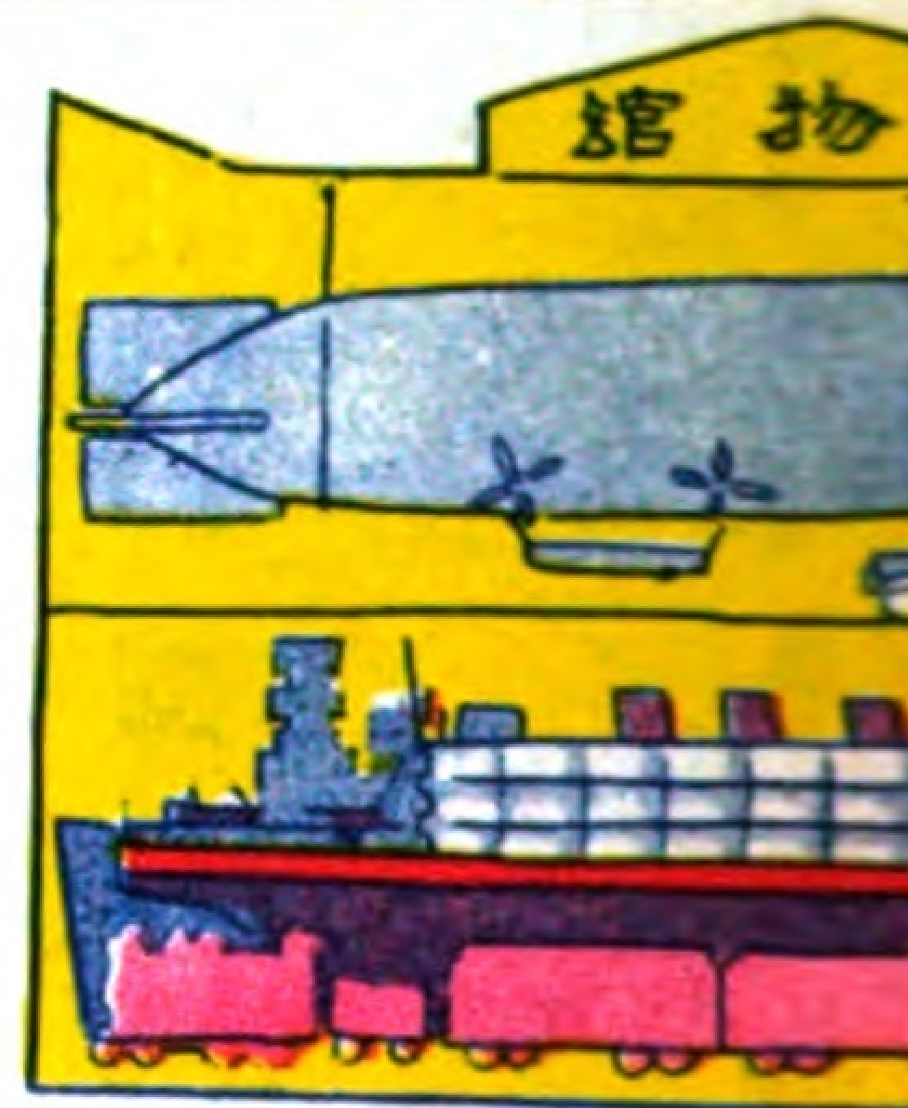


—和田邦坊畫—

食糧問題解決

この時代に於いて食糧問題は始めて血の出る眞劍さになり、そしてある學者に依つて解決される。それは無盡藏にある空氣中より榮養素を吸收する仕掛けで、皆んな坊やの乳まめのやうなものを吸つて事務をとる、能率が非常に上る。

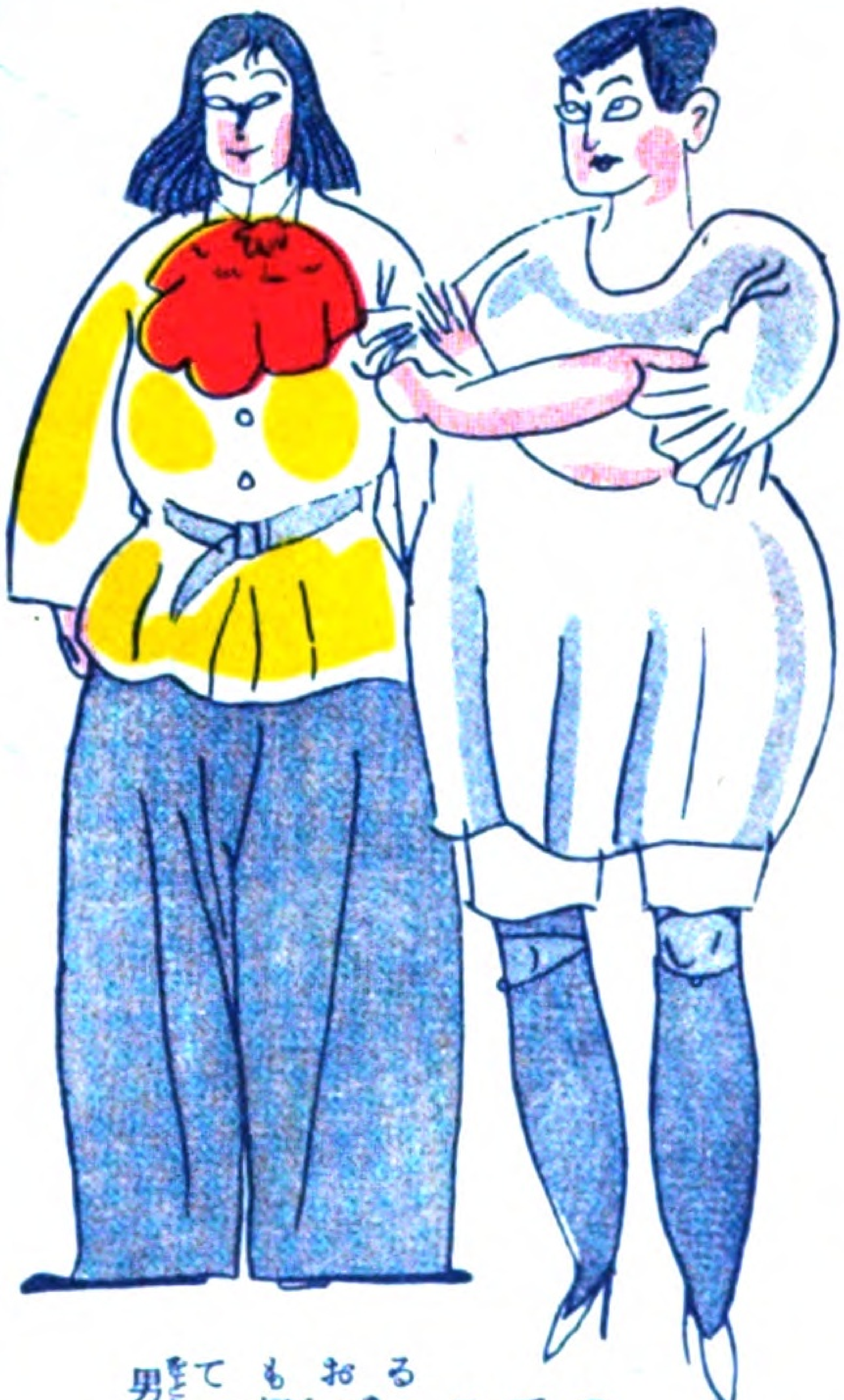




モガとモボ

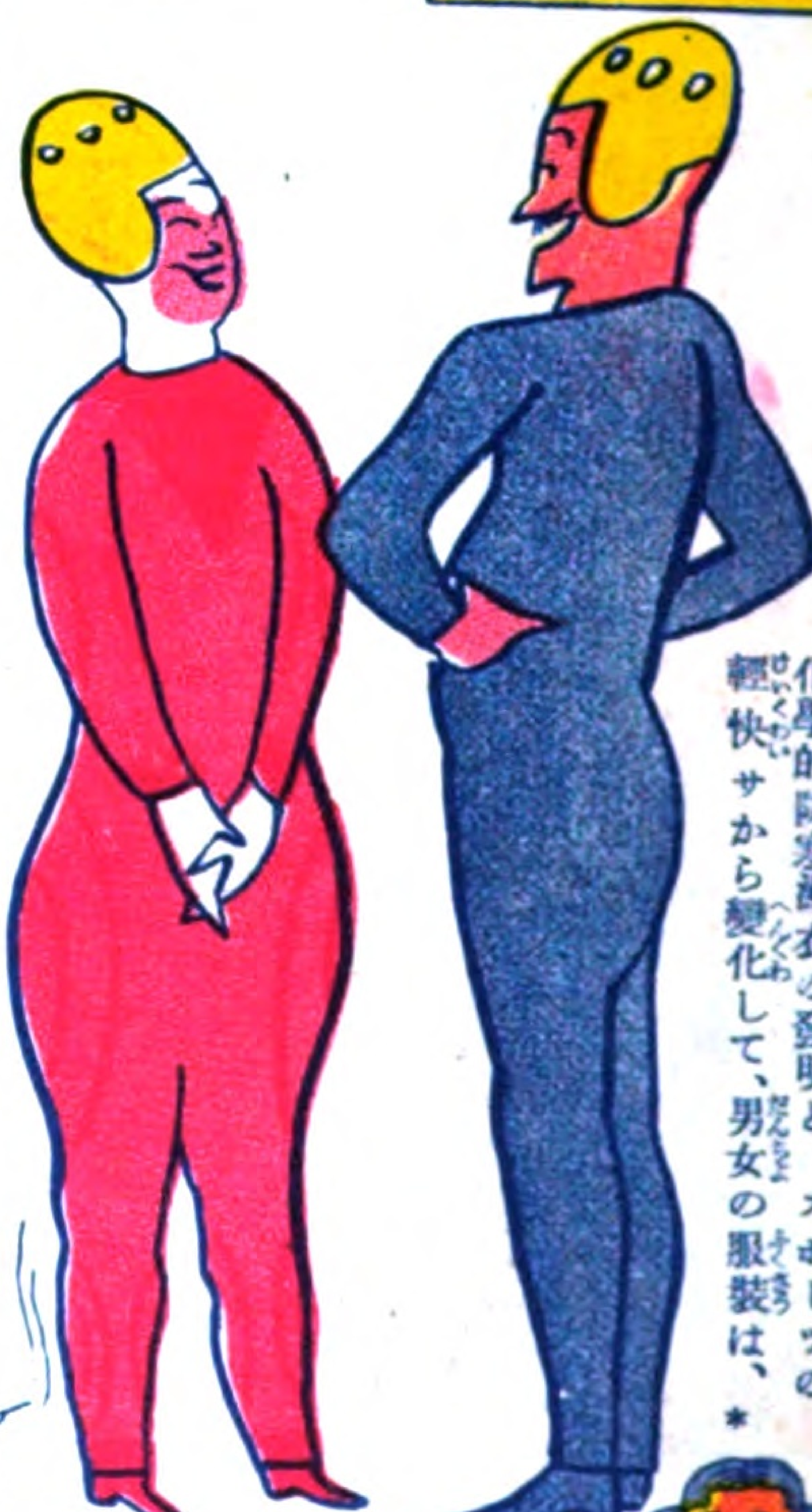
—細木原青起畫—

モガは段々男化し、モボは段々女化す。かくの通り。



百年後の男女服裝

化學的防寒濕衣の發明と、スポーツの輕快さから變化して、男女の服裝は、＊



婦人の髪極度に短かくなる。反對に男の髪ます〳〵長くなりて耳かくしなどいふもの流行する。東京中町の至るところカフェ軒をならべる。お客は何れも婦人。從つて給仕は皆男になる。

—水島爾保布畫—

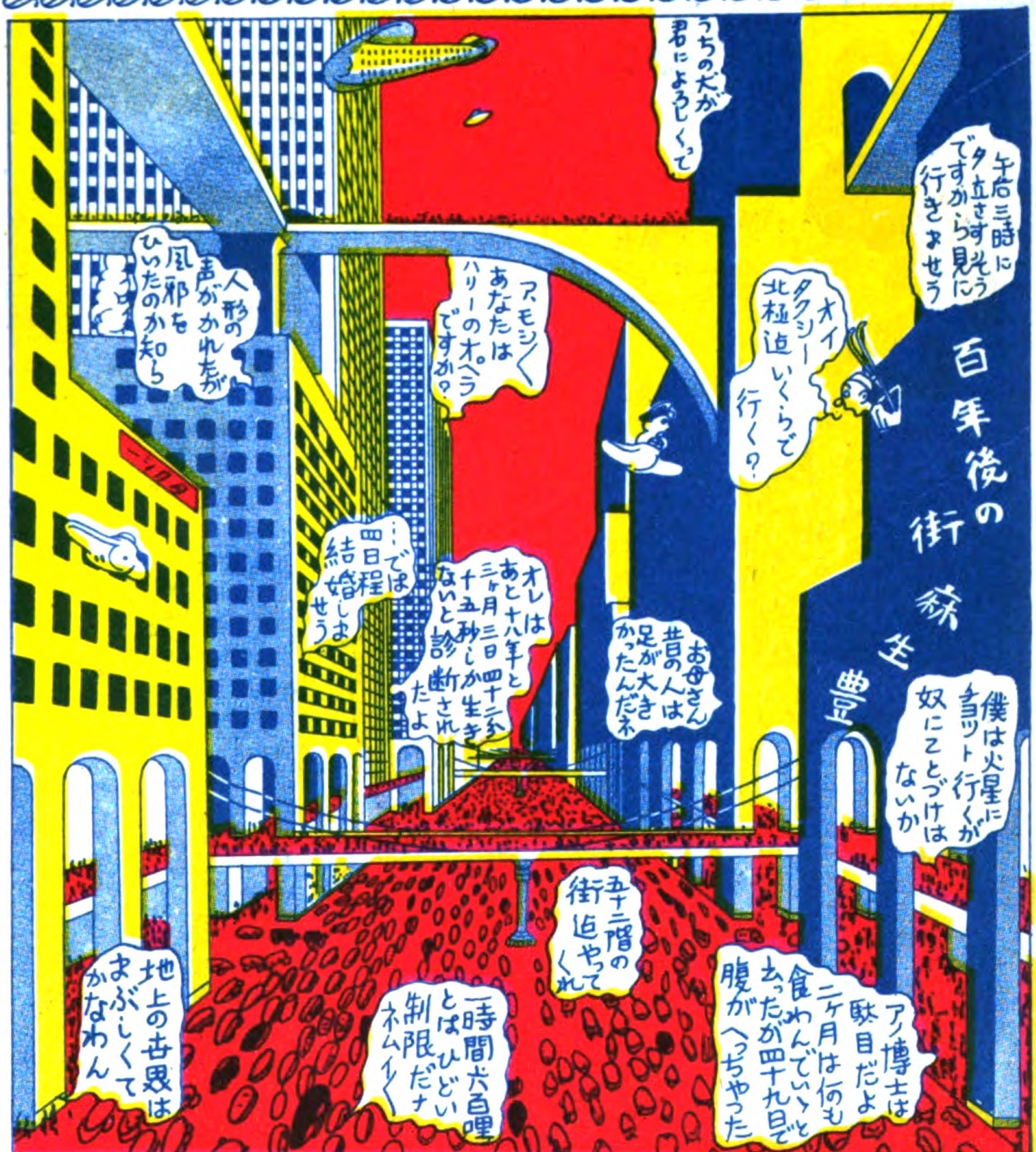




＊コンナになり、頭には、ラヂオ帽を頂く、之は居ながらにして、世界のニュース、音樂が聞かれる仕組みなり。

—池部鈞畫—





百年後の街

地上に伸びると同じく建築は地下に伸び地上何百階、地下何十階と云つた風になる。飛行機は反磁性の金属發明され地球の引力を利用しその磁力の強弱の加減で飛行する。

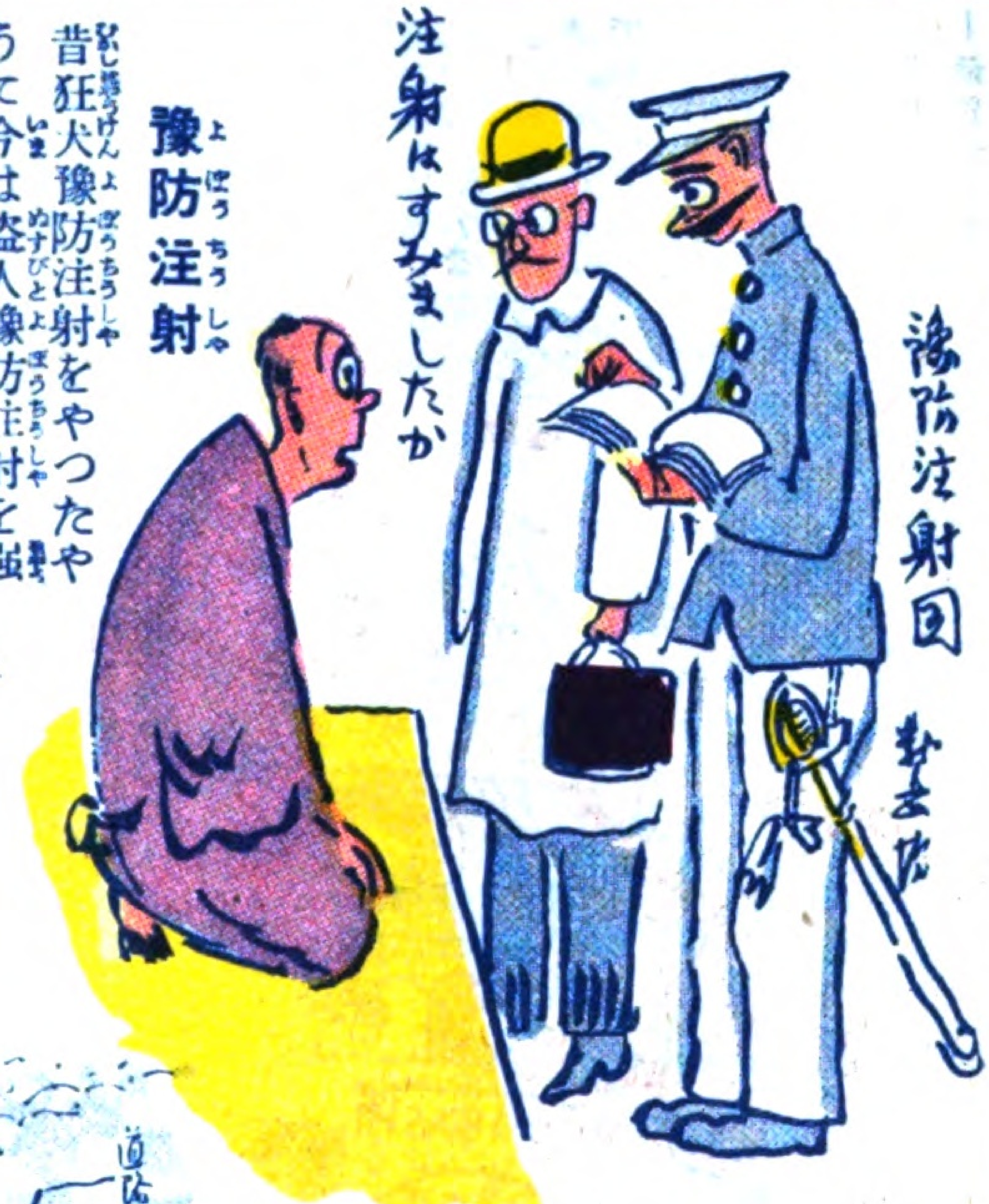
――麻生豊畫――

昭和百年

世界の人間がすべて日章旗下に統治されて、吾々日本人は……といふ事がなくなつた。親子兄妹でも言葉が通じない不便な場合がまゝあるので、さしづめ感情教育といふのがはじめられた。つまり身振り手眞似の學校だ。他方科學の進歩はめざましい、なかにも若返り法が完成されて、到る處老人が盛に若返るので、若い人達が大分おびやかされた。ひいては處女恐慌時代が來て、若い娘達程老けた扮裝をする樣になつたから流行の中心は老人から、老人大もての時代がつゞいた。稅は政府から國民に下附されるといふ噓の樣な事實。月々一人あたまいくらといふのだから、子澤山で弱つてゐたのがたちまち稅成金となつた。昭和第百年の黃金混沌時代はめでたしめでたし。

—池田永治畫—





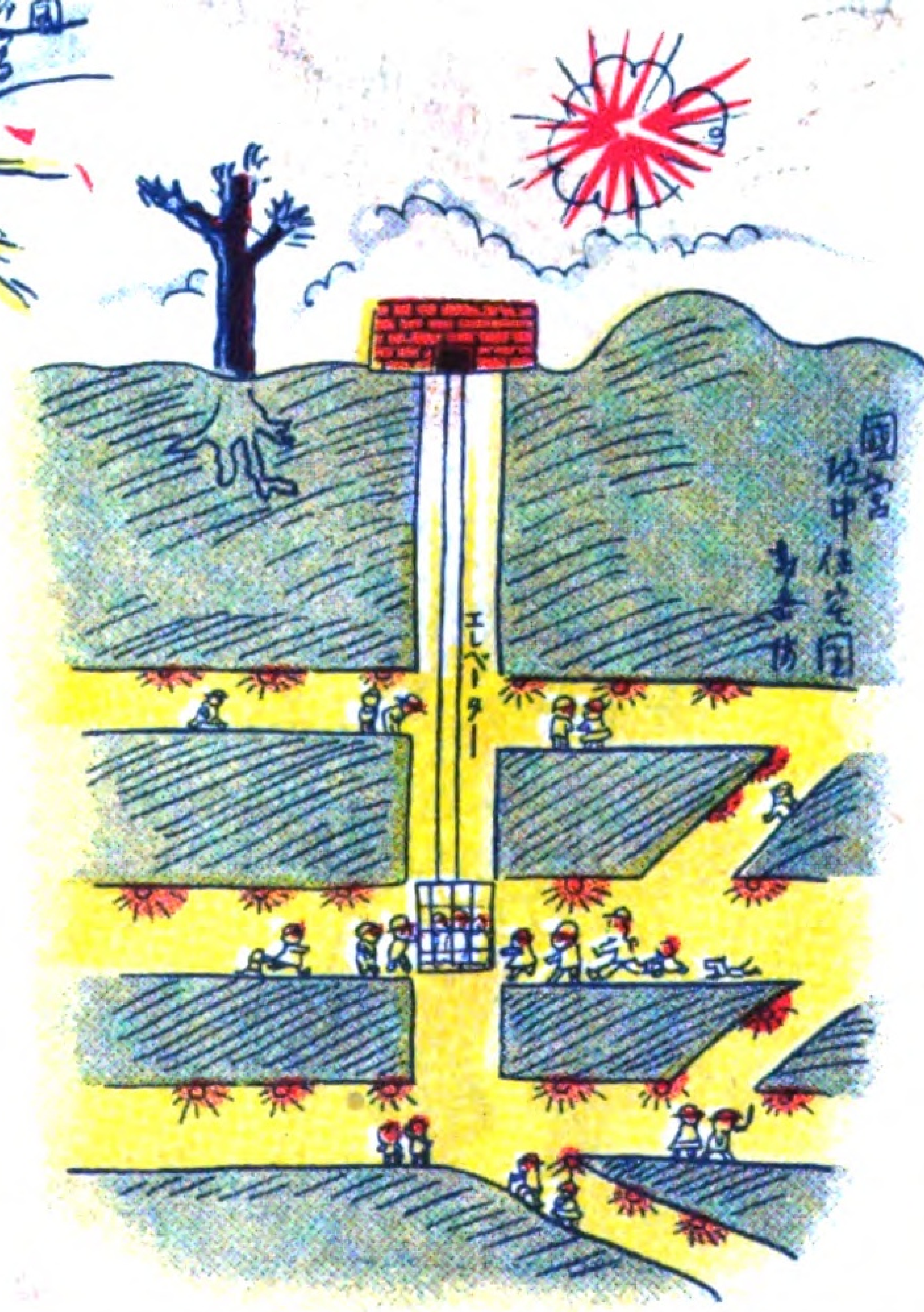
豫防注射

昔狂犬豫防注射をやつたやうに今は盗人豫防注射を強制的に戸毎に施行する。効顯著し。



道路頽廢

航空機關完備して總ての交通は空中を利用するため陸上の道路頽廢して宛然太古の如くなる。



國營地中住宅

大戰續發して、爆彈投下、毒瓦斯攻め等あらゆる科學的戰術の猛威に蹂躙され地上生活に大不安を感じ、國營地中住宅を先づ都會地より建設し始む。

——清水對岳坊畫——



空中新聞

二十世紀には紙に新聞を刷つてゐたが、百年後には空中を利用して電光でニュースを報じる。

世界めがね館

淺草の十二階どころか千八百階の高樓を作り天邊へ上るとアメリカが見え英國も見える樣になる、萬里鏡が發明されて世界中何處でも見える。





太陽直接照明

電球電氣は古い、太陽の光を反射鏡を利用して照明する、曇天の日は遠く赤道直下からレンズを澤山使つて反射してもつて來る事が出來る。

—前川千帆畫—



一、火星の生物とダンス

火星との交通開かれその記念の祝賀會で火星の生物と地球の娘さんと空中ダンスをやる。



二、太陽熱利用

太陽熱利用の科學的研究完成され之を畑に導けば麥などは五六日で丈餘の丈けに實りその房の一粒で優に一飯を支ふに足りる。

—岡本一平畫—



天眞無我の澄鏡である小兒の瞳にも候補者の眞價を映す必要ありといふ見地から小兒にも一票の權を與へられる。候補一同小兒の前に整列して御機嫌を取結ぶ。但し玩具菓子等を使用することは普選法に依つて罷りならん。



現在の人間の大きな缺陷は小さな反感や些末な巧利の爲に心にもない爭ひをすることである。家庭の不和も國際の決裂も人種的爭鬪も悉くこの抹消神經の惡戯に外ならない。これが今後一百年の思想家宗教家達の人性改造運動で無くなつて了ふ。夫婦喧嘩等は眞先に無くなる。だけれど夫婦喧嘩は夫婦の象徴であるといふ言傳へに因つて一週一回程づつ夫婦喧嘩祭といふものが營まれる。先づ犬も喰はぬといふ由緒から後向の犬の掛物を飾つて、良人は祭禮用專門の素燒の土瓶を火鉢の角でぶち割る。細君は胸倉を一寸つまむ。片方の手で乾盃する。

―田中比左良畫―

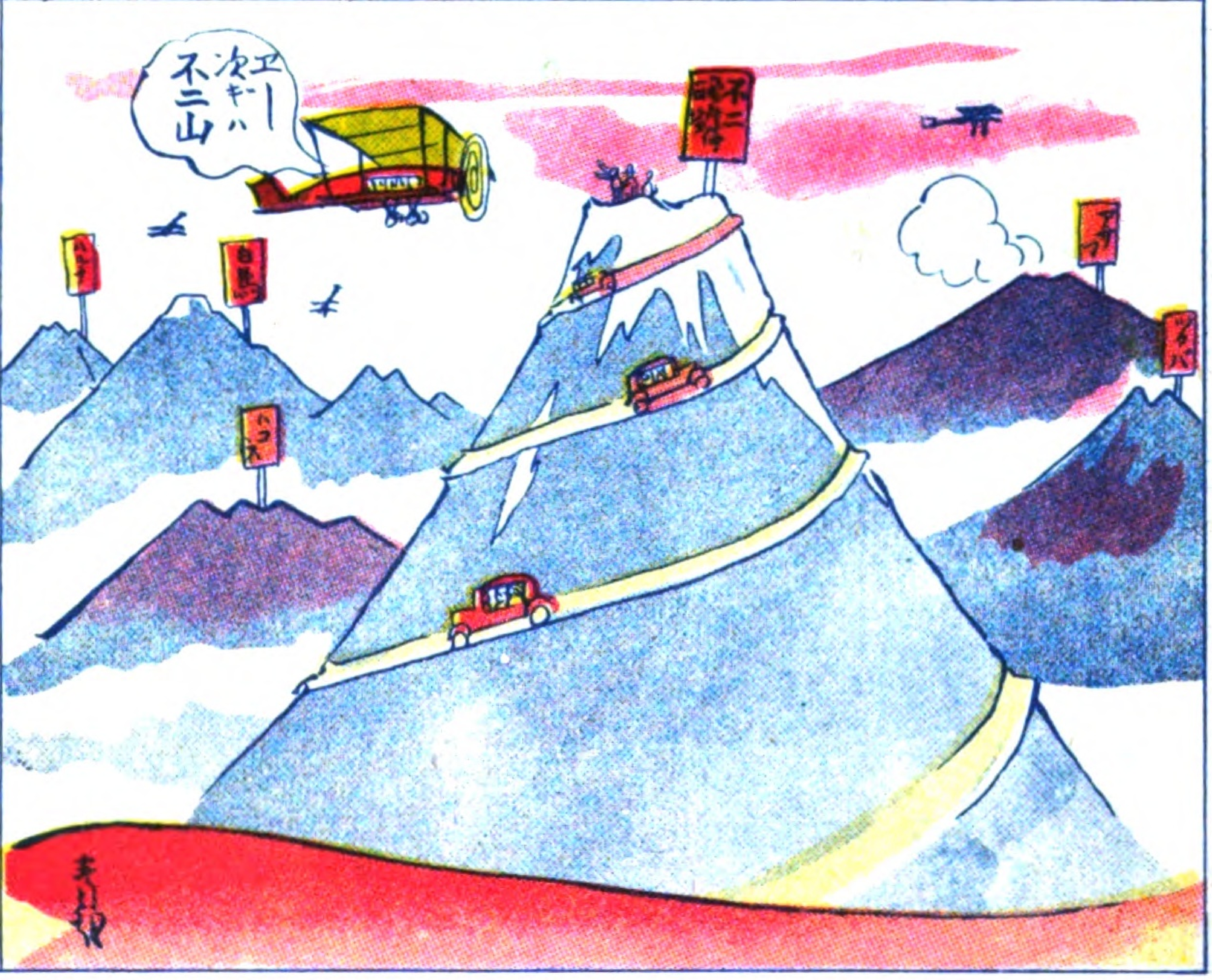


―明石精一畫―

警視廳には空中整理警官が養成された。氣球に乘つて高空に昇り、往來を整理してゐる。

夏季、都市の人人は炎熱の苦しみを知らなくなつた。撒水飛行機は中禪寺湖や蘆の湖から冷水を汲みあげて來て、日中でも夜中でも幾度となく豪雨を降らしてくれる。





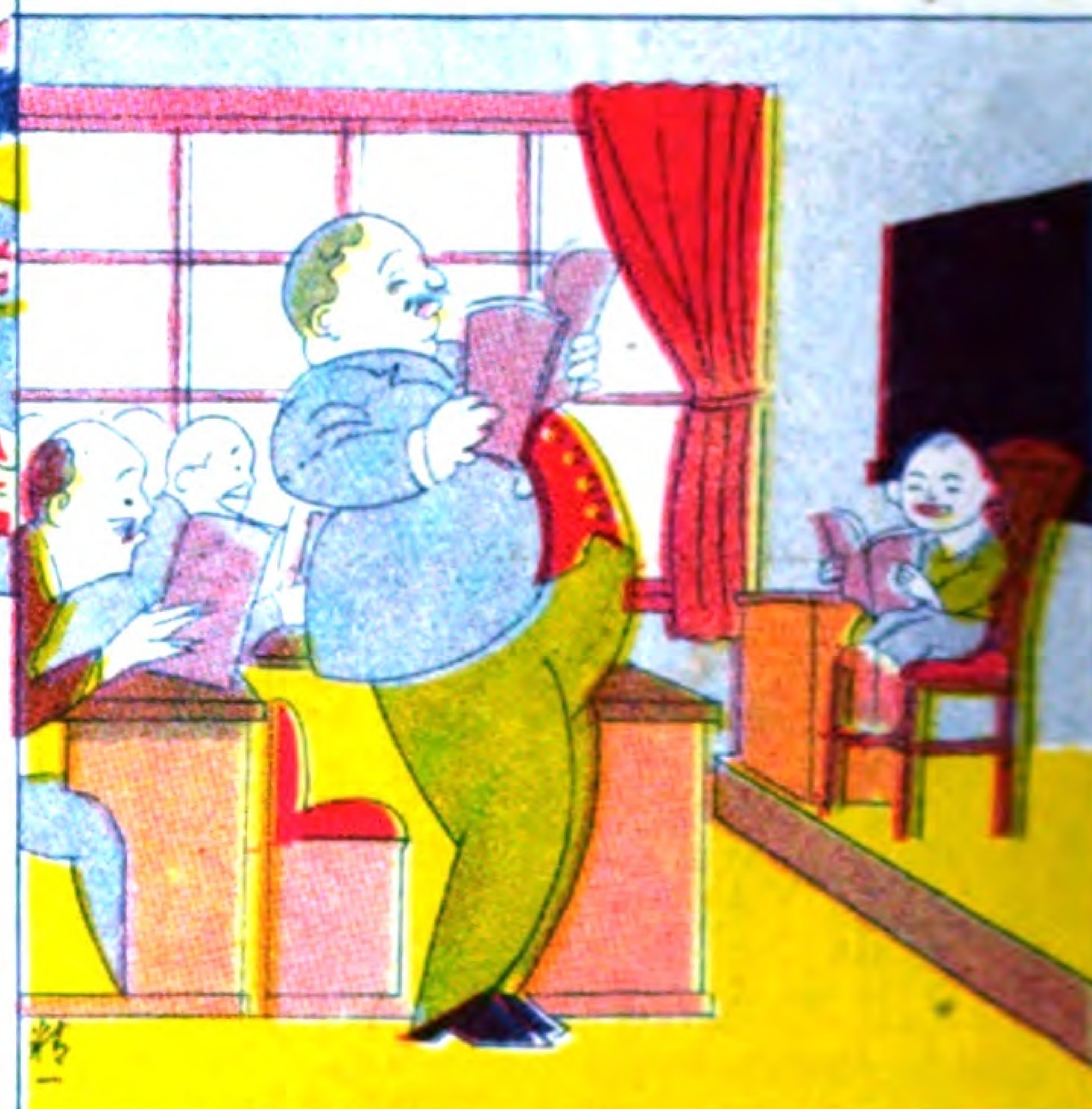
遊覽飛行

―細木原青起畫―

飛行機が行通機關となる一方、遊覽飛行などが出來て山めぐりが出來る。あたら名山高山が臺なしになつて仕舞ふ。

老人の氣分が素晴しく若返る法が發見された。まづ尋常六年から一年迄教育を逆にうけて行くにつれて氣分が子供らしくなる。大人の生徒『ハト、ハナ、サル、カニ』子供の先生『大變よく出來ました。大層子供らしくよめました』とほめられて大人の生徒ホク／＼。

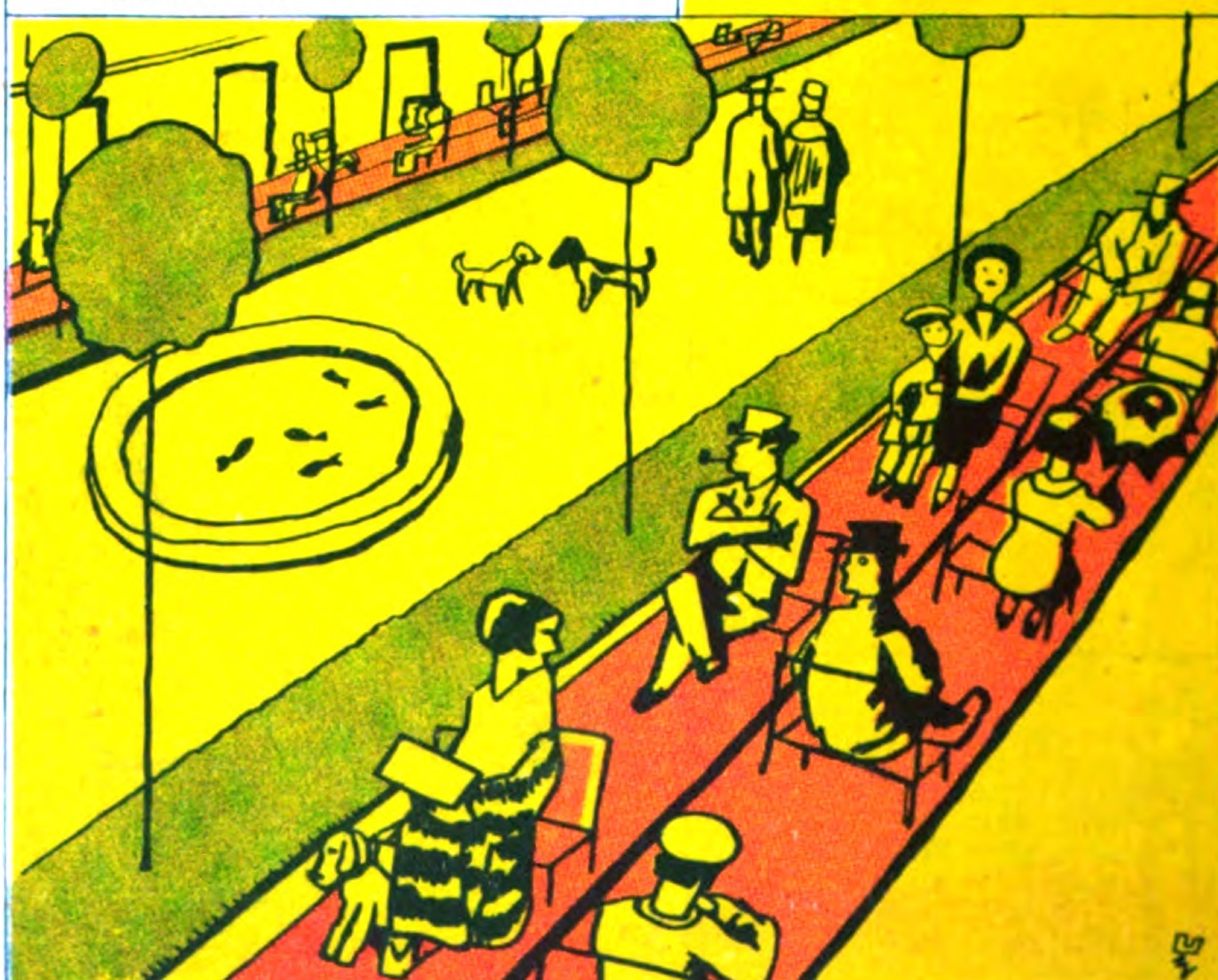




發動機を背につけて自由に手輕に飛べるやうになつたにつれて、間もなく婦人の飛行服裝が華美になつた。羽衣から思ひついて裾の長い衣や色布をヒラヒラ風にひらめかして飛ぶのがこのところ大流行。

エスカレーター ――下川凹天畫――

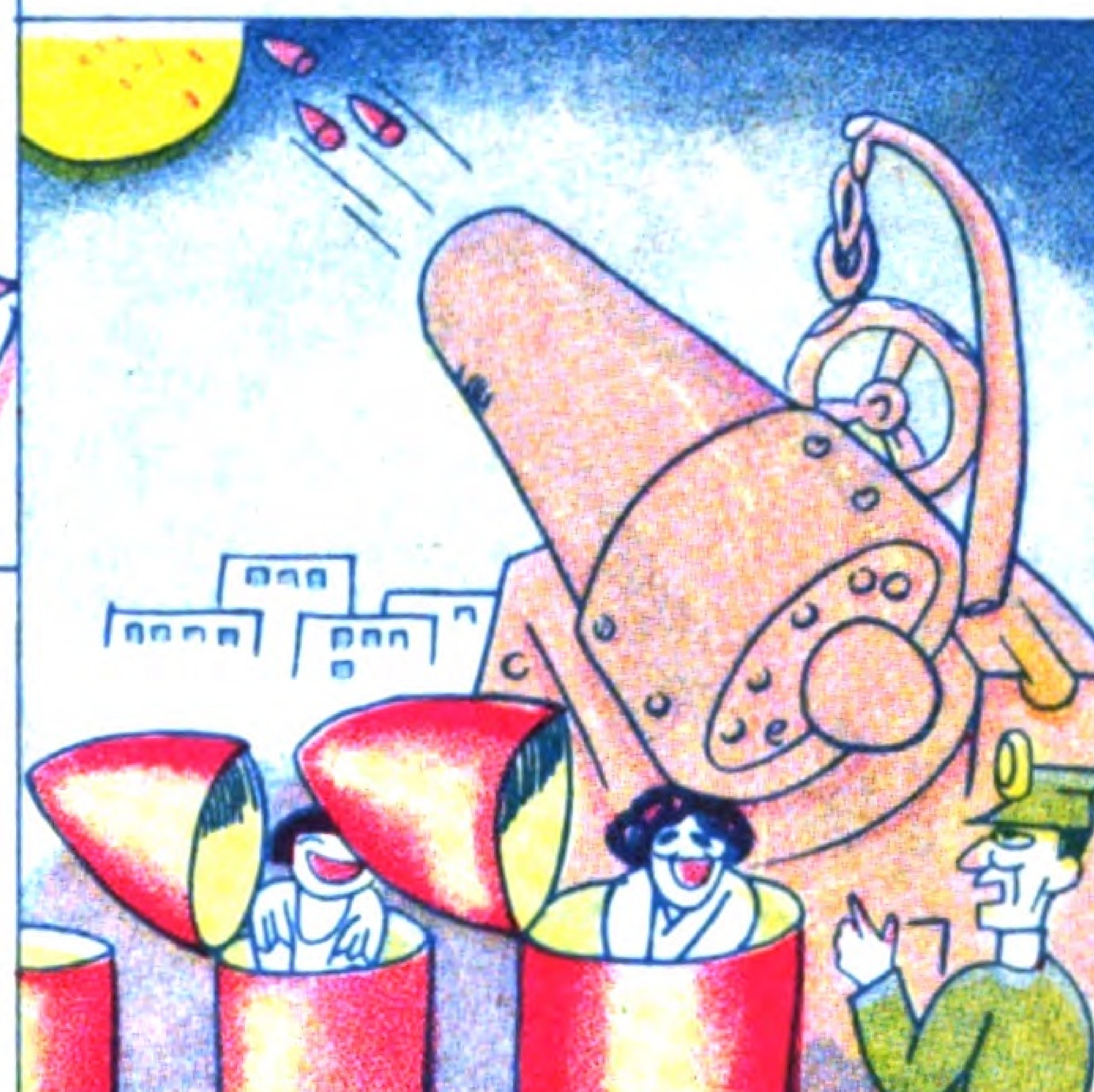
人道が御覽の通りエスカレーターに成つて了ひ、人は歩かなくとも済む様になる。



—中島六郎畫—

科學（A）

月の世界へ行けるやうになつたので忽ち月世界遊覽株式會社が設立される。遊覽客は砲彈の中に入つて往復する。會社の宣傳ポスターに曰く『日歸りのできる月世界遊覽、今週の餘興は兎連總出の餅搗踊、お子樣連のお客特に歡迎。』





外交

國際聯盟とか軍備制限とかいふやうな面倒なことはよしにして國と國の爭は才コロで勝負をきめることにする。日本では早速博徒の親分を全權大使に任命、だから負けたことなし。

『ヤ、また私の國負けるあります。殘念あります。』

科學（B）

『JOAK……今晩は大へん暑うございますから海底の活動寫眞をお目にかけます。』

ラヂオもすつかり發達して擴聲器からは聲といつしよに活動寫眞まで寫る。

『ヤア涼しい〳〵。』





交通

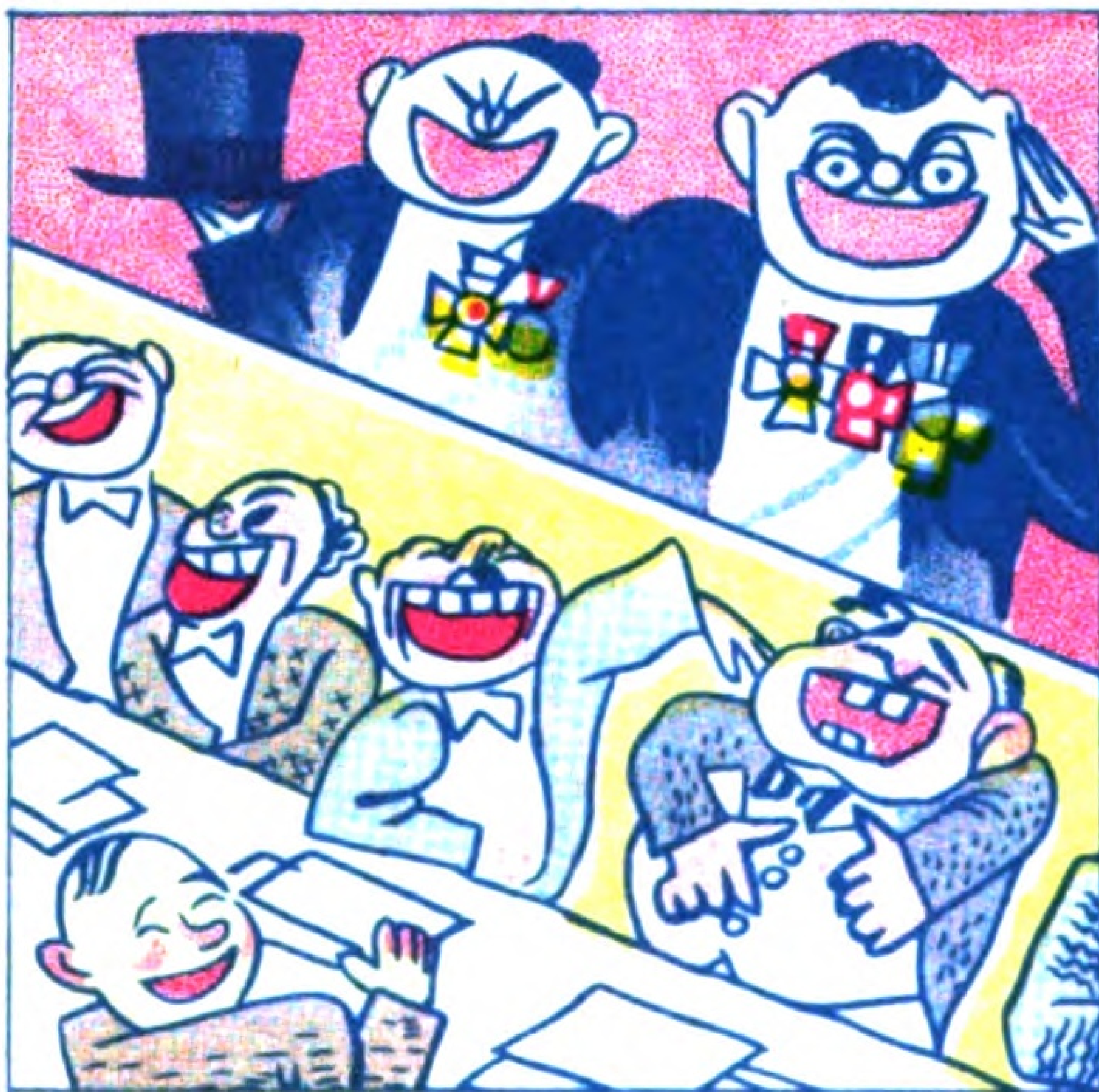
二枚の羽と一握のモーターで自由に飛べるやうになつたので地上は車道になり空中は人道になる。交通巡査『だツ誰だ立小便をするのは……地上へ下りてしないと百圓の罰金だぞ。』

習慣

女尊男卑の風は益々はげしくなつて夫人の散歩には夫が負つて歩く。『今日はどちらへ、公園へですか。ハイヘイ。』

途中友人にでもあふと

『ヤア花下君、そのうちお許を得て遊びに來給へ。今日はお互に急がしいから失敬。』





思想

思想もいゝ加減に一つにまとめてしまはうといふ會議が開かれる。社會主義、共産主義、國家主義、虚無主義その他の代表者が集り討議したが結極ワッハッハッハッハッハと笑つて暮す主義が一番いゝといふことになり笑ひの製造元の漫畫家に金鵄勲章を贈ることを滿場一致で可決した。

生活

食べ物はすべて固形に壓搾されて賣出される。雞一羽分でも角砂糖ぐらゐの大きさだ。鍋に入れて熱を加へるともとの形にかへる。至極便利重寶、旅行用貯藏用にはもつて來いだ。





婦人代議士

一婦人代議士が『男子に對する貞操法案について』長々と演説をしてゐる中突然議長席に向つて、『議長!!!』と叫んだ。そして『只今妾の坊やの泣き聲が致しました。一寸乳をやつて來たいと存じます。五分間退場をお許し下さい』議長『退場を許します。』

―須山計一畫―


八歳の醫學博士
人口過多で地上に住む處なく海上にアパートメントが建設。
若返り法が進步して到る處に老人の花婿が續出
人間が長壽によつて百年勤續の會社員が多くなる。
百年
續ニ付キ
表彰
只今火星から地球へ觀光團が到着しました
觀光團
體育が發達の結果人間の體格が巨大になり象や虎を、仔犬の如く引連れて郊外散步

—谷脇素文畫—



虎に關する珍談奇話

東京上野動物園長　黑川義太郎

先年私が河馬受領輸送の爲、朝鮮京城府へ出張した折、非常に動物の研究に趣味を持つて居らるる、今村鞆氏より聞いた虎に關する面白い事實譚を此處に御紹介致さうと思ひます。

虎を憤死せしめた小使

これは今より四十五六年前即ち明治十四五年の頃朝鮮の僻地に起つた事實譚である。其の頃は素より電信電話もなく、鐵道なども無論ない時代である。大日本公使館は京城にあり、領事館は仁川と元山の二ケ所丈であつて、其公使館と領事館の連絡は、專ら人によつて行はれて居つたのである。そんな鹽梅だつたから、京城の日本公使館は、日本人の小使一人を以て、其の交通連絡に充て、仁川京城間や、京城元山間を往復させて居たのである。

或る年の冬、その小使が公文書を携帶して元山領事館に赴き、所用を果しての歸路、現今の京元線高山驛附近の山路に差掛ると、其の邊の山路は今日と違ひ、樹木が鬱蒼として生ひ茂り、それこそ虎か狼の出さうな處であつて、自と身の毛がよだつ樣な感じがするのであつた。然しその小使は常に往復する所とて別段氣にも止めず、健脚にまかせて行途を急ぎつゝあつた。其の日は曇り勝ちであつたが折惡しく雪さへ降り出して來て、追追咫尺も辨ぜざる有樣となり、樹も山も、坂も小徑も、降り積る雪に忽ち白皚皚たる銀世界と化して了つた。

小使は木の枝を折りて杖を作り、凹地や雪の吹溜りへ踏込まぬやう用心して歩みつゝある中、誤つて本道を失ひ、却て岩山の所へ出てしまつたのである。暫く佇んで方向を考へながら、不圖氣付いたのは何處からともなく一種異樣の啼聲、——確かに動物の啼聲が聞えて來る事である。曾て茶呑談に聞いて居た虎の兒ででもあるまいかと、好奇心に胸を躍らせながら、其の聲のする方を便りに進んで行つた。だが何分路らしき所はなく、致し方なく突兀たる岩石の間を攀ぢ登り、辛うじて其の聲のする近所に到着して見ると、前方に大きな岩窟があつて、鳥渡

近寄ることの困難な行止りの場所であることが分つた。

よく見ると其の岩窟の入口に當つて、猫大の一匹の動物を發見したのである。大膽其の岩窟の棲へや、接近困難なる場所、其所に啼崩れて居る猫大の動物が居ることなどより考ふれば、疑もなく、それは虎の兒であらうと思ひ、大膽なる小使は、急に其の兒を捕ふる氣になつて容易く生捕り、懐へ押入れた處が、虎兒は寒さに堪へ難くて啼いて居たものか、不思議にも懐の中へ蹲まつて啼止んでしまつた。

軈て小使は徑らしき所も見出し得ず、餘儀なく大凡の方向を考へて歩み出し、約十五六町も歩み續けたかと思うた頃、後の方から唯ならない物音がするので、振返つて見ると一匹の大虎が、疾風迅雷の如く怒號しつゝ追つかけて來るのであつた。之を見た小使は非常に驚いて一時は茫然として居たが、根が大膽氣である丈けに、急に氣を取直して突嗟の間に、此危急の場合より如何にして脫すべきかを考へた。幸ひ附近は大木鬱蒼として茂つて居つたので、極手近の下枝多き大木に、猿の如く素早く攀ぢ登つて了つた。若し小使の木登りが今一秒も遲かつたなら追つ驅け來つた虎の爲に必ずや噛み殺されたに違ひない。何故と云へば小使が其の木に攀ぢ上つた時には、小使の足先は虎の口より僅に一尺位しか離れて居なかつたのである。天祐か僥倖か、僅に危機一髪の間に此の大難を免れたのであつた。ほつと一息したがら小使は、其の木の上方に登つて見ると、丁度腰を掛けるのに工合のよい枝があつたので樂々と掛け、氣を静めて猛り狂ふ虎の方を見下した。

すると虎の怒りは一通りや二通りのことでなく、狂暴の度は其の頂點に達し、目を瞋らし牙を張り、咆哮しつゝ或は樹幹に立ち上り、或は樹間の近くを彷徨し、或は樹幹に噛み付きては樹上を睥睨し、凄じき眼光人を射るが如く、凄慘の狀よく筆紙の盡す所ではなかつた。一方懐の中に在る虎兒は、樹下に於て狂へる咆哮を聞いて母獸の來れることを悟り、懐中にて狂ひ啼を初め、動もすれば懐より脫出しようとするのである。小使は衣類の上より愛撫を加へて、其の脫出を防いだけれども、虎兒は間歇的に思ひ出した樣に聲張り上げては啼出し、其の啼き出す度毎に樹下の母虎は、益々狂暴を逞しうするのであつたが、樹上の小使は少しも騒がず、別に深くも考へず成行きの變遷を待つて居つた。

時の經過するに從ひ虎は益々猛然其の極に達し咆哮を續けて居たが疲勞でも感じたのか一時其の勢ひ弛緩し目も將に睡くれんとする頃不思議にも咆哮怒號は稍和いだ樣であつた。虎が此の時、流石此の大膽なる小使も初めて心の恐怖心に襲はれたのである。何となれば、空中の樹上に長く止まる事は寒風肌を刺して堪へ難く、加ふるに空腹を感じて來て若し樹下の猛虎が幾日もこの狀態の下に立ち塞るならば、身を以て逸るゝことの不可能なることを悟つたからである。

日は既に暮れて四隣の寂寞を感じ、凡

は益々寒しく、寒氣は彌が上に募り、樹下の猛虎が樹幹に體を摩擦する時であらう、時々電光の閃くのをさへ認めるやうになつたので、一層悽慘の氣分が深くなつて來た。夜は次第に更け夜半とも思しき頃、樹下の虎は急に物音を停止した樣子なので、小使は不審を抱き、暫く樹下の氣配を考察して居たけれども、爾後更に音を立てない樣になつたので、小使は自己の位置を幾分下方の枝に取換へて見たが虎は少しも騷ぐ樣子がない。夜目に判然と下界の見透しが利かないから迂濶なことは出來ないので、とう／＼我慢して夜の明くるのを待ち、東天の白むに從ひ樹下を注視すると、自己の登つて居る樹から、一間許り離れた所に虎はジッと前肢を前に伸ばし、後肢を地に据ゑ身動きもせず、生死孰れか、樹上よりは見分けが附かない。

この時まで我慢に我慢を重ね、冷靜沈着の態度を採つて居つた小使は、靜に枝を傳うて虎の眞上に至り、虎の顔部目蒐けて放尿を試みたけれども、蛙面に水の譬への如く、虎には何の感じを與へない。これは確に死んで居ると自覺した時、渾身の勇を鼓して徐々に降下を試み、愈々地に達して其の死を確め得たので、虎の顔を覗いて見ると、兩眼を瞠つた儘死んで居る樣は餘り氣持はよくなかつた。

この虎の死んだのは、母性愛の結晶が極度の憤怒に變じ、多少精神に異常を來たして、過激に飛躍したる爲心臓破裂を起し、坐踞せる儘死後強直を起したのであつた。

大膽豪氣の小使も事玆に至ては呆然たらざるを得ない。一時の出來心で懷にした生捕の虎兒が急に母獸を失ひ、孤兒になつたことを不憫に思ひ、此の母獸の皮と共に持歸り飼養を加へてやらう



と考へたが、何分にも地理不案內のこの山中に於て如何なる處置を取つたものかと思案に暮れながら、樹立の間より遙か眺めたところ前方の谷間より炊煙が上つて居る。それを頼りに村落に赴き鮮人を雇つて來て、虎皮を剝ぎ取り、虎兒と共に首尾よく京城に持歸つた。京城の日本人は此の大膽なる小使の行爲を稱讚し、且其の事實譚が奇蹟の挿話として傳へらるゝに至つたのである。今ではこの奇蹟的な物語を覺えて居る人は、京城にも少なからうといふことである。

動物特に犬が憤死したと云ふことは耳にしたことがあるが、虎の憤死したと云ふことを聞いたのは今回が初めてゞある。虎が永年慣馴れし安全地帶で油斷した爲に、愛兒を誘拐されたことを氣注いてから搜索をはじめ、漸く手掛りを發見したるにも拘らず、樹上の人が果して誘拐者であるか、無いか、これが人間沙汰であつたなら、攻擊する前に今少し愼重の態度を採るであらうに、其所は動物の悲しさ、一圖に樹上の人を敵と看做し、猛りきつて興奮に興奮を重ね、一念凝つて精神に異常を來し、つひに心臟破裂を來し死後強直を起したものである。噫、子を思ふ親の心、人も獸も何の違ひがあらう。

愛兒を探す猛虎

今より約二十年前、日本人にして黃海道の山奥に於て金鑛採掘に從事したものがあつた。或時山深く入つた處、虎兒の徘徊するのに遭遇し、これを生捕りにして自宅に持歸り、牛乳を與へて愛養して居た。然るに其の後に至り、其の家の附近に一頭の大虎出沒し、毎夜咆哮して徘徊するを以て近隣の者皆戰慄した。玆に於て其の飼主は虎兒を押入れの中に匿したけれども、虎兒は母獸の徘徊する度毎に啼聲を連發するので、母獸は又兒の啼聲を便りに其の家の垣の外から覗く樣になつて來た。其の氣配のする都度飼主が硝子窓から窺ひ見ると、虎の眼は爛々として光り、腹の毛は月夜に冴えて益々白く、最早母獸の闖入も免れ難き形勢となつて、危險此上もなき狀態に陷つた。飼主は其の情を憐むと同時に自己の危險を免れんが爲に、障子を細目に開け虎兒を庭に出すと、母虎は忽ち其の兒を啣へ垣を躍り越えて何處ともなく一目散に退ち去りたりと云ふ。

何の動物に在つても、親子の愛情は又格別なものであるが、其の兒を奪はれたる場合の如き、この虎の如く、其の一身を犧牲に供してまで、其の兒の奪ひ返しをなすことは、人類の其の子に於けると同樣、焦り狂ふ一心不亂の精神狀態がよく伺はれるのである。

獸類に對する刹那の人情

これも黃海道に住せる內地人某、偶々野生の虎兒を獲て寢食を忘るるまでに愛育し、非常に馴親しむに至つた。虎兒の成長するに從ひ、初めは試に其の頸に綱をかけて庭先に繫留して自ら樂み、又これを以て他人にも誇りとなし、遂には鎖を付けて庭園外へ曳出し、面白半分往來をも曳廻すに至つたのである。或る日例



により、往來を曳き連れ散歩しつゝありたる時、一農夫が荷を負はせたる牛を曳き來るに遭ひ、其の行違ひ樣、牛の脚が虎の體に觸れたる爲、虎は忽ち怒りを發して、觸れたる牛の脚を一嚙みにし、爲に牛の脚は折れて仕舞つたのであつた。

茲に於て農夫は虎の持主に對し、直に牛脚の骨折に對して、相當代金を賠償すべきことを談判したけれども、虎の飼主は只管詫びて代金を辨償せず、穩便に計らつて貰ふ樣嘆願した。けれども牛の飼主は中々承知しない。牛の骨折は牛を無くしたも同樣で使役上大損害を蒙つたのであるから、代牛を得るまでは、運搬に用を缺き農耕にも差支を生ずるから、其等に對する損害賠償金を求めて止まなかつた。だがこの虎の飼主は家が貧しくて、到底これを賠償するの道がなく示談調はず、終に虎の飼主は訴へられて損害賠償金二百圓を徴收された。だが飼主として見れば、哺乳の頃より手鹽にかけて折角育て上げ、犬同樣の伴侶となつたのであるけれど、今となつては、撲殺して他に危害を加へぬ樣せなければならなかつた。けれども猶自ら手を下して殺すと云ふことになると、自殺するよりも、苦惱の種となり、熟考に熟考を重ねた後銃殺する事に決心した。軈て其の虎を曳き銃を肩にして行途も定めず山又山に分け入り、銃殺せんとして、一旦狙ひを定めたけれども、急に心が鈍り、躊躇して居る中に、無量の涙は顏面に傳はり、一時喪心せる如くになつて銃を地上に擲つて居た。然し一旦恁うと決めた以上、更に心氣を一轉し、愛虎を手許に曳き寄せ、頰擦りして徐に頸輪と鎖を解放し、人に物言ふ如く既往の因緣を說き聞かせ、慕ひ寄る虎兒には振り向きもせず、思ひ切つて元來し道を殆んど夢中に馳せ歸つた。十四五町も來たかと思ふ頃急に振り返つて見ると、幸ひに虎兒の慕ひ歸る樣子もないのでホッと安心した。それより虎兒は全く以前の放縱生活に復したものと思ふ。

左もありなん、虎兒と雖も、哺乳時代から座敷に連れ込んで其養育馴致の効を奏し、外出散步にまで同行せしむる樣になつたものを、其飼主としては、能くこれを殺し得なかつたことは情實上寔に止むを得なかつたことであらうと思ふ。(をはり)



◉滑稽遊戯　茶碗叩き

一人に手拭を折り疊んだもので目隱しをさせ、座敷の中央に坐らせて、それに茶碗一個と箸一本を與へます。與へられた座頭は、その茶碗を自分の膝の前に置き、箸は自分が手にもつて立ち上ります。そして後方へ一二歩退き、そこで三度び廻つてまた前の歩數だけ進み、もとの場所と思ふ處に坐つて、持つてゐる箸で、『ヤッ』と掛聲して茶碗を叩くのです。うまく行けばよいが、なかく〳〵うまく行かず、『ヤッ』と掛聲したのはいゝが箸で疊を叩いたり、始め三度び廻つた時に方角を違へて居りながら、眞面目な顔をしてとんでもない方へ進んだりするのは迚も滑稽な物です。やつて御覧なさい。



◉滑稽手品　澤山の紙幣

エヽ、皆さん有る樣で無いのがお金で御座います。處が私は金貨は有つて居りませぬが、紙幣なら澤山有つて居ります。然し決して贋造紙幣の犯人では御座いませんから御安心を……ピリピリ（と云つて素早く隣室から鉢に盛つた燒芋を持ち出し）ハイ、御覧の通り山盛のおさつを持つて居ります。



◉笑話

男の兒『父樣、坊に太鼓を買つて頂戴よ』

父親『あいよ、買つて上げるから、無闇に叩いて、父樣の邪魔をしてはいけませんよ』

男の兒『えゝ、大丈夫です。坊は父樣が眠つていらつしやる時でなけりや叩かないから』



◉早口

▽摘たて摘豆摘山椒

▽緋朱子黒朱子しゆちんの帯

▽備中の中家が道中の府中で夜中に燒酎飲んで口中が痛んで夢中になつた。

◉九々の洒落

◎『何人兄弟ですか？』『兄さんが六人』

◎『今度でお幾人ですか？』『産後十五人』

◎『熊さん、幾ら借りたい？』『質々四十九圓』

◎『どうだい、景氣は？』『慘々が苦さ』

◎『君の家の十姉妹は幾らですか？』



武ちやんと花ちやんとが天から降つて來たやうですネ。でも御安心下さい。それには（アイウエオ…）の番號順につないでみて下さい。

「四ツ三十二間です」

● 同字の多い歌

□鳥取りが鳥居の鳥を取りに來て
とりもちのうてとり逃しけり

□心こそ心迷はす心なれ
心に心、心ゆるすな

□瓜賣りが瓜賣りに來て瓜賣れず賣る瓜、瓜をかぶる瓜賣り

□宇治の火事茶園に火炎燃え上り
茶摘み茶仕事チャッチャ、ムチャクチャ

● 漫畫 蒸氣のいたづら



● 魚盡しの手紙

拝啓鰆々御鮟鱇奉賀候其後は御針魚も中上げず鰈是と意外の御不鯖に打過ぎ候段平目に御用捨鯉願中候 鮭小生儀近頃鱸セイゴ初めての鯛病に冒され一時は病勢を鱚かひ中候處昨今漸く貝方に鮎趣き鱈今は、鰺餓魴鯑鱒地療養中にて有之此の分にて鱚飲得者最ハヤ日鯰快河豚致すべくと存居候久々鰯にて御鮑まで御鱶がひ中上候

金魚（東京 興津良久）

● 考へ物

（一）或る處にお城があつた。或る日そこへ通りかゝつた武士が「さて持主の女人は、どこに居るのか。事によつたら此の城内に住つてゐるのでなからうか」と思ひながら、魚の名七匹を連ねて口吟んだ。何と言つたのだらう？

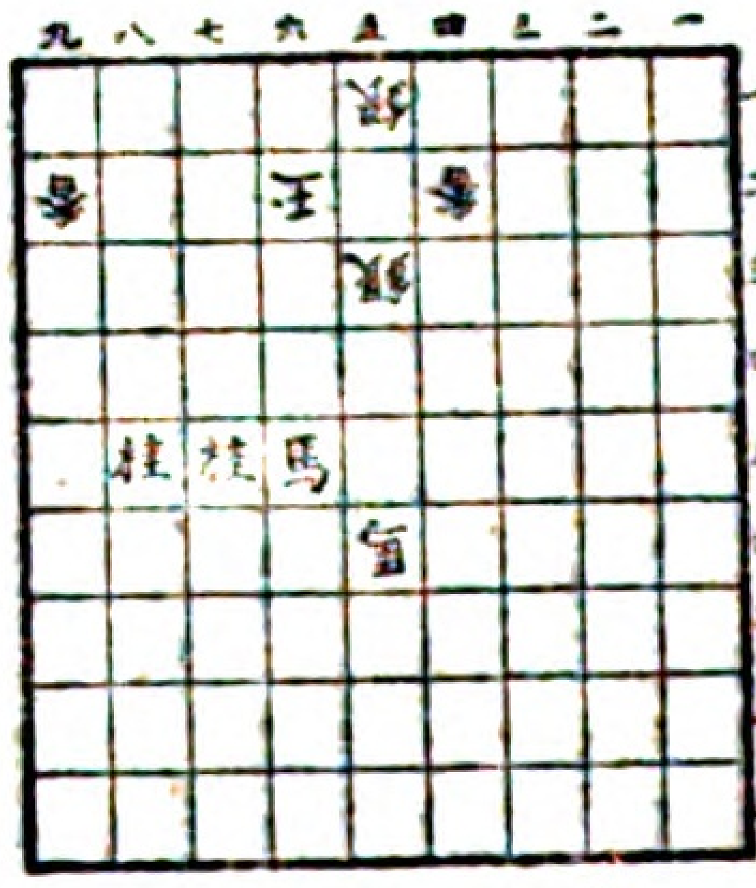
（二）池の中に制札がある。何と書いてあるだらう（野手道具一、鳥名一）

（三）四角なものを圓くするには？（日用品一）

（四）假名二字で上から讀めば虫の名下から讀めば日本の國名とは？

● 詰將棋新題

八段 大崎熊雄出題

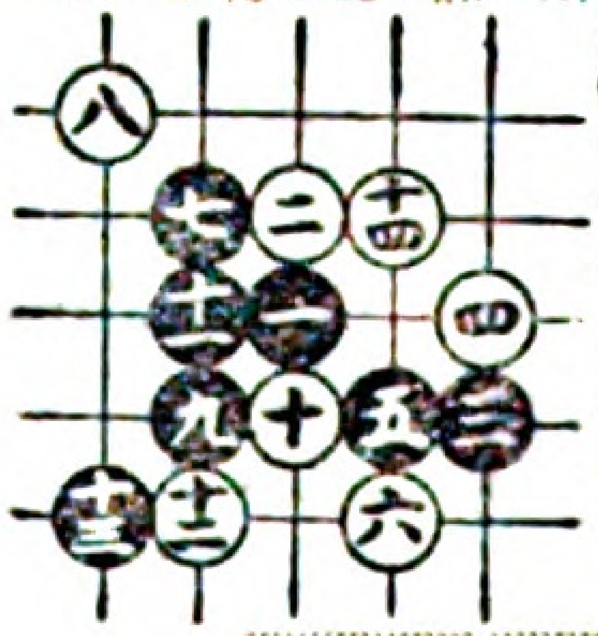


持駒 銀 桂 桂

● 聯珠新題

六段 清水吾石出題

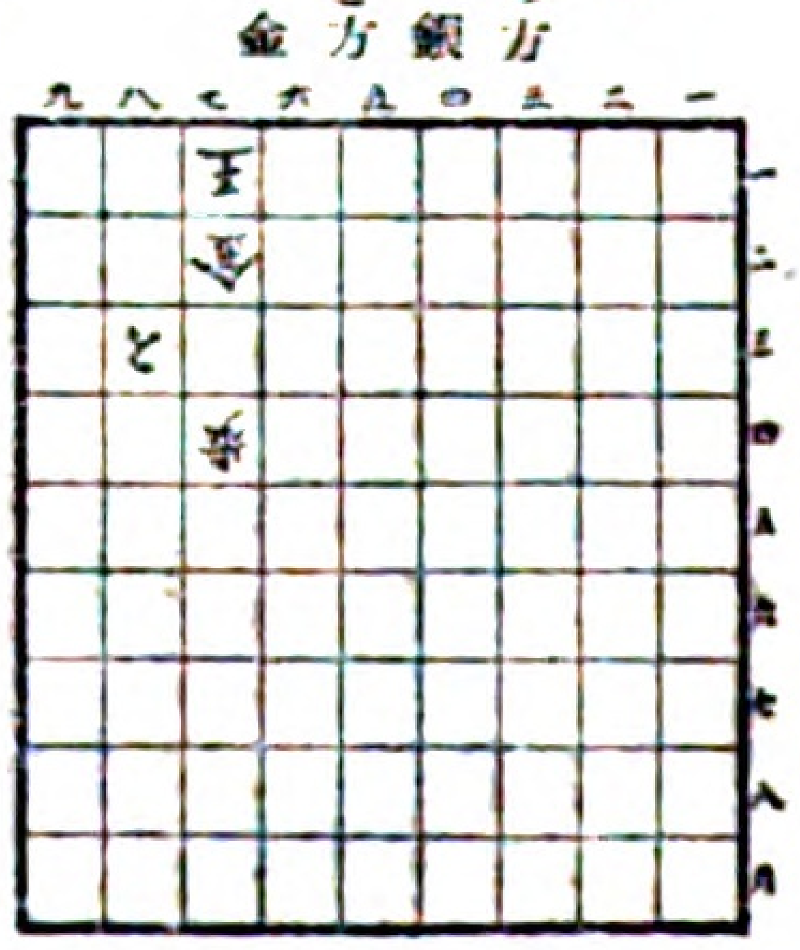
○本題の黒（五）は一見優勢の如くなれど能くない。（十四）の所に打つべきである。白（二）も能くない。黒（五）誤着に附入て（十四）に打てば退戰になるのを避るの如く打つたので黒は得たりと（七）から追詰に進んだ爲引續き（五）からの追詰勝は……。



● 將棋必至の研究

七段 溝呂木光治出題

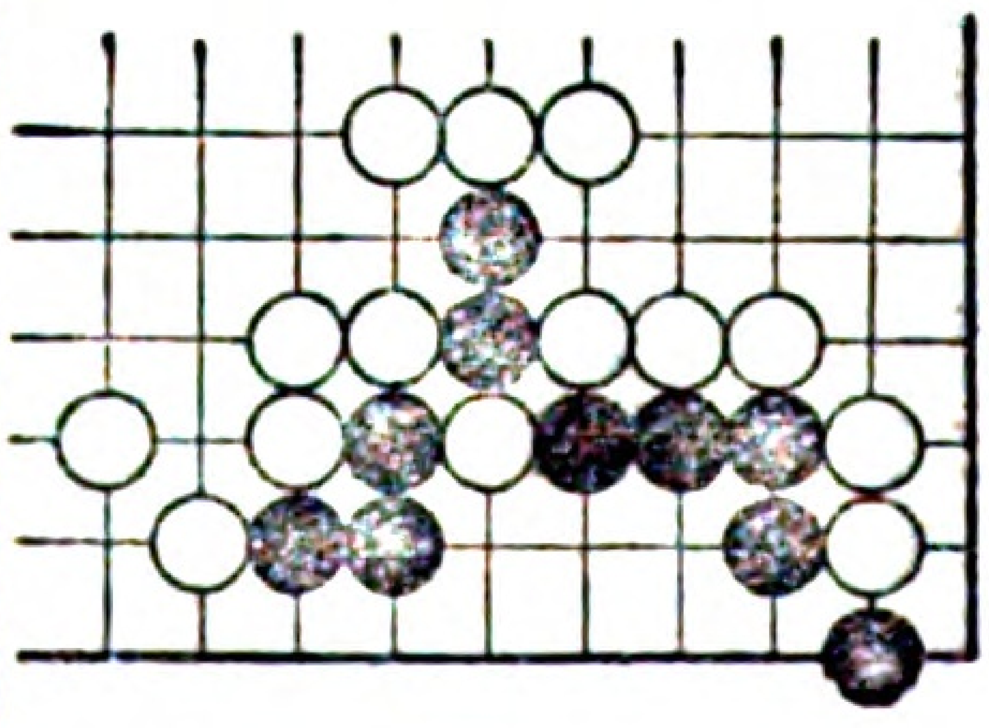
持駒
△攻め方 金、銀
▲防ぎ方 金、金 銀



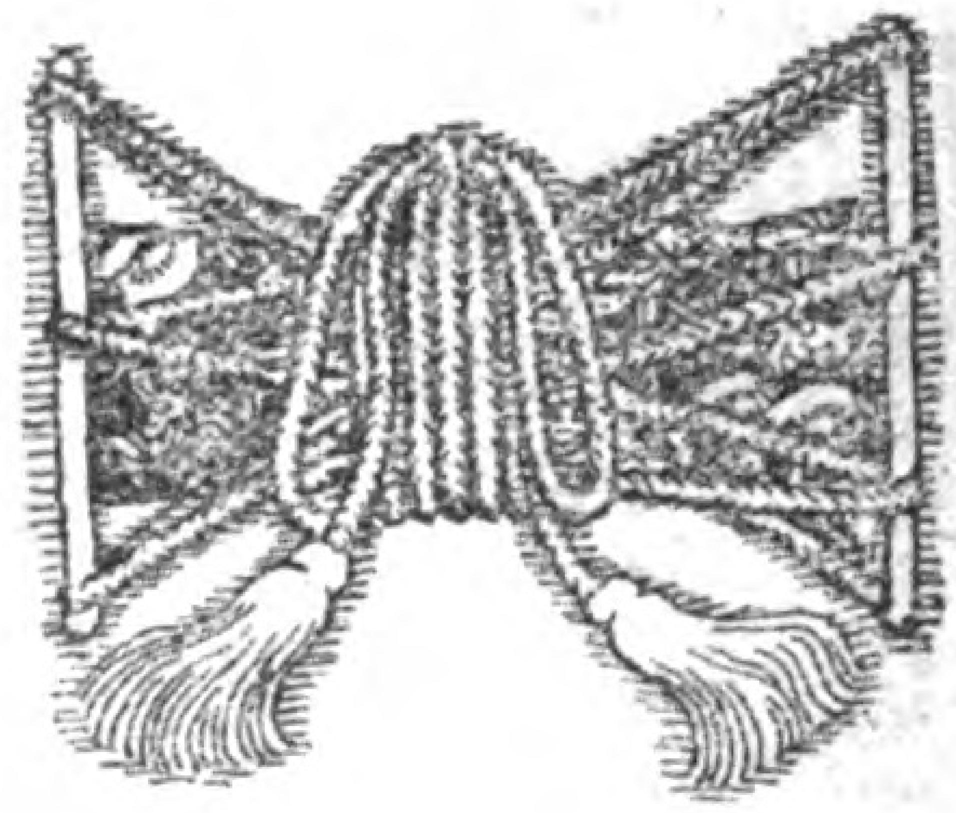
● 圍碁新題

五段 福田正義出題

黒先にて結果は如何：



本欄解答は本文二七九頁にあります。



名人綺談

紫しらべ

田代倫

天明年間、江戸に原武太夫といふ三味線の名人がゐた。しばしば御前演奏にも出て、公儀から御家人の待遇を受けるほどの名匠であつた。一心、堂に入るといふものか、三味線を取つては、無念無想、その人、神に化したかと思はれるほどの厳粛さ崇高さが溢れてゐた。

されば、武太夫は酒席などでは決して三味線を手にしなかつた。劇場から頼まれて出かけるにさへ、齋戒沐浴して家を出たほどである。藝術は、彼にあつては神への奉仕であつた。

こんな話がある——

武太夫が、ある日、感興の湧き出づるまゝに、靜坐して撥を取り、得意の絃を鳴らしてゐると、いつの間にかその縁側には十數匹の猫が集まつて、ニヤンとも云はず、ぢつと三味の音に聞き惚れてゐたといふ。蜘蛛は名手のギオロンを聞くと、その巣を出でて部屋の天井へ集まつて來る。また小鳥も犬も音樂は好きである。しかし猫はあまり音樂を好まないもの。その猫が、武太夫の三味線には感動されずに居れなかつたのであるから、技、神に入ると云つてよい。

しかし、もうかうなると決して才能や技藝の問題ではない。精神である。藝術の極致は皆さうだ。劍を執るも、弓を取るも、鼓も笛も、舞踊も繪畫も、畢竟、一誠、神に通ずるの神秘境に外ならない。果然、武太夫は藝人ではなかつた。その三味線を取るにも必ず靜坐瞑想して撥を動かしたといふのも、故なきことではない。

此の名人が、四十七歳の秋、遂に撥をすて、七十一歳永眠する日まで二度と三味線を手にしなかつた。彼に取つては出家にも將た自殺にも等しい決心である。なぜそんな事をしたか。そこにも「名人」の尊い心が光つてゐる。

ある日、武太夫が大名に招かれて三味線を弾いてゐると、右手の襖が開いて、花も羞らふ妙齢の美女がすつと入つて來た。

『おゝ！　きれいだ！　何といふ人だらう？』武太夫は、ふい

と心にさう思つた。

と、絃の調子が心持ち濕つた。

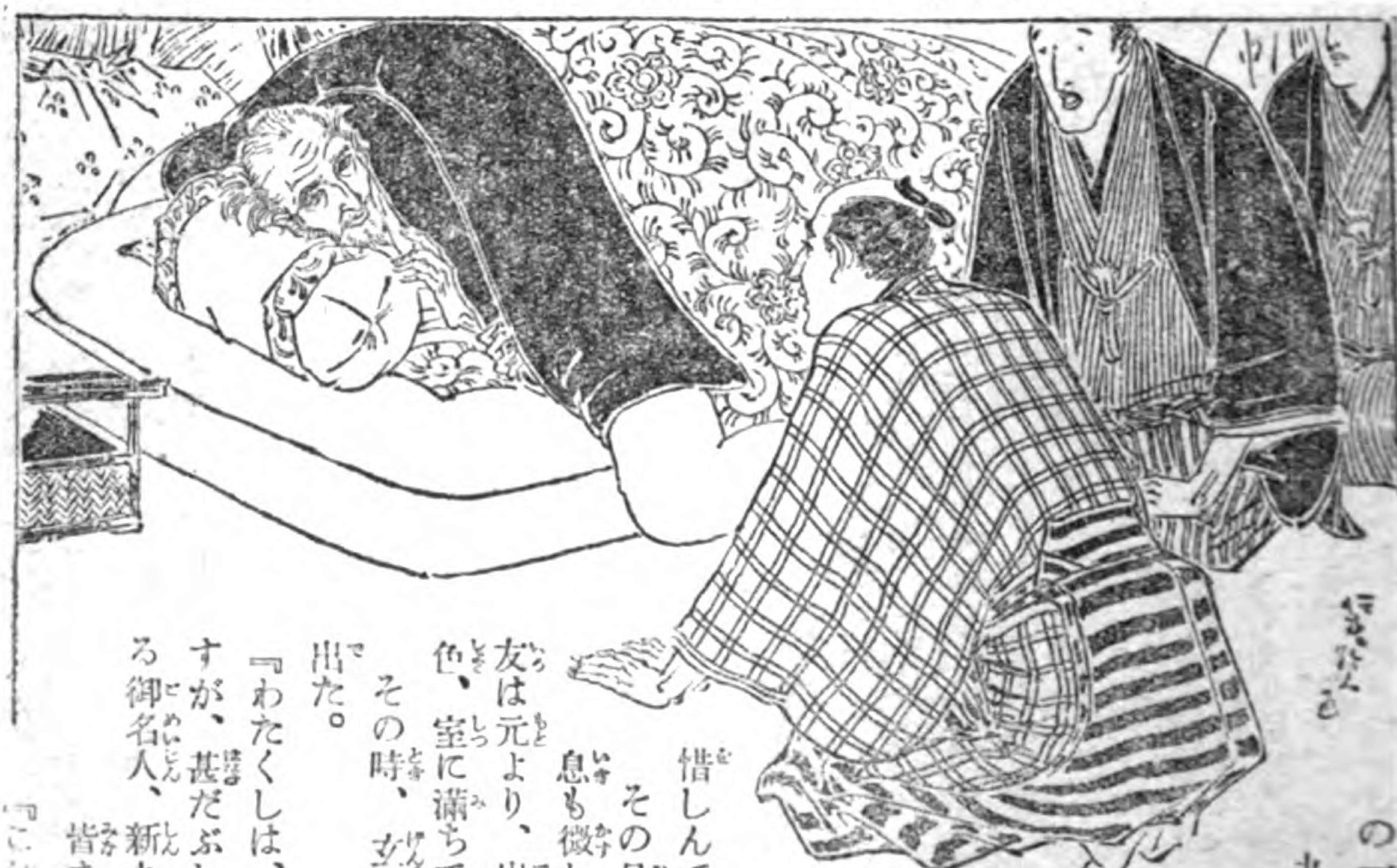
『あゝ！　しまつた！』

武太夫のかほいろが變つた。手足が戰いた。『藝道も廢つた。』彼は卒倒しさうになつた。無論それは誰れ一人知る筈もなかつた。聞く者はたゞその技の玄妙に胸を搏たれ、感歎の聲をのんで、恍惚たるばかりであつた。

が、武太夫は冷汗三斗の思ひをして倉皇として逃ぐるやうに家にかへると、その日からふつゝりと撥をすてゝしまつた。『心に姦した。』その恥に堪へなかつたのである。

此の頃、俗に紫新九郎と人のよぶ、皷の名人が、同じく江戸に住んでゐた。御能の囃方統領で、これは待遇でなく本格の御家人といふので、なかなか權式が高かつた。

此の人は「紫調べ」といふ皷の一手を工風したので、人が稱して「紫新九郎」とよぶやうになつたのであるが、皷をとつては天下一品、その心を罩めて打ち鳴らす時、屋根の瓦が一寸二寸とずり落ちて來るとさへ云はれたほどである。



此の新九郎、ふと風邪の心地で臥床に就いたが、發熱して枕が上らず、もはや今日か明日かと思はれる重態となつた。年も六十六才の冬で、老體といへば老體のこと、人々は名匠の最後を惜しんでゐた。

その日は、新九郎は昏々と眠りに陷ちて、吐く息も微かに、殆ど生きたる色もなかつた。親邊知友は元より、出入の屋敷の人々も枕邊に打ち集うて、憂色、室に滿ちてゐた。

その時、玄關に訪ふ人の聲がした。取次の弟子が出た。

『わたくしは、原武太夫と申す名もない者でございますが、甚だぶしつけの御願ひながら、實は、世にも稀なる御名人、新九郎殿の、――』

皆まで聞かず、弟子は早や呑込み顏で、

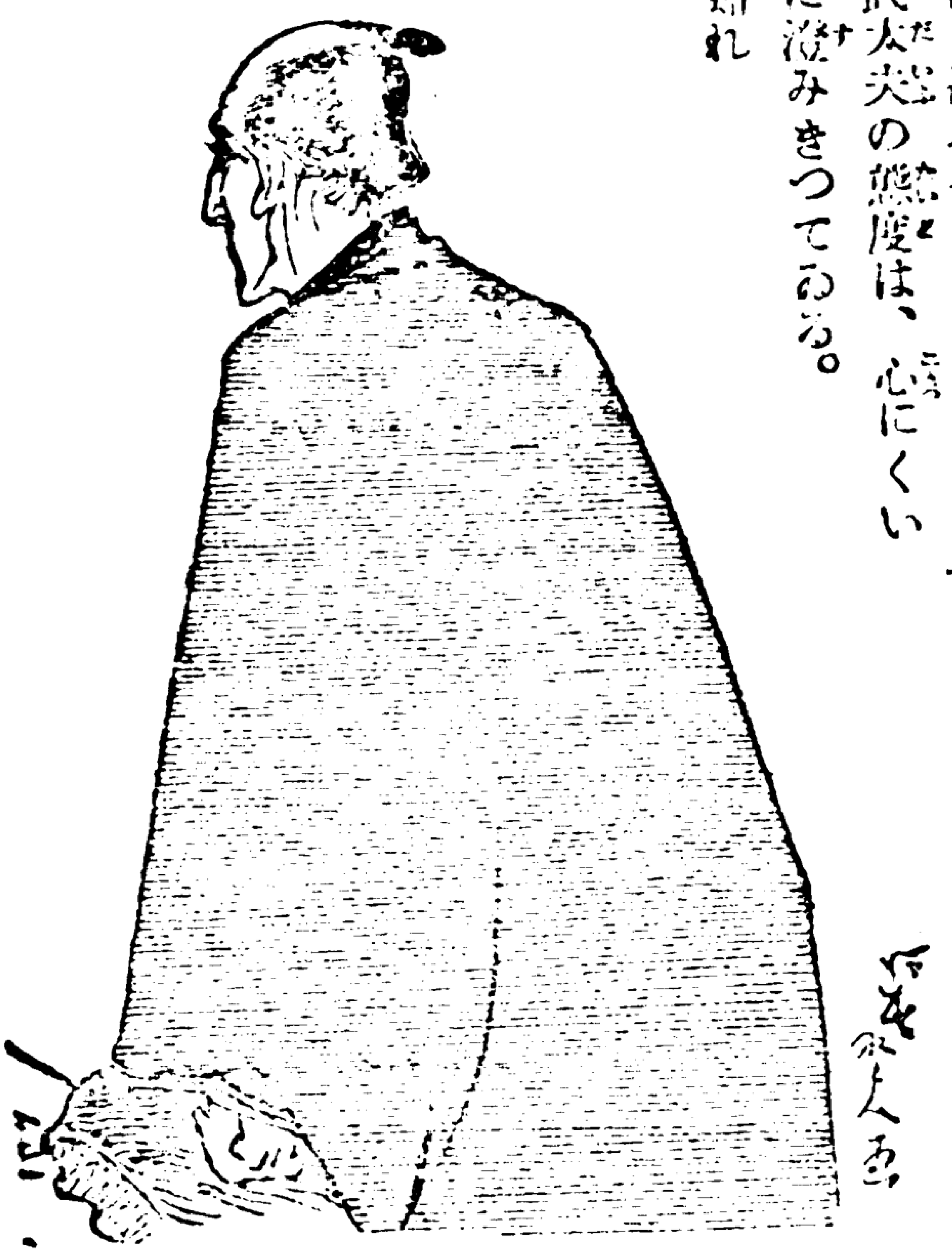
『これはこれは――わざわざ御見舞を頂きまし

て誠にはや。師匠もさぞかしお喜びになりませう。けれども、最早今日明日も知れぬ御重態、折角ながら御面會致すことも叶らず。失禮の段は平に――』頭を下げて云つた。

『いや、わたくしは……御見舞に上つたのではございませぬ。今まで御高名は承はつて居りましたが、かけちがつてついぞ一度もお目もじを得ませんでした。のみならず、名高い新九郎殿の秘曲「紫しらべ」噂にばかりお聞き申して、遂に拜聽する機もございませず、一生のうらみに存じます。承はれば御重態の折柄、まことに心なき業ではございますが、是非、この世の思ひ出に、一曲御所望致したいと、かうしてまゐつたものでございます――どうか此の旨よろしく御取次を!』

かうした場合にふさはしからず、武太夫の態度は、心にくいほど落ちついてゐる。その眼は冷やかに澄みきつてゐる。

『これは以ての外のこと。明日をも知れぬ重病人に、笛を打てとは――狂人ならいざ知らず、名ある武太夫殿のお言葉とも覺えませぬ。』弟子が腹を立てたのも無理はない。人々がかうして心配して集まつてゐる時、誰が聞きたい――とは常識ではない。



『お言葉、一應は御尤もに存じます――しかし、とにかく新九郎殿に、わたくしの來意を御取次ぎ下さいませ。新九郎殿はよもやいやとは申されますまい。御師匠が、いや――と仰せあるなら、それまでのこと。とにかく御取次を……あなた方には、わたくしの心は分りませぬ。』武太夫はキツと云つた。

弟子は『お前なんか分るたい。』と云ひ捨てて、返事にムツとしたが、見れば、凜とした武太夫の態度、とてもテコでも動きさうにないので、此の上何ともいふことも出來ず、とにかくその通りを取次ぐより外なかつた。新九郎は力ない聲で、

「ほう、よく見えた、武太夫殿といへばこの頃何か心願あつて三味線に凝てられたやうだが、一人とないその道の名人だ。その人がわざ／＼見えて、わしの笛を聞きたいと――ふむ、さういふ人に聞いて貰へたら、わしは百遍の念佛よりも供養になる。さあ、どうぞ、むさくろしい所ではございまするが、お上り下さい、新九郎一生の打ち納めに、是非お聞きを願ひませう。――とさう申せ。』

弟子はびつくりした。並居る人々も、この大病人をどうして――と目を見合はせた。

しかし、それを止めることは出來なかつた。新九郎の言葉には何ともいへぬ權威があつた。言ふがまゝに任かせる外はないと、みんなはあきらめねばならなかつた。

案内について靜かに入つて來た武太夫は、一同に一寸會釋をすると、スッと新九郎の臥床の側によつた——

『初めてお目にかゝります。お名前は元より、お姿もかげながら拜見して、お慕はしく存じて居りました。わたくしは三味線ひきの武太夫と申す者。どうぞよろしくおたのみ申します。』

『いや、これは申しおくれました。わたくしこそかねがねお慕ひ申して居りました。名もない鼓うちの新九郎でございます。』

『さて、先ほどお弟子衆に申上げましたやうに、御病中まことに恐れ入りますが、あなたほどの御名人、御重態と承はつては、またいつの世にあらうかと思ひまして、今生の思ひ出に、是非一曲御所望致したいと——』

『ありがたうございます。あなたなればこそおいで下された！新九郎、本望でございます——これ鼓をもて！』



紫房の鼓は弟子の手で枕頭に運ばれた。よぼ〳〵の土色をした老病人は、恐しく咳き入りながら臥床を這ひ出た。

一同は見かねて目をそらす。武太夫一人キッと正坐して、兩手を膝の上に重ねたまゝ、新九郎の顏をにらむやうに見つめてゐる。

新九郎はヨロ〳〵とゐざりながら、床の前に敷かれた座布團の上にやつと身體をおいた。

ハツハツと熱い重い苦しげな息を吐きながら、ふる〳〵とふるへる手で鼓を把つた。

左の手先が鼓の緒にかゝつて、右手が半圓を畫がいて前方へ伸ばされると——見る見る顏がスッと張り、顏には旭光のやうに紅の色が走る。兩眼は生き〳〵と輝き初めた。——指先ばかりの左手も、鐵のやうに固くなつて、何物の力もそれをひき離すことは出來まいとさへ思はれた。

一座はシンとなる。武太夫は息もつかずに見入る。

『エイ、ヤア！』肺腑を抉るやうな鋭い氣合がかゝる。人々は

ハツと身をちゞめた。

『ポン、ポン、ポンポン！』絶妙なる調べの一拍子一拍子に、人々の身體は一寸二寸と引きよせられ、人々の魂は鼓の中へ打ち罩められるかと思はれた。

武太夫は覺えず半身を乘り出した。兩手を握り、眼をすゑて瞬きもせぬ。『道は名人だ！　何といふ不思議な音だらう？　あの皮から、あの手から、どうしてこんな美妙な調べが出るのだらう？　それにあの身體の構はどうだ。一寸のスキもない。いま槍でも刀でも、あの無心にうち鳴らしてゐる新九郎を、前からは勿論、後からさへ、とても突くスキはない。いかな武藝者でも劍聖でも、此の骨と皮の老人を斬ることは出來ないのだ。よしや家を覆す地震があつても、此の瀕死の老人を壓することは出來ないのだ。火も燒く能はず、水も浸す能はず、絕對無敵の藝術の三昧境――』

武太夫はもう全身びつしよりと汗を流してゐる。一同も魂のぬけた蛻のやうにキヨトンとなつてゐる――

『ボーン、ボーン！　ボボボボ、ボーン……』紫しらべは終つた――みんなは暗示から放たれたやうにグッタリとなつて目を開いてゐる。武太夫は『ハーッ。』とそのまゝ額を疊につけて平伏した。

『お聞き苦しうございましたらう――』新九郎はまだ氣が張つてゐるのか少しの弛みも見せないで云つた。しかし全身からは熱い湯氣が上つてゐる。

『何とも申し上げやうもありません。實に古今の名手、稀代の名曲。たゞもう有難いばかり――武太夫この世に思ひ遺すことも御座いません――』

『いや、痛み入ります。病みほうけた老の身の力なく、面目次第もございません。時に、此の上は、願はくば――あなたにも一曲、是非御所望致したうございます――』

『とても御相手を致す資格もございませんが、折角の御懇望、武太夫、一代の面目に存じます。實は故あつて一生、二度と手にすまいと心に誓つた三味線ながら、藝道の冥利、また、只今の御禮までに、拙い一手をお聞きに達しませう――どなたか、わたくしの家まで御足勞を願ひます。』

弟子の一人はかけ出した。

それまで、どんなに臥るやうにと新九郎にすゝめても、どうしても肯かないで、キチンと正坐したまゝ三味線の來るのを待つてゐた。



破戒——の三味線は武太夫の渾身の心力を以て弾き出された。それは、いまゝで曾て一度も弾かれたことのない「秋風歎」といふ本曲であつた。いや、武太夫自身が初めて聞く「新曲」であつた。——三味線をすてゝ満二ケ年、その間、夢にも忘れぬ藝術の、幻とも現とも目に耳に囁く微妙の音を、そのまゝ口三味線にとつて、いつの間にか作り上げた「秘曲」であつた。

秋風が蕭條たる野の末を吹き亙つて、霜に紅い木の葉が枝を離れて地に落ちる——その音に、ふと、老衰の秋の虫は驚いて、歌をうたひ出す——けれども、もう生命の道は盡き、聲はすがれて力なく、秋風の裳にあへなくも消えてゆく——

かう云つた人生行路の悲調が、人間の心の扉を叩いてゆく。曲は絶頂へと進む。聴く人々は死の如く靜かである。新九郎はと見れば、端然、木像のやうに座布團の上に正坐して、眼をつぶり、唇を堅くしめて動かない——

秋風は颯々と野末の尾花を吹いて、やがて遙かな地平線の方、森の中へと消えてゆく……

太陽は西へ西へと傾く。白い長い街道を白衣の巡禮は鈴を鳴らしてトボ〳〵と歩いてゆく——

『ピーン、シャン、テン、テーン！』曲は終つた。人々はホツと息を吐いて眼を開く。

新九郎は動かない。眼も開かない……。武太夫は三味線を徐かに置いて、



『何ともおはづかしい次第でございます。』さう云つて辭儀をした。

けれども、新九郎は動かない。眼は堅く閉し、唇は堅く締つてゐる。双手は兩膝の上にキチンとおいたまゝ。身動きもしない。

『お聞きぐるしうございましたでせう。』それでも返辭はない。武太夫は、内心いぶかしく思ひながら、ふと新九郎の面を見入ると——

『おゝ！死相が？』と叫んで、さつと立ち上つた。

人々は一齊により添つた。動かない筈である——「紫調べ」の名人新九郎は、「秋風歎」の名曲を聞きながら、極樂往生を遂げてゐたのであつた。

（終）

趣味と實益 家庭セクション

草木と共に病が芽を吹く

△塵埃の季節に眼の用心、戸外から歸つたら顔を必ず洗ひませう。

△眼が血走つたり鼻血が出たら、頭を高く十分冷し便通よくなさい。

△婦人病のある人はノボセ易い。此の機を逸せず根治が大切。

△鼻先の紫色になるのが鬱血の兆候、怠ると體がムクミます。

△一日三回、オキシフルを廿倍にうすめ、含嗽すれば齒の病には罹りません。



笑話 腹が痛くなつても

幼いお客樣（さも甘さうにお菓子を嚙りながら）――母アちやん、アタイ、こんなおいしいお菓子なら、腹が痛くなつたつてかまはないわ。

安全第一 お母さんの注意

◇これから痲疹の時季、患者のある家へは絶對に子供を同伴しないこと

◇お花見には必ず水筒携帶、露店商人の飲食物は子供に與へたくない。

◇女の子の摘草には、大きな兄さんか、お母さんが附添つて行けば間違ひない。

赤ん坊からお母樣へ

一、新鮮な日光を惠んで下さるのは結構ですが眩しいのは御免です。

二、眠つてゐる間に背丈が伸びて肥るのです。お乳の時刻迄は起さないで下さい。

三、お乳をいたゞく時に泣くのは、おしめが濡れてゐるからです。

四、だつこして下さるのは好きですが、無闇にゆすぶられるのは嫌ひです。

五、寢かせたら私の頭の形を考へて、時々向きを變へて下さい。

六、歩き初めを急いで、まだ強くない脚に重い上體を支へさせられるのは苦痛です。

七、お湯は毎日つかはせて下さい。着物は必ず體が乾いてから着せて下さい。

八、頓狂な聲や荒々しい物音は大變神經を刺戟します。靜かな唄は大好きです。

野菜類の藥效いろ〳〵

○わらびの苦味は胃弱に效があります。

○にんじんは逆上引下げ、胃腸を整へます。

○牛蒡の根はヒゼンによく、健胃劑ともなる。

無作法づくし

電車の吊革につかまらず動く度にヒヨロヒヨロして他人の足をふみつける人



半酔ひ狸寢入り電車の中で他人の肩にもたれかゝりグウグウやる人



お花見に辨當持參はいゝが竹の皮や新聞紙を散らし放題で野山を荒す人



○胡瓜の蔓から取つた汁は火傷に效きます。

○小豆は母乳を増し便秘脚氣に效があります。

○ニンニクは吐血吐瀉病に特效があります。

○ホウレン草は便通をつけ補血劑になります。

○ラツキヨウは不眠症を癒します。

○椎茸干栗干柿の各十匁を水五合にて三合に煎じ、毎夜五勺宛與へれば寢小便に特效があります。

常識だより

○文房具やピン髮飾りのセルロイド製は家庭に澤山ありますが、これはこはれたなら捨てるでは惜しい事がまゝあります。直ぐに廢物にしなくても、古い不用のセルロイドを醋酸アルミで溶かし、ドロドロとなつた液でこはれた品を接ぎ合せて少しおくと、以前の通りになりますから、お試しなさい。

○近頃は大抵電球といへば、カーボンより電流の消失の少いタングステンを多く用ひるやうになりました。そのタングステン電球は冷めてゐる時よりも、白熱してゐる時の方が柔軟性を持つてゐますから、電球の表面などが汚れた時は、消したまゝ掃除するより成るべく點燈して掃除すると線の切れる心配が少いものです。

風味のある家庭料理

北原美佐子

醸蛤肉（貝殻詰蒸し蛤）

材料。大蛤十五個。椎茸中十個。葱一本。酒一勺。醤油二勺。胡麻油少量。

蛤は貝から剝き出して洗ひます。椎茸は水に浸して細く切り、葱は一寸位の細切としします。鍋に胡麻油少量を熱して、蛤と椎茸葱を加へ、强火で炒つた中に、醤油と酒をさし、暫らく煮て、材料を貝殻の中に詰め入れ、蒸籠の熱した中に並べて七分間位むします。これは貝殻ごと皿に盛つて出します。

うどの酢漬

うどの皮をむき、水に浸して五合の熱湯に酢二勺を入れた中に投じてゆで一方瀬戸引鍋に酢一合を沸騰させ砂糖半匙を入れ、おろして別の器に入れて冷めたら、うどを漬込み二三時間後に食べます。



笑話 **たつた一遍**

次郎――アンアンアン！　兄ちやんがアタイのお菓子をみんな食つちやつたア！

太郎――アタイは、たつた一遍しか嚙らなかつたのにお菓子が小ちやくて一嚙で失くなつたんだものオー







古今東西美談逸話

嘘は恥

伊豫大洲の城主加藤出羽守泰興が、江戸へゆく途中、同じ道をゆく旅の少年があつた。出羽守の家來が、

『これ〳〵童よ。そなたは一人旅か』

と、話しかけた。

『はい。一人でござります』と少年は答へた。

『何處へゆく』

『伊勢の大神宮さまへ參詣します』

『そなたは何處の者か』

『私は備前國の百姓の子でござります』

『いや。然うではあるまい。そなたの言葉は備前の者とは異つてゐるぞ。そなたは、わしを瞞すのであらう』

その時少年は笑ひながら答へた。

『備前の者は嘘を云ふのを恥といたします、嘘をつくことは備前の國主が禁じてをります』



この話を乘物の中で聽いてゐた出羽守は、深く感心した。時の備前の國主は池田新太郎光政である。光政は明君と評判されてゐた人である。光政が、どれほど正しく、領民を敎へ導いてゐるか、この少年の言葉で察しられる。備前の者は嘘を云ふことを恥とする――あゝ何といふ立派な誇りであらうと、出羽守は感心したのである。(有斐錄より採る)

友情

武田信玄の臣米倉彦十郎といふ者、銃創を負うて死に瀕した。同僚の甘利左衛門が行つて見ると、毒血が既に全身を廻つてゐる。可哀さうだが駄目だなと思つてゐると、ちやうど其の時米倉の下部が、

『妙藥です。』といつて馬糞を水に溶かした物を勸めた。米倉は大いに怒つて

『畜類の糞を飲んでは、たとひ九死に一生を得ても、武士の面目にかゝはる』

といふ。すると甘利が面を正して、

『それは貴公が誤だ。身を全くして忠孝を勵むのこそ武士の面目ではないか』

『だといつて、獸糞が飲めるか?』

『飲めるとも!』と、椀を取つて、『先づ拙者が毒味する。』と、いふが早いか、二口三口飲み込んで、

『甘い〳〵。』と舌打する。米介は起上つて、

『濟まなかつた！』

涙をはら〳〵と流して、件の妙薬を一息に飲んで了つた。

やがて激しい下痢を起して、全身の毒血が悉く下つて、さすがの重患が立所に直つた。

信玄は、後で甘利を激賞した。（常山紀談に據る）

好一對

明治二十九年に相國寺管長荻野獨園師の病が危篤に陥つた。京都嵯峨天龍寺の管長だつた滴水師は日頃から親交があつたので、或る日見舞に行つた。獨園師は簾カゲのうす暗い一室に蚊帳を吊つて臥てゐた。師は室内に入ると、おい、滴水ぢやと云つて直ぐ蚊帳の中に入り、病臥してゐる獨園師の上に跨がつて、顔と顔が觸れるほど近く覗き込んで、

『わるいげな、どうぢやい』『うむ』

『なほらんか』

『う、う。』

滴水師はさう云つて直ぐ部屋を出てさつさと歸つて來た。

それから三年經つて、滴水師の病が危篤に陥つた時、東福寺管長の濟門敬仲師が小僧を一人從へ菓子箱を持たせて滴水師を見舞に來た。敬仲師は出迎へた僧に向つて、



『滴水師がえらいわるいげな』

『はい』

『わしがさう云うたと云うてくれ。滴水ももうよい年ぢやで、死んでもよいぢやらうと、そしてこの菓子をやつてくれ』

さう云つて病室にも入らず、歸つて行つた。

取次の僧が此事を滴水師に告げると師は病苦を忘れてにつこり笑つた。

もう一二世紀眠らせて呉れ

英國の首相ノース卿は居眠で有名な人だ。或時上院で、議員の一人が長々と造船の歴史を始めた。しかも念が入つて、太古のノアの箱船から說き出した。他の議院連中も大きに困つたが、ノース卿は例に依つてコクリ〳〵と始めた。暫らくして閣員の一人が搖り起すと、『演說はどの邊までいつてる？』『エリザベス女皇時代で、スペインのアルマダ艦隊の邊です』『そりや大變だ、もう一二世紀の間眠らせて呉れ』



百穗畫伯の友情

矢澤弦月氏がまだ不遇時代の事、ある

年の暮に畫は賣れず、借金取は責め立てる、全く途方にくれてゐると、ヒヨツコり訪ねて來たのが平福百穗氏。ふと一枚の繪を指さして、



平福百穗畫伯

『君、あの繪を賣らんか。丁度僕に心當りの嫁入口があるんだが』矢澤氏に取つては願つてもない事、直ちに承諾した。翌日になると、百穗氏が再び訪れ、『少し安いが暮の事だから五百圓で賣つて來た』と言つて、手の切れるやうな拾圓札を五拾枚差し出した時には、地獄で佛、矢澤氏は涙ぐんで感謝した。年越も無事に出來た。其の後、矢澤氏には運が向き、帝展第一回には特選の榮譽を贏ち得て、其の繪は二千圓に賣れた。處が先きの五百圓の繪は、友人の心を勵ますべく、實は百穗氏自身が豐ならぬ懷中をはたいて私かに買ひ取つたものであつた。

ぼろ着物のジヨンソン

北米合衆國の大統領アンドリユー・ジヨンソンは、貧民の子であつた。ボストンの小學校に通ふ頃は、見るもあはれなぼろ着物をまとつたみじめな子供であつたので、富豪の子供達からは、全く、乞食扱ひにされてゐた。

殊に、ジヨンソンが、毎日學校へ行く途中、路々人の家に寄つては、手紙の使ひやら何やらの用事を頼まれて、いくらかの賃銀を貰つてゐたので、子供たちは一層彼を馬鹿にした。



ところが、餓鬼大將で、彼を一番馬鹿にした富豪の息子が川に落ちて溺れようとした時、勇敢に流れに飛び込んで、これを助けたのがジヨンソンであつた。

『あゝ君！僕が、これまでは惡かつた！』餓鬼大將は心からジヨンソンにあやまつた。それからジヨンソンは子供達の中の小英雄として尊敬されるやうになつた。

藝道の奥義

一日、三代將軍家光は能の名人金春八郎を召し、一差り仕舞の稽古があつてから後、『其の方は能にかけては古今の名人ぢやが、其の利を轉じて劍術に用ひ、敵を打ち拉ぐ事は出來ないものかのう？』

『されば、何事も藝術の奥義は共通のもので御座いますが、總じて藝術には、虚實の二つが御座いまして、其中兵法は實、能は虚、虚を以て實に勝つと云ふ事は隨分困難のものでは御座いますが、必ずしも成る間敷き事では無いかに心得まする』

この答へに家光は早速柳生但馬守を呼寄せて立合を命じた。

但馬守は莫迦莫迦しくは思つたが上意故違背もならず、御請けに及んだ。其時

八郎は家光、但馬守兩人に向つて、『さらば、お次の皆々樣にて野守の切を御謠ひ下さるやう御願ひ致しまする。其の時御生樣には何處からなりとも御聲をかけ下さいまして御打込に成れば、八郎は扇子にて御合手致します』



と言つたので、但馬守はよし其の儀ならば健か打据ゑてくれようと、竹刀を上段に振り被つた。次の室に控へてゐた詰合の面面は家光の下知で、一齊に聲を揃へて野守の切を謠ひ出とす八郎は平時の通り仕舞の姿で、扇を手にして舞ひ始めた。『大地をはたと踏破つて』と謠ふくだりで但馬守が、

『參るッ！』と一聲、竹刀をさっと打込んだ。哀れ八郎、飜筋斗うつて顚倒ると思ひの外、其の竹刀は見事に扇で拂はれて、間に一髮を入れず但馬守の籠手ぴしりッ、

『參つたッ』

但馬守は面目なげに平伏した。

『怎うも、失禮を仕りました』

八郎も同じく一禮して着席した。御側の衆は一樣に此の不思議極まる結果に肝を潰して驚いた。家光は感歎の餘り、重ねて遣つて見ろと强つての所望であつたが、八郎は硬く辭退して、

『一度は勝を得ましたが、迚も再度は叶ひ兼ねます。畢竟只今は、柳生樣が御名人でゐらせられる丈け纔かの心の亂れが障りとなり、思はぬ不覺を取られましたが、啻さへ虛は實に勝ち難い處を、旣に一度の勝で私、氣に迷ひを生じました。氣が迷へば心阻み、心阻めば手は動きませぬ。業は末で心が元、其の心に滯りがありましては幾度立合ひましても毛頭勝つ事は出來ませぬ。』一座成程と感歎した。

◆娛樂室解答（本文二六六頁）

◎考へ物

（一）コノシロ（鯯）にイルカ（海豚）イナ（鯔）イカ（烏賊）ハヤ（鮠）アヒ（鮎）タイ（鯛）（此の城に居るか居ないか早や會ひたい。）

（二）つるべからず（釣瓶、烏）

（三）限とり（炭取）　（四）蚤（美濃）

◎詰將棋

詰手

七四桂、六一玉。七二飛、同玉。五四馬、同銀。六四桂、八一玉。七三桂、九一玉。八三桂ナラズ迄十一手。

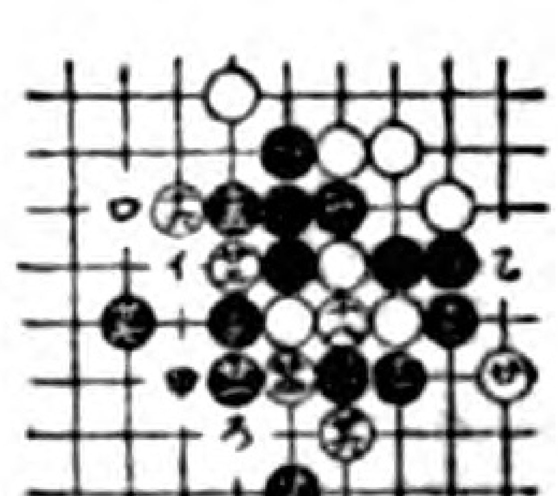
◎聯珠

○廿七の後「甲」勝・變化說明

△（廿六）を（乙）なら「いろ甲」の四連勝

△（廿四）を（甲）なら「廿六、廿四」の順で勝

△（十六）反對なら「廿一、イ、ロ」の順で勝



◎將棋必至の研究

△六三銀▲六二金打△七二と▲同金△八三金▲六二金△七二銀成▲同金△三　▲八一銀△六一金▲同玉△七二金左▲五一玉△五二金打にて詰みに至る。

◎圍碁新題解答

黑先劫活

黑十三（ろノ十九劫抛）

變化

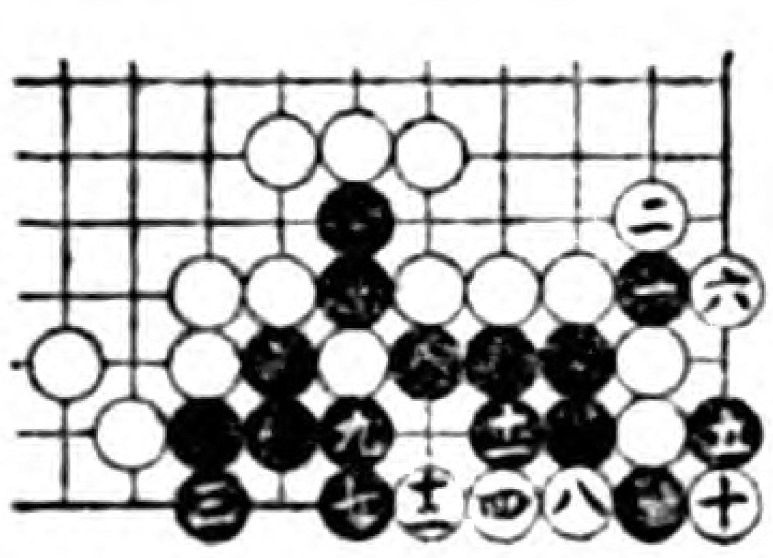
（白四ロリノ變化）

白四（ヘノ十九）

黑五（ほノ十八）

白六（にノ十九）

黑七（はノ十九）



咳と痰

百藥效なき慢性病者も必ず救はる
ダウンチリメン草液の吸入療法

吸入の出來ない人は濕布か含嗽で結構、內服を併用すれば效果一段とす加はる、用法頗る簡易な新治療法

内服と吸入と濕布の出來る便利な藥

鎮咳、祛痰の特效藥と稱する藥劑は種類頗る多く、現在幾百種あるか分りませんが、さて實際に服用して見て、廣告の半分效いたと云ふ藥劑が御座いませうか、若しあつたとしたら、それは一時壓への姑息な藥劑では、ないでせうか、殊に醫者さへ手こずる、百日咳とか十年、十五年と永い間、注射や一時押への服用藥でコヂらせた、慢性喘息、或は又慢性の氣管支加答兒等の難症を、本當に、根絶……にすると云ふ效力偉大の藥は歐米にも未だ無い筈です。●注射でさへ一時凌ぎに過ぎないのであります。ところがジャワ島モジョカルト市に熱帶植物農園を經營せる、佐々木啓市氏に依つて新發見された珍草「ダウンチリメン」は、咳氣の病でしたら如何なる難症でも百發百中の妙藥で、特に不思議な現象は、此の藥の煎汁で吸入（普通の吸入器で結構）した丈で翌日から、固つた痰がどん／＼出ますので咽喉や胸が開け、息苦しいとか、痰がからむとか、ゼイ／＼すると云ふ事がなくなります。ダウンチリメンは皮膚深く浸透する力が強いので、吸入の出來ない人は此の汁で、濕布するか含嗽すれば吸入と同じ效果が御座います。しかし出來得れば內服を併用すれば又一段と效果著しく、尚幾年でも保存の出來る樣になつて居りますから、各御家庭、殊に御子樣のある御家庭の常備藥として實に重寶であります。左にダウンチリメンで難病から救はれた實驗者談の二三を御紹介致します。

鎮咳祛痰には之以上の藥を見ない

米國ドクトル
オランダ醫學士　岡ト先生談

ジャワ島で僕が開業中のこと或日土人の珍重するダウンチリメン草の栽培研究家佐々木氏から不思議な實驗談を聞き、同時に氏から其の藥草を贈られ「是非御研究を……」と熱心に勸められたので、試みに患者に與へて見ましたが、喘息、百日咳、肋膜、肺炎、氣管支炎、流感等に用ひて實に驚く可き奇效がありました。重症者には吸入か濕布と、內服の併用をさすと一層效力が著しい。種々研究して見ると、この藥草は「ペラゴニユーム科」に屬し、學名を「ペラゴニユーム、オドラテシマム」と云ひ、花も果實もなく、原產地はアフリカの喜望峰附近らしい事を發見いたしました。

慢性氣管支炎が十五日で全快

東京新橋南地檢番　田口　藤吉殿

家内の氣管支炎は惡性で、毎年冬の初めに襲ひ來り四月上旬迄惱まされます。何分永い間の慢性ですから醫者にもかゝり藥も好いと云ふのは服用つくしましたが同じ事でした。

しかるに此のダウンチリメンを昨年の春服用と濕布をさせてからはめき〳〵と快くなり、二週間ですつかり根切りとなりました、今に到る何の故障も御座いません、この藥は砂糖を混ぜて服用しますと、とても好い聲が出て聲量が增すと云ふので近頃新橋の藝者間でも評判です。

十七年來の慢性喘息が根治した

臺灣總督府人事課　甲斐　文雄殿

父親の喘息は、實に恐しいもので永年醫者に藥と樣々の手當を受けましたが、一向效驗なく發作が起ると、注射で一時壓へをするのでしたが、烈しい時は、三時間も經つとまた、死の苦みです。とてもはたで見て居られません。或る日、友人からどんなぜんそくでも治る藥だと云つて送られたので早速試みさせますと、驚いた事には、翌朝から痰がどん〳〵出だし、一週間目には、發作がぴたりと止り、三年後の今日もう喘息の氣もありません。

流感の猛烈な咳が一夜で

東京市外田端四四二　市石　文子殿

昨年の十月長男が流行性感冒にかゝり、三十九度の大熱の上に猛烈な咳が頻發致し、すので、肺炎では無いかと心配致しゝ貴社發賣のダウンチリメンを常備致して居りましたので、すぐ濕布をし服用をさせましたところ、翌朝は體溫は平熱に咳もケロリと止りこんな嬉しい事は御座いません、何と好い御藥で御座いませう。

子供二人の百日咳が一週間で全快

昨年の春まだ沼津市に住んでゐました頃、子供が二人迄百日咳で、目もあてられぬ苦みやう、家主の御隱居樣の重い喘息の治つた香氣の高いダウンチリメンといふ藥草を頂きましたので煎じて服用させ、吸入は子供がいやがりますので咽喉を濕布してやりましたら二日目から、急によくなり始め痰も咳をする毎に澤山出まして大層樂になり、すや〳〵と安眠する迄になりました。それから七日目には二人共離床致しました。その頃近所の評判となり五六人の人にお分けして差上げましたが皆大嬉びでした。

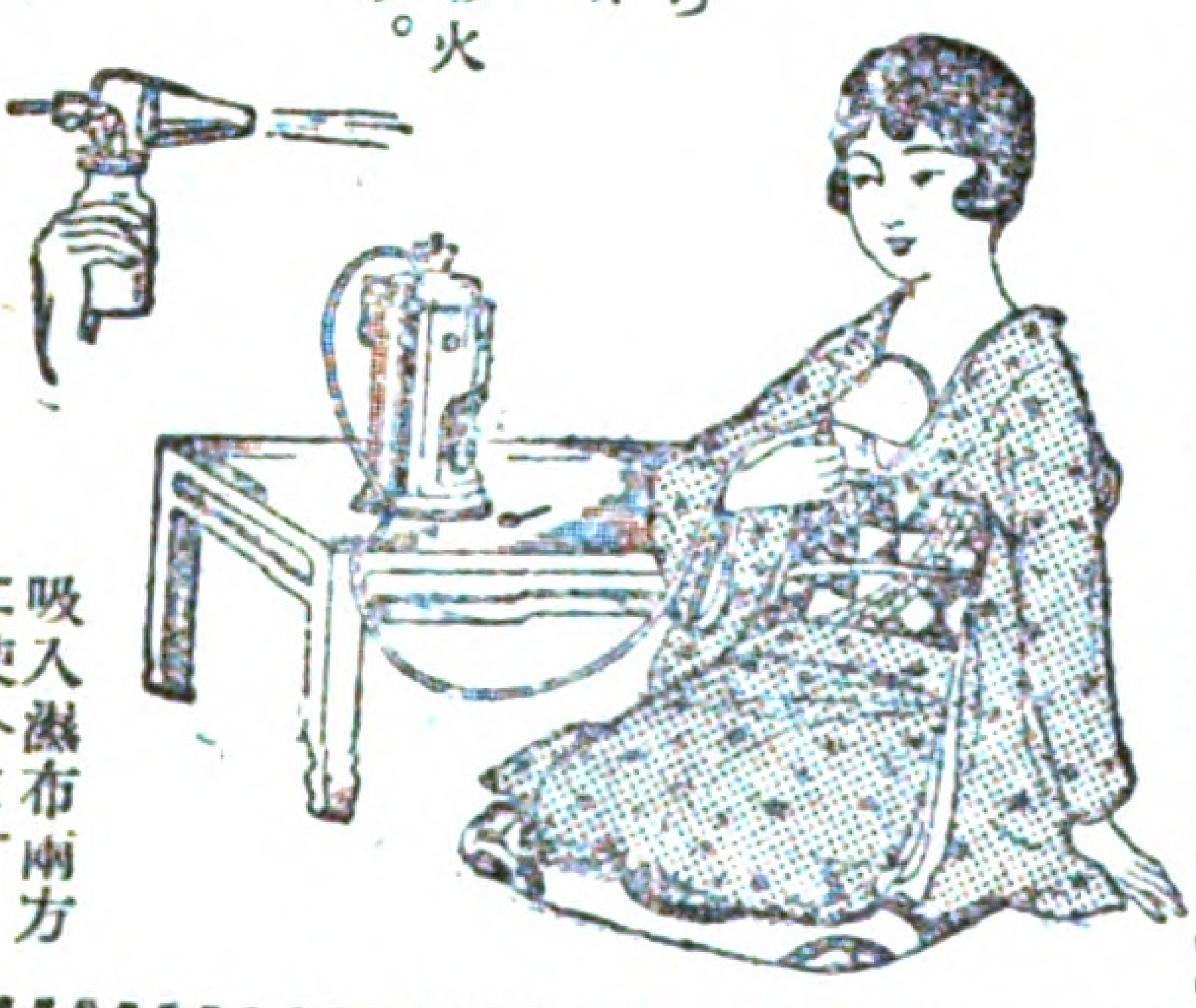
臥床中でも腰かけて居ても濕布吸入兩用出來る

重寶な吸入器

取扱は頗る簡單でどんな位置姿勢でも自由に樂々と使用することが出來ます。濕布吸入兩方に使へますからダウンチリメン草液の吸入濕布ラヂオカルク放射濕布にも御利用下さい。藥容器は在來品の三倍もありランプの火力の調節も出來る樣になつて居ります。銅製ニツケル總鍍金小型頗る美

特製　八、五〇円
並製　五、五〇　送料　領土六十錢　内地三十錢

申込次第說明書進呈



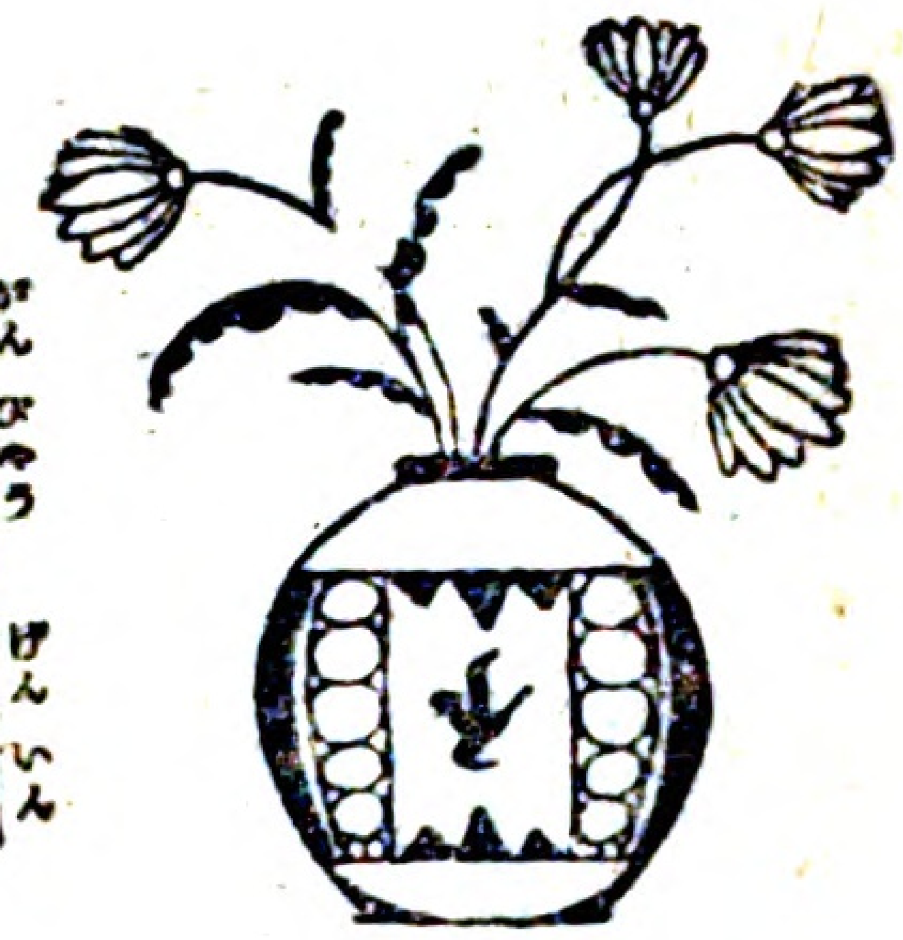
吸入濕布兩方に使へます

本誌代理部で御取次します。

▼ダウンチリメン原草（詳細說明書つき）約三十日分金貳圓也　送料内地十二錢外地十五錢

▼煎ジル手數ノ不用ノ錠劑五日分一圓十五日分金貳圓八十錢也　大瓶一ケ月分金五圓也　送料同前

弊社代理部は此の靈草を、最も安價で廣く讀者にお頒ちせんと、發見者佐々木氏に交涉の結果、直接ジヤワ島の氏の農園から取り寄せ、實費でお頒ち致す事になりましたから、ひどい咳や痰に惱まるゝ人々は一日も早く御試し下さい。御希望の方は東京本鄕區駒込坂下町講談社代理部振替東京四〇二三一番へ



家庭衛生

眼病の豫防と簡易療法

赤眼、涙眼、めまひ、眼球腫痛、羞明多涙、その他視力の障碍——は勿論、不眠症腦疾患常習便秘にも卓効ある新發見劑エモヂシに就いて

眼病の原因

眼を患ふ原因は外部の刺戟或は傳染系統より來るもの等色々ありますが、その多くは全身の疾患又は病の潜伏が直接眼病となつて現る事で、然も眼病を患つた爲に年の割合に早く老視眼となり視力がメツキリ弱くなるとか或は眼を使ひ過ぎ、過度の勉强などから所謂近視眼となることも多く、然も眼病と名の付くものであれば必ず視力障碍を伴ふは勿論で引いては神經衰弱を來し、頭痛や三叉神經、顔面神經、腦疾患等患ふ因ともなり單に苦痛が伴ふばかりでなく實際眼を病ふ事は不快なものであり不便この上ない事であります。

之等の難病で御困りの方々の爲に唯一良劑として特に御奬めしたいのはエモヂシで最もこのエモヂシの原藥は支那龍門から産出する或る植物の實より抽出されたもので、これまで醫學上でも絶對に治療の出來ないものとされてゐた老衰による視力の減退も强度の近視眼なども之を用ひると視力が驚くほど强くなつて眼性がよくなり老眼も若返ると言ふので古來支那に於ては、眼病その他腦病の特効藥として盛に賞用されて居りました。

全くウソの様な事實

最も之は廣告文句ではありませんからこのエモヂシを連服する事によつて全快すると言ふ様な鼓張は申上げませんが事實今迄各方面の實驗者からの報告を御參考に供するなら

眼病が治り頭腦がはつきり

このエモヂシの服用に依つて、赤眼、涙出、角膜炎、その他難症の眼病が僅か短時日で全快したとか、亂視や强度の近視が數ケ月にして見事健全な眼に返つたとか老眼で三年前から筆を執ることも出來なかつた人が針仕事にも疲れが出なくなりエモヂシの御蔭で眼が丈夫になつたと悦びの手紙を自ら認めて寄せられた人など永年の便秘が癒り肩のこりが取れたとか二三頁の讀書も出來ぬ人がエモヂシを服用してから樂々三十頁も讀書が出來頭腦がハツキリとして身體も壯健になつた等眼の疾患から神經衰弱を起し難事の眼病とされて居た病氣がお蔭で癒つたと言ふ人が數々寄書せられて居ります。

不思議な效驗とその作用

このエモヂンの服用に依つて第一に氣の閊くことは氣分が非常によくなり便通が整つて頭腦が輕くなり眼に何んとなく力がついて來て鮮快味を増し、肩のコリや、頭痛などは何時の間に取れた樣に忘れ成程と言ふ樣な不思議な作用がある事です。

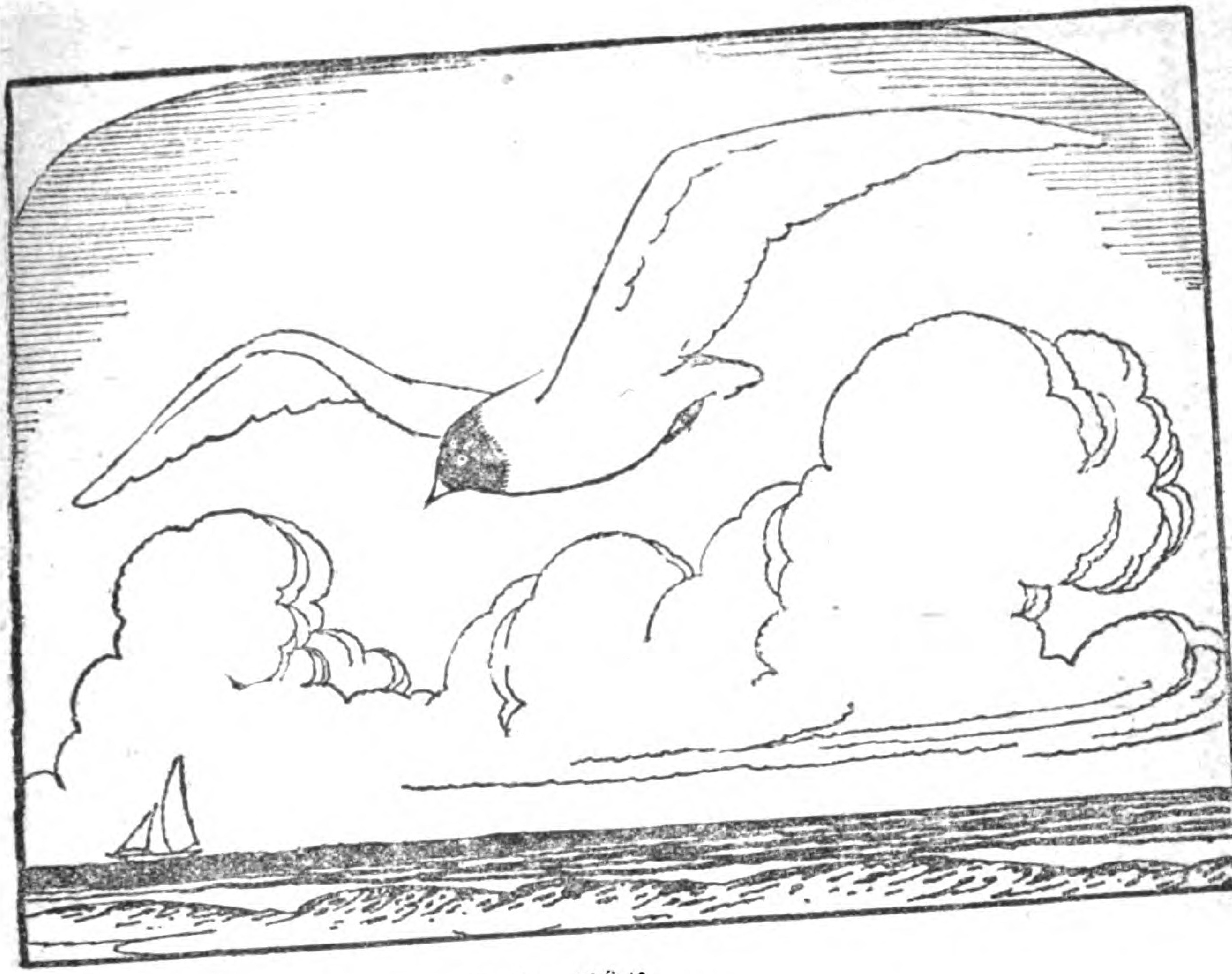
要するに治療はすべて原因療法が最も大切でその上更に眼球の手當をする事が全く合理的な治療でありますが、如何に手當をしても全然奏効しない例へば年齢の割合に視力の薄い人、近眼で度數が急速に進行し眼病や頭痛を發する人弱視で眼が疲れる人涙が出て眼がクシヤクシヤする人羞明多涙で御困の方はこのエモヂンに依つて苦痛を除く事が出來るばかりでなく不眠症や神經衰弱ヒステリー常習便秘などの人々にも偉大なる効果があるのであります。

然もエモヂンはどんな藥嫌ひな人にも服用が出來且つ經濟的ですから自宅で極氣樂に治療出來る便利なものであります。

良藥で飲みよいから一般眼疾者の爲に

尙外用手當を必要とする眼病、即ち眼瞼炎症、麥粒腫、涙嚢炎、角膜炎、角膜損傷、はしめ、水泡性、流行性結膜炎等の人々の爲に確効ある外用藥も添へてありますから、內服治療劑と併用なさいますれば必ず喜ぶべき効果が得られます。

若しエモヂンの御希望者は本社代理部へ御申出下さい東京本郷駒込坂下町（振替東京四〇二三〇番）エモヂンの價は十五日分（外用藥附）壹圓八拾錢四十日分、四圓送料內地拾五錢鮮土五拾錢で御取次します。



青春

中村武羅夫 作
田中良 畫

强氣弱氣

鶴子は、ちよつと意外な氣がした。信一郎が、電話口へ出て來るとばかり信じてゐたのが、桂子の聲だつたので、一瞬間、意外な氣がした。或ひは、信一郎が行つてゐないので、桂子が、代りに出て來たのかもしれないと思つた。さう思ふと、彼女の胸は、急にどき〱顫へて來た。

『もし〱、あなたは、鶴子さんですか……』

桂子の聲は、さながら友達にでも呼びかけるやうに、親しく言つた。

『はい。わたくし、鶴子でございますが……』

鶴子は、電話口で、顔が赧くなつて來るのを覺えた。あんなに立派な夫人から、友達のやうに親しく呼びかけられたことに、それは電話ではあつたけれども、一種の羞含みを感ぜずにはゐられなかつた。

『何時、入らつしやいましたの。』

「もう二時間ぐらゐ前に。』

『あら、さう。そして、今までホテルで、お待ちになつてゐらしたの。』

『えゝ、海岸へ行つたりなんかしてゐましたの。』

さう言つた時、鶴子は、妹が、波に浚はれた恐ろしい出來事を思ひ出して、急に悲しくなつた。

『まあ、それなら、早くこちらへ電話をおかけ下されば、よろしかつたのに。』

『それが、分らなかつたものでございますから……』

『あら、さうでしたの。わたくし、そちらのボーイに、よく頼んで置いたんですのに。あなた方がお見えになつたら、こちらへ電話をかけて下さるやうにつて、あんなによく頼んで置いたんですのに。』

桂子は、氣の毒さうに言つた。

『あの、岸本さんは、そちらへ行つてらつしやるのでございませうか。』

『えゝ、お見えになつていらつしやいますわ……』

『もしご用がお濟みになりましたら、お歸りになつていたゞけないでせうか。』

『それがね、只今、お手の離せないことを、なすつてゐらつしやいますのよ。』

『さうですか。ぢや、まだ暫らく、お歸りになれないでせうか。』

『今夜も、ちよつと、遅くなるかもしれませんわ。ひよつとしたら、こちらで、お泊りになるかもしれませんわ。』

『まあ。』

鶴子は、呆れざるを得なかつた。折角來て見れば、留守の上に、行く先きに電話をかけても、自分自身で、電話口に出て來ないばかりか、歸れるか歸れぬか、分らないといふのである。

鶴子は、信頼して還つて來た信一郎の、冷淡な態度に、腹が立つよりも、悲しかつた。わざ〳〵遊びになんか出かけて來たのが、自分たちの輕率だつたやうな氣がして、後悔された。

『それでね、もし、よろしかつたら、あなた方も、こちらへ入らつしやいませんこと。』

『えゝ……』

鶴子は、曖昧な返事をしてゐた。

『お妹さんと、ご一緒なんでせう。』

『えゝ。』

『ぢや、お二人で、ご一緒に入らつしやいませな。』

『ですが……』

鶴子は、躊躇せずにはゐられなかつた。親しい信一郎のところを訪ねて來てさへ、こんな目に遭ふのに、たつた一二度會つたばかりで、深い附合ひのない桂子の別莊なんかに訪ねて行くと、どんな目に遭ふかしれないと思ふと、不安だつた。來いと云はれても、直ぐには、行く氣になれなかつた

『ホテルに、お待ちになつてゐたつて、つまらないぢやございませんか。』
『え〻………』
『ですから、こちらへ入らつしやいませよ。わたしのところでは、ちつとも構ひませんから、ご遠慮なく、入らして下さいませ。』
『有り難うございます。けれども、わたし、こちらで、岸木さんのお歸りを、お待ちして居りますわ。』
鶴子は、暫らく考へてから、きつぱり言つた。
『あら、なぜ、そんなことをおつしやいますの。』
村子の聲は、幾らか咎めるやうな調子を含んで、高かつた。
『でも、お伺ひして、お邪魔するのも、濟みませんから。』
『まあ、厭ですわね。そんなご遠慮を遊ばしてゐらつしやるの。ぢや、こちらから、お迎ひを差し上げますから、一緒に入らして下さいませな。』
『あら、そんなことして頂いちや、すみませんわ。』
『ぢや、入らして下さる。』
『え〻………』
そんなに強ひられるものを、強情に、行かないと言つて斷るのも、わるいやうな氣がした。氣の弱い鶴子は、不承々々だつたけれども、つい承諾してしまはずにはゐられなかつた。彼女は、曖昧ではあつたけれども、承諾の返事をしてしまつた。
『ほんとに、入らして下さいますわね。』
村子は、すか、さず、念を押した。
『え〻。』
『ぢや、お待ちしてゐますわ。』
『え〻。』
『直ぐ入らして下さいましね、お妹さんとご一緒にね。』
『え〻。』
『ぢや、左樣なら。』
『左樣なら。』
それで、電話は切れてしまつた。
鶴子は、何んだか、ぼんやりしてしまつた。ちよつとの間に、狐にでも化されたやうな氣がした。何を話して、どんなことを約束したのか、はつきり分らなかつたが、次第に、今、電話で村子と話した意味が、彼女の頭に、はつきり感じられて來た。考へて見ると、これから、村子の別莊へ、冴子と一緒に出かけて行くと、堅く約束してしまつたのである………
だが、自分が、行きたくないことは別にしても、海に溺れて氣を喪つた後、安靜にして居る冴子と一緒に、出かけて行ける筈はなかつた。
『直ぐ、もう一度電話をかけて、斷らうかしら。』
鶴子は、咄嗟の間に、さうも考へて見た。が、今、約束をして、直ぐ電話をかけて斷るなんか、自分としては、あまりに子供染みてたわいがないし、村子に對しては、人を馬鹿にした仕打ちのやうで、弱氣な鶴子には、それも出來なかつた。

鶴子は、ひどく躊躇して、考へ〳〵部屋に戻つて來ると、先刻まで絨毯の上に横たはつてゐた冴子は、もう着物を着替へて、一人で、部屋の中を跳ね廻つてゐた。

『あら、どうしたの。』

鶴子は、びつくりした。びつくりした反面には、妹が、思ひがけなく元氣になつてゐることが、夢のやうな氣がして、嬉しくて堪らなかつた。

『わたし、お姉さまが、あまり長いから、電話室の方へ、下りて行つて見ようかと、思つてゐたところなの。』

『まあ、そんな、輕はずみなことをして、いゝの。』

鶴子は笑ひながら、眼を瞠つた。

『大丈夫よ。』

冴子は、大元氣だつた。

『でも、氣をつけないと。』

鶴子は、何となく、まだ不安な氣がするのであつた。

『そんなに、何時までも寢てなんかゐられやしないわ。』

『それで、氣分はどうなの。』

『この通りよ。』

冴子は、さう言ひながら、踊るやうな身體つきをして、ぴよんぴよん跳ね上つて見せた。

『まあ。』

鶴子は呆れながら、しかも、喜びの微笑が、自然と、顏一ぱいに漾うて來るのを、どうすることも出來なかつた。彼女は、それで、一と安心した。折角、訪ねて來た仁一郎に留守だし、來る早々、冴子が滋に誘はれたりして、ひどくショックを受けた鶴子の胸も、冴子の元氣な有様を見ると、稍々、平らになることが出來た。

『それで、お姉さまは、電話を、おかけになつたの？』

冴子は、それまで、ひどく騷いでゐたのが、急に温和しくなつて訊いた。

『えゝ。』

鶴子は、妹から訊かれると、急に暗い顏になつた。

『どうだつたの？』

冴子は、それまでとは、まるで違つた大人びた表情をして賢こさうな眼を、くる〳〵と見張つて、姉の顏を見上げるのであつた。

『岸本さん、やつぱり、あちらの別莊に行つてゐらしやるのよ。』

『まあ、よかつた。』

冴子はそれを聞くと、手を打つて、ぴよんと跳り上つた。

『けども……』

鶴子は言ひかけて、つい口籠つてしまふと、溜息を吐いた。

『どうなすつたの？』

冴子は、また、不安さうに、姉の顏を覗き込んだ。

『どうもしないけど……』

鶴子は、悲しくなつて、はつきり言ふことが出來なかつた。

『岸本さん、直ぐ歸つて入らつしやるのでせう。』

『いゝえ。』
鶴子は、悲しさうに頭を掉つた。
『歸つて入らつしやらないの？』
冴子は、くる〳〵と眼を見張る。
『えゝ。』



『あら、どうして？』
『どうしてだか……』
鶴子は口籠ると、さも〳〵自分が、悪いことでもしたかのやうに、低く〳〵頭を垂れてしまつた。
『わたし達が、斯うして伺つたことをお知りになつたら、びつくりして、飛んで歸つて來て下さる筈だのにね。』
『まあ、冴子さんは、そんな暢氣なことを言つて。』
『あら、ちつとも暢氣なことぢやないと思ふわ。』
『だつて……』
『お姉さまこそ、どうなすつたのよ。わたし達が、わざ〳〵東京から、斯うして出かけて來たんですもの。そのことを、岸本さんがお知りになつたら、飛んで歸つて來て下さる筈ぢやありませんか。』
『冴子さんは、さう思つて？』
『えゝ、わたし、さう思ふわ。わたしは、岸本さんを、信じてゐるわ。』
『でも、さうぢやないのよ。』
鶴子は、涙含んだ眼をして、力なく溜息を吐いた。



溢れさうになつたのを、はつとして、堪へた。今、自分が泣いてしまつたりなんかしては、自分を頼つてゐる冴子が、どんなに心細いだらうと思ふと、鶴子は、泣くにも泣けなかつた。

『まあ。お姉さまだといふことが分つても、岸本さんは、電話口にも出て下さらなかつたの？』

『えゝ。』

鶴子は、微かに頷いた。

『そんな、ひどいことつて、ありやしないぢやないの。』

冴子は憤慨した。

『だつて、仕方がないわ。』と鶴子は、宥めるやうに言つた。

『仕方がないことなんかないわ。岸本さんは、あの奥さまのお別荘に、ただ遊びに行つてゐらつしやるのでせう。』

『さうかもしれないけども……でも、どうだか分らないわ。』

『だつて、遊びに行らつしやるより外、ご用なんか、おありになる筈はないわ。』

『それは、さうかもしれないけども。』

『ぢや、どうなの？』

冴子は、大きく〳〵眼を瞠つて、打ち萎れた姉の顔を見上げた。

『岸本さんは、電話口にも出て下さらなかつたのよ。』

言つたかと思ふと、鶴子は、急に悲しくなつて、思はず涙が

『屹度さうよ。それだのに、電話口にも出て下さらないなんて、あんまりひどいぢやないの。』

『だつて、冴子さんのやうに、そんなに憤慨して見ても、仕方がないわ。』

『わたし、そんなことを聞くと、憤慨せずにはゐられないわ。』

『岸本さんだつて、どんな都合があつて、電話口に出て來られなかつたのかも、しれないんですもの。』

『都合なんか、ある筈はないわ。』

『そんな風に、あたまから決めてしまふわけには行かなくてよ。』

鶴子は、妹の冴子の強氣と獨斷を、たしなめるやうに言つた。

『わたし、岸本さんに言つてやるから、いいわ。』

『何んて言ふの？』

『そんな失禮なことつてありやしないと、文句を言つて上げるの。』

『止して頂戴。そんなことで、怒つたりなんかしちや、却つて、みつともないぢやありませんか。』

鶴子は、自分たちが、岸本から、どんな冷淡な待遇を受けようと、怒る權利なんかないのだと思つた。父が亡くなつてから、人に間貸なんかして、岸本からも、やつぱり間代を貰つて、自分たち一家の生活を助けてゐる以上、自分たちから言へば、信一郎は、お客さまでなければならないのだ。殊に、そのお客さまの避難先きに、斯うして厄介になりに押しかけて來て置いて、冷淡な待遇を受けたからと言つて、怒つたり、文句を言つたり出來る義理ではないと思つた。それを、自分たちの身の上や、立場もよく知らずに、岸本の態度だけを憤慨してゐる強氣な冴子が、何んだか可哀相でもあると同時に、惨めな氣がして、暗い〱氣持にならずにはゐられなかつた。

『どうして、みつともないの。』

年の行かない、從つて、生活の苦勞なんかちつとも知らない冴子に、姉の心持なんか、理解出來る筈はなかつた。

『だつて、電話口に出ていらつしやらうと、いらつしやるまいと、それは、岸本さんの自由なんですもの。』

『自由かもしれないけれども、そんな法つてないと思ふわ。』

『まあ、後生だから、そんなむきになることは、止して頂戴。』

鶴子は、遂に、下手に出て、宥めるより外仕方がなかつた。

『ほんとに、お姉さんたら、弱氣で仕樣がないのね。』

冴子は、悟しさうに言つた。

金持の嫁に……

『それで、岸本さんは、何時、歸つて入らつしやるの？』

冴子は、話頭を轉じて質問した。

『何時歸つて入らつしやるか、分りやしないわ。』

『あら、お姉さまは、それをお訊きにならなかつたの？』

『今夜、遅くなるだらうつて……ひよつとしたら、お歸り

にならないかもしれないつて。』
『どうして？』
『どうしてだか、分らないわ。』
『そして、誰が、そんなことを言つたの……』
『あの奥さんが。』
『ぢや、あの奥さんが、電話口に出ていらしたのね。』
『さうなの。』
『まあ。』
『はじめは、召使らしい人が出て、それから、あの奥さんが出て入らしたのよ。』
『何んだか、をかしいのね。』
『えゝ、わたしも、をかしいと思つたけれども……』
『それで、あの奥さまが、岸本さんは、今夜も、お歸りになるかどうかも分らないつて、おつしやるの？』
『えゝ。』
『まあ。』
『だから、わたしと冴子さんとに、別莊へ來いとおつしやるのよ。』
『さう、ぢや、直ぐ行きませう。』
冴子は、何んの拘泥もなく、咄嗟に、行かうと言ひ出した。
『あら、行くの？』
鶴子は、ちよつと、びつくりせずにはゐられなかつた。
『だつて、あの奥さんが、來てくれとおつしやるのでせう。』
『これは、さうだけれども……』
『ぢや、行つた方が、いいぢやないの。』
『冴子さんは、さう思つて？』
『えゝ。』
『でもね……』
鶴子は、躊躇した。電話で來いと言はれたからと言つて、直ぐのこのこ出かけて行つて、どんな冷淡な待遇をされるかもしれないと言はうと思つたけれども、鶴子は、それを、はつきり言ふ事が、ためらはれた。そんな事を口にするのは、人を傷つける許りでなく、自分を卑しくする樣な氣がして、鶴子には言へなかつた。言へなかつた許りでなく、そんな事まで邪推せずにはゐられない自分の神經質さが、鶴子は、恥しい氣がした。
『それに、岸本さんは、歸つて入らつしやるか、入らつしやらないか、分らないのでせう？』
『えゝ。』
『ぢや、わたしとお姉さまと、たつた二人切りで、こんなホテルに居たつて、つまらないぢやありませんか。』
『それは、さうだけれども。』
『それよりか、あの奥さんの別莊に行つた方が、よくはないこと。』
『えゝ……』
鶴子の返事は、煮え切らなかつた。
『ね、行きませうよ。今から、直ぐに行きませうよ。』

『どうしたら、いいかしら？』
鶴子は、困惑したやうな眼をして、冴子の顏をじつと見ると、泣くやうな表情をして、微笑した。
『お姉さまは、まだ、そんなことに迷つてゐらつしやるの。』
『だつて……どうした方がいいか、分らないんですもの。』
『それは、來いとおつしやるなら、行つた方がいいに決つてるぢやないの。』
『さう簡單にも、決めてしまへないわ。』
『まだ、そんなことをおつしやつて……』と冴子は、焦つたさうに叫んだ。『ホテルにゐたつて、何んにも面白いことがあるぢやなし、向ふへ行けば、岸本さんだつて、ゐらつしやるぢやありませんか。』
『さうね。』
『だから、直ぐ行つて見た方がいいわ。』
『さうね。』
『行つて見て、若し、つまらなかつたら、直ぐ歸つて來れば、それでいいぢやありませんか。』
『ぢや、行つて見ることにしようかしら。』
鶴子の心持も、漸つと決定したらしかつた。
『行きませう〳〵。こんなところに、愚圖々々してゐたつて、つまりやしない。行つて見てつまらなくて、直ぐ歸つて來ても、元々通りだわ。』
冴子は、いそ〳〵として、支度をはじめるのであつた。

『お姉さまも、愚圖々々してゐないで、早くお支度を遊ばせよ。』
氣の勝つた冴子は、年下の癖に、内氣な鶴子が愚圖々々して居るのを、叱り飛ばすやうにして、支度を促すのであつた。
『そんなに、急かないたつていいわ。緩くりして行つたつて、いいわ。』
鶴子は、出かけて行くことに決めることは決めても、やつぱり、氣はすゝまなかつた。が、妹にせかし立てられて、外出の支度を整へた。
『さあ、行きませう。』
二人が揃つて、ホテルの玄關を出かけて行つた時は、さすがに長い夏の日も、もう黄昏時であつた。日は、もう先刻方、箱根連山の彼方に沈んで、海の上だけは、仄明るい夕の明るみが漂うたけれども、山の方は、もう暗くなつてゐた。
『まあ、涼しいこと。やつぱり、東京とは違ふわね。』
冴子は、いそ〳〵として、先に立つて歩いた。
晝間のうちから、そよ〳〵と、海を渡つて吹いてゐた風は、日が落ちると共に、餘計、冷や〳〵として、肌に快かつた。
『それはさうよ。それならこそ、東京の人達が多勢、わざ〳〵避暑に出かけて來るんぢやないの。』
鶴子は、妹の冴子の言葉に微笑しながら、言つた。
『わたし達も、早く、避暑するやうな身の上になりたいわね。』
冴子は、心に浮かぶまゝを、無邪氣に、てきぱき言つた。


Ryo

『何をそんな、贅澤なことを言つてるのよ。斯うして、例へ、一日でも二日でも、來られたのが有り難いと、思はなければならないわよ。』

『それはさうだけれども、岸本さんのところへ居候なんかに來るのでなしに、自分で、ホテルの部屋をとるか、別莊でも借りるかして、來れたら、どんなに好いかしれないわね。』

『そんなことは、思ふだけで、とても實行出來ることぢやないわ。』

『でも、お金持の人のところにお嫁に行けば、そんなことぐらゐ、何んでもないぢやないの……』

さう言つて冴子は、姉の顏を見ながら、はゝゝと笑つた。

『まあ、そんなをかしなことを言ふものぢやないわ。』

鶴子は微笑しながら、冴子を、たしなめずにはゐられなかつた。

『ちつとも、可笑なことぢや、ないぢやないの。』

『だつて……』

『女ですもの、お嫁に行くのは、當り前のことぢやありませんか。』

『それは、さうだけれども……』

『お嫁に行くぐらゐなら、お金持の人のところへ行つて、避暑もしたり、いろんな贅澤もした方が、いいと思ふわ。』

『まあ、冴子さんは、すゐぶんモダン・ガールだわね。』

鶴子は呆れた。

『わたし、モダン・ガールだつていいわ。お姉さまは、また、餘り舊式よ。』

『だつて、お金持の人のところにお嫁に行つて、贅澤した方がいいなんて、わたしには、そんなことは、とても考へられやしないわ。』

『なぜ、考へちやいけないの？』

『おや、冴子さんは、お金持で贅澤さへすれば、どんな人のところへでも、お嫁に行つた方がいいと思ふの。』

『えゝ。』

冴子は、平然として頷いた。

『まあ。』と、鶴子は呆れて、『おや、愛のない人のところだつて、お金さへあれば、お嫁に行つた方がいいの。』

『それは、愛があつて、その上、お金持の人の方が、猶ほ好いわ。』

『まあ、慾深な人だわね。』

鶴子は、妹の露骨さに、微笑するより外なかつた。

『當り前だわよ。お姉さまも、愛がある上に、お金持の岸本さんと、早く結婚して、うんと贅澤なさることを、お考へになつた方がいいのよ。』

『まあ！』

鶴子の美しい顏が、突然、火のやうに眞赤になつた。

『ほんたうに、さうぢやないの。岸本さんと結婚なされば、どんな贅澤だつて、お出來になれてよ。』

『まあ、冴子さんは、ほんたうに嫌な人だわね。』
『あら、どうして。』
冴子は、その美しい眼を、ぱち〳〵と見張つた。
『そんなことを言つちや、厭だわ。』
鶴子は、やつぱり、真赤な顔をして、妹の方を見ることも出来なかつた。
『お姉さまは、ご自分の心で思つてゐらつしやることでも、それを口に出して言つては、いけないとおつしやるのね。』
『わたし、しらない。もう、冴子さんとは、話しをしないから、いい。』
鶴子は、たうとう、ぷん〳〵怒つて、先きになると、とつとと歩き出した。
『お姉さま〳〵。』
冴子が呼んでも、鶴子は、振り返つて見ようともしなかつた。
『お姉さま、お怒りになつたの？』
冴子は、駈けるやうにして、姉に追ひつくと、心配さうな眼差しをして、姉の顔を見上げるのであつた。
『だつて、冴子さんがあんなひどいことを言ふんですもの。』
『ご免なさい。』
何んと思つたか、冴子はひどく悄気て、頭を下げた。
『あら謝らなくたつていいのよ。』
鶴子は、妹に悄気られて、謝られたりなんかすると、自分も、やつぱり、悄気ずにはゐられなかつた。彼女は、どうしたらいいか分らないやうに、はら〳〵して、ほつと溜息をとるやうに言つた。
『わたし、わるい気でいつたんぢやないの……』
冴子は、やつぱり悄気たまゝで言つた。
『そんなことぐらゐ、わたしにだつて、分つてゐるわ。』
鶴子も、あわてて言つた。
『それだのに、お姉さまは、あんなにお怒りになるんですもの。』
『だつて……』
『こんなところに、たつた一人で来て、お姉さまに怒られたりなんかしちや、わたし、心細くなつてしまふわ。』
『ご免なさいね。』
今度は、鶴子が謝つた。
『あら、いいのよ。』
『でも……』
姉と妹とは、顔を見合はせて、につこり笑つた。
ちよつとしたことで諍ひしても、直きに打ち解けるのが、姉妹しいきやうだいの間柄だつた。二人は、顔を見合はせて、につこり微笑をかはしてしまふと、それで、お互ひに、気持が晴々としたた。
『もう、あんなこと言つちや、厭よ。』
鶴子が、微笑を含みながら言ふと、

『え丶、もう言はないわ。』と、冴子も笑つた。

若者の群

山口家の別莊は、××ホテルから、十丁とは離れてゐたかつた。

それでも、鶴子と冴子とが、話し〳〵行くうちには、とつぷり日が暮れてしまつた。彼女たちが、別莊の玄關に立つた時には、外は、もう眞つ暗で、濱の方では、波の音が、次第に高くたつてゐた。

鶴子が、呼び鈴の釦を押すと、可愛らしい顏をした小間使が、取次ぎに出て來た。それは、鶴子が電話をかけた時、最初に出て來た聲の主に、違ひなかつた。

『入らつしやいませ。』

小間使は、閾際に手を支いて、叮嚀に迎へてくれた。

『あの、先刻、奥さまからお電話でお話しがあつたものですから、伺つたのでございますが……』

鶴子は、自分たちが、どんな態度で迎へられるかと思つて、はら〳〵氣を揉んでゐたのであつたが、小間使の樣子を見ると、叮嚀で、親切さうなので、僅かに安心はしながら、それでも、控へ目な、内氣な調子で言つた。

『左樣でございますか。お待ちになつてゐらつしやいますから、さあ、どうぞお上りあそばして。』

小間使は、如才なく言つた。

『は……』

鶴子は、一度奥に取次ぎもしないで、直ぐ座敷に通すやうに言はれたことが、ほんたうに自分たちの來るのを待つてゐられたやうな氣がして、氣持がよかつた。

だが、玄關にずらりと揃へてある靴や、下駄や、フエルト草履などを見ると、客間には、屹度、信一郎の外にも、大勢の來客があることが豫想されて、何んだか氣が臆するのであつた。

『どうぞ。』

小間使は、また促した。

ちよつと躊躇してゐた鶴子も、重ねて促がされると、その上、ためらつてゐるわけにも行かなかつた。

『ぢや、冴子さん。』

鶴子はさう言つて、冴子に眼まぜをすると、玄關を上つた。

二人は、長い廊下を導かれて、奥の方へ案内された。

不意に、どつと、賑かな笑ひ聲が起つて來た。はつと思つてゐるうちに、彼女たちの眼の前の扉が開かれて、そこに、廣い洋室があつた。

明るい電氣が、煌々と照らしてゐた。そこには、七八人の若い男女が集つて、賑かに談笑してゐるのであつた。はじめ、ちよつと見た瞬間は、分らなかつたけれど、白い布を掛けたテーブルをかこんで、麻雀をしてゐる者や、西洋將棋をさしてゐる者や、それから、何か面白さうに話しをしてゐるものなどがあつた。

『まあ、よく入らして下さいました。』

桂子は、二十人ばかりの青年を相手に、窓際のチイ・テーブルで、何か、しきりに話してゐたが、小間使に案内されて來た鶴子たちの姿を認めると、直ぐ、いそ〳〵と立つて來て、迎へてくれた。

『あの、どうしたらいいかと思つたんですけれど、でも、折角、あゝおつしやつて下すつたものですから、お邪魔させていたゞきました。』

鶴子は、遠慮深く言つた。

『先刻から、お待ちしてゐましたのよ。あんまりお見えにならないものですから、もう一度、お電話をお掛けするか、お迎へを差し上げるかしようと、思つてゐましたところでしたの。』

『まあ、そんなことをしていたゞきましては……』

ほんとうに済まない、と言はうとしたけれども、はつきり言ふことが出來ずに、口籠つてしまつた。

『でも、お二人で入らしつて下すつて、こんな嬉しいことはございませんわ。』

桂子は、人をそらさない、物馴れた社交的の微笑を、その輝くばかりに美しい顔一ぱいに湛へて、愛想よく言ふのであつた。

『あの、お邪魔ぢやございませんでせうか。』鶴子は、皆なが夢中になつて遊んでゐるのを見て、遠慮して訊いた。

『いゝえ、お邪魔どころですか。あなたが入らして下すつて、ちやうど、よかつたんですよ。いまもう一と組、麻雀をはじめたいんですけれど、人が一人足りなかつたもんですから、困つてゐましたの。』

『あら、わたし、麻雀なんか、やつたことございませんの。』

鶴子は恥しかつたけれども、正直に言ふより外なかつた。

『ご存じありませんの。』

『えゝ。』鶴子は、顔を紅らめて項垂れた。

『でも、ようございますわ。わたしがコーチして上げますから……さあ、お入りあそばせな、皆さんにご紹介いたしますから……』桂子は、すこし羞合んでゐるやうな鶴子と、冴子を、部屋の中にすゝめて入らせると、それ〳〵、皆なに紹介してくれた。そこに集つてゐる人々は、皆な、有名なブルジョアの子弟達だつた。鶴子なども、新聞や雑誌の上で、名前をよく知つてゐる海軍中将の令嬢だとか、高名な政治家や、實業家の息子だとか、さういふ青年男女たちだつた。

『こちらは、岸本さんのご親友でして、お姉さまが鶴子さま、この小ちやな、可愛らしいお嬢さまが、冴子さまとおつしやるんです。』桂子は、そんな風に紹介してくれた。

『どうぞ、よろしく。』

鶴子は、羞合むやうに顔を紅らめながら、淑かに頭を下げた。彼女は、特に、岸本の親友と言はれたことに、何んだか特別の意味を感ぜずにはゐられなかつた。そして、そのことは、嬉しくもあれば、恥しくもあつた。…………

『どうぞ、よろしく。』

皆なも、口々に言つた。遊戯をしてゐる者は、その遊戯の手を止めて、談笑してゐる者は、お互ひの言葉を止めて、新來の客に挨拶した。



桂子が、特に、岸本の親友であるといふことに力點を置いて、鶴子たちを紹介したことは、果して、皆なの好奇心を、引かずにはゐなかつた。一齊に、皆なの意味有りげな眼が、羞含んだやうな鶴子の顔と、すこしてれたやうな信一郎の顔とを、露骨にならない程度で、見比べてゐた。桂子は、その光景を、滿足さうな微笑を含んで、眺めてゐた。

鶴子の、淑やかな印象は、そこに集つた若い男女に、好感を寄せさせずには措かなかつた。皆な、彼女を好いた。そして彼女に親しみを持たれることを、望む心に變りはなかつた。それは、最初に、桂子が、鶴子を皆に紹介した瞬間、皆なの心に、決定された感情だつた。

『ぢや、僕たちも、一と組、麻雀をはじめようぢやありませんか。』

或る有名な銀行家の一人息子で、今年、慶應を卒業したばかりで、或る保險會社に入つてゐる金子といふ青年紳士が、親しみ深い微笑を、鶴子の方に見せながら言つた。

『奧さん、もう一と組、道具を拜借いたしますよ。』山川といふ陸軍少將の次男は、氣早に、椅子から立ち上つた。

『あら、あなたが行らつしやらなくたつ

て、誰かに持つて來させますわ。』と、桂子が言つた。
『でも、わたし、麻雀なんか出來ませんから……』鶴子は、麻雀が出來ないといふことが、その場合、一生の恥ぢでもあるかのやうな羞恥を感じながら、眞赤になつて言つた。
『麻雀がお出來にならないなんて、そんなことはないでせう。』



金子は、笑ひながら言つた。彼は、ほんたうに鶴子が、麻雀を知らないなどとは、信ずることが出來なかつた。
『いゝえ、わたくし、ほんたうに、ちつとも知らないのでございます。』
鶴子は、一生懸命だつた。知りもしない遊戯など强ひられて、大勢の人のもの笑ひになつては、恥しいと思つた。
『などとおつしやつて、その實、岸本君のお仕込みで、お上手なんちやありませんか。』と、金子は笑ひながら言つた。
『大きに、そんなことかもしれないね。』と、山川も言つた。
『能ある鷹は爪をかくすといふから、折角、蹴ひを挑んで、慘敗なんかしちや、みつともないよ。』西洋將棋をさしてゐる、來年高等商業を卒業するといふ青年も、口を挾んだ。
『いゝえ、そんなんちやございません。わたくし、ほんたうに、知らないのでございます。』鶴子は皆なが冗談半分に言つてるにも拘らず、正直に受けて、躍氣になつて辯解した。
『ほんたうなんだよ。鶴子さんは、こんな遊戯なんかしたことはないんだよ。』信一郎は、麻雀の牌をがちやがちやいはせなが

ら、鶴子に應援した。
『でも、わたしが、コーチして上げればよろしいでせう。』
桂子は、信一郎の方を見て、意味あり氣な微笑を含みたから口を挾んだ。
『あなたが、コーチして下すつても、敗けた時は困るでせう。』
信一郎は、ぽんと言つて、牌をとりながら言つた。
『あら、わたしがコーチすれば、お敗けになるやうなことはなくてよ。』
『どうも、失禮。』信一郎は、笑つてゐた。
『でも、奥さま、わたくし知らないのですから、止した方がいいと思ひますわ。』
鶴子は、懇願するやうな眼を、桂子の上に向けた。
『さう、そんならお止しになつた方が、いゝわ。』と、桂子は氣輕に言つて、今度は、金子と山田とに向つて、『ね、鶴子さんが、氣がすゝまないとおつしやるから、麻雀は止して、やつぱり、お話しを遊ばせな。』桂子は、人の氣をそらさないやうに、巧みな社交的な調子で、言ふのであつた。
『さうですね。ぢや、麻雀は止して置きませうか。』
『折角、自分から言ひ出して置いて、敗けたりなんかしちや、みつともないからね。』
金子と山田とは、顔を見合はせて、はつはつはと笑つた。
『わたくし、鶴子さんをご案内して、ちよつと庭でも見ていただきますわ。』桂子は、突然、言ひ出した。

『さうですか。ぢや、僕たちも、ご一緒に、お庭を拜見さしていたゞきませうか。』と金子が、にや〳〵笑ひながら言つた。
『それがいいわ。』
山田も、直ぐに賛成して、金子と顔を見合はせて笑つた。
『何を言つてゐらつしやるのよ。あなた方は、何時だつて、ごらんになつてゐらつしやるぢやありませんか。』
『駄目ですか、奥さん。』山田が、お道化た調子で言つた。
『駄目々々。』と、桂子は、燦然と寶石の輝く、華奢な手を振つて言つた。『さあ、鶴子さん、入らつしやいませ。お庭の方が、それは涼しいのよ。』
『えゝ。』
鶴子は、ちよつと、ためらつてゐた。
『僕たちは、駄目なんですか。』と金子が、甘えるやうに、わざと不平さうに言つた。
『あなた達のやうな不良は、一緒に連れて行かれやしないわ。』
『不良とは、ひどいな。』
『不良以上かもしれないわ。』
『どうも、奥さんにおつちや、かなはない……』
金子は、頭を掻いた。
『かなはなかつたら、温和しく、ここで待つてゐらつしやい。』
さう言つて桂子は、鶴子一人だけを誘つて、庭に出て行つた。
冴子は、皆なの中に殘された。（つゞく）

古今風流かゞみ

知らでふする

享保の初年のことだ。或る夜、将軍吉宗は宿直の鳴島道筑へ、『明日は狩だが、それを一つ題にして歌をよまぬか』と所望した。道筑は取りあへず、



あすはまたかるもの露の命とも知らでふす猪の夢やみるらん

と詠んだ。将軍は深く感ずるところがあつたものと見え以後好きな狩をやめてしまつた。

萬里長城不禦胡

軍神廣瀬中佐は武勇だけの人ではなかつた。或時は八代淺間艦長と米國公使館に赴く途中、八代艦長は突如、『廣瀬君、萬里長城不禦胡の意味を三十歩の間に句に詠み直して見たまへ』と難題を持ちつけた。



『いいとも〳〵』廣瀬中佐は輕く承知した、それから一歩二歩三歩四歩と數へぬうち、朗かに吟じた。

盗人をわが子と知らず垣造り

野中の清水



矢部正子十九の年故ありて夫に別れ、母の里に歸りて後再び嫁せず、もつぱら歌詠み茶香の風流に身をやつしてゐた。後、もとの夫が野中の清水が忘れ難くなつたのであらうか、仲だちして文を添へ送つて來たのを、そのまゝ返し、一首を添へた。

秋にあひて枯れにしものを今さらに
何おどろかす荻の上風。

死にともな

徳川四天王の一人本多平八郎忠勝の臨終の時であつた。『何か遺言はないか』と家人が尋ねると、

死にともなあゝ死にともな死にともな

と、和歌の上の句を詠んだ。日頃勇士よ豪傑よといはれた者が、いかに病氣の末とは云へ、さりとは情ないと思つてゐると、まもなく

御恩を受けし君を思へば、

と附け加へたので、一同ハッと感激したといふ。



戯曲

生贄（一幕）

畑耕一作

伊東深水畫

人物

水上宗雄。（聲樂家。三十二歳）
同　良二。（その弟。二十六歳）
根岸祐介。（畫家。三十五歳）
同　信子。（その妹。二十二歳）
おたみ。（老婢。四十歳）

舞臺

宗雄の私室。
質素な西洋間である。テーブルをかこんで、四つの籐椅子。すこしはなれて揺り椅子が一つ。上手に蓋をしたピアノが一臺。樂譜や洋書を詰めた大きな書架一つ。中央と下手にドアがあり、金巾の、紅い鳥と草花を模様にしたリドオをつけた窓が二つ。
七月の夕方。開け放された窓のそとには、やゝ小やみになつた驟雨が、桐の葉にしぶいてゐる。

暗い夕闇のなかに、良二がジツと揺り椅子に身を埋めてゐる。
間。――
フト煙草がのみたくなつて、良二は椅子を離れて、テーブルへあゆむ。彼はひどい跛足である。――テーブルの上の煙草函から、卷煙草を一本ぬき出し、マッチ

で火をつけて椅子にもどる。
物思はしげに、靜かに烟をふかしてゐたが、すぐ自分を否定するやうに、自由な左足で、急に椅子を揺りはじめる。
おたみが、下手のドアから入つて來る。

おたみ。（窓を見て）まあ、窓がみんな開つ放しになつてゐる。……こんなにしぶきが入つて來るのに……（急いで窓を閉めようとする）

良二。婆あや、暑いぢやないか。そのまゝにしてお置きよ。

おたみ。おや、良二さま。こゝにいらしつたのでございますか。このひどい夕立に、窓を開けつ放したまゝで……（床を踏んで見て）おやおや、こんなにしぶきが入つてゐる。すぐ拭かなきやならない。窓は閉めとかないぢや、いけませんよ。

良二。だつて暑いんだよ。

おたみ。暑くつたつて、こんなにこゝが濡れてゐるんですから。（窓を一つ閉める）

良二。ぢや、お願ひだ。一つだけは堪忍してお呉れ。

おたみ。だつて良二さま。こんなに濡れてゐるんでございますよ。

良二。もう、ぢきやむよ。

おたみ。ですから、やみますまで……ね。（次の窓も閉めてしまふ）

良二。暑いなあ。これぢや、蒸し風呂のなかにゐるやうなもんだ。

おたみ。……まあ、我慢遊ばせよ。

良二。……（默つて煙草をふかす）

おたみ下手のドアから去つて、雜巾を取つて來て、窓際や、そこらの床を拭く。あたりはいよいよ暗くなる。
下手のドアから、洋服の宗雄が入つて來る。

宗雄。あ、眞つ暗だな。

宗雄、壁上のスヰッチをひねる。電燈がつく。雨のなかを歩いたと見えて、彼の靴やズボンの裾に、雨滴がキラキラ光る。

おたみ。おや、お歸り遊ばせ。

良二。（椅子から振返つて）お歸りなさい。

おたみ。いまの夕立に、お會ひでございましたか？

宗雄。ひどい目にあつたよ。（微笑しながら手巾で雨滴を拭ふ）

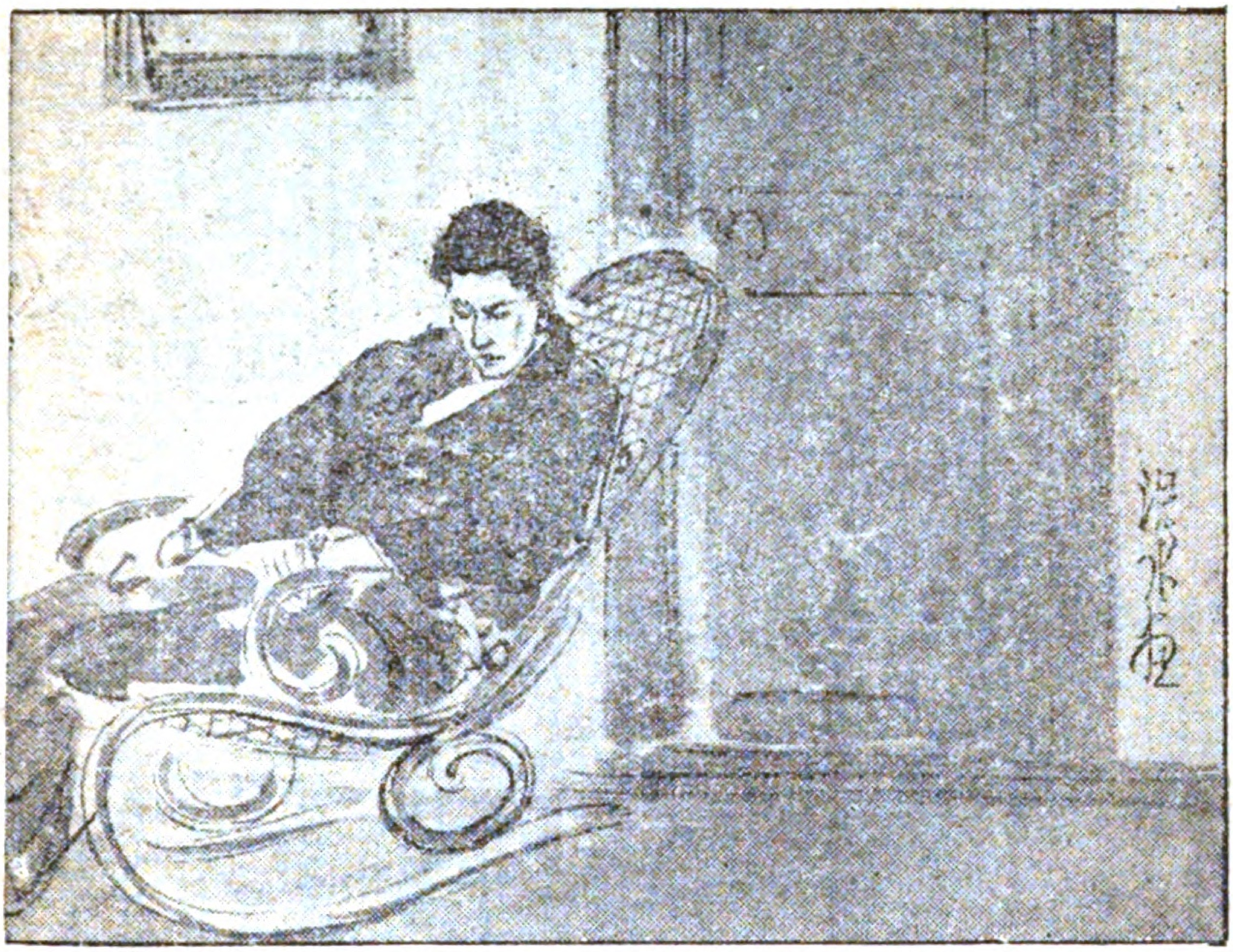
おたみ。（雜巾を置いて傍に來て）まあ、大變でございますね。こんなにひどくお濡れなすつて……早く着物と、お着かへなすつたがようございますよ。

宗雄。着物よりも、腹が減つたね。

おたみ。すぐお仕度をいたします。なにしろ先刻のえらい雷鳴でございませう？ わたくしはあの音が大嫌ひで、お耳を閉ぎますと、もう身も世もなく、お臺所にしばらく、突つ伏してゐたのでございますよ。それでお仕度がおくれまして……

宗雄。さうかね。早くしてくれ。

おたみ。はい。……旦那さまは、あの雷鳴にどこでおあひでございましたか？



宗雄。外務省を出るとすぐだ。お濠端を通つてゐたがね。

おたみ。まあ！　それで、大丈夫でございましたか？

宗雄。まさか、お臺所とちがつて、往來へは突つ伏せないからな。はゝゝ。

　おたみも笑ふ。良二も思はず笑ふ。

おたみ。では、すぐお支度をして參りますから……

宗雄。早いがいゝよ。これからお支度ぢや大變だ。焼麪包と半熟の卵子で結構だ。（良二を見て）良二、お前もまだだらう？

良二。えゝ。……だが、僕は今、たべたくはありません。

宗雄。まあ、一緒に食はうよ。……しばらく一緒に食ふことはできないのだから。

良二。……

宗雄。婆あや、早く賴むよ。良二のも僕のとほりだ。こゝで食ふから。それから珈琲もね。

おたみ。はい。（去る）

　宗雄、上着をぬいで一つの椅子にかけ、テーブルの前の椅子に腰をおろす。

　間。――

良二。（火の消えた煙草を、テーブルの灰皿に持つて來て、宗雄に向きあつた椅子を占めながら）……兄さん。

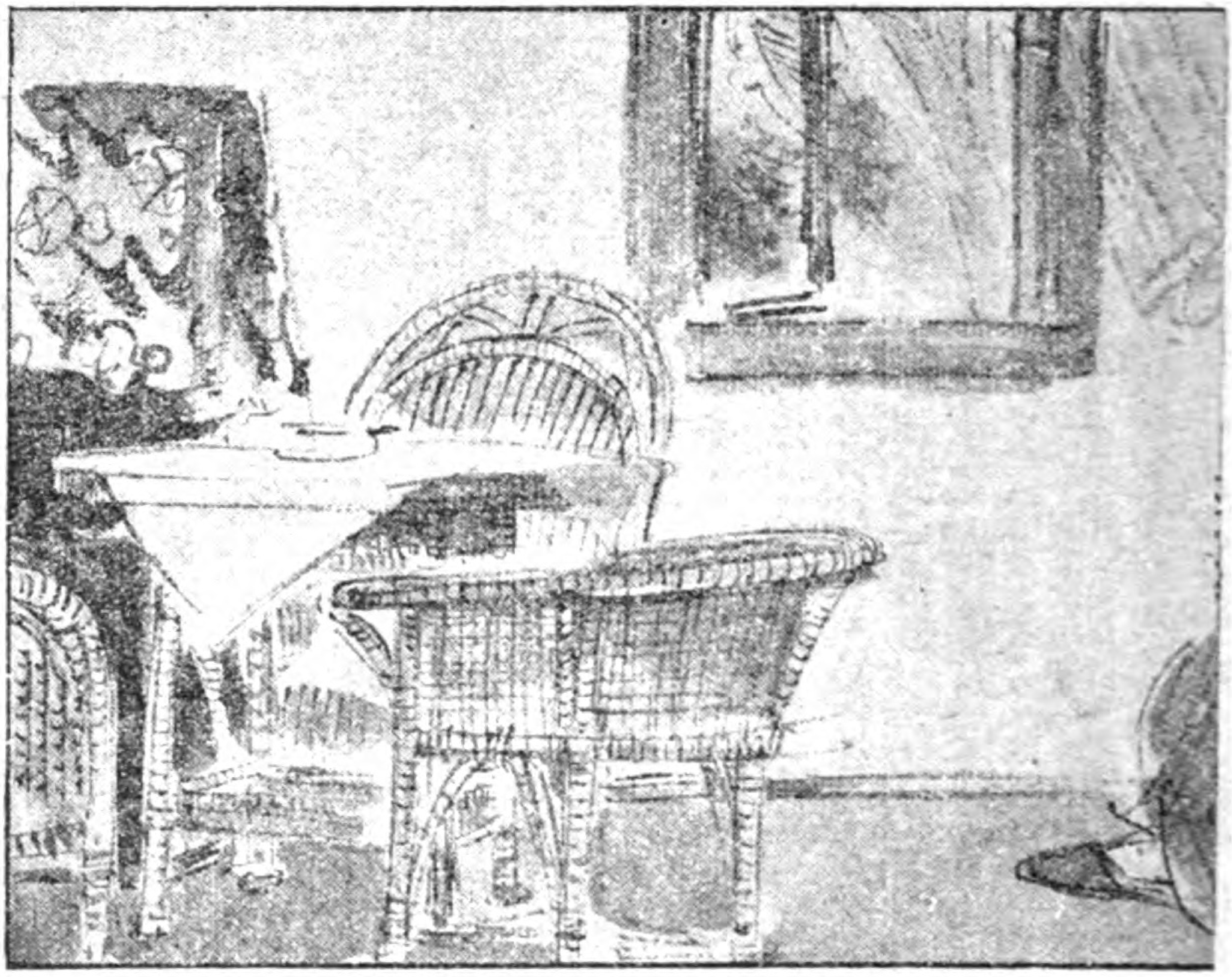
宗雄。……？

良二。佐伯さんに會つて來ましたか。

宗雄。あゝ、會つて來た。あの人に禮をいつて置けば、もう用

なしだ。荷物もすつかりできてしまつたし……

良二。(突然、感情的に)あゝ、嫌だ、嫌だ！



宗雄。どうしたのだ？　なにが嫌だ？

良二。嫌だ、嫌だ……兄さん。あなたが出發してしまつたあとの淋しさを思ふと、實に嫌だ！

宗雄。なにを……子供のやうなことをいふね……はゝゝ。

良二。子供のやうかも知れない。……だが、僕は、この家で、ひとりぼつちに、あの婆あやの拵へてくれる飯だけ食つて、毎日目的もなく慰めもない生活を積んでゆくことは、今から思つても淋しくてたまらない。……たまらない……

宗雄。(强ひて或る感情を押へて)なにが目的がないのだ？　どうして慰めがないのだ？　お前は靜かに……

良二。本を讀めつていふんでせう？——だが、中學を二年といかないでやめてしまつた僕に、どれだけの本が讀めるんです？(焦々するやうに)僕は、こゝに置いてある英語の詩集の、一頁だつて——一行だつて滿足に讀めやしない。ボドレエルやヴエルレエヌが好きだといつても、佛蘭西語一字讀めるんじやない。みんな他人が飜譯したものを、間違つてゐても出鱈目をいはれてゐても、難有がつて讀まなくちやならないのだ！　そんなものを讀んでゐると、つまらんといふより、自分がみじめになります。氣の毒になります。哀れになります。

宗雄。信子さんは佛蘭西語ができるんだから、これから時々遊びに來て貰つて、教へて貰ふがいゝじやないか。

良二。信子さんに？　……嫌だ。

宗雄。なぜだ。どうして嫌なのだ？
良二。女に負けるのは嫌だ。
宗雄。負ける？　敎はることは負けることじゃないよ。また子供みたいなことをいふね。
良二。だつて、敎へる者と敎へられる者とは、どうしたつて敎へる者に優越感があるにきまつてる。
宗雄。信子さんはそんな人じやないよ。
良二。そんな人でなくても、僕がさう感じるのだからしかたがない。……僕はみんなに負けてゐる人間です。むかしの友達仲間にも、世間の若い誰にも決定的に負けてゐる人間です。學問でも……肉體でも……
宗雄。なにをいふのだ。
良二。だつて決定的じやありませんか。この年齢で、こんな貧弱な頭腦をもつてゐて、そしてこんな……
おたみが食器を運んで來る。
おたみ。大急ぎで拵へましたから…その代り、明日の朝は、御出發の赤飯をたいて、うまい御馳走をいたしますよ。（食器をテーブルにならべ、氣輕に笑つて去る）
宗雄はすぐ燒麺包をちぎる。良二は手を出さない。間。――
良二。……はゝ、はゝゝゝ……（突然自嘲的に低く笑ふ）
宗雄。……？（良二を見る）なにがをかしいのだ？
良二。いえ、今、僕がつくりかけてゐる詩のことを思ひ出したのです。
宗雄。どんな詩だね。
良二。題はつけてないが、人生は一つの舞踏場で、みんな踊つて踊り白痴てゐるといふことを書かうと思つたんです。そのみんなが踊る形容を、『蛇のやうに』とか、『枯れた草つ葉のやうに』とか、『波の上の木枯のやうに』とか、いろ／＼考へて、ついでに、『足の曲つたおれのやうに』と書いてやらうかと思つたからです。……はゝ、はゝゝゝ……
宗雄。（啜りかけた珈琲茶碗を置く）馬鹿だな！　自己嘲笑や自己憐憫は詩にならんよ。それは要するに、一種の、感情を弄ぶことなんだ。下手な感傷主義だ。不愉快な回想だ。ごまかしの悲鳴だ。
良二。さうですかね。
宗雄。さうだとも……どうもお前はものごとを、理と非、善と惡、美と醜、優と劣、勝と負つていふふうに、ハツキリ區別したがるからいけない。その癖、ハツキリ區別しようとして、そこにやつぱり、恐れとか恥ぢとかの心持からのがれることはできない。そして拗ねてゐたいやうな、あきらめてみたいやうな、思ひきりのわるい、ウロ／＼した態度がある。……いけないことだ。それは卑怯だ。
良二。卑怯……さうかな？　卑怯かな？
宗雄。卑怯だとも。
良二。……さう……卑怯かな？　だが、卑怯だつていはれて

も、僕にはそれを、どうにもできない。
宗雄。その、どうにもできないつていふ心持からすでに卑怯だよ。お前は詩に、文字だけの學問や形だけの肉體をうたふのではなからう。お前は、人間をうたふ、人間の眞實をうたふと、いつもいつてゐるではないか？（立ちあがつて、書架の隅からウイスキイの角壜と、小さなグラスを持つて來る）まあ、一つこれを飲んで、元氣を出すんだね。（ついでやる）
良二。（角壜を見て）ほう、隨分飲みましたね。酒の飲めない兄さんが、三日のうちに、もうこんなに飲んじやつた。（宗雄の顏を見て）……はゝゝ、はゝゝゝゝ！
宗雄。なにを笑ふのだ？
良二。兄さんだつて、ごまかしをやつてゐるからさ。
宗雄。……ごまかし？
良二。ごまかしだ。たしかにごまかしだ。兄さん。あなたはこの壜の空つぽになつた分量だけ、自分の感情をごまかしてゐる。
宗雄。……
良二。兄さんだつて、ものごとを勝と負で律しようとしてゐる。
宗雄。（空壜をのみ込んで）……そんなこと……そんなことはない……
良二。駄目だ。兄さんのこんどの洋行には、負けたから逃げ出すといふ態度が見える。すくなくとも僕にはさう思へる。
宗雄。負けた……さうだ。負けたともいへる……
良二。それ御覽なさい。負けたといふ言葉を使つた。
宗雄。負けたともいへるが、僕は、勝にたいする負といふ意味には考へてゐない。負けたからなんとかして勝つてやるんだと思つてゐない。負けたら負の苦しみを、當然味はつてゐるつもりだ。こんどの洋行は、そんな意味でなく、僕のこれからの仕事のためなのだ。勉強のためなのだ。
良二。しかし、兄さんには外國でウンと勉強して、もつとえらい、もつと素晴らしい建築家になつて、歸つて來る氣持があるんでせう？
宗雄。それは無論ある。
良二。その心持がある以上は、兄さんには、どうしたつて、なんといつたつて、勝利感とか優越感とかに、支配されてゐるものがないとはいへない。兄さんがあつちで勉強して、歌はぬ歌ひ手——字義通りにですよ——になつて、すこしの誇張る氣持もなしに、また悄然として日本に歸つて來るなら、いつまでも負けた人となつて、みじめに歸つて來るなら、僕は今の兄さんの言葉を肯定します。しかし……
宗雄。はゝゝ。殘酷なことをいふね。……僕は、勉強して日本に歸つたつて、もう、珠子は自分のものにはできないのだよ。僕を見かぎつて、この家庭生活をたつた三月でふり棄てて、ほかの男に走つた珠子は、どうすることもできないのだよ。僕がどんなに立派な歌ひ手になつて歸つて來たつて、珠子

子を奪つたあの男には、どこまでも負けとほしたのだよ。

良二。だが、勝つといふ豫想に似たものがないでもない。……兄さんがえらくなつて歸つて來て、その時、珠子さんが、また兄さんの手にもどつて來ようとしたらどうです。

宗雄。(怒る) 良二、お前は僕を恥かしめるのか?

良二。そんなつもりでいつたのではありません。失言なら取消します。

宗雄。あんまり考へのない、ひどい言葉だ。怪しからん言葉だ。

良二。取消します。ごめんなさい。

宗雄、默つて冷えた珈琲をのみ、燒麪包をちぎつて食ふ。

良二、妙にうなだれる。

間。——

宗雄。……(なにか言はうとして良二を見るが、また默る。が、また氣輕な調子で) 良二……

良二。え?

宗雄。お前……結婚する氣はないかね?

良二。え、結婚? (兄の唐突な言葉に驚いて顏をあげる)

宗雄。(强ひて無雜作に) あゝ、結婚さ。

良二。なにをいふんです。急にそんなこと……はゝゝ。

宗雄。いや、明日出發つといふ間際に、こんなことをいふのは變だが、僕は今、ほんとうにそれを考へたのだよ。お前……お前、信子さんを愛してゐるのだらう?

良二。えつ。

宗雄。さうだらう?

良二。……(默つて再びうなだれる)

宗雄。僕は知つてゐる。僕にはわかつてゐる。

良二。……しかし、兄さん……僕はこの通り……はゝ、はゝゝ。は……(淋しく笑ふ)

宗雄。また自分を嘲らうとするね。

良二。嘲けりたいのだ! 笑つてやりたいのだ! これでなにができるといつてやりたいのだ!

宗雄。さういつても、お前は信子さんを愛してゐることは事實だらう。そんならさういふことはいはぬがいゝ。

良二。……

宗雄。お前が信子さんを愛し、信子さんと結婚することを希望してゐるなら、僕は今夜根岸君に話してみたいと思ふ。八時までには根岸君は、信子さんと一緒に、お別れに來てくれる筈だから……急な話で、根岸君も面喰ふかも知れないが、根岸君は、一番僕をわかつてゐてくれる人だ。すぐ確實な返事はできないにしても、同意か不同意位ゐの心持は見せてくれるにちがひない。根岸君だつて僕等と同樣、兄妹二人暮しなんだから、信子さんのことは、あの人の胸ひとつできまる話だ。信子さんは根岸君を信じ尊敬してゐる。だから、根岸君が同意してくれゝば、それで話はつくわけだ。……お前の婚約だけでもきまつたら、僕はどんなに安心して出發することができるだらう? 信子さんはあゝした從順な溫和しい人



だし……。

良二。有難う。感謝します。兄さん。……しかし……しかし

その話はやめてください。このまゝにして置いてください。僕はそのほうがいゝのだ。僕はその話を根岸さんにして貰ふことは苦しい……恐ろしい……この點で卑怯といはれるなら、僕、それを甘んじて受けます。

宗雄。まあ〳〵僕にまかして置いてくれ。さあ、なんでもいい、そのグラスを一杯飲んでくれ。お互ひに健康を祝するんだ。

良二、默つてグラスをとりあげる。宗雄もとる。二つグラスが、カチリとあはされる。良二はちよつと口をつけてテーブルに置く。

おたみが、祐介と信子を案内して來る。

おたみ。根岸さまがお見えになりました。

宗雄。（急いで上着を着て椅子から立つ）やあ、根岸君。よく來てくれました。さあ、こゝへ掛けてく

れたまへ。
祐介。(快活に近づいて)や、失敬。早く來ようと思つたが……
(手に持つた紙包みをテーブルの上に置いて)これは餞別だ。
宗雄。さうか、どうもお氣の毒だね。有難う。
祐介。邪魔になるだらうが、船中の無聊を慰めたいのでね。信子の注意によつて、君の好きな榮太樓の甘納豆も入れてあるよ。
宗雄。さうか、それは……信子さん、どうも有難う。
宗雄、信子へ頭をさげる。信子微笑しながら返禮する。
良二、ギゴチなく兩人へ挨拶する。
祐介。(グラスに眼をつけて)ほう、これはめづらしい。酒が出てゐるな。
宗雄。(笑つて)明日出發するからね。
祐介。で、祝杯か。……僕も今夜は大いに祝杯をあげたいと思つてゐたが、君はから下戸だから駄目だと思つたが……これは話せる。
宗雄。君が來たら、大いに一杯やらうと思つてゐたのだ。……さあ、婆あや、一應この上を片づけて、改めてみんなになにか出しておくれ。
おたみ。はい。
おたみ、テーブルの上を片づける。
祐介。君の口から、大いに一杯なんて、威勢のいゝ言葉を聞くのははじめてだよ。嬉しいね。そこで僕も、今夜みんなで愉快に食べたいと思つて、實は鴨を一羽持ち込んで來たのさ。
宗雄。それはいよ〳〵お氣の毒だね。
信子。いゝえ、鴨と申しましても、兄が試驗用に使つたので、それを……
祐介。おい〳〵、樂屋をぶちまけちや困るな。……はゝゝ。實は、靜物を一つ描いたのだが、その材料に使つたのだ。しかし、新らしいんだぜ。君の大事な身體に、決して腐敗したものなんか食はせはしないから大丈夫だよ。
宗雄。(笑つて)いや、なんでも食ふよ。有難う。
祐介。一つ君の門出のために、僕がそいつを料理するよ。――婆あやさん。臺所へ一緒にゆかう！
宗雄がなにかいはうとするに構はず、椅子から立つて、おたみを急がして共に去る。
信子。(後を見送つて)ほんとうに、いつもあんなに性急で……
……(笑ふ)
宗雄。いや、いゝ人だ。いつもいゝ人だ。……僕はかうして出發する時にも、たゞ根岸君と、あなたと、こんど旅行免狀のことやら、そのほかいろ〳〵の紹介狀やらなにやら世話を燒いてくれた外務省の友達と――たゞこの三人よりお別れをつげないでゆくんですよ。無論、世間へも知らせないで――
信子。(ジッとなにか考へる)兄も、あなたが外國へいらつしやることを、お喜び申してゐるとともに、どんなに淋しがつてゐることでございませう？……どの位ゐ、あちらへ行つてい

らつしやるのでございます？

宗雄。さあ、豫定はありません。できるだけながく勉強して來たいと思ふのです。すくなくとも三年以上はゐたいと思つてゐるのです。

信子。三年……？（またジツと考へる）

良二はこの間、なにか落ちつかぬらしく身體をゆすつてゐたが、椅子から離れて窓のはうへゆく。窓を開ける。

雨はいつの間にか晴れてゐる。涼しくぬれた桐の葉に、室の灯影がさす。

良二は窓際のドアをあけて、無言のまゝ、なに氣なく下駄をつつかけて、庭の闇に去つてしまふ。

間。――蛙がなく。



信子。こゝらあたりは靜かでございますわねえ。

宗雄。なんといつても、池袋大原といへば田舍ですからなあ。

信子。ほんとうに、いゝお住居でございますわ。兄といつもさう申してゐるのでございます。わたくしのほうは、場末と申しましても、電車の音が騷がしくつて……

宗雄。こんどは獨逸と佛蘭西に主として遊んでくるつもりだが、こんなことなら、平生信子さんに、すこしでも佛蘭西語を習つて置けばよかつた。

信子。あら、あんな……ほゝゝゝ。

宗雄。いや、ほんとうにさう思ふのですよ。（信子を

見る。信子うつむく。氣を變へて）……信子さん。

信子。え……

宗雄。どうか僕の留守にも、ちよく〳〵遊びに來てくださいね。良二はひどい淋しがり屋だから……そして、良二に、佛蘭西語を敎へてやつてください。お願ひです。

信子。……え〵、遊びにはあがらせて頂きます。しかし、佛蘭西語なんて……

宗雄。まあ、さういはないで敎へてやつてください。良二もよろこびます。

信子。……え〵。

宗雄。さうして頂けば、僕も安心して出發てる。（話のつぎ穂を考へるやうに輕く笑つて）さつき、良二に一本やられましたよ。は〵〵。

信子。え、どうなすつたのでございます？

宗雄。どうといつてね。良二は、僕の外國行きを、負けたから逃げ出すんだといつたんです。……やられました。は〵〵〵。

信子。まあ、ひどいことを仰有つたものですね。それはひどい……

宗雄。僕は、馬鹿いふなつて怒つてやりましたが、僕の心のどこか隅つこには、それに近い氣持がないではないやうで、どうも一本やられた形です。は〵〵、は〵〵。

信子。（氣の毒げに）でも、あなたに向けてそんなことをヅケヅケ仰有るとは、ひどうございますわ。

宗雄。しかし今はすべて沈默です。敗軍の將兵を語らずです。とにかくウンと修業して來なくちやなりません。

信子。あなたがめでたく御歸朝なすつて、大きなステーヂでお歌ひなさる日を、ほんとうにお待ちして居ります。

宗雄。いや、ウンと勉强はするが、日本に歸つて歌ふか歌はぬかは別問題ですよ。僕としては歸つたら、またこの部屋にジツと立て籠つて、なんにもしないでゐたいと思ひます。さつき良二からも忠告されました。歌はぬ歌ひ手になつて歸るなら、兄さんもすこしは見なほせるつて風に忠告されたのですよ。

信子。しかし、折角御修業なすつて、そんなこと……勿體なうございますわ。

宗雄。そりやあ、勿體ないといはれるだけの修業をして歸ればとにかくですがね。……まあ、それは先の話だ。鑄鐘師が、鐘を鑄もしないうちから、こんどの鐘はどんなえらい尊い音を出すだらうかと、首をひねつてゐるやうな話だ。……は〵は〵〵。

信子。…………（默つてゐる）

宗雄。……（半ば獨語するやうに）負けたといふ言葉は不愉快だが、負けたといふなら、どこまでも敗者としての悲哀を味ひつくしたいのです。僕はむしろ、一生を負け通した僕でありたいと思ふ……僕はそれを願ふ……

信子、急に顏に袖をあてる。すゝり泣きの聲がその下から

漏になる。

宗雄。(驚いて)や、信子さん。どうかしましたか？

信子。(顔を蔽うたまゝ)……いゝえ、いゝえ、なにも……御免遊ばせ。つい、わたくし、感情がたかぶつたものですから……

宗雄。それは失禮しました。とんだくだらんことをいつて……(椅子から離れて、信子に近づく)

信子。……いゝえ、なんでもないことですの……御免遊ばせ……(顏をあげて淋しく笑ふ)

宗雄。どうも失敬しました。おゆるしください。

信子。そんなことをいつて頂いては相濟みません。わたくし、つい、自分の今の心持にあなたのお言葉が強く觸れましたものですから、それでこんな失禮な……御免遊ばせ……

宗雄。僕の言葉が、あなたのお心持に……？

信子。……どうか、御免遊ばして……

宗雄。しかし、それはどうしたのです？ どうしたわけです？

信子。……わたくしも、その負けた人なのでございましたから……(恥ぢるやうに淋しく笑ふ)

宗雄。あなたが負けた人？

信子。……御免遊ばして……もう、それ以上お訊きくださらないで……しかし、わたくし、今のあなたの御立派なお言葉を——一生を負け通してゐる自分でありたいと仰有つたお言葉を承りまして、はじめて、わたくしも、さうだ、さうでなければならぬと、すつかり氣強いやうな、自分をハッキリ摑めたやうな氣がするのでございます。

宗雄。しかし、負け通してゐるといふことは、意氣地のない人間のすることですよ。

信子。意氣地のないといふのは、外觀だけを見る人のいふことです。負け通すといふことは、強い正しい心の人でなければ、できない筈のものです。

宗雄。……

信子。……わたくしの心には、この強い正しいものが缺けてをりました。

宗雄、信子の椅子の傍らに立つたまゝ、不思議に身體を固くして唾を呑む。夜風に樹の葉のゆれる音。——間。

宗雄。(或る苦しい沈默から逃れようとして、遂に思ひきつて)……信子さん。

信子。え？

宗雄。……僕、あなたに御相談があるのですが……

信子。え、相談？

宗雄。唐突ですが……あなたは……良二と結婚してくださらないでせうか？

信子。(驚く)え、結婚！……良二さんと……？

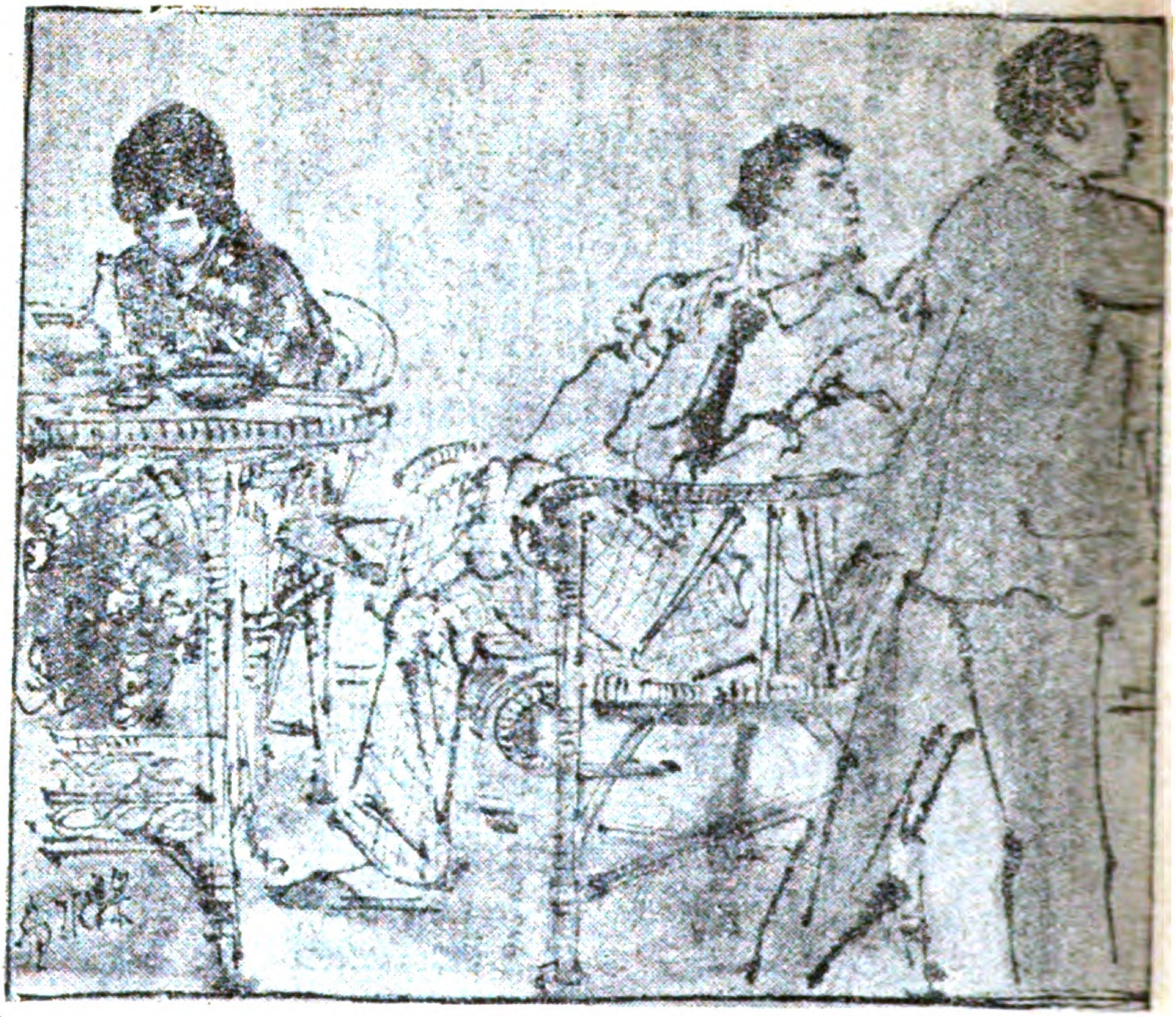
宗雄。(熱心に)えゝ、僕はあなたに御願ひしたいのです。良二は、あなたを愛してゐるのです。……唐突にこんなことを申してすみません。しかし、僕は、ずつと以前から良二の心を知つてゐました。そして、良二が……あのやうに不具である



ために、あなたにひけ目を感じて、苦しい心をたゞひとりに押へてゐることも知つてゐました。良二はあのやうに不具です。そしてその身體が不具だつたために、學歴も不具にならなければなりませんでした。そして、今はどうやら、心までも、中に隱した苦しさ惱ましさに耐へかねて不具になつてしまひはせぬかと氣遣はれます。それを救つてくださるのは、信子さん、あなたよりほかはないのです。……あなたが、幸ひに良二を救つてやつてくださるなら、僕はどんなによろこんで……安心して出發できるでせう？　唐突なお話で、もとよりすぐ御返事を承りたいとは思つてゐませんが、明日からはしばらくお別れしなければならないし、もとより良二の口からは到底いへないことなのですから、僕が代つてお願ひしてみるのです。このことは、僕として、こんな出發間際でなく、もつと早くからお話してみたいとは思つてゐました。しかし……良二のあの不自由な身體には、良二があなたにひけ目を感じてゐると同樣、僕もひけ目を感じてゐるのでした。教養も身體も立派なあなたに、どうもそれを良二に代つてお願ひする勇氣はありませんでした。……が、かうして出發することになつて、良二が子供のやうに淋しがつたり心細がつたりすると、僕はたまらなくなりました。僕も良二の心の苦しみと同じ苦しみをしてゐるのです。それだけ良二に同情してゐるのです。それで……根岸君にもお願ひしてみるつもりではありますが……

信子。……宗雄さま、どうか、もうそのお話は……

宗雄。……？



信子。……どうか、そのお話は…わたしも苦しいのですから…

宗雄。え？　苦しい……？

信子。さつきわたくしは、あなたに、自分も負けた人なのだと申しあげました……どうぞ、其の言葉でお許しくだすつて……

宗雄。……（動かず）

信子。……（できるだけの勇氣を振つて）そのやうなお言葉を、あなたのお口から聞きますことは、わたくしには耐へられないことなのでございます。わたくし……あなたのお口からそのやうな……

宗雄。（信子の表情のたゞならぬに驚くがごとく）どうして？

信子。……わたくし、あなたのお口から、そのやうなお言葉を聞くことは……お恨めしくぞんじます……わたくしも負けた人なのです。苦しみを苦しみぬかうとしてゐる女なのです。たゞこれだけの御返事で、おわかりくださるだらうと思ひます。わたくしはあなたの藝術が、この上にも立派に磨かれてお歸りになる日を待ちたいのです。……良二さまは、きつと今に、わたくしなどよりもいゝ御縁談がおありでございます。どうか、兄にはこのお話はしてくださいませんやうに……

宗雄、沈默、石のやうに立つ。信子は顔もあげ得ない。この會話の間に、窓の彼方の闇に、チラリと良二の姿が見える。祐介、元氣よく入つて來る。

祐介。や、すつかり料理してしまつた。僕の手際のいゝには、婆あやさん、はなはだ感歎してゐたよ。はゝゝゝゝゝ

宗雄。さうかね。難有う。お客さまを臺所に使つて、恐縮だ。

御苦勞さま。

祐介。なに、今夜のお客さまは君だよ。君が主賓だよ。……さあ、どうぞ、お料理を運ばせまする間、そこへおかけください。(剽輕に口上をいつて笑ふ)

兩人椅子につく。おたみ、料理と酒を運んで來る。

おたみ。えらい御馳走でございますよ。こゝで煮て召しあがるやうにいたしませう。(テーブルの上へ、食器やら焜爐やらをならべはじめる)

祐介。まづ酒だ。みんなで祝杯だ。君は今夜大いに飲むといつたから、大いに飲ませるよ。醉つぱらつて明日の朝になつても動けなくなつたら、汽船まで僕が脊負つて行つてあげるから大丈夫さ。安心して大いに飲みたまへ。汽船が出て、上海あたりで二日醉ひの眼がさめるなんざあ面白いぜ。はゝゝ。……(ひとりはしやいでゐたが氣がついたやうに)良二さん……良二さんはどうした?

宗雄。庭のはうへ出て行つたやうだつたが……

祐介。さうか。(と、すぐ窓のところへ行つて)良二さん、良二さん!(呼ぶ)

闇のなかに返事がして良二入つて來る。

祐介。やつと、水上君の渡歐祝賀會の準備が整ひましたよ。さあ。こつちへおかけなさい。

良二。さうですか。有難う。(淋しく笑ふ)

四人、テーブルを圍んで椅子を寄せる。カップが置かれて、おたみそれぞれに酒をつぐ。

祐介。さあ、みんなで水上君の健康を祝さう!

祐介の音頭で、四つのカップがカチリとあはされる。

祐介。お目出度う!

宗雄。有難う!

祐介のとりなしで、しばらくカップが盛んに擧げられる。宗雄はすぐ醉つて眞つ赤になる。良二は默つてカップをひと息に乾す。

祐介。(良二を見て)いよう! えらいな。良二さんはなか〳〵飲けるね。ちつとも知らなかつた。話せる! 大いに話せる!

良二。(苦しげに醉を吹いたが、椅子から立ちあがつて)ひとつ、僕が餘興をやります。

祐介。餘興?――面白い! なにをやるんだ? 良二さん。

良二。僕獨特のダンスです。

祐介。ダンス……?

さすがに祐介は妙な顏をする。良二はかまはず衝つと椅子から離れて、ひどい跛足をひきながら、揺り椅子の周圍をグル〳〵廻る。

良二。(めちや〳〵な節で)……踊れ、踊れ、みんな出て踊れ……焔のやうに……枯れつ葉のやうに……波にうかんだ木栓のやうに……足の曲つた……

宗雄。良二!

宗雄、たまらなくなつて立ちあがる。信子、苦しげにうつ向いてゐる。祐介とおたみとは怪訝な顏をあはす。良二の聲は次第に悲痛な調子を帶びて來る。が、その奇怪な(しかし自然な)ダンスをやめようとはしない。(幕)



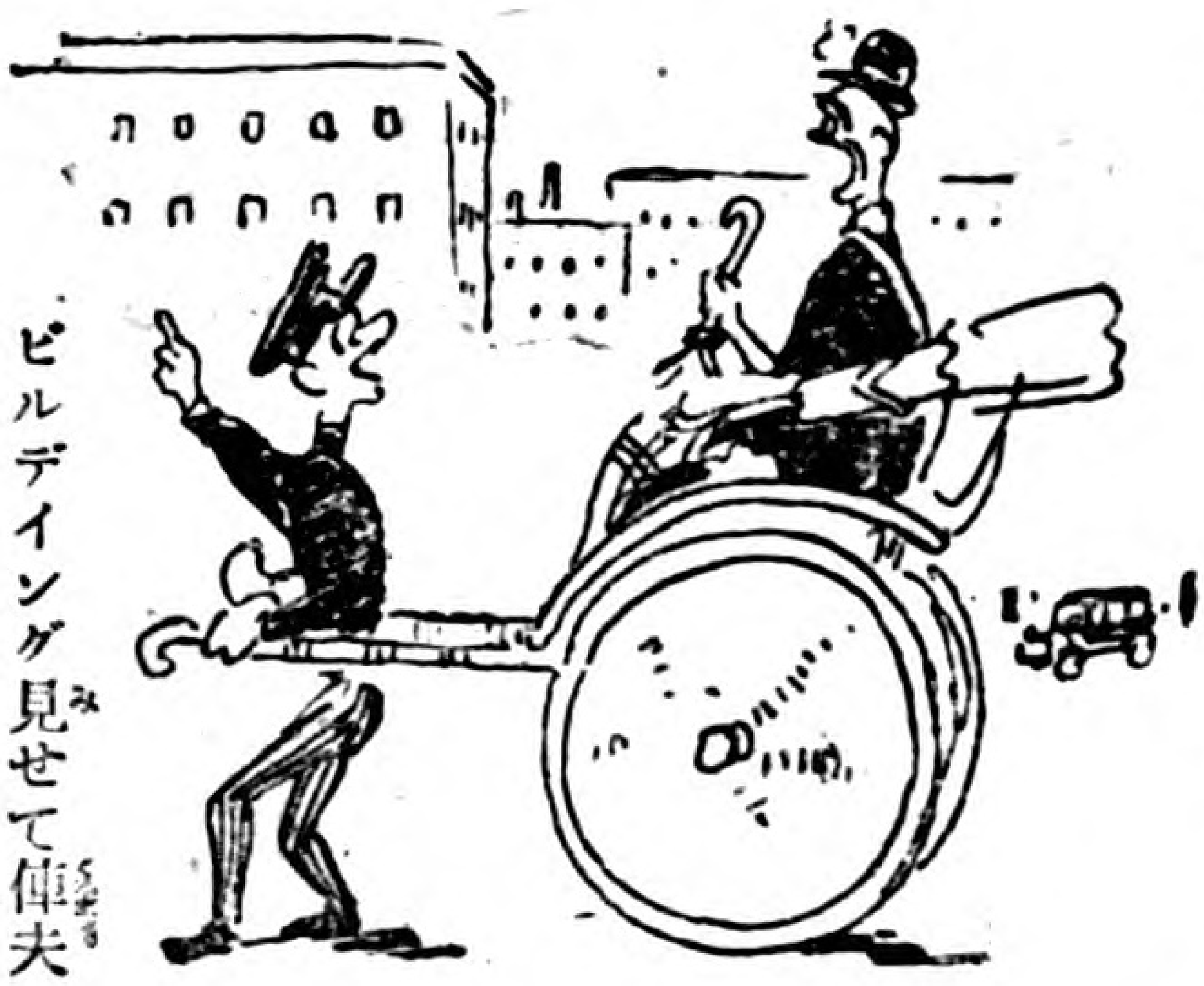
賞品を持つて駈け込む父兄席　（奇峯）



あとの戸を頼んで琴を借りて行き　（古川柳）



笑ひ止むまでは高座で汗を拭き　（古川柳）



ビルデイング見せて俥夫自慢なり　（紅夢）

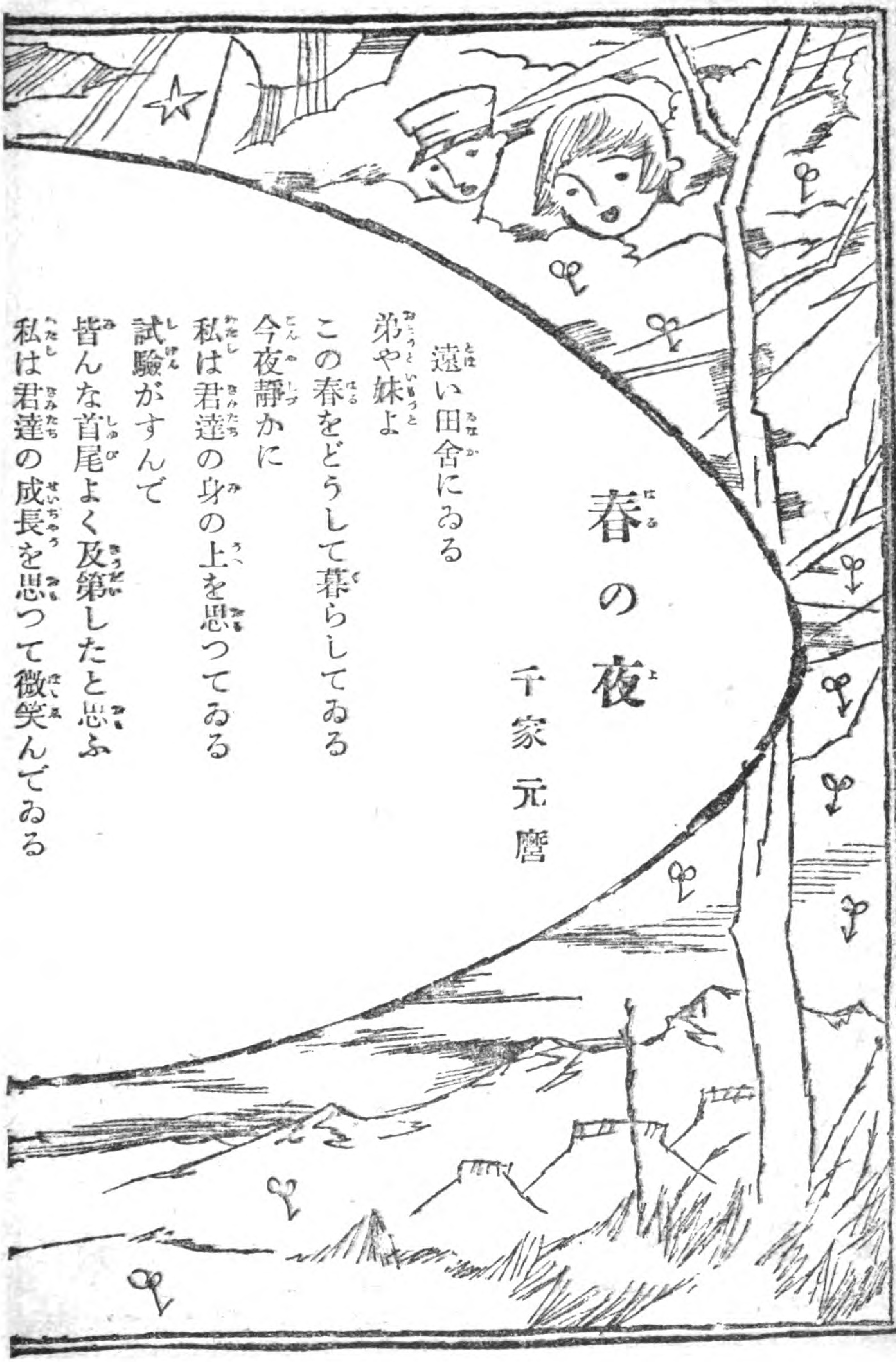


汐干狩股の下から話しかけ　（珍風）



待つてゐた子を仕事着のまんま抱き　（かむろ）

川柳名句集　紫文畫



春の夜

千家元麿

遠い田舎にゐる
弟や妹よ
この春をどうして暮らしてゐる
今夜静かに
私は君達の身の上を思つてゐる
試驗がすんで
皆んな首尾よく及第したと思ふ
私は君達の成長を思つて微笑んでゐる



君達の顔は一つ〳〵浮んで來る
一つ枝に咲いた花のやうに重なり合つて
累々と浮んで來る
私は狂ふ程戀しく逢ひたい
逢へないのが只恨みだ
私は涙ぐんで祈りを捧げ
遠くからこの春の祝福をおくる
幸あれよ
わが小さい弟妹

竹久夢二畫



聽け！殷々たる警世の鐘！

道重信教師一代の大講演

擧に飛行機搭乘供養をされた事によつて、有らゆる民衆に知られてゐる增上寺法主大僧正道重信教師は、淨土門の耆宿大賢、佛教界の大先覺者たり、宗教界の大偉人たるのみならず、その一言一行は、直に社會民衆の模範たらざるはありません。師は貧家に生れ幼くして上求菩提の大願を起し、素行清廉堅忍不拔、百錬琢磨の尊き修業を積み、遂に今日の無上の僧位僧職に住するに至りましたが、謙虚恬澹毫も尊大の態なきは、古名僧にも恥ぢず、現世の法然か昭和の行誡か、而も老いて益々壯に、一意專心衆生濟度の爲精進せられつゝあるは、懦夫をも起たしむべく、一般の渇仰して渇まぬ所であります。

本社は昭和戊辰劈頭、確固不動の大信念と燃ゆるが如き至情より迸り出た師の講演説教を萬人と共に永遠に記念する爲、特に代表的不朽の名法話數十篇を輯め『道重信教師大講演集』と題して刊行致しました。眞劍ならざる生活こそ矛盾せる現代人の煩悶を産むのだと辛辣に喝破し、大眞理の獲得、永遠の幸福のため、良心の開發、精神的自覺を促して縷縷數千言、總てこれ徳と力と熱の結晶、後昆萬代に傳ふべき大教訓であります。本書一冊を座右に備ふるならば必ずや永遠の殿堂に、無限の法味を味ふことが出來る事と信じます。この書こそ吾人の最大欲求たる眞の幸福の實を結ぶ種、萬人必讀必須の大經典であります。（定價壹圓八拾錢送料拾錢大日本雄辯會講談社發行）

評判の新刊書二つ

△東西婦人觀（佐藤紅綠先生著）

佐藤紅綠先生が、卓拔なる識見と、洗錬せられた筆致を以て女性の生活を各方面から論じたもの。輯むる所、「巴里婦人の生活」「東京の女と大阪の女」「美人論」「戀の蟲」「婦人禮讃」「英雄と婦人」「ジプシーの戀」等々。イブセンの「人形の家」と共に、今後の女性研究題目として好箇の名著である。（定價貳圓　送料拾貳錢　大日本雄辯會講談社發行）

△豹の眼（高垣　眸先生著）

アリゾナ大高原の一角、魔の岩窟に秘められたインカ大帝國の巨寶。日本少年黒田杜夫の手には、岩窟の扉を開く唯一の合鍵「王位の指環」あり、不敵の怪盗ジヤガーの手には秘寶のありかを示す「ツンガ王の碑」あり、正義に味方する怪支那人、雄々しの美少女、敏捷なる大探偵等入亂れ、世界を舞臺に秘策秘術を盡しての大爭奪戰。見よ、眞黒の海上に、自動艇の大追撃、千仭の斷崖に鐵鎖を辿る大冒險、これぞ手に汗握り胸の高鳴る痛快物語である。

（定價　一圓六十錢送料十錢　大日本雄辯會講談社發行）

編輯餘談

一記者

皆さん、キングはいよ／＼大評判大人氣です。創刊以來三年有餘、その間加速度的に高まる物凄いばかりの人氣に加へて、その信用は、ます／＼強く深く、今や『キングに出るものは、何一つ屑がない、無駄がない、悉く面白くて有益で、そして一粒選りの素晴しいものばかりだ！』

この極印がピッシリ押されてしまつたのです。

◇

それだけにキングに出るものは、皆何かしら世間の噂になり評判になるといふ有樣ですが、その評判や噂を見たり聞いたりする時の私共の喜びといつたら又非常なもので、もうそれだけでスツカリ日頃の疲れも忘れてしまふ程です。

◇

例へば、彼のお馴染の『キングの歌』にしても、創刊この方既に幾回となく發表して居るのですが、その都度意外の人氣を得て、何時の間にか、その時々の流行歌となり、劇場その他に於て藝人等が歌つて大喝采を博するとか、レコードに吹込まれて各家庭を喜ばして居るとか、全く行くさき／＼でこれを耳にします。

◇

最近では、この二月號の『キングの歌』と『キング踊』を、全國幾多の小學校、女學校で演じたことです。もう非常な大好評だつたと、その學校の校長さんや先生から、夥しい禮狀や報告を戴きましたが、全くキングに出たものは、どんなものでも評判がよいばかりでなく、いかめしい教育界でも宗教界でも軍隊でも何處でも安心して、これを利用されて居るのです。

◇

殊に、毎號素敵に評判のよいのは、本文挿込みの色刷オフセツトです。二月號の『名人苦心繪卷』や、三月號の『聖典繪ばなし』から一轉して本號はスツカリ趣をかへ奇想天外の漫畫集『百年後の世界』を掲載しましたが、これは又評判なだけそれだけ、僅か十數頁のものですが、眞に並々ならぬ苦心と努力を要する代物です。次ぎの五月號では、隨分思切つた珍計畫を樹てましたが、サテどんなものが發表されま

すか、御期待を望んで置きます。

◇

『キングの訓話説話は、面白くつてしみ〳〵爲になる、決して無味乾燥でない、他では得られぬ何處か一風微妙な味がある、全く大したものである』

といふ評判を到る處で聞きます。又

『キングの訓話を、讀む人と讀まぬ人では、その人格の上に處世の上に大した變化が起る』

と某名士は言はれて居りますが、それだけ又これには口で容易に言へない苦心が加へられて居るのです。どうかこのことを充分御推察の上、一字一句も忽せにせず、シツカリ味つて讀んで戴きたいと思ひます。次號に載る筈のものは、既に豫定の數倍も机上に溜つて居ますが、皆それ〳〵、今までにない程の感激に滿ちた名說ばかり、必ずや皆さんの賞讃を得ることゝ信じます。

◇

更に傳記、美談、逸話、成功談これこそキング獨特の擅場。何しろ『キングの美談』といへば一つの名詞になつて居る位で、或は教科書に編入され、或は說教や講演の資料となり、又は講談、浪花節の材料となるといふ有樣。これぞキングが、大いに世に誇つてよいものと堅く信じて居ります。

◇

本號卷末の特輯記事『全國各地事實美談』は、全國數百の新聞社に依頼して、各社の記者諸氏が親しく見聞された事實を執筆して送られたものですが、その美談の種類が千差萬別であり、材料が正確な上に、廣く全國津々浦々の出來事であるため、一入興深いものがあらうと存じます。更に次號は、これ等にも增した非常に深刻な大美談を掲載する筈で、目下その選定に沒頭して居りますから、必ずお悦び願へることゝ存じます。

◇

人氣があるといへば、何んといつても連載の小說にとゞめを刺します。

『キングの小說は、必ずその中に尊い何物かが含まれて居て汲めども盡きぬ味がある。そして何人が讀んでも害がないので、家庭でも學校でも安心して入れることが出來る。實に有難い』

『キングの小說は實に面白い、堪らなく圖破拔けて面白い、感激させられ夢中にならされる、全くしんみり讀みついたらもう迚もやめられぬ』

かういつた評は、名士からも讀者からも、殆んど每日のやうに聞く。

◇

『キングは讀者が圖拔けて多い上に、非常に賑やかで、博士も大臣も、少年も少女も齊しく愛讀し、外國にまでドシドシ讀まれるといふ特別の雜誌だから、迚もウッカリ筆が執れぬ。全く精根の限り全身を傾けてやる外はない』

これは各作者の偽らぬ述懐ですが、毎號キングの小説は並大抵の苦心で出來上つたものでない。それだけにいづれも一篇の興味が深く、熱が迸つて居ることは、皆さんの見遁してならない處だと思ひます。

◇

お馴染の佐藤紅緑氏は、御病氣が全く快癒されて、今や本誌のために一世一代の大作に筆をつけられつゝあります。菊池寛氏は、本號で目出度完結した『赤い白鳥』に代る大長篇の稿を既に起されました。兩氏とも前記の意氣込みを以て、共に〳〵素晴しい大傑作を近く本誌上に發表せられる運びですから、これは特に樂しみにしてお待ち願ひたいと思ひます。

◇

目下連載中の大長篇は、今や悉く油の乘つた處、いよいよ興味絶頂に達せんとして、靈筆いやが上に冴え〳〵て參りました。この外讀切の小説、講談をはじめ、あらゆる記事、讀物に、次號は一段の光彩を放ちたいと思ひます。目下懸命努力中ですが、必ず御期待に副ひたいと、かたく決心の臍を固めて居ります。

◇

最後に聲を大にして申上げて置きたいのは、本號ではじめて試みた本文挿込みのグラビヤ版『世界の奇觀と絶景』二十頁のことです。これはキングとして一段と費用に思ひ切つた大計畫大犠牲で、恐らく皆さんの御滿足を得たことゝ信じますが、さア次號はどんな内容のものを出すか、これに就ては編輯一同、今から偉い意氣込みで、そのため日夜をわかたず東奔西走。天下をアッと云はせる豫定。どうか刮目してお待ち下さい。

面白い〳〵!!

トテモ面白い! 堪らなく面白い! 面白くて〳〵、その爲滿天下愛讀者が一樣に熱狂し、歡聲を擧げられるやうな面白第一の素敵な讀物を、次號にはウンと豐富に入れる豫定です。

どうか次號こそは、忘れても品切などのならぬ中に、逸早く書店に御注文下さるやう、特にお願ひして置きます。

講談社ニュウス

四月號各誌特大號の壯觀

四月號の本社九大雜誌は何れも特別の力を罩め、新年號におとらぬ大壯觀を呈して居ります。特に『婦人倶樂部』は、『教訓生きた愛と涙の實話集』と題する三百數十頁の別冊大附錄を添附します。又『講談倶樂部』は堂々七百數十頁といふ未曾有の增刊號を發行しました。『婦人倶樂部』の別冊附錄と『講談倶樂部』の增刊はかねてから折紙附きのもの、例によつて又復賣切れにならぬうち、各位の御購讀を御勸め申上げます。

近く大計畫を發表

昨秋、天下を驚倒させた『明治大帝』の大出版の如く、雜誌報國の一端として本社が年々驚くべき大計畫を發表し來つたことは、讀者各位に於いても御承知の通りであります。而も本年は、彼の『明治大帝』以上の大計畫のため、目下着々進行中です。唯、未だ具體的に之れをお知らせ出來る迄に到つてないことを遺憾としますが、併しこれがひとたび世に發表した曉には、正に出版界に一大センセーションを惹起すべきは確實であります。願くは、刮目してお待ち下さい。

偉なるかなキング

本誌創刊以來、その名聲は隆々として旭日の昇るが如く、國内は勿論、海外にも普く知られてゐることは、今更申し上げるまでもない事實であります。母親の懐ろに抱かれた赤ん坊までが、キング、キングと叫んで大人を笑はせてゐる有様です。之れがため各方面の機を見るに敏な商人はいづれもキングといふ名稱を附して、その商賣に資さうとする者が非常に多くなりました。例へばキング白粉、キング石鹸、キング歯磨、等々の化粧品を始め、キング商會、キング社、キング堂、キング吳服店、キングカフエー等の店名に到るまで、殆んど枚擧に遑がない程です。特にキングカフエーの如きは東京市の内外だけでも、優に十數軒の多きに達して居ります。尚甚だしきに到つては、キングといふ藝名を有する藝妓が頗る多いことです。かうなると私達は、たゞ〳〵本誌の普及力がいかに偉大であるかを驚歎せずにはゐられません。

本社代理部の大發展

本社代理部は創始以來十數年の歴史を有し、通信販賣を主とする百貨店として江湖の非常な歡迎を博して居ります。取扱品は各種家庭用品を始め、化粧品、藥品、文房具、樂器、時計、寫眞機、運動具、玩具其の他内地は勿論、歐米

諸國の最新流行品にして、格安にして最も堅實な品物を盡く取揃へてあります。而も如何なる品物でも、最も愼重に、嚴重に、吟味實驗して之れならば必ず各位のお爲になる、お取次ぎしても間違ひないと確信したものの外は絕對に販賣せぬのをその特徴として居ります。くはしくは最近出來のカタログを御覽の上、大小に拘らず御用命下さいますやう御願ひ申上げます。カタログは本社代理部宛御請求になれば無料でお送り申上げます。

大評判の『ムッソリニ傳』

過般、本社より發賣の『ムッソリニ傳』は、素晴らしい人氣を博し、一擧にして出版界空前の大部數を賣盡くし、今尚ほ飛ぶが如き賣行きを示して居ります。何しろムッソリニ氏は人も知る現代稀れに見る英雄的大政治家、その數奇を極めた過去の半生の歷史は小說よりも興味あり、著者澤田謙氏亦政界思想界の新人にして而も屈指の名文家であります。蓋し時節柄、國民必讀の良書として、是非これだけは御一讀をお薦めします。

吉例牛肉會開催

本社發行『雄辯』では、創刊以來毎年『牛肉會』と稱して、都下各大學專門學校雄辯部の委員諸君を招待して、一夕大いに歡談するのを吉例として居ります。今年も先月、東京小石川植物園に於て開催、頗る盛會裡に終始致しました。

『情熱時代』休載につきお斷り

漸く作家の境に入り目下天下讀書界に一大旋風を捲き起しつゝある本篇は、筆者三上先生が御病氣の爲、止むなく本號休載するの已むなき事となりました。勿論近く必ず御全快、次號より直ちに續けられるのみか、捲土重來の勢力を以て一層の御熱筆を振はれ、この埋合せをなさる筈です。何卒御諒恕の上刮目してお待ち下さい。

單行本になった『町の人々』

最近まで本誌に連載され、天下數百萬の愛讀者から熱狂的歡迎をうけた佐々木邦氏の『町の人々』がいよいよ美しい裝をこらした單行本となつて出ました。嘗て愛讀した小說を、かうして美しい單行本になつてから讀み返すのは、更に興味深いものです。御愛讀願ひます。

一寸お願！

教科書の外に適當な課外讀物を與へる必要が痛切に叫ばれるやうになりました。

そこで本誌の愛讀者に御願！　お身内の少女の方で教科書の外に、何か爲になる讀物を與へてゐるかどうか？　それには、理想的の課外讀物として雜誌『少女倶樂部』をお奬め下さることをお願したいのです。『少女倶樂部』は、家庭に於ける立派な課外讀本として、教育者からも、父兄の方々からも、あらゆる階級から盛んに激賞されて居ります。全く『少女倶樂部』は日本で一番評判のよい高級雜誌です。本誌愛讀者の父兄の方々のお身内の少女の皆様へ、課外讀物として、本當に少女の爲になる『少女倶樂部』だけは是非お與へ下さるやう切にお願申上げます。

松村松年博士の快著出づ！

『驚異と神秘の生物界』

趣味と實益を兼ねた稀に見る良書
是非皆樣の御一讀をお奬めします

我國生物學界の第一人者と言へば、誰しも松村松年博士を推すに躊躇しません。博士の、斯學に關する研鑽造詣の深いことは、實に驚嘆すべきもので、今回出版された『驚異と神秘の生物界』の如きも、博士にして始めて成し得たものであります。

私達が、日常何等の興味もなく等閑視してゐる其の邊の鳥獸や、昆蟲の世界にさへも、人間以上の熱烈奔放なる戀がある、或は整然たる社會生活がある。眞面目なる民族問題がある、さうかと思ふと、彼等にも亦堪へ切れぬ煩悶もあれば慘澹たる爭鬪もある。斯の如く究むれば究むる程宇宙の森羅萬象は悉く開かれぬ扉であり、永遠の謎である、汲み盡されぬ驚異と神秘の泉であります。今は春、花笑ひ鳥歌ふの季節でありますが、野の生物界の消息に通曉して居るならば、花の一片、曉鳥の啼聲にも亦格別の味ひがあるのであります。本書は幾多珍奇の實例を以て生物界の諸現象を赤裸々に叙し、加ふるに鮮明な口繪寫眞百十餘枚を入れ、最も面白く、最も分り易い。趣味と實益を兼ねた、稀に見る良書その道の專門家や、學校の先生や、學生は勿論何人も一讀すべき名著であります。切に皆樣の御愛讀をお奬めいたします。

（定價貳圓參拾錢送料拾貳錢　大日本雄辯會講談社發行）

お奬めしたい名著

▲維新風雲回顧錄　伯爵　田中光顯著

著者は、年少にして維新風雲の間に身を投じ、彼の高杉晉作、坂本龍馬、西鄕隆盛、木戶孝允等と共に石火刀杖の巷に疾驅せる大人物。本書は、伯が當時の風雲を回想し、維新回天の事業に參したる重要なる人物の活躍を主として、當年の劇的光景を手にとるやうに物語つた貴い活歷史である。脈々として血管の中を躍動する剛壯の氣力、戰雲濛々たる中にあつて悠然、洒然、且泰然たる國士の風貌は眼前に見る如く、全篇突けば血の出るやうな生々しい事實譚である。切に一讀をお奬めする。（定價貳圓　送料十二錢　大日本雄辯會講談社發行）

▲中道を歩む心　鶴見祐輔先生著

新興日本を代表する世界的新人たる先生が、卓拔なる識見と、深遠なる思想を以て、我國現下の政治、經濟、文藝、思潮、教育、宗教を始め、社會各方面の問題に對して耿々の志を述べたるもの。加ふるに、隨筆あり、紀行あり、傳記ありて眞に朗々誦すべき名文である。

（定價二圓五十錢　送料十四錢　大日本雄辯會講談社發行）

讀者慰安壹萬圓大懸賞當選發表

解答

（一）參拾圓
（二）百圓
（三）フットボール

昨年に引續いて本年も大々的に催したこの大懸賞募集は、今や雜誌界獨歩の大計畫として、滿天下の愛讀者各位から熱狂的大歡迎を受け、内地は勿論滿鮮、支那、各植民地、さては遠く歐米各國からの應募引きも切らず、實に昨年に倍するの大盛況を示しました。其の中から嚴正を極めた抽籤の結果、いよ〳〵左記の通りに決定、賞品はそれ〴〵四月初旬からお送りする筈であります。

特等（一）（新型ラーヂ自轉車）拾名

神奈川縣横濱市石川仲町一ノ一九　森田吉太郎
愛知縣寶飯郡一宮村字長山　富田敏雄
千葉縣長生郡鶴枝村三ケ谷九九七　石丸雋
埼玉縣大里郡太田村（飯塚）一〇一　秋山昇
福島縣耶麻郡喜多方町四七一五　小野賢治
宮城縣名取郡長町鐵道職員合宿所　佐々木久三
岐阜縣大野郡高山町字寳町二四七二ノ一　平塚武一郎
大阪府豐能郡庄内村字島江一〇三　大木榮太郎
三重縣員辨郡神田村大字瀬古泉五　南部光郎
東京市四谷區傳馬町二ノ一七坂本方　淺川錄治

特等（二）（高級ナポレオン蓄音機）廿名

京都府與謝郡府中村字溝尻　村上義男
兵庫縣印南郡西志方村字山中　黑田道夫
新潟縣北蒲原郡京ケ瀬村字京ケ島　小川勘左工武
靜岡縣安倍郡大里村字川端七六一　萩原清
群馬縣新田郡太田町三丁目　竹内さちゑ
栃木縣宇都宮市小幡町一ノ八[illegible]方　堀江實
青森縣[illegible]新町[illegible]なつ方　桂井妙々子
山梨縣北巨摩郡津金村御所二五五三　津金光
長野縣長野市[illegible]一三〇　永井ふく

富山縣中新川郡滑川町下小泉町一九〇登記所内　栗山きみ
奈良縣山邊郡丹波市町字石上　北井辰治郎
廣島縣廣島市播磨屋町二八　松川健治
長崎縣佐世保市成徳町三六　寺師博
熊本縣菊池郡加茂川村二五三二　守田怡一郎
徳島縣麻植郡川田村字町　檜平八郎
福岡縣福岡市東中洲町一ノ四千代本内　南部靜江
北海道十勝國中川郡本別村本別市街　内山則一
茨城縣筑波郡谷田部町一三一峯文方　高野新太郎
山口縣熊毛郡田布施町一〇九　齋村一直
山形縣西村山郡谷地甲一七〇宮方　田原文夫

一等（金側（十八金）腕時計）壹百名

- [illegible]　門脇守正
- [illegible]　川崎一正
- [illegible]　牧山秀憲
- [illegible]　村越忠存
- [illegible]　浦川直樹
- [illegible]　小濵俵一
- [illegible]　藤原太郎
- [illegible]　高田理顕
- [illegible]　李乙剛
- [illegible]　伊藤鉴彌
- [illegible]　清水正三
- [illegible]　一戸龍郎
- [illegible]　宮腰均
- [illegible]　湯葉東茂
- [illegible]　哲原英治
- [illegible]　草野一男
- [illegible]　吉田恒夫
- [illegible]　牟東晴
- [illegible]　平山武美
- [illegible]　山本昇
- [illegible]　宮松都
- [illegible]　流口拾
- [illegible]　今村吉雄
- [illegible]　三好政明
- [illegible]　淵野市
- [illegible]　奥野純次
- [illegible]　阿部篤三
- [illegible]　田部毅子
- [illegible]　川中高鉉子
- [illegible]　河上吉夫
- [illegible]　佐々木春
- [illegible]　山本高子
- [illegible]　近藤緑子
- [illegible]　田中寅治
- [illegible]　黒木房子
- [illegible]　隈光雄
- [illegible]　和泉武男
- [illegible]　河合至
- [illegible]　瀬園重男
- [illegible]　河合洪
- [illegible]　竹内稜子
- [illegible]　濱田長一
- [illegible]　奥井茂
- [illegible]　脇本章
- [illegible]　竹石光男
- [illegible]　安里すえ
- [illegible]　小嶺千代子
- [illegible]　眞野孝子
- [illegible]　馬渡藤昌
- [illegible]　渡邊俊雄
- [illegible]　瀬尾源美
- [illegible]　奥村務
- [illegible]　於保けさ
- [illegible]　廣瀬始
- [illegible]　中島常次
- [illegible]　竹田一志
- [illegible]　長山幸子
- [illegible]　三水鐵起
- [illegible]　武田秀子
- [illegible]　岸本さは
- [illegible]　松本太郎
- [illegible]　中村務夫
- [illegible]　眞鍋武夫
- [illegible]　岡田濤一
- [illegible]　諸越幸三郎
- [illegible]　石田幸吉郎
- [illegible]　末田常雄
- [illegible]　西谷玉代
- [illegible]　香西濤
- [illegible]　赤岩功
- [illegible]　梅北百助
- [illegible]　藤原敬夫
- [illegible]　大隅仙良
- [illegible]　中谷三郎
- [illegible]　泉辰男
- [illegible]　宮崎喜太郎
- [illegible]　岡山四郎
- [illegible]　荻田久馬
- [illegible]　石原文雄
- [illegible]　生水駒吉
- [illegible]　苑原瀬江
- [illegible]　井原正則
- [illegible]　小林市太郎
- [illegible]　旅崎しつえ
- [illegible]　海野貞太郎
- [illegible]　和賀鐵也
- [illegible]　渡邊敏彦
- [illegible]　佐藤さわ子
- [illegible]　清水芳男
- [illegible]　伊藤庄右衛門
- [illegible]　門馬武
- [illegible]　藤井實
- [illegible]　宇都宮吉宗
- [illegible]　高野さわ
- [illegible]　大日向貞雄
- [illegible]　葛野善平次
- [illegible]　齋藤知恵子
- [illegible]　中村義男
- [illegible]　篠田喜惣
- [illegible]　藤田仙太郎

二等（銀側腕時計）貳百名

- [illegible]　井上正直
- [illegible]　青野弘
- [illegible]　河野綠郎
- [illegible]　正田帆火郎
- [illegible]　大瀧秀男
- [illegible]　小太刀禰一
- [illegible]　大想翔美
- [illegible]　小岩嘉郎
- [illegible]　邊岩正義
- [illegible]　松木嶺太郎
- [illegible]　北村武西郎
- [illegible]　長谷川政市
- [illegible]　田邊藤正
- [illegible]　太田貞五郎
- [illegible]　櫻本裕一
- [illegible]　坂本忠一
- [illegible]　中川通太郎
- [illegible]　鎌田隆行
- [illegible]　南熊弘
- [illegible]　木水正夫
- [illegible]　木村英生
- [illegible]　鹽岡英
- [illegible]　相川保男
- [illegible]　服部博
- [illegible]　久保正一
- [illegible]　吉田朗
- [illegible]　宮多豐吉
- [illegible]　西岡武
- [illegible]　茂木勇次
- [illegible]　笠原松二
- [illegible]　高野國夫
- [illegible]　和田良所
- [illegible]　川村新吉
- [illegible]　鎌須賀太節
- [illegible]　和田敏夫
- [illegible]　岡野繁
- [illegible]　草野勤
- [illegible]　藤野勇
- [illegible]　仲佐義夫
- [illegible]　櫻田直喜
- [illegible]　志津賢
- [illegible]　北島博
- [illegible]　日高正敏
- [illegible]　秋田正雄
- [illegible]　室伏芳房
- [illegible]　松田壯治
- [illegible]　原利通
- [illegible]　西村菊雄
- [illegible]　牛井岡之
- [illegible]　鈴木蓮
- [illegible]　吉川ヒサ子
- [illegible]　佐藤三郎
- [illegible]　小原正
- [illegible]　吉本よし子
- [illegible]　増田照
- [illegible]　清水利子
- [illegible]　杉本千鶴榮
- [illegible]　小畑しづえ
- [illegible]　小寺義雄
- [illegible]　小泉三郎
- [illegible]　秋山義雄
- [illegible]　羽恵
- [illegible]　岡田宗一郎
- [illegible]　井上慶治
- [illegible]　岩田七郎
- [illegible]　奥川武郎
- [illegible]　野村政雄
- [illegible]　竹森義則
- [illegible]　太川八太郎
- [illegible]　菊田新一
- [illegible]　岡谷勇
- [illegible]　齋藤留一
- [illegible]　宮下軍治
- [illegible]　服野義一

兵庫縣神戸市西出町一一三 松田信枝
兵庫縣神戸市榮町二丁目五十六番邸 佐治佐和子
神奈川縣鎌倉郡川口村片瀬二二五 飯森芳太郎
神奈川縣横濱市不入斗一二八七高橋方 津志昌平
神奈川縣横濱市久保町寺下一五〇一 小倉文江
愛知縣名古屋市東區石町一ノ一九 鈴木榮吉
愛知縣知多郡大高町八幡一六 山内信吉
新潟縣岩船郡平林村平林八九 遠藤喜代志
新潟縣中頸城郡[illegible]村 山田二郎
新潟市[illegible]夕島 岩淺德一
靜岡縣靜岡市吳服町六丁目 辻陽子
靜岡縣濱松市[illegible]町一一七二 大村十藏
靜岡縣[illegible]郡[illegible]町一三〇 藤代新平
靜岡縣田方郡伊東町松原 芹澤茂
千葉縣佐倉步兵[illegible]聯隊[illegible] 森下信一
千葉縣安房郡天津町天津一八八九 白鳥たけ
埼玉縣比企郡八和田村高谷一三〇六 武井喜久雄
埼玉縣大里郡男沼村字[illegible]六九 石川三十郎
群馬縣前橋市紺屋町三三 峯岸彌生
群馬縣高崎市山田町四五 藤巻利平
茨城縣東茨城郡河和田村一三四 小泉誠道
茨城縣鹿島郡夏海村市ノ澤 米川良一
栃木縣足利郡北郷村月谷二九 堀越たつ子
宇都宮市中河原町三八 岩崎久松
福島縣伊達郡梁川榮町二一 及川榮三郎
福島縣石城郡好間村[illegible]八ノ六 増山謙吉
宮城縣名取郡館腰村植松字[illegible]七六ノ一 阿部文大郎
宮城縣伊具郡角田町七一 加藤幹雄
岩手縣東磐井郡千厩町一一二 吉田源助
岩手縣稗貫郡花巻川口町中小路 高長俊作
岩手縣氣仙郡上有住村八日町 金野隆助
岩手縣和賀郡十二鏑村[illegible]山 菊池九郎
秋田縣[illegible]郡[illegible]町六三 高木とわ子
秋田縣鹿角郡毛馬内町 關正克
秋田縣平鹿郡[illegible]村[illegible]井 大和谷久四郎
秋田縣仙北郡[illegible]町七三〇 小川まさ子
青森縣下北郡川内町川内 川岸達兒
青森縣中津輕郡[illegible]村[illegible]八六 川村きゑ
山形縣東田川郡余目町余目一八 梅木宗治郎
山梨縣甲府市泉町三〇 小林萬壽
山形縣最上郡新庄町十日町一四八 紀伊方
長野縣北佐久郡[illegible]村一七〇二 竹内源四郎
長野縣諏訪郡上諏訪町四七五 兩角露子
富山縣下新川郡[illegible]村四九〇〇 加藤禰二
石川縣江沼郡三谷村字作見 宮口二太郎
石川縣金澤市横安江町九十四 林光子
石川縣石川郡鶴來村[illegible] 徳井外信
石川縣能美郡山上村字下開發 東庄藏
岐阜縣加茂郡坂祝村酒倉六九 渡邊數一
[illegible] 阪野發一

滋賀縣伊香郡木之本町[illegible]九二 美濃部隆雄
滋賀縣[illegible]郡[illegible]町[illegible]七〇七 中田一三
滋賀縣大津市上平藏町 矢野重子
奈良縣高市郡[illegible]村[illegible]三五三 中山清藏
三重縣四日市[illegible]町 桂嶽實
三重縣[illegible]市[illegible]町三五九ノ二 高錫廣吉
福井縣坂井郡[illegible]町七五 松澤あさの
福井縣[illegible]郡[illegible]三島町二ノ一四本村方 濱井孝修
福井縣大野郡大野町 多田富美子
福井縣丹生郡[illegible]村入 西川政治
和歌山縣[illegible]郡[illegible]村字[illegible] 島本一雄
和歌山縣伊都郡[illegible]山村 佐田友雄
和歌山市[illegible]町一八 林はつ子
和歌山縣[illegible]村[illegible]二三〇番 白井愛子
大阪府[illegible]町一一四 美正姫
岡山縣和氣郡伊部町一七九 杉山米子
岡山縣[illegible]郡[illegible]村二九二 横田義久
岡山縣[illegible]郡[illegible]村[illegible]二九五 遠藤滿
廣島縣[illegible]村二一一八 赤井喜市
鳥取縣八頭郡[illegible]村佐貫 平尾民三
鳥取縣[illegible]郡[illegible]村下[illegible] 藤谷一男
鳥取縣[illegible]郡[illegible]村上井二一三 坂本忠治
山口縣[illegible]郡[illegible]町二九四ノ一 長尾漢織
島根縣松江市白潟本町一七四中原書店 宮崎永治
島根縣[illegible]郡[illegible]村奥田 郷原猪助
島根縣邑智郡[illegible]村高見一〇五二 渡邊勝治
鳥取縣米子市[illegible]町二ノ一七五 長谷川迪子
徳島縣名東郡[illegible]村[illegible]ケ島四〇 三好恒子
香川縣丸龜市[illegible]町三三二 堺岩雄
香川縣三豐郡[illegible]下[illegible]間 高島博明
香川縣仲多度郡[illegible]村二六四 關こゆ薫
愛媛縣伊豫郡[illegible]村[illegible]四二七 林内忠き
愛媛縣西宇和郡八幡濱矢野町 池保田千直
愛媛縣[illegible]郡[illegible]村二郷 久田すみ都
高知縣幡多郡江川崎村字江川 黒信子
高知縣高知市小高坂町四八 榮百藏定由
高知縣高岡郡[illegible]ノ内村[illegible]一七〇 五田誠子
長崎縣長崎市平戸小屋五八 森藤兵之
長崎縣[illegible]郡[illegible]村[illegible] 佐本庄男
佐賀市[illegible]内一二 坂毛ふ市
佐賀縣東松浦郡[illegible]木村[illegible] 三田茂き
佐賀縣[illegible]郡[illegible]町 西田とき生
熊本縣[illegible]郡[illegible]村宮山一九二 池木勝子
熊本縣上益城郡[illegible]村七五九 春島成繁
大分縣別府市北町一丁目 永田ゆか春
大分縣大分郡[illegible]大分村[illegible] 梅子
大分縣速見郡[illegible]村[illegible]内 堤宗勳
大分縣北海部郡臼杵町五一七 渡邊榮夫
宮崎縣東臼杵郡[illegible]町[illegible]一番地 成良一
[illegible] 小田區

宮崎縣[illegible]六二六 山本國男
宮崎縣[illegible]郡[illegible]村[illegible]内 黒木千代
鹿兒島縣[illegible]郡[illegible]村[illegible]有島 井之前敷二
鹿兒島縣[illegible]郡[illegible]村[illegible]内 濱崎邦男
鹿兒島縣[illegible]町[illegible]一二三 井上雄正
沖縄縣[illegible]島[illegible]一二八五 保安義
沖縄縣[illegible]町二ノ一二 袋盛英
臺灣[illegible]町六二 永寧之丞
臺南州[illegible]大字[illegible]尾戸 山糸江
臺灣臺北州[illegible]一八三ノ一 嘉敷唯珍
樺太[illegible]郡[illegible]村[illegible] 木達男
樺太[illegible]町[illegible]工業會社 會小三郎
樺太[illegible]一丁目一番地 村助太郎
朝鮮[illegible]町三ノ八 賀井靜子
朝鮮[illegible]五ノ一二 島方子
朝鮮[illegible]山町八 尾さな
朝鮮平壤、大和、一三[illegible]内 石一美
朝鮮京城[illegible] 鐘漢
朝鮮[illegible] 相鶴
南滿洲三十號 野豐雄
上海、北四川路、[illegible]九七九 田弘子
南滿洲、奉天、[illegible]八 川定治
大連市[illegible]町五八 倉文子
福岡縣[illegible]村下郷七三九 野繁雄
福岡縣[illegible]郡[illegible]村下 場茂人
福岡縣久留米市[illegible]株式會社 東市郎

三等(高級スワン萬年筆)五百名

（東京）

一川○一○郎安紫田清き寺○○山沙木郎田朗輔義○
郎友滿○岡○適か六一よ本硬吉貞夫司○和○○雄竹
○一水松井宮七ね藏○子正田田子○○川助瀧日○下
藤○喜永横原郎子○太○藏こ靜○泉宮田○澤比遠政
井吉六初造キ○○稲田吉○の子金秋本裕橋秀野城次
孝村○蔵○ヨ稲田な智澤川○○谷夫與信本男喜富○○○
次郎篠○中子田中千○廣崎竹西貴○四○速○美子島茂小
郎義村水島○茂弘代貫廣良内正美富郎井良木子○田山野
○○照谷曙田○喜内○吉房播子田○川○村○岡秀嘉澤
大吉森政博島○優松○香桂永克石富松井子男孝
阪川○夫○喜小○井藤○治井一藏鶴平郁○○男
藤一谷○荻夫西永良本太○寶○ト○武三金高○
一男田賀原○照井錫常田澤霧林ミ吉鹽○謙橋石
○○論中重香夫正○武と川○發○岡○渡静友原
田島朗定男坂藤○○信賜○く木○陰加○東条相邊子次正
鎗田○大○孝清山中○本紳江忠小○藤巳南三田新○郎也
登益貫郎備家太上井園し保○○收石春野梅○正三仲○○
志夫瑞○酒○郎仙みさづ敏鑿和利田吉廣宗増○郎村野山
雄○二義清野○之ど太糸子野久男震○佐○川電○榮尻崎
○杉耶利○村南助り郎○○正田○崎辻子秋保次賢○シや
石本○藤林傳常○○○池中劉富佐○野○武○好阿伊ヅヘ
崎復西一晋造三後小池田島○市々盛眞蓉次下一網藤ヱ子

（京都）（大阪）

[illegible]

（神奈川）（兵庫）（靜岡）（愛知）（新潟）（群馬）（千葉）（長崎）（栃木）（福岡）（埼玉）（茨城）（奈良）（三重）（島根）（富山）（鳥取）（岡山）（廣島）（山口）

[illegible]

四等（美術花瓶一輪挿）壹千名

【香川】【徳島】【高知】【愛媛】【大分】【山梨】【和歌山】【滋賀】【岐阜】【長野】【宮城】【岩手】【青森】【山形】【福島】【秋田】【石川】【福井】【佐賀】【熊本】【宮崎】【鹿児島】【沖繩】【北海道】【朝鮮】【樺太】【臺灣】【支那】【外國】

【東京】【京都】【大阪】【神奈川】【兵庫】【靜岡】

【新潟】【愛知】【福岡】【千葉】【埼玉】【群馬】【栃木】【茨城】【福島】【宮城】【岩手】【秋田】【青森】【山形】【山梨】【長野】

【富山】【島根】【山口】【鳥取】【廣島】【岡山】【和歌山】【福井】【三重】【奈良】【滋賀】【岐阜】【石川】【徳島】【香川】【高知】【愛媛】【長崎】【佐賀】【熊本】【大分】【宮崎】【鹿児島】【沖繩】【北海道】

五等（參拾錢圖書券）壹萬名

【兵庫】

【長崎】

【新潟】

【埼玉】

【群馬】

【千葉】

【茨城】

【栃木】

【奈良】

【三重】

【愛知】

【秋田】

【福井】

【石川】

【富山】

【鳥取】

【島根】

【岡山】

【山口】

【和歌山】

【香川】

【高知】

【福岡】

【秋田】【福井】【石川】【富山】

【鳥取】【島根】【岡山】

【廣島】【山口】【和歌山】

【徳島】【香川】【愛媛】【高知】【福岡】

【大分】

【佐賀】

【熊本】

【宮崎】

【鹿兒島】

新年號募集 小說筋當て懸賞 當選者發表

曩に、本誌の九大長篇小說筋當て懸賞を募集した處、意外にも愛讀者諸君の絕大なる好評を博し、日々應募狀山積するの大盛觀を呈した。かく本誌の雄篇いづれも、大評判大期待を以て、滿天下に歡迎されつゝあるに今更驚歎し、これ偏に諸君の御聲援に依るものと玆に謹んで感謝する次第である。

多數の應募者中遺憾作ら正解者一名もなく、止むなく正解者に近きものより、左記五百六十一名を當選者に定め、此の度天下に發表するのよろこびを得た譯である。(解答は二月號に明白なれば玆に省略する)

一等 (賞拾圓圖書券) (一名)

北海道常呂郡野付牛町上常呂　三原勝美

二等 (賞五圓圖書券) (十名)

群馬縣吾妻郡草津町宮脇方　森英子
名古屋市中區春日町十九　安藤次男
福島縣伊達郡梁川町字澤　大橋百子
北海道北見國紋別郡中湧別村五〇三　西澤義勇
愛知縣岡崎市六名町　倉林正二
新潟縣南蒲原郡今町字下鍋　石田千秋
長野縣下高井郡中野町小田中小林方　花井たまき
德島縣那賀郡大野村大字下大野字三條　清原武美
佐賀縣佐賀郡鍋島村八戸溝　江原貞雄
奈良縣南葛城郡葛城村大字北窪　植田明男

三等 (賞壹圓圖書券) (五十名)

○若子芳男○宮澤秀男○老田たみ子○渡邊俊嶋○岡根正二○松木英夫○西田保○岡村清○小澤吉之嶋○森長高英○好尾武茂○小見山榮一○森栃高赤○內本政一○木限吉政○鳳集功○野本慶之助○山口富七子○浦茂夜衿板○平渡武男○圓喜忠藤留○今西蓋雄○岩樹增郷○加藤總市○小林靈大郎○奉晃○山關高治○穗谷節武○谷挖二郎○孫田伊佐○霧井孝一○鶴田文吉○榮田長三郎○神谷要杉○吉民德子○折原うた子○秀馬嘉久雄○会澤香龍○矢良金三○吉田越大○宮内節一○三明松一○小島正大○齊井譽吉○寺岡弘一○新谷美子○猪原三夫○青木伊一○尾川定一○清水鳴

四等 (賞五拾錢圖書券) (五百名)

○禮本岩記○福本條南○平智榮○山本一大○藤本尼生○上田保藤○須あ源次郎○中野龍一○長谷川秀雄○定田一大○中野幸雄○秋元誠之助○小林條一○橋澤吉男○宮澤正吉○石戸興作○浦カ松次郎○米村敏宮○佐鶴今市○井上幸一郎○久間常雄○未宮秀大○藝田熊記子○雄野幸義○早雪恒春○林鈴正藤○小倉敏子○西川貴○野村良雄○森安恒一○小林不二人○齋口春子○伊東齋住○小松畔式○福村德八○藤本弘道○鶴川平吉○井口清吉○安藤義司○小塚昇○永美太一郎○田中鴨治郎○齋藤菊西○齊木遠市郎○岩井橋○佐藤靜子○藤原秀雄○小倉岡嶽○中西太郎○原田仙作○松川總雄○安田卓二○長見一郎○中村雄之助○石橋清一○十村勝治○安雄與三松○清喜信治○白澤正美○池田信子○藤原昌剛○齋田フサ○中山○吉○山中榮○川上芳夫○江上賢之○佐々木峯峰○森口義久○村木一郎○中忠道之助○尼崎濟一○高岡賀數○鈴本宗市○加森隆宗○龍田小子○東正町○町垣設雄○鈴木弘○佐今木喜治○小松宗平○太輔昇之○作野正明○藝郎汲○尾利荷南○小林長三郎○榮田とし○岡山榮松○菊地一郎○井川みの子○松本勝見○松木次助○謙藤俊秀○三浦イサ○石田寶作○藤井橋科謡茂○能井鈴穂○英川勝子○林德三郎○吾野春榮○松藤春道○貞以榮○奥田安見子○吉本利大○黒須初元郎○山ロ初子○絃榮近○藤田信米○笠木三郎○佐藤守○森下和儀○柏フサ子○彰山幸子○清邊正茂○角田名一○前川本三郎○幹保引○栗鏡崎利大○中島鈴山○藤生時延○伊原他美雄○相原政一○安部橋○宮川源治○橋井鉦市○林原子惠子○林千春○松岡安吉○横川吉男○田瀬忠大○井岡征三○透淺久右富門○秋山せき子○富岡伊三美○錦野宮三○清平松子○島神森東郎○山下茂○西村飽平○岡村樹○邊邊かへ○伊藤伊三郎○藤本みり○石川次卓○田村郎郎○中村太郎○梅田忠助○樹原一治○小栗鈴一郎○野見山光雄○石川金市○岡田牛四郎○德龍安治○村上安子○余吾虎○青造茂德○田中忠雄○齋藤タマ子○遠藤進吾○後藤榮吉島岡正盛○宮山村子○鶴田藤野○吉田秋男○宮本二郎○大野養光○北原次三○中西初○奥野泰雄○青木保之豕○大原徹○森野寶○宮地芳榮○中招兵三○吉川義光○高橋信市○坂牧軍治○仲田作治○笹原吉太郎○中村市○藤茂○水谷光峰○山本雄雄○

桑田四朗○竹田尺一○永村ヨシ子○大聚雅夫○今野忠○津川鋼八○蜂谷浩○豐澤要讓○浦野龍雄○在原千秋○内山健治○中村光堤○高野喜與治○根岸廷知○村井鶴次○品川村○相良喜佐市○手藤晋藤○曾藤力○山口壽○佐藤和子○阿部濟○山下豐助○松井晴一鈴○高橋昇治○峰井正一○家村晴一○定田四郎○内貫晋永○佐瀬良助○菊地昭松○陳場武○參子信雄○高田忠治○岡利子○雄上辰夫○今井輝久鎖○武田後子○水戸郎有治○滝志岩男○儀儀知巳○三宅修一○津下雙競○佐○鋒○大矢野良藏○大道岩雄○大津恐作○青木庄助○恐田節夫○鶴正太郎○諸倉貫一郎○富○健治○船井十郎○小澤いづみ○金井可賀○中村春人○藤原岡孝○橋近秀峰○吉田トシエ○藤本延一郎○吉澤東利○藍原秀男○高橋藤十○西村ヤヨヒ○齋藤啟英○竟谷幸子○國根廣治○永井俊行○妹尾宰史○村上若苗○未武閑之助○林俊治○中村弘○赤坂正行○精盛學○山口ちよゑ○服部幸一○小澤梅太郎○西村ミチエ○澁忠之○倉橋強代治○齋藤充○飯塚齋次○尾地保夫○林緣○米谷貞男○藤田米五○渡淺佐一○山崎充一○井上欣二○中山春子○綱川榮作○篤谷定堀○國料德次○平田猛○山口澁子○和田政市○辻信治○田中武雄○八木賢次○本宥象次郎○石井虎一○西村辰夫○吉野榮一○河野正之○小林橋子○黑田德泉○松永誠二○里之樹榮之助○野村武男○石上俊夫○北村宮之勤○鎗田彦一○阿郷幸男○谷川米吉○三橋岡二○西川和作○稻田際信○望川春男○山崎春男○井關公○高橋久吉○三輪審惠○吹山健○矢島雅七○隱成清治○小谷善吉○井澤信○植山一○稲山文平○田中良二○近藤文斉○田島榮○前田泰青○赤木忠治○池松嘉司○木楠勇敏○中川米太郎○木下寛○大藏喜三郎○秀田照夫○太慶一一○大木信男○日下部茂○井阪竹之丞○富田直英○石田寶○梅澤千代松○西湖重吉○山本清○中野利藏○青野一政○大角明子○森律治郎○辻保雄○岸仁○官野宇吉○清野武雄○加藤作次○彦本大治○布施伊太郎○中川城住○早水幸一○庄司義大○久保田市郎○木村養一○坂榮吉○吉引由平○石櫻忠治○富安先雄○東野みどり○然野稔三郎○成田松男○堤雅男○長谷川義彦○市福道○谷口茂○仕川一一○根岸榮治○陶山定喜○小平岳人○夏島英次郎○伊藤哲美○金子ふきこ○池谷利治○鈴木英一○木村原國○谷藤喜八○奥山虎太郎○小介英雄○松井泉三郎○中村伊○加藤政子○山之內福一○濱子能一○吉田靈治○河合三宮○中島幸三郎○松本治雄○近藤　傳○上村久信○伊當梅州○山本孝一○今泉政峰○笠井隆雄○北川賀○尾原武夫○馬岩伴嶽○庄司定次郎○積山信治○鈴木春野○土橋腐三郎○横田岩一○義遂秀治○莊田九一○都野川清友○大倉孝六○築田未發雄○池田合藏○浩根一郎○石倉義清○寺澤岳男○菱田次郎○植野肉之助○硯原六藏○高倉拾三郎○大根利一○堤滿○齋野茂生○入江さが子○勝本梅吉○石川心米○秘積三樹○前田正雄○西恋戸森次○林熊三○水野鐘三郎○池田トミ○滋野正市○依川信一○田中騰之助○大和久乕雄○加藤滿男○上杉茂善○林ふみ子○宇實村鶴○吉田吉松○日澤春巳○是枝武夫○大山網則○大穂源太郎○岡木安民○花村英專○菊地庄藏○西山武嶋○奥野金三○宮本高三郎○北垣一富○棧口卯太郎○波多野金雄○稻澤一夫○納山幸二○松尾阜一○水野澄○鹽田利彦○佐藤道利○武藍藍○加藤良太郎○岡和田芳茂○阿部泰一郎○宮城清夫○小谷英一郎○菊地參太郎○前馬小一郎○佐々木田治○納岡實利○若杉庄吉○有倉悦三○中川市太郎○八木富二郎○島田光榮○山本定一○宮臨義一○田中錦穂○木村原三○小野ハルイ○小林貫○櫻摩喜代治○森開塩○東海長次○清田長次郎○伊藤千尋○谷武夫○政中重行○知念將正○中島晃○長澤麗治○岩峰明肖○戸川正○藤田正夫○叡島美代詩○湯島梅吉○渡邊正利○青柳豹村○山田讃二○上田タヶ子○高木光雄○石井辰三○谷田純○卯藤德太郎○藤田五平○吉住伊助○小林小太郎○持井昌德○山王源藏○山内芳男○中村宏○松井嶽○長井利助○岩城庄太郎

全國各地事實美談



此の中の美談の人々――1 誠信館の六少年。2 六十五號の鳩。3 瀧田二等卒。4 坪田利吉氏。5 高橋訥徳の母。6 加藤大將。7 [illegible]三さん。8 村田千代野女史。9 保田廣吉氏。10 金岡助九郎氏。11 大隈重信。12 高瀬瀞一氏。13 代田信一君。

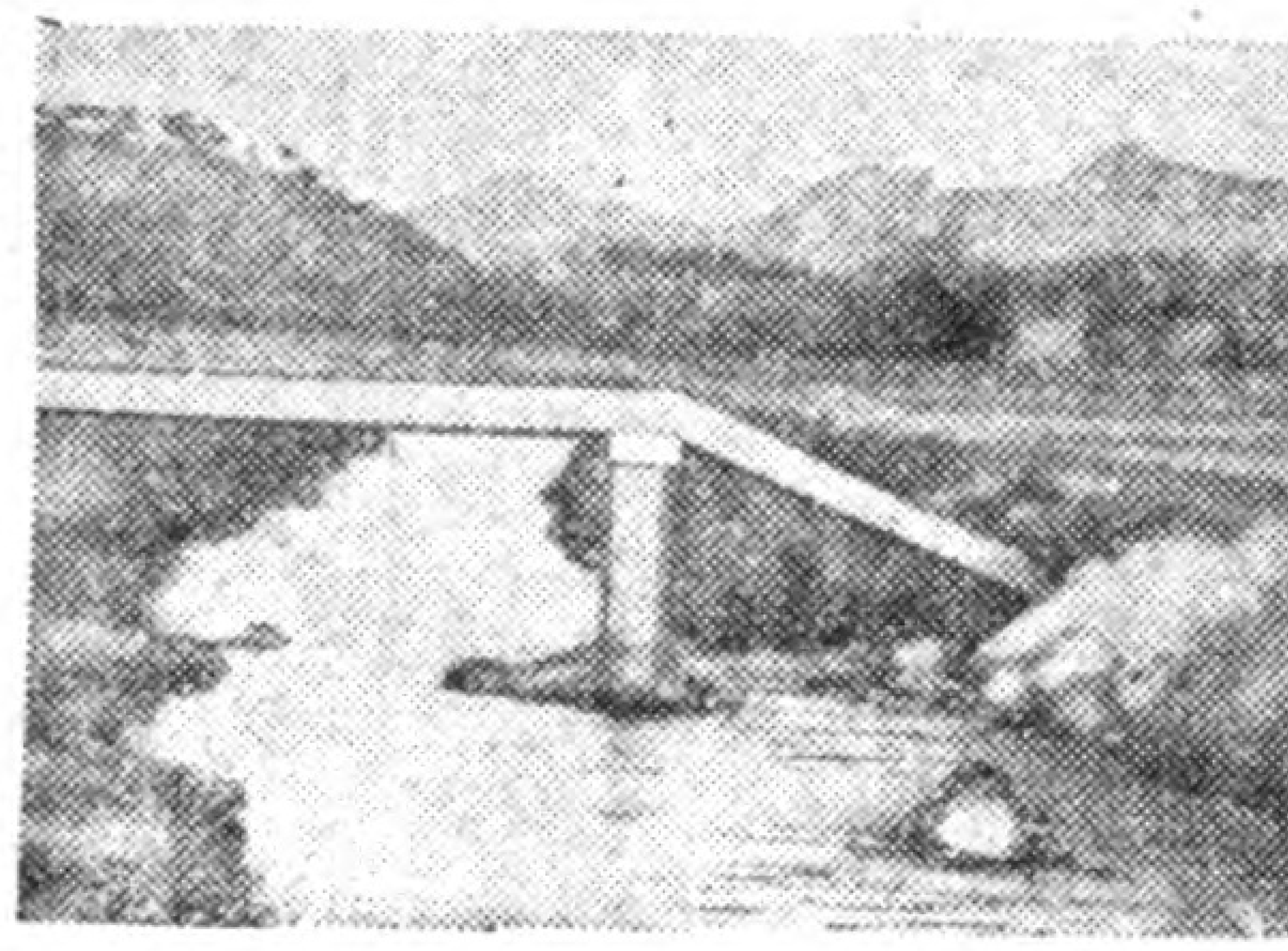
欺した、奪つた、殺した、殺した――荒びゆく世の相。我等はもうその煩に堪へない。何だか人間であることが恥かしくさへ感ぜられる。我等は人の魂の美しさを見たい、人間の尊さを知りたい、そして我自らの光を認めたい。而も遠い昔の事でなくて、我等と同じ世に住む同胞の生きた事實に於てそれを知りたい。事實は何よりも力である。

この意味に於て、各地の新聞記者諸君が、責任を以て自ら探訪し自ら實驗せられた僞も飾もない、現前のあるがまゝなる此の事實美談が、いかに切實なる刺戟と感動とを、わが百萬讀者諸君に寄與することであらう。正しくこれ人間の『偉大』が築き上げたる金字塔、『人性』が燃やす炬火である。これを仰ぎこれに照さることによつて、我等は始めて光明に生きることが出來る。謹しんで味讀を乞ふ。

—まごころ橋—

眞情橋

海南新報記者　渡邊種義



六少年の純情

大正十二年七月のはじめ、愛媛縣下では折柄の豪雨のために河水が氾濫し、どこもこゝも大洪水で、田といふ田は殆ど泥海となつた。この時、松山市を距る一里餘りの西北、市の下水をうけてゐる味生村の津田川は、東と西との兩部落を通ずる石橋が損じて、通行の困難を來たした。

この川は、ずつと以前は二間ぐらゐの灌漑水路に過ぎなかつたが、大正九年、松山市に下水道を敷設した時、幅員を四間に擴張し、護岸の高さを六尺に改修した。もとこゝには味生村大字南齊院の西側から、同北齊院への通路のため、丸太材で假橋を架けてゐたのであるが、下水工事の際、松山市が川の中央に橋脚を築造し、これに幅一尺四五寸の花崗石二個を架けて石橋を造つたものである。

この工事が不完全であつた爲に、七月の出水の際、北岸の橋臺が決潰し、北半分の石桁が墜落した結果、子供は腹ん這ひになつて渡り、荷物のあるものは半荷づつ運ぶといふ有様で、勿論老人や幼兒は迂回して危險を避け、不便この上もなかつた。と云つて、村でそれを修復するではなし、約半歳に亙つて、人々は口小言こそいへ、誰先んじてこれを直さうとするものもなかつた。

朝な夕なに、こゝを通つて學校へゆく子供達には、かうして壞れたまゝに不便を忍んで放置する大人のこゝろが不思議でならなかつた。それはある正月の日のことであつた。南齊院の少年一色忠德君（十六）が學校から歸りに、こゝへ通りかゝると、この橋の眞中に、六つ位の幼兒が泣きながら立往生をしてゐるのを見て驚いた。

『ぢつとしておいで。今渡して上げるよ。危いから動くんぢやないよ』

さう云ひながら、荷物をそこへ置くと、忠德君は飛んで行つて、幼兒を兩手に抱へながら向岸へと渡してやつた。落ちたら最後、泥鼠になるのはまだしも、生命さへ危いのだ。今迄にも

忠徳君は通學の途次、女の子や年下の生徒達を、かうして渡してやつた事は、幾度だつたか知れない。だが、今日ばかりは、ほんとに危い事だと、つくづく思はずにはゐられなかつた。『さうだ、これはこのまゝにしては置かれない。よし！僕達が一つ直してやらう』

さう思ひついた忠徳君は、家へ歸ると早速附近の學友達に圖つた。

『うん、贊成だ』

『さうだ、皆でやらう』

さう云つて、即座に贊成したのは、一色常光君（高一）玉御勇君（高一）山之内巖君（尋五）一色武行君（尋五）一色清君（尋五）の五人であつた。

雪中の難事業

一月十四日午前四時——といへば、まだ流石に朝の早い百姓家でも起きてはゐなかつた。その人の顔さへ判らない闇の中を、手に手にシャベルやジョウレンを提げて、勇ましく野道を急ぐ六人の少年があつた。石槌颪の冷い風は、肌をつんざくかと思はれたが、少年達は物ともせず、ザクリ〳〵と霜を踏んで石橋の下に集つた。

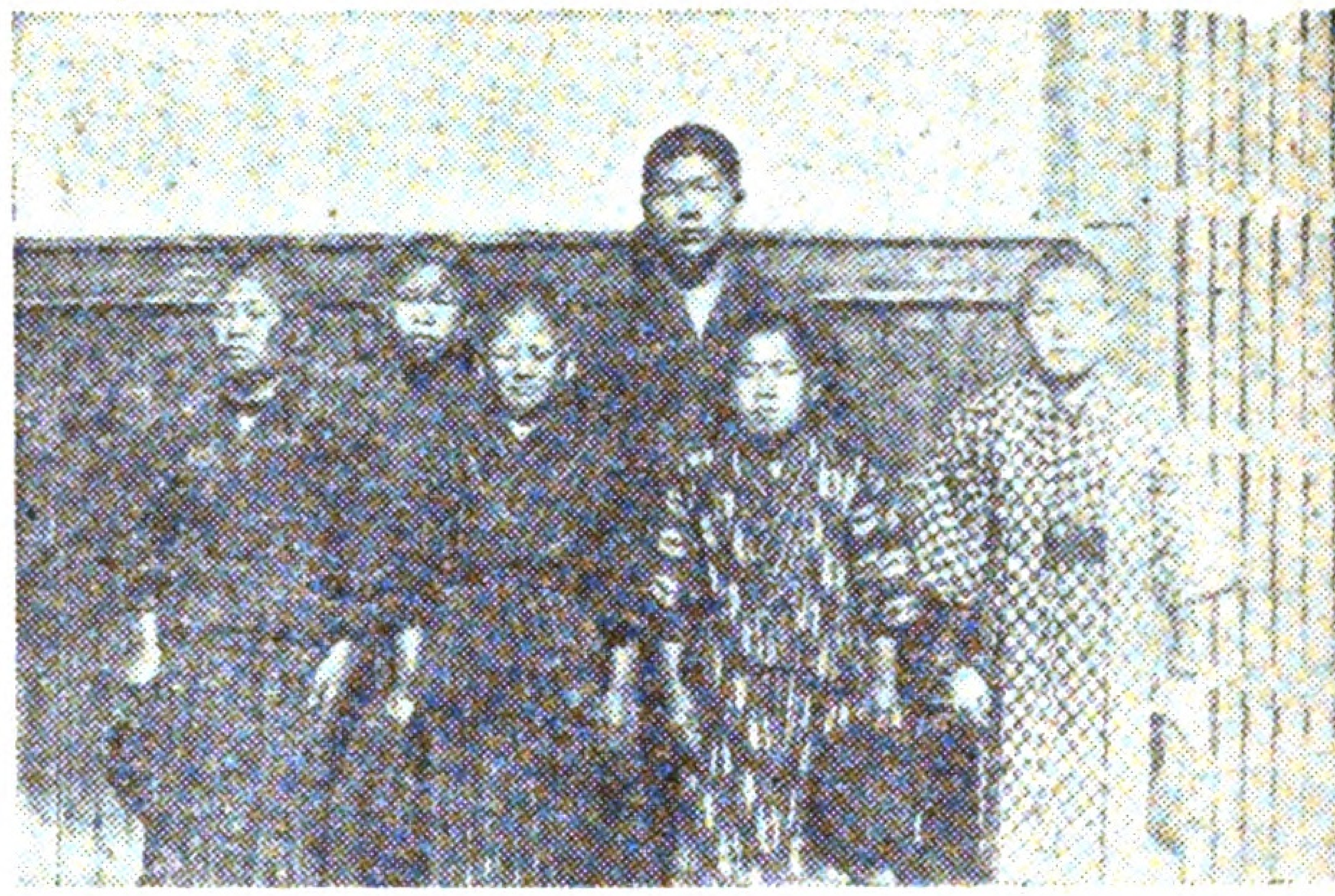


『まづ護岸の洞穴を直してからだ』

六人は一齊に作業にかゝつた。かうして少年達は八時の登校時間までを夢中になつて働いた。さうして二日目には、早くも護岸の洞穴を修復することが出來た。いよ〳〵三日目には、各自が土俵を持寄つて、橋の傾斜を修繕する事になつたが、折柄の降雨は、雪と變じ、凜烈たる寒氣の上に、チラツク雪に作業もなか〳〵容易でなかつた。それに水溜りなどが氷結してゐて、うつかりすると足を踏み辷らして、油斷も何も出來なかつた。それは眞に少年達にとつて、難事業中の難事業であつたに相違ない。

朝四時から八時迄——この四時間が、何といふ尊い時間であつたらう。泥にまみれ、ひゞを切らし、血さへも所々に滲み出した。かうした可憐な勞苦と努力とは、さすがに酬いられて、六日目にはやうやくさしもの難事業も竣工を告げ、『出來た、出來た』と、六人の少年達は手を叩いて喜んだ。崩壞してから七ケ月、やつと杜絶してゐた交通は完全に回復したのである。

——村の人達は流石に驚いた。



味生村では、大正十三年二月十日、村會を召集して、一色忠德君外五名の少年を表彰し、同時にこの石橋を『眞情橋』と名づけ、六少年の純情を永久に記念することゝなつた。そして翌二月十一日の佳節をトし、知名の官民多數參列の下に、榮ある表彰狀と賞品とは彼等六少年に授與された。更に縣視學から、はては文部省から、彼等の善行は彌が上にも表彰され、全國にまで喧傳さるゝに至つたのである。

向つて右から　山之内巖　一色武行
一色忠德　一色常光　一色清　玉柳勇

偉大なる感化

——これだけの事實は、既に新聞や雜誌で多くの人々の知る所である。併し筆者が特にこれをこゝに言はんとするは、この少年達の純情が彼等の周圍に及ぼした感化である。

由來、この石橋は北齊院地內にあるので、この石橋が破損した際、南齊院では當然これは北齊院が修繕すべきものであるとなして之を顧みず、北齊院ではまたこれは下水工事の際、松山市の工事が不完全であつたのに基因するのだから、松山市が修繕すべきであるとて、放置し、味生村當局も持てあまし、再三松山市に交涉したが、松山市も亦契約外だとて應ぜず、遂に荏苒半歳に至つて、交通の支障を頓着しなかつたものである。

ところが、一朝目のあたり少年の純情による修復工事の竣成を見せられた村人達は、愕然として夢からでもさめたものゝ如くに目をみはつた。少年達の眞情に對して、自分達の醜い啀み合ひの、いかに物はづかしかつたことか。彼等は今更に自分達の行爲を反省して、美しい少年達の前に恥ぢた。さうして今迄の長い間の鬪爭をこゝにサラリと水に流す心になつた。かうして、長年何かにつけて、兎角問題を惹き起しつゝあつた味生村は、今や昔日の觀を改め、模範村とまでならうとしてゐる。

『負うた子に教へられ——』彼等は正に少年達に教へられたのではないか。一昨年の水害で、この橋は再び破損したが、今、同村の靑年團員は總出で、この記念すべき『眞情橋』を永久に保存すべく、奉仕的の大石橋に改修してゐるといふ。

加之、この事實は、隣邦支那の小國民の教材となり、その第三學年用の修身教科書第十五課に『合力作事』と題して、遠く海外にまでその德を及ぼしてゐる——。(完)



恩典取消の請願

秋田魁新報記者 洞城利喜

一

除隊の日も間近に迫つた十一月二十九日（大正十四年）の午さがり、外は除隊の喜びに將卒悉くさんざめいてゐた弘前野砲兵第八聯隊――その第七中隊の班長室の板の間にひざまづき、涙にぬれて何事か班長に訴ふる一兵卒があつた。

『班長殿。特務曹長殿はじめ聯隊長殿まで、このはしたない私に、御同情下されて、めつたに得られぬ一年歸休の恩典を下されるといふ、誠に有難う御座います、有難う御座います。が其の有難い御情で、どうぞ此の私のお願ひをお聽き屆け下さるやう――もう一年御奉公させて下さるやう。班長殿、お願ひでございます』

言ふは、初年兵瀧田岩太郎（二一）である。

『冗談で言ふのぢやないよ。全聯隊でわづかに二人の歸休だ。それに選拔されるといふ事は、お前一身の名譽と幸福ばかりぢやない、中隊の名譽だ、班の光榮だ。それに特務曹長殿も中隊長殿も、よくお前の家の事情を知られて居つて、一方ならぬ御同情の結果である。それをお前が、うけて呉れぬとは……』

言ひつゝ班長も遂に涙ぐんで聲をふるはした。

一年歸休は涙なくしてお受け出來ない恩命ではあるが、此の自分はそれを受け得ない、どうにかしてもう一年の御奉公をと願ふ瀧田と、

『その心はよく判る。今の其の心がお前の一生涯を光輝あらしめる尊いものだ。其の心を以て郷里に歸り、老いたる母に孝養をつくし、幼い弟妹をいたはる事こそ、忠臣孝子の道である』

と說く班長。正しく一場の劇的場面である。

兩人はしばし無言であつたが、やがて瀧田は涙をはらひ、

『私の斯くまでお願ひしまするには、一つの事情があります聞いて下さい』

と語る言葉は涙にぬれて一入の感慨を誘うた。

二

瀧田が前年徴兵檢査に出る時であつた。父は病床に臥しながら、『必ず甲種合格して來いよ』と、その聲もおろ〳〵してゐたが、首尾よく甲種合格して歸ると、父は『よし〳〵でかした

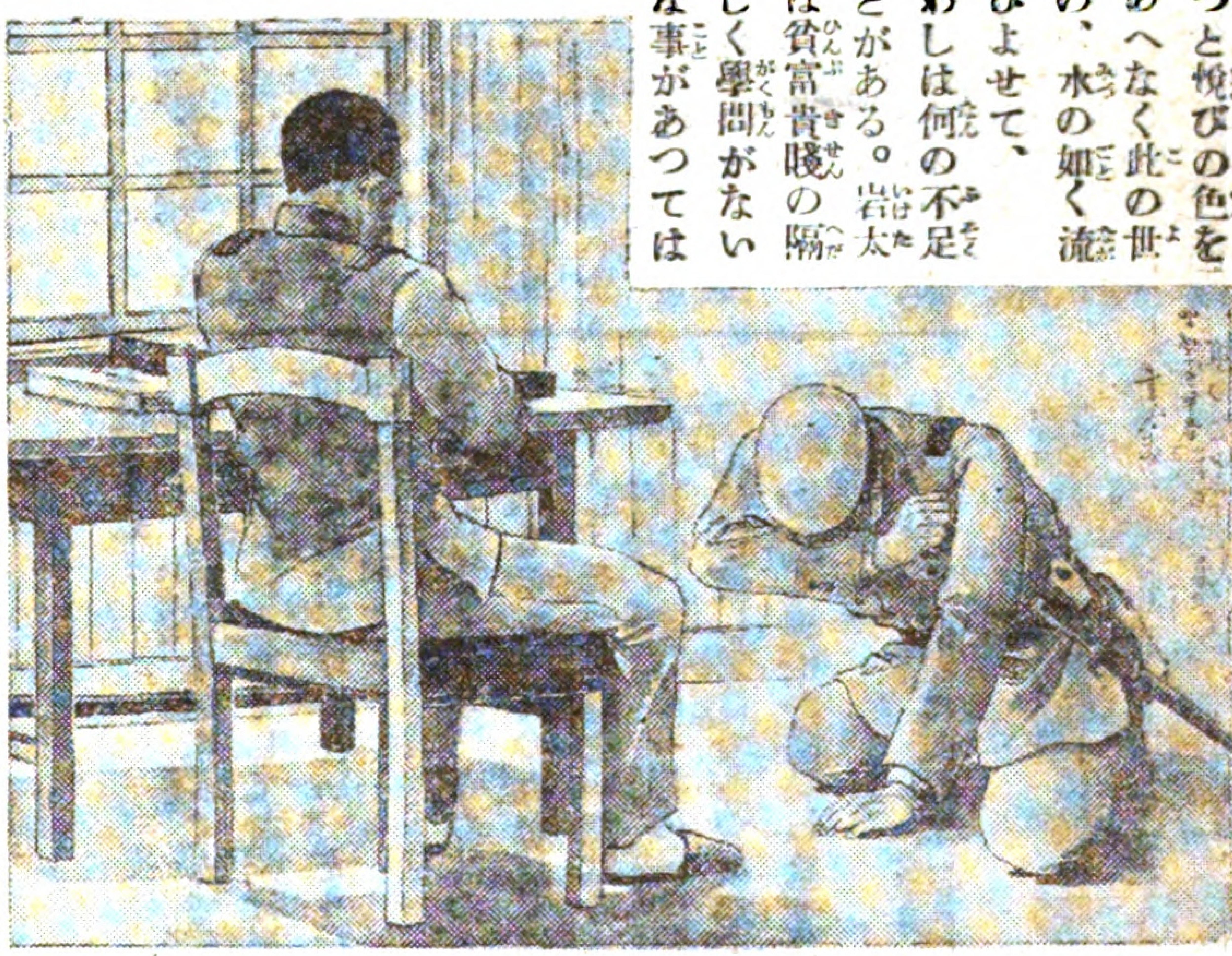
でかした』と、病にやつれた青い頰に、さつと悅びの色を浮べた。併し不幸にもその年の九月、父はあへなく此の世を去つた――其の二日前、十五夜の月の光の、水の如く流れ込む病の床に、父は母と瀧田を枕邊に呼びよせて、『不自由のなかにも心盡しの看病をうけ、わしは何の不足もなく死んで行ける。が唯一つ言ひ遺すことがある。岩太郎も來年は入營するであらうが、御奉公には貧富貴賤の隔てはない。智慧や學問の境もない。家が貧しく學問がないために、御奉公が足りないと言はれるやうな事があつてはならぬぞ。リンも此の貧乏の中に、三人の子供をかかへて二年の留守は、隨分苦勞もあらうと思ふが、天道樣は人間を干乾しにはなさらぬ。立派に二年の御奉公を果たさして呉れ。明日とも知らぬ命ではあるが、此の心だけは殘して行きたい』

とやつれた中に微笑した父の顏が忘れられなかつた。一年歸休の御情は有難いけれど、それでは御奉公が半分しか出來ない。父の貧乏故に御奉公が足りぬとあつては、父の遺言に對して相濟まない。草葉の陰からながめてゐる父を想ふと、瀧田の心は斷ち切られる樣に苦しい。

それは瀧田の心のみではない。家鄉の母は村でせつせと働らいて、軍事救護の恩典も受け、二人の弟妹を養ひ、どうにかからにか家の煙をたてゝゐて呉れる。それもひたすら我が子岩太郎に滿足な御奉公がさせたいからではないか。現に昨日も岩太郎に手紙をよこして、

『此の一年は修業の一年、あと一年が本當の御奉公ぢや。みつちり勤めてお呉れ』

と甲斐々々しい激勵を與へてゐるのだ。瀧田は此の母の心も察して貰ひたかつた。一年歸休で歸つたとあつては、その母までが意氣地ない母になつてしまふ。此の切々の父の遺言、母の激勵に報ゆることが、瀧田には唯一の孝であり且つ忠であると思はれた。



三

瀧田の述懐は、言々句々、肺腑より迸り出る寶玉かとも見られた。聞き終つた班長は始めて我にかへり、はつたと膝頭を叩いて、

『あつぱれな心底、よく判つた。歸れ、俺は命令の出ぬ前に、

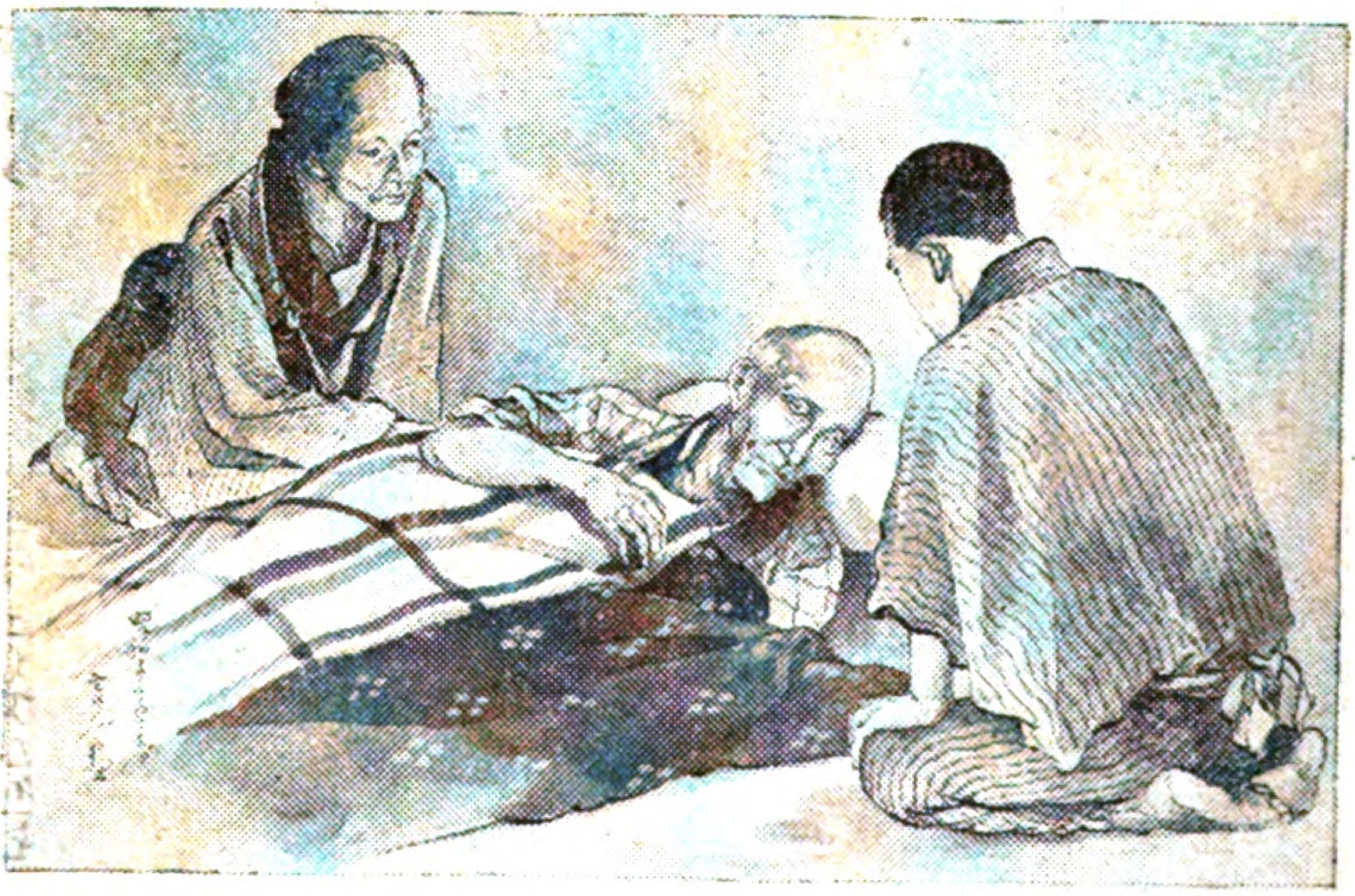
「此の旨隊長に言上する」と涙を拭うて班長室を飛び出した。

斯くて同日の午后四時、瀧田は聯隊長の面前で、涙あるとりなしにより、一年歸休を取消されたのである。

× ×

後、この事が第八師團團隊長會議の話題にのぼり、團隊長一同からその家郷の母に金一封が贈られた。第十六旅團長井染少將は彼れのために長篇の詩を詠じ、自ら師團管下の各隊へ配布した。その一節、

郷に響く譽れの鑑、



仰げよ、承けよ、承けよ、傳へよ、
さもあらばあれ村に留守もる老の母、
出でし國もる忠臣孝子、
神や護らん、幸や多かれ、
あな雄々し出羽のますら夫、
瀧田の里の雄々しますら夫。

瀧田君太郎君は秋田縣河邊郡瀧田村の出身であつた。

× × ×

想ひ見よ、世には軍隊を忌避する意氣地なし、人でなしもないではない。脱營、自殺、さうした不心得者さへある中に、瀧田君の如きは又何といふ芳しの花か、まさしく日本精神が大和の東風にパツと開いた萬朶の櫻！ それでなくて何であらう。

近代世界十傑

——彼等が出世の物語と大繪卷——

(米) カーネギー　(英) ウイリアム・ブース
(英) ノースクリフ　(土) ケマルパシヤ
(佛) クレマンソー　(獨) ヒンデンブルグ
(米) エヂソン　(支) 孫逸仙
(伊) ムツソリニ　(獨) マルクス

以上は何れも近代世界が生んだ不世出の大英傑である。轗軻極まりなき彼等が出世の經路が如何に興味深きものであるか、而してどれだけ後人に教へる所が大きいか、其等は誰もが知り度く望んで居る所であらう。雜誌現代四月號に掲げられた、文壇畫壇の第一人者が腕を揮つた此等十大英傑の一大畫傳こそ雜誌界の大收穫である。

萬納屋のリキさん

中國民報記者　山本樵


坪田利吉氏

◇千ヶ寺詣り

荷車に籠や箒の臺所用具、その他の日用品をごた〳〵と積んで、風の日も雨の夜も、岡山の市街を縫ふ樣に行商する朴訥そのものゝ樣なをぢさん、それは通稱萬納屋のリキさんである。

リキさんは朝から晚まで身を粉に碎いて働く。さうして得た僅かばかりの儲けは、實に血と汗の結晶である。そんなに稼いでどうするかといへば、リキさんは定つて斯ういふ『人さまのお喜びになるやうな事に使ひたい』と。人さまのお喜びになるやうな事とは、卽ち社會奉仕だ。リキさんはそれを實行してゐる。然り三十年來實行してゐる。

萬納屋リキさんとは坪田利吉君のことだ。備後府中の生れで、三歲の時、實父に死別れて里子にやられたのが、そもそも奇しき生ひ立ちの初めである。それから義理の父と母に虐待されし通て、八歲の春には、破れ繻絆一枚で家を飛び出し、千ヶ寺參りの旅にと出たもんだ。誠に天涯の孤客、團扇太鼓に珠數一聯、お題目を力に放浪の旅をつゞけて成人し、廿一歲にして初めて岡山に落ついた。この時には自然に培はれた尊い經驗から、もう固い信仰を持つやうになつてゐた。

妻を迎へて家庭を作り、毎日行商をして居る内に、又大きな負擔が加はつた。それは煙草切り職人であつた妻の父が、專賣制度の實施と共に職を失ひ、五人の家族をつれて居候に來たのである。リキさんは、この頃では幾らか商賣のコツも分り、得意も殖えてはゐたが、何を云つても二錢三錢の細かい商賣だ、六人の扶養は勿論樂なものではなかつた。

併しさうした困難も、あはれな人に對するリキさんの同情をどうすることも出來なかつた。リキさんは先づ自分が嘗て舐めた苦い經驗から、千ヶ寺參りを無料で泊めてやることを始めた。それは明治三十八年、リキさん三十六才の時だ。やがて船頭町と小原町の二ヶ所に無料宿泊所を建てた。それからまる三年に亙つて貧しい旅の人を助けて來た。

ところが世の中は樣々で、この血の出る樣な事業を喰ひ物に

する筆があつて、無料宿泊所をねぐらに泥棒を働いたり、賭博をやつたりするうつけ者が續出した。折角の情も空なしにされるのでリキさんは新らしい奉仕の手段を案出せねばならなかつた。

◇傘と橋の功德

『學校の生徒さん達が思ひがけなく雨に逢うてびしよ濡れになつて歸る、まことにお可哀さうだ。一つ、傘を寄附させて貰はう』

リキさんはそこに思ひついた。それからといふもの、市内全部の小學校、中等學校、神社佛閣へ、餘裕の出來ただけづつ傘にかへて寄贈した。その數實に二千二百本。けれどもこれもうまく行かなかつた。『濟す時の閻魔顔』で、リキさんが骨身を砕いて寄附した傘も、一日借りると返すことを忘れる不心得者がだん〳〵多くなつて來た。そこで又復リキさんの奉仕事業も一變せねばならなくなつた。なんと奉仕と云ふことの難しいものよ。折角の心血を濺いでの仕事が、却つて人間の懶惰や放逸を助長するやうな結果にならうとは……



だがそんな事で奉仕をやめるリキさんではなかつた。果然、別な方面にその仕事を見つけだした。

それは橋を架けることであつた。岡山市内を貫流する西川には橋がないために、どんなに人々が不便を感じることか知れない。リキさんはこれに目をつけたのである。

『それにしても架けた橋が朽ちて又架けかへねばならぬ様では、却つて人に迷惑を及ぼすわけだ、費用は高くついても全部石橋にしよう』

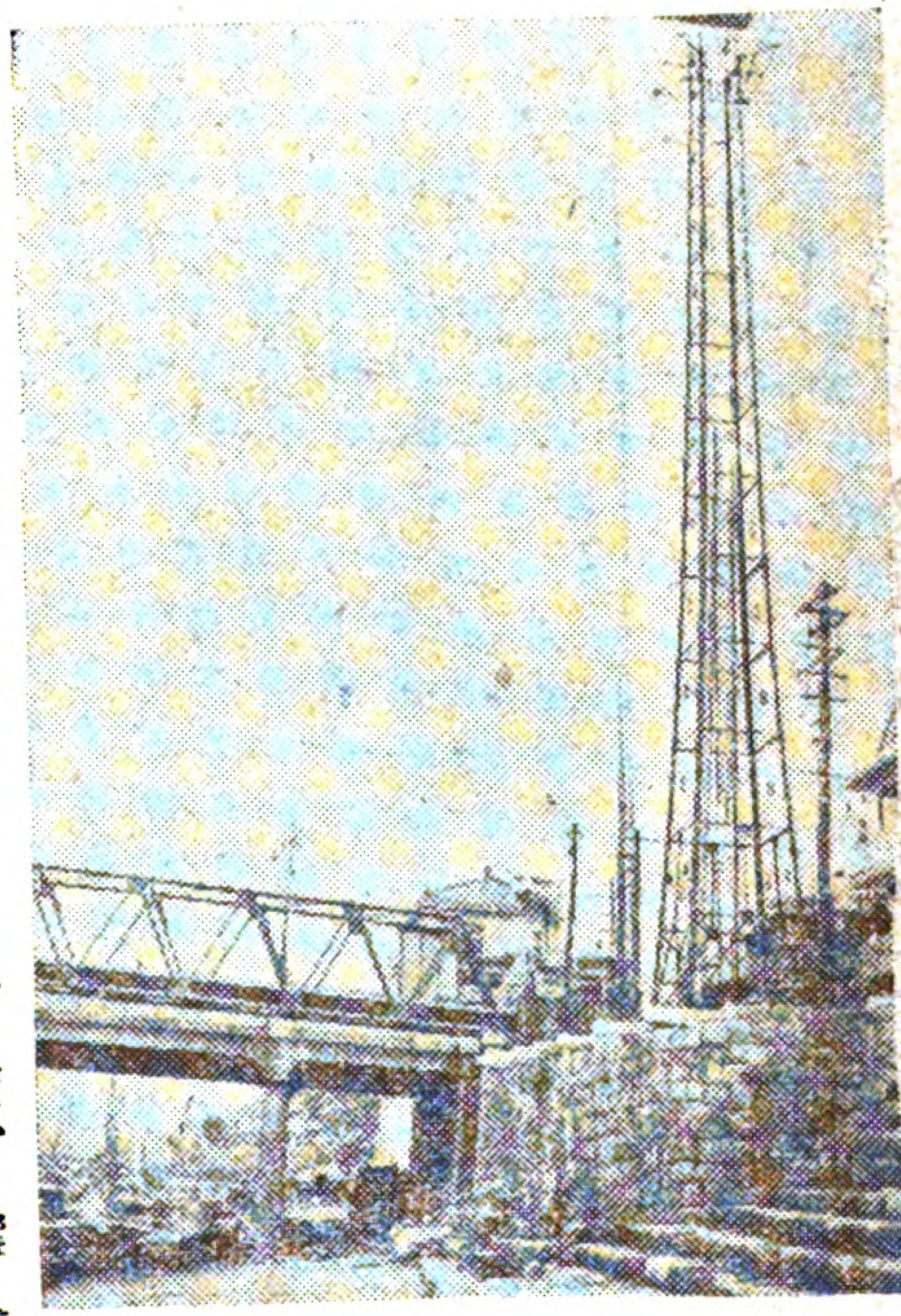
明治四十年から大正七年までの間に、第一萬納屋橋から第三萬納屋橋まで、千圓近い金を投じて架橋を終つた。併しこれは決して樂な財布から出たのではなかつた。その間に妻の兩親は病死し、嫁に行つた娘は幼い子を三人もつれて出戻つて來る、と間もなく赤ん坊を殘して死ぬなど、不遇な運命は絶え間なくリキさんを脅やかした。だが困難が加はれば加はる程リキさんの元氣も加はつた。

◇火見櫓を見上げて

架橋の方が一寸片付いたので、リキさんは頻りに貯金を勵んで、次の事業を考へてゐた。その内に今迄よりも社會的により重大な新事業が頭に浮んで來た。それは、とある市内の火見櫓を見上げた時であつた――

『うん、さうだ。あれを鐵骨にさして貰はう。どこだつて大都會へ往けば、火見櫓は皆鐵骨だ。あんた舊式の丸太梯子なんてありやしない。舊式も結構だが、十年二十年たつ内には腐朽つて來る。それに第一、丸太では高さが出來ない。もつと高く一目で市内が見渡されるやうに、そして腐朽らないものにするには鐵骨に限る――市内の火見櫓を全部鐵骨にさして貰はう。さうだ、俺の仕事はそこにある。有難い有難い』

リキさんは、間もなくその手始めとして、專賣局前と東警察署前とに二つを造り上げた。これが大正十一年のこと。扨出來上つて見ると實にスバらしく見事なもんだ。丸太の梯子では滿足に行つても二十年位しか保たぬが、これなら百年や百五十年はビクツともしない。向よりどんな奉仕をしようとも、何等の報酬など豫期しないリキさんではあるが、今までの仕事が地味であつただけ、この火の見櫓の出來映えには會心の悦びが湧き出ずにはおかなかつた。


――岡山京橋西詰の大鐵塔――

『これなら惡用される心配はない。そして永久的だ。まだ岡山には建てなければならぬ處が澤山ある。この事業に是れからの生涯を捧げよう』

雄々しくもさう決心したリキさんはその後お得意の多い七日市に二ケ所建てた。續いて岡山の中心である京橋西詰に、千五百圓を投じて全市を一目に見渡し得る大鐵塔を築き上げた。又近く岡山驛前にも建設の運びに至るであらう。否リキさんの生命のつゞく限り、この仕事は續けられるであらう。

◇夜業時間を延して

せい〲一品三錢か五錢かの純益を積みに積んで、うまい物一つ食ふでなく朝から晩まで眞黑になつて働いて、唯この奉仕に終始せんとすることは、いかに最大級の讃辭を呈しても、なほ足らざるを覺ゆるものである。

萬納屋リキさん坪田利吉氏は、當年五十九歳、岡山市小原町の陋巷に安住して、相變らず毎日荷車を挽いて行商に餘念がない。のみならず第五第六の火見櫓を築く爲に、從來は午後六時まで稼いでゐたのを、更に九時まで延長したのである。



公共事業だとか、社會事業だとかに、金品を寄附する物持ちは隨分少くない。が、それには、えてして種々の不純な分子が含まれ勝ちである。たとへそれが表面意識されて居らぬ場合にでも、知らず〳〵それに支配されるのが共通の心理である。然し何にも財産のない人が、身を粉にして捧げる社會奉仕にこそは、本當に純眞な清い尊いものでなくてはならぬ。佛陀が『長者の萬燈より貧者の一燈』に大功徳を認めたのもそこであらう。人は名利の爲に奔命に疲れ、道徳や宗教まで賣り物にされる今の世に、心の底から止め度なく湧き出づる人間愛の爲に、貧しい身も忘れて社會奉仕に寢食を忘れる萬納屋のリキさん——坪田利吉君こそ本當の篤志家、眞の社會奉仕である。その尊さに於ては正しく佛だ、神だ。

からした坪田君の至情は、物質的にこそ酬いられなかつたが、大正七年岡山市教育會が、率先して君の美徳を表彰したのを始めとして、その後も市長、日蓮宗管長、岡山縣知事等によつて三たび盛んな表彰式が行はれた。又岡山第一の巨刹蓮昌寺境内には、自然石で高さ十八尺の頌德碑が建設されて、君の博大なる徳行を永遠に傳へることになつた。

親愛なる岡山の人々よ、折々の水火災ごとにジャン〳〵と響き渡る警鐘の音こそは、坪田君の燃ゆるが如き奉仕的熱情が、眞の人間愛の目醒めを促してゐるのではあるまいか。

キング讀む人富士を讀む

『キング讀む人富士を讀む』こんな言葉が、この頃書店や讀書家の間に云はれてゐる。その意味は、本誌を讀む人はきまつて今度創刊された新雜誌「富士」を讀んでゐると云ふのだ。何故だらう？

それは富士が、我等の兄弟雜誌として編輯されてゐる爲に外ならない本誌を理智に富んだ雜誌とすれば、「富士」は情味豐かな雜誌である。この二つの雜誌が相寄つて、初めて完全に讀書慾が滿足させられる譯で、かくてこそ「キング」と「富士」が併讀される理由が判つたと云ふもののまだ「富士」を讀まない方があつたら、是非一度手にとつて御覽あれ！

高橋訓導の母

函館毎日新聞記者　千葉稻城



これは私の知人の奥さん——A夫人の實驗談。それを私が親しく聞いた實話である。

事柄は現に函館師範學校附屬小學校に教鞭を執らるゝ高橋訓導のお母さんの事實であるが世にも珍らしい涙のこぼれる美談であるに拘らず、つい土地の新聞にも、公私の表彰にも現れなかつたものである。

○みすぼらしい女青物屋

『毎度有難うございます。今日は青物の御用はありませんか』

丁度今から六年前、毎日さう言つては、古びた籠に僅かばかりの青物を入れたのを脊負つて、戸毎に呼びあるく女があつた。年の頃は四十五六。みすぼらしい形裝で、しかも新米と見えて物慣れぬ樣子、あまりな貧弱さに、誰も相手にするものゝ無かつたのも無理はない。

にも拘らず、その女青物屋は、賣れさうもない青物籠を脊負つては、毎日々々、雨が降らうが風が荒れようが、一日として戸別觸れ賣りを缺かしたことは無かつた。併し辛抱といふものは恐ろしいものだ。その內には常入りの青物屋の來ない時など、つい一品二品買つてやる家もあるやうになつた。——A夫人もその一人であつた。

『家はどちら？』

或日A夫人は何氣なくさう訊いた。

『大森町でございます』

大森町といへば海岸で遊廓のある所、無論蔬菜などの出來る地ではない。それに大森町に隣接して高大森といふ乞食部落がある。だから大森町と聞けば、自然高大森を連想して、毎日行商の青物も、大問屋からでなく、つまらぬ小店から仕入れるものであることも想像されるし、その生活のみじめさも推し測られて、A夫人もいとゞ哀れを催すのであつた。

○哀れを誘ふ身の上話

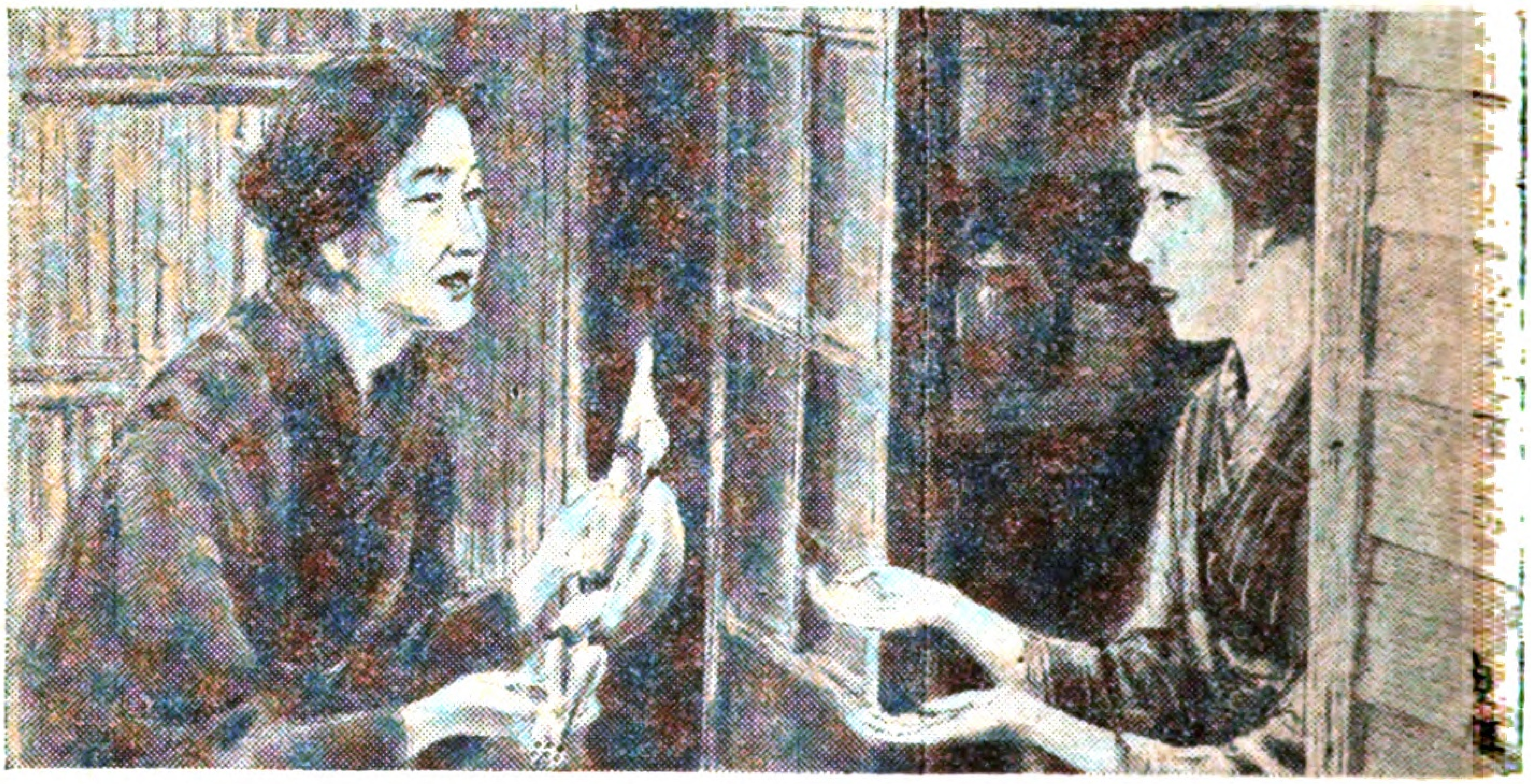
それから半年も經つた時のことである。その女青物屋が、重い籠を負うて、ぐつたりと疲れた樣子が、いかにも氣の毒に見

えたので、もはや顏馴染になつてゐるA夫人は、

『まあ休んでらつしやい』

と言つて、臺所に一休みさせ、元氣をつけるやうにと、食事を勸めた。彼女は大變よろこんで、いろ〳〵と自分の身の上話をした。

それによると、良人は前濱を漁場とする小漁師であつた。それを此の女が毎日町に賣り歩いて、やつと一家五人の口を糊してゐた。併し漁師は



年中海水に浸つて體を冷すから毒だ、子供には漁師はさせたくないと言つて、長男の鐵藏（假名）をば、苦しい中からも、高等小學校から師範附屬の高等科三年に入學させたが、幸にも成績がよくて、昨年、師範學校の入學試驗に及第した。

『良人は大變よろこんで、鐵の卒業するのが何よりの樂しみだ。何でも精出して、あれの學資を作つてやらねばならぬと、身を碎いて働いてゐましたが、やつぱり冷え込んだものと見えます、今年の春、ぽつくり逝つてしまひました』

と言つて流石に鼻をつまらせる。あとに殘つたのは六十七になる姑、しかも中風氣で餘り自由が利かない。それに長男の鐵藏と十三になる次男。さて此の後の生活をどうしたものかと、一時は逆上するばかりであつたといふ。

『でも、奧樣、どんなに泣いてゐたつて仕樣がありません。さしづめ其の日の米代からして拵へなくちやならないんですもの。そんな弱い氣でゐては、一家四人が干乾にならなくちやならない。この上の方法は、無事に鐵藏を卒業させること。それがまた死んだ人への唯一つの手向であらうと、妾もすつかり決心しましてね、それで慣れないこんな商賣をやり出したのでございます』

一漁夫の妻として、無學らしい此の婦人が、凛乎たる決心の堅さ、尊い母性愛の閃き、A夫人も坐に心を動かされずには居れなかつた。爾來、A夫人はこの青物屋の常得意となるばかりでなく、近所知人へも紹介してやり、何かにつけて激勵と慰藉

とを與へることを忘らなかつた。

この至情とこの努力とは、遂に報はれずにはおかなかつた。翌年には、次男も尋常科を卒業して、鐵道運輸事務所の給仕に使はれることになつて、幾分の助けともなり、商賣の方も馴れるに從つて得意も殖え、小さい車を曳き歩くまでに發展した。それに長男の鐵藏君も師範の三年生となり、日曜日や夏冬の休暇で家へ歸ると、外聞などは少しも厭はず、母親の荷車の後押をしたり、月末には得意先の集金をしたり、今時の學生には見ることの出來ないやうな勞務に服するけなげさには、見る人も聞く人、感心しないものはなかつた。此の母にして此の子ありと評判された。

『おや、お前さん、お酒をあがるの？』

ある日彼の女が青物籠の中に、二合入りの酒壜を隱してゐるのを見たA夫人は、驚いて覺えず斯う訊いた。

それは全く意外だつたに相違ない。あれほど堅い決心を見せたから、やつぱり漁師の習慣で、女の癖に酒を飲むのだらうか、驚いたものだ――A夫人はさう思つたのである。

『どうも恐れ入ります』と彼女は悄然として、

『今まで誰にも言つた事もなし、又言はない積りでありましたが、お目に留つた上は、仔細を申し上げて、奥様だけにはお疑ひを晴らして戴かねばなりませぬ。お聞き下さいませ』

と言ふのを聞くと、それは老いたる姑の晩酌の料であつた。姑は何よりも酒を好み、彼女がその僅かの賣上の中から、毎日二合づつ買つて歸るのを、唯一の樂しみとして待つてゐるのだつた。

それを聞いたA夫人は感心して、

『失禮だけれども、家にも一升壜が一本殘つてゐるからそれをお母さんに上げて下さい。』

『お思召は有難う存じますが、私としましては、貧乏なために何一つお母さんにして上げることが出來ず、このお酒だけがせめてもの志でございますから、自分が働いたお金で買つて上げるのでないと、私も氣が濟みませんし、お母さんも喜びますまいから――』

と、何と言つても固く辭して受けなかつた。世間の姑と嫁の仲を見る時、學問はなくても、貧乏はしてゐても、自らの勞働の中から、老いたる姑に晩酌をすゝめて、その喜びを喜び、その老を養ふ彼女が、幾倍尊く見えたか知れない。

× × ×

春花秋月幾變轉、五年の歳月は、彼女の涙と感謝の裡に流れて、いよいよ長男鐵藏君が師範學校を卒業する時が來た。しかも成績優等の故を以て、名譽ある附屬訓導にさへ任ぜられた。母子一家の喜びは、けだし想像の外である。

それから間もなく、この女青物屋の姿を市中に見ることはなくなつた。いぶせき大森町の侘住居も空家となつた。思ふにこの母子四人は、昔を今に語り草として、平和な生活を神に感謝して居ることであらう。（完）


加藤大將

母を脊負へる海軍大將

軍港よろづ新聞記者　樋口宅三郎

○人間的な一面

ワシントン會議がいよいよ歴史的本舞臺に入つて、かの五、五、三の比率が論議され、而もわが精鋭をつくしたる新艦陸奥が、動もすれば闇から闇に葬られんとした當時、全權加藤友三郎大將を激勵して、あくまで強硬の態度を讓らず、間誤々々すれば行李をまとめて本國へ引揚げさうな意氣を示し、列國委員の間に其の人ありと知られた、當時の海軍少將、今、聯合艦隊司令長官たる加藤寛治大將。

――今、筆者がこゝに物語らうとしてゐるのは、かうした今を時めく華やかな事實ではない。而もそれは大將が極めて人間的な一面を語る奧床しい純情的な事實である。

大正十四、五年の頃――當時大將は、横須賀鎭守府司令長官として、同市公郷町の長官々舍に起臥しつゝあつた。官舍は軍港の高臺、樹立も深い物靜かなほとりにあつた。官舍の前には衞兵所があつて、官舍への道が奧深く續いてゐた。幽邃な木々の間には、草花などが香ゆかしく咲いてゐて、犬の戯れ遊ぶのなどが見られたりした。

官舍の小高い庭園の下には、二間足らずの間道があつて、朝夕はかなりの人通りで賑はつた。こゝを通つて、官舍の庭園を見上げると、樹立の間からは官舍の人達のそゞろ歩くさまなどが、そこはかと見られた。もし人こゝろして見る時、そこには思ひもかけない一幅の美しい畫圖を見出したかも知れない。げにやそれこそは、この官舍に人知れず咲いた聞くだに涙ぐましい人情の花でなくてはならない。

○なさけの人情

それは麗らかな春の一日であつた。折柄土曜日の午後で、ふと通りかゝつた筆者は、そこに、かの長官々舍の庭園に、樹立の間を透して、物珍しい一つの情景を見出した。軍人らしく筋骨の逞しい――恐らくは衞兵の一人であるらしく思はれる男子が、風にもたへぬげな一人の老女を脊負うて、其處此所とそぞろ歩いてゐる樣の、またなく異樣に感ぜられたが、その傍には、大將夫人であらうところの一人の婦人が、ひしと附添うて

ゐるのであつた。

筆者は暫らく釘づけにされたやうに、ぢつとそれを見まもつてゐたが、ふとその男子と面を合はせた瞬間、筆者は思はず、驚きの叫びを舉げずにはゐられなかつた。それこそは、海軍大將加藤寬治その人であらうとは——。

私は何故か眼瞼の熱くなるのを禁じ得なかつた。そして私はおぼろに霞む目をしばたゝきながら、尙もその場の光景を見つめた。片手をあげて指さし示す大將の眼は、はるか軍港のかなたを見ながら、何事かを老女のために物語つてゐる樣子であつた。或は夫人をかへりみ、或は霞棚びく空のかなたを指さし、時にカラ〳〵と大きな聲をあげて打笑ふ樣など、何といふ心ゆかしい情景であらうぞ！　この老女こそは、大將にとつて又とかけ代へのない、たつた一人の母堂であるとは、知る人ぞ知る。

一度劍を執つて叱咤すれば、雲とむらがる艨艟鐵火を物ともしない大將が、家庭に入つてはこの玉の如き至情、鬼神も亦淚せずには居られぬであらう。

その後、私はかうした光景を幾度か垣間見た。時には大將と夫人が、恰も松葉杖のそれのやうに、左右から人杖となつて、庭内を散步して居られることもあつた。

大將の母堂すま子刀自は、當時八十四歲の高齡で、數年前からは起居の自由も思ふに任かせず、殆ど床から離れられる日とてはなかつた。その不自由を思ひやるにつけ、大將は震災復興事業の重要議會や檢閱や視察や、いろ〳〵と多忙を極め、席の暖まる暇もない中から、よく母堂には盡された。また暇があれば、新聞や雜誌から、古今東西の面白い話を選んでは、無聊に困しむ母堂を慰めたりせられた。殊に手さへも不自由な母堂のために、みづから箸をとつて、食餌を母堂の口にすゝめられたことなど、大將を知るほどの人々の嘆賞おかないところである。夫人もまたよく大將の意をうけて、大將の留守を母堂にかしづき、大將をして後顧の患なからしめたといはれる。



○艱苦の幾春秋

加藤大將の父君が亡くなられたのは、明治十四年で、その頃父君は、海軍大尉で、横須賀の海兵團の分隊長であつた。全くの武人肌である上に、名だたる酒豪で、金錢に執着することを軍人の恥辱の如く考へてゐたので、從つてその歿後は、一家慘澹の狀想像に餘りある。二百圓なにがしかの一時賜金などは、父君が生前の借財の、ほんの穴埋めにも足りなかつた。而も大將の母堂は、當時十二歲の大將を頭に、八歲、六歲、二歲、當歲といふ五人の遺子を抱へてゐられたので、その窮迫は目もあてられぬものがあつた。全く一時は途方に暮れられたが、五人の可愛い兒が子を見ては、手をつかねて徒らに過してはゐられなかつた。

術を喘いで、早くも商界に立つ母親のそれのやうな母性愛！それこそは日本の貞節な婦人が持つ雄々しき力でなくてはならない。かくてあるべきにあらずと、すぐさま横須賀を引拂げて上京した須磨子刀自は、とある裏長屋に佗び住居の世帶をきづき、「御仕立物、洗濯物をいたします」といふ、さゝやかな看板をかゝげられた。而して親子六人が、血みどろのやうな生活記錄がそこに展開された。

この母と子が相扶け相勵ましつゝ、辛うじて泳ぎぬけた世路の艱難、それはまたやがて加藤大將の立志美談でなくてはならない。而してそれは又別に語るべき好題目でもある、春風秋雨。こゝに五十年。當年十二歲の少年は、聯合艦隊司令長官として、一國の榮譽を荷ふ身となつた。往時を回想しつゝ、加藤大將は語る――。

『今でも弟とよく語ることだが、母の辛苦は全く話すも淚ぐましいほどであつた。母はわし達のために、しばしば學生達の下帶洗ひまでして下すつた。夜中にふと目を醒ますと、手先も凍るかと思はれる冬の夜でも、火の氣一つもない處で、しよんぼりと一人でお針をしてゐられた母の姿を見出したものだつた。わし達の今日あるは、一に母の熱い愛によるのだ。その頃、學校で使ふ一枚の紙、一本の鉛筆でも、さうさう買つてくれとは云へなかつたた。紙一枚、鉛筆一本でも、それだけ母が苦勞せねばならぬのだと思ふと、さすがに子供心にも言ひだしかねて、どの位心苦しさを覺えたか知れなかつた。わしは、母が喜んで下さることなら、何でも躊躇なくしておかげするつもりだ。わし達五人の兄弟は、母の血をすゝり、汗を服んで成人したのだ』

かく語る大將の瞳には、いつか淚の露が宿つてゐた。

自ら老いゆくも知らで、子供ごころに何時までも母をなつかしんでゐられた大將にも、やがて悲しい別れの時が來た。母堂は大將が知らぬ間もない旅途の中に、終に佛界の人となられた。一昨年初夏のことである。月明の洋上、金波銀波を眺めつゝ、その和やかな自然の懷に抱かれる折々、大將は亡き母堂の在りし俤を偲んでそぞろ淚せられることでもあらう。



源三同行

鳥取新報記者　佐藤白雨

一

『堪忍して下せえ』

一人の若者が、ドキ〳〵した出刄庖丁を投げ出して、頭を地にすりつけ、涙を流して源三老人の足許に平伏して居る。

『なんでごさんすかいな』

源三老人はこの、あまりに突然な出來事に、歩きながらたえず口唱んで居た念佛唱名を止めて、若者の姿をしげ〳〵と見やつたのである。

場所は鳥取縣氣高郡大郷村御熊の坂、四邊は欝蒼たる森林、殊に人通りも杜絶えた晝下り、源三老人がこの坂道に差しかゝつた時に起つた出來事である。

『わしは、すんでの事で、お前さんをやつつける處であつた。もう今日限り惡い事は、やめました。堪忍して下せえ』

若者はかういつて幾度となく頭を地にすりつけてゐる。

當時源三老人の住んでゐる同郡山根村は、何處の家でも農業の傍ら、手漉きの紙製造を副業として居た。その日、源三老人は半期分の紙代を受取に、鳥取市の紙問屋にいつた歸り途であつたのである。盆と暮の半期の勘定には相當纏つた金を紙問屋から受取つて歸るのが例である。それを知つて居る若者は、紙問屋から出で來た老人の姿を見ると、途中で殺して金を奪はうと跡をつけて來たのであつた。

若者は、人通りの絶えた、山坂に差しかゝると、幾度か懷中の出刄を握りしめて、前を歩いて居る老人を、獸物のやうな眼で見据ゑるのであつたが、その度に、老人の口から無心に洩れる、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛……の唱名に、自から手が萎え力が拔けるのをどうすることも出來なかつた。

『今だ！』

御熊の坂に差しかゝると、若者は渾身の力を振つて出刄を逆手にツツツ――つと老人のすぐ傍まで詰め寄つた。

『南無阿彌陀佛々々……』

何んと云ふ靜な落ちついた響であらう、念佛の聲に、青葉も和して囁き、小鳥も共鳴して囀るかのやうに思はれた。

とう〳〵若者は握り上げた出刄を、投げ出して老人の前に一切

を懺悔したのである。そして涙ながらに改心を誓つた。

『ほう！』

源三老人は始めて驚いたやうに腰をのした。

『實はな、紙屋から勘定をすつかり貰へんのでな、お氣の毒な事ぢや、ホンの少しだが、これを上げますよ、取つて置きなされ』

とかう言つて、懐中の財布から、幾らかの紙幣を取り出した源三老人は、辭退する若者の手に握らせた。

『全部貰へたら、も少し多く上げられたものをお氣の毒な事ぢや』

と、金の少いのを如何にも氣の毒さうにかうつけ加へた。

『貴方は神樣です、佛樣です』



老人を見上げながら言ふ若者の聲は涙にふるへてゐた。

『なんの、なんの、俺は凡夫ぢや、有難いのは御佛ぢや、南無阿彌陀佛々々』

老人はさつさと歩きかけた。

『ほんたうに、私は改心します、眞人間になります……』

それに答へるのは、源三老人の口から靜かに洩れる彌陀の稱號と、青葉の繁みに鳴き囀す小鳥の聲のみ。

若者は地に跪いて、暫し源三老人の後姿を伏し拜んで居た。

二

この不思議な老人、源三同行の本名は足利喜三郎と云ふが、近郷では源三同行の名で知られて居る。同行といふのは、眞宗信者の意味。今年、八十五六にもならうか。眞宗同行者は勿論、附近の人々から、生如來のやうにあがめられて居る。

『源三さん。誠に何度で濟みませんが、又この牛を手なづけて下され』

かうして源三老人は村の人から性惡牛の手ならしを賴まれる。

性惡牛は横目で飼主をジレ〳〵と睨み、凄氣がサッと眼中から迸しる。と、角振り立てゝ、飼主、他人の見境なく飛びかかり何人も手につけられないのである。

『私の様な事だ、悪い性分に生れ付いて、人から嫌はれて居るのか、オ、〳〵』

源三老人は自分の顔を、その牛の顔の近くに持つて行つて人にでも話すやうに話しかける。

そして静かに牛に手を觸れると、牛は悪い事をした子供が叱られる時のやうに、ジーツと恥かしさうに首を垂れて、温順しくなるのである。かうして二三日も源三老人の手に撫ぜられ、飼はれて居ると、何時の間にか、生れ變つたやうに温順しくなる。

『貴君の前に出ると、どうしてこんな性悪牛が、温順しくなるのでせうな』

誰でも不思議がつてから聞くのである。

『犬でも猫でも、尾を振つて抱きついて來るものは、叩かれんでなあ。牛もそんなものかい。性悪だつて、憎ますに可愛がつてやりなされ。叱つて、餘り酷う使ふから、氣がヒネくれるのぢや、まあ〳〵可愛がつてやりなされ』

源三老人はから言ふのである。

人間とても同じ事であらう。悪事をしたと言つては憎む、冷遇する。刑餘の人が世の中を呪ふのは、暖い心に餓ゑて居るのである。

三

『働きますと、ハタがラクになります。有難い事でございます』源三老人の言葉である。働くことは他人樂であり、佛の思召である。これが源三さんの信念であり、信仰である。

源三老人は、孫夫婦と共に五反程の水田を自作して居るが、その田の草取りは全部八十餘歳の源三老人の受持である。

『お祖父さん、そのやうに働いて頂かなくとも、私達がしますで、少し休みなされ』

と孫夫婦はやさしく言ふのであるが、

『心配せんでも好いわ、こんな結構な手があるのに、働かんのは勿體ない事ぢやで』

八十幾歳の老人でありながら、一日中、念佛と共に田の草取りである。

『田に水をあてるに、上の田をかまはずに、下の田に水をあてようとするから、堰が必要になる。大きな堰を作るから、自然無理が出來る。水は高い處から、低い方に流れる。高い田から水をあてると無理が出來ない』と言つて、源三さんは自分の田に堰を作らない。あたり前の事であるが、それが出來ないからこそ、毎年所々方々に水喧嘩が絶えないのだ。

源三老人は、上の田から自然に水の流れて來るのを待つて居るが、今迄曾て田を植ゑずに了つた事もなく、然も稔りはいつも上出來である。

働く事は源三老人のモットーである、信仰である、下があいて居れば、いつでもハタを樂にする爲にその手は働くのである。

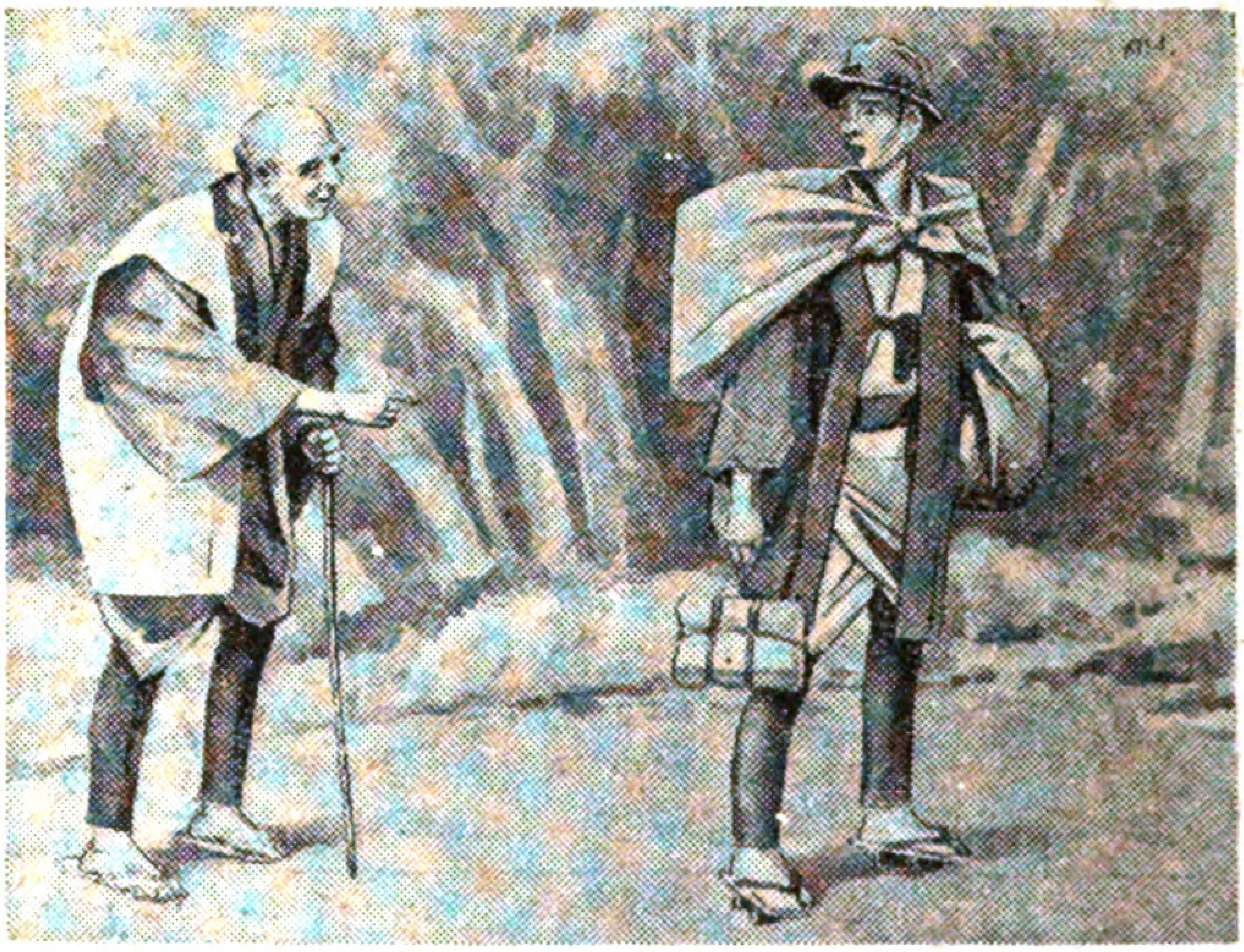
或日の夕暮であつた。源三老人は山道を歩いて居た。源三さんの前を、荷物を負ひ、手には何かの包を持つた人が歩いて居た。源三さんの手は、折よくあいて居たのである。

『その手荷物を、俺に持たせて下されれ』

源三さんは、後から聲をかけた。荷物を持つた男は、振り返つて辭退した。

『俺はこの通り手振らぢやて。貴方は、荷を負うた上に手荷物を持つて居なさる。手荷物は俺に持たせて下され』

源三老人は、また言つたのである。



日の暮れである。それに人通りのない山路で、しつこく、手荷物を持たせて呉れと云ふ。見かけの餘り好くない老人を、その男は警戒したのであらう。今度は前よりも邪慳な調子で斷わつた。

源三老人はそれを察して、

『俺は、山根村の者ぢやが、少しでも、貴方が樂になれば、有難い事ぢやと思うて、手荷物を持たせて下されとお願ひしましたのぢや』と云ふ言葉に、その男も安心したのであらう。手荷物を源三老人に持つて貰つたが、あとで源三同行と聞いて、驚いたと言ふ話がある。

四

今から六年ばかり前の夏の事である。一燈園の西田天香氏が鳥取縣下を行脚中、智頭町の素封家米原家に一泊されたことがある。丁度その日源三老人は米原家に來合せてゐたので、

『そのやうな偉いお方のお話を聞きたい。こんな田舍親爺でも、お話を聞かせて下さるでせうか』と恐る〳〵家人に申出た。

其の晩天香さんは堪忍と心の滿足と云ふやうなことを話されたさうである。末席で謹聽して居た源三さんは、その夜の集りが閉會けてから、西田さんの前に出た。

『私は、肩や腰をもむのが上手でございますから、もまして貰ひながらお話しを聞かして頂きます。世の中を善くしようと日本中を往來なさる貴方樣、さぞお疲れでございませう』

さう言つて天香さんの背に廻つて肩をもみ始めた。

源三さんは訥辯で、平生は無口であるが、話し振に特徴があつて、極めて短い言葉の中に、人の肺腑を射る鋭さと深味がある。

『お恥かしい話ですが、まだ私は人を堪忍した事がありません。人様に堪忍して貰つてばかり居ります』からポツ〳〵と語る源三老人の言葉に天香さんは胸を打たれたらしい。

『到底、私どもの及ぶ人でありません。山陰には大した人があるものです。私どもも教へられました。私どもも十字街頭に托鉢の行をすべき者が、此樣に人々に祭り上げられるのは間違つた事です』と天香さんは後に人に語つたさうである。

死んだ子規の高弟で、若い時には優れた俳人として、子規に將來を嘱望されて居た田中寒樓と云ふ俳人がある。鳥取縣八頭郡河原町の生まれで、中途から小學校に奉職して田舍に埋もれた爲め、中央文壇にこそその名を知られて居ないが、句佛上人なども非常に尊敬して、賓客の禮を以つて遇する位だから、句は一種の氣品と風格を帶び、天才肌の奇驕兒で、奇行百出、仲々人に許さぬ男である。

この人、或る時、多分因美線であらう、汽車の中で石のやうに默して居る、田舍の老人と隣り合せに坐した。

奇行家の田中寒樓は、何かのきつかけに、その老人に話しかけたらしい。鳥取驛から智頭驛まで同車する間に、寒樓はすつかりその老人の前に兜を脱いで了つた。その汚い田舍老爺が、寒樓の前に聖者のやうに輝いて來たらしい。この老人こそ、實に源三同行であつた。寒樓は源三同行を禮讃する數多の句と、和歌を作つた。決して凡骨でない奇驕兒寒樓を、車中一回の會見で、聖者の如くに禮讃せしめた源三同行の不思議なる人格が窺はれるではないか。

源三老人の村では、何かゴタ〳〵が起きて仲裁人が手を燒いて引つこんだ後始末は、性惡牛のやうに源三老人の處に持ち込むのである。どんな六ケ敷い事でも、源三老人が仲に入れば必ず和解する。

『爭ひは兩方に言ひ分があるからです。それで、その言ひ分を暫く私に預らせて貰ひませう』これが源三老人の紛議和解法である。銘々の言ひ分を文句なしに預ける程信賴を掛けられる人は世間は廣くても源三老人以外には餘り澤山はあるまい。

源三老人は讀み書きは殆んど出來ない。記者も、この稿のために、中村師を介して源三老人の自署を求めたが、無筆だからと云つてどうしても、自分の名前さへ書かなかつた。或はほんたうに自分の名さへ書けないのかも知れない。

『いや〳〵、俺は文字を知らぬのを、この上もない幸福と思つて居ますのぢや。俺は根が惡人ぢやで、子供が母親の懷に護られて、怪我のないと同じやうに、佛樣にお縋りして、どうやら今まで、大した過ちもなく過させて貰ひました。生まなか文字があつたら、間違ひを起したかも知れませんぢや』と、言つて居る。

信行二體の眞宗の信者として本願寺より數回表彰せられ、縣よりも奇特の篤行者として二回程表彰されて居るが、自分では、一番罪の深い悪人だと信じて居る。

働く事は、他人を樂にする事であり、御佛の意思である。働く事に依つて、諸々の罪業も消滅し、佛恩に報いる懺悔奉謝と信じて、八十有餘年の間終始變らざる信仰は、源三同行を偉大なる人格に生長せしめた。一方に人の物まで、奪ひ取る手もあれば、又一方には源三同行のやうに、他の者を樂にするための手もある。

同じ手ではあるが何んと云ふ相違であらう。(完)

繼母の典型 村田千代野女史

鹿兒島新聞記者 五代香軒



村田千代野女史

進んでは人の繼母となる

現在鹿兒島高等女學校に教鞭を執つて、恩師よ慈母よと一校の女生が敬慕の的となつてゐる一方、入りては模範的繼母として一家の務めを完うし、出でては社會的事業に席の暖まる隙もない、眞に意義深い日常生活を送つて、鄕黨子弟の間に多大の感激を與へつゝある一婦人がある。醫學士村田豐作氏夫人千代野女史がそれである。

女史が村田氏に嫁いだのにも、一場の涙ぐましい美談がある。當時村田氏は、鹿兒島縣立病院内科部長を勤めてゐたが、ふとした事で夫人に先立たれ、まだ血氣盛りの身で八人といふ大勢の子供をかゝへ、しかも夜半母の乳房をさぐる幼な兒までであるので、一家悲慘の狀態は、まことに目もあてられぬものがあつた。

女史はその時縣立第一高等女學校に職を奉じてゐたが、同僚の藤田とり子女史から、村田氏のこの窮狀を聞くに及んで、そゞろ惻隱の情の動くものがあつた。殊に村田氏の世にも稀らしい人格者たるを知つては、そのまゝ他事として聞き流すには忍びなかつた。それと見てとつた藤田女史は、言葉を盡して女史に訴へたので、女史もこゝに深く決する所があり、遂に村田氏に嫁することになつたのである。時に歲二十六。

『世に繼母といへば、鬼の代名詞のやうに考へられ、無殘な繼子いぢめを聯想せしめるが、これには世の繼母たる婦人にも責任がある。この積弊を裏切つて、眞に立派な繼母たることは、決して意義のない事ではない。殊に八人の子女、それを眞直に伸び〳〵と育ておほせる、それだけの事でも、立派な女としての天職は完うし得られるのだ。いつそ自分は、模範的繼母として、一身をそれにさゝげてみよう』

さうした女史の犧牲的精神は、早くも世の婦女子とは全く選を異にしてゐる。誰が好んで八人の繼母として、後添ひたるに甘んじようぞ。奉仕的精神の旺盛なる女史にして、はじめて能く爲し得たのである。さればこそ、村田氏は女史と結婚後間もなく、時の鹿兒島高等女學校長屋代熊太郎氏に對ひ、

『ほんとに良い家内を貰ひまして、これと云ふのも御校のお蔭

で、私は毎朝御校の方へ向いて、拜んでをります』と云はれたのも、また當然のことで、女史がいかに非凡な婦人であるかゞ窺はれよう。

繼母としての努力

村田氏に嫁するに及んで、女史は學校を辭し、專ら家政を擔當する事になつたが、村田氏も思慮周密の人で、まづ舊邸を引拂うて質素なる新居を營み、從來使用せる女中も悉く新しく取かへるなど、種々心をくばられた。

女史は當時家政が良人の收入に比べて思はしくないのを悟ると共に、まづ家政の復興に心をそゝぎ、女中の數を減ずると共に、自ら臺所に立つて、一家振興の第一線に立つた。しかし女史が、最も心を用ゐたのは、言ふまでもなく八人の子女の教養であつた。

その八人の中で一番小さかつたのは、生後僅か十ケ月しか經たない豐秋君であつた。今までは教壇に立つて、多くの女生徒に師と仰がれた女史が、容姿かまはず、豐秋君を脊負うて、水仕事に買ひものに、まだうら若い、物なれぬ「母」の姿を見る時、女史が教へ子ならずとも、そゞろに感激の涙をとゞめかねたといふのも、強ち無理はない。

女史は最初子供達に對し、大極の上から最後の勝利を考へて、いろ／＼と心を碎いたのであるが、現實の場合になつてみると、さうした理論上の考慮などしてゐる餘裕はないので、とに角結果の如何に拘らず、たゞ眞情を以て出來るだけ盡すとい

千代野女史は福岡縣柳川藩の出身で、姓を川口とよび、明治三十八年三月、東京女子高等師範學校理科を卒業し、同年四月鹿兒島縣立第一高等女學校教諭に任ぜられ、後、舍監兼務となつたが、聰明で温情に富める女史は、早くも一校欣慕の的となつた。女史は自ら『舍風の歌』を作歌作曲し、生徒と共に日夕之を合唱して、專念舍風の改善に努めた結果、鹿兒島第一高等女學校の美名、漸く江湖に喧傳さるゝに至つた。尚、明治四十年十月、大正天皇いまだ東宮に在しませし頃、同校に親しく行啓あらせられ、女史は特に選ばれて、植物科御前講演の光榮を擔つたこともある。



ふ主義をとり、「愛」によつて子女を導き育むことに專念した結果、子供達にとつては、無くてはならぬ「母」となり、遂に模範的繼母たる凱歌を奏するに到つたのである。

それでもまだ自分に子供といふものが出來ないうちは、自分の眞情が果してどれ丈け子供達に響くものであるかゞ判らず、種々心を勞して、焦心りぬいたが、後、自分に子供が出來て、初めて子供の本當の心持も分り、あんなに焦心らなくてもよかつたと、ひとり微笑むこともあつたといふ。それで初めに一番氣むづかしいと思つた子供ほど、後には何もかも理解が出來て、殊に結婚當時二年足らずで、一番弱かつた豐道君の如き、今は慶應大學に入學し、十一文の足袋をはき、十八貫といふ體格の持主に變つたほど、女史の注意と理解とは眞に至れり盡せるものがあつたのである。



智的修養と社會活動

今一つ女史の苦心されたのは、教育の點であつた。初めは小學校であつたものが、中學と進み高等學校と上つてゆく子供を見るにつけ、之を指導してゆく女史が、子供に負けてはならぬといふ考から、自分も一生懸命に勉強に精進されたので、その間の苦心は並大抵のものではなかつた。それと共に、いよいよ子供の知識が進んで來ると、到底すべてを自分でも修めることの不可能な所から、今度は子供の話に自ら進んで耳を傾け、以て青年時代の子供達の心を理解することに努めたため、どうやら無理解な母たる譏を免れることが出來たのであつた。女史は更らに一面またよく新刊書などに目をさらし、努めて名士の講演などにも出かけることを忘らなかつた。西兒島市で催される講演會場に、村田氏夫妻の顏を見受けぬことは殆どないと云はれる位、女史は知識の修得につとめたのである。

この眞情と努力、それは自分の腹を痛めた子供に對してさへ、容易ならぬものである。而も繼母として、女史がこの難事業を見事に爲し遂げ、完全に母性の任務を了せられたのに對し、世の母たるもの面を赤らうせざるもの幾人あらうか。

女史はもと佛教信者であつたが、クリスチャンとして信仰篤

い夫君の感化で、結婚後は基督教徒となり、今では矢島女史の婦人矯風會鹿兒島支部長として、婦人救濟、廢娼問題等に熱心な活動をつゞけてゐる。子女の教育に一先づ肩を輕うした女史は、更に鹿兒島婦人會、將校婦人會、特志看護婦會、愛國婦人會等の幹部として、婦人の副業の獎勵や慈善救濟事業などに率先して目さましい活動を見せ、且つ社會教育、處女會、婦人會、通俗講演會などに聘せられては、その根柢ある、熱烈そのものゝやうな講演を試み、何時も聽衆を感激せしめつゝある。これ皆女史が「母」としての修養から得た偉大なる收獲である事を思ふと、女史が母として如何に深刻なる苦心と努力とを拂はれたかゞ窺はれるのである。

現鹿兒島高等女學校長屋代氏は、かつて第一高等女學校にあつて、女史の人となりを知れる關係から、女史の繁忙なる家事を繰合せて貰ひ、同校に聘して女生の指導を依賴して居られるが、生徒の女史を仰ぎ親しむこと、實に慈母もたゞならずと聞いては、女史の德のいよ／＼光輝を發しつゝあるを喜ばずにはゐられない。

夫君豐作氏は佐賀縣の出身で、今は縣立病院を辭し、同市内山下小學校隣で開業してゐるが、氏も亦深く社會風教の改善に心をひそめ、大正十四年、時の縣知事から縣下大島郡が、人口二十萬で、一年一萬圓の燒酎代を費すと聽き、大いに之を憂ひ、夫妻相携へて自費で大島に渡り、禁酒宣傳を試みて、疲弊せる大島の覺醒を圖つたが、千代野女史は更に割烹の指導講習會を開いて、土地に即せる特殊料理法を鼓吹するに努めた。

女史は不惑の歲を過ぎていくばくもない。女史が社會的の活動は、これよりして更に大いに見るべきものがあらう。希くば健在にして、世の風教のために戰はれたいものである。（完）

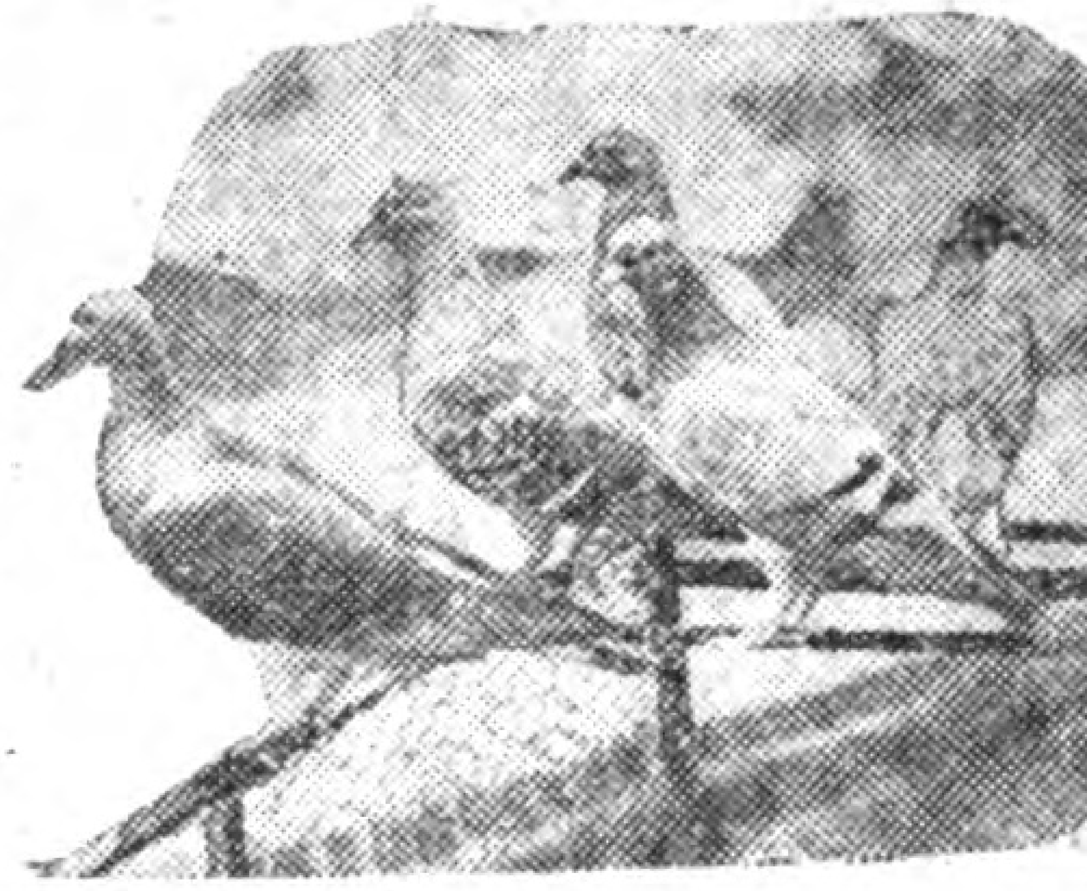


千代野夫人の筆蹟

心　淵となり瀬ともなりつゝさはやかに
ながるる水の心もたまし　千代の

血塗れの小鳩

報知新聞記者　中田千畝



美談の主六十五號の鳩（左端）

人々の美事善行は、隨分、毎日新聞にも報道されて、常に讀むものの心を感動せしめて居りますが、それ等の美事善行にもまして、私を感激せしめたものは、傳書鳩の血塗れの奮闘であります。

◇

大正十五年十一月十二日、——横須賀軍港に於て記念艦三笠の開艦式が擧行された日の事です。攝政宮殿下が行啓遊ばされるといふので、我が報知新聞社では、横須賀支局詰の特派の外に、本社から寫眞部員一名が、數羽の傳書鳩を携へて參りました。擧式の時間が、夕刊の締切前約一時間でしたから、會場の混雜や、擧式中は場外に出られないといふ關係などからして、この式の状況、寫眞等を夕刊に間に合はせるためには、鳩によるほか方法はありませんでした。

傳書鳩といへば、すぐに『報知の鳩』と、いはれる程に、最も古い歴史を以て居る私の社では、この日の鳩通信も成功疑ひないものとして、聯絡係、編輯員ともに、鳩の到着を今や遲しと待つて居りました。やがて一羽二羽、三羽——と通信は順序よく運ばれて參りました。

かうして記事の方は豫定通り整ひましたが、大切な寫眞フイルムがなか／＼到着いたしません。係員が氣をあせつて居ります時、締切前五分になつて、やつと一羽がフイルムを胸に抱いて到着しました。早速現像製版して、夕刊を出しましたが、どうした事か、もう一羽の鳩だけがまだ還つて來ません。鳩の表を調べて見ると報知第六十五號の鳩で、長野からの飛翔記録を持ち、横須賀から三十二分で飛び切つた極めて優秀な鳩でしたから、係のものと共に私は、どうしたことかと不安にかられて居つたのでした。

夕方寫眞部員が歸社しました。夕刊に出された寫眞を見て、『他にこれよりも良い構圖の物があつた筈だ。それは攝政宮殿下が東郷元帥とお揃ひで甲板を御歩きになつてゐる所を拜寫したものだつた。』といふのでした。よく聞いて見ると、そのフイルムは報知第六十五號の鳩に持たせたといふ事がわかつたので、皆大いに失望すると同時に、鳩の行方を心配し合つたのでした。

翌朝の事です。鳩舎の掃除を終つた鳩係が、餌を與へて舎を出ようとした九時頃、慌しく一羽の鳩が歸つて來ました。果せるかな、それは歸らなかつた六十五號の鳩でした。ほつとして取り上げて見ると、意外、全身血に染つてゐるではありませんか。係のものは屋上の鳩舎から、轉がり降りるやうにして、その傷ついた鳩を抱いて編輯局の私の所へ馳けつけて來ました。

『鳩がやられたのです……だから昨日歸らなかつたのです………寫眞のフイルムをちやんと持つてゐます……』

といふ聲は震へてゐます。私は驚いて、立ちあがつてその鳩を抱きあげました。鳩は散彈に撃たれてゐるのでした。彈は右腹部に潜入してゐるらしく、その苦しげな息づかひ、血塗れの羽根には、苦鬪の痕が、まざまざと現はれてゐました。

編輯局の一同はしばらく口もきけないやうな、感激の中にありました。傷ついた鳩が、鮮血に染まりながら持つて來たフイルムは、正しく昨日寫眞部員が、三笠艦上で謹寫した、攝政宮殿下と東郷元帥とのそれでありました。鳩は途中、山のあたりを飛ぶ時、狩獵家のためにやられたものらしい。散彈に撃たれ、血潮に塗れながら、鳩は自らの與へられたる使命のために、斯も勇敢であつたのです。斯も決死的であつたのです。



責任觀念のうすれた今日の人々の胸に、この鳩の物語は、正しく一つの活教訓でなければならないと思ひます。その時、私は涙ぐましい感激を以て、勇敢なる鳩を左手に抱きしめながら、鉛筆をふるはせて、この鳩の勇敢な行動を認め、最後に次のやうに附け加へました。

これからも賀陽宮殿下から御下賜になつた鳩をはじめ、多くの我が社の鳩が四方に飛んで、重要な活動をいたします。お願ひですから、鳩に鐵砲をむける時、足と胸とを御注意下さい。信管か袋をもつてゐましたら可愛がつてやつて下さい。

◇

大正十五年十一月十三日の報知新聞夕刊に、『狩獵家にお願ひ、傳書鳩を撃たぬやう』といふ見出しで出したのがそれであります。今もその事を思ひ起す時、私は新しく湧きくる感激に打たれざるを得ません。

社會奉仕の名物大工

大阪昭和日日新聞記者　野田虎一



――保田廣吉氏――

宣傳狂の大工さん

昨年の六月、全國に狂犬病豫防週間といふのが催された折のこと、所もあらうに、大阪市曾根崎警察署の表門に、縱三尺の横一間といふ、これは又珍らしい川柳の立看板。

野良犬が良二千石食ひつぶし
犬賣つて米一升に剩りが來る
子が嚙まれ親が毒づき一波瀾
打殺せ一犬狂を吠えて來る

等、等。すべて狂犬豫防の宣傳句が七つ。口の巧拙を問ふなかれ。この川柳看板には、今時には珍らしい篤志家の溫い情けがこもつてゐるのだ。

看板の寄贈者、名は保田廣吉、北區小深町に住んで、同警察署お出入の大工さんだと聞いては、一寸驚かされるではないか。

その以前、四月の全國結核豫防週間には、大阪市の表玄關梅田の驛頭に近く『茶斷ち鹽斷ち願掛け止して主の結核刀根山へ』といふ都々逸の大看板を出して、行人の目を驚かせたもこの人だ。蓋し刀根山は市の北郊にあり、市經營の結核療養所のある所、つまらぬ願掛けなどしようより、主が結核ときいたら、逸早く療養所へ送るがよいとの深切心なのだ。

社會奉仕の一念へ

廣吉さんは天下の靈場高野山の麓、和歌山縣伊都郡學文路村の產。家は代々の百姓、しかも世にいふ水呑百姓とあつては、所詮浮ぶ瀨がない。そこで大いに發憤し、『なにくそ！一つ金を儲けて來て、村の奴等をびつくりさせてくれる』と、當時少年の廣吉君、青雲の志をいだいて飛び出したのがこの大阪。と云つて賴る所もないのだが、そこは渡る世間に鬼のないたとへ、ある大工さんの許へ弟子入りして、十二年の長い奉公は、よくも辛抱したもの。そこで妻をめとつて、人間

一匹の生活をはじめ、『いよ〳〵これからだぞ！』と、今更のやうに褌を緊め直してはみたが、さて金と云ふ奴は出來にくいもの。まして長男には死なれ、一時廣吉さんも意氣銷沈してはゐたが、子供は後から後からと生れる。一家の生命の綱の廣吉さん、のんべんたらりともして居られず、かせぐほどに生れるほどに、何日まで經つても大金などは夢にさへ見ない有樣。

ところが子供の頃から讀書が好きで、つい川柳や腰折れなどを作ることを覺え、この頃でもどうかすると發句の一つもうなつて憂さ晴らしをしてゐたのが病みつき。

『貧乏は貧乏ながらに、何とかお國のためになる事がありさうなものだ』

と、富豪志望が一轉してポンと膝を叩いて思ひついたのが社會事業の一端。宣傳流行の世の中、看板はお手のものだ。から思ふと、もう貧乏などは些とも苦にはならない。

まづ手はじめが、手近なところで立小便防止の宣傳。そこで仕事の暇をみては、立小便法度の制札を作り、仕事の往き還りに、臭いと思ふ所へピタリと一札。現に廣吉さんの家の附近には

　恥さらし道で小便垂れさらし
　　知らぬ顔してゆきさらしけり

などと、いろ〳〵な狂歌を大書して、立小便黨を痛快にやつつけてゐる。その效果は著しく、あの附近はかなり場末で行儀の惡い土地柄なのに、近來めつきり小便の臭ひがしなくなつたといふから妙だ。更に廣吉さんの家の周圍には、『惚れちやゐたけど愛想がつきた衞生思想のないお方』『好きなお方はあのアメリカへ、わたしや行かれぬトラホーム』などいつた都々逸、川柳、警句、狂歌、標語などを書した木札が所狹いまでに打ちつけられてある。



天物謝恩の屑拾ひ

大正八年四月、二男稔君が濟美第三小學校へ入學した時、校長若林常順氏が附添の父兄に對し『天物謝恩』といふ講演をしたことがある。宣傳の看板だけでは物足りなく思つてゐた廣吉さんは、この話を聽いて、これだとばかり、大いに喜んで、歸宅すると早々家の横手へ小舍を作つた。そして翌日から、廣吉さんは一寸した外出にも必ず南京袋を提げて出た。

『あの變りものが、又何をはじめるか』

と、近所の人は勿論、家族までが不審に思つてゐたが、何ぞ知らん、往訪の筆者に廣吉さんが展げてみせた帳簿には、空瓶五十七本、古鐵二十七貫、木炭二貫、ボロ屑五貫、眞鍮二貫六百匁、銅三貫五百匁、硝子屑三十貫、石炭十貫、鉛一貫五百匁、新聞雜誌其の他、合計二十三圓二十二錢也。

と明記されてあつた。『天物謝恩』の心が、廢物拾ひとなり、その代金が悉く公共事業に提供されるのだと聞いては、市井の一變人が寸暇の手すさび、また端倪すべきでない。

『何だ、大工の内職が屑拾ひか』

と人は嘲り、家族も極度に反對したばかりか『あの大工は往來で屑拾ひをしてる』と得意先でまで厭がられたものだが、何の屈する廣吉さんではない。やがてそれと知つては、得意先でも目ぼしい廢物は廣吉さんに、わざ〱取つておいてやると云ふ有様。

大正十四年、三男が小學校へ上つた時から、家族達にも『天物謝恩』を實行せしめるために、新たに天物謝恩箱を作り、箱の周圍に『一錢の錢は拾へど一錢の廢りし物は拾はざりけり』などと、得意の宣傳歌を物してゐるのも面白い。

この貧乏の中で、長女千鶴子（一七）を家政女學校へ通はせてゐるのも感心。二男稔（一三）三男米藏（一〇）の二人は小學校へ、他に四男の日出男（三）があり、

『金持ちになる望みはサラリと棄てました』

と、云つてはゐるが、その代り天下の廢物といふ結構なものを拾うて、世のために盡さうとしてゐる。これ世の一些事として、嗤ふべからず。この心、實に社會をなすの柱石である。萬人こゝに覺れば、又何をか言はんだ。見よ、廣吉氏の面上、感謝と幸福の情に輝いてゐるではないか。



大雄辯家一堂に會して

天下の大雄辯家として名聲嘖々たる加藤咄堂、久留島武彦、小林一郎、乾精末、笠井重治、中野隆元氏等の諸名士を招待して、盛大なる雄辯座談會は雜誌『雄辯』によつて主催された。何しろこの會合は天下の雄辯家揃ひの事とて、談論風發四筵を驚かすの概があつた。

此の盛んなりし座談會に於て、諸氏の多年熱心研究せる雄辯錬磨の要訣、壇上の體驗、聽衆心理を把握する呼吸、雄辯の偉力に對する體驗談等につき、各々其の特徴を發揮し、時の移るを知らなかつた。その詳細なる記事は同誌四月號に堂々發表された。今や意義ある第一回の普選を了へ、新時代は正に雄辯熱の澎湃として全國に勃興するの秋、該記事は時節柄好讀物として注目の焦點となつてゐる。（寫眞、向つて右より加藤咄堂氏、久留島武彦氏、小林一郎氏、乾精末氏、笠井重治氏、中野隆元氏）

地熱利用の地獄王

大分民友新聞記者　原田薫



高橋廉一氏

天聽に達す

昭和二年六月二十三日、田中内閣成立後、初めての地方長官會議に召集された知事達は、聖上陛下よりの有難き思召によつて、一同御賜餐の光榮に浴した。御陪食後、陛下には各長官に所轄府縣内に於ける事情についてそれ〲御下問があつたが、特に藤山大分縣知事に對しては、

『別府温泉の豐富な地熱利用については、何か方法を講じて居るか』

との思ひもかけない御下問があつた。國情に通じさせ給ふ陛下が、産業の發達、文化の向上のために、かうした尋常人の思ひも及ばない點にまで大御心をそゝがせ給ふは、洵に恐懼の至であるが、藤山知事も流石にこれには恐懼措く所を知らず、

『高橋廉一なるものが、地熱利用の研究にやゝ成功いたしてをります』

と、纔かにお答へ申上げた。

忝くも天聽に達した無名の一學究高橋廉一とは果して何者であらうか。氏が地獄王で通つてゐる我國地熱利用の先覺者であることは、恐らく知る人多くはあるまい。而も氏が今や窮迫のドン底に喘ぎながら、この國家的大事業のために、血涙を搾つて奮鬪しつゝあることは、尚更知る人稀であらう。

地熱利用の先覺

筆者はまづ高橋廉一氏の人となりから語らなければならぬ。氏は別府温泉地帶の一つ龜川の産で、父敬一氏（贈正五位）は、明治の元勳松方公が日田權令時代の屬僚の一人であつたが、折柄百姓一揆の擾亂があり、之が鎭撫を命ぜられて出動した際、敬一氏は武運拙くも一揆の竹槍にかゝつて、血祭の犧牲となつた。人の情を知る松方公は、この孤兒として遺された八歳の廉一氏を引取つて世話することになつたが、公が東都に上ることになるや、また氏を伴つて上京し、爾來懇ろに教育を施した。英傑の温情は、そゞろ可憐な遺兒を發憤せしめずにはおかなかつた。氏は刻苦勉勵、遂に東京外國語學校を卒業して活



社會に出で、新聞記者を振出しに、或は大藏省の役人となり、或は著述家に實業家に、轉々己が安住の地を求めたが、志成らず、遂に化學の研究の自己に適所なるを覺るに及んで、某化學工業會社に入り、その重要なる地位を占むに至つたのである。

然るに大正九年の諸新聞紙上に、イタリーが地熱利用の研究に一道の光明を認めたといふ記事を散見した氏は、大いに心の動くものがあつた。學者の說によると、早晩人類が脅威さる〻革命的大問題は燃料の缺乏である。石炭の缺乏は百年の後に迫り、國際的角逐の焦點は、實に石炭利權の獲得にあるとさへいはれて、今や燃料問題は、世界の學者を驅つて、水力に風力に潮の干滿に、はては地熱の利用と、凡ゆる方面の研究に沒頭せしむるに至つた。この風潮に深く心を潛めてゐた氏は、『世界第一の火山國たる日本が、まだ地熱利用の研究に着手せざるに、早くも伊太利をして名を爲さしむるとは心外だ。よし！　俺は鄕里別府の豐富な地熱を利用して、この大問題を見事に解決し、以て人類生活のために奉仕しよう』

雄々しくもかう決心の臍を固めた廉一氏は、折角今日まで築き上げた社會的地位を一擲すると共に、悲壯なる覺悟を決して、遂に鄕里に向つて出發したのである。少年國を出でて四十年、人は既に鬢髮白からんとするも、山姿水容、舊によつて依然たり。到る所滾々として盡きざる温泉を見よ。別府一帶恰も噴火口上に坐するが如き、地熱の旺んなるを見よ。

『これある哉！』

廉一氏は斯う叫ぶと共に、別府温泉地熱地帶の研究に着手したのである。

曙光を見る

高橋氏が地熱研究に着手すると間もなく、伊太利の地熱研究に刺激された山内海軍中將も亦別府の天惠的地熱に着眼し、坊主地獄の附近に噴氣孔を穿掘して研究に着手したが、不幸にして中途病を得、中將も技師も相前後して斃れた。廉一は偶然にも同じ道を步める兩氏の靈を慰める意味で、己が實驗用の一に供すべく、その遺された噴氣孔を讓り受けて、單身之が研究に沒頭した。

種々苦心研究の結果、氏はその噴氣孔から噴出する熱の力で、十分低壓タービンを回轉し得る自信を得たので、直ちに上京して我國電氣學界の權威加藤正雄博士に一切の經過を告げたところ、博士も心大いに動いて、その擧を推賞し、之を九大機械學の教授山口博士に紹介すると共に、大正十年五月、兩博士は實地踏査の上この世界的大事業に助力を與ふるべきことを約したので、氏は雀躍しつゝ郷里に歸つた。

爾來、氏は兩博士と談合して、大正十一年の春には、鐵輪温泉のタオル工場と坊主地獄の噴氣孔とに、九大工科製作のシリンダーを据ゑつけた。試驗の結果は豫想以上の好成績をあげ、地熱利用の最大難關とするタービンの酸化作用を完全に防止する事にまづ成功した。而も僅に八十尺の深さで、攝氏百七十度の熱度と十一、七吋の壓力とを得たのである。

『もう一息だ。今少し掘下げたら確かに地熱利用を實際化することが出來る！』大なる自信に會心の微笑をたゝへながら、氏はいよ／＼學理から實際への本舞臺へ踏込んだのである。が併し、歡喜の背後には、恐ろしい現實苦が潜んでゐた。即ち事業に伴ふ財力！　それの缺乏である。

氏の財力缺乏に同情した加藤博士は、これを澁澤子爵に愬へてその援助を求めた。子は更に廉一氏と同郷で財界一方の雄者たる和田豐治氏に之を紹介した。廉一氏から詳細な説明を聽き、その眞劍な學究的態度を見た和田氏は、心やうやく動いて、大いに之が後援を吝まぬ事を契ふに至つた。而して和田氏が社長たる九州水力電氣會社の重役と協議の上、資金の一部を廉一氏に補助することに決した。廉一氏が和田氏からこの快報を得て、男泣きに泣きながら知己の恩に感じたのは大正十二年一月六日であつた。併し天無情にして、未だこの發明家に幸せず、和田氏は間もなく天下追惜の中に此世を去つた。かくして廉一氏の事業も亦一頓挫の已むなきに至つたのである。

電燈がついた！

『もう九分通り成功してゐるのだ。目的の彼岸に達するも、あまり遠くはない。もう一息だ。』さう心に叫びながらも、刻々と迫る財力難の痛苦には、全く骨を削るの思であつた。

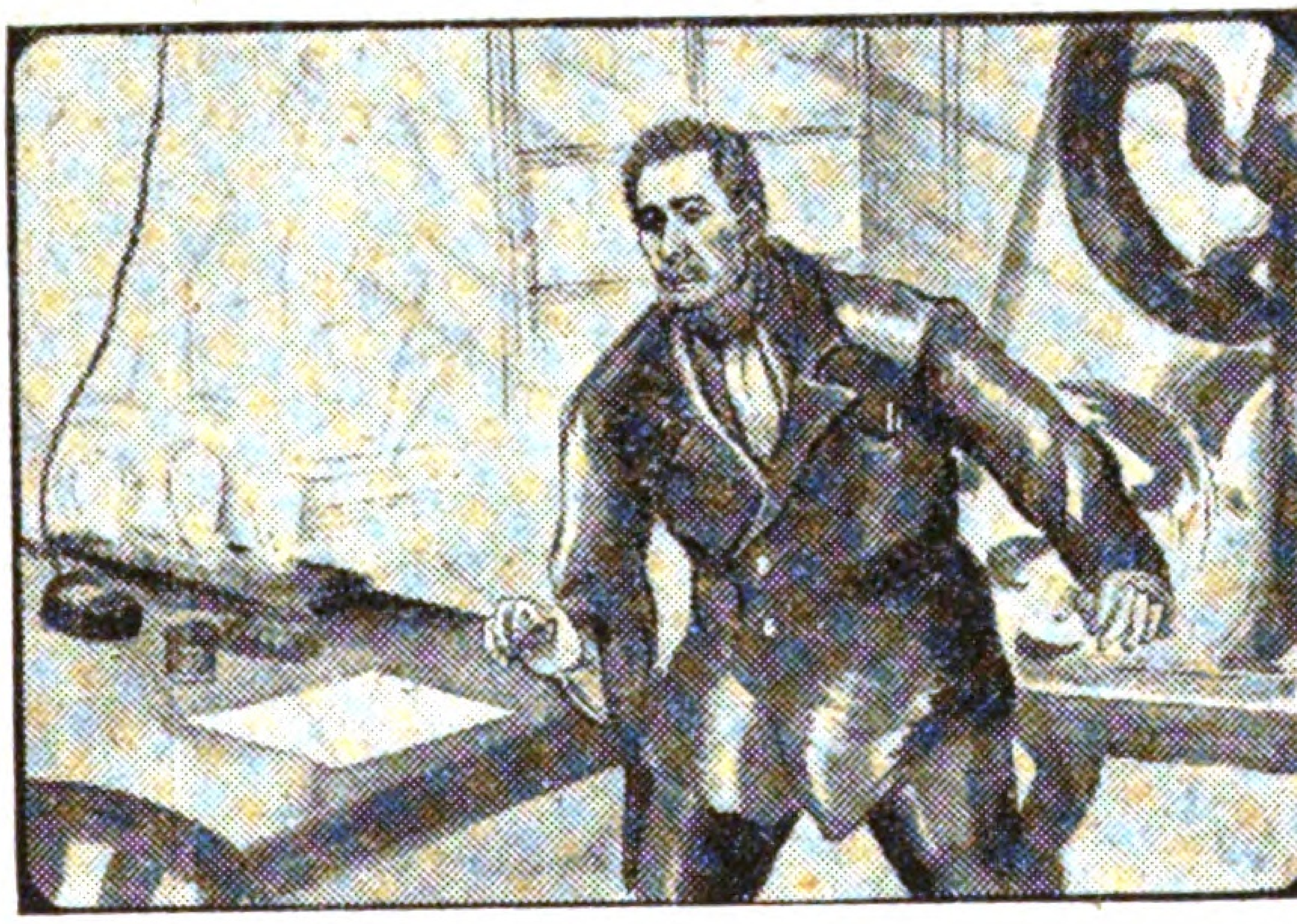
それから又一年の歳月は流れて、研究の功は着々として事實の上に現れた。この苦心の努力は、東京市燈株式會社所屬研究所長太刀川博士の知る所となり、大正十三年八月、研究費として五千圓を贈與され、同時に坊主地獄の噴氣孔に据ゑつける發動機が、東京市燈會社の手をへて三菱に注文された。

天養の福音に感激の涙を絞つた老研究家は、再び一年餘を默々として研究に沒頭した。

大正十四年十一月十三日午後六時五十分！　これ日本の最初の試みとして、學界の注目を惹いた地熱利用發電計畫に要するタービン及び發電機を坊主地獄の噴氣孔に据ゑつけ、東電及び三菱の技師立會の下に、いよ〳〵スヰツチをつないだ記錄的の時刻である。

骨と皮ばかりの痩せこけた双手をあげ、蒼白悲壯な顏面の神經をピリつかせながら、必死の瞳に無限の感慨を罩めた老研究家は、今や合圖を待つ技師達の前に立つた。

『よし！』聲に應じてスヰツチはつながれた。見よ、試驗場内に裝置された五個の百燭電球と無數の小電球は、一齊に燦然たる光を放つたではないか。一瞬にして此世ながらの光明世界が現出したかに見えたも無理はない。一同は思はず萬歲を三唱して、この成功を祝福した。



『お〻電燈が點いた。九年の努力が、やつと酬いられたのだ』

廉一氏は狂人の如く踊り上つて、立會の技師に縋りつきながら、聲をあげて泣いた。かうして劇的な感激の場面が夜の更ける迄もつゞいた。この一大快報に接した太刀川博士は、親しく實地を視察した上、いよ〳〵高橋氏の研究になる地熱利用の實用化と其偉力とを確めて歸京した。

負債實に七萬圓

その後、東京電燈會社では、これが事業化を目論みつ〻あつたが、諸種の障碍は遂にこの事成るに到らず、老研究家の功績は、今日未だ世に顯はる〻の時機に達してゐない。氏は實に第一期の完成に九ケ年の長日月を費したが、物質的に酬いられたところは一もないのである。たゞ社會奉仕を念願とする高橋廉一氏は、この血涙をそ〻いだ犧牲的研究を土臺として、更に第二期の計畫に研究の歩を進めつ〻、之を事業化する篤志家の出現を待ち望んでゐる。

氏はこの間私財を蕩盡したことは言ふ迄もなく、今日約七萬圓の負債を重ね、親戚には見放され、知己朋友には見棄てられて、家財の差押はもとより電話は抵當流れとなつて、見るも悲慘な境遇に呻吟しつ〻、米鹽しばしば缺乏を告ぐるも、氏は生活の困苦を超越して、たゞ一向に精進してゐる。而もその酬いらる〻は何れの日ぞ。（完）

模範的教育村

山陽新報記者　巌津政右衛門



金岡助九郎氏

草深い文化村

聖代に生れた有難さ、女ながらも一人前の教育に事缺かぬ御時勢ではあるが、これは珍しい片田舍で、村の娘は一人殘らず村費で入學させるといふ高等女學校がある。それに風變りな教員養成所まであつて、村の小學校の校長から訓導まで全部が養成所出のお手のもの、それはまだしも一寸其所らで立話をしてゐる若い主婦さんから肥桶かつぐ若い衆や役場の小使、さては番頭運轉手まで少し氣の利いた者なら准教員か專科正教員の免狀ぐらゐは持つてゐようといふ、それこそ文字通りの文化村、而も村では稅金一文取らぬと聞いては、誰しも一寸驚かされる。

備中の高梁町といへば、去年の春やつと伯備南線が通じて、鐵道の恩澤に浴したばかりの山奥だが、そこから更に北へ木野山驛まで汽車で、その又先を乘合自動車で三十分、山又山を分け入つた上房郡は有漢村、まこと見る影もない一寒村だが、これこそは世界にも稀しい教育村、戸數僅かに五百六十戸の中、現在中等教育を受けさせてゐる家庭が三百八十六戸といふのだから、教育熱の旺んなる推して知るべしである。

農村式女學校

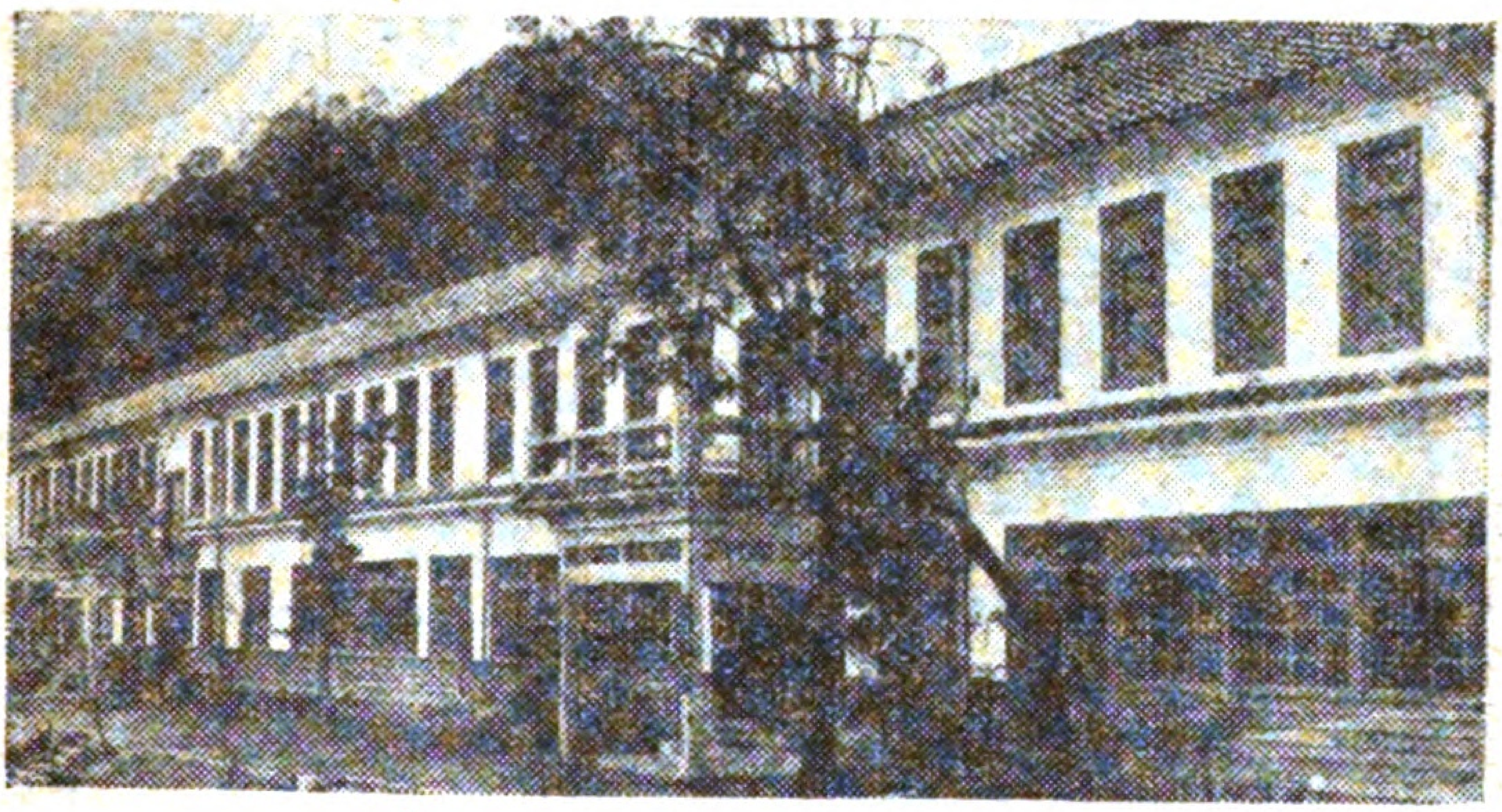
有漢村の高等女學校は、大正十年、實科高等女學校として設立されたものだが、同十四年に正科の高等女學校に引直され、今日に至つてゐる。

一家の中心たり土臺たるは主婦でなければならぬ。その主婦となるべき娘には、どうしても教育が無くてはならぬ。今日、男子は積極的に知識を外に求めることも出來るが、女子では容易くさうはゆかない。殊に草深い有漢村ではそれが難しい。これはどうしても自分の村で娘達を教育するに限る。それが安全でもあり當然でもある。結論がこゝまで來た時、村では相談が一決した。そして女學校が生れた。

そこで主義として、村の娘は一人殘らず入學させなければならぬ、それには授業料全部を村費で負擔すべきであると云ふこ

とになつて、こゝに初めて教育の機會均等が完全に行はれることになつたのである。日本廣しと雖、こんな村がどこにあらう。まづその入學歩合を見るがよい。大正十四年度には小學卒業生百人に對して九十八人三二、同十五年度には九十九人一〇、昭和二年度には驚くべし、百に對する百で、よく／＼低能兒か不具者でない限り、悉く村の娘は女學生樣なのだ。また同校卒業生總數三百十八名の中、有漢村だけで二百二十八名、在校生總數二百十五名の中、有漢村民百四十一名といふ數字を示してゐる。勿論、農村に於ける高等教育であるから、その色彩も亦これに準じてゐる。

一、親の爲に尊い汗を流せ。



——有漢高等女學校——

二、君の爲に淸き血を流せ。

三、人の爲に熱き淚を流せ。

この三流主義を教育のモットーとなし、土に親しむ勤勞的人格の養成に努めてゐる。だからこゝでは農業科が正科になつてゐる。百姓が嫌ひだ、給料取りのお嫁になりたいなどと云ふ娘は、こゝの卒業生には見られない。ましてや斷髮のモガなんぞ、化物ぐらゐにしか思つてゐない。

一昨年五月、聖上いまだ東宮に在しませし時、岡山縣に行啓の砌、有漢村の事を聽召されて、特に土屋侍從を御差遣、具さに現狀を視察せしめ給うた。而して昨年一月には、全國優良村として內務省の推獎する所となつたが、その記念事業として村では同女學校一二年生に對しては、他町村の者といへどもすべて授業料を免除すると云ふ特典を設くるに至つた。

因みに同女學校一ケ年の經費は現在一萬五千圓である

特異の教員養成所

この女學校に次いで特記すべきは、教員養成所である。これは明治三十七年日露戰爭當時、青年教育者の多くが兵士として召集され、教員の拂底を告げた爲に、時の縣會議員佐藤晋一氏が准教員養成所を設立したのにはじまる。

今では裁縫專科正教員部、尋常科本科正教員部（女）、小學校本科正教員部と、系統的教員養成機關を備へ、財團法人として基礎を固めてゐる。縣費や村費の補助も數千圓に上つてゐるが、

付合議員や村當局や村の富豪が維持員となつてゐて、經費不足の時は村費で補ふことになつてゐる。同所では、別に高梁町まで乘出して、そこに男子正教員養成所まで設置してゐる。

創立以來の卒業生は、男女を通じて三千三百七十二名で、在學生四百名に上つてゐる。岡山縣下の青年教育者には、この養成所の門をくゞつたものが多く、校長になつてゐるものも多數ある。かの全國的に名を知られてゐる女學校長山上峰女史は、こゝの卒業生だといふのも自慢の一つ。

尚、この養成所の注意すべき特色として、はる〴〵植民地から笈を負うて、この山奥へやつて來るものゝ多いことである。卒業生中に、朝鮮人三十五名、臺灣人百二十五名、その他沖繩人六名、北海道人十三名といふのは、何と異數ではあるまいか。在校生中にも臺灣男子十三名、女子一名、朝鮮男子十六名、女子三名、沖繩縣女子四名、北海道男子二名といふ有樣で、この學校が寧ろ植民地間に如何に有名であるかゞ窺はれるのである。

中心人物金岡氏

述べてこゝに來た時、吾人はこの教育事業の中心人物たる金岡助九郎氏の事を逸するわけにはゆかぬ。金岡氏は有漢高等女學校長であると共に、同教員養成所々長でもある。實に金岡氏は、これらの設立者であり、經營者であり、校長であり又教諭であると共に、その全責任者であるのである。

金岡氏の人格や才幹や學識が凝つてこゝに燦然たる光を放つてゐるのが高女であり養成所である。三浦主義をモツトーとしてゐるだけに、その血と汗と涙とで、この聖なる事業が出來てゐるのである。

今までにも度々氏の榮轉を慫慂する人もあつたが、金岡氏は頑として應ぜない。この有漢は人煙稀れなる片田舍だが、教育の點では全國隨一を誇るに足る。そこの主となつて一生を終る、また男子の本懷ではないか。これが金岡氏の抱負である。

從つてその教育ぶりも、溌溂たる生氣があり、決して劃一的な重箱主義ではない、伸び〴〵と實に氣持がよい。有爲な眞の教育者をつくらう、一家を支持する新時代の農村的主婦をつくらうといふ氏の徹底した教育ぶりは洵に天下の珍とするに足りよう。

從つて『學校のニコニコお父さん』として、卒業生男女三千幾名の教育者から慕はれ、數百名の主婦連から懷かしまれるのも無理はない。而して事ある毎に、何をおいても先づ先生に相談してといふので、一身上の相談を持ちかけられ、金岡氏の机上には、何日その相談状が五六十通に上るといはれる。もし二三日學校をあけるやうなことでもあると、校長の机上には手紙が積んで山をなすといふから、その返事を出すのにも、並大抵の事ではなく、徹夜をすることも決して稀しくないといふ話である。

ドン底から憤起

併しかうした模範的教育村が出來上るには、またそれだけの由緒がなくてはならない。實にこの有漢村は、嘗ては悲境のドン底に呻吟して、遂に發憤蹶起、今日あるに至つたのである。

今から二十年前、即ち明治四十一年前後に於ける有漢村は、全く目もあてられぬ慘狀を呈してゐた。村の大地主は枕を列べて倒産し、それまでは他村から毎年三千五六百俵の年貢米がはいつてゐたものが、逆に今度は村内から他村へ年貢米を送出さねばならぬといふ状態に陷つたのである。

村の田地は次ぎから次ぎと他村の人の手に渡り、村民は重い課稅に青息吐息のみじめさ。役場員が首吊り自殺を遂げる。村の青年は自暴自棄で酒をかぶるやら、駈落ちするやら、全く村には恐ろしい最後の日が近づいて、人々はたゞ恐怖に戰いてゐるといふ陰慘な日ばかりがつゞいた。

かうなると、部落同志の間でも自然醜い爭鬪が絶えず、村民は妻子もよそに、毎日寄合ひ〳〵で評定に日を暮らし、經濟上にも思想上にも忌々しい危機が直面してゐたのである。



この時敢然として起つたのは、當時の村長中山祇重、今の村長で時の助役蛭田傳助、及び金岡助九郎の三人であつた。三氏はまづ村運挽回策として、思想の統一、經濟の獨立、一致團結の三ケ條をあげ、更に實行方法として、次の五項の村是を決定した。

一、勤儉貯蓄を奬勵して、健全なる經濟的發展を期すること。

一、教育の普及と向上を圖り、以て堅實なる文化の進展を期すること。

一、立憲自治の思想を養成し、以て皆和協同の美風を馴致すること。

一、國家的精神を涵養し、國民道德の振興を期すること。

一、體力の增進を圖り、以て生産能率の增進を期すること。

この大精神の下に、戸主會、主婦會、壯年會、處女會などを設け、一面部落間の融和を圖ると共に、常に『無産者の力は只團結あるのみ。一致あるのみ。協力あるのみ。固く堅く團結せよ』と、聲を限りに叫んで、眠れる村民の覺醒を促し立てた。團結すれば信用が生れ

る。信用が出來れば資金が借りられる。金が出來れば土地は村民の手に歸る。一年、二年、三年、村は漸次に復興の曙光を認めだした。かくして大正八年、もうこの頃には村には基本財産の牢乎として拔く能はざるものがあり、その生産剩餘金で立派に村費を支へ得るまでになつてゐた。現在、村の基本財産は約五十萬圓に達し、それから生ずる一ケ年の收益は、現金利子二千圓、土地收益五千圓、村營醸造會社配當金六千圓、營造物收入一千圓、山林伐木收益五千圓、其他各種施設收入六千五百圓、計二萬五千五百圓に上る。

然らば、その收益を如何に利用して居るかといふに、教育施設に大部分を投じ、餘りを養蠶業、副産物奬勵（繩、莚、雨傘製作）及び煙草耕作奬勵、耕地整理等に費して居るが、その利益が又、年々、養蠶業三萬圓、繩、莚、雨傘の製作二萬圓に上るのである。だから、村費戸數割などは、一文だつて徴收する必要がなくなつたのである。最後に記者は、有漢村民が如何にして、かゝる巨額の基本財産を積上げたかを、村長蛭川傳助氏に訊ねて見た。同村長はつつましく『これ迄にするには粒々辛苦致しました。苦しい中から、毎年必ず五千圓づつを積立て、それから村の年々の經費の剩餘金繰入は勿論、一時村民から三萬二千圓ばかりの寄附金も仰ぎましたし、又、村で土地を購入して、これを村民に讓渡した收益二萬圓などを積立てて、遂に今日に至つた次第です』と感慨に堪へぬ面持で語つた。

嗚呼艱難汝を玉にす――吾人は有漢村に學ぶべき多くのもののあることを知らねばならぬ。（完）

一生の重寶

一記者

文字を知らなかつたり、間違へたりする爲に、我々は一生の間に、どんなに縮尻をやり、恥をかき、損をすることか知れません。然らばそれを防ぐ爲にはどうするか。字引を引くより外ありますまい。新聞雜誌を讀むのにも、讀めない字や意味の分らぬ字は字引に當つて見る。それが積つて自然と物識になり、立身出世の本となります。

字引にも色々あるが、實際に使つて見て本當に役に立つのは、何といつても大字典（東京神田三崎町啓成社發行）が一番だと思ひます。第一に引き損ひがない。第二に文字や熟語の數がズバぬけて多い。第三には國語でも漢語でも、苟も漢字で書く語ならば何でもある。さすが學界の權威が十年苦心の結果出來たものだけに、實に至れり盡せりです。殊に近頃出た昭和新版は、印刷、紙質、製釘、組方、體裁、實に申分のないスバらしい出來榮で、今日の處、日本では、これ以上の字引は一寸出來まいと思ひます。一年や二年で直ぐ飽の來るやうな物とは違ひ、人生一代、日々座右において、知識の庫と寶すべきもの、否、子にも孫にも傳へて役立つ本當に良い字引。四圓の定價は廉いものです。私共は責任を以て此の大字典をお勸めすることが出來ます。

隠れたる八年間

松波靜男



大橋巡査

一　戸口調査

勤勉で實直な大橋巡査は、小さな戸口査察簿を手にして、每日丹念に受持管内の戸口調べをやつて歩きました。

『今日は、お宅の御家族は何人？　戸主は？　原籍地は？　病人はありませんかね？』

言葉つきから態度から誠に丁寧であり親切である。『若いけど、親切ないいお巡査さんだ』――さうした評判がどこからともなく立ち初めました。

御承知の人もありませうが、麻布下笄橋派出所の管内といへば細民の多いところです。從つて巡査の優しい態度は、貧しい人々にどんなにか親しみとうるほひを投げたことでせう。

それは大正八年の七月、大橋巡査が巡査教習所を卒業して、警視廳巡査を拜命し、麻布六本木署勤務となつて、この下笄橋詰を命ぜられてから、まだ間もない頃でした。

或る日――彼は何時ものやうに、麻布笄町五十一番地附近を型の如く『今日は』……とやつてゐました。

軒の傾きかかつた棟割長屋、狹い溝板。陽あたりの悪い、じめじめした薄暗い室内からは、赭茶けた臭ひの臭が、ぷーんと鼻をつく貧しい人達の住む街です。

そこの薄暗い一軒の家の門札には「生井留吉」と書かれてありました。かうした場面に馴れきつた大橋巡査は、例によつて開け閉ての具合の悪い障子をゴトン〳〵と高い音をたてて、じめついた庭に立ちました。

『生井さん、戸籍調べに來たよ』劍の音とその洋服を見て、六疊一と間きりの部屋の隅で死んだやうになつてゐた老夫婦が、むく〳〵と起きあがると、『へい、旦那さま御苦勞さまです』といつた。

起き上つて來た二人と部屋の中の樣子を見て、職業柄、貧しい悲慘な夫婦者であることを知つた。彼は二人の身の上について、いろ〳〵と聞いた。老夫婦は大橋巡査の優しい慰めを喜びつゝその身の上をこま〴〵と語つた。

留吉老人は七十五才、婆さんのおこそは七十二才、三界に

骨肉の繋がるのは此の二人きり。子供もなければ、親戚知己もない。貯へのある身ではなし、老い先きの短かい二人が行末は、話よりも涙が先きでした。留吉老人が丸の内のさる會社の夜警番をして僅かの金を貰ひ、二人がほんの食ふだけの生活をしてゐるといふのです。やがて冬が訪づれるといふのに、見ればつぎだらけの寒さうな着物を着てゐるではないか。大橋巡査はホロリとしてポケットに手をつッ込むと、若干の金を握つて、

『爺さん、何か買つて喰べな』と渡した。老人夫婦は頭を疊に擦りつけて、感謝した。

それから後といふもの、大正十年六月派出所勤務から抜擢されて衛生係として内勤巡査になるまでの二年間、雨の降る日や風の夜、暑い寒いにつけて、留吉夫婦を訪ねては慰めてやつたり、米、味噌の世話をしてやつたことも數へ切れない程だつた。近所、隣の長屋の衆も、大橋巡査の温かい情を口を揃へて賞め立てた。

だが、讀者諸君。これだけの話なら、必ずしも大橋巡査に限つたことではない。さうした感心な巡査は隨分他にもあります。大橋巡査でなければ出來ぬといふ美談の美談たる所以は、これからです。話は愈よ本筋に入つてきます。

二 星霜八年

衛生係を拝命してからも、大橋巡査が勤めの歸りや非番の日に、留吉夫婦を慰問してやることは絶えなかつた。

とかくする中に、話は彼の幾多の悲劇を、生んだ大震災に入る。

留吉老人も悲劇中の一人となつて、震災以來、中風症を起し、自由も叶はぬ身となつて、陰慘な長屋に、薬餌とも親しめず、苦悩の日を送らねばならなかつた。婆さんの歎きはいふまでもない、大橋巡査もそれからは一層足しげく病床を見舞つてやり、又金品の補助もしてやつた。遂に自分だけでは充分な世話もしてやれなくなつたので、妻君のとみ子さんに委細の話をして應援を求めた。




大橋巡査夫人と夫人の姉君の愛孃

もとより斯うした模範巡査の妻君だけに、嫌といふ筈がない。『それはお氣の毒、妾も出來る丈のお世話をして上げませう』と、それからは、大橋巡査が勤務の爲に見舞に行けぬ日は、とみ子さんが老いたる父母に孝行するやうに、甲斐甲斐しく凡ての世話をしてやるのでした。

老夫婦も、大橋巡査の情にばかり頼つて生きてゆくことは有難いが餘りに勿體ないといふので、婆さんは赤羽橋の專賣局工場の小使に雇はれて、毎日三四十錢の日給を稼いだ。しかし婆さんの腕一本で病人を抱へ、六圓近い家賃を拂つて、貧しいながらも一家を支へてゆくことは勿論出來ない。その足りない分は大橋巡査が凡て見てやつてゐたのでした。

大橋巡査は昭和二年四月九日、衛生係から防犯係に、更に九月、高等係に榮進した。

三　留吉の死

その年七月十八日の夕暮、留吉老人は危篤に陷つた。大橋巡査の名を呼びつづけ、『旦那、永い間、御厄介になりました、有難うございます。この御恩は死んでも忘れは致しません』と、その最後の五分まで、『有難う』を繰り返しつつ靜かに死んでいつた。

その日、勤務から歸つて、留吉老人の死を知つた大橋巡査は、そのまま留吉の家にと夫婦で驅けつけた。永の患ひと貧で葬式を出すことはもとより、死體の始末にも途方に暮れてゐた。大橋巡査は老衰と悲觀で死んだやうになつてゐる老婆を扶けて、骨と皮とばかりの老人の死體を抱きあげて湯灌をしてやつた。それから火葬、骨あげ、區役所等への手續など一切、全くそれは自分の兩親にする孝養そのもの丶如き眞情の現はれでありました。

『大橋の旦那は、よくあれまでに面倒を見てやつた。爺さんもあれで成佛するだらう、でも感心な巡査ぢやないか』と噂は噂をうみ、何時か町内の評判となつた。町會の役員もこの奇篤な話を耳にして、このまゝ捨てておく譯には行かぬ、なんとか表彰の方法を講じようではないかと相談をはじめた。それが遂に署長の耳にも入つたので、署長は部下に大橋巡査の素行調査を命じました。

調べて見ると以上の如き事實——八年間の久しきに亙つて、

この哀れな老人夫婦を救ひつゞけたことが明瞭になつた。けれども當の大橋巡査は『お話しする程のことではありません』と云つて、多くを語らない。

大橋巡査は拝命以來一月の缺勤もなく、その爲に大正十三年四月十五日精勤賞を受けた。これより先、大正九年には御來朝の英國皇太子殿下御警衛により、大震災の時には人命救助の功により、いづれも賞與を貰つてゐる。

そのほか、大正天皇の御大葬、明治神宮祭の警戒等でも賞を受け、同僚間の氣受けも頗るよろしく、立派な模範巡査であることまで判明したので、署長は直ちに宮田警視總監にむかつて其の旨を上申し、總監からその善行を表彰されました。

四　貧者の一燈

積善の家に餘慶あり――極めて薄い俸給の中から小遣錢を割いて、八年間、然り八年間――半年や一年たらまだしも出來ろ、否、それすらも今の世には極めて稀なる奇特の行ひといはねばならぬ。然るに八年といふ長い間、人知れず此の老夫婦のために施した眞心こそは、正しく「貧者の一燈」の尊さである。誠に以て昭和聖代の警察美談として、特筆大書すべきものであらねばならぬ。



記者は親しく麻布六本木署を訪うて此の話を聞き、感激の涙を禁じ得なかつた者であります。よつて茲にその聞いた儘を讀者諸君にお傳へして、この尊敬すべき大橋巡査の隠れたる德行を禮讃したいと思ひます最後に申し上げておきます。

大橋巡査は名を仲之助君といひ、栃木縣那須郡境村上境三四二番地に生れ、二十八歳まで村に在つて鋤鍬を執り、土に親しむ生活を送つてゐましたが、大正七年、志を立てゝ上京し、警視廳巡査を志願したのであります。

大橋君は本年三十八歳の働き盛り、妻君の富子さん（廿八歳）との二人暮らしで、現に麻布區霞町二十三番地に、平和な家庭を營んで居られます。（完）

小間物屋大學生

北國新聞記者　岡谷清次郎

北國は十月にはいると、もう冷たい霙が降る。時には紅葉の盛りに霰が飛ぶ。そして雪にうづもる冬が、しづかに這ひよつて來る。

その寒空を厭はばこそ、百萬石の金澤市中を、汚いこはれかゝつた乳母車に、一攫みに足りない僅かな石鹼や化粧品を積んで、根氣よく行商に餘念ない苦學生がある。

『こんちは、いつもの小間物屋でございます、何か御入用の品はありませんでせうか、石鹼、マッチ、油に白粉……お子樣にはヒヨツトコ面や風船玉もございます……』

紫紺の服に金釦、角帽姿といへば立派だが、垢によごれたボロ服で、軒別に次から次へと廻つて歩く。買ふ方でもお馴染になつて、

『いつもの苦學生さんだ、この寒いのに感心なことぢや。ドレ一つ買ひませうか、隣りのお内儀さん、どうですな』

といつたやうな調子。同情を一身にあつめて、近所界隈の噂の種。今では「小間物屋の苦學生」として、金澤市中で評判となつてゐる。

この苦學生こそは、代田爲一君（二二）といつて、金澤醫科大學藥學部の一年生、金澤市木町二番丁のささやかな家がその住ひである。



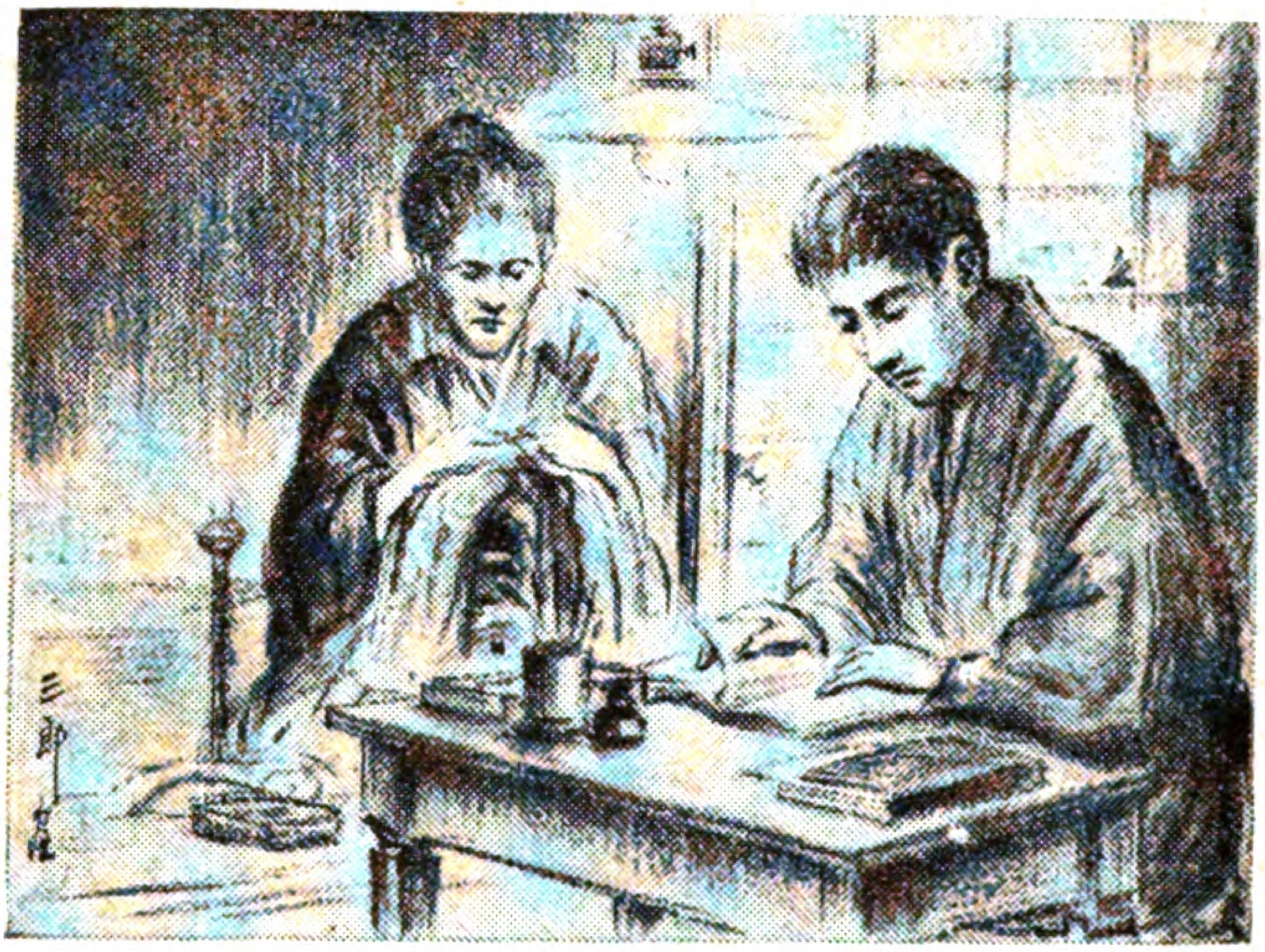
爲一君は十歳の時、父に死にわかれて以來、母の手ひとつで育てられた。

當時家庭は赤貧洗ふがごとく、中學校はおろか、小學校さへも通はせることの出來ぬ乏しさであつた。

母は何とかして爲一君の志望を遂げさせて、せめては商業學校へなりと入學させたかつたが、とてもそんな餘裕がなかつたので、大阪の親戚に預けて、奉公口を探さうとしてゐた。

當時馬場小學校に在學中の爲一君は、これを知つて一度は非常に落膽したが、併し向學の一念は却つて之がために一層の根强さを加へ、今は死んでも學を廢することは出來ぬと、熱心に母を説いて、勉學の餘暇、勞働して母をも養ひ、學資をも作るといふ計畫の下に、無理やりに上級學校へ入ることを許して貰つた。

かくて爲一君は金澤第二中學校に入學した。毎日學校から歸ると乳母車を引いて小間物行商に歩くのであつた。降る日も、照る日も、風も、雨も、君の前には何でもなかつた。かうして得た僅かな利益で、君は母と二人の乏しい生活をつゞけつゝ熱心に勉強した。やがて苦勞は酬いられて昨年の春首尾よく三番の成績で中學を卒業した。さうして名古屋高商、



高岡高商金澤醫大藥專部の試驗を受けて、三つとも見事に合格した。爲一君はその中で特に藥專を選んで入學した。學校は變つても小間物の行商は依て變らず、今もなほ熱心に續けてゐる。

　爲一君が行商に出た初めは、學友や先生に見られるのが恥かしくて堪らず、裏町を裏町をとわざと日蔭を選んで歩いてゐたが、今では天下晴れての行商人となつて、町から町へと限なく賣り歩いてゐる。恥かしいどころか、寂しいどころか、學友や先生に出會すと、誰れも彼れも爲一君の勞をいたはつて吳れるし、得意は段々殖えて、君の行くまで買はずに待つてゐて吳れる。中には食ぱんや學用品などを惠んで吳れるものさへある。菓子や果物を貰つても、決して一人で喰べてしまふことはない。必ず持つて歸つて母に與へ、その喜ぶ顏を見て、共々に人人の篤い心づくしを味はふといふ。

　爲一君のお母さんは、かう言つて喜んでゐる。

『あの子の行商姿を見てゐると、妾は可愛さうで泣き出したくなります。貧しい家に生れたばかりに、人並な勉強も出來ず、朝は學校へ行く僅かな時間を、歸つて來ると夜遲くまで働いてゐるのが、いぢらしくて／＼なりません。妾は石にかじりついても、あの子の出世するのを見た上でなければ死ねません。毎日毎夜、妾はあの子の體の丈夫なやう、そして屹度あの子の望みが遂げられるやうと、先祖の位牌に祈つて居ります』

　お母さんは、爲一君が夜の更けるまで勉強してゐると、次の部屋に熱心に縫ひ物などして、決して眠らうとはしない。

　この床しく美しい母と子は、いま金澤市中の語り草となり、青年の龜鑑として推賞されてゐる。

世界唯一の發見!!

肺結核直接吸入療法

專門諸大家の推奨!!

僅か一度で効果が解る……

實驗者悉く驚嘆……

肺病は癒るか

元來肺結核の癒ると言ふ事は第一には患者の榮養が亢進し體內の白血球が十分に活動して黴菌を食ひ殺して了ふ場合と第二には病氣の場所の周圍に堤の樣なものが出來、そこで病氣になつて居る肺組織を取り巻き俗に言ふ固るといふ外にはないのでありますから從來の內服藥等では胃腸內の分泌物に依て非常な變化を受け肝腎の肺に行くまでにはどれ丈その成分を吸收されるか殆どその効力の點についても疑しいものであります。

事實に於てこの肺結核の根本的全治療法乃至は全治藥と言ふものは遺憾ながら未だ今日まで發見されなかつたのであります。

世界唯一の吸入療法に成功

然るに今回苦心研究の結果、漸く呼吸器に對して直接作用ある吸入藥**ゲンコール**を創製せらるゝに至りました。この高級吸入藥**ゲンコール**は單に坊間のありふれた賣藥類の比ではなく、全く進歩した現代科學の生んだ賜で、その偉大なる殺菌力によつて肺組織や全身に及す驚くべき効驗は全く豫想外の好結果をさめ實驗者悉く感嘆激賞して居られます。

敵を見極めて彈丸

然も他の內服藥などと違ひこの吸入藥を用ふるならば敵を見極めて彈丸を放つも同樣でありますから、その効果は百發百中然も全身的に榮養をよくし局部的にはこの卓越した直接療法をしたならば之こそ全く理想的な治肺療法で之まで幾多の臨床實驗に於てもこの偉大なる治驗を認められ之なら愈々自信を得てこゝに天下幾十萬の同病者救濟の爲一面私に誇を感じつゝお報せ致す次第であります。

なぜそんなに良く効くか

僅か一回の吸入でもその効果が現れ初期のものは申迄もなく二期三期の者でも自覺症狀を非常に輕減し治癒を促進させます。

元來肺結核には內服藥より直接療法の吸入が良いといふ事は東西の大醫が認めて居りながら未だ今日までに實現し得なかつたものをはじめて**ゲンコール**に依つて公表されたもので肺患者と言へば醫師は直に海岸か山地に轉地をすゝめるのは空氣候が良いからで**ゲンコール**は玆にヒントを得て居乍らにして海岸に居ると同じ空氣を吸ひ得る樣にし特にこの藥の有効成分の一である有加里の如きは有加里樹の葉から取つたものでこの葉は空中の酸素をオゾンに變る作用がありこの樹のある處には肺患者はないとさへ言はれて居ります。

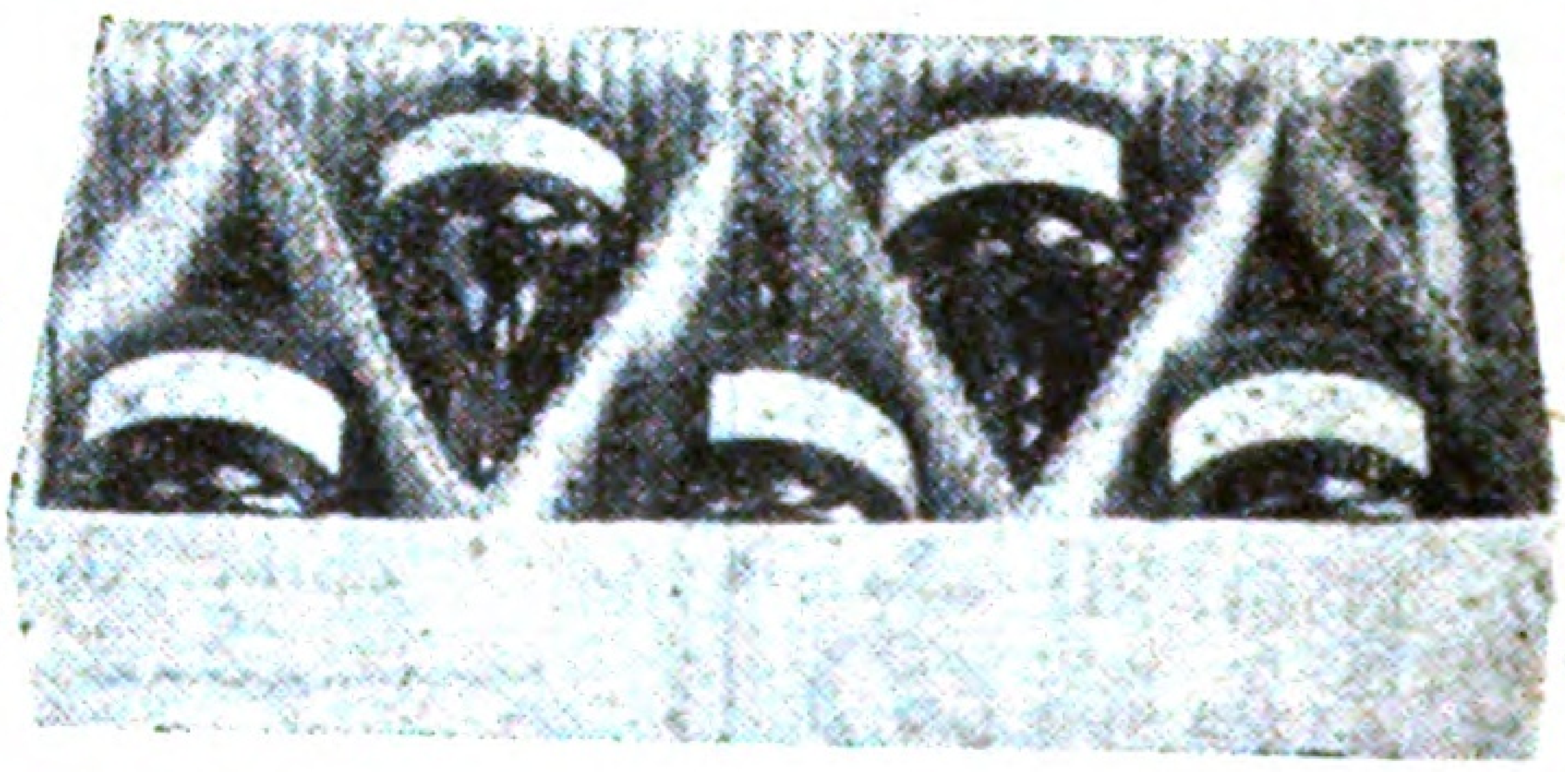
之はほんの一成分に過ぎませんがその他殺菌劑、粘液を溶解するもの等の高貴藥を多量に配劑してその効力の偉大なる事は多數實驗者報告に依つても明かなる事實であります。

咳が止り蘇生の喜び

東京戸塚町三三六 寺田保正氏曰く 私は幼少の頃から身體が弱く前後二回も肋膜炎に罹りました、又昨年九月初め頃から咳嗽、喉痰、寢汗等があり夕方になると微熱が出ましたから近所の醫師の診察を受けました處右肋膜炎と左肺門線結核であるとの事で爾來醫藥に親んで居りましたが朝起きた時に咳がひどく出嘔吐をさへ催す事が屢〻でした、處がゲンコール吸入藥を早速使つて見ましたら其の日から咳も減り痰も少く氣分も晴晴しく食慾も進み日々に健康を取り戻し今では非常に元氣になりましたと又神戸三ノ宮

三邊德太郎氏は 咯痰の多く出るのに困りぬいてゐましたが今回發見された吸入藥**ゲンコール**を使つてから咯痰は薄くなり痰のきれが非常に**よく**なり胸がスートした樣な氣持になつた、結核病者で海岸等に轉地療法等も意のまゝにならぬ方又常に塵埃の多い中に働いてゐる人達などは是非吸入したいと言はれ、

東京牛込早稻田鶴巻町 市川壹伴氏 私の知人二人までかなり重症の肺を病つたが不思議に良くなつたので、痰の爲に苦しめられ身體がだん〱衰へて行く私も**ゲンコール**を使ふ氣になりやつて見ましたが實によくきくのに驚きました、先づ一回丈で咳も減るし氣分も大變よくなりました。



絶望の淵より救はれた子供

去年の冬私の子供は痲疹に罹り遂に肺炎を出發しその上、膿胸とか言ふものまで起しセキは出る痰は出る呼吸困難となり體溫は高く脈など素人には觸れなくなりました。勿論醫者から注射や藥や酸素吸入やと出來る限り手も盡くしましたが最早如何ともなし難く死を待つのみとなりました。その折思ひ切つて人の勸めるまゝに吸入藥ゲンコールを吸入させて見た處不思議やそれからグン〱とよくなつて俗に「煎り豆に花」はこの事だ家中涙を流して喜び合ひましたと。

附記 今迄に内服藥や注射をやつても一向に効果のない方は是非一度御試し下さい。勿論それ等の治療をやり乍らこの吸入藥を御使用する事も良策で決して副作用等起す心配はありません

ゲンコール吸入に依つて咯痰は稀釋となり咯出し易く咳嗽を鎭靜せしめ、呼吸困難を緩和して殺菌消炎の諸作用に依り肺結核治療を促進する事は勿論でありますがその他喉頭結核、氣管支カタル、肺炎、百日咳喘息等にも卓効あると盛に賞用せられて居ります。

吸入藥ゲンコールは普通用アンプレー（圖形の硝子球）に入れたもので使用の折には添付のヤスリで管頸部を切りそのまゝ吸入器にかけて適宜に使用して下さい。

1. 2. ヤスリで管頸部を切り、 3. そのまま吸入器へ



高級吸入藥ゲンコール藥價
普通用アンプレー五個箱入（約二百瓦）一圓八十錢補給用德用瓶（約五百瓦）二圓二十錢病院用（大德用）（約一千瓦）三圓五十錢送料内地二十五錢
領土六十錢

東京市本郷區駒込 下町四八
發賣元 大日本雄辯會代理部
振替東京四〇二三〇番

婦人病胃腸病冷え症等に

折紙つきの卓効あるラヂウム温灸

熱くなく痕を殘さぬ氣持よい温灸器の發明

温灸は灸の缺點である熱いことと瘢痕を殘す事を改良工夫し誰にも氣持よく極手輕に治療出來る樣にしたもので、この温灸の効能に就いては今更申上げるまでもなく之に依つて何十年來の慢性胃腸病、神經衰弱症、貧血症、不姙症、リヨウマチス等が忘れた樣に治つたと言ふ例は少くありません。

然もこの温灸器は在來品のあらゆる缺點を補ひ棒狀に壓縮された艾を入れ獨特のラヂウム罨法藥を裝置して懷爐同樣に腹部にあて上から帶でおさへておけば執務中でも睡眠中寢返りしても懷爐兼用となり家庭で手輕に治療も出來殊に多忙な執務家から非常な歡迎好評を戴き、發表以來益々評判となり、現に海上ビル内東邦電力會社に於ては副社長松永安左衛門氏以下常務の竹岡陽一氏理事宮川竹馬氏總務課長青柳有美氏經理課長山縣氏其他高級社員方の御愛用を賜り尚東京電力株式會社常務進藤甲兵氏專務宮口竹雄氏庶務課長山崎金作氏營業課長久光公正氏は三個も又土木課長石井次郎氏外三十餘名御試用を戴き『これは便利だ重寶だ』と御推奬、又麹町區富士見町一丁目の濱田家の老母は始めて使用して肩のコリを忘れたと非常に喜び富士見町一帶に大宣傳十七個も紹介、



芝區白金三光町八二川俣機工場の老母は從來ぜんそくに冒され毎日二回も注射を續けて來たものが約三週間程本器を使用した丈で見違へる程に恢復したと禮を述べました。又府下十條の小島きよ氏は毎年半歳位の臥床をする程の胃腸病もこの温灸器を使用してから風邪一つ罹かぬ身になつたと大喜び。

大峯行者、行法院、關口西明師は全國に多數の信者を有し「弘法大師ごむそう灸」の名師として名高く患者達は「手を觸れた丈でも治る」とまで灸治療を信じて居る有樣なのに今回このラヂウム温灸の奇効を賞讃せられ特に推奬狀を寄せられた程であります。

その効驗の偉大なる事は今更喋々する迄もない事で、冷症、不姙症、便秘症、貧血症などの恢復した例は少くなく日々感謝狀は机上に山を爲して居ります。殊に胃腸病、消化不良常習便秘、痔疾、肩のコリ、氣管支諸症、不眠症、神經痛、腰痛等で御困りの方は是非一度御試し下さい。必ず喜ぶべき結果が得られます。

ラヂウム温灸治療器 特効艾ラヂウム罨法藥二週間分付 價三圓八十錢 送料內地十八錢

別に特効艾法藥 (二週間分) 一個五十錢 (五週間分) 三圓二十錢 送料內地十五錢

發賣元 東京市本郷區駒込坂下町四八 **大日本雄辯會代理部** (振替東京四〇二三〇番)

原稿大募集

一、科學小説

科學を主題とする斬新なもの、理想を描けるものでも可、但し充分興味あるものなること。

一、怪奇小説

奇々怪々な物語、又は心臓を寒からしめるやうな譚を望む但し殘忍、非教育的なるものは採らず。

一、冒險小説

新味に充ち且波瀾に富んで思はず力瘤のはいる底の素晴らしいもの

一、探偵小説

本格、變格どちらでも可、讀者をハラ〳〵させたりアッと言はせたりする興味横溢せるもの。

以上四種共、創作、飜譯、どちらでも結構。又短篇（四百字詰原稿五枚以上三十枚以内）長篇（一回三十枚内外四回分以内）どちらでも御隨意。

奮って優秀篇を御寄せ下さい!!

賞金

（各篇共採用せるものは一篇に就き）

短篇　參拾圓以上參百圓迄

長篇　壹百圓以上壹千圓迄

お約束

○〆切……三月末日　○發表……優秀篇は逐次誌上に掲載の豫定。但し全部の當選發表は決定次第直に誌上に掲載。○採用篇の著作權は本社に歸す。○一人各種幾篇應募されるも差支なし。○原稿には住所姓名竝にキング募集原稿と明記する事。○應募原稿は一切御返ししません　○宛名『東京市本郷區駒込坂下町キング懸賞部』

定價

一册	金五拾錢　送料三錢
四册	金貳圓　送料共
八册	金參圓九拾貳錢　同
十二册	金五圓七拾六錢　同

謹告

○弊社の圖書雜誌の御註文は總て前金の事○振替貯金にて御送金は口座受入手數料金壱錢御同送の事○郵券代用は必ず一割增の事○雜誌代前金相切れ候節は最終の雜誌帶封に「前金切」の印を捺し次の前金領收まで發送停止○前金は本誌刊達を以て領收の事と御承知の事○外國行郵税は一册拾八錢申受候○御註文書狀宛名は「大日本雄辯會講談社營業部」の事○郵税不足又は未納の郵便物は請取不申候○弊社發行諸雜誌廣告料は御照會次第詳細に御報知可申上候

昭和三年三月三日印刷納本
昭和三年四月一日發行
（第四卷　第四號）

編輯兼發行人　長谷川卓郎
印刷人　高木島三
東京市牛込區市谷加賀町一ノ十二
印刷所　株式會社秀英舍

東京市本郷區駒込坂下町四十八番地
發行所　大日本雄辯會講談社
振替口座東京三九三〇番
電話小石川（二二五・二二六・二二二七　七〇八八・三五九六・五九八一　二六〇・（長）一五一〇・一五一一）

元取次店　東京堂・東海堂　北隆館・大東館

見よ、眞理と法悦に輝く大識見、大信念！

增上寺法主・大僧正

道重信教師大講演集

信仰を求むる者、修養に志す者、迷へる者、煩悶せる者は讀め！
愛と光の殿堂に、久遠の法味と眞實の幸福を求むる者は讀め！
見よ！ 釋尊の教範を活し、賢聖諸菩薩の精神に歸り、確固不抜の信仰に安住して混沌たる思想界に一大光明を齎す大文章！
或は信仰を說き、處世の道を教へ、或は家庭の教養、婦人の新修養を訓へ、熱烈憂國の至情迸る！

眞に萬世を導く大法話！

四六判布裝函入
定價壹圓八拾錢
（送料拾錢）

發行所 東京本郷駒込坂下 振替東京三九三〇 大日本雄辯會講談社

圖書目錄御申込次第無代進呈

THE KING.
Published Monthly by the Dainihon Yubenkwai-Kodan Sha. Hongo, Tokyo, Japan.
Entered at Los Angeles P.O. as Second Class Mail Matter, at Los Angeles Cal. U. S. A
大正十三年十一月廿日第三種郵便物認可　昭和三年三月三日印刷納本　昭和三年四月一日發行（每月一回一日發行）

